

群馬県利根郡月夜野町

# 大原Ⅱ遺跡 村主遺跡

一般国道17号線(月夜野バイパス)改築工事に  
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 Ⅲ

1986

群馬県教育委員会  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団





ページ	行または番号	誤	正
例宮 2	9行と10行の間		第4部 (土坑・陥し穴以外) ----- 中沢 悟 第4部 (土坑・陥し穴) ----- 香池 実
目次 1	21行と22行の間		第4部 (土器埋没小穴・土坑・陥し穴 グリッド出土遺物) ----- 228
2	1行と2行の間		(1) 奈良時代を中心とした土器群について ----- 294 (2) 奈良・平安時代の律令制下における土器生産体制 の確立から崩壊への問題について ----- 314
17	1住-1	0-11	0-110
20	2住-6	K-10	K-110
78	15	住穴壁より 4住掘られて	住居壁より 4本掘られて
90	1	黄色土	黒色土
91	6	黒色混入を	黒色混入土を
	11	中央口小穴	中央の小穴
147	2	V-22・23	N-22・23
178	2	N27・28	N-27・28
241	下から6と7	E P	F P
263	下から5	編年図参照のこと	(7)の報告書P40の5区5号住居址20～30の土器を意味する。



群馬県利根郡月夜野町

# 大原Ⅱ遺跡 村主遺跡

一般国道17号線(月夜野バイパス)改築工事に  
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 — Ⅲ —

1986

群馬県教育委員会  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団





村主遺跡3号住居跡竈（ほぼ使用時の状態を保っている）



村主遺跡8号陥し穴（底面から3本の遊茂木が検出されている）



## 序

関越自動車道は群馬県を南北に縦断する形で建設されました。月夜野バイパスは国道17号から関越自動車道への連絡道路として建設されました。

本書で報告します大原Ⅱ遺跡、村主遺跡はこの建設に先行して実施されました。本遺跡地周辺は奥利根地方における越後の国との交通の要衝で、原始古代から連続と生活が続けられた地域であり、群馬並びに新潟の歴史究明のための重要な遺跡地の所在する所であります。

調査によりまして縄文時代の陥穴22基について新しい知見を得ることが出来ました。また弥生時代の住居3軒、奈良時代の住居18軒、平安時代の住居16軒、その他の遺構について調査し貴重な資料を得ることができました。また遺跡名ともなっている村主（すぐろ）は古代の伝統を受け継ぐ地名でもあります。

発掘調査ならびに整理事業実施にあたり、ご配慮を頂きました群馬県教育委員会、建設省の方々のご協力に感謝します。また事業実施に直接あたられた方々の労を多とします。

終わりに、本報告書が資料として皆様に広く活用され、この地方の原始古代解明に多少なりとも裨益するところあれば幸甚であります。

昭和61年3月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水 一郎





## 例 言

1. 本書は一般国道17号線(月夜野バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は3年計画で行われ、今回の調査は最終年度にあたる。
3. 事業主体は、建設省である。
4. 調査主体は、群馬県教育委員会及び財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団であり、下記により実施した。  
調査期間 昭和58年4月25日～昭和58年11月3日。なお引き続き59年3月31日まで基本整理及び概報作成のための作業を行った。  
調査組織 指導・事務担当  
小林起久治・白石保三郎・松本浩一・大沢秋良・細野雅男・国定 均・笠原秀樹・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏  
調査担当  
相京建史 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査研究員  
中沢 悟 同 上  
菊池 実 同 上  
斉藤利昭 同 上
5. 調査地域は利根郡月夜野町大字上津字大原地区であり県道小日向・上津・沼田線を境に、東側を大原Ⅱ遺跡(E地区)、西側を村主遺跡(F地区)と呼称し、調査の対象とした。昭和48年の県教育委員会による上越新幹線発掘調査で大原遺跡の名称が使用されているため、E地区を大原Ⅱ遺跡とした。
6. 発掘面積は、E地区約5,520m<sup>2</sup>、F地区約9,500m<sup>2</sup>で総計約15,020m<sup>2</sup>である。
7. 本書の遺構写真は、相京建史、中沢 悟・菊池 実が撮影した。
8. 整理事業は、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の昭和60年度事業として、下記により実施した。  
整理期間 昭和60年4月1日～61年3月31日  
整理組織 指導・事務担当  
白石保三郎・梅沢重昭・上原啓己・大沢秋良・神保佑史・定方隆史・国定 均・笠原秀樹・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏  
整理担当 中沢 悟  
遺物写真 佐藤元彦 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団技師  
保存処理 関 邦一 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団技師・北爪健二  
整理作業員 新井悦子(嘱託員)・宇佐美征子・金田美津子・平沢あや女・嶋崎しづ子・南雲富子・小林恵美子が中心となり、高橋順子・大友幸江・末吉千枝子・田村千穂・戸神明美・金子ミツ子および佐藤美代子・高橋真樹子・平林照美・木暮明美・大川明子・茂本順子の協力を得た。
9. 本書作成にあたって、須恵器の胎土分析は群馬県工業試験場 花岡純一氏に依頼し、その成果を寄稿いただいた。また灰輪陶器の鑑定は岐阜県多治見市教育委員会の田口昭二氏に、石材の鑑定は高崎市中尾町の飯島静男氏にお願いした。
10. 本遺跡の図面・写真・出土遺物等の資料は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

11. 本書の執筆は下記の通りである。それぞれ執筆箇所に文責名を記した。

第1章	.....	神保佑史
第2章 第1節・第2節	.....	中沢 悟
第3章 第1節	.....	＊
第2節	.....	相京建史
第4章 第1節	.....	中沢 悟
第2節(出土遺物観察表)	.....	相京建史
第2節(出土遺物観察表以外)・第3節	.....	菊池 実
第5章 第1節・第2節・第3節	.....	中沢 悟
第6章 第1節・第2節	.....	＊
第2節(5)	.....	大江正行
第3節	.....	花岡絨一・中沢 悟
第4節	.....	中沢 悟
第5節	.....	＊







12. 本書に掲載した地図は、建設省国土地理院発行の25,000分の1地形図(猿ヶ京・後閑・沼田・上野中山)を使用した。

13. 本書を作成するにあたって、下記の方々からご指導、ご協力を得た。

浅野晴樹 金子真土 佐久間 豊 木村 等 斎藤孝正 関口功一 千田剛道 田熊  
清彦 橋本澄郎 橋崎彰一 服部敬史 福田健司 前沢和之 若尾正成 松村恵司  
三宅敦気 茂木由行 矢島 浩 梁木 誠 渡辺博人 群馬県教育委員会 月夜野町教  
育委員会

## 凡 例

1. 遺構名は、大原Ⅱ遺跡(E地区)と村主遺跡(F地区)で各々1号から名称をつけた。
2. 発掘区は大原Ⅱ遺跡と村主遺跡を含めて5mグリットを1区画とし、北西の交点をもって呼称した。
3. 遺構実測図に記した断面基準線は海拔標高で表わした。
4. 遺構及び実測図中におけるスクリーン・トーンは次のことを表わす。

	遺構下の部分		住居における床面下の部分と竈における構築面		
	床面等における焼土範囲		灰軸陶器の施軸部分		内黒処理の内黒部分
	焼成の焼部分				
5. 本書における遺構の実測図は、住居跡<sup>あ</sup>、竈<sup>あ</sup>、掘立柱建物遺構<sup>あ</sup>、土坑<sup>あ</sup>を原則とした。
6. 本書における遺物の実測図は、環・埴類<sup>ま</sup>、甕類<sup>ま</sup>を原則とし、<sup>ま</sup>以外の実測図にはそれぞれの遺物に縮尺を数字で記入した。
7. 本書における遺物記述については、出土遺物観察表を用いた。その中に出土遺物実測図の挿図番号と写真図版番号を記した。鉄器については、観察項目を土器と一部異なって記述した。出土位置を遺構実測図中に示せる遺物については、遺物番号を用いて示した。この番号は出土遺物実測図と出土遺物観察表で用いた番号と同一である。図中に出土位置を示した遺物を含めて、床面からの出土状況については、床面からの高さの明らかな遺物はその数字で、そうでない遺物については床面・フク土と記し、竈内の遺物はカマド内と記した。遺存度は実測に対するものである。色調は青灰色・灰色・灰白色・灰黒色(以上還元焼成のものを主とする)・灰褐色・褐色(以上酸化焼成を主とする)として取り扱った。
8. 遺物実測図のすべてに出土遺構名と遺物番号を付し、<sup>ま</sup>以外の縮尺についてはその縮尺をつけ、最後に須恵器にはS、灰軸陶器にはKをつけて器種の違いを表わした。
9. 遺物写真図版中の番号は、出土遺構名と遺物番号である。



# 目 次

序	
例 言	
凡 例	

## 大原Ⅱ遺跡

第1章 発掘調査に至る経過	3
第2章 遺跡の地理的環境と歴史的環境	4
第1節 遺跡の地理的環境	4
第2節 歴史的環境	6
第3章 調査の方法	9
第1節 標準土層及び遺跡内の地形について	9
第2節 調査の経過と方法	10
第4章 検出された遺構と遺物	15
第1節 遺跡の概要	15
第2節 住居跡	16
第3節 土坑・陥し穴・グリッド出土遺物	26

## 村主遺跡

第5章 検出された遺構と遺物	49
第1節 遺構の概要	49
第2節 住居跡	50
第3節 掘立柱建物遺構・井戸跡・集石跡・小鍛冶跡・溝	217
第6章 調査成果の整理と考察	248
第1節 遺構について	248
(1) 焼失住居跡にみられる上屋構造と竈の扱いの一例	248
(2) 竈の廃棄について	251
第2節 遺物について	256
(1) 遺物の取り扱いについて	256
(2) 遺構別遺物出土状況一覧表について	256
(3) 月夜野型羽釜の様相と月夜野古窯跡群	260
(4) 脚付羽釜について	269
(5) 出土の鉄製遺物について	271
第3節 化学分析	284

第4節	出土土器の分類と検討	294
-----	------------	-----

第5節	まとめ	323
-----	-----	-----

付 図

- (1) 大原Ⅱ・村主遺跡周辺の地形図
- (2) 村主遺跡を中心とした奈良時代土器序列図

## 挿 図 目 次

第1図	遺跡の立地と周辺遺跡	5	第38図	3号住居跡出土遺物実測図4)	62
第2図	大原Ⅱ・村主遺跡内柱状土層図	9	第39図	4号住居跡実測図	66
第3図	遺跡全体図	折込	第40図	4号住居跡床下実測図	67
第4図	1号住居跡実測図	16	第41図	4号住居跡竈実測図	67
第5図	1号住居跡出土遺物実測図	17	第42図	4号住居跡出土遺物実測図	68
第6図	2号住居跡実測図	18	第43図	5号住居跡実測図	69
第7図	2号住居跡炉実測図	18	第44図	5号住居跡床下実測図	70
第8図	2号住居跡出土遺物実測図1)	19	第45図	5号住居跡竈実測図	71
第9図	2号住居跡出土遺物実測図2)	20	第46図	5号住居跡竈復元図	72
第10図	3号住居跡実測図	22	第47図	5号住居跡出土遺物実測図1)	72
第11図	3号住居跡実測図	23	第48図	5号住居跡出土遺物実測図2)	73
第12図	3号住居跡出土遺物実測図1)	23	第49図	5号住居跡出土遺物実測図3)	74
第13図	3号住居跡出土遺物実測図2)	24	第50図	6号住居跡実測図1)	76
第14図	1～4号土坑実測図	27	第51図	6号住居跡実測図2)	77
第15図	5～8号土坑実測図	28	第52図	6号住居跡実測図3)床下部分	79
第16図	9～12号土坑実測図	29	第53図	6号住居跡竈実測図	80
第17図	13～17号土坑実測図	30	第54図	6号住居跡出土遺物実測図1)	81
第18図	1・2・3号陥し穴実測図	35	第55図	6号住居跡出土遺物実測図2)	82
第19図	4・5・6号陥し穴実測図	36	第56図	6号住居跡出土遺物実測図3)	83
第20図	7・8・9号陥し穴実測図	37	第57図	6号住居跡出土遺物実測図4)	84
第21図	10・11・13号陥し穴実測図	38	第58図	7号住居跡実測図	89
第22図	20・14・21号陥し穴実測図	39	第59図	7号住居跡床下実測図	90
第23図	16・17・18号陥し穴実測図	40	第60図	7号住居跡竈実測図	91
第24図	19・22・12・15号陥し穴実測図	41	第61図	7号住居跡出土遺物実測図1)	92
第25図	グリッド出土遺物実測図(縄文)	45	第62図	7号住居跡出土遺物実測図2)	93
第26図	グリッド出土遺物実測図(弥生・古墳)	46	第63図	7号住居跡出土遺物実測図3)	94
第27図	1号住居跡実測図	50	第64図	8号住居跡実測図	96
第28図	1号住居跡竈実測図	50	第65図	8号住居跡竈実測図	97
第29図	1号住居跡出土遺物実測図	51	第66図	8号住居跡出土遺物実測図1)	98
第30図	2号住居跡実測図	53	第67図	8号住居跡出土遺物実測図2)	99
第31図	2号住居跡竈実測図	54	第68図	9号住居跡実測図	101
第32図	2号住居跡出土遺物実測図	55	第69図	9号住居跡出土遺物実測図	101
第33図	3号住居跡実測図	57	第70図	10号住居跡実測図	102
第34図	3号住居跡竈実測図	58	第71図	10号住居跡床下実測図	102
第35図	3号住居跡出土遺物実測図1)	59	第72図	10号住居跡竈実測図	103
第36図	3号住居跡出土遺物実測図2)	60	第73図	10号住居跡出土遺物実測図	104
第37図	3号住居跡出土遺物実測図3)	61	第74図	11・12号住居跡実測図1)	105

第75图	11·12号住居跡実測図2)	106	第115图	21号住居跡床下実測図	156
第76图	11·12号住居跡床下実測図1)	107	第116图	21号住居跡出土遺物実測図	157
第77图	11·12号住居跡床下実測図2)	108	第117图	22号住居跡実測図	159
第78图	11号住居跡竈実測図	109	第118图	22号住居跡床下実測図	159
第79图	11号住居跡出土遺物実測図1)	110	第119图	22号住居跡出土遺物実測図	160
第80图	11号住居跡出土遺物実測図2)	111	第120图	23号住居跡実測図	161
第81图	11号住居跡出土遺物実測図3)	112	第121图	23号住居跡床下実測図	161
第82图	11号住居跡出土遺物実測図4)	113	第122图	23号住居跡炉実測図	161
第83图	13号住居跡実測図	118	第123图	23号住居跡出土遺物実測図	162
第84图	13号住居跡床下実測図	119	第124图	24号住居跡実測図	163
第85图	13号住居跡竈実測図	119	第125图	24号住居跡床下平面図	164
第86图	13号住居跡出土遺物実測図	120	第126图	24号住居跡炉実測図	164
第87图	14号住居跡実測図	122	第127图	24号住居跡竈実測図	164
第88图	14号住居跡竈実測図	122	第128图	24号住居跡出土遺物実測図	165
第89图	14号住居跡出土遺物実測図	123	第129图	25号住居跡実測図	167
第90图	15号住居跡実測図	125	第130图	25号住居跡床下実測図	167
第91图	16号住居跡実測図	126	第131图	25号住居跡出土遺物実測図	168
第92图	16号住居跡床下実測図	127	第132图	26号住居跡実測図	170
第93图	16号住居跡竈実測図	128	第133图	26号住居跡床下実測図	171
第94图	16号住居跡出土遺物実測図1)	129	第134图	26号住居跡竈実測図	172
第95图	16号住居跡出土遺物実測図2)	130	第135图	26号住居跡竈推定復元図	172
第96图	17号住居跡実測図	132	第136图	26号住居跡出土遺物実測図	173
第97图	17号住居跡竈実測図	133	第137图	27号住居跡実測図	175
第98图	17号住居跡出土遺物実測図1)	134	第138图	27号住居跡床下実測図	176
第99图	17号住居跡出土遺物実測図2)	135	第139图	27号住居跡竈実測図	177
第100图	17号住居跡出土遺物実測図3)	136	第140图	27号住居跡竈実測図	177
第101图	18号住居跡実測図	140	第141图	27号住居跡出土遺物実測図1)	179
第102图	17·18号住居跡床下実測図	141	第142图	27号住居跡出土遺物実測図2)	180
第103图	18号住居跡出土遺物実測図	142	第143图	27号住居跡出土遺物実測図3)	181
第104图	19号住居跡実測図	144	第144图	28·29号住居跡実測図	185
第105图	19号住居跡竈実測図	144	第145图	28·29号住居跡実測図	186
第106图	19号住居跡出土遺物実測図	145	第146图	29号住居跡竈実測図	186
第107图	20号住居跡実測図	146	第147图	28号住居跡出土遺物実測図1)	187
第108图	20号住居跡竈実測図	147	第148图	28号住居跡出土遺物実測図2)	188
第109图	20号住居跡床下実測図	148	第149图	30号住居跡実測図	191
第110图	20号住居跡出土遺物実測図1)	149	第150图	30号住居跡中間床面実測図	192
第111图	20号住居跡出土遺物実測図2)	150	第151图	30号住居跡床下実測図	192
第112图	20号住居跡出土遺物実測図3)	151	第152图	30号住居跡竈実測図	193
第113图	20号住居跡出土遺物実測図4)	152	第153图	30号住居跡出土遺物実測図	193
第114图	21号住居跡実測図	156	第154图	31号住居跡実測図	194



第155図	31号住居跡竈実測図……………	194	第156図	1・2号溝実測図……………	225
第156図	31号住居跡床下実測図……………	194	第157図	土器埋設小穴実測図……………	226
第157図	31号住居跡出土遺物実測図……………	195	第158図	土器埋設小穴出土遺物実測図……………	226
第158図	32号住居跡実測図……………	196	第159図	1～6号土坑実測図……………	227
第159図	32号住居跡床下実測図……………	196	第160図	7～12号土坑実測図……………	228
第160図	32号住居跡竈実測図……………	197	第161図	13～16号土坑実測図……………	229
第161図	32号住居跡出土遺物実測図……………	197	第201図	1・6・10・15・17号土坑出土遺物 実測図……………	232
第162図	32号住居跡出土遺物実測図……………	198	第202図	1・2・3号陥し穴実測図……………	234
第163図	33号住居跡実測図……………	199	第203図	4・5・6号陥し穴実測図……………	235
第164図	33号住居跡床下実測図……………	200	第204図	7・9・10号陥し穴実測図……………	236
第165図	33号住居跡竈実測図……………	200	第205図	11・12・13号陥し穴実測図……………	237
第166図	33号住居跡出土遺物実測図(1)……………	201	第206図	14・8・15・16号陥し穴実測図……………	238
第167図	33号住居跡出土遺物実測図(2)……………	202	第207図	グリット出土遺物実測図 縄文時代(1)……………	242
第168図	34号住居跡実測図……………	204	第208図	グリット出土遺物実測図 縄文時代(2)……………	243
第169図	34号住居跡床下実測図……………	205	第209図	グリット出土遺物実測図 古墳～近世(1)……………	244
第170図	34号住居跡竈実測図……………	205	第210図	グリット出土遺物実測図 古墳～近世(2)……………	245
第171図	34号住居跡出土遺物実測図(1)……………	206	第211図	村主遺跡における竈の残存・崩壊・ 復元状況……………	254
第172図	34号住居跡出土遺物実測図(2)……………	207	第212図	県内における石を用いた竈の崩壊 状況例……………	255
第173図	35号住居跡実測図……………	209	第213図	県北部における羽釜を伴う遺跡……………	264
第174図	36号住居跡床下実測図……………	209	第214図	県西部における羽釜を伴う遺跡……………	265
第175図	36号住居跡床下実測図……………	209	第215図	県東部における羽釜を伴う遺跡……………	266
第176図	36号住居跡出土遺物実測図(1)……………	210	第216図	月夜野型羽釜の変遷(1)第1・ 第2段階……………	267
第177図	36号住居跡出土遺物実測図(2)……………	211	第217図	月夜野型羽釜の変遷(2)第2・ 第3段階……………	268
第178図	37号住居跡実測図……………	212	第218図	脚付羽釜出土遺跡……………	270
第179図	37号住居跡出土遺物実測図(1)……………	212	第219図	鎌・刀子・鎌・火打石・ 手斧模式図……………	272
第180図	37号住居跡出土遺物実測図(2)……………	213	第220図	小刀・紡錘車模式図……………	274
第181図	38号住居跡実測図……………	214	第221図	鎌(踏働か)先模式図……………	275
第182図	38号住居跡竈実測図……………	214	第222図	沼田盆地における奈良・平安時代 有柄鐵と奥原古墳群出土鐵対比図……………	281
第183図	38号住居跡実測図……………	214	第223図	胎土分析遺物実測図(1)……………	285
第184図	38号住居跡実測図……………	215			
第185図	38号住居跡出土遺物実測図……………	215			
第186図	1号掘立柱建物遺構実測図……………	217			
第187図	2号掘立柱建物遺構実測図……………	218			
第188図	3号掘立柱建物遺構実測図……………	219			
第189図	4号掘立柱建物遺構実測図……………	220			
第190図	5号掘立柱建物遺構実測図……………	221			
第191図	井戸遺構実測図……………	222			
第192図	集石遺構実測図、出土遺物実測図……………	222			
第193図	小鍛冶遺構実測図……………	223			
第194図	小鍛冶遺構出土遺物実測図……………	224			

第224図	胎土分析遺物実測図(2)……………	286	第233図	笠懸窯跡出土の須恵器と国分寺 創建瓦の破片……	312
第225図	村主遺跡住居跡試料……………	292	第234図	年代決定に用いた資料(清里・陣場 遺跡P 316より引用) ……	312
第226図	月夜野窯跡群試料……………	292	第235図	古墳時代における土器群の1例(三ツ 寺Ⅲ遺跡・保土田遺跡P 547より 転載) ……	316
第227図	第1期類の土師器(1)……………	297	第236図	古墳時代～奈良時代における 土器群の1例(三ツ寺Ⅲ遺跡・ 保土田遺跡P 549より転載) ……	317
第228図	第1期類の土師器(2)……………	300			
第229図	第1期類の須恵器(1)……………	302			
第230図	第1期類の須恵器(2)……………	304			
第231図	第2器類の土師器……………	308			
第232図	第2期類の須恵器……………	309			

## 図 版 目 次

- |   |  |
|---|--|
| <p>図版 1 大原Ⅱ遺跡・村主遺跡及び月夜野町中央部航空写真</p> <p>図版 2 大原Ⅱ遺跡 西側航空写真<br/>大原Ⅱ遺跡 東側航空写真</p> <p>図版 3 1号住居跡全景(北から)<br/>1号住居跡出入口柱穴(東から)<br/>2号住居跡出入口柱穴(東から)<br/>3号住居跡出入口柱穴(東から)<br/>2号住居跡床面硬度測定状況(北から)</p> <p>図版 4 2号住居跡全景(南から)<br/>3号住居跡全景(西から)</p> <p>図版 5 住居跡・陥し穴・グリット</p> <p>図版 6 1号陥し穴全景(南から)<br/>1号陥し穴セクション(南から)<br/>3号陥し穴全景(南西から)<br/>3号陥し穴セクション(北東から)<br/>4号陥し穴全景(北東から)<br/>4号陥し穴セクション(北東から)<br/>5号陥し穴全景(北東から)<br/>5号陥し穴セクション(南西から)</p> <p>図版 7 6号陥し穴全景(北東から)<br/>6号陥し穴セクション(北東から)<br/>7号陥し穴セクション(北東から)<br/>8号陥し穴全景(北東から)<br/>8号陥し穴セクション(南西から)<br/>9号陥し穴全景(北東から)<br/>9号陥し穴セクション(南西から)</p> <p>図版 8 10号陥し穴全景(北東から)<br/>10号陥し穴セクション(北東から)<br/>11号陥し穴全景(南西から)<br/>11号陥し穴セクション(北東から)<br/>13号陥し穴全景(北から)<br/>13号陥し穴セクション(北から)<br/>16号陥し穴全景(北から)<br/>16号陥し穴セクション(南から)</p> <p>図版 9 17号陥し穴全景(北東から)<br/>17号陥し穴セクション(南西から)</p> | <p>18号陥し穴全景(北東から)<br/>18号陥し穴セクション(南西から)</p> <p>19号陥し穴全景(北から)<br/>19号陥し穴セクション(南から)<br/>20号陥し穴全景(北東から)<br/>20号陥し穴セクション(北東から)</p> <p>図版 10 21号陥し穴全景(南西から)<br/>14号陥し穴全景(北東から)<br/>22号陥し穴全景(東から)<br/>22号陥し穴セクション(南から)<br/>1号土坑全景(東から)<br/>2号土坑全景(東南から)<br/>3号土坑全景(西から)<br/>4号土坑全景(南東から)</p> <p>図版 11 5号土坑全景(南から)<br/>6号土坑全景(南から)<br/>7号土坑全景(南から)<br/>8号土坑全景(南から)<br/>9号土坑全景(南から)<br/>10号土坑全景(東から)<br/>12号土坑全景(南西から)<br/>13号土坑全景(南西から)</p> <p>図版 12 大原Ⅱ・村主遺跡 遠景(東から)<br/>村主遺跡 西側航空写真</p> <p>図版 13 1号住居跡全景(南から)<br/>1号住居跡土層堆積状況(東から)<br/>1号住居跡竈全景(焚口から)<br/>1号住居跡竈袖石(焚口から)<br/>1号住居跡竈袖石(煙道から)</p> <p>図版 14 2号住居跡全景(南から)<br/>2号住居跡竈全景(1)(南から)<br/>2号住居跡竈全景(2)(南から)<br/>2号住居跡竈基礎部(南から)<br/>2号住居跡竈袖部分(東から)</p> <p>図版 15 3号住居跡全景(竈発掘後)(北から)<br/>3号住居跡全景(竈発掘前)(北から)<br/>3号住居跡竈(焚口から)</p> |
|---|--|

- 3号住居跡竈(上面より)  
3号住居跡竈(煙道から)  
図版16 3号住居跡竈(焚口から)  
3号住居跡竈(煙道方向から)  
3号住居跡竈(羽釜除去後)  
3号住居跡竈(羽釜と焚口天井石除去後)  
3号住居跡竈(一部復元)  
図版17 3号住居跡竈及び住居跡床下全景(北から)  
3号住居跡竈(左斜方向から)  
3号住居跡竈 実測状況(焚口から)  
3号住居跡北側遺物出土状況(西から)  
3号住居跡東側遺物出土状況(北から)  
図版18 4号住居跡全景(西から)  
4号住居跡土層堆積状況(東から)  
4号住居跡床下全景  
4号住居跡竈1(焚口から)  
4号住居跡竈2(焚口から)  
図版19 5号住居跡全景(西から)  
5号住居跡床下全景(西から)  
5号住居跡竈土層面(西から)  
5号住居跡竈全景(焚口から)  
5号住居跡竈(煙道から)  
図版20 6号住居跡全景(西から)  
6号住居跡土層堆積状況(西から)  
6号住居跡炭・遺物取り除き後の全景(西から)  
6号住居跡床面全景(西から)  
6号住居跡竈(焚口から)  
図版21 6号住居跡炭化材検出時における全景(西から)  
6号住居跡竈右手前埋没甕(西から)  
6号住居跡南壁側出土こも石(北から)  
6号住居跡竈炭堆積状況(南西から)  
図版22 7号住居跡全景(西から)  
7号住居跡床下全景(西から)  
7号住居跡竈内遺物出土状況1(焚口から)  
7号住居跡竈内遺物出土状況2(焚口から)  
7号住居跡竈袖石(焚口から)  
図版23 8号住居跡全景(西から)  
8号住居跡遺物取り除き後全景(西から)  
8号住居跡床下全景(北から)  
8号住居跡遺物取り除き後床下全景(西から)  
8号住居跡竈全景(焚口から)  
図版24 9号住居跡全景(東から)  
9号住居跡土層堆積状況(南西から)  
図版25 10号住居跡全景(西から)  
10号住居跡床下状況(西から)  
10号住居跡床下全景(西から)  
10号住居跡竈全景(西から)  
10号住居跡竈(南西から)  
図版26 11・12号住居跡全景(北から)  
11号住居跡床下全景  
11号住居跡竈(焚口から)  
11号住居跡竈袖部断面(南から)  
11号住居跡焼土炭灰流れ込み部分  
図版27 13号住居跡全景  
13号住居跡床下全景1(西から)  
13号住居跡床下全景2(西から)  
13号住居跡竈(焚口から)  
13号住居跡竈断面(南から)  
図版28 14号住居跡全景(北から)  
14号住居跡竈1(北から)  
14号住居跡竈2(北から)  
14号住居跡竈袖石(焚口から)  
38号住居跡ヘツツイ(西から)  
図版29 15号住居跡全景(西から)  
16号住居跡全景(西から)  
図版30 16号住居跡床下全景(西から)  
16号住居跡北側ルーム探掘坑(西から)  
16号住居跡北側ルーム探掘坑(南から)  
16号住居跡竈内土層堆積状況(南から)  
16号住居跡竈(焚口から)  
16号住居跡北西壁側出土こも石(南から)  
16号住居跡小刀出土状況(西から)  
16号住居跡甕出土状況(西から)  
図版31 17号住居跡全景(西から)  
17号住居跡竈土層堆積状況(焚口から)

	17号住居跡遺物出土状況(笑口から)	27号住居跡竈(笑口から)	
	17号住居跡竈内石出土状況(笑口から)	27号住居跡旧竈(西から)	
	17号住居跡遺物出土状況(南から)	図版41 28・29号住居跡全景(西から)	
図版32	18号住居跡全景(西から)	28・29号住居跡遺物出土状況(南から)	
	17・18号住居跡床下全景(北から)	28・29号住居跡土層堆積状況(南から)	
図版33	19号住居跡全景(西から)	28号住居跡竈内土層堆積状況(南西から)	
	19号住居跡床下状況(西から)	28号住居跡竈(笑口から)	
	19号住居跡床下全景(西から)	図版42 30号住居跡全景(西から)	
	19号住居跡竈上須恵器出土状況(笑口から)	30号住居跡上面床検出状況(西から)	
	19号住居跡竈全景(笑口から)	30号住居跡床下検出状況(西から)	
図版34	20号住居跡全景(西から)	30号住居跡土層堆積状況(南から)	
	20号住居跡遺物取り上げ後全景(西から)	30号住居跡竈(西から)	
図版35	20号住居跡床下全景(西から)	図版43 31号住居跡全景1(西から)	
	20号住居跡貯蔵穴内遺物出土状況(西から)	31号住居跡全景2(西から)	
	20号住居跡竈全景(笑口から)	31号住居跡床下全景(西から)	
	20号住居跡鉄製鋤出土状況(東から)	31号住居跡竈土層堆積状況(南から)	
	21号住居跡全景(北から)	31号住居跡竈(笑口から)	
図版36	22号住居跡全景(東から)	図版44 32号住居跡全景(西から)	
	23号住居跡全景(南から)	32号住居跡遺物出土状況(西から)	
図版37	24・25号住居跡全景(西から)	32号住居跡竈内土層堆積状況(笑口から)	
	24号住居跡土層堆積状況(西から)	32号住居跡竈(笑口から)	
	24号住居跡床下全景(西から)	32号住居跡ヘッジイ(東から)	
	24号住居跡竈土層堆積状況(笑口から)	図版45 33号住居跡全景(西から)	
	24号住居跡炉 <sup>1</sup> (西から)	33号住居跡遺物出土状況(西から)	
図版38	25号住居跡全景(西から)	33号住居跡床下全景(西から)	
	25号住居跡床下土層堆積状況(西から)	33号住居跡竈内土層堆積状況(笑口から)	
	25号住居跡床下全景(西から)	33号住居跡竈内鉄製紡錘車出土状況(笑口から)	
	25号住居跡床下土坑土層堆積状況(西から)	図版46 34号住居跡全景(西から)	
	26号住居跡全景(西から)	34号住居跡土層堆積状況(南から)	
図版39	26号住居跡全景(西から)	34号住居跡床下全景(西から)	
	26号住居跡土層堆積状況(南から)	34号住居跡竈内土層堆積状況(笑口から)	
	26号住居跡床下全景	34号住居跡竈(笑口から)	
	26号住居跡竈1(笑口から)	図版47 36号住居跡全景(西から)	
	26号住居跡竈2(笑口から)	37号住居跡全景(西から)	
図版40	27号住居跡全景(北から)	図版48 1号掘立柱建物遺構(西南から)	
	27号住居跡床下全景(西から)	2号掘立柱建物遺構(南から)	
	27号住居跡竈土層堆積状況(笑口から)	図版49 3号掘立柱建物遺構(東から)	
		4号掘立柱建物遺構(南から)	
		図版50 5号掘立柱建物遺構(東から)	

	井戸跡 (東から)	14号陥し穴全景 (北東から)
	集石遺構 (北から)	15号陥し穴全景 (西から)
	小鍛冶跡 (南から)	図版56 1・2号住居跡出土遺物
	小鍛冶跡 (南から)	図版57 2・3号住居跡出土遺物
図版51	土器埋設小穴 (南から)	図版58 3号住居跡出土遺物
	1号土坑 (西から)	図版59 3・4・5号住居跡出土遺物
	1号土坑 (西から)	図版60 5・6号住居跡出土遺物
	1号土坑 (西から)	図版61 6号住居跡出土遺物
	2号土坑 (西から)	図版62 6号住居跡出土遺物
	3号土坑 (南から)	図版63 6・7号住居跡出土遺物
	4号土坑 (南から)	図版64 7・8号住居跡出土遺物
	5号土坑 (南から)	図版65 8・10・11号住居跡出土遺物
図版52	7号土坑 (南から)	図版66 11号住居跡出土遺物
	8号土坑 (東から)	図版67 11号住居跡出土遺物
	9号土坑 (東から)	図版68 11・13号住居跡出土遺物
	10号土坑 (東から)	図版69 13・14・16号住居跡出土遺物
	13号土坑 (北から)	図版70 16・17号住居跡出土遺物
	14号土坑 (西から)	図版71 17号住居跡出土遺物
	15号土坑 (東から)	図版72 17・18号住居跡出土遺物
	12号土坑 (東から)	図版73 18・19・20号住居跡出土遺物
図版53	1号陥し穴全景 (北東から)	図版74 20号住居跡出土遺物
	1号陥し穴セクション (北東から)	図版75 20・21号住居跡出土遺物
	2号陥し穴全景 (北から)	図版76 21・22・23号住居跡出土遺物
	2号陥し穴セクション (北から)	図版77 24・25・26号住居跡出土遺物
	3号陥し穴セクション (北東から)	図版78 26・27号住居跡出土遺物
	4号陥し穴全景 (北東から)	図版79 27号住居跡出土遺物
	4号陥し穴セクション (北東から)	図版80 27・28・29号住居跡出土遺物
図版54	5号陥し穴全景 (北から)	図版81 28・29・30号住居跡出土遺物
	5号陥し穴セクション (北から)	図版82 30・31・32号住居跡出土遺物
	6号陥し穴全景 (北から)	図版83 32・33号住居跡出土遺物
	7号陥し穴全景 (北から)	図版84 33・34号住居跡出土遺物
	9号陥し穴全景 (北から)	図版85 36・37号住居跡出土遺物
	10号陥し穴全景 (北から)	図版86 37・38号住居跡、小鍛冶、集石、グリット出土遺物
	10号陥し穴セクション (北から)	図版87 グリット、土坑、埋設小穴出土遺物
図版55	11号陥し穴全景 (北から)	図版88 6号住居跡出土 カヤの炭化材①
	11号陥し穴セクション (北から)	6号住居跡出土 カヤの炭化材②
	12号陥し穴全景 (東から)	
	12号陥し穴セクション (北から)	
	13号陥し穴遺物出土状況 (西から)	
	13号陥し穴セクション (北から)	

# 大原Ⅱ遺跡





## 第1章 発掘調査に至る経過

月夜野バイパスは利根郡月夜野町を通過する一般国道17号の交通渋滞の対策として計画されたものであり、同時に関越自動車道新潟線の月夜野インターチェンジを接続させることにより、交通接点として重要な役割を担うことを目的としたものである。総延長は5.6kmであり、起点は沼田市井上上町、終点を利根郡新治村羽場に置く。

本バイパスの埋蔵文化財発掘調査については、計画が明らかとなった段階で群馬県教育委員会（文化財保護課）により埋蔵文化財分布調査が実施され、県指定史跡「名胡桃城跡」を含む13箇所の包蔵地が確認された。その後、路線決定の段階で下記のA～Fの6箇所が調査対象区域となり、これについては昭和56年4月3日付にて建設省と群馬県教育委員会との間で「一般国道17号（月夜野バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」が締結された。この協定に基づき同年より群馬県教育委員会の委託を受けて、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を実施した。

昭和56年度の調査は、A・B地区(城平・諏訪遺跡)が対象となり、これが調査報告書は昭和59年度に刊行した。

昭和57年度の調査は、C・D地区(三後沢・十二原Ⅱ遺跡)が対象となり、これが調査報告書は昭和60年度末に刊行する。

昭和58年度の調査は、E・F地区(大原Ⅱ・村主遺跡)が対象となった。本調査区の具体的な調査工程は、同年4月20日に県庁において、建設省・県教委文化財保護課・当事業団の三者で協議が行われ、当該年度は4月25日より調査に着手することで工事工程・調査工程が調整された。本年度の調査は先年度に実施した当該調査区の試掘調査の結果が生かされ、ほぼ当初計画どおりの進捗となり11月30日に調査は終了した。調査対象となった大原Ⅱ遺跡は昭和48年から49年にかけて、上越新幹線建設に伴い調査された大原遺跡(昭和57年3月に当事業団にて調査報告書刊行)と同一遺跡として理解されるものであり、また村主遺跡も試掘調査の結果からして良好な奈良・平安時代の集落跡の存在が予想され、その調査成果が期待された。当初の期待どおり両遺跡とも月夜野町地域を知る上で、貴重な資料となり得る遺構・遺物を調査することができた。調査終了後は、調査報告書を刊行すべく、その基本整理作業を59年3月31日まで行った。そして、昭和60年度にこれら遺跡の本格的な整理作業を行い、以下に報告するところの調査報告書を作成・刊行することができた。

かくて、昭和56年度より発掘調査に着手した月夜野バイパスの埋蔵文化財発掘調査は、昭和61年3月刊行の「大原Ⅱ・村主遺跡」の調査報告書の刊行をもって、すべての事業が完了した。5年間の発掘調査・整理作業の過程で事業主体者の建設省を初め関係諸機関及び地元の月夜野町の月夜野バイパス対策協議会、同地権者会等には事業を進捗させる上で、大変お世話になった。ここに明記しておきたい。(神保備史)

地 点	A	B	C	D	E	F
st. No.	148～159	160～165	176～190	198～203	215～225	227～240
調査対象時代	縄文・城址	縄文～古墳	縄文～平安	縄文～平安	平 安	平 安
面 積 (m <sup>2</sup> )	6,600	2,250	7,500	2,250	5,200 <small>(埋蔵跡 5,500)</small>	6,300 <small>(埋蔵跡 5,500)</small>

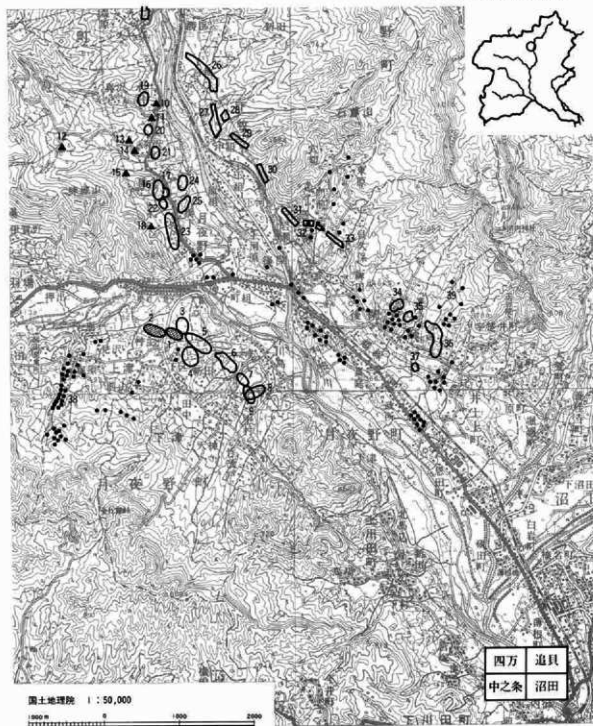
## 第2章 遺跡の地理的環境と歴史的環境

### 第1節 遺跡の地理的環境

遺跡の立地する利根郡月夜野町は、県北の山間地に位置する。北は水上町を経て谷川岳へと続き、北東には標高2156mの武尊山が位置し、西北には新治村を経て三国峠、新潟県へと連なる。南東は沼田市を経て赤城山を望み、南西は吾妻へ越える峠をいくつか持つ名胡桃の丘陵が連なる。このように月夜野町は四方を山に囲まれた地区であり、さらに町を東西に2分するように利根川が南北に走り、町の西側はさらに赤谷川により南北に分けられる。この利根川と赤谷川は町のほぼ中央で合流し、利根川として赤城山の西を流れて行く。赤谷川が利根川に分流する手前には、黒岩渓谷がある。この渓谷は赤谷川が凝灰岩の味城山南麓を浸蝕して作ったものであり、全長約2kmほど長く、小袖橋、衣掛松、向山、蜷影山、扇岩、梯岩、一環清水、亀甲岩の8つの奇岩は黒岩八景と称されている。このように月夜野町は、多くの山と川及び堆積と浸蝕をくり返す河川よりできた河岸段丘及び山より流出した土砂の堆積により形成された扇状地等により成り立っている。遺跡の立地する上津、下津地区は、通称名胡桃平と呼ばれている。この平地は赤谷川の浸蝕により形成された赤谷川右岸の河岸段丘と下津大清水及び盆棚地区等より県道小日向、上津、沼田線付近までの間に流出した土砂の堆積より形成された扇状地の一部を含めた形で成り立っている。

河岸段丘は大きく分けて4段存在している。河川敷のやや上面にあたり、現在一部が水田として利用されている面を第4段丘面とし、高い段丘面を第1～第4段丘面と呼称する。第4段丘面は標高400m前後、第3段丘面は標高420m前後、第2段丘面は標高430m前後、第1段丘面は標高440～450mである。この段丘は赤谷川右岸に面した地区に多く発達しており、赤谷川、利根川との合流箇所の上流では3段の河岸段丘となっている。この段丘面は標高360m前後となっており、名胡桃地区の段丘面としては最も低い。ここの土地利用は段丘面西側の湧水地帯に多くの集落が営まれ、一段低い東側が水田として利用されている。扇状地は沢落林道が山の急傾斜から緩傾斜へ向かう変換した部分付近の大清水、後直道、見山、朽沢、盆棚、権現地区等より始まりその部分の標高は約600mである。扇状地大部分が桑畑として利用されており、標高は500m前後であり、幅は約800mである。扇端部は湧水が多く、多くの集落と水田が作られており、この部分に県道が走っている。標高は450m付近であり、幅は1.6km前後と思われる。ここでの湧水は小河川を作り、扇端部よりさらに低い東側の平地へと流れて行き、浅い沢がいくつかの深い沢へとまとまり、最終的には4つの深く大きい沢へと発展し、赤谷川と利根川の合流地点へと流れ出している。この沢は北より原沢、中後沢、後沢、湯舟沢と呼称されている。これらの沢は名胡桃平東端部においては幅約100m、深さ約80mにも大きくなって下津地区の河岸段丘を大きく掘り込み平地を分断している。この沢はやがて一段低い小川島の段丘面へと流れて行き、利根川へ合流して行く。

大原Ⅱ、村主遺跡は、以前に調査された城平遺跡、諏訪遺跡、三後沢遺跡、十二原Ⅱ遺跡と異なり、沢の発達しない地区である。これはこの地域には他地域に存在した扇状地がなく、湧水は山の傾斜が平地へ続く標高450m付近に集中し、しかも湧水量が少なく、それらの湧水の多くは標高の低い東側へ流れ、原沢や後沢へ流れ込んでしまうため、南北方向の沢は形成されなかったものと思われる。大原Ⅱ遺跡、村主遺跡は、ほぼ東西方向に走る月夜野バイパスの建設地の調査区であり、東側は原沢により切れ、西側は第3河岸段丘面により削られている全長約600mの範囲であり、発掘調査の結果、縄文時代の陥し穴、弥生時代の住居跡、奈良・平安時代の住居跡等が検出された。それらの中で縄文時代の陥し穴は調査区中央部に多く検出されたが、弥生時代の住居跡3軒は上越新幹線で調査された大原遺跡とともに、比較的原沢に近い地区より検出された。ま



- 1.大原II遺跡 2.村主遺跡 3.大原遺跡 4.十二原遺跡 5.十二原II遺跡 6.三後沢遺跡 7.深沢遺跡 8.名胡桃城址  
 9.城平遺跡 10~18.月夜野古墳跡群(10.水沼A支群 11.真沢A支群 12.東野A支群 13.深沢B支群 14.深沢C支群 15.沢入A支群 16-17.萩田A支群(萩田・萩田東遺跡) 18.洲A支群 19.前中原遺跡 20.前田原遺跡 21.深沢遺跡 22.洲原遺跡  
 23.洲I・II遺跡 24.梨の木平遺跡 25.小川城跡 26.宮地遺跡 27.小竹B遺跡 28.小竹A遺跡 29.大竹遺跡 30.高平遺跡  
 31.前原遺跡 32.門前B遺跡 33.門前A遺跡 34.善上遺跡 35.三峰神社裏遺跡 36.後田遺跡 37.跡B遺跡 38.家原古墳群 39.金山古墳群

▲古墳跡支群の位置 ●古墳の位置

第1図 遺跡の立地と周辺遺跡

た奈良・平安時代の住居跡は調査区の西端部に多く、他の4遺跡同様な傾向を示した。(中沢 悟)

## 第2節 歴史的環境

月夜野町では、上越新幹線や関越自動車道、さらに月夜野バイパス等により、多くの大規模開発が行われており、それに伴ない大規模発掘が実施されてきた。それらの発掘調査の成果よりなる調査報告書も多く刊行されてきており、月夜野町における原始～中近世に至る考古学より親た歴史が少しずつ明らかになりつつある。それらの成果を知ることにより、大原Ⅱ遺跡と村主遺跡がどのような歴史的環境の中に置かれていたのかを探る1つの手がかりとしたい。そこで当遺跡で検出された縄文時代の遺構の前史である旧石器時代から周辺遺跡を概観してみたい。

月夜野町地内における旧石器の調査は、利根川左岸の善上遺跡<sup>(1)</sup>・三峰神社裏遺跡<sup>(2)</sup>・後田遺跡<sup>(7)</sup>等で行われている。その中で後田遺跡においては、ナイフ形石器や石刃・石核等約4500点の遺物が、約20箇所のユニットとして検出され注目される。利根川右岸の多くの遺跡でもロームを掘り下げて検出に努めているが、現在のところでは検出されていない。

縄文時代の遺跡は、利根川の左右の地で確認されている。具体的な遺跡としては、城平遺跡<sup>(3)</sup>で前期の住居跡1軒とこの時期に近いと思われる陥穴と土坑、諏訪遺跡<sup>(4)</sup>では多くの陥穴群が検出されている。三後沢遺跡<sup>(4)</sup>では前期の住居跡5軒と中期の住居跡2軒と陥穴4基等が検出され、十二原Ⅱ遺跡<sup>(4)</sup>においては、前期の住居跡3軒と中期の住居跡7軒と陥穴17基等が検出されている。今回調査を行なった大原Ⅱ遺跡では陥穴が15基、同じく村主遺跡では16基検出されている。当遺跡の北東約2kmでは、中期の敷石住居跡の検出された梨の木平遺跡<sup>(5)</sup>や、後期の配石墓が多く検出された深沢遺跡<sup>(6)</sup>が調査されており、また北西約2.5kmの山中においては、前期の土坑4基が発掘された須野野遺跡<sup>(7)</sup>が知られる。

弥生時代の遺跡としては、後期の櫛式土器を伴う時期が多く、諏訪遺跡<sup>(4)</sup>で1軒、三後沢遺跡<sup>(4)</sup>で7軒、十二原Ⅱ遺跡<sup>(4)</sup>で6軒、大原Ⅱ遺跡<sup>(4)</sup>で3軒、大原遺跡<sup>(4)</sup>で2軒、十二原遺跡<sup>(4)</sup>で1軒検出されている。

古墳時代の遺跡としては、集落遺跡が諏訪遺跡<sup>(4)</sup>で6軒、他に利根川の対岸である後田遺跡<sup>(7)</sup>において約250軒、師B遺跡<sup>(9)</sup>において約70軒が発掘調査されている。墳墓としての古墳は、昭和13年に実施された上毛古墳総覧によれば、月夜野町には塚原古墳群をはじめとして後閑や師等で後閑古墳群を中心に157基存在している。しかし後の時代に展開してくる月夜野古窯跡群の位置する地域には、住居跡や古墳の存在がほとんど確認されていない。

奈良時代の遺跡としては、竪穴住居跡が、村主遺跡より20軒、対岸の師B遺跡<sup>(9)</sup>で4軒、後田遺跡<sup>(7)</sup>で数10軒検出されているのみであり比較的少ない。この数は古墳時代の集落と墳墓数及び平安時代の住居数に比較して少なく、またこの段階より窯業生産が開始されており、その中で村主遺跡において大規模な集落が形成されていることは特異であり、窯業集団との関係において興味深い。

平安時代の集落跡は、前田原遺跡<sup>(8)</sup>・前中原遺跡<sup>(8)</sup>・梨の木平遺跡<sup>(5)</sup>・大原遺跡<sup>(4)</sup>で各1軒、藪田遺跡<sup>(10)</sup>で10軒、同一遺跡と考えられる藪田東遺跡<sup>(10)</sup>で8軒、十二原遺跡<sup>(4)</sup>で2軒、洞遺跡<sup>(11)</sup>で9軒、村主遺跡<sup>(12)</sup>で17軒調査され、合計で50軒となる。この中には、藪田遺跡<sup>(10)</sup>や藪田東遺跡<sup>(10)</sup>、さらに洞遺跡<sup>(11)</sup>があり、いずれも須恵器生産と深い関係があり、それらの住居数は合計27軒で検出された全住居数の過半数を占めている。

月夜野古窯跡群は、現在のところ7世紀末より操業を始めて、一時的な空白時期も想定されるが、10世紀前半代まで操業を行なっているものと考えられている。7C末～8世紀前半代の窯跡は現在のところ発見されていないが、当村主遺跡での大量の在産と思われる須恵器の出土より、月夜野古窯跡群での操業が想定

## 月夜野古窯跡群の概要

支群名 現状窯体数	採集想定年代 所在地	焼成器種	概 要 ①調査の経過 ②胎土の特色 ③焼成の特色 ④その他	文 献
沢入A 2	8C中～後半 藪田1691～9	環・壺 甕・盤 高坏 竹籠器	①地元の木村富光氏が昭和51年3月農作業中に、倒れた松の木の根元より大量の須恵器を発見。遺物は収納箱2箱に及び、現在群馬県埋蔵文化財調査センターにて保管。昭和54年9月15日月夜野町教育委員会より試掘調査が実施され、窯体複数が確認された。 ②胎土中に1mm以下の白色粒子を多く含む、長石粒子はほとんど観察できず。 ③大部分還元焼成。④現状で確認されている月夜野古窯跡群中で最古である。	(1) (2)
洞A 4	8C末～10C 上組洞1443 1452 1454	瓦・甕 水瓶・高坏 蓋・壺 皿・甕 把手・羽釜	①昭和12年に山崎義男氏が富出しての窯体断面を調査、昭和45年に井上唯雄氏が3基の窯体を発掘調査した。この3基は月夜野町において現状では唯一の窯体全体の発掘調査例である。胎土中に1mm以下の白色粒子を多く含む、長石粒子はほとんど観察できず。 ②大部分還元焼成であり、製品の中には溶着しているものを含む。 ③前記の沢入A支群の製品と甕や盤等において異なる。特に甕の盤に關しては1部が藪田支群に引きつがれているようであるが、窯内全体からみて異質である。	(1) (3) (4)
藪田A	9C～10C 藪田・藪田東 邊跡から想定、 窯体は不明	環・壺 甕 藪田・藪田東 邊跡から想定、 音籠器	①上越新幹線の駅及び駅前広場造成に伴ない発掘調査された。②胎土中に1mm以下の白色粒子を多く含む、長石粒子はほとんど観察できず。③還元焼成焼成も含むが、多くは還元でも軟質である。酸化焼成も少し含む。④藪田遺跡と藪田東邊跡の調査から、この製品が焼成という技法を9世紀代から多く用いていること、また器形等の特色から、現在確認されている他の古窯跡の製品と異なることが明らかとなり、近くに窯体の存在が想定され、藪田A支群として扱った。	(1) (5) (6)
深沢B 4	10C 深沢2324付近	環・壺 甕・羽釜	①昭和30年頃及び昭和50年頃道路工事でより窯体が削られ発見された。現地の発掘調査は行われていない。②胎土中に1mm以下の石英粒子及び白色粒子を多く含む。③還元焼成が多いが、酸化焼成の製品も含む。④現状において4基想定されているが、さらに多くの窯体が存在していると思われる。1・2号窯跡より須恵器の環と羽釜が出土している。県内において数少ない例である。	(1)
深沢C	10C 深沢2307 2298付近	環・壺 皿・甕 羽釜・瓶	①地主の片野利治氏がタバコ栽培中に地中より発見した。現地の発掘調査は行われていない。②胎土中に1mm内外の石英・長石粒子及び1mm以下の白色粒子を多く含む。③還元焼成が多いが、酸化焼成の製品も少し含む。④耕作作業中の土のたまり不明瞭な点を多く含むが、羽釜や瓶を多く出土する特色を持つようである。付近に多くの窯体が想定されている。	(1) (2)
須磨野A	10C 須磨野2082～ 2083付近と思 われる。	環・壺 鉢 脚付羽釜	①地元の木村富光氏が、道路拡張工事の際山林側の断面より1ヶ所にまとまって出土した遺物を採集した。現地の発掘調査は行われていない。②1mm以下の白色胎土粒子を多量に含んでおり、1mm内外の石英・長石粒子を少量含む。また1mm以下の黒色粒子をごく少量含む。③90%近くが還元焼成であるが軟質である。④環や瓶の外に脚付羽釜が多く出土しており、真沢A支群と共に注目される。	(1)
真沢A	10C 前田2424～ 2394番地付近 が想定される。	環・甕 脚付羽釜 瓶	①昭和16年に、山崎義男氏が道路断面から確認し断面や出土遺物の実測を行ない報告した遺跡である。出土遺物や所在地については明確でないが、前出の所在地が想定されている。②③瓶の報告文中に「焼成色、色調は青灰色、土粒は粗粒子である。石英粒を混入……」、脚付羽釜には「灰黒色を呈し、土粒子は割合に粗……」と説明があるため、ほぼ還元焼成であり、胎土中に石英粒子を含む。④脚付羽釜を重付増及び甕として報告しているが、報告例としては貴重である。	(1) (3)
水沼A 1	10C ? 真沢2761～ 2763付近	環・壺 瓦葺・瓦 等が近く より出土	①国道254に切断され、断面にて確認された。②③窯跡中からの出土遺物は確認されていないため明らかでない。西約50mにある前中原遺跡から本窯と関連すると考えられる住居跡が調査され、若干の出土遺物がある。その遺物で見られる限り焼成は還元焼成を主とするが酸化焼成も含む。胎土中に石英や長石等の白色胎土を特色的に含む。	(1) (7)

## 文献

- (1) 大江正行・中沢 都ほか「月夜野古窯跡群」月夜野町教育委員会 1985
- (2) 群馬歴史考古同人会「土器部会研究資料」No.2 1983
- (3) 山崎義男「上野国利根郡月夜野二窯址に就いて」『古代文化』1941
- (4) 井上唯雄「群馬県利根郡月夜野町須磨野発掘調査報告書」月夜野町教育委員会 1972
- (5) 原 雅信ほか「藪田東邊跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- (6) 下城 正・岡 晴彦ほか「藪田遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1985
- (7) 下城 正ほか「十二原遺跡・大原遺跡・前中原遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1982

## 第2章 遺跡の地理的環境と歴史的環境

される。8世紀中頃になると、沢入A支群で採集が開始され、2基の窯体の存在が確認されている。8世紀後半代の窯跡は確認されておらず、又、この時期の住居跡も月夜野町では現在のところ確認されていない。8世紀末～9世紀初め頃の窯として洞A1～3号窯が確認されており、他に9世紀代の窯跡として、藪田A支群が想定されており、10世紀前半代として、洞A4号窯・藪田A・深沢B・C・真沢A・須磨野A・木沼A等の各支群が想定されている。ここで生産された製品は、利根・沼田・吾妻地区に供給されており、その存在の在り方は、平地の在り方と比較して興味深い。

中・近世における遺跡は、中世末の戦乱期から近世前半における、城跡およびそれに関連した遺構等で知られている。城平遺跡の調査においては、中世末と考えられる名胡桃城の馬出部分の一部が、月夜野バイパス道路路線内にあり、発掘調査を実施した。この城跡とはほぼ同じ時期の城跡として、赤谷川北側に小川城跡<sup>99</sup>が知られる。この城は中世末から近世初めにかけて使用されており、国道291号線の改良工事に伴い、二の丸推定地域の一部が調査された。藪田東遺跡においては、墓域より、火縄銃の鉛玉が出土しているものや多くの掘立柱建築遺構が確認されており、また、同じく藪田・洞遺跡においても、多くの掘立柱建築遺構が調査されている。これらの多くは、中～近世に属すると考えられている。また国道291号道路改良工事に伴い菩提木遺跡<sup>98</sup>では、経塚一基が発掘調査され、一字一切経を多数検出している。

このように、月夜野地区においては、旧石器時代以来、多くの遺跡が発掘調査されており、今日しだいにその成果が明らかになりつつある。

(中沢 悟)

### 註

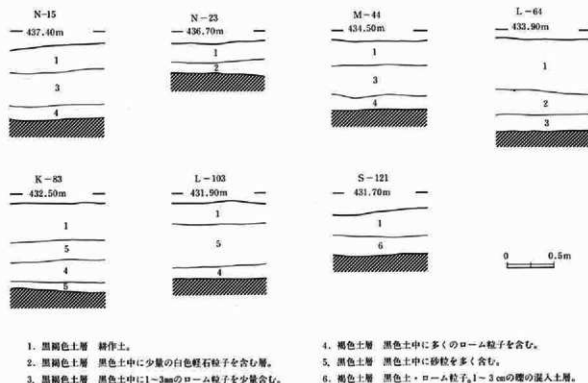
- (1) 「善上遺跡」「三峰神社裏遺跡」「年報2」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- (2) 大江正行・神谷佳明・麻生敏隆「後田遺跡」「年報2」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- (3) 岩崎泰一ほか「城平遺跡・源訪遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- (4) 菊地 実ほか「三後沢遺跡・十二原Ⅱ遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- (5) 能登 健・下城 正「梨の木平遺跡」群馬県教育委員会 1977
- (6) 下城 正・西田純彦・新井順二「群馬県深沢遺跡配石遺構」『日本考古学年報22』日本考古学協会 1979
- (7) 秋田 武「須磨野遺跡」『緊急文化財調査報告書』群馬県教育委員会 1983
- (8) 飯塚卓二・下城 正ほか「十二原遺跡・大原遺跡・前中原遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- (9) 「上毛古墳総覧」群馬県 1938
- (10) 中東清志「前田原遺跡」「上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅵ」群馬県教育委員会 1980
- (11) 下城 正・岡 晴彦ほか「藪田遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- (12) 原 豊信ほか「藪田東遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- (13) 下城 正「洞Ⅰ・Ⅱ遺跡(76地区)」「上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅵ」群馬県教育委員会 1980
- (14) 大江正行・中沢悟ほか「月夜野古窯跡群」月夜野町教育委員会 1985
- (15) 相原建史ほか「小川城址」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981
- (16) 「菩提木遺跡」「年報1」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982

## 第3章 調査の方法

## 第1節 標準土層及び遺跡内の地形について

調査区全体は、名胡桃平北東部を南東より北西方向へと横切っている。地形全体は、ほぼ平に感じられるが、標高で見ると、大原Ⅱ遺跡の位置する調査区南西端の付近で431.7m、村主遺跡の位置する調査区北西端部の付近で437.4mとなっており、その差が6m以上認められ、北西側の部分が高くなっていることが知られる。これは名胡桃平全体が北に流れる赤谷川への傾斜以上に、利根川方向への傾斜がより強いことを示していると思われる。このように調査区の間端部において、約6mの比高差があるため、土層も両者において大きく異なっている。それを以下の土層図で示した。この土層図は20mごとに打たれている道路の幅杭を基準として、10mごとに掘った試掘トレンチの南西側の土層図である。その位置は、全体に設定したグリットの数値で示した。各地区の土層は、図や土層説明で示したような状況であり、いずれの地区の住居跡や土坑等も、ロームを掘り込んでいたが、大原Ⅱ遺跡と村主遺跡とは、図で明らかのように、耕作土よりローム層までの土層が大きく異なり、村主遺跡では多くの層が堆積していたが、大原Ⅱ遺跡では少ない。さらに同じロームでも、村主遺跡のローム中に礫は混入していないが、大原Ⅱ遺跡の南東部のローム中には多くの礫が混入しており、同じロームでも異なることを示している。このことは、この地区が原沢に近いため、表土の流出も多く、堆積が行なわれにくい状況であったことを示しているのではないだろうか。このような表土の状態を反映してか、住居跡等が多く検出されたのは、ローム上に多くの黒褐色が堆積している調査区の北西寄りに集中しており、それは大原Ⅱ・村主の両遺跡とも共通していた。またこのように多くの土の堆積が認められた地区の遺構は、今日の耕作等による破壊も比較的少なかった。

(中沢 悟)



第2図 大原Ⅱ・村主遺跡内柱状土層図

### 第3章 調査の方法

## 第2節 調査の経過と方法

1. 月夜野バイパス道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の最終年度に当たり、E・F地区（大原Ⅱ、村主遺跡）の調査に入ったのは昭和58年4月25日からである。調査対象面積15,020㎡である。調査は11月30日まで行ない、後、埋めもどし、図面整理、写真整理等の基本整理を現地に行ない、12月26日に現場の事務所を完全に撤去した。

調査に伴う基本的事項として、安全対策には特に重点を置いた。

1. 安全対策 遺跡は平均25m幅で600mの長さであるため常に注意がいきとどかないことが想定できたため遺跡調査地区危険箇所に1.8m間隔で丸太杭を打ち、安全ロープを張り立入禁止の看板を立てる。排土の土盛は崩れない様に重機で押しかけた。また地境の崩落防止を心掛けた。台風や降雨時の水抜き場所の注意を払った。重機による旋回範囲等の立入りを禁止した他、遺跡内には農道が数本横断しているため農道の通行をさまたげないように配慮した。

作業員への伝達として

- ①調査における注意事項の説明。
- ②健康診断を現場で行なった他、急病時に備え個人表の提出により、血液型、健康状況、家庭医、病院等の把握をするとともに、毎朝作業に入る前にラジオ体操を行ない安全に心掛けた。
- ③その他、状況に応じて安全対策を講ずるよう心掛けた。

### 2. 調査行程

- ①建設省高崎工事事務所沼田出張所と幅杭の確認、調査区域内のうわ物撤去等の打ち合わせを行ないつつ調査を進める。

- ②試掘トレンチ、E・F地区を通して10mごとに1×4mのトレンチを遺跡内、道路幅両側に入れて全体を把握したうえでバックホーにて表土剥ぎを開始する。村主遺跡西側から表土剥ぎを行ない土砂を東に移動、ダンプカーを使用したのが公害になる為、バックホーにて土砂を送ることにする。トレンチを入れた結果、遺構の集中している可能性がある箇所から調査を開始することにした。調査は村主遺跡の西側から東に向けて遺構確認を行なうことにし、表土剥ぎも同様の行程をとった。重機使用の表土剥ぎは4月末から6月初旬にかけて行なった。主に村主遺跡の西側と、大原Ⅱ遺跡の東側半分を中心に表土剥ぎを行なった。表土剥ぎ後は遺構確認作業を行ない、村主遺跡は西側が終了後、徐々に東側へ大原Ⅱ遺跡は西へと調査を進めることにした。重機による表土剥ぎや、遺構確認はその都度調査の進捗状況や天候等を考慮しながら作業を進めた。

- ③遺跡内にはグリットを設定、5×5mを1区画とし、北西にグリットポイントを設けた。グリットの呼び方は東西をアルファベット、南北を数字で表現した。また前年度の調査分である十二原Ⅱ遺跡との遺構の関連性をもたせるため、トラバース測量によるグリットの関係現地にて確認した。

4月25日～30日 地元の関係機関、関係者等にあいさつまわりを行なう。昨年試掘したトレンチの再掘。バックホーによる表土剥ぎの開始。村主遺跡の西端から住居跡1軒を検出した。遺跡の東側に土砂の移動を

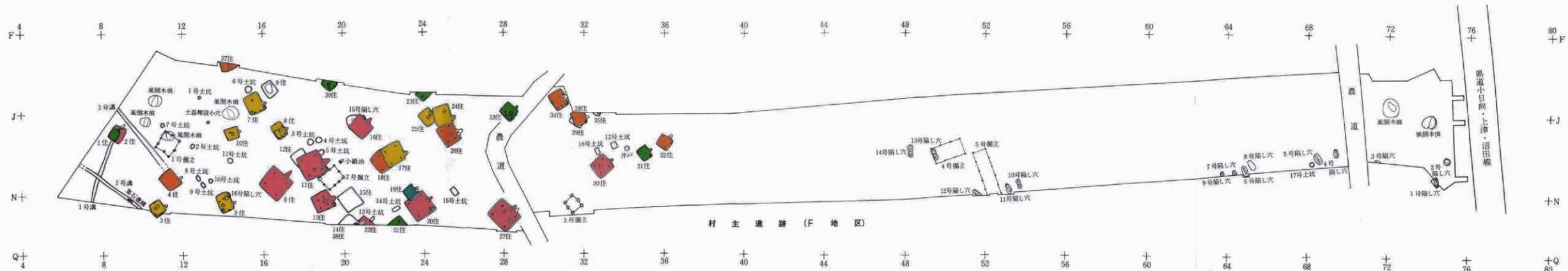
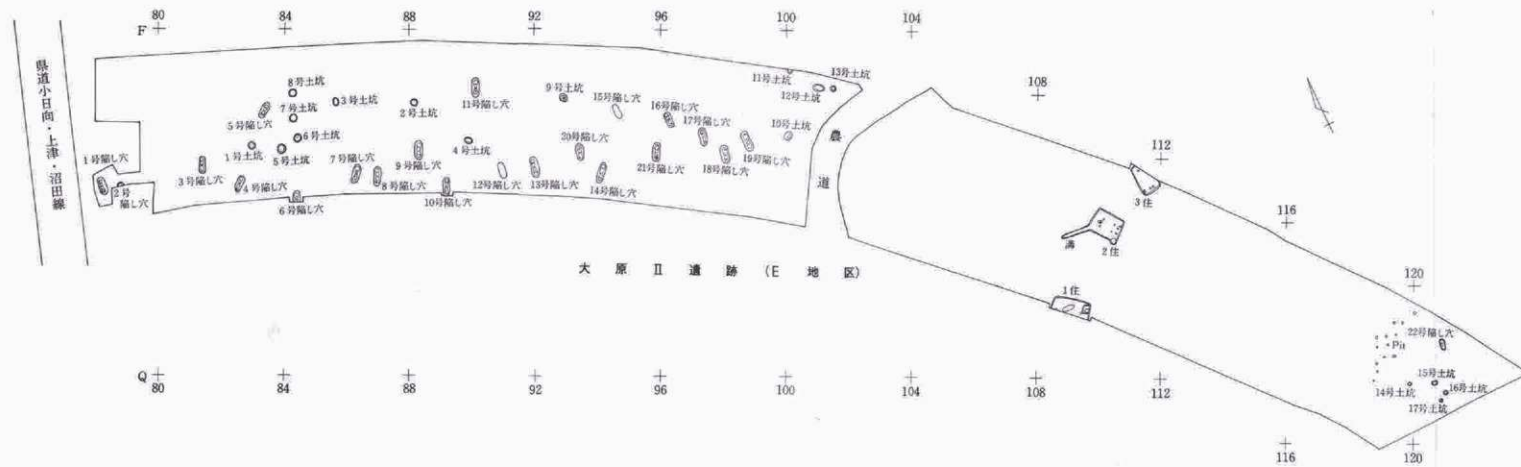


## 第2節 調査の経過と方法

- 行なう。遺跡と周辺の安全対策をととのえる。(遺跡内立入禁止地域の安全ロープの設置、作業員通勤車の駐車場の完備、農道や畑など地境の遺跡確認と危険箇所へ看板の設置を行なう。)
- 5月前半 表土剥ぎ、遺構検出作業を継続。大原Ⅱ遺跡も併せて表土剥ぎを行なう。重機による表土剥ぎと併行して遺構確認を開始する。現場事務所に電話等の設置を行なう。調査区と地境の不明瞭な箇所があるため建設省へ幅杭の設置を求める。
- 5月後半 大原Ⅱ遺跡1区の表土剥ぎ作業完了。村主遺跡表土剥ぎ、遺構確認作業を継続。村主遺跡検出の住居跡4軒の発掘を開始した。村主遺跡遺構集地点は最西部で密度が高く調査期間を多く必要とすることが明瞭になった。このため当地区から調査を行なうと同時に別班で大原Ⅱ遺跡1区の遺構確認調査を開始する。
- 6月前半 村主遺跡1～4号住居跡調査。3号住居跡調査地区を拡張する。5～7号住居跡の調査を開始し掘立柱建築遺構・ピットの調査も行なう。遺構のとり上げや実測図を作成するために5×5mでグリッドポイントを設置する。またレベル原点を設置すると同時に遺構内の土層図を作成することができるため準備を開始する。掘立柱建築遺構、ピットの平面図、立面図を作成する。
- 6月後半 村主遺跡から9軒の住居跡を確認した。縄文土器を出土した土坑、掘立柱建築遺構の調査。6号住居跡(焼失家屋)の炭化材出土状況の写真撮影を行なう。遺跡内で検出した遺構内の土層写真、遺物出土写真、遺構写真等の撮影をする。遺構実測を開始する。雨期になり雨天の日は出土遺物の水洗い、注記を現地のプレハブ内にて行なう。
- 7月前半 大原Ⅱ遺跡遺構確認作業を行ない、陥し穴・土坑・ピットを検出し調査を開始した。村主遺跡5・8・9・10号住居跡の調査、築石遺構の遺物取りあげを行なう。大原Ⅱ遺跡東部分の調査地区全体で弥生時代後期の住居跡3軒、縄文時代の陥し穴1基、土坑多数を検出した。大原Ⅱ遺跡の全景写真撮影を行なう。雨天が多く、土器洗い、器材整備を行なった。
- 7月後半 大原Ⅱ遺跡から弥生時代後期の住居跡3軒を検出し、調査を開始した。村主遺跡4・5・8・10・11・16号住居跡、土坑の調査を行なう。弥生時代の住居跡は全て後期であり、近接する大原遺跡と同一の遺跡であることが明瞭となった。土坑の確認地点は表土からの攪乱により不明瞭な部分が多い。雨天が続き、土器洗い、図面整理を行なう。
- 8月前半 大原Ⅱ遺跡弥生時代住居跡の調査、2号住居跡では床面硬度測定を試みる。また全体図の作成、全景写真の撮影を行なう。村主遺跡は住居跡の調査を継続・遺構調査に伴い排土が多量になったため土砂運搬をダンパーにて調査終了地点に移動を行なう。作業員の健康診断を現場プレハブにて行なう。建設省センター杭を確認に入る。
- 8月後半 大原Ⅱ遺跡2号住居跡の床面硬度測定を終了。村主遺跡5・8～11・13・15・17・19・21号住居跡の調査。新たに23・24・28・29・31・32号住居跡の調査開始。16号住居跡から大刀子出土。台風の接近にて現場の安全対策を強化するとともに台風通過後は遺跡内の整備を行なう。
- 9月前半 大原Ⅱ遺跡1号住居跡と3号住居跡を拡張。村主遺跡31・32号住居跡Lー19・20区の小鍛冶遺構の調査を開始する。村主遺跡調査終了部分の図面を再確認するとともに竈の調査(断割り)を行なう。
- 9月後半 大原Ⅱ遺跡の空撮をラジコン機により行なう。大原Ⅱ遺跡2区の表土剥ぎ、村主遺跡では33・34号住居跡の調査を行なう。現地説明会用パンフレットの原稿執筆。村主遺跡を横切る農道のつけ替えを行ない農道下の遺構(住居跡2軒)調査に入る。

- 10月前半 大原Ⅱ遺跡2区から縄文時代の陥し穴多数を検出した。陥し穴の調査を開始。村主遺跡20・24・25・27・33～35号住居跡の調査を行なう。20号住居跡から鋤先が、33号住居跡竈内からは鉄製の紡錘車が出土した。8日(土)・9日(日)の両日、現地説明会を開催し見学者は650余名に及んだ。その後連日桃野小学校の児童の団体見学があり、最終的には1,000名をはるかに超える見学者であった。現地説明会では、調査中の遺構の他に、56・57年度に検出した出土遺物やパネル写真の展示を現場のプレハブ内にて行なった。鉄器は取り上げ後保存処理に早急に出す。
- 10月後半 大原Ⅱ遺跡の陥し穴群の調査を継続。村主遺跡では各住居跡の部分実測図の作成、竈・エレベーションと部分写真の撮影を行なう。床下調査を駄目押しをかねて開始した。月夜野町立第一中学校の生徒140名、同桃野小学校児童215名、町文化財専門委員2名見学に来跡。
- 11月前半 大原Ⅱ遺跡の陥し穴群の調査を継続。村主遺跡では3号住居跡の隅の部分に拡張して全体を確認した。村主遺跡、住居跡の床下調査を続行した。床下には円形のピットや乱れた落ち込みがほぼ全面で検出できた。大原Ⅱ遺跡で検出した縄文時代の陥し穴は21基になった。その他、各遺構の実測図を見直した後に駄目押しトレンチを入れた。
- 11月後半 大原Ⅱ遺跡2区をラジコン飛行機による空撮を実施。陥し穴の縦スライス調査を行なう。6号住居跡の炭化材取り上げ作業、各住居跡の最終図面、全体図作成を行なう。25日から遺跡内の埋戻しを開始し、30日をもって発掘調査は終了した。現場において調査記録が取り終わった後は、安全対策として、深い遺構と地境部分の土砂崩壊を防ぐために重機にて埋めもどしを行ない、調査に入る時点で設置した安全柵等の撤去を行なった。
- 12月1日～26日 12月の作業は大原Ⅱ遺跡・村主遺跡から出土した遺物の水洗い・注記作業また概観作成のための図面整理・修正・トレース作業を行なった。併せて写真・スライドの整理に着手し、26日の撤収をもって3年に及んだ月夜野バイパス建設に伴う埋蔵文化財の調査は現場での作業をすべて終了した。地元の関係機関、関係者にあいさつ。撤収後は事業団において基本的な整理を3月まで行なった。(相京建史)

- 奈良時代第1期類
- 奈良時代第2期類
- 平安時代第2期類
- 平安時代第3期類
- 平安時代第4期類



第3図 遺跡全体図





## 第4章 検出された遺構と遺物

### 第1節 遺跡の概要 (第3図、付図1、図版1・2)

発掘調査した遺跡は、月夜野バイパスの路線内であり、原沢より国道291号線までの平坦地である。調査前は、桑畑や畑等で利用されていた。表土の除去を全面行ない、遺構の検出を行なった。その結果縄文時代の陥し穴や弥生時代の住居跡等が検出された。それに伴ない縄文時代の石器や土器と、弥生時代の土器等が数多く検出された。また当遺跡の北東部に、上越新幹線建設に伴ない調査され、報告書の刊行されている大原遺跡がある。その遺跡からは、縄文時代の土坑6基と、弥生時代後期の住居跡2軒及び平安時代の住居跡1軒が検出されている。このように大原地区の遺跡は、縄文時代の陥し穴と住居跡や弥生時代の住居跡及び平安時代の住居跡等が、数は多くはないが確実に存在していた地域であることが明らかとなった。

#### 縄文時代

**遺構** 検出された遺構は、陥し穴と土坑である。それらは調査区北西側に多く、南東端部に少数検出された。それらの総計は土坑が4基で陥し穴が22基であった。1～4号までの4基の土坑は縄文時代の土坑と考えられるが、他に13基検出されている土坑に関しては、時代決定の根拠が認められず、時代は確定できなかった。検出された22基の陥し穴の中で1～21号陥し穴は、いくつかのグループに分かれるようであるが、一定規則の中で配置されており、また22基というまとまった数で検出されたため、多くの問題点を解決するための大きな手がかりとなりそうである。さらにそれらの問題解決のために、12・15号陥し穴においては、陥し穴の縦方向のスライスによる調査を実施し、多くの成果を上げることができた。

**遺物** 検出された遺構は、陥し穴と土坑のみであったため、遺構の性格からして、出土遺物は非常に少量であった。3号陥し穴と9号陥し穴より焼礫各1点と、13号陥し穴と22号陥し穴より縄文土器が各1点、22号陥し穴・17号陥し穴・12号陥し穴より打製石器が各1点、13号陥し穴と22号陥し穴より剥片石器が各1点と、17号陥し穴より剥片石器が2点出土しているのみである。他にはグリッドより土器片や石器が少量出土しているのみで、全体的に出土量が少ない。

#### 弥生時代

**遺構** 検出された遺構は、3軒の住居跡のみであった。検出された位置は調査区南東側であり、3軒が近接して検出された。2号住居跡は完掘できたが、1・3号住居跡は、住居の一部が調査区域外に延びているため、全掘はできなかった。住居の残存は良好でなかったが、2・3号住居跡において、出入口用と思われる小穴と炉が検出されている。

**遺物** 1～3号住居跡より、弥生時代後期の土器を多く出土している。出土した土器は、高杯・鉢・壺・甕等であり、高杯や壺等においては外面に赤色塗彩が認められた。それらの遺物については、各住居跡ごとに実測図と土器観察表を載せてあり、また各住居跡より出土した遺物全体については、第6章で一覧表を用いて示してある。

(中沢 悟)

## 第2節 住居跡

### 1号住居跡（弥生時代） 遺構写真図版3 遺物写真図版5

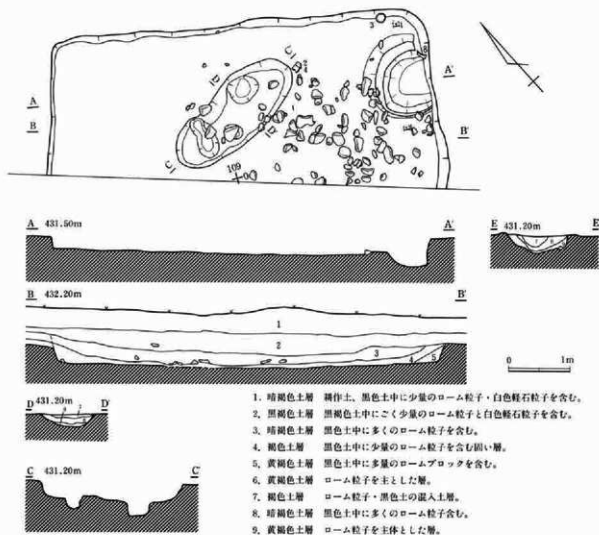
位置 2号住居跡（弥生時代）の南西約11mのところ的位置しており、N・O-108・109グリッドに属する。

概要 当住居跡は2号住居跡・3号住居跡とともに同時期集落を構成し、南東方向の原沢に面して半弧を描くような配置をとっている。上越新幹線大原遺跡の調査においても該期の住居跡2軒が調査されているから合計5軒となる。なお、当住居跡は路線外に遺構が延びるために完照することはできなかった。

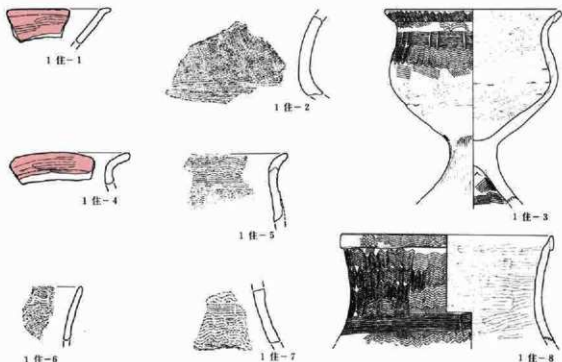
構造 床面はやや凹凸が認められる。中央部に土坑が存在するが、これは当住居跡に直接伴うものではない。柱穴は検出できなかった。貯蔵穴は南壁際に確認され、貯蔵穴の周囲には楕円状に床面の高まりが認められた。南壁部分が当住居跡の出入口部分に相当するものであろう。

規模 長辺5.7m、短辺は現状で2.7mの隅丸長方形を呈するものと思われる。壁高は28cmである。貯蔵穴は長径74cm、短径63cm、深さ30cmであった。

遺物 覆土中より弥生時代後期樽式土器が出土しているが、その量は非常に少ない。また住居跡南半分の床面直上からは多量の礫が出土している。



第4図 1号住居跡実測図



第5図 1号住居跡出土遺物実測図

1号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第5図 写真図版5)

遺構名及び番 号	器形及び器 種	器高・口径・底径(mm) 出土位置	器形、成形、調整、文様等の特色	①色調 ②焼成 ③残存 ④胎土 ⑤備考
1住-1	高杯	— — — 0-11	杯口縁部の破片である。杯胴部は大きく外に開き、口縁部にはほぼ水平に外面に向けて屈曲する。内外面とも器面が荒れている。口縁部は横撫で、外面は横方向に荒磨き痕が残る。	①内外面とも赤色塗彩 ②ややあまい ③口縁部 ④砂質であり黒雲母を少量包含
1住-2	壺	— — — 床面	頸部から口縁部に向い大きく外反する。頸部には横方向に楕円状が入るが横線文か葉状文かは不明である。	①浅黄褐色 ②ややあまい ③頸部の破片 ④白色鉱物包含
1住-3	台付甕	— 13.9 フク土	頸部の裾を欠損する。器面は頸部外面は縦方向に荒磨き、内面は横方向に櫛状工具により整形、袋内外面とも横方向の荒磨き、折り返し口縁であり、頸部に葉状文を施した後、口縁部と頸部の上下に櫛状波状文を施した後頸部は斜方向に整形。	①赤褐色 ②良好であるが胴上半は吸戻、下部は器面が割落している。③頸部の裾を除き残存 ④小礫を混入する
1住-4	高杯	— — — 床面	杯口縁部の破片、口縁部は大きく外反する。口縁部部は丸みをもち、内外面とも横方向に荒磨きが行われている。	①内外面とも赤色塗彩 ②良好 ③口縁部破片 ④小礫含
1住-5	台付甕	— — — 0-110	胴部は丸みをもち頸部に至り、頸部から口縁部にかけては大きく外反する。内面は横方向に器面調整。外面は荒れている。口縁部と胴部に楕円波状文を施した後、頸部に櫛状横線文を施す。	①暗赤褐色 ②良好である ③胴上半から口縁部にかけての破片 ④白色鉱物多量包含
1住-6	甕	— — — 床面	内外面とも横方向の撫で整形後、外面は楕円波状文を施文している。	①にぶい褐色 ②良好 ③口縁部 ④白色鉱物を包含
1住-7	甕	— — — フク土	内面は横方向に器面調整を行なっている。施文は口縁部から頸部、肩部へと楕円の波状文、葉状文、波状文の順である。	①褐色 ②良好 ③頸部付近の破片 ④白色鉱物包含
1住-8	甕	— (16.7) — フク土	頸部は緩やかな曲線を描き口縁部へと移行する。口縁部部は折り返しを呈す。外面は縦方向に刷毛目調整後10条1單位の葉状文を施した後、口縁部に1段、頸部に4段、肩部から胴部へと楕円波状文を施文している。内面は横方向に荒磨き。	①褐色 ②堅く焼きすぎる ③頸部から口縁部にかけての破片 ④砂質であり白色鉱物が目立つ

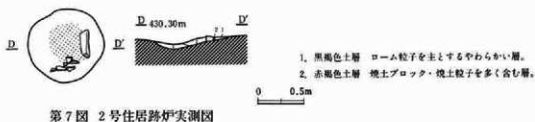
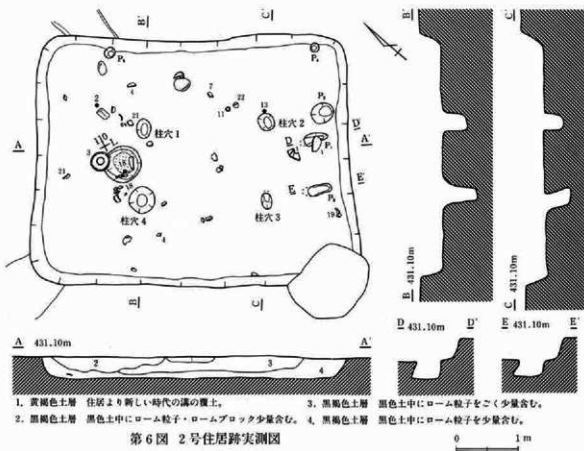
第4章 検出された遺構と遺物

2号住居跡 (弥生時代) 遺構写真図版3・4 遺物写真図版5

位置 1号住居跡の北東約11m、3号住居跡(弥生時代)の南西約6mのところに位置しており、K-109・110、L-109・110グリッドに属する。

概要 当住居跡は1号住居跡・3号住居跡とともに同時期集落を構成するものである。調査区のほぼ中央で検出され、3号住居跡に比較的近接して存在している。当住居跡は攪乱や溝で一部床面が壊されているが、比較的良好な遺存状況であったことから、山中式標準型土壌硬度計(A型) YH-62を使用して床面硬度測定をこころみた。測定対象住居跡として選定した理由は、前記したことと該期の住居跡がいずれも住居の南側に出入口部施設を有しているからであり、床面硬度測定の結果が出入口部分をどのように表示するのか、はなはだ興味があったからである。測定箇所は1640箇所、測定は実に7718点に達した。あまりにも膨大な数値のため、残念ながら当報文にはその成果を掲載することはできなかった。調査担当者の責務として、近い将来にその成果を公表する所存である。

構造 床面は比較的平坦である。肉眼による観察、手指の圧力感覚から判断して炉の北側、出入口部施設か





ら住居中央部までか硬いと思われる部分である。柱穴は4本検出され出入口施設と思われる小穴のP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>が南壁際に2個検出され、他にPitが3個検出された。周溝は検出されなかった。

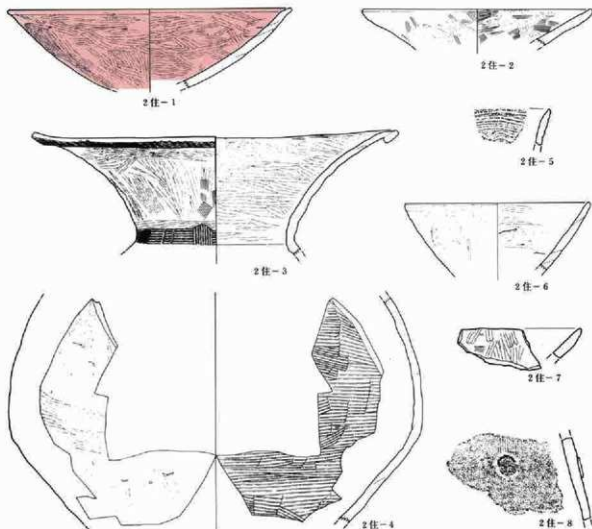
規模 長辺約5m、短辺約3.8mの隅丸長方形を呈し、住居確認面より床面までは約30cmであった。柱穴1の規模は長径30cm・短径20cm・深さ38cm、柱穴2の規模は長径30cm・短径25cm・深さ29cm、柱穴3の規模は長径25cm・短径15cm・深さ42cm、柱穴4の規模は長径45cm・短径40cm・深さ52cmをそれぞれ測る。柱穴1・2間距離は約195cm、柱穴3・4間距離約200cm、柱穴1・4間距離約115cm、柱穴2・3間距離約120cmである。住居跡南壁際に存在するP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>は斜め内側に掘り込んであり、出入口施設になるものと思われる。P<sub>1</sub>の規模は長径45cm・短径18cm・深さ28cm、P<sub>2</sub>は長径40cm・短径15cm・深さ30cmであり、その間隔は約85cmを測る。P<sub>3</sub>は長径40cm・短径30cm・深さ29cm、P<sub>4</sub>は長径15cm・短径15cm・深さ19cm、P<sub>5</sub>は長径18cm・短径15cm・深さ25cmである。

遺物 覆土中、床面上から弥生時代後期樽式土器が出土している。その量は比較的少なかった。

### 2号住居跡 炉

位置 北側の柱穴1・4の中間やや北に位置している。 概要 床面を掘り窪めた地床炉である。

規模 長径60cm・短径56cm・深さ15cmのほぼ円形を呈する。 遺物 壺・甕及び石等出土。



第8図 2号住居跡出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構と遺物



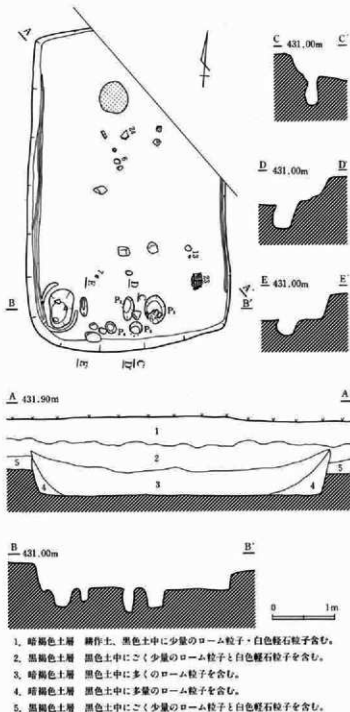
第9図 2号住居跡出土遺物実測図(2)

2号住居跡 出土遺物観察表(1) (図版番号8図 写真図版5)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm)出土位置	器形、成形、調整、文様等の特色	①色調 ②焼成 ③残存 ④胎土 ⑤備考
2住-1	高杯	— 22.6 — 床面	高杯の杯部が残存するが、底部の脚と接合部分は丸く抜けて いる。口縁部は外側に屈曲する。器面には輪積痕が残る。内 面及び外面の口縁部は横方向、外面胴部は縦方向に細かく丁 字に磨きが行なわれている。	①内外面とも赤色塗彩 ②強く焼きしまっている ③脚部と底部を欠損する ④白色胎物を含む
2住-2	壺	— 18.0 — 床面、フク土	口縁部は大きく外反する。内面は横方向に挫で整形を行なっ ている。外面は口縁部を横方向の挫で、頸部寄りには斜方向に 磨調整を行なっている。	①におい黄褐色 ②強く焼き しまる ③口縁部の破片である ④白色胎物を含む
2住-3	壺	— 27.4 — 床面	折り返し口縁をもつ。頸部から口縁部にかけては大きく外反 する。外面口縁部付近は挫、頸部寄りには縦方向に磨きを行 ない、内面は横方向に器面調整を行なっている。折り返し口 縁部には帯状波状文を施文し、頸部には二連止輪状文の周 に帯による丁字文を二単位づつ配す。	①浅黄褐色 ②強く焼きしまっている ③頸部から口縁部にかけて残 存する ④白色胎物、雲母を包含する
2住-4	壺	— — — 床面、フク土	胴部の破片である。一部に輪積痕を残す。内面は横方向に挫 状工具により横挫で行なっている。外面は肩部および胴下 半部分を縦方向に、胴最大幅部分は横方向に丁字を磨きを 行なっている。	①におい橙色 ②強く焼かれ一部光沢がある ③胴最大幅部分の破片である ④小礫を僅かに含む
2住-5	小形壺	— — — 床面	内面は横方向に器面調整を行なっている。外面口縁部には5 条の沈線文、下位には波状文を施文している。	①におい褐色 ②ややあまい ③口縁部 ④白色胎物包含
2住-6	鉢	— 14.6 — K-10	鉢形土器の破片と考えられる。口縁部は横挫で後、縦方向、 内面は横方向に細かく丁字に磨きを行なっている。器面の 一部は焼炭している。	①におい橙 ②焼きしまっ ている ③胴部から口縁部の破 片 ④白色胎物を含む
2住-7	壺	— — — 床面、フク土	口縁部は丸みをもつ。外面は横挫で後、縦方向に磨きを 行なっている。内面は横方向に器面調整を行なっている。	①におい橙色②良好 ③口縁 部の破片 ④白色胎物包含

2号住居跡 出土遺物観察表(2) (図版番号第8・9図 写真図版5)

遺構名及び番	器形及び器種	器高・口径・底径(m) 出土位置	器形、成形、調整、文様等の特色	①色調 ②焼成 ③残存 ④胎土 ⑤備考
2住-8	壺	— — — フク土	前部の破片と考えられる。内面は縦方向に器面調整が行なわれている。外面は櫛状工具による文様施文後、ボタン状貼付文を配す。この貼付文には円形刺突文6個がある。	①浅黄褐色②外面が僅かに荒れる ③前部の破片 ④白色鉱物、小礫を含む
2住-9	壺	— — — フク土	内面は横線で整形が行なわれている。外面は数珠の波状文と横線文で施文している。横線文が波状文を切っている。	①にぶい橙色②ややあまい ③胴上半 ④白色鉱物包含
2住-10	壺	— — — フク土	内面は縦方向に器面調整を行なっている。外面は櫛状工具により縦方向に区画文を配した後横方向に横線文と波状文を施文している。	①明赤褐色②堅く焼きしまる ③胴上半部分の破片 ④白色粒子を多量に包含
2住-11	浅鉢?	— — — 3.6 床面	小型の土器である。輪轆痕を一部に残す。内面は縦方向、外面は縦方向に丁寧な磨きが行なわれている。	①にぶい橙色②良好 ③底部付近の破片 ④白色鉱物包含
2住-12	壺?	— — — 6.4 フク土	底部付近の破片である。外面胴部に主な整形がみられる。外面は縦方向、内面は縦方向に器面調整が行なわれている。	①外面塗彩 ②僅かに荒れる ③底部付近 ④白色粒子包含
2住-13	浅鉢	— (11.8) — 床面	内外面とも口縁部は横線で整形が行なわれている。外面胴部は縦方向に磨きが行なわれ、内面は丁寧な器面調整が行なわれている。	①にぶい橙色②良好であるが表面は僅かに荒れる③胴上半の破片 ④砂粒を包含する
2住-14	台付壺	— — — フク土	台付壺の脚部の破片である。外面は縦方向に器面調整され、内面は櫛状工具により器面調整を行なっている。	①明赤褐色 ②僅かに荒れる ③脚部の破片 ④小礫混入
2住-15	罍	— — — フク土	折り返し口縁を有す。内面は縦方向に丁寧な調整を行なっている。外面は折り返し口縁部と頸部にかけて帯流波状文が施文、4段分確認できる。	①にぶい黄褐色②堅く焼きしまる ③口縁部付近の破片 ④白色粒子を多量に含む
2住-16	罍	— — — フク土	折り返し口縁を有す。内面と外面折り返し口縁部は縦方向に整形している。外面は縦方向に刷毛目整形後、6条1単位の帯流波状文を施文、2段分確認できる。	①にぶい黄褐色②堅く焼きしまる ③口縁部の破片 ④小礫と白色粒子を多量に包含
2住-17	罍	— — — フク土	頸部から口縁部にかけて外反する。内面は横線で整形、外面頸部は右まわりの縷状文、口縁部は3段に帯流波状文を施文	①明赤褐色 ②良好 ③口縁部の破片 ④白色粒子包含
2住-18	罍	— 15.2 — 床面、フク土	折り返し口縁を有す。内面は縦方向に磨きで丁寧に行なわれている。外面は折り返し口縁部から頸部にかけて帯流波状文が施文されている。9条1単位の櫛状工具であり波状文施文前に縦方向に器面整形、口縁部から頸部方向へ順次施文。	①にぶい黄褐色 ②焼きしまっている ③頸部から口縁部 ④白色粒子を多量に包含する
2住-19	罍	— — — 床面	内外面とも器面が荒れており整形、文様等は不明瞭であるが表面の文様は、頸部に右まわりの縷状文を施文後、頸部に帯流波状文、胴部に同文様を施工している。	①浅黄褐色②内外面とも荒れる ③頸部付近の破片 ④白色鉱物を含む
2住-20	罍	— — — フク土	内面は斜方向に刷毛目整形が行なわれている。外面は胴部を縦方向に櫛状工具による器面調整後、頸部には右まわりの縷状文を施文後、下に帯流波状文が縷状文を切り施文。	①にぶい橙色②堅く焼きしまっている ③前部付近の破片 ④白色粒子、石英を包含する
2住-21	罍	— — — 9.4 床面	大型の脚底部と考えられる。輪轆の部分が割れ、底部の接合の様相が明瞭である。内面は櫛状工具により上位へ磨き整形しており、外面は細かく丁寧に縦方向の磨きを行なっている。	①明赤褐色 ②堅く焼きしまる ③底部付近の破片 ④白色鉱物と石英を包含する
2住-22	罍	— — — 5.0 床面	底部から胴下位の破片である。内外面とも磨きが行なわれている。外面は斜方向、内面は縦方向、内面底部は放射状である。外面底部は腹による調整痕がみられている。	①外面はにぶい赤褐色、内面はにぶい黄褐色 ②堅く焼きしまる ③底部付近の破片 ④白色鉱物と石英を包含する



第10図 3号住居跡実測図

で床面に達する。P<sub>1</sub>の規模は上面で37×16cm・床面は23×12cm・深さ37cm、P<sub>2</sub>は上面で30×10cm・床面は17×4cm・深さ23cmを測る。その間隔は70cm。検出位置は南壁中央ではなく西壁寄りに位置している。P<sub>3</sub>は長径45cm・短径32cm・深さ28cm、P<sub>4</sub>は長径20cm・短径18cm・深さ45cmを測る。周溝は現状では幅5cm・長さ1.8m程の周溝が検出されている。西壁下では幅4~10cm・長さ3.9m程の周溝があった。貯蔵穴は上面の規模で60×36cm・底面は34×24cm・深さ27cmを測る。

### 3号住居跡（弥生時代）

遺構写真図版3-4 遺物写真図版5

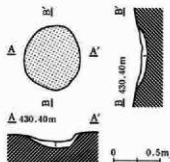
位置 2号住居跡の北東約6mのところ  
に位置しており、J・K-111グリ  
ッドに属する。

概要 当住居跡は1号住居跡・2号住居跡とともに同時期集落を構成するものであるが、1号住居跡と同様に遺構が路線外に延びているために完掘することはできなかった。なお、当住居跡はセクションから判断すると第2層から掘り込まれており、残存壁高約70cm程である。このことから判断して、1号住居跡・2号住居跡も実際はかなり高い面から掘り込まれていたものと思われる。

構造 床面は比較的平坦である。床面からは支柱穴を検出することはできなかったが、南壁際に出入口施設になると考えられる小穴のP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>が検出された。他に床面にPitがP<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>と2個検出された。周溝は東壁下と西壁下で検出された。東壁下部分は完掘することができなかったため、全容は不明である。貯蔵穴は床面南西端に検出され、周囲には床面の高まりが認められたが、北側部分では一部が切れていた。

規模 長辺5.1m、短辺3.1mの長方形を呈する。住居跡確認面より約70cm

第2節 住 居 跡



1. 焼土層

第11図 3号住居跡実測図

遺物 覆土中・床面上から弥生時代後期櫛式土器が出土している。その量は1号住居跡・2号住居跡と同様に少なかったが、炉の南側と出入口部付近にややまとまりをみせている。

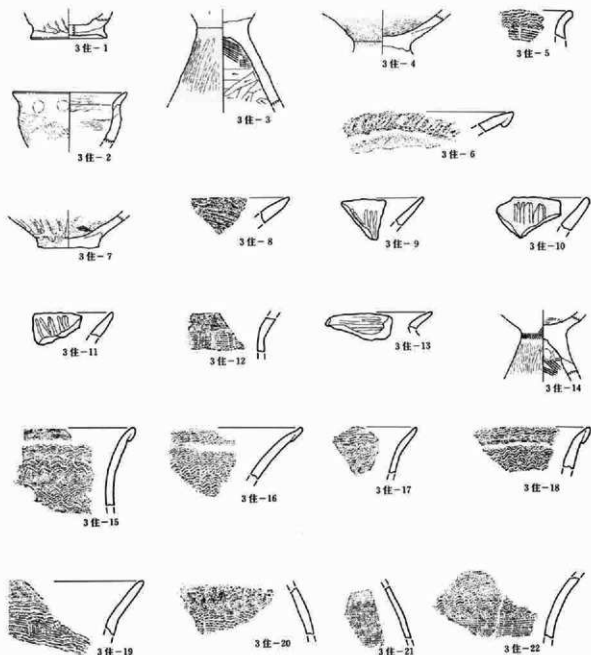
3号住居跡 炉

位置 北側床面のやや西寄りに位置している。

概要 床面を掘り窪めた地床炉であり、褐色に固く焼かれていた。

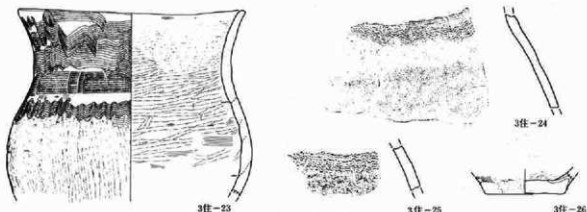
規模 長径50cm・短径44cm・深さ10cmのほぼ円形を呈する。

遺物 全く出土していない。



第12図 3号住居跡出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構と遺物



第13図 3号住居跡出土遺物実測図(2)

3号住居跡 出土遺物観察表1) (図版番号第12図 写真図版5)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、文様等の特色	①色調 ②焼成 ③残存 ④胎土 ⑤備考
3住-1	①+②+7	— — (6.0) 床面、フク土	鉢型土器?、高台状の高まりを底部に付けている。棒状工具により外面高台と取り付け部分を押さえている。小片のため復元は推定である。	①にぶい褐色 ②ややあまい ③底部から胴下位の破片 ④白色鉱物、石英を包含する
3住-2	①+②+7 (白付物)	— 8.9 — フク土	小型の白付物の壁の一部である。胴部は丸みをもち口縁部は外反する。内面と外面口縁部は横方向の器面調整を行ない、胴部は斜方向に器面調整が行なわれている。	①にぶい黄褐色②ややあまい ③口縁部から胴部にかけての破片 ④白色粒子を包含する
3住-3	高杯	— — — フク土	外面は縦方向に磨削りを行なっている。内面の接合部分付近は棒状工具により器面調整を行ない、断面に近づくとつれて荒削りを行なっている。 4と同一個体の可能性がある。	①外面赤色塗彩、内面淡黄褐色 ②良好 ③杯との接合部分付近から胴部中位の破片 ④白色鉱物と石英を包含する
3住-4	高杯	— — — フク土	内外面とも磨削りを行なっている。内面は横方向、外面は縦方向である。断面から紐つくりの痕跡が明らかである。	①内外面は赤色塗彩 ②良好 ③胴との接合部分付近 ④白色鉱物と石英を包含する
3住-5	壺	— — — フク土	小型壺の口縁部の破片、内面は横方向の器面調整、外面口縁部は胴部の右まわり彫状文を切る棒状波状文を施文する。	①明赤褐色②良好 ③口縁部の破片④白色鉱物と石英包含
3住-6	壺	— — — 床面	折り返し口縁を有す。内面は横方向に器面調整を行ない光沢をもっている。外面は横削り後、磨削りを行なっている。口縁部は磨削り工具と思われる削み目を入れている。	①褐色②強く焼きしまる ③口縁部の破片 ④白色鉱物を包含する
3住-7	壺	— — — 4.9 床面	底部から胴部にかけては大きく外反する。外面は縦方向下位から上に向けて器面調整を行なっている。内面は細かく磨削りを行なっている。外面底部は一方へ器面調整を行なっている。	①にぶい黄褐色②強く焼きしまる ③底部の破片 ④白色粒子を多量に包含する
3住-8	壺	— — — フク土	口縁部部は細くなる。内面は横方向に器面調整、外面は斜方向の器面調整と、口縁部部の横削りで整形を行なっている。	①褐色 ②良好 ③口縁部の破片 ④白色鉱物、石英包含
3住-9	鉢	— — — フク土	口縁部部は丸みをもつ。口縁部は横削り後、内面は横方向、外面は縦方向に磨削りを行なっている。	①にぶい黄褐色②良好 ③口縁部の破片 ④白色鉱物包含
3住-10	壺?	— — — フク土	口縁部部は丸みをもつ。外面は横削り後、内面は横方向の磨削りを行なっている。	①にぶい褐色②僅かに貫れる ③口縁部の破片 ④砂質
3住-11	鉢	— — — フク土	口縁部部は丸みをもつ、内外面とも横方向に器面調整を行なっている。	①褐色②良好 ③口縁部の破片 ④白色粒子を包含する

## 第2節 住 居 跡

3号住居跡 出土遺物観察表(2) (図版番号第12・13図 写真図版5)

遺構名及び番 号	器形及 び器種	器高・口径・底径(m) 出 土 位 置	器形、成形、調整、文様等の特色	①色調 ②焼成 ③残存 ④胎土 ⑤備考
3住-12	壺	— — — フク土	外面は横方向に器面調整を行なっている。頸部には構状工具により右まわりの縞状文を施文している。内面は横方向に寛磨きを行なっている。	①にぶい黄褐色 ②内面が荒れる ③頸部の破片 ④白色粒子と小塵を包含する
3住-13	合付甕	— — — 床面	頸部内面は輪積痕が明確に残る。整形は横方向に撫で痕がある。外面は縦方向に寛磨きを行なっている。裏内面は寛磨きを行なっている。	①にぶい赤褐色 ②ややあまい ③裏と正面の接合部 ④白色鉱物と石英を包含する
3住-14	高杯	— — — フク土	外面は縦方向に磨りを行なっている。内面は構状工具により器面調整を行なっている。	①にぶい赤褐色 ②良好 ③杯との接合部分から頸部上位
3住-15	甕	— — — 床面、フク土	折り返し口縁を有す。口縁部は外反する。内面は丁寧に艶磨きを横方向に行ない、外面口縁部は横撫で、頸部にかけて数段の櫛指波状文を配している。	①にぶい褐色 ②堅く焼きしまる ③頸部から口縁部にかけての破片 ④白色鉱物包含
3住-16	甕	— — — フク土	折り返し口縁を有す。口縁部は外反する。内面は横方向に器面調整を行なっている。外面は縦方向に器面調整後、櫛指波状文を配している。	①にぶい黄褐色 ②ややあまい ③口縁部の破片 ④白色鉱物を包含する
3住-17	甕	— — — フク土	内面は横方向に器面調整を行なっている。外面は頸部に櫛指の横線文があるが縞状文の可能性もある。口縁部は櫛指波状文を施文している。	①にぶい黄褐色 ②堅く焼きしまっている ③口縁部の破片 ④白色鉱物、石英を包含
3住-18	甕	— — — フク土	折り返し口縁を有す。内面は横方向に器面調整を行なっている。外面は折り返し口縁部と、頸部にかけて数段の櫛指波状文を施文している。	①にぶい褐色 ②ややあまい ③口縁部の破片である ④白色鉱物、石英を包含する
3住-19	甕	— — — フク土	口縁部は外反する。口縁端部は丸味をもつ。内面は横方向に器面調整を行なっている。外面は櫛指波状文を数段配しているが荒れている。	①黒褐色 ②内面が僅かに荒れている ③口縁部の破片 ④白色粒子、石英を包含する
3住-20	甕	— — — フク土	内面は横方向に器面調整を行なっている。外面は頸部に縞状文を施文後、肩部に櫛指波状文を施文している。	①にぶい黄褐色 ②悪い ③肩部付近 ④白色粒子等包含
3住-21	甕	— — — フク土	肩部は僅かに張る。外面は横方向の整形後、頸部に右まわりの縞状文を施文、後に肩部に櫛指波状文を配している。	①にぶい黄褐色 ②ややあまい ③肩部 ④白色粒子包含
3住-22	甕	— — — フク土	頸部から口縁部に向い外反する。頸部に縞状文右まわりを施文後、口縁部から頸部方向に順次櫛指波状文を施文している。	①にぶい黄褐色 ②悪い ③頸部 ④白色粒子を包含する
3住-23	甕	— 17.8 — フク土	肩部は丸味をもち緩やかに頸部に移行する。口縁部は僅かに外反する。内面側部は頸部に向い斜方向に器面調整を行ない口縁部は横方向に艶磨きを丁寧に有している。外面は縞状文施文後、口縁部に3段、肩部に1段の櫛指波状文を施文した後、胴部に寛磨きを縦方向に行なっている。	①にぶい黄褐色 ②堅く焼きしまっている ③胴部から口縁部にかけて残存する ④白色粒子と小塵を包含する
3住-24	壺	— — — フク土	内面は横方向に撫でによる整形を行なっている。外面は右まわりの縞状文を施文した後により業1単位の櫛指波状文を施文し、縦方向の寛磨きを胴部に行なっている。	①にぶい褐色 ②堅く焼きしまる ③胴部の破片 ④砂粒子包含する
3住-25	甕	— — — K-110、フク土	内面は横方向に撫で整形を行なっている。外面肩部は櫛指波状文を施文している。	①黒褐色 ②堅く焼きしまる ③肩部 ④小塵を包含する
3住-26	甕	— — — (6.0) フク土	外面は底部と胴部の境目を構状工具で押さえた後、縦方向に艶磨きを行なっている。内面は横方向に艶磨きを行なっている。	①にぶい褐色 ②外面が僅かに荒れる ③底部の破片 ④白色鉱物、石英を包含する

### 第3節 土坑・陥し穴・グリッド出土遺物

大原Ⅱ遺跡からは土坑17基、縄文時代の陥し穴22基が検出された。土坑17基の時期別内訳は、縄文時代の貯蔵穴と考えられるもの4基、時期不明の土坑13基である。

縄文時代の貯蔵穴：1号土坑・2号土坑・3号土坑・4号土坑。

1号土坑と3号土坑の間隔は約15.5m、3号土坑と2号土坑では約12.5m、2号土坑と4号土坑では約10.5mをそれぞれ測る。4基の土坑はほぼ等距離に、そして半円を描くように配置されていることから、同時期の構築を思わせる。

時期不明の土坑：5号・6号・7号・8号・9号・10号・11号・12号・13号・14号・15号・16号・17号土坑。

13基の土坑は3つのグループに分けて考えることができる。5～8号土坑の4基、10～13号土坑の4基、14～17号土坑の4基である。そしてこの3グループに属さない土坑が9号である。13基の土坑からは遺物の出土はなく、時期不明と言わざるを得ないが比較的新しい時期に属するものと考えている。

縄文時代の陥し穴は22基検出されたが、このなかで22号陥し穴を除いた21基の陥し穴は、村主遺跡から検出された1～14号陥し穴とその形態や規模がほぼ同一であり、一定間隔に配列すること等から考えて同一群を構成するものと考えられる。同一群構成は35基となる。

#### 1号土坑 遺構写真図版10

I-82グリッドにおいてローム層直上で検出された。5号土坑の北西約5mのところろに位置する。上面は122×116cm、底面は76×66cm、深さ88～94cmのほぼ円形を呈する。底面中央にやや凹みがあり、面積約0.4m<sup>2</sup>である。覆土は8層に分かれた。第1層・暗褐色土、第2層・黒褐色土、第3層・暗褐色土、第4層・黒褐色土、第5層・暗褐色土、第6層・黄褐色土、第7層・黒褐色土、第8層・黄褐色土である。

覆土からは遺物の出土はなかったが、形態や覆土の層相から判断すると、当土坑は縄文時代の貯蔵穴になるものと思われる。

#### 2号土坑 遺構写真図版10

H-88グリッドにおいてローム層直上で検出された。4号土坑の北約10.5mのところろに位置する。上面は102×98cm、底面は88×76cm、深さ58～64cmのほぼ円形を呈する。断面は袋状を呈する。底面は平坦であり、面積約0.48m<sup>2</sup>である。覆土は4層に分かれた。第1層・黒褐色土、第2層・暗褐色土、第3層・黄褐色土、第4層・暗褐色土である。

覆土からは遺物の出土はなかったが、形態や覆土の層相から判断すると、当土坑も1号土坑と同様に縄文時代の貯蔵穴になるものと思われる。

#### 3号土坑 遺構写真図版10

H-85グリッドにおいてローム層直上で検出された。8号土坑の南東約7mのところろに位置する。上面は140×116cm、底面は92×84cm、深さ44cmの楕円形を呈する。底面は平坦であるが北壁で段差が認められ、面積約0.64m<sup>2</sup>である。覆土は2層に分かれた。第1層・黒褐色土、第2層・暗褐色土である。

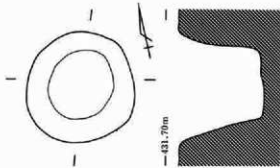
覆土上層から礫が出土している。当土坑も形態や覆土の層相から判断すると縄文時代の貯蔵穴と思われる。

#### 4号土坑 遺構写真図版10

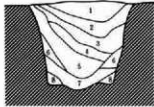
I-89グリッドにおいてローム層直上で検出された。2号土坑の南約10.5mのところろに位置する。上面は102×98cm、底面は90×88cm、深さ50～54cmのほぼ円形を呈する。底面は平坦であり、面積約0.58m<sup>2</sup>である。



第3節 土坑・陥し穴・グリッド出土遺物

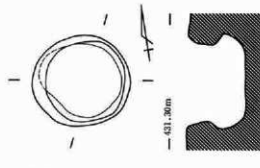


— 431.70m —

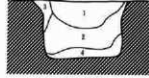


1号土坑

1. 暗褐色土層 やや固く締り粘性はほとんどない。
2. 黒褐色土層 固く締り粘性あり、ローム粒子含む。
3. 暗褐色土層 固く締り、ローム粒子を多量に含む。
4. 黒褐色土層 固く締り、ローム粒子を多量に含む。
5. 暗褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。
6. 黄褐色土層 固く締り、ロームブロック多量に含む。
7. 黒褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。
8. 黄褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。

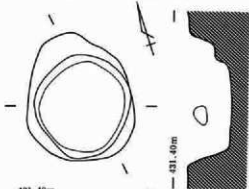


— 431.30m —



2号土坑

1. 黒褐色土層 やや固く締り粘性がある。
2. 暗褐色土層 やや固く締り粘性が非常にある。
3. 黄褐色土層 ロームブロック・粒子を多量に含む。
4. 暗褐色土層 ロームブロック・粒子を多量に含む。

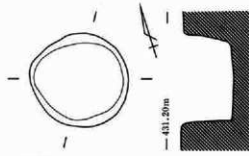


— 431.40m —

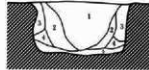


3号土坑

1. 黒褐色土層 固く締り粘性が非常にある。
2. 暗褐色土層 粘性ある。ロームブロックを多量に含む。



— 431.20m —



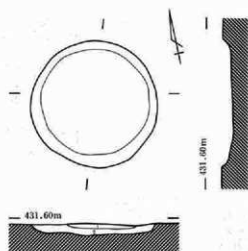
4号土坑

1. 黒褐色土層 固く粘性がある。ローム粒子多量に含む。
2. 暗褐色土層 やや固く締り粘性が非常にある。
3. 黄褐色土層 ロームブロック・粒子を多量に含む。
4. 暗褐色土層 粘性非常にあり、ローム粒子多量に含む。
5. 暗褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。

0 0.5m

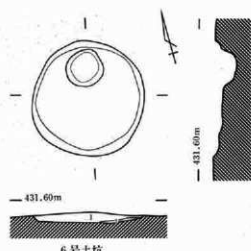
第14図 1～4号土坑実測図

第4章 検出された遺構と遺物



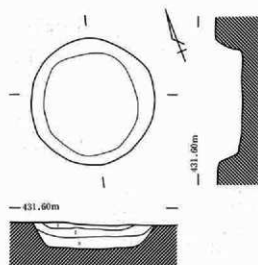
5号土坑

1. 茶褐色土層 やわらかくてボソボソしている。
2. 黒褐色土層 ボソボソしている。ローム粒子を含む。



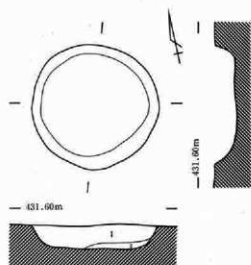
6号土坑

1. 黒褐色土層 やわらかくてボソボソしている。
2. 茶褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。



7号土坑

1. 暗褐色土層 やわらかくてボソボソしている。
2. 黒褐色土層 やわらかくて締り悪い。ローム粒含む。
3. 黒褐色土層 やわらかく締りよい。粘性にとむ。



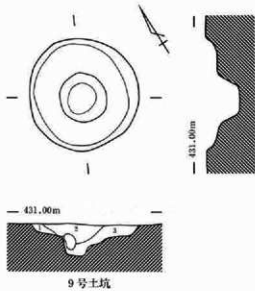
8号土坑

1. 暗褐色土層 やわらかく締り良い。粘性にとむ。
2. 黒色土層 やわらかく締り良い。ローム粒子含む。



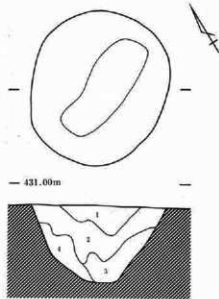
第15図 5～8号土坑実測図

第3節 土坑・陥し穴・グリッド出土遺物



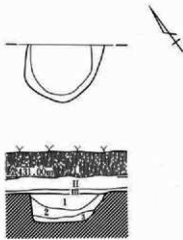
9号土坑

1. 黒褐色土層 固く締り粘性ある。ローム粒子を含む。
2. 黄褐色土層 ローム主体の層。わずかに黒色土含む。
3. 暗褐色土層 粘性非常にあり、ローム粒子多量含む。



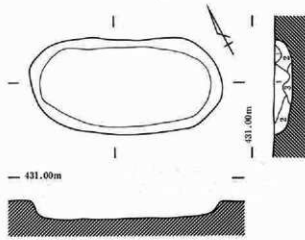
10号土坑

1. 黒褐色土層 固く粘性ある。ローム粒子極少量含む。
2. 暗褐色土層 固く粘性ある。ローム粒子を多量含む。
3. 暗褐色土層 固く粘性ある。ローム粒子を多量含む。
4. 黄褐色土層 固く粘性ある。ロームブロックを含む。



11号土坑

1. 茶褐色土層 やや固く締り粘性が少しある。
2. 暗褐色土層 やや固く締り粘性が少しある。
3. 黄褐色土層 ロームブロック・粒子を多量に含む。



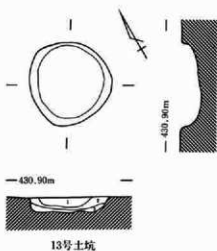
12号土坑

1. 暗褐色土層 固く粘性ある。ローム粒子を多量含む。
2. 茶褐色土層 固く粘性ある。ローム粒子を多量含む。
3. 黄褐色土層 ローム主体の層。わずかに黒色土含む。

0 0.5m

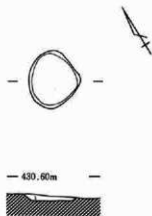
第16図 9～12号土坑実測図

第4章 検出された遺構と遺物



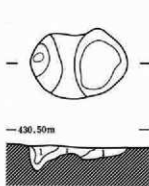
13号土坑

1. 暗褐色土層 やわらかく粘性ある。ローム粒子含む。
2. 暗褐色土層 粘性非常にありローム粒子を多量含む。
3. 黄褐色土層 ローム主体の層。わずかに黒色土含む。



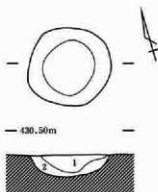
14号土坑

1. 暗褐色土層 黒色土とロームブロックの混合土。



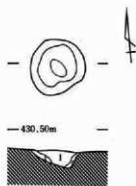
15号土坑

1. 暗褐色土層 非常に固く締り粘性が少しある。ローム粒子含む。
2. 黄褐色土層 ロームブロック主体の層。わずかに黒色土を含む。



16号土坑

1. 暗褐色土層 固く締り粘性ある。ローム粒子を含む。
2. 黄褐色土層 やや固く締り粘性がある。ロームブロック多量含む。



17号土坑

1. 黒色土層 固く締り粘性が少しある。ローム粒子を少量含む。
2. 黄褐色土層 やや固く締り悪い。ロームブロック主体の層。



第17図 13～17号土坑実測図

### 第3節 土坑・陥し穴・グリッド出土遺物

覆土は5層に分かれた。第1層・黒褐色土、第2層・暗褐色土、第3層・黄褐色土、第4層・暗褐色土、第5層・暗褐色土である。

覆土からは遺物の出土はなかったが、形態や覆土の層相から判断すると、当土坑も縄文時代の貯蔵穴になるものと思われる。

#### 5号土坑 遺構写真図版11

I-83・84グリッドにかけてローム層直上で検出された。6号土坑の西約6mのところに位置する。上面は134×134cm、底面は116×112cm、深さ8～13cmのほぼ円形を呈する。底面は平坦であり、面積約1.01m<sup>2</sup>である。覆土は2層に分かれた。第1層・茶褐色土、第2層・黒褐色土である。

覆土からは遺物の出土はなかった。当土坑の構築時期は不明である。

#### 6号土坑 遺構写真図版11

I-84グリッドにおいてローム層直上で検出された。5号土坑の東約6mのところに位置する。上面は、121×116cm、底面は108×106cm、深さ4～11cmのほぼ円形を呈する。底面積約0.84m<sup>2</sup>であり、北壁に接して小ピットが認められる。ピットの規模は上面40×37cm、底面29×27cm、深さ16cmである。覆土は2層に分かれた。第1層・黒褐色土、第2層・茶褐色土である。

覆土からは遺物の出土はなかった。当土坑の構築時期は不明である。

#### 7号土坑 遺構写真図版11

H-84グリッドにおいてローム層直上で検出された。6号土坑の北約3mのところに位置する。上面は、133×131cm、底面は108×99cm、深さ23～26cmのほぼ円形を呈する。底面は平坦であり、面積約0.88m<sup>2</sup>である。覆土は3層に分かれた。第1層・暗褐色土、第2層・黒褐色土、第3層・黒褐色土である。

覆土からは遺物の出土はなかった。当土坑の構築時期は不明である。

#### 8号土坑 遺構写真図版11

G・H-84グリッドにかけてローム層直上で検出された。7号土坑の北東約4mのところに位置する。上面は134×132cm、底面は114×108cm、深さ20～24cmのほぼ円形を呈する。底面は平坦であり、面積約0.97m<sup>2</sup>である。覆土は2層に分かれた。第1層・暗褐色土、第2層・黒色土である。

覆土からは遺物の出土はなかった。当土坑の構築時期は不明である。

#### 9号土坑 遺構写真図版11

H-92・93グリッドにかけてローム層直上で検出された。20号陥し穴の北約9mのところに位置する。上面は120×116cm、底面は108×95cm、深さ8～12cmのほぼ円形を呈する。底面積約0.82m<sup>2</sup>であり、中央に小ピットが認められる。ピットの規模は、上面51×49cm、底面33×28cm、深さ22cmである。覆土は3層に分かれた。第1層・黒褐色土、第2層・黄褐色土、第3層・暗褐色土である。

覆土からは遺物の出土はなかった。当土坑の構築時期は不明である。

#### 10号土坑 遺構写真図版11

I-99・100グリッドにかけてローム層直上で検出された。19号陥し穴の東約6.5mのところに位置する。上面は163×147cm、底面は118×47cm、深さ81cmの楕円形を呈する。底面は平坦であり、面積約0.46m<sup>2</sup>である。覆土は4層に分かれた。第1層・黒褐色土、第2層・暗褐色土、第3層・暗褐色土、第4層・黄褐色土である。

覆土からは遺物の出土はなかった。当土坑の構築時期は不明である。

#### 第4章 検出された遺構と遺物

##### 11号土坑

G-100グリッドにおいてローム層直上で検出された。12号土坑の北西約5.5mのところに位置する。当土坑は路縁外に延びているために完掘することはできなかった。現状での深さは30cmである。覆土は3層に分かれた。第1層・茶褐色土、第2層・暗褐色土、第3層・黄褐色土である。

覆土からは遺物の出土はなかった。当土坑の構築時期は不明である。

##### 12号土坑 遺構写真図版11

G-100・101グリッドにかけてローム層直上で検出された。13号土坑の北西約2mのところに位置する。上面は205×100cm、底面は180×84cm、深さ14～19cmの長楕円形を呈する。底面は平坦であり、面積約1.26m<sup>2</sup>である。覆土は3層に分かれた。第1層・暗褐色土、第2層・茶褐色土、第3層・黄褐色土である。

覆土からは遺物の出土はなかった。当土坑の構築時期は不明である。

##### 13号土坑 遺構写真図版11

G-101グリッドにおいてローム層直上で検出された。12号土坑の南東約2mのところに位置する。上面は89×88cm、底面は77×70cm、深さ11～21cmのほぼ円形を呈する。底面はやや凹凸がみられ、面積約0.42m<sup>2</sup>である。覆土は3層に分かれた。第1層・暗褐色土、第2層・暗褐色土、第3層・黄褐色土である。

覆土からは遺物の出土はなかった。当土坑の構築時期は不明である。

##### 14号土坑

Q-119グリッドにおいてローム層直上で検出された。15号土坑の北西約4mのところに位置する。上面は62×56cm、底面は54×48cm、深さ4～7cmの楕円形を呈する。底面は平坦であり、面積約0.19m<sup>2</sup>である。覆土は第1層・暗褐色土である。

覆土からは遺物の出土はなかった。当土坑の構築時期は不明である。

##### 15号土坑

Q-121グリッドにおいてローム層直上で検出された。14号土坑の南東約4mのところに位置する。上面は103×67cm、底面は93×67cm、深さ6～27cmの不正形を呈する。底面は凹凸が激しく、面積約0.56m<sup>2</sup>である。

覆土は2層に分かれた。第1層・暗褐色土、第2層・黄褐色土である。

覆土からは遺物の出土はなかった。当土坑の構築時期は不明である。

##### 16号土坑

Q-120・121グリッドにかけてローム層直上から検出された。15号土坑の南約2.5mのところに位置する。上面は86×82cm、底面は57×52cm、深さ16～23cmのほぼ円形を呈する。底面は皿状であり、面積約0.21m<sup>2</sup>である。覆土は2層に分かれた。第1層・暗褐色土、第2層・黄褐色土である。

覆土からは遺物の出土はなかった。当土坑の構築時期は不明である。

##### 17号土坑

Q-121グリッドにおいてローム層直上で検出された。16号土坑の西約1.5mのところに位置する。上面は61×59cm、底面は44×41cm、深さ9～17cmのほぼ円形を呈する。底面は坂状平坦であり、面積約0.14m<sup>2</sup>である。覆土は2層に分かれた。第1層・黒色土層、第2層・黄褐色土層である。

覆土からは遺物の出土はなかった。当土坑の構築時期は不明である。

## 1号陥し穴 遺構写真図版6

J-78、K-78グリッドにかけてローム層直上で検出された。2号陥し穴の北西約3mのところに位置する。上面の規模は227×130cmの長楕円形、底面は201×30cmの中央で狭まる長楕円形を呈し、面積約0.88m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-1°-W。確認面からの深さは110cmであり、底面からビット7個を検出した。P<sub>1</sub>の深さ6cm、P<sub>2</sub>15cm、P<sub>2</sub>12cm、P<sub>4</sub>14cm、P<sub>5</sub>14cm、P<sub>6</sub>15cm、P<sub>7</sub>11cmをそれぞれ測る。覆土は5層に分かれた。第1層・黒褐色土、第2層・暗褐色土、第3層・黄褐色土、第4層・暗褐色土、第5層・黄褐色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。

## 2号陥し穴

J-78、K-78グリッドにかけてローム層直上で検出された。1号陥し穴の南東約3mのところに位置するが、完掘することはできなかった。現状での確認面からの深さは135cmである。覆土は9層に分かれた。第1層・黄褐色土、第2層・黒褐色土、第3層・暗褐色土、第4層・黄褐色土、第5層・暗褐色土、第6層・黄褐色土、第7層・黒褐色土、第8層・茶褐色土、第9層・暗褐色土であり、第1層は人為的埋土である。覆土からは遺物の出土はなかった。

## 3号陥し穴 遺構写真図版6

J-81グリッドにおいてローム層直上で検出された。4号陥し穴の北西約6.5mのところに位置する。上面の規模は272×94cmの中央で狭まる長楕円形、底面は247×47cmの中央で狭まる長楕円形を呈し、面積約1.53m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-14°-E。確認面からの深さは125cmであり、底面からビット3個を検出した。P<sub>1</sub>の深さ27cm、P<sub>2</sub>21cm、P<sub>3</sub>27cmをそれぞれ測る。覆土は8層に分かれた。第1層・黒褐色土、第2層・暗褐色土、第3層・暗褐色土、第4層・黄褐色土、第5層・暗褐色土、第6層・暗褐色土、第7層・黄褐色土、第8層・暗褐色土である。覆土からは焼礫1点が出土している。

## 4号陥し穴 遺構写真図版6

J-82、K-82グリッドにかけてローム層直上で検出された。3号陥し穴の南東約6.5mのところに位置する。上面の規模は282×100cmの中央で狭まる長楕円形、底面は240×20cmの中央で狭まる長楕円形を呈し、面積約0.99m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-41°-E。確認面からの深さは110cmであり、底面からビット3個を検出した。P<sub>1</sub>の深さ22cm、P<sub>2</sub>24cm、P<sub>3</sub>25cmをそれぞれ測る。覆土は8層に分かれた。第1層・黒褐色土、第2層・暗褐色土、第3層・暗褐色土、第4層・暗褐色土、第5層・黄褐色土、第6層・黄褐色土、第7層・暗褐色土、第8層・黄褐色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。

## 5号陥し穴 遺構写真図版6

H-83グリッドにおいてローム層直上で検出された。4号陥し穴の北東約12mのところに位置する。上面の規模は256×140cmの長楕円形、底面は200×24cmの中央で狭まる長楕円形を呈し、面積約0.82m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-44°-E。確認面からの深さは95cmであり、底面からビット5個を検出した。P<sub>1</sub>の深さ30cm、P<sub>2</sub>28cm、P<sub>3</sub>35cm、P<sub>4</sub>27cm、P<sub>5</sub>33cmをそれぞれ測る。覆土は8層に分かれた。第1層・黒褐色土、第2層・暗褐色土、第3層・黄褐色土、第4層・黄褐色土、第5層・暗褐色土、第6層・暗褐色土、第7層・黄褐色土、第8層・暗褐色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。

#### 第4章 検出された遺構と遺物

##### 6号陥し穴 遺構写真図版7

K-84グリッドにおいてローム層直上で検出された。4号陥し穴の南東約9.5mのところに位置するが、遺構が路線外に延びるために完掘することはできなかった。現状での上面規模は160×108cm、底面は137×34cmの中央で狭まる長楕円形を呈するものと思われる。面積約0.50m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-26°E。確認面からの深さは135cmであり、底面からビット2個を検出した。P<sub>1</sub>の深さ34cm、P<sub>2</sub>の深さ27cmである。覆土は8層に分かれた。第1層・黒褐色土、第2層・暗褐色土、第3層・黄褐色土、第4層・暗褐色土、第5層・黄褐色土、第6層・暗褐色土、第7層・黄褐色土、第8層・暗褐色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。

##### 7号陥し穴 遺構写真図版7

J-86グリッドにおいてローム層直上で検出された。8号陥し穴の北西約3.5mのところに位置する。上面の規模は298×108cmの中央で狭まる長楕円形、底面は273×34cmの中央で狭まる長楕円形を呈し、面積約1.44m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-38°E。確認面からの深さは110cmであり、底面からビット5個を検出した。P<sub>1</sub>の深さ30cm、P<sub>2</sub>28cm、P<sub>3</sub>35cm、P<sub>4</sub>27cm、P<sub>5</sub>33cmをそれぞれ測る。覆土は8層に分かれた。第1層・茶褐色土（人為的埋土）、第2層・黒褐色土、第3層・暗褐色土、第4層・黄褐色土、第5層・暗褐色土、第6層・黄褐色土、第7層・黒褐色土、第8層・暗褐色土である。当陥し穴では覆土最上層に堀め戻しが行われている。覆土からは遺物の出土はなかった。

##### 8号陥し穴 遺構写真図版7

J-86・87グリッドにかけてローム層直上で検出された。7号陥し穴の南東約3.5mのところに位置する。上面の規模は291×123cmの長楕円形、底面は239×56cmの中央で狭まる長楕円形を呈し、面積約1.55m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-20°E。確認面からの深さは102cmであり、底面からビット4個を検出した。P<sub>1</sub>の深さ25cm、P<sub>2</sub>30cm、P<sub>3</sub>30cm、P<sub>4</sub>13cmをそれぞれ測る。覆土は5層に分かれた。第1層・黒褐色土、第2層・暗褐色土、第3層・黒褐色土、第4層・黄褐色土、第5層・暗褐色土である。覆土から遺物の出土はなかった。

##### 9号陥し穴 遺構写真図版7

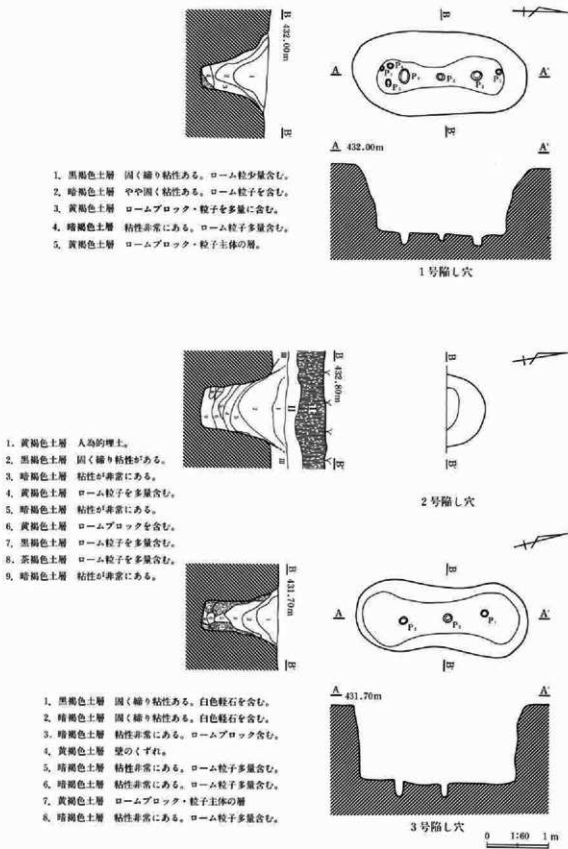
I-88・J-88グリッドにかけてローム層直上で検出された。8号陥し穴の東7.5mのところに位置する。上面の規模は290×135cmの長楕円形、底面は232×33cmの中央で狭まる長楕円形を呈し、面積約0.98m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-13°E。確認面からの深さは95cmであり、底面からビット5個を検出した。P<sub>1</sub>の深さ21cm、P<sub>2</sub>20cm、P<sub>3</sub>15cm、P<sub>4</sub>23cm、P<sub>5</sub>21cmをそれぞれ測る。覆土は10層に分かれた。第1層・黄褐色土（人為的埋土）、第2層・黒褐色土、第3層・暗褐色土、第4層・黄褐色土、第5層・暗褐色土、第6層・茶褐色土、第7層・黄褐色土、第8層・黒褐色土、第9層・黄褐色土、第10層・黒褐色土である。当陥し穴は7号陥し穴と同様に覆土最上層に堀め戻しが行われている。覆土からは焼燼1点が出土している。

##### 10号陥し穴 遺構写真図版8

J-89、K-89グリッドにかけてローム層直上で検出された。9号土坑の南約7mのところに位置する。上面の規模は293×98cmの中央で狭まる長楕円形、底面は245×40cmの中央で狭まる長楕円形を呈し、面積約1.21m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-30°E。確認面からの深さは113cmであり、底面からビット4個を検出した。P<sub>1</sub>の深さ29cm、P<sub>2</sub>21cm、P<sub>3</sub>24cm、P<sub>4</sub>24cmをそれぞれ測る。覆土は6層に分かれた。第1層・黒褐色土、第2層・暗褐色土、第3層・黄褐色土、第4層・黒褐色土、第5層・黄褐色土、第6層・暗褐色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。

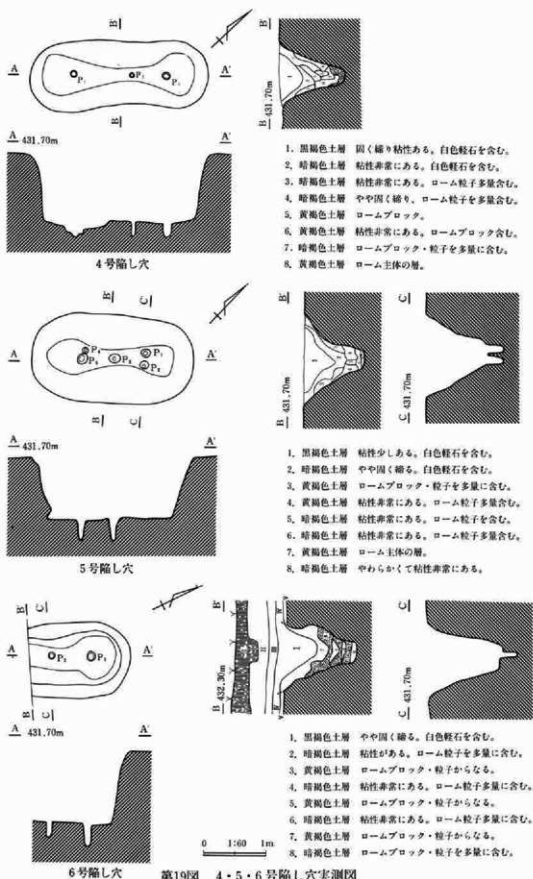


第3節 土坑・陥し穴・グリッド出土遺物

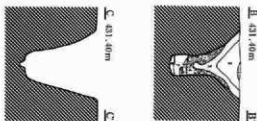


第18図 1・2・3号陥し穴実測図

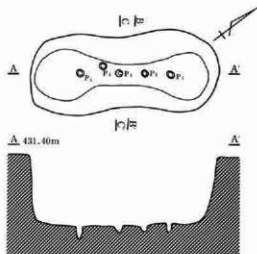
第4章 検出された遺構と遺物



第3節 土坑・陥し穴・グリッド出土遺物



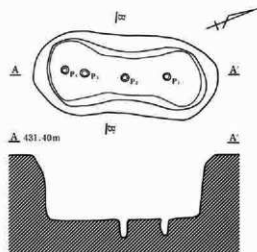
1. 茶褐色土層 人為的埋土。
2. 黒褐色土層 粘性がある。白色軽石を含む。
3. 暗褐色土層 粘性非常にある。ローム粒子多量含。
4. 黄褐色土層 ローム主体の層。わずかに黒色土含。
5. 暗褐色土層 ロームと黒色土の混合土。
6. 黄褐色土層 ローム主体の層。
7. 黒褐色土層 粘性非常にある。ローム粒子を含む。
8. 暗褐色土層 粘性非常にある。ローム粒子多量含。



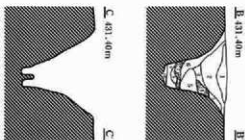
7号陥し穴



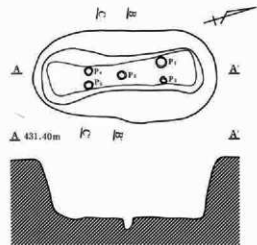
1. 黒褐色土層 固く締り粘性ある。白色軽石を含む。
2. 暗褐色土層 粘性ある。ロームブロックを含む。
3. 黒褐色土層 粘性非常にある。ローム粒子を含。
4. 黄褐色土層 ローム主体の層。わずかに黒色土含。
5. 暗褐色土層 粘性非常にある。ローム粒子多量含。



8号陥し穴



1. 黄褐色土層 人為的埋土。
2. 黒褐色土層 粘性ある。白色軽石を含む。
3. 暗褐色土層 ローム粒子。白色軽石を含む。
4. 黄褐色土層 ロームブロック・粒子からなる。
5. 暗褐色土層 固く締り粘性ある。ローム粒少量含。
6. 茶褐色土層 やわらかい。ローム粒子を多量に含。
7. 黄褐色土層 ローム主体の層。わずかに黒色土含。
8. 黒褐色土層 粘性非常にある。ローム粒子多量含。
9. 黄褐色土層 粘性非常にある。ローム粒子多量含。
10. 黒褐色土層 固く締る。ローム粒子を多量に含む。

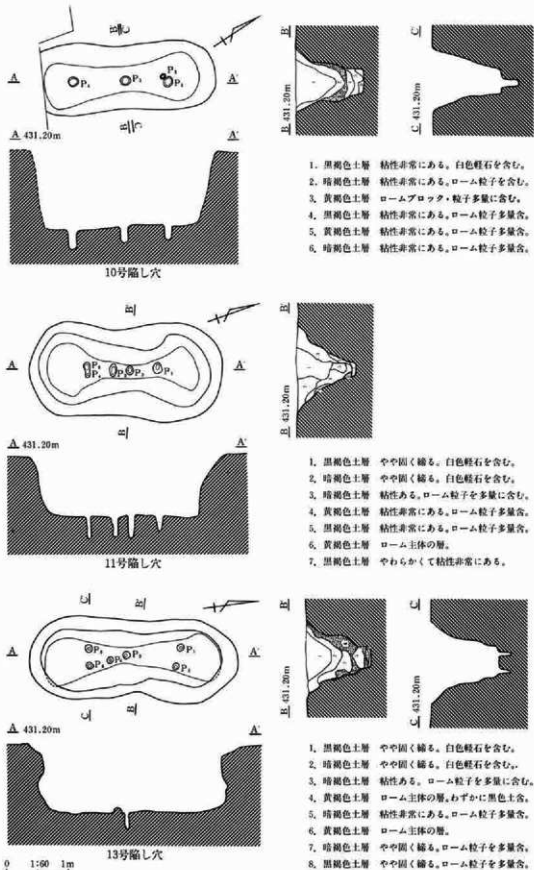


9号陥し穴

0 1:60 1m

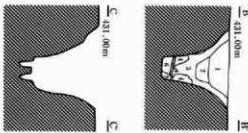
第20図 7・8・9号陥し穴実測図

第4章 検出された遺構と遺物

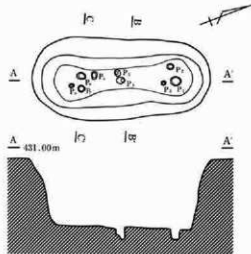


第21図 10・11・13号陥し穴実測図

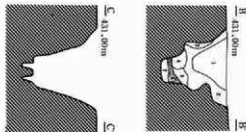
第3節 土坑・陥し穴・グリッド出土遺物



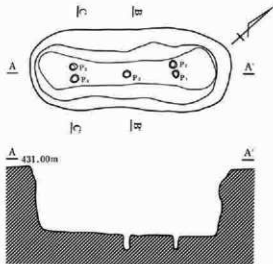
1. 黒褐色土層 やや固く締る。白色軽石を多量に含。
2. 黒褐色土層 粘性非常にある。ローム粒子を含む。
3. 暗褐色土層 粘性非常にある。ローム粒子多量含。
4. 黄褐色土層 粘性非常にある。ローム粒子を含む。
5. 黄褐色土層 ローム主体の層。
6. 黒褐色土層 粘性非常にある。ローム粒子多量含。
7. 暗褐色土層 粘性非常にある。ローム粒子を含む。



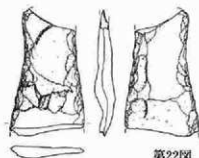
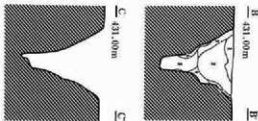
20号陥し穴



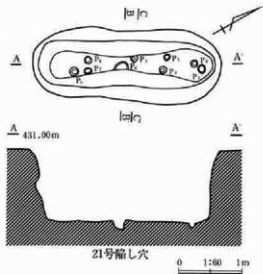
1. 黒褐色土層 やや固く締る。白色軽石を多量に含。
2. 暗褐色土層 やや固く締る。ローム粒子を含む。
3. 黄褐色土層 ロームブロック・粒子を多量に含む。
4. 黒褐色土層 粘性非常にある。ローム粒子を含む。
5. 暗褐色土層 ロームブロック・粒子を含む。
6. 黄褐色土層 ロームブロック・粒子からなる。
7. 黒褐色土層 粘性非常にある。ローム粒子を含む。



14号陥し穴

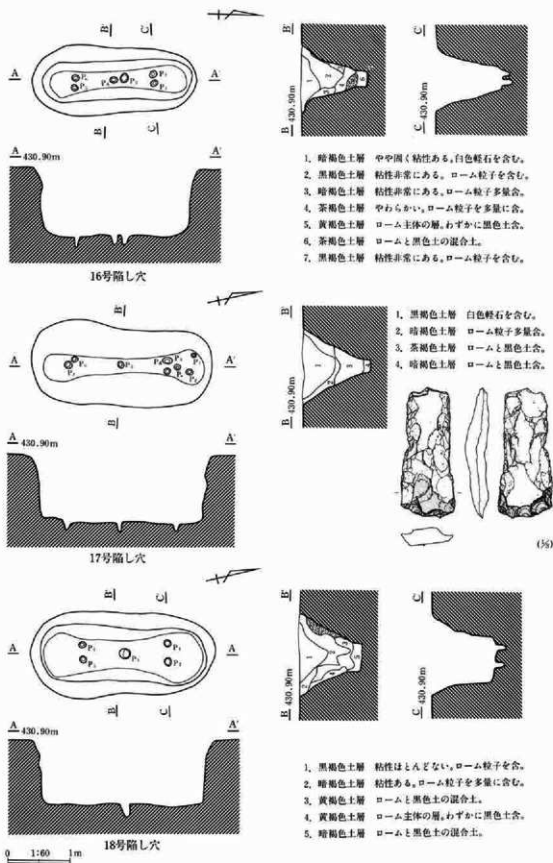


(36) 第22図 20・14・21号陥し穴実測図



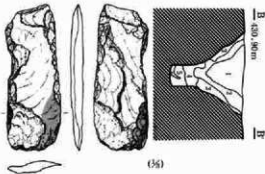
21号陥し穴

第4章 検出された遺構と遺物



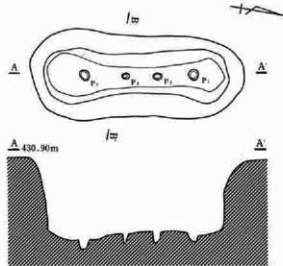
第23図 16・17・18号陥し穴実測図

第3節 土坑・陥し穴・グリッド出土遺物

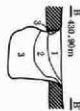


(56)

1. 黒褐色土層 やや固く締る。ローム粒子を含む。
2. 暗褐色土層 やや固く締る。ローム粒子を多量含。
3. 黄褐色土層 粘性非常にある。ローム粒子多量含。
4. 黄褐色土層 ロームと黒色土の混合土。
5. 黄褐色土層 ロームと黒色土の混合土。
6. 暗褐色土層 粘性非常にある。ローム粒子多量含。

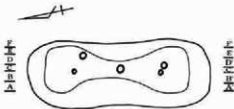


19号陥し穴



22号陥し穴

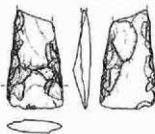
1. 黒色土層 固く締り粘性非常にある。
2. 黒色土層 固く締る。ローム粒子を多量に含む。
3. 茶褐色土層 やや固い。ローム粒子を多量に含む。



12号陥し穴



15号陥し穴



(56)

第24図 19・22・12・15号陥し穴実測図

0 1:60 1m

#### 第4章 検出された遺構と遺物

##### 11号陥し穴 遺構写真図版8

G-90、H-90グリッドにかけてローム層直上で検出された。12号陥し穴の北約14mのところの位置する。上面の規模は307×134cmの中央で狹まる長楕円形、底面は240×20cmの中央で狹まる長楕円形を呈し、面積約1.09m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-18°E。確認面からの深さは97cmであり、底面からピット5個を検出したが、P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>は作りかえが行われたものである。P<sub>1</sub>の深さ25cm、P<sub>2</sub>36cm、P<sub>3</sub>30cm、P<sub>4</sub>33cm、P<sub>5</sub>35cmをそれぞれ測る。覆土は7層に分かれた。第1層・黒褐色土、第2層・暗褐色土、第3層・暗褐色土、第4層・黄褐色土、第5層・黒褐色土、第6層・黄褐色土、第7層・黒褐色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。

##### 13号陥し穴 遺構写真図版8

J-91・92グリッドにかけてローム層直上で検出された。12号陥し穴の東約5mのところの位置する。上面の規模は330×110cmの中央で狹まる長楕円形、底面は276×32cmの中央で狹まる長楕円形を呈し、面積約1.39m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-4°E。確認面からの深さは110cmであり、底面からピット6個を検出した。P<sub>1</sub>の深さ16cm、P<sub>2</sub>20cm、P<sub>3</sub>16cm、P<sub>4</sub>23cm、P<sub>5</sub>28cm、P<sub>6</sub>14cmをそれぞれ測る。覆土は8層に分かれた。第1層・黒褐色土、第2層・暗褐色土、第3層・暗褐色土、第4層・黄褐色土、第5層・暗褐色土、第6層・黄褐色土、第7層・暗褐色土、第8層・黒褐色土である。覆土からは縄文時代早期の燃余文土器片1点、剥片1点が出土している。

##### 20号陥し穴 遺構写真図版9

I-93、J-93グリッドにかけてローム層直上で検出された。14号陥し穴の北約5mのところの位置する。上面の規模は285×125cmの長楕円形、底面は220×33cmの中央で狹まる長楕円形を呈し、面積約0.95m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-18°E。確認面からの深さは107cmであり、底面からピット9個を検出した。P<sub>1</sub>の深さ17cm、P<sub>2</sub>8cm、P<sub>3</sub>20cm、P<sub>4</sub>19cm、P<sub>5</sub>14cm、P<sub>6</sub>4cm、P<sub>7</sub>20cm、P<sub>8</sub>22cm、P<sub>9</sub>9cmをそれぞれ測る。覆土は7層に分かれた。第1層・黒褐色土、第2層・黒褐色土、第3層・暗褐色土、第4層・黄褐色土、第5層・黄褐色土、第6層・黒褐色土、第7層・暗褐色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。

##### 14号陥し穴 遺構写真図版10

J-93・94グリッドにかけてローム層直上で検出された。20号陥し穴の南約5mのところの位置する。上面の規模は317×124cmの長楕円形、底面は228×34cmの中央で狹まる長楕円形を呈し、面積約1.26m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-42°E。確認面からの深さは104cmであり、底面からピット5個を検出した。P<sub>1</sub>の深さ20cm、P<sub>2</sub>21cm、P<sub>3</sub>22cm、P<sub>4</sub>16cm、P<sub>5</sub>18cmをそれぞれ測る。覆土は7層に分かれた。第1層・黒褐色土、第2層・暗褐色土、第3層・黄褐色土、第4層・黒褐色土、第5層・暗褐色土、第6層・黄褐色土、第7層・黒褐色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。

##### 21号陥し穴 遺構写真図版10 遺構写真図版5

I-95、J-95グリッドにかけてローム層直上で検出された。16号陥し穴の南西約5mのところの位置する。上面の規模は303×110cmの長楕円形、底面は260×20cmの中央で狹まる長楕円形を呈し、面積約0.84m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-27°E。確認面からの深さは113cmであり、底面からピット9個を検出した。P<sub>1</sub>の深さ8cm、P<sub>2</sub>7cm、P<sub>3</sub>8cm、P<sub>4</sub>12cm、P<sub>5</sub>12cm、P<sub>6</sub>15cm、P<sub>7</sub>12cm、P<sub>8</sub>15cm、P<sub>9</sub>10cmをそれぞれ測る。覆土は5層に分かれた。第1層・暗褐色土、第2層・黒褐色土、第3層・暗褐色土、第4層・黄褐色土、第5層・暗褐色土であり、第5層は人為的埋土である。覆土からは打製石斧1点が出土している。

##### 16号陥し穴 遺構写真図版8

H-96、I-96グリッドにかけてローム層直上で検出された。21号陥し穴の北東約5.5mのところの位置す



る。上面の規模は260×100cmの長楕円形、底面は215×25cmの中央で狭まる長楕円形を呈し、面積約0.69m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-2°W。確認面からの深さは108cmであり、底面からビット6個を検出した。P<sub>1</sub>の深さ16cm、P<sub>2</sub>10cm、P<sub>3</sub>16cm、P<sub>4</sub>15cm、P<sub>5</sub>14cm、P<sub>6</sub>16cmをそれぞれ測る。覆土は7層に分かれた。第1層・暗褐色土、第2層・黒褐色土、第3層・暗褐色土、第4層・茶褐色土、第5層・黄褐色土、第6層・茶褐色土、第7層・黒褐色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。

#### 17号陥し穴 遺構写真図版9 遺構写真図版5

I-97グリッドにおいてローム層直上で検出された。18号陥し穴の北約4mのところに位置する。上面の規模は286×120cmの中央でやや狭まる長楕円形、底面は254×22cmの中央で狭まる長楕円形を呈し、面積約0.89m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-11°E。確認面からの深さは107cmであり、底面からビット8個を検出した。P<sub>1</sub>の深さ8cm、P<sub>2</sub>15cm、P<sub>3</sub>12cm、P<sub>4</sub>11cm、P<sub>5</sub>13cm、P<sub>6</sub>18cm、P<sub>7</sub>9cm、P<sub>8</sub>15cmをそれぞれ測る。覆土は4層に分かれた。第1層・黒褐色土、第2層・暗褐色土、第3層・茶褐色土、第4層・暗褐色土であり、第3・4層は人為的埋土である。覆土からは打製石斧1点、剥片2点が出土している。

#### 18号陥し穴 遺構写真図版9

I-97・98、J-97・98グリッドにかけてローム層直上で検出された。17号陥し穴の南約4mのところに位置する。上面の規模は292×130cmの長楕円形、底面は250×43cmの中央で狭まる長楕円形を呈し、面積約1.41m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-13°E。確認面からの深さは100cmであり、底面からビット5個を検出した。P<sub>1</sub>の深さ17cm、P<sub>2</sub>15cm、P<sub>3</sub>19cm、P<sub>4</sub>18cm、P<sub>5</sub>20cmをそれぞれ測る。覆土は5層に分かれた。第1層・黒褐色土、第2層・暗褐色土、第3層・黄褐色土、第4層・黄褐色土、第5層・暗褐色土であり、第3・5層は人為的埋土である。覆土からは遺物の出土はなかった。

#### 19号陥し穴 遺構写真図版9 遺構写真図版5

I-98グリッドにおいてローム層直上で検出された。18号陥し穴の東約4mのところに位置する。上面の規模は342×128cmの長楕円形、底面は280×28cmの中央で狭まる長楕円形を呈し、面積約1.18m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-10°W。確認面からの深さは132cmであり、底面からビット4個を検出した。P<sub>1</sub>の深さ12cm、P<sub>2</sub>17cm、P<sub>3</sub>14cm、P<sub>4</sub>16cmをそれぞれ測る。覆土は6層に分かれた。第1層・黒褐色土、第2層・暗褐色土、第3層・黄褐色土、第4層・黄褐色土、第5層・黄褐色土、第6層・暗褐色土であり、第5・6層は人為的埋土の可能性がたかい。覆土からは打製石斧1点が出土している。

#### 22号陥し穴 遺構写真図版10

O-120・121グリッドにかけてローム層直上で検出された。上面の規模は188×100cmの中央でやや狭まる楕円形、底面は160×67cmの中央でやや狭まる楕円形を呈し、面積約1.02m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-1°E。確認面からの深さは67cmであり、底面からビット2個を検出した。P<sub>1</sub>の深さ18cm、P<sub>2</sub>の深さ15cmである。覆土は3層に分かれた。第1層・黒色土、第2層・黒色土、第3層・茶褐色土である。覆土からは縄文土器細片1点、剥片1点が出土している。当陥し穴は大原遺跡1号～21号陥し穴と同一群を構成するものではなく、単独で存在するものと思われる。その構築時期が異なるものであろうか。

#### 12号陥し穴 遺構写真図版5

J-90・91グリッドにかけてローム層直上で検出された。13号陥し穴の西約5mのところに位置する。上面の規模は292×98cmの中央でやや狭まる長楕円形、底面は230×26cmの中央で狭まる長楕円形を呈し、面積約1.21m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-12°E。確認面からの深さは100cmであり、底面からビット5個を検出した。なお、当陥し穴は縦スライス調査を実施した。

#### 第4章 検出された遺構と遺物

##### 15号陥し穴

H-94グリッドにおいてローム層直上で検出された。21号陥し穴の北約9mのところの位置する。上面の規模は230×76cmの中央で狭まる長楕円形、底面は184×44cmの中央で狭まる長楕円形を呈し、面積約1.03m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-1'-W。確認面からの深さは97cmであり、底面からビット5個を検出した。なお、当該陥し穴も12号陥し穴と同様に縦スライス調査を実施した。

#### 大原Ⅱ遺跡検出の土坑・陥し穴一覧表

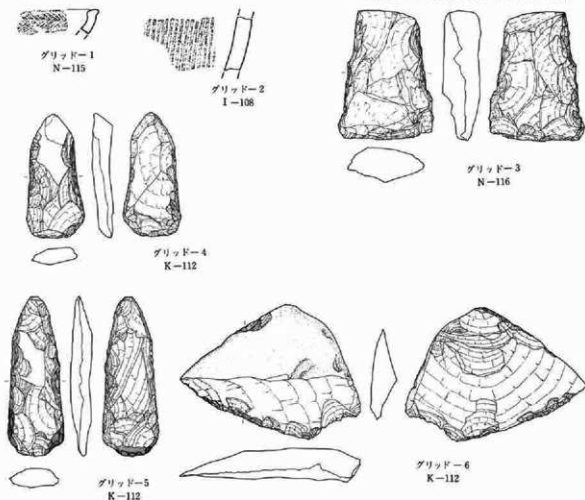
##### (1) 縄文時代の土坑と時期不明の土坑

No.	グリッド	上面(cm) (長径×短径)	底面(cm) (長径×短径)	上面 長径/短径	底面積(m <sup>2</sup> )	底面 長径/短径	深さ(cm)	備考
1	I-82	(122×116)	(76×66)	1.05	0.4	1.15	88-94	縄文時代の貯蔵穴
2	H-88	(102×98)	(88×76)	1.04	0.48	1.16	58-64	*
3	H-85	(140×116)	(92×84)	1.21	0.64	1.1	44	*
4	I-89	(102×98)	(90×88)	1.04	0.58	1.02	50-54	*
5	I-83, I-84	(134×134)	(116×112)	1.0	1.01	1.04	8-13	時期不明の土坑
6	I-84	(121×116)	(108×106)	1.04	0.84	1.02	4-11	*
7	H-84	(133×131)	(108×99)	1.02	0.88	1.1	23-26	*
8	G-84, H-84	(134×132)	(114×108)	1.02	0.97	1.06	20-24	*
9	H-92, H-93	(120×116)	(108×95)	1.03	0.82	1.14	8-12	*
10	I-99, I-100	(163×147)	(118×47)	1.11	0.46	2.51	81	*
11	G-100	—	—	—	—	—	30	完備できなかった
12	G-100, G-101	(205×100)	(180×84)	2.05	1.26	2.14	14-19	時期不明の土坑
13	G-101	(98×88)	(77×70)	1.11	0.42	1.1	11-21	*
14	Q-119	(62×56)	(54×48)	1.11	0.19	1.13	4-7	*
15	Q-121	(103×87)	(93×67)	1.54	0.56	1.39	6-27	*
16	Q-120, Q-121	(86×82)	(57×52)	1.05	0.21	1.1	16-23	*
17	Q-121	(61×59)	(44×41)	1.03	0.14	1.07	9-17	*

##### (2) 縄文時代の陥し穴

No.	グリッド	上面(cm) (長径×短径)	底面(cm) (長径×短径)	上面 長径/短径	底面積 (m <sup>2</sup> )	底面 長径/短径	深さ (cm)	主軸方向	ビット 数	出土遺物
1	J-78, K-78	(227×130)	(201×30)	1.75	0.88	6.7	110	N-1'-W	7	—
2	J-78, K-78	—	—	—	—	—	135	—	—	—
3	J-81	(272×94)	(247×47)	2.89	1.53	5.26	125	N-14'-E	3	焼燻1点
4	J-82, K-82	(282×100)	(240×20)	2.82	0.99	12.0	110	N-41'-E	3	—
5	H-83	(256×140)	(200×24)	1.83	0.82	8.33	95	N-44'-E	5	—
6	K-84	(160×108)	(137×34)	1.48	0.59	4.03	135	N-26'-E	(2)	—
7	J-86	(298×108)	(273×34)	2.76	1.44	8.03	110	N-38'-E	5	—
8	J-86, J-87	(291×123)	(239×56)	2.37	1.55	4.27	102	N-20'-E	4	—
9	I-88, J-88	(290×135)	(232×33)	2.15	0.98	7.03	95	N-13'-E	5	焼燻1点
10	J-89, K-89	(293×98)	(245×40)	2.99	1.21	6.13	113	N-30'-E	4	—
11	G-90, H-90	(307×134)	(240×20)	2.29	1.09	12.0	97	N-18'-E	5	—
13	J-91, J-92	(330×110)	(276×32)	3.0	1.39	8.63	110	N-4'-E	6	土器片1点 銅片1点
20	I-93, J-93	(285×125)	(220×33)	11.4	0.95	6.67	107	N-18'-E	9	—
14	J-93, J-94	(317×124)	(228×34)	2.56	1.26	6.71	104	N-42'-E	5	—
21	I-95, J-95	(303×110)	(260×20)	2.75	0.84	13.0	113	N-27'-E	9	打製石片1点
16	H-96, I-96	(260×100)	(215×25)	2.6	0.69	8.6	108	N-2'-W	6	—
17	I-97	(286×120)	(264×22)	2.38	0.89	11.55	107	N-11'-E	8	打製石片1点 銅片2点
18	I-97-98, J-97-98	(292×130)	(250×43)	2.25	1.41	5.81	100	N-13'-E	5	—
19	I-98	(342×128)	(280×28)	2.67	1.18	10.0	132	N-10'-E	4	打製石片1点
22	O-120, O-121	(188×100)	(160×67)	1.88	1.02	2.39	67	N-1'-E	2	縄文土器1点 銅片1点
12	J-90, J-91	(292×98)	(220×26)	2.98	1.21	8.84	100	N-12'-E	5	打製石片1点
15	H-94	(230×76)	(184×44)	3.02	1.03	4.18	97	N-1'-W	5	—

第3節 土坑・陥し穴・グリッド出土遺物

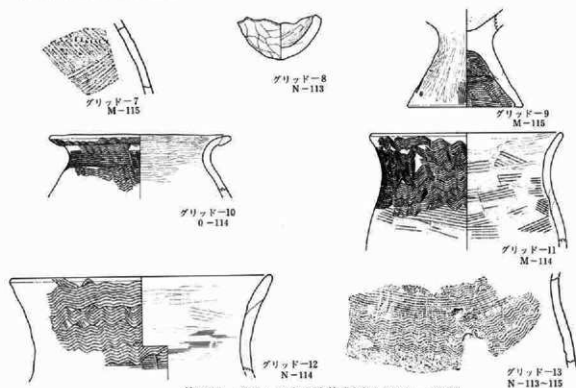


第25図 グリッド出土遺物実測図(縄文)

グリッド 出土遺物観察表 (図版番号第25図 写真図版5)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④出土⑤備考
大原Ⅱ グリッド-1	深鉢 縄文	— — — N-115	深鉢形土器の口縁部片で口唇部はやや平坦。器厚6mm。内面は丁寧な調整。外面には矢羽根状の集合沈線	①外面暗赤褐色・内面暗赤褐色②良③口縁部片④石英を含む⑤磁織C式
大原Ⅱ グリッド-2	深鉢 縄文	— — — I-108	深鉢形土器の胴部片。器厚1cm。内面は横・縦ミガキが行われている。外面には燃焼し施文。	①外面淡黄色・内面黄灰色②良③胴部片④石英・粗砂を含む⑤磁織利E式
大原Ⅱ グリッド-3	石器	縦-10.3 横-7.7 重量-270g N-116	打製石斧(楕円形)。両側縁がやや内側に彎曲している。	③基部欠⑤黒色頁岩
大原Ⅱ グリッド-4	石器	縦-8.9 横-4.6 重量-90g K-112	打製石斧(短筒形)。基部付近を部分的に細くしている。	③完形⑤黒色頁岩
大原Ⅱ グリッド-5	石器	縦-12.7 横-4.4 重量-110g K-112	打製石斧(短筒形)。基部付近を部分的に細くしている。	③完形⑤黒色頁岩
大原Ⅱ グリッド-6	石器	縦-14.0 横-10.7 重量-320g K-112	両面調整スクレイパー。厚手の剥片に粗い調整刻線を施し、刃部を作り出している。	④完形⑤黒色頁岩

第4章 検出された遺構と遺物



第26図 グリッド出土遺物実測図(弥生・古墳)

グリッド出土遺物観察表 (図版番号第26図 写真図版5)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、底形、調整、文様等の特色	①色調 ②地肌 ③残存 ④胎土 ⑤備考
大原Ⅱ グリッド-7	甕	— — — M-115	内面は縦方向に器面を整彩している。外面は櫛状工具により羽状に文様を配した後に棒状工具により羽状文を横方向に施文している。	①橙色 ②僅かに荒れている ③胴部の破片である ④白色胎物、石英を包含する
大原Ⅱ グリッド-8	手捏	3.5 6.7 — N-113	手捏の土器であり器面は凸凹がある。部分的に指頭痕がみられる。形状は底部が尖った状態であり、口縁部は凹凸がある。内面は磨きを行っている。	①橙色 ②良好 ③完形 ④白色胎物、石英、小礫を包含している
大原Ⅱ グリッド-9	白付甕	— — 9.1 M-115	白付甕の脚部は甕との接合部分からはほぼ直線的に胴部に向いひろがる。裾部は内側に捲れる。外面は縦方向に磨きを行っている。内面は横方向に籠状工具による器面調整痕が残る。	①明赤褐色 ②堅く焼きしまりひろがる。裾部の内面は僅かに荒れている ③胴部から口縁部にかけての破片 ④胎土と甕の底部 ⑤白色胎物を包含する
大原Ⅱ グリッド-10	白付甕	— (14.3) — O-114	折り返し口縁を有す。口縁部は大きく外反する。頸部は2連止めの籠状文を右まわりに施文した後、口縁部と胴部に櫛編波状文を施文している。	①褐色 ②堅く焼きしまっている ③胴部から口縁部にかけての破片 ④白色胎子包含
大原Ⅱ グリッド-11	甕	— (15.6) — M-114	口縁部は僅かに外反する。内外面とも縦方向に器面調整を行っている。櫛編波状文が胴部から口縁部に向い順次施文している。波状文は乱れている。	①にぶい褐色 ②堅く焼きしまる ③胴部から口縁部 ④白色胎物、小礫を包含する
大原Ⅱ グリッド-12	甕	— (20.6) — N-114	口縁部は僅かに外反する。内面は横方向に器面調整を行っている。外面は頸部に右まわりの籠状文を施文後、口縁部に4段の櫛編波状文を下位から上位へと順次施文している。	①にぶい褐色 ②ややあまい ③頸部から口縁部にかけての破片 ④小礫、石英を包含
大原Ⅱ グリッド-13	甕	— — — N-113, 114, 115	内面は横方向に器面調整を行っている。外面胴部は斜方向に調整を行っている。頸部は9条1單位の籠状文2連止を施文後、頸部と胴部に櫛編波状文を配している。	①黒褐色 ②堅く焼きしまる ③頸部から胴部付近の破片 ④白色胎物、石英を包含する

# 村 主 遺 跡



## 第5章 検出された遺構と遺物

### 第1節 遺構の概要 (第3図・付図1・図版1・12)

発掘調査した遺跡は、月夜野バイパスの路線内であり、国道291号線より北西方向約340mの範囲である。調査前は桑地や畑等で利用されており、遺構の検出は、試掘調査後表土を全面にわたり除去し行なった。その結果、縄文時代の陥し穴や奈良・平安時代の住居跡が多数検出された。それに伴ない縄文時代の石器や土器と、奈良・平安時代の土師器や須恵器、さらに灰軸陶器等が大量に検出された。特にその中で、奈良時代の住居跡の検出の多いことや、出土遺物中に多くの須恵器が含まれていること、また平安時代では従来ほとんど検出されていない土師質土器が数多く出土している等この遺跡の特色が明らかとなった。

#### 縄文時代

**遺構** 検出された遺構は、陥し穴16基と土坑1基である。陥し穴は調査区の各地区より検出されているが東側に特に多く、西側は2基のみの検出であった。

**遺物** 1号土坑より深鉢で変形土器の口縁部から胴上半にかけて $\frac{1}{4}$ ほど出土。陥し穴からは、13号陥し穴より礫が1点出土したのみであり、石器や土器片等の出土は認められなかった。遺構確認のできなかった部分より、少量の深鉢片や石器等が出土し、グリットで取り上げた。

#### 奈良時代

検出された遺構は、住居跡と土坑である。いずれも調査区の西側に集中しており、東側からはこの時期に相当すると思われる遺構は検出されていない。検出された住居跡は18軒であり、土坑は15号土坑のみが、この時期に属する可能性を持つ。また検出された住居跡は、古い段階に属する住居跡の規模が大きく、中央部に多く、新しい段階の住居跡になると住居跡の規模が小さくなり、周辺部に多く位置してくる傾向を示しており、注目される。

**遺物** 住居内より大量の土師器や須恵器が出土しており、特に須恵器杯・杯蓋の数が多く。それもこの集落の形成され始めた古い段階の住居内より多く出土している。それらは、環状つまみとカエリを持つ杯蓋や、削り出し高台を持つ杯等に見られるように、他県においては非常に少量しか検出されない群馬独特の特色を持つ製品であり、この製品の製作と村主遺跡との関係について注目される。また土師器の杯や甕も多く出土しており、それらの中に県内の平野地ではこの段階まで残存していない器内の厚い内黒磨きの杯や、器内の厚い甕等が多く出土しており、独自性を示している。

#### 平安時代

**遺構** 検出された遺構は、住居跡16軒であり、奈良時代の住居跡と同様に調査区の西側に集中していた。他に土坑等においてこの時期に属する可能性を持つものもあるが、確定できなかった。住居跡の中で3号住居跡においては、竈内に完形の羽釜が置かれたままの状態で見出され、従来羽釜の使用法について不明であったため、大きな成果をあげることができた。

**遺物** 住居内より、大量の土師質土器杯・壺や、須恵器杯・壺・羽釜等が多く出土している。羽釜はすべて月夜野型羽釜であり、古い段階より新しい段階まで出土している。また土釜も土師質土器や羽釜や灰軸陶器とともに出土している。

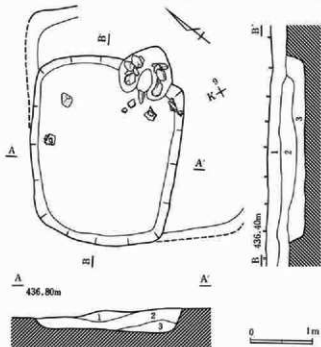
その他時代決定のできなかった掘立柱建物遺構や土坑・溝等も検出されている。各遺構やグリット内より出土した遺物については、第6章の中で一覧表を用いて、示してある。 (中沢 悟)

## 第2節 住居跡

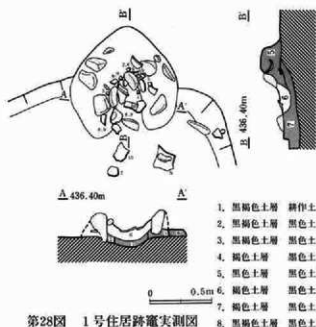
### 1号住居跡（平安時代） 遺構写真図版13 遺物写真図版56

位置 調査区最西端に位置しており、J・K-8グリットに属する。

概要 当住居跡は、奈良時代に属する2号住居跡覆土中に作られていた小さな平安時代の住居跡である。住居跡の西壁と南壁は前代の2号住居跡の壁と共通していたが、北壁・竈・東壁・床面はすべて2号住居跡覆土を掘り込んで覆土中に作られていた。覆土が共有共通しており、両住居跡の区別は困難であった。発掘当初は、遺構確認面での形や、出土遺物より見て、奈良時代の住居跡であろうと判断の



第27図 1号住居跡実測図



第28図 1号住居跡竈実測図

と掘り込んだ。やがて覆土中より竈が検出され始めたことや、出土遺物中に平安時代に属するものが認められるようになり、再検討した結果前述のごとく2軒が重複していたことが判明した。

構造 床面は軟質、床下構造や周溝は不明、柱穴や貯蔵穴はないと思われる。南壁や西壁はロームで固く他の壁は軟質。

規模 東西方向で2.4m、南北方向で2.9mで壁高は25cmである。

遺物 覆土中より10世紀代の羽釜や須恵器の坏、碗等が出土している。

#### 1号住居跡竈

位置 住居跡北壁東寄りに2号住居跡を掘り込んで竈が構築されていた。

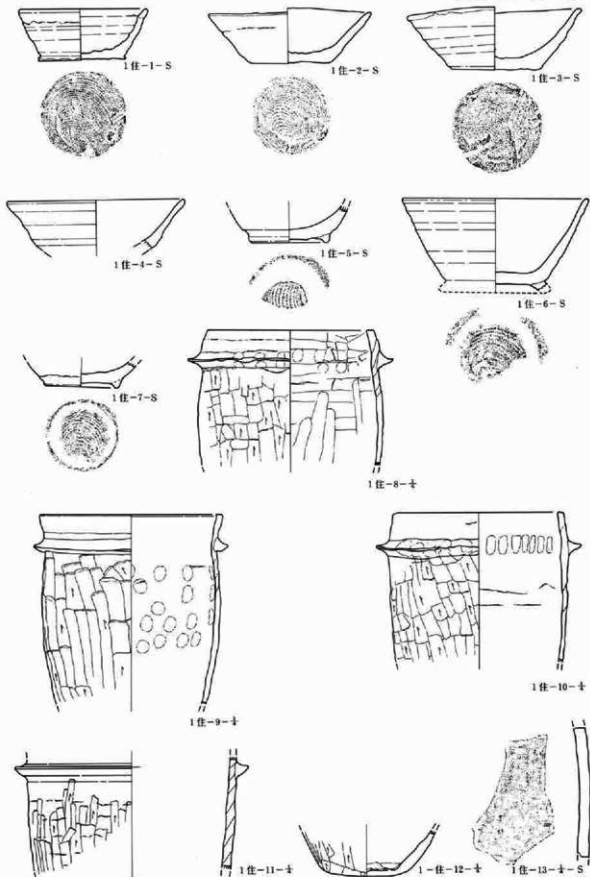
構造 竈は石を多く用いて作られており、燃焼部左右に4個づつ計8個の石がならんで検出された。この石を芯にして黒褐色土で被い竈が作られていたものと思われる。天井石は検出できなかった。

規模 煙道方向で1.7m、両袖方向で1.6mである。

遺物 竈内より多くの焼土に混じり4種類の羽釜の破片と、6個体の坏、碗の破片や完形品等が出土している。



第2節 住居跡



第29図 1号住居跡出土遺物実測図

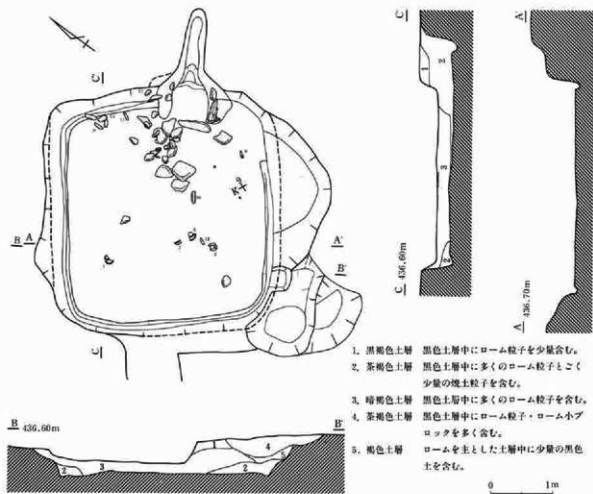
第5章 検出された遺構と遺物

1号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第29図 写真図版56)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(m) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
1住-1	環須恵器	4.0 9.9 6.8 フタ上	全体的に直線的な器形を呈する。外側口縁部に輪積痕が、器表内外面にロクロ痕有り、底部端が外側に張り出し、底面に右回転糸切痕。	①灰白色②還元焼成③口縁の一部欠損のみでは残存④1mm以下の白色粒子と少量の石英粒子を含む。
1住-2	環須恵器	4.6 12.8 6.0 カマド内	底部が小さく、器形全体が不均正であり、粗雑の観あり、外側口縁部に輪積痕が残る。底面に右回転ロクロ痕あり。	①灰褐色②酸化③口縁の一部欠損のみでは残存④1mm以下の白色粒子と1-3mmの石英粒子を多く含む。
1住-3	環須恵器	4.9 13.7 7.2 カマド内	底部が小さく、器形全体が不均正である。口縁端部がやや外反しており、外側口縁部に輪積痕が残る。底面に右回転糸切痕有り。	①灰褐色②酸化③ほぼ定形④1mm以下の白色粒子と1-3mmの石英粒子を多く含む。⑤2つに分れており、片側内側全面に炭が多く付着。
1住-4	埴須恵器	— (14.0) — カマド内	口縁部の小さな破片である。口縁部は直線的に立ち上がり、内外面にロクロ痕が残る。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子と1-3mmの石英粒子を含む。
1住-5	埴須恵器	— — (5.9) カマド内	底面に雑な整形の高台が付く。器内内側はナテ整形で均一であるが、外側表面に多くの亀裂が有る。高台内側に静止糸切痕と思われる痕跡有り。	①褐色②酸化③④①1mm以下の白色粒子と2-3mmの石英粒子を多量に含む
1住-6	埴須恵器	— — (14.6) カマド内	底面に雑な整形の高台が付き、口縁部は直線的に立ち上がっている。底部と胴部との境に割目が入っており、底面板上に割部を乗せたことが観察される。高台部内側に右回転糸切痕が残る。	①褐色②酸化③④①1mm以下の白色粒子を多量に、2-3mmの石英粒子を少量含む
1住-7	埴須恵器	— — 5.6 床面+7	底面に低い高台が付く。整形はややいいいである。内側は全体に表面が割離している。高台部内側に右回転糸切痕が残る。	①褐色②酸化③④①1mm以下の白色粒子と2-3mmの石英粒子を多く含む
1住-8	羽釜	— (17.6) — カマド内	全体にやや内傾しており、断面三角形の罫を持つ。胴部は底部から罫に向かうへら削り、罫は、口縁部同様に指ナテ整形。口唇部はかすかに内傾。内面に縦横のナテ調整と指通による圧痕が残る。	①黒褐色②酸化③④①1mm以下の白色粒子が多く、2-3mmの石英粒子を少量含む
1住-9	羽釜	— 19.2 — 床面カマド右手前部分	全体的に直立気味であり、罫の部分より上で口縁部が大きく外反している。断面三角形の罫を持つ。胴部は底部から罫に向かうへら削りである。罫と口縁部は横ナテ調整であり、口唇部はほぼ水平、胴内面は横ナテ面と指通とによる圧痕が残る。	①黒褐色②酸化③④①1mm以下の白色粒子と、2-4mmの石英粒子を多く含む。⑤床面とカマド内より出土した遺物が接合した。カマド内出土部分内側は焼成により黒色を呈す
1住-10	羽釜	— (16.8) — カマド内 床面カマド手前	全体的に直立気味であり、断面三角形の罫を持つ。胴部は底部から罫に向かうへら削りであり、罫と口縁部は横ナテ整形である。口唇部は水平でやや外反しており、特異である。	①褐色②酸化③④①1mm以下の白色粒子と2-3mmの石英粒子を多く含む
1住-11	甕又は 羽釜	— — — 床面	口縁部に罫を持つが、内面全面横ナテ、外面横ナテの上と下から罫に向かう指ナテ調整があり、へら削り調整はないため甕の可能性大。	①灰白色②還元③④①1mm以下の白色粒子を多く、2-3mmの石英粒子を少量含む
1住-12	羽釜	— — 8.5 カマド内	羽釜の底部である。胴部大半の整形は底部より口縁部に向かうへら削りである。底面はナテ調整である。底部内側端部に指ナテ整形痕あり。	①褐色②酸化③④①1mm以下の白色粒子と2-3mmの石英粒子を多く含む
1住-13	甕 須恵器	— — — カマド内	内面平行当て目、外面平行叩きの後に全面ナテ調整、奈良時代以前の製品の転用品と思われる。	①青灰色②還元焼成③胴部の小破片④1mm以下の白色粒子多く含む

## 2号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版14 遺物写真図版56・57

- 位置** 1号住居跡と同様に調査区西最西端に位置しており、J-8・9、K-8・9グリットに属する。
- 概要** 住居跡覆土中に1号住居跡が作られていた。住居跡東側に土坑らしき掘り込みが3ヶ所あり、住居跡東側及び東側覆土を掘り込んでいた。北壁やや東寄りに地山のロームを掘り込んで竈が構築されていた。住居跡南側に新しい浅い溝が掘られていた。
- 構造** 床面はロームを主とし、少量の黒色土の混入層よりできており、西側及び住居中央部がやや低くややわらかい傾向を持つが、他の部分は固く踏まれており、表面が凹凸状を呈していた。床下の状態を調査したが、ロームの地山をほぼ床面としており、床面下の掘り込みはほとんど認められず、床下土坑等も検出されなかった。柱穴や貯蔵穴も検出されなかった。周溝はほぼ壁下全面に掘られており、竈左袖下まで延びていたが、右袖下では検出できなかった。
- 規模** 東西方向で3.6m、南北方向で3.8mを測る。竈を持つ南北方向にやや長い傾向を持つ。壁高は西側が30～35cm、東側が60～70cmである。周溝幅は約15cm深さ約5cmである。
- 遺物** 覆土南西部の大部分を1号住居跡に掘り取られていたこともあり、出土遺物は少ない。覆土中より、土師器甕の破片多数、須恵器杯の破片と甕の破片を少量出土している。他に床面上より土師器の杯や須恵器の埴・坏蓋・短頸壺の蓋等出土。




第30図 2号住居跡実測図

第5章 検出された遺構と遺物

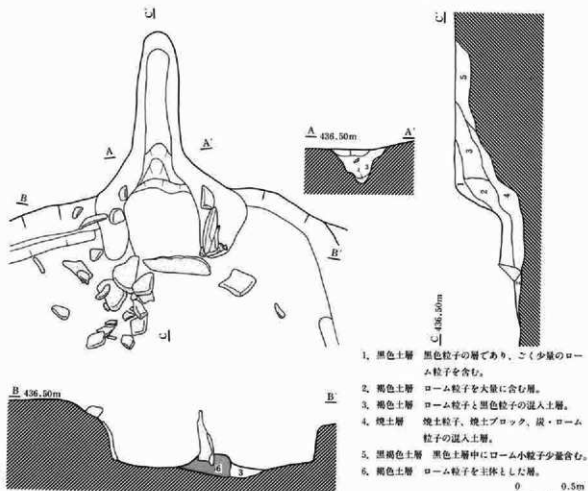
2号住居跡竈

位置 住居北壁のやや東寄りに竈が構築されていた。

構造 竈の焚口部と燃焼部の大部分が住居内に位置し、燃焼部の一部が北壁を掘り込み燃焼部は北壁上部を掘り込んで作られている。住居内に位置する焚口部と燃焼部の袖は、芯に扁平で長い石を用いており、石のまわりをロームで被覆して袖としている。発掘時において右側袖部より長大で扁平な石が1個その奥にやや小さな扁平な石1個、手前に中央の長大で扁平な石を支えるような小さな石1個の計3個体が検出され、ほぼ3個体とも使用時の位置を保っていた。中央の長大で扁平な石は、高さ0.52m、幅0.32mで厚さ4cmであり、床に接する部分の厚さは8cmと厚くなっている。左側袖部には使用時の位置から左側にずれて燃焼部左壁に倒れかけた扁平な石1個体とその上にやや小さな石1個体が検出された。右袖の芯石はほぼ原形を保っているが、左袖の手前の石は取りのぞかれていた。この袖石上に天井石が載せられていたものと思われ、その天井石が焚口手前に落ちていた。この石は長さ0.58m、幅0.19m、厚さは0.5~10cmの断面を呈している。焚口手前に左側には多くの意匠構築時に使用したと思われる扁平な石が散乱していた。この中に左側袖の芯として使用した石等も含まれると思われる。煙道部には石を全く用いることなく、掘りぬきにより作られたものと思われる。

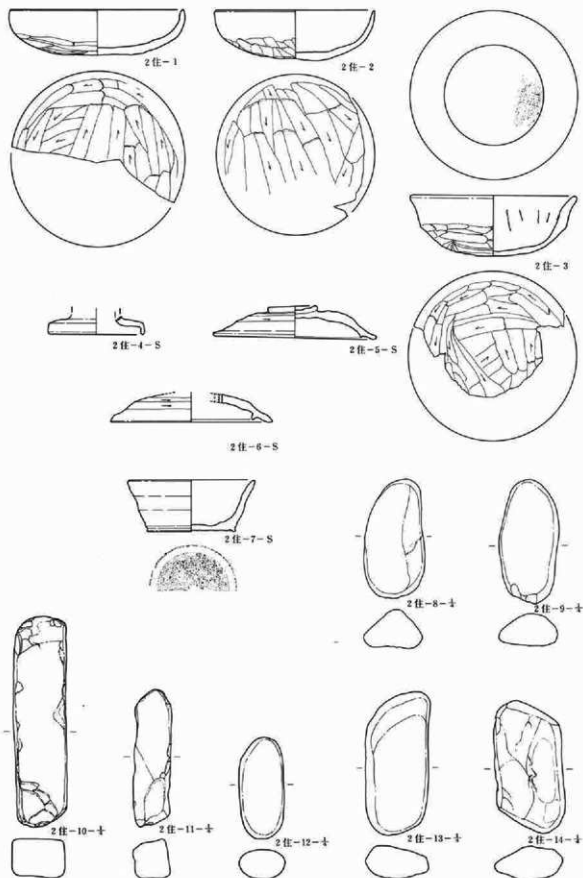
規模 煙道方向で1.7m、両袖方向で1mであり、高さ約70cmと思われる。(袖石の高さ+天井石の厚)

遺物 器内の薄い土師器の甕の破片16片が出土したのみである。



第31図 2号住居跡竈実測図

第2箇住居跡



第32図 2号住居跡出土遺物実測図

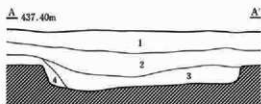
第5章 検出された遺構と遺物

2号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第32図 写真図版56・57)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
2住-1	環土師器	3.5 (13.6) 床面+6	平底に近い丸底の環であり、口縁部は直立気味で約1cm幅で横ナテ整形。底面は全面にわたりへら削り内面は全面ナテ整形、口唇部は丸く横ナテ整形されている。	①褐色②酸化③㉗④少量の黒色粒子を含み、白色鉱物粒子と石英粒子はほとんど含まない
2住-2	環土師器	3.8 12.7 床面+4	丸底の環であり、口縁部は直立気味に立ち上がり、約1cm幅で横ナテ整形。底面は全面にわたりへら削り、内面は全面ナテ整形、口唇部は丸く横ナテ整形。2住-1より深い器形。	①褐色②酸化③㉗④少量の黒色粒子と赤色粒子を含む
2住-3	環土師器	4.8 (12.8) 床面	口縁部下の後部分を境に大きく口縁部が大きく外反する。後部の器内が特に厚く、内裏処理されている。器形にやや近い特色を持つ。口縁部内外面全面横ナテ、底部全面へら削り、口唇部はやや厚く、丸味を持っている。	①褐色②酸化③㉗④少量の黒色粒子と白色粒子を含む⑤内側底面に刻書あり
2住-4	蓋須恵器	— (7.4) フク土	非常に小さな破片であるが、小形蓋の破片と思われる。口縁部はほぼ垂直に折り曲げられており、口唇部は丸く仕上げられている。	①灰色②還元焼締③㉗④1mm以下の白色粒子を多く含み、石英粒子はほとんど観察できない
2住-5	環蓋須恵器	2.6 12.6 フク土	天弁部に環状つまみ、口縁部にかえりを持つ環蓋である。つまみは低く、端部が丸く、かえりは割れ。外側天弁部にへら削り痕あり。	①灰色②還元焼締③㉗④1mm以下の白色粒子を多く含み、石英粒子はほとんど含まない
2住-6	環須恵器	— (12.8) フク土	口縁部にかえりを持つ環蓋であり、つまみは欠けているが、おそらく環状つまみであろう。つまみの付く部分付近に径約0.7cmの小穴がある。	①灰色②還元焼締③㉗④1mm以下の白色粒子を多く、1-3mmの石英粒子を少量含む
2住-7	環須恵器	4.1 (10.1) (7.0) 床面+6	削り出し高台を持つ環と思われるが、高台の付け方や整形の痕跡よりみて、付高台の可能性あり、直線を基調とした器形であり、小形である。高台部内面は指等によるナテ整形である。	①灰色②還元焼締③㉗④1mm以下の白色粒子を多く含み、石英粒子はほとんど観察できない
2住-8	石	縦-12.5 横-6.4 重量-260g	小さな石であるが、表面が磨耗している。	①緑褐色②完形③ひん岩④床面
2住-9	石	縦-13.0 横-6.4 重量-350g	石の中央部がやや張り出している。表面は全面磨耗している。	①灰黒色②ほぼ完形③ひん岩④床面
2住-10	石	縦-14.4 横-4.0 重量-1,150g	前記の2石に比較して大きくて重い石であるため用途は別と思われる。小口両端部に表面割れがあり、その部分に凸凹が目立つ。	①灰黒色②ほぼ完形③黒色頁岩④床面
2住-11	石	縦-22.2 横-5.8 重量-450g	全面に磨耗しているが、磨いたためではなく、断面は方形に近い。使用によりこうなったものと思われる。	①緑褐色②ほぼ完形③黒色頁岩④床面+26cm
2住-12	石	縦-10.7 横-4.9 重量-400g	11にほぼ同じ、下端部に2ヶ所ほど欠けた部分あり、使用により生じたものと思われる。	①緑褐色②ほぼ完形③石英閃緑岩④床面
2住-13	石	縦-15.0 横-6.9 重量-550g	少し扁平で幅広い石、全面が磨耗している。	①褐色②完形③栗貫安山岩④床面
2住-14	石	縦-14.0 横-7.5 重量-500g	13の石同様に幅広く、扁平な石、全面が磨耗している。	①褐色②ほぼ完形③黒色頁岩④床面+26cm

## 3号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版15・16・17

遺物写真図版57・58・59



1. 黒褐色土層 耕作土。
2. 黒褐色土層 黒色土を主体とし、少量の軽石粒とローム粒子を含む土層。
3. 黒褐色土層 黒色土中に1~3mmのローム粒子を多く含む土層。
4. 黒褐色土層 黒色土中に少量のローム粒子と少量の軽石粒を含む土層。

0 1m

第33図 3号住居跡実測図

位置 4号住居跡の南約5m、5号住居跡の西約13mに位置し、N-10・11グリッドに属する。

概要 住居の掘り込みは、特に深くはなかったが、竈の残りが良く、中央に羽釜が据えつけられたままの状態で見出され、また住居内より多くの遺物も出土しており、注目される。

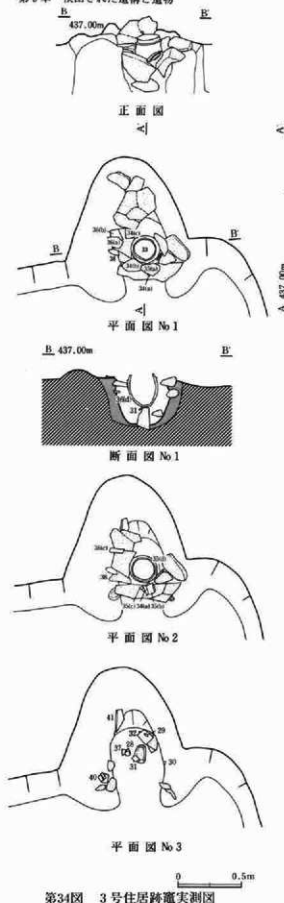
構造 床面はロームを主とし、少量の黒色土の混入層よりできていた。床面中央附近より2基の床下土塊が見出された。これらの土塊覆土は固くしまっていた。柱穴は南壁中央部内側に2本、北壁中央部内側に1本の計3本が見出された。それらの柱穴はいずれも壁の一部を掘り込み、周溝上に掘られている。南壁寄りの柱穴1と柱穴2は、住居内に内傾しており、北壁寄りの1本はほぼ垂直に掘られていた。このように、壁の一部から周溝上にかけて掘られた3本柱を持つ住居は5・7・8・33号住居跡で認められる。周溝は竈の構築されている部分を除き、壁の内側はほぼ全面にわたり掘られていた。南西端の床面より小土塊が1基見出された。

規模 東西方向で3.4m、南北方向で3.3mでほぼ正方形を呈している。壁高は確認面から床面まで、27~35cmである。周溝幅は場所により一定ではないが、幅10~25cm、深さは1~4cmである。柱穴1は幅18cmで深さ50cm、柱穴2は幅16cmで深さ50cm、柱穴3は幅19cmで深さ46cmである。柱穴3の位置関係は柱穴1の中心と柱穴2の中心との距離が50cm、柱穴1の中心及び柱穴2の中心から柱穴3の中心までの距離はほぼ同じで約3.1mであり、柱穴3を頂点とした正三角形形状を呈している。1号床下土塊は長軸1.3m、短軸で1m、深さ30cm、2号床下土塊は長軸で1m短軸で70cm、深さ30cmであり、南西端の小土塊は幅70cmで深さ20cmであった。

遺物 覆土中や床下土塊内により、土師質土器壺・坏・羽釜・灰軸陶器の段皿や碗等が見出されている。

床下 床面調査時において床下土塊を含め掘り下げたため床面調査時と床下はほぼ同様であった。

第5章 検出された遺構と遺物



第34図 3号住居跡竈実測図

3号住居跡竈

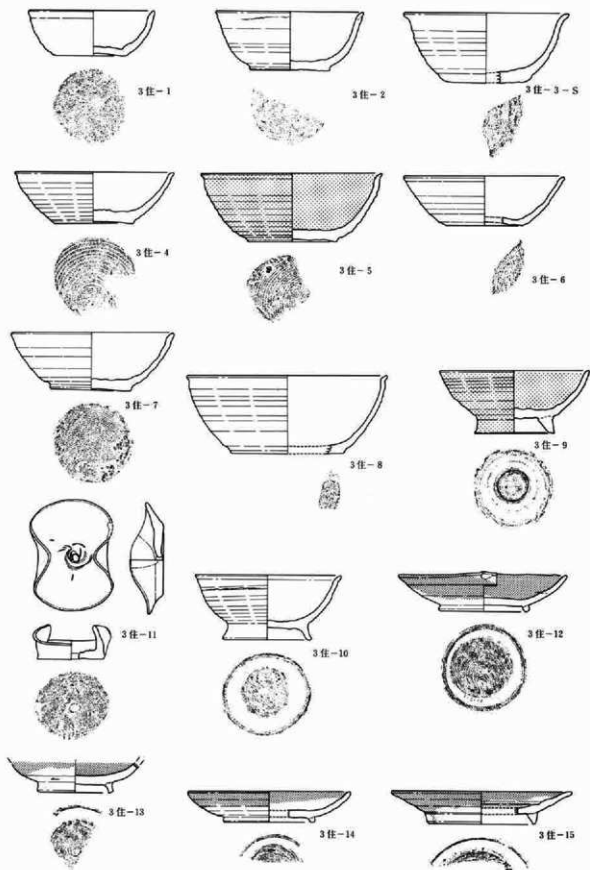
位置 住居東壁南端に、壁を掘り込んで構築された。

構造 この竈は焚口天井石が割れて、焚口に少し落ち込んでいたが、竈中央に羽釜が据えられたままの状態出土し、ほぼ使用時の状況を残している。竈は、写真および実測図からわかるように、石組でできていた。天井石は6個体用いられており、それらは焚口天井石1石と燃焼部天井石として羽釜の左右に2石ずつ位置する4個の天井石及び煙道上にくる1石の大きな石である。竈内には左袖に2石、右袖に2石及び右袖の奥で煙道部に位置する長い袖石1石等の石が基礎として据えられており、それらの石を袖の芯としてロームや黒褐色土を用いて固めた袖の上に天井石は載せられていた。羽釜は燃焼部火床面に直接据えたのでは燃焼効果が悪いと見られ、火床面中央に高さ16cmの支脚石を据えて、その上に羽釜が置かれていた。また羽釜底部と支脚石との間に31の坯の破片を差し込んで中央に置かれた羽釜をより安定させていた。羽釜は移動可能な燃焼部の天井石を、羽釜鈎部の下の位置に寄せて固定していた。しかし、すべての天井石が羽釜に接していたわけではなく、また、羽釜に接する天井石は直線であり、羽釜は曲線であるため、天井石羽釜との間に隙間が多く出来ることになる。この隙間を埋めて、煙や灰が外に漏れるのを防ぐために、割れた羽釜の破片を天井石と羽釜の間に差し込んだり、天井石の上に置いて、隙間を埋めていた。

規模 竈本体の残りは良いが、煙道部は一部が欠いている。両袖方向で約1m、煙道方向で約1.1m、高さ約60cm、燃焼部幅40cm、奥行約50cmであった。

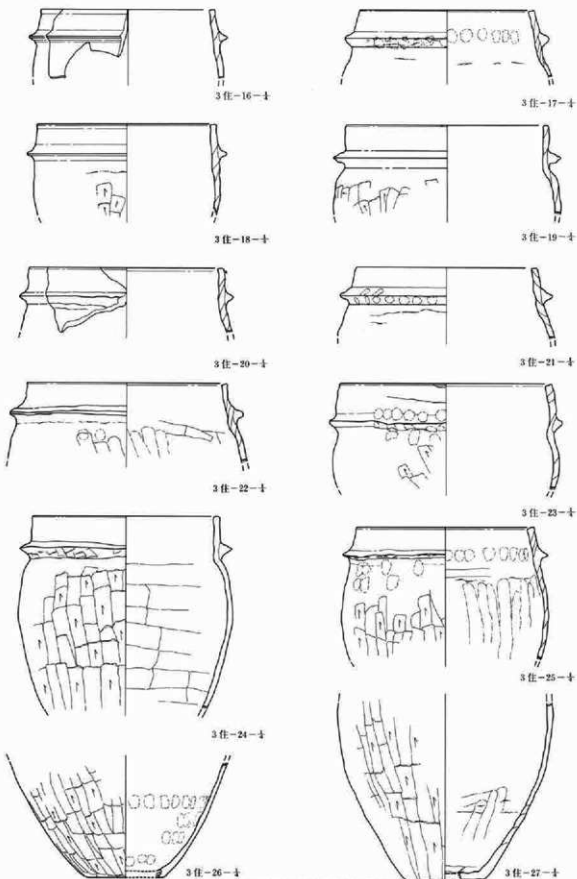


第2節 住居跡



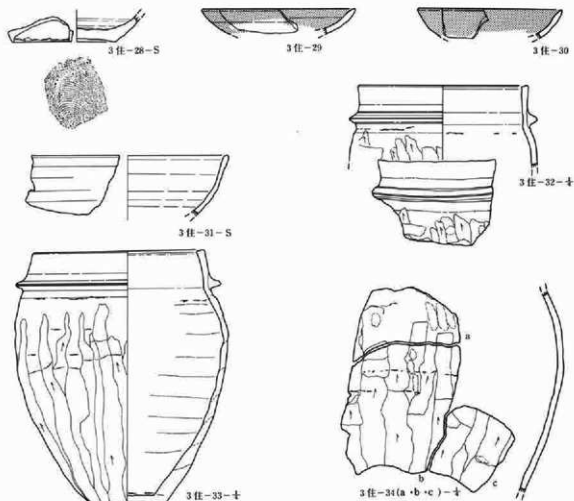
第35図 3号住居跡出土遺物実測図(1)

第5章 検出された遺構と遺物



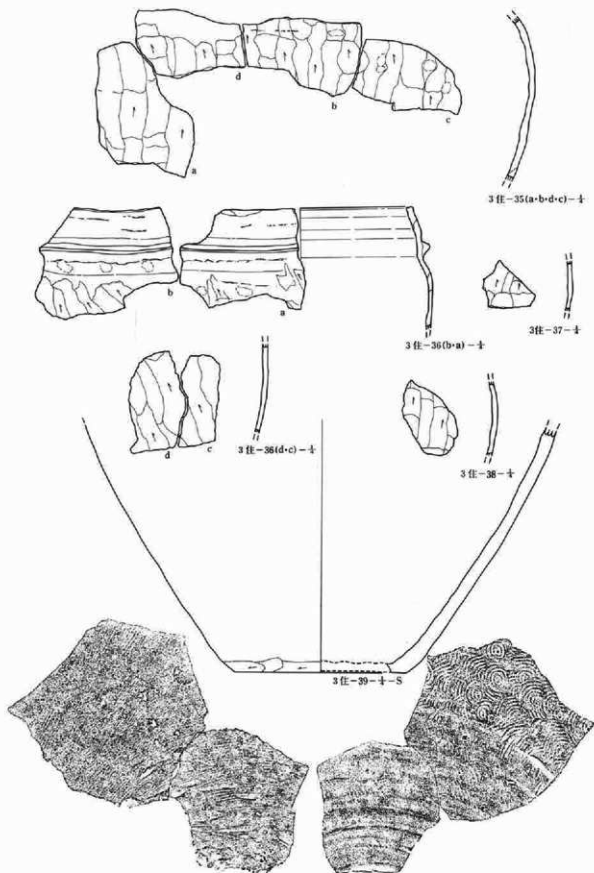
第36図 3号住居跡出土遺物実測図(2)

遺物 竈内より、ほぼ完形の羽釜をはじめとして、30個体の土器片が出土した。それらの大部分は、竈使用に際して利用されたものと考えられる。竈復元に伴ないそれらの出土遺物の多くは、復元された竈に再び据えつけてある。出土した30個体の土器片は、竈内出土のすべてであり、その中には小さな破片も含まれており、出土位置の確認や使用目的の不明な遺物も少し含む。それらの遺物の中で7個体は写真と以下の概略説明のみとし、実測図及び観察表は省いた。残りの23個体中の21個体について、実測図、観察表及び写真を載せて、2個体は竈復元作業に伴う表土剥ぎの段階で剥ぎ取り固定してしまったため、実測図及び写真を載せることはできなかった。今回実測図と観察表を載せられなかった7個体の土器片の内容は、土師質土器の坏(埴?)の口縁部3片と灰軸陶器皿の口縁部1片および羽釜の胴部破片3片であった。竈復元によりすでに固定してしまった遺物は、第34回の平面図No.3での40番の羽釜と、41の須恵器甕の破片である。40の羽釜は34(a・b・c)よりなる第37図の34の羽釜の一群と類似し、41の須恵器甕の破片は、竈煙道上より出土した39と類似した。出土遺物は30個体を数えるが、小さな破片であり、実測図を載せていない7個体と、載せていても小さいため内容の明らかでない37と38の土器片を除いた19個体の実体は、接合関係および胎土・焼成の特色からみて、羽釜5個体・灰軸陶器2個体・須恵器坏2個体・須恵器甕1個体の計10個体からなる一群であった。



第37図 3号住居跡出土遺物実測図(3)

第5章 検出された遺構と遺物



第38図 3号住居跡出土遺物実測図(4)

3号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第35図 写真図版57)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②酸化③残存④胎土⑤備考
3住-1	環土師質	3.6 (10.0) 5.6 床面	器高に比較して口径の大きな環である。口縁部近くに比輪を持ちその部分より上がやや外反する。底部に右回転糸切痕を持つ。	①灰褐色②酸化③④⑤1mm以下の白色粒子を多く、1-3mmの石英粒子を少量含む
3住-2	環土師質	4.7 (11.9) 6.4 床面、カマド フク土	厚い底部より、内彎気味の体部を経て口縁部に至る。口縁部はやや外反している。底部と体部との境に小さな段を持つ。底面右回転糸切痕。	①灰白色②還元③④⑤1mm以下の白色粒子を多く、1-3mmの石英粒子を少量含む
3住-3	環須恵器	5.5 (13.0) (6.7) 床下土坑内-20	厚い底部より、内彎気味の胴部を経て大きく外反する口縁部に至る。底部の調整は不明。	①灰白色②還元軟質③④⑤1mm以下の白色粒子と1-3mmの石英粒子を含む
3住-4	環土師質	4.0 12.6 6.3 床面+20	厚い底部を持ち体部下端との境に段を持つ。体部には多くのクロロ炭を残し、作りのいいない環である。口唇部がやや平で内傾している。	①褐色②酸化③④⑤1mm以下の白色粒子を多く、1-3mmの石英粒子を少量含む。特に1mm前後の石英粒子が多い
3住-5	環土師質	5.4 14.6 7.2 床面+15	底部は薄く、底部中央がやや上に盛り上がっている。体部は内彎気味に立ち上がり、口唇部はやや平で少し内傾している。底面右回転糸切痕。	①褐色②酸化③④⑤白色粒子は断面まで煙により黒色を呈していたため不明。1-3mmの石英粒子を含む
3住-6	環土師質	3.9 (12.5) (7.0) 床面、フク土	底部は薄く、底部中央がやや上に盛り上がっている。口唇部がやや外反している。	①褐色②酸化③④⑤白色粒子と1-3mmの赤色粒子と石英粒子を含む
3住-7	環土師質	4.6 (12.8) 6.5 床面	厚い底部を持ち、体部下端との境に段を持つ。体部は内彎しつつ外上方へ立ち上がり、口縁部は少し外反する。底部に右回転糸切痕が残る	①褐色②酸化③④⑤1-2mmの赤色粒子を多く含む
3住-8	環土師質	6.2 (16.0) (9.1) フク土	厚い底部を持ち体部下端との境に段を持つ。口唇部分でやや立ち上がり、口縁部が大きく外反する。口唇部はやや平で内傾している。	①黒褐色②酸化③④⑤1mm以下の白色粒子を多く、1-3mmの石英粒子を少し含む⑥体部-胴部が吸炭により黒色
3住-9	埴土師質	5.0 11.8 6.4 床面、フク土	厚く高い高台を持ち、体部は内彎しつつ口縁部に至る。口唇部はやや丸い。高台はいいないに調整されており、特に端部は鋭く削り出されている。高台内側に回転糸切痕が残る。	①表面黒色、断面褐色②酸化③④⑤は完形⑥1mm以下の白色粒子を多く、1-3mmの石英粒子を少量含む。⑦煙煤成により高台内側を含め表面は黒色
3住-10	埴土師質	5.1 11.6 7.0 床面	細長い高台の付く底部から、体部は内彎しつつ口縁部に至る。口唇部は幅約0.7cmではほぼ平で内傾している。高台はいいないに調整されており、高台内側にかすかな糸切痕を残す。	①灰白色②還元③完形④1mm以下の白色粒子を多く、1-2mmの石英粒子を少し含む。⑤内側口縁部が少し吸炭により黒色を呈している
3住-11	耳皿	2.7 3.7 5.3 8.8 5.7 床面+15	厚い底部より長さ約1.9cmの体部-口縁部が腹上方向に延びている。皿の両端をつまみ上げて耳皿としており、中央に直径0.6cmの小穴が一つ空けられていた。底面に右回転糸切痕が残る。	①灰白色②還元③完形④1mm以下の白色粒子と1-3mmの石英粒子を多く含む
3住-12	輪花皿灰釉	2.9 13.6 7.8 床面+17-19	全体に丸く整形されている高台を持ち、体部はやや内彎気味に立ち上がる。4個所に輪花あり。高台部内側に右回転糸切痕が残る。	①灰白色②還元③完形④密⑤白色を主とし、濃い緑色釉が内側に施軸されている。虎頭山
3住-13	埴灰釉	— — (5.4) カマド内	ていねいな整形の断面長方形の高台を持つ。高台部内側に糸切痕は全く認められず、中央部に凹凸部分を残す。	①灰白色②還元③④⑤⑥内側のほぼ全面に降灰によると思われる灰釉が付着
3住-14	皿灰釉	2.4 (12.8) (7.2) 床面+10	全体に丸く整形されている高台を持ち、体部はやや内彎気味に立ち上がる。全体に小さな皿である。高台部内側に右回転糸切痕を残す。	①灰白色②還元③④⑤密⑥淡緑色の灰釉が口縁部を中心に施軸されている。大塚2

## 第5章 検出された遺構と遺物

3号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第35・36図) 写真図版59)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②構成③残存④胎土⑤備考
3住-15	皿 灰釉	2.2 (14.4) (8.4) 床面+20	断面三角形の高台を持つ段脚である。段脚はU字状に張り込み、内側を削り取り作っている。高台部内側はナデ整形と思われる。	①灰白色②還元③片④黒⑤緑色の灰釉が段脚より外側に施されている。虎斑山。
3住-16	羽釜	— (18.2) — 床面	断面三角形の短い脚を持つ羽釜である。口唇部はやや厚くなり平で少し内傾している。器表面の粗雑な羽釜である。	①褐色②酸化③片④1mm以下の白色粒子を多量に、1～3mmの石英粒子を多く含む
3住-17	羽釜	— (18.5) — 床下土坑-16 フク土	断面三角形の太く短い脚を持つ羽釜である。口唇部はほぼ中央に割い沈堀を持つ。器部表面と器部内側に指頭圧痕あり、胴部は脚の下付直より胴中央部に向かい底径が大きくなる傾向を示す。	①灰白色②還元③片④1mm以下の白色粒子を多量に、1～3mmの石英粒子を多く含む
3住-18	羽釜	(18.8) — 床面+7	断面三角形の小さな脚を持つ。口唇部はやや厚くなり、平で少し内傾している。脚下部の表面はナデ整形である。	①褐色②酸化③片④1mm以下の白色粒子を多量に、1～3mmの石英粒子を多く含む
3住-19	羽釜	— (21.6) — 床面	断面三角形の脚で、先の部分で一段上下とも削り込まれており一層細い脚となっている。脚の付く部分に境に胴部は大きく外側に張り出している。口唇部はほぼ平に整形されている。	①灰白色②還元③片④1mm以下の白色粒子を多量に、1～3mmの石英粒子を多く含む。⑤表面灰白色、断面黒色を呈する
3住-20	羽釜	— (20.6) — 床面	断面三角形の短い脚を持つ。口唇部内側に少し張り出し厚くなっている。口唇部中央がやや凹状になっておりほぼ水平である。	①褐色②酸化③片④1mm以下の白色粒子を多量に、1～3mmの石英粒子を多く含む
3住-21	羽釜	— (21.5) — 床下土坑-16	断面三角形の短い脚を持つ。脚を胴部に貼り付けるために、脚上下より指で押した痕跡が残る。口唇部はほぼ平である。	①褐色②酸化③片④1mm以下の白色粒子を多量に、1～3mmの石英粒子を多く含む
3住-22	羽釜	(21.2) — 床面	やや丸味を持つ断面三角形の短い脚を持つ。脚下部に脚を胴部に貼り付けた痕跡が残る。口唇部は平で強く内傾している。脚付近より下の胴部は外側へ大きく張り出している。	①灰褐色②酸化③片④1mm以下の白色粒子を多量に、1～3mmの石英粒子を多く含む
3住-23	羽釜	— (22.4) — 床面	断面三角形の太く短い脚を持つ。脚を胴部に貼り付けるために脚上下より指で押した痕跡が残る。脚下部の胴部は大きく内側に張り出している。口唇部は長く、口唇部は平で内傾する。	①灰褐色②酸化③片④1mm以下の白色粒子を多量に、1～3mmの石英粒子と砂粒を多く含む
3住-24	羽釜	— (19.6) — 床面	断面三角形の短い脚を持つ。器表面全体が荒く粗雑である。口唇部は平に近いがやや丸味を持つ。へら削りは脚部下で終わり、脚下横ナデ。	①内側灰色・断面灰黒色・外面灰白色②還元③片④1mm以下の白色粒子を多量に、1～3mmの石英粒子を多く含む
3住-25	羽釜	— (18.6) — 床面+7	断面三角形の小さく短い脚が付く、やや下方へ傾いている。脚内側に脚を貼り付けた時と思われる指頭圧痕あり、口唇部は平で内側に少し傾いている。	①褐色②酸化③片④1mm以下の白色粒子を多量に、1～3mmの石英粒子を多く含む⑤外側体部下半が吸灰により黒色を呈している
3住-26	甕?	— — (8.6) 床面 フク土	器内が薄く、底径、胴部径の大きな器形であり、外側の削り方向は羽釜に共通するが、羽釜とは思えない、他に該当する器形は不明である。	①灰褐色②酸化③片④1mm以下の白色粒子を多量に、1～3mmの石英粒子を多く含む
3住-27	羽釜	— — (8.4) フク土	器内の厚さ、底径の大きさ、削りの方向や整形の特色等より見て羽釜の底部と思われる。内面は全面横ナデである。	①灰白色②還元③片④1mm以下の白色粒子を多量に、1～3mmの石英粒子を少し含む

## 第2節 住居跡

3号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第37・38図 写真図版58)

遺物名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
3住-28	環須恵器	— (6.4) カマド内	底部右回転糸切痕あり、底径の小さな環である。	①灰白色②還元軟質③底部と胴下の一部④1mm以下の白色粒子を多く石英粒子を微量含む
3住-29	皿灰輪	— (12.3) カマド内	小さな破片であり、全体像は不明であるが、皿の破片と思われる。刷毛により磨輪されている。	①断面灰色、輪透明②還元③口縁-胴部④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
3住-30	皿灰輪	— (11.5) カマド内	小さな破片であり、全体像は不明であるが、皿の破片と思われる。前出の29より口径が小さく深い器形を呈す。	①断面灰色、輪透明②還元③口縁-胴部④⑤⑥
3住-31	埴須恵器	— (16.0) カマド内	器内が薄く深い輪である。胴部外側に明確なロクロ痕が残る。ロクロ右回転により整形されている。	①灰色②還元軟質③口縁-胴部④1mm以下の白色粒子を多く、石英粒子を微量含む、28の埴に近い
3住-32	羽釜	— (18.0) カマド内	弱く内彎する胴部から、断面三角形の胴部を経て、直立気味に立ち上がる口縁部へと続く。口唇部は平で、少し内傾し、内側に少し張り出しを持つ。胴部から胴に向かいへう削り整形。	①表面は吸炭により黒色、断面は灰白②還元③口縁-胴-胴上部④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
3住-33	羽釜	22.5 18.5 8.2 カマド内	胴部の一部を欠いているが、ほとんど完形品である最大径は胴下5cmの胴部にある。その部分より胴に向かい内湾し、唇をすぎると、少し立ち上がるが、やはり内湾して口縁部に至る。口唇部は平で少し内傾し、内側に少し張り出しを持つ。胴は細く短く、断面三角形を呈する。胴部は底部から胴口に向かい全面にへう削りが行なわれている。	①灰白色②還元③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
3住-34	羽釜	— — — カマド奥口の天井石上-34(b・a) 左袖の天井石上-34(c)	胴部から胴下半にかけての胴部破片3片である。他の羽釜同様に底部から胴に向かうへう削り整形が行なわれている。粘土幅約2cmの輪積の痕跡が明確に残る。	①灰白色②還元③胴部④⑤1mm以下の白色粒子ほとんど含まず、1mm以下の砂粒を含む
3住-35	羽釜	— — — 奥口天井石上-35(a・b・c) 完形羽釜と右袖石との間-35(d)	胴部を中心とした4片の破片である。他の羽釜同様に、底部から胴に向かうへう削り、胎土の特色からみて、月夜野深沢C支群家跡の製品と思われる。	①灰白色(一部灰褐色)②還元(一部酸化)③胴部④⑤1mm内外の長石粒子を多量に含む。1mm内外の白色粒子も含む
3住-36	羽釜	— (19.0) カマド左袖の天井石上-36(a・b) 天井石上下-36(c・d)	直立気味に立ち上がる胴部から、内傾し再び胴部で直立し、弱く内傾した口縁部に至る。唇は断面三角形、口唇部は平で少し内傾している。	①外側表面灰褐色、内側表面灰白色、断面灰白色②酸化(一部還元)③口縁-胴-胴上部④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
3住-37	羽釜	— — — 焼成部支脚石左	小さな破片であるが、調整、器形から羽釜破片と思われる。	①褐色②酸化③胴部の小さな破片④1mm内外の石英粒子を多く含む
3住-38	羽釜	— — — カマド左袖-38(a) 天井石上-38(b)	小さな破片であるが、調整、器形から羽釜の破片と思われる。カマド内-37この羽釜は、他の4個体の羽釜とは別個体。	①褐色②酸化③胴部の小さな破片④1mm内外の石英粒子を多く、2mm内外の石英粒子を少量含む
3住-39	甕須恵器	— — (18.0) カマド煙道上付近	底部から大きく外側へ広く、大きな壁の破片である外面平行明き目、内面上部は青海波文、内面下部は青海波文の上から横ナテ整形。	①灰色②還元焼成③胴下-底部の一部④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

第5章 検出された遺構と遺物

4号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版18 遺物写真図版59

位置 3号住居跡の北東約3mに位置し、L-10・11、M-10・11グリッドに属する。

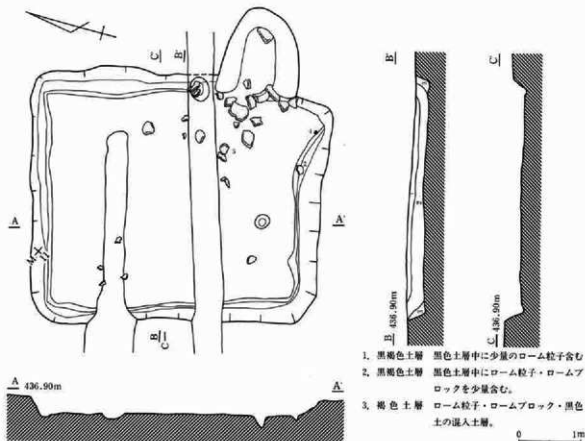
概要 掘り込みの浅い住居跡であり、耕作土からの2本の溝により床下まで掘り込まれている。壁は垂直でなく、やや斜めになっている。特に南壁の傾斜は弱く、南壁中央部が住居内に大きくせり出す特色を持つ。東壁やや南寄りに地山のロームを掘り込んで竈が構築されていた。

構造 床面はロームを主とし、少量の黒色土の混入層よりできていた。全体的に固く踏まれており、表面が凹凸状を呈していた。床面上に小穴は認められるが、柱穴らしき穴は検出できなかった。周溝は竈周辺以外は全面に掘られていた。貯蔵穴らしき掘り込みは、床面調査時には検出できなかった。壁はほとんどロームを掘り込んだ面を利用しており、全般にやや斜めである。

規模 東西方向で4m、南北方向で4.7mを呈し、1・2号住居跡同様に南北方向にやや細長い形態を呈している。壁高は25m前後で低い。周溝幅は20cm前後で深さは5cm前後である。

遺物 床面上より土師器杯の完形品1個体・須恵器甕の破片3片・覆土中より土師器杯のほぼ完形品1個体・須恵器杯、坏蓋の破片等が出土している。他に覆土中より土師器杯の破片と甕の破片が数多く出土している。

床下 床面調査後、床面下の構造及び床面調査時に検出できなかった遺構検出のために床面の盛土及び黒色土を0.05~0.1mほど取り除き床面下の調査を行なった。その結果着手前に東西方向1.3m、南北方向1.6m、深さ10cmのほぼ完形の土坑と、小穴が2個体検出された。



第39図 4号住居跡実測図



## 第2節 住居跡

### 4号住居跡竈

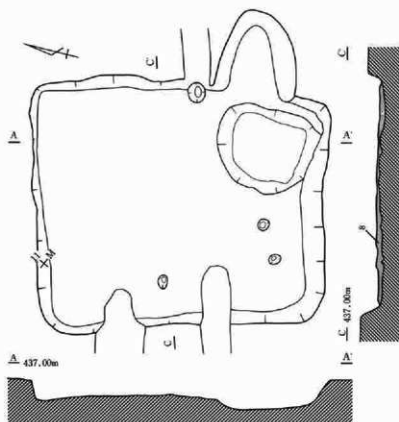
位置 住居東壁やや東寄りに竈が構築されていた。

構造 竈の焚口部住居内に位置するが、燃焼部の大部分一煙道部は住居外に位置している。竈は地山のロームを馬蹄形に掘りぬき、燃焼部を囲むように焚口部を除いて石を配列しており、竈手前に散乱している石もおそらく竈材の一部と思われ、その上をローム等で被覆したものと考えられる。燃焼部石の配列は奥に1石左右にそれぞれ3石配し、7個の石を基本としていた。8の石は4・5の石の間を埋める役割を果たしている。4の石は炎がこの石に当たり上方向へと方向を変えて煙道へと炎が方向転換する位置にある石であると思われ、多く焼けていた。

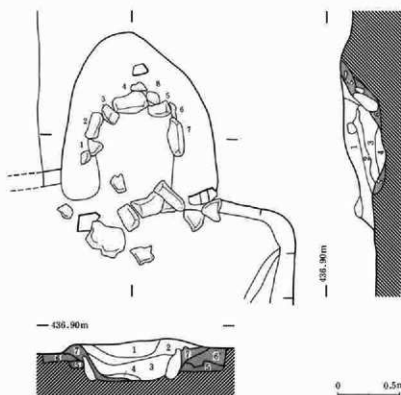
規模 煙道方向で1.4m、両袖方向で1.2mである。

遺物 全く出土していない。

1. 黒褐色土層 黒色土層中に、ローム粒子を少量含む。
2. 黒色土層 ローム粒子とロームブロックを主とした土層中に黒色土を少量含む。
3. 焼土層 固い焼土層。
4. 褐色土層 灰、焼土、黒色土の層。
5. 褐色土層 ローム層中に焼土及び黒色粒子を含む。
6. 黒褐色土層 ローム粒子と黒色粒子の混入土層、焼土含まず。
7. 黒色土層 黒色土層中に焼土粒子、ローム粒子を少量含む。
8. 褐色土層 黒色土とローム粒子の混入土層、床面として踏み固められている。

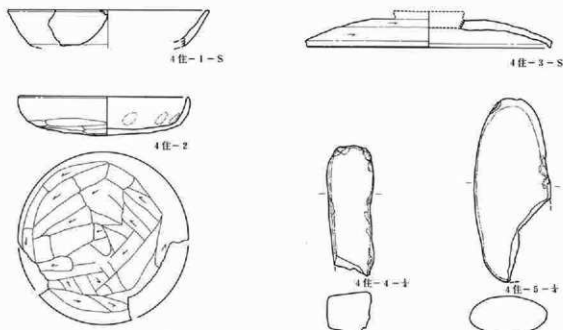


第40図 4号住居跡床下実測図



第41図 4号住居跡竈実測図

第5章 検出された遺構と遺物



第42図 4号住居跡出土遺物実測図

4号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第42図 写真図版59)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・直径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
4住-1	環 須恵器	— (15.8) — フタ土	口縁部から底部近くにかけての小さな破片である。口径が大きく、深い環と思われる。器表内外面とも密で、表面に凹凸は認められない。	①灰白色②還元焼締③6④1mm以下の白色粒子を多く含み、石英、長石粒子はほとんど観察できない
4住-2	環 土師器	3.0 13.4 — 床面	底部がやや丸味を持つが、ほぼ平底の環である。口縁部は横ナ字整形、底部はヘラ削り整形である。口唇部は細く丸く仕上げられている。内面底部に弱い凹凸が全面に認められる。	①褐色②酸化③口縁部と底部の一部を欠くが、ほぼ完形である。④白色粒子と石英粒子はほとんど観察できない
4住-3	環蓋 須恵器	— (15.3) — フタ土	端部が下方に折り曲げられており、下端は外側少し開く。天井部付近のみに右回転ヘラ削り痕が認められる。	①灰白色②還元焼締③6④1mm以下の白色粒子を多量に含み、石英粒子はほとんど観察できない
4住-4	石	縦-13.6 横-5.0 重量-550g	断面はほぼ四角形を呈し、全面磨耗している。上端に表面割離跡あり、片側が欠けている。	①表面灰白色、断面灰黑色③一部欠損④黒色頁岩⑤床面
4住-5	石	縦-19.2 横-8.2 重量-700g	図上での右下半部の一部を欠いている。粒子の荒い石であるが、やはり表面は磨耗している。	①黄褐色③一部欠損④輝石安山岩(粗粒)⑤床面+17

## 5号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版19 遺物写真図版59・60

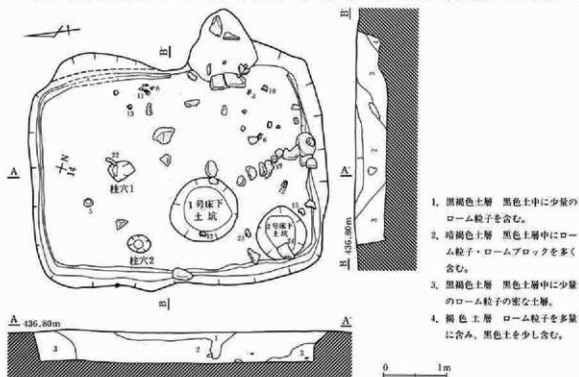
位置 3・4号住居跡の東約10mに位置し、M-13・14、N-13・14グリットに属する。

概要 住居の掘り込みが深く、竈の残りも良好であり、平安時代の堅穴住居跡としては、めずらしく、柱穴を持つ。さらに住居内に多くの石が出土しているため、石の用途を知るために、出土した石の重量すべてを計測してみた。また床面より床下土坑が検出され、興味深い住居跡の1つである。

構造 床面はロームを主とし、少量の黒色土の混入層よりできていた。床面中央より南面寄りに2基の床下土坑が床面検出時から検出できた。住居使用時において、この土坑中に土の入っていないかった可能性も考えられる。柱穴と思われる小穴が3個床面より検出されている。その中で西側の柱穴2は浅いが柱穴と考えたい。北側の2柱穴は床面の中央部に位置しており、垂直に掘られている。南壁中央の柱穴3は南壁の一部を掘り込んで、周溝上に掘られているという特色を持ち、垂直でなく内傾して掘られている。この柱穴3の上に石が置かれたように出土し、そこから住居内側にかけて多くの石が列をなして落ちていた。周溝は竈周辺以外ほぼ全面に掘られていた。貯蔵穴に関しては、2号床下土坑がこれにあたる可能性もあるが、竈と反対側での確認が当遺跡ではない事や、土坑が壁面下というより、やや床面に囲まれている様子もあるので、貯蔵穴として扱わなかった。

規模 東西方向で3.3m、南北方向で4.7mを測る。他の住居例同様に、南北方向に長い長方形を呈している。壁高は40~50cmで残りが良い。周溝幅は15cm前後で深さは5cm前後で浅い。柱穴1は径30cm、深さ60cm、柱穴2は径30cm、深さ15cm、柱穴3は径30cm、深さ50cmであった。1号床下土坑は径約1m、深さ34cm、2号床下土坑は径80cm、深さ20cmであった。

遺物 床面や覆土中より、土師質土器杯、埴のほぼ完形に近い製品や、羽釜の大きな破片が出土している。その他破片としては、覆土中より大量の土師質土器杯・埴や8世紀代の須恵器杯の破片、10世紀代の羽釜の破片等が出土している。床面上や覆土中より大小26個の石が出土した。住居内に運び込まれた

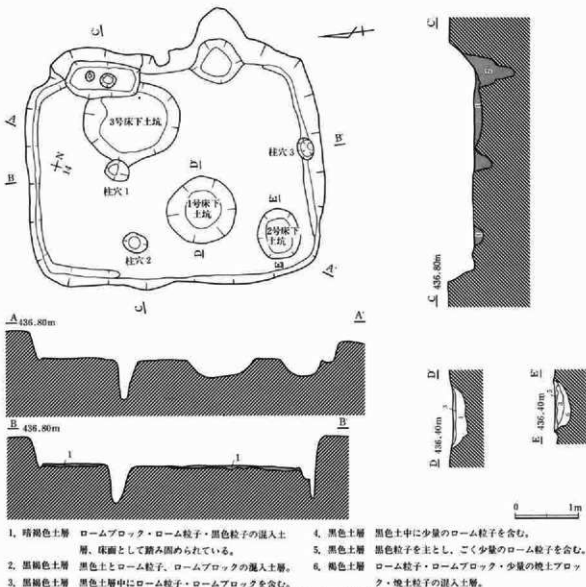


第43図 5号住居跡実測図

## 第5章 検出された遺構と遺物

石の性格を知るために大多数の石の重量測定を実施した。0.3kg～1kgまでの石5個体、1kg～2kgまでの石3個体、2kg～3kgまでの石3個体、3kg～4kgまでの石6個体、4kg～5kgまでの石2個体、5kg～6kgまでの石2個体、6kg～7kgまでの石1個体、7kg～8kgまでの石は1個体もなかった。8kg～9kgまでの石1個体、9kg～10kgまでの石は1個体もなかった。10kg以上の石3個体であり、最も大きな石は20.2kgであった。この中で3kg～4kgの石が最も多い特色を示した。この数字は他の住居跡内出土の石と比較すると石が大きいことを示している。そのため石の用途については様々な角度より検討してゆく必要性を示した。

床下 床面調査後、床面下の構造及び床面調査時で検出できなかった遺構検出のために、床面の盛土及び黒色混入土を2～10cmほど取り除き、床下調査を行なった。その結果床面東部に幅1.3m前後の楕円形を呈し、深さ10cmほどの3号床下土坑が検出された。さらにその3号床下土坑の東側で住居東壁部から床面にかけての部分から、縄文後代に属すると思われる16号簡し穴が検出された。床面は地山ロームを主とし、盛土の少ない床面となっていた。

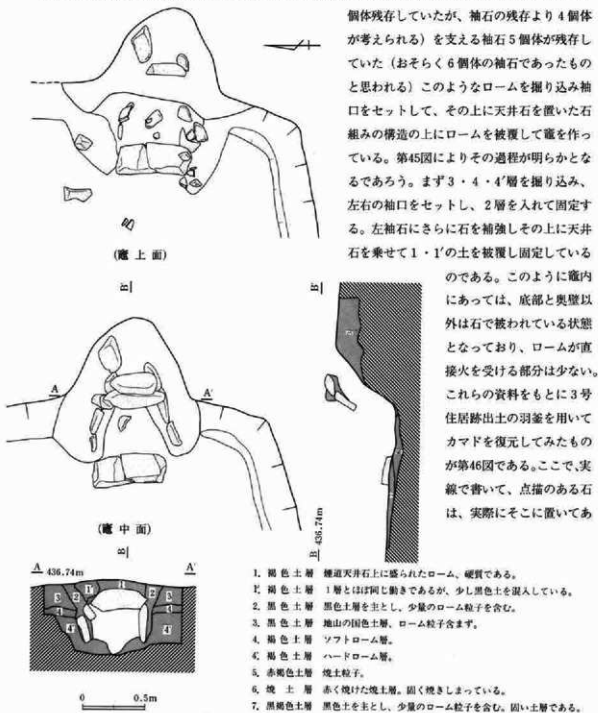


第44図 5号住居跡床下実測図

## 5号住居跡竈

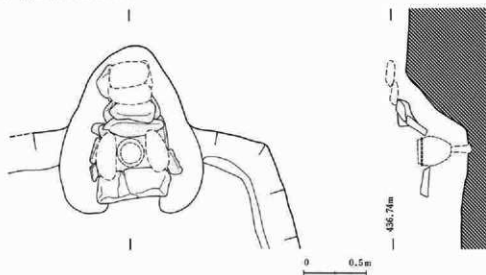
位置 住居東壁やや南寄りに地山のロームを多く掘り込んで竈が構築されていた。

構造 竈の焚口部は住居内に位置するが、燃烧部の大部分～煙道部は壁のロームを掘り込んで住居外に作られている。壁のロームを掘り込み、燃烧部を作るわけであるが、燃烧部の手前焚口天井石と煙道天井石を支えるために、燃烧部及び煙道部の壁面に縦長に袖石を配列する。その袖石が安定するようにローム壁を掘り込んでいた。焚口天井石は落されて、天井石に伴う袖石も検出されなかったが、燃烧部中央に置かれる羽釜の左右にくるであろう石を受ける左右の袖口各2個体及び、煙道部天井石（2



第45図 5号住居跡竈実測図

第5章 検出された遺構と遺物

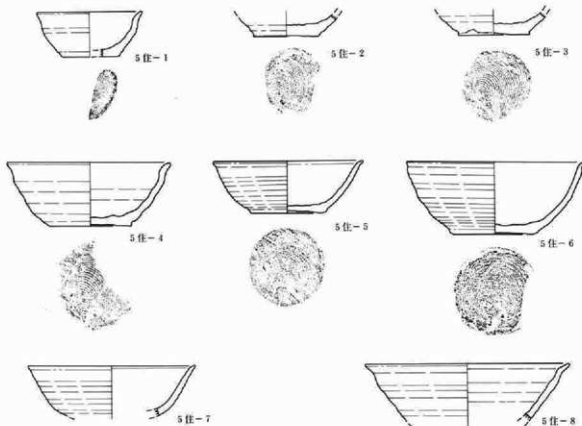


第46図 5号住居跡竈復元図

った石であり、実線で書いて、点描のない石は、存在していたが、動いており、図に示した位置にあったであろうと考えられた石であり、点線で書いた点描のない石は、おそらくこのような石が、この位置にあったであろうと考えられる石である。

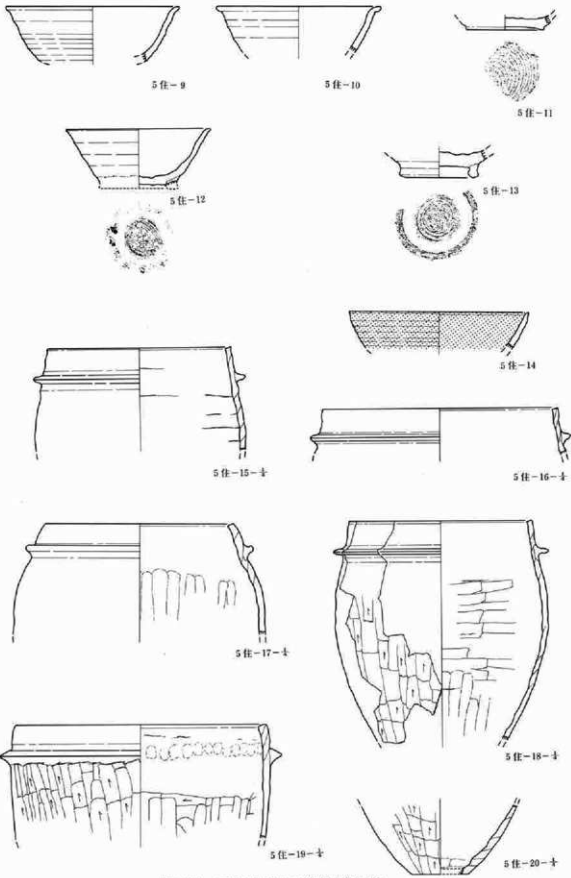
規模 煙道方向で1.4m、両袖方向で1.2m高さ約50cm、燃焼部幅約35cmである。

遺物 竈内より羽釜の破片が数点出土している。



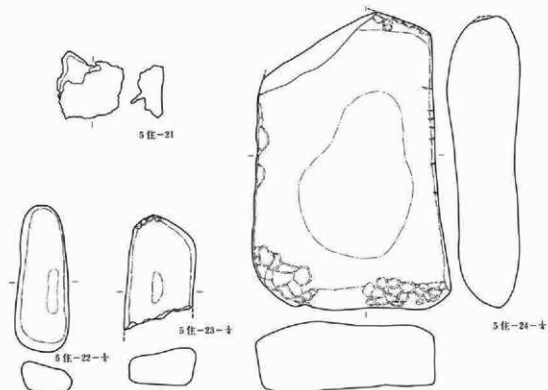
第47図 5号住居跡出土遺物実測図(1)

第2節 住居跡



第48図 5号住居跡出土遺物実測図(2)

第5章 検出された遺構と遺物



第49図 5号住居跡出土遺物実測図(3)

5号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第47図 写真図版59)

遺構名及び 番号	器形及 び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調定焼成②残存③胎土④備考
5住-1	環 土師質	3.5 (8.2) (4.4) フタ土	底部が少し厚く、胴部下端との境に段を持つ。外反する口縁部下の胴部に弱い稜を持つ。新しい段階の環の特色である。底部に糸切痕を残す。	①表面灰白色、断面と底部外面黒色②還元③④1mm以下の白色粒子を多く1-3mmの石英粒子を少量含む
5住-2	環 土師質	— — (5.2) フタ土	底部が厚く、胴部下端との境に段を持つ。底部内側に右回転の渦巻状の痕跡、外面に右回転糸切痕残る。	①表面黒色・断面灰白色②還元③底部④1mm以下の白色粒子を多く含む
5住-3	環 土師質	— — 5.7 床面	底部が厚く、胴部下端の境に段を持つ。底部内側に右回転の渦巻状の痕跡、外面に右回転糸切痕残る。	①灰褐色②酸化③底部のみ定形④1mm前後の赤色粒子を含む
5住-4	環 土師質	5.0 (13.1) 6.7 2号床下土坑フタ土	底部が厚く、胴部下端との境に段を持つ。外反する口縁部下の胴部に弱い稜を持つ。底部内側に右回転の渦巻状の痕跡、外面に右回転糸切痕残る。	①表面灰褐色、断面褐色②酸化③④1mm前後の赤色粒子を少量、1mm以下の白色粒子を多く含む
5住-5	環 土師質	4.1 11.8 6.1 床面	底部が厚く、胴部下端との境に段を持つ。口縁部は外反し、口唇部はほぼ平で内傾している。底部内側に右回転の渦巻状の痕跡、外面に右回転糸切痕残る。	①灰褐色②酸化③定形④1mm以下の白色粒子を多く、1-3mmの石英粒子を少量含む
5住-6	環 土師質	5.7 13.9 6.9 床面+14、フタ土	底部が厚く、胴部はなだらかに立ち上がる。口唇部は外反していない。内側表面は剥離している。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子と1-3mmの石英粒子を多量に含む
5住-7	壺 土師質	— (13.4) — 1号床下土坑	口縁部は外反せず、口唇部は平で強く内傾している内外面にロクロ整形痕を残す。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子と1-3mmの石英粒子を多量に含む
5住-8	壺 土師質	— (16.2) — 床面	口縁部は幅が広く大きく外反している。内外面ロクロ整形痕を残す。	①灰褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を多く含む石英粒子は少ない



## 第2節 住 居 跡

5号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第48・49図 写真図版59・60)

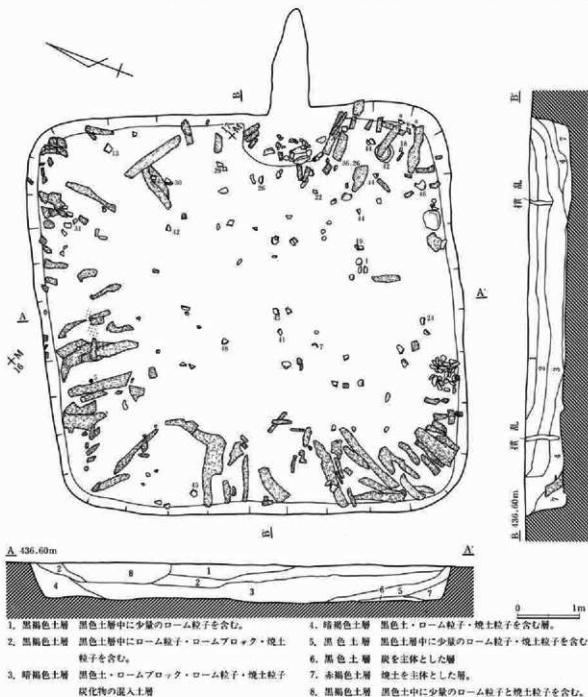
遺物名及び番 号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出 土 位 置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①灰色②焼成③残存④粘土⑤備考
5住-9	坏 土師質	— (13.6) — 2号床下土坑	口縁部が大きく外反している。内外面にロクロ彫り痕が残る。	①灰色②焼成③④⑤ 1mm以下の白色粒子を多く、石英粒子を少量含む
5住-10	埴 土師質	— (13.0) —	口縁部が大きく外反し、玉縁状になっている。内外面にロクロ彫り痕が残る。	①灰色②焼成③④⑤ 1mm以下の白色粒子を多く、石英粒子を少量含む
5住-11	埴 土師質	— — (3.0) 床面	底部が厚く、胴部下端との境に段を持つ。底面に右回転糸切痕が残る。	①灰色②焼成③④⑤ 1mm以下の白色粒子を多く、石英粒子を少し含む
5住-12	埴 土師質	— (11.3) 5.8 床面+21 フク土	貼り付けた高台が、はずれている。口縁部がわずかに外反している。高台部内側の右回転糸切痕が、高台接合時に少し整形されて薄くなっている。	①灰色②焼成③④⑤ 1mm以下の白色粒子と1-3mmの石英粒子を多く含む ⑤大量の石英が表面に浮き出ている
5住-13	埴 土師質	— — (6.2) 床面+1	厚い底部に端部をよく整形している高台が付く。高台部内側中央に右回転糸切痕が残る。比重の高い粘土が使用されている。	①表面灰色色・断面灰色②還元③底部のみは完形④ 1mm以下の白色粒子を多く、石英粒子を少し含む
5住-14	坏 土師質	— (16.0) — 床下土坑、フク土	口唇部は平でやや内傾している。外面にロクロ彫り痕・内面は平に整形している。	①表面、断面とも黒色②焼成③④⑤ 1mm以下の白色粒子を多く含む
5住-15	羽釜	— (19.3) — 床面	胴部から口縁部までやや内傾している。罫は断面三角形を呈し、口唇部はやや幅広く平で内傾している内面のみ黒色を呈しており、2次使用品か。	①外側表面と断面灰色色・内面黒色②還元③④⑤ 1mm以下の白色粒子を多量に、1-3mmの石英粒子を多く含む
5住-16	羽釜	— (24.9) — フク土	断面三角形の罫を持ち、口唇部は平でやや内傾しており中央部に凹線が走る。	①褐色②酸化③④⑤ 1mm以下の白色粒子を多く、1-2mmの石英粒子を少量含む
5住-17	羽釜	— (19.8) — フク土、カマド内	胴部から内傾しながら口唇部に至る。断面三角形の小さな罫を持つ。口唇部はやや厚くなり平で内傾している。胴部は罫付着点で内側にやや押し込まれる。	①灰色②酸化③④⑤ 1mm以下の白色粒子を多く、1-3mmの石英粒子を多く含む
5住-18	羽釜	— (19.3) — 床面、フク土	胴部から丸味を持ち内傾しながら口唇部に至る。罫は細長く、口唇部は平で少し内傾している。罫下部分はナデ、胴中央-下部は口縁部に向かうへら削り。	①表面黒色・断面褐色②酸化③④⑤ 1mm以下の白色粒子を多量に、1-2mmの石英粒子を少量含む
5住-19	羽釜	— (26.6) — 床面+20	胴部はほぼ直線に立ち上がり、口縁部がやや内傾している。罫は断面三角形を呈し、短い。胴部は底部より罫に向かうへら削りや罫下部までへら削りあり。	①褐色②酸化③④⑤ 1mm以下の白色粒子を多く、石英粒子をごく少量含む
5住-20	羽釜	— — (4.0) フク土	底部の径は小さく、底部より罫に向かうへら削りがある。内面は刷毛等による整形痕が残る、その後にはナデ整形している。	①灰色②酸化③④⑤ 1mm以下の白色粒子を多く、1-3mmの石英粒子を多く含む
5住-21	鉄片	重量-70g フク土	大ききの割に重さがある。割れ口を見ると飛散したように気泡多く含むが、ガラス状の結晶部分は顕著でない。小鍛冶遺構に関連した所産か。	
5住-22	石	縦-15.3 横-5.8 重量-450g	全体が磨耗しており、特に中央部分が両端部に比較して多く磨耗している。	①灰色②完形③輝石安山岩(粗粒)④床面+15cm
5住-23	石	縦-12.6 横-7.1 重量-600g	全体的に磨耗しているが、特に中央部分が磨耗しているため砥石としても利用された可能性が高い。	①灰色②欠損③石英閃緑岩④床面+14cm
5住-24	石	縦-31.3 横-21.2 重量-8,400g	実測面上での広い上面中央及び右側面は磨耗している。広い上面は砥石としての可能性もあるが、蓋等をたたく時の下石の可能性あり。右側面は砥石として利用されたものと思われる。	①暗緑色②一部欠損③凝灰質砂岩④床面+14cm

第5章 検出された遺構と遺物

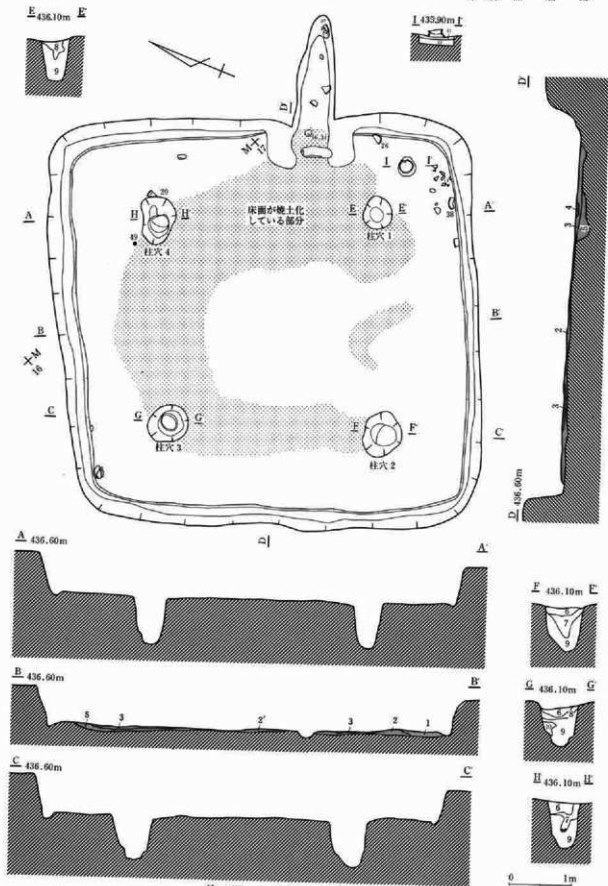
6号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版20・21 遺物写真図版60～63

位置 5号住居跡の東約10mに位置し、L-16・17、M-15・16・17、N-16・17グリットに属する

概要 焼失住居であり、壁に近い住居の床面に屋根に使用したと思われる垂木の炭化材がほぼ放射状に残存していた。竈はこわされており、残存状態が悪い。床面より出土した石は少ない。この住居跡は、焼失住居であるため、床面に残された炭化材や、炭化材下の床面、竈等を詳しく調べてゆくと、他の住居跡ではとらえられない多くの事項について、様々な面から検討が可能であり、多くの示唆に値む情報を提供してくれる。この内容については、後の第6章(3)焼失住居跡に見られる上屋構造と竈の扱い



第50図 6号住居跡実測図(1)



第51図 6号住居跡実測図(2)

## 第5章 検出された遺構と遺物

- |                                    |  |
|------------------------------------|--|
| 1. 黒色土層 黒色土を主体とし、少量のローム粒子を含む。      | 8. 黒色土層 炭を大量に含み、ローム粒子はほとんど含まない。              |
| 2. 褐色土層 黒色土をほとんど含まないローム中心の層。       | 9. 褐色土層 ロームブロック・ローム粒子を主体とした層、少量の黒色土を含む。      |
| 3. 焼土層 焼土を主とし、少量の炭を含む。             | 10. 褐色土層 やわらかいローム層、黒色粒子は含まない。                |
| 4. 焼土層 固く焼かれている土層。                 | 11. 黒褐色土層 黒色土・ローム粒子・焼土粒子の混入土層。               |
| 5. 黒褐色土層 黒色土中に多くのロームブロック・ローム粒子を含む。 | 12. 黒褐色土層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含み、焼土粒子・黒色土を少量含む。 |
| 6. 黒褐色土層 黒色土中にローム粒子を多く含む。          |  |
| 7. 黒褐色土層 1層とは同じだが、少しロームブロック含む。     |  |

の一例で検討しているので、ここでは、住居についての説明に限定して記述する。

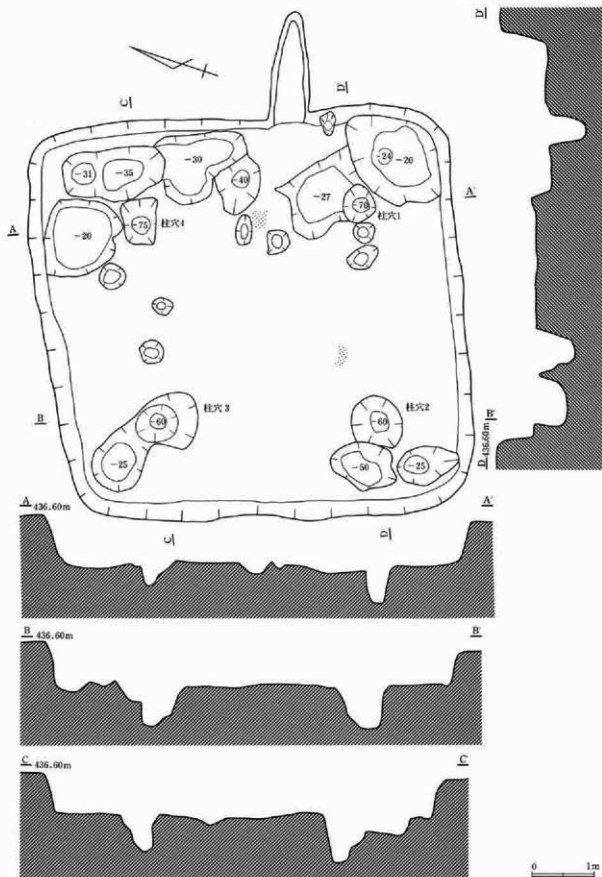
**構造** 床面には、壁近くを中心に大量の炭化材が堆積していた。その在り方は住居中央に向かう放射状を呈しており、炭化材の太さは12cm前後の角材が多い。これらの上下に粉状の炭や灰等が検出された。それらの炭化材上の遺物は、住居中央部に少量検出されたが、きわめて少なかった。それらの炭化材や遺物等を取りのぞくと、床面が検出できた。床面は踏み固められており、4柱穴内側の床面には、0.8～1.5m幅にわたり、南側に開く馬蹄形を呈した焼土面が確認できた。その面は特に固くなっていた。この面においては、4柱穴の存在が明らかに確認できたが、他の土坑等の床面の掘り込みについては検出できなかった。柱穴壁より約1.5m離れた位置に4柱掘られており、4本の位置はほぼ4.5m間隔でほぼ正方形に近い。柱穴1～柱穴4と呼称する。周溝は竈部分を除き、ほぼ全周していた。貯蔵穴は、床面検出時において確認できなかった。壁はやや斜めであるが、地山のロームより形成されており、残りが良好であった。壁の中央部分が四周全面にわたり焼土化していた。

**規模** 東西方向で6.3m、南北方向で6.8mを測り、他の住居跡同様に南北方向に細長い平面形を呈している。壁高は60cm前後で、掘り込みは深い。周溝幅は20～40cmであり、深さは、8cm前後であり浅い。柱穴1は幅45cm、深さ70cm、柱穴2は幅60cm、深さ60cm、柱穴3は幅60cm、深さ60cm、柱穴4は幅45cm、深さ75cmであった。

**遺物** 竈右側で柱穴1の東側に、大きな土師器の甕の口縁部～体部上半が床面を一部掘り込んで、その中に口縁部を上にして埋め込まれていた。おそらく丸底の甕等を置くための器台として転用されていたものと思われる。また床面よりほぼ完形の須恵器平瓶が出土しており注目される。さらに床面や覆土中より、須恵器や土師器の破片が大量に出土している。それらを調べてゆくと、土師器の坏とほぼ同数の須恵器坏が出土しており、この頃の住居跡としてはまれである。須恵器の坏には高台が付けられたもの、削り出して高台を付けたもの、ヘラ起こし後内外面の底部をていねいに整形している坏や、ヘラ起こし後底内外面無調整のもの等を含み、口径も大中小と分けることができそうである。土師器の坏は、口径が大きく、口縁部が大きく外反する皿状の坏や、口径の小さな、口縁部が直立又はやや内傾する坏等が多く出土しており、この時期の特色を示している。他に覆土中や床面上より多く出土。

**床下** 床面調査後、床下面の構造や床面調査時で検出できなかった遺構検出のために、床面の底土及び黒色混入土を1cm前後取り除き、床下調査を行なった。その結果4柱穴の周辺と竈を持つ東壁下部分に多くの掘り込みが検出された。竈右側の東壁と南壁の端の床面に土坑が検出された。この土坑上には、先の遺物の項で記した土師器甕が埋められていた所に位置する。この土坑は一時的には貯蔵穴として利用されたものかもしれないが、住居放棄時においては埋められて床面として利用されていた。他の多くの小土坑も一時的には土坑として利用されたとしても、住居放棄時においては埋められて床面として利用されていた。園中にそれら小土坑の床面よりの深さを記した。

第2節 住 居 跡



第52図 6号住居跡実測図(3)床下部分

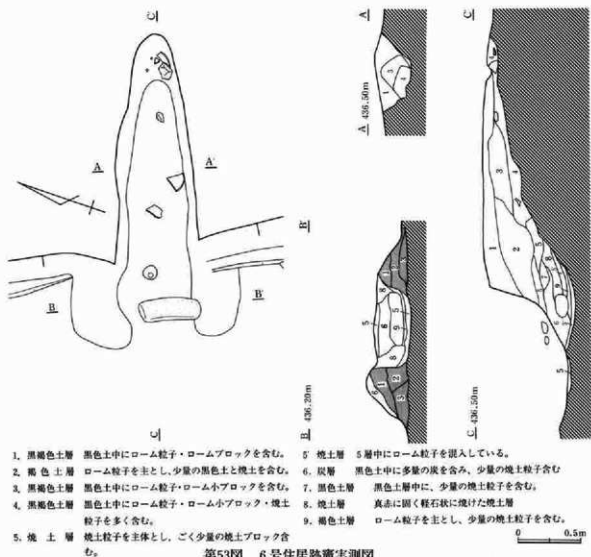
6号住居跡竈

位置 住居東壁やや東寄りに地山のロームを多く掘り込んで竈が構築されていた。

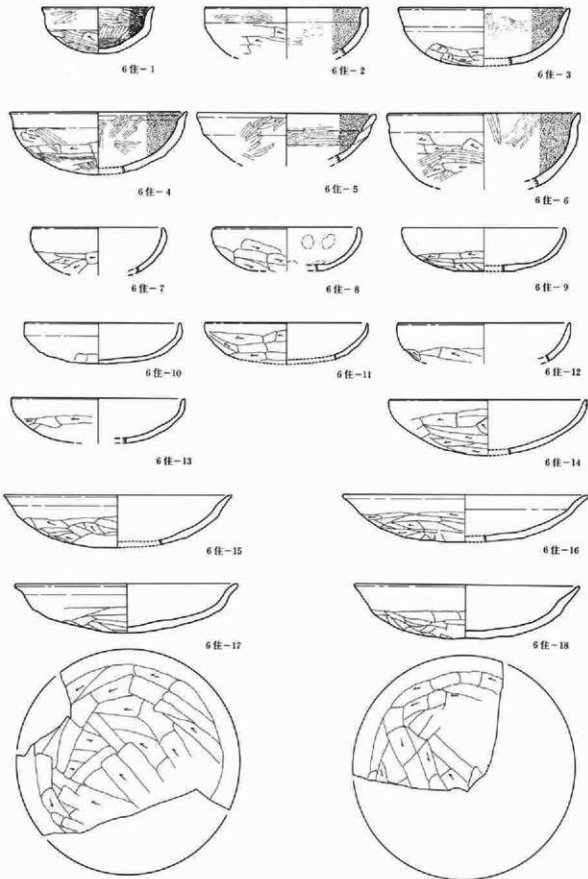
構造 非常に残りの悪い竈である。焚口天井石は燃焼部に落ちており、その上に焼失した住居の垂木の炭化材が重なっており、一部はくずれて低くなっている両袖上部にも炭化材が載っていた。竈の焚口部及び燃焼部の大部分は住居内に位置しており、煙道部に近い燃焼部の一部が壁面を削った位置にあり、煙道部が壁の東側に延びている。他の奈良時代の竈同様に大部分の燃焼部が住居内にある型式である。しかしゆるやかに立ち上がり、煙道部が非常に長いことは注目される。竈構築材としてはロームが大部分であり、石は焚口天井石を除いてほとんど使用されていない。また竈手前にも石は散乱していないため、石は袖の芯や天井部の覆いとしても使用されない作り方であると考えられる。そのため天井部や側壁が直接火を受けており、燃焼部を中心とした竈内より大量の焼土が出土している。

規模 煙道方向で2.5m、両袖方向で1.3mであり、燃焼部は約60cmの円形を呈していた。

遺物 竈内より土師器の大形杯、壺と須恵器の壺・壺の破片等が出土している。

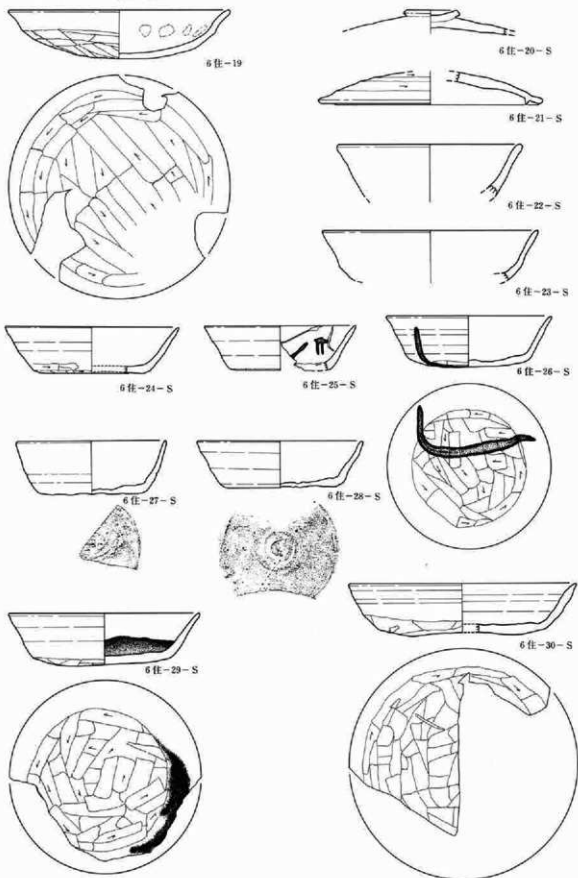


第2節 住 居 跡



第54圖 6住居跡出土遺物実測図(1)

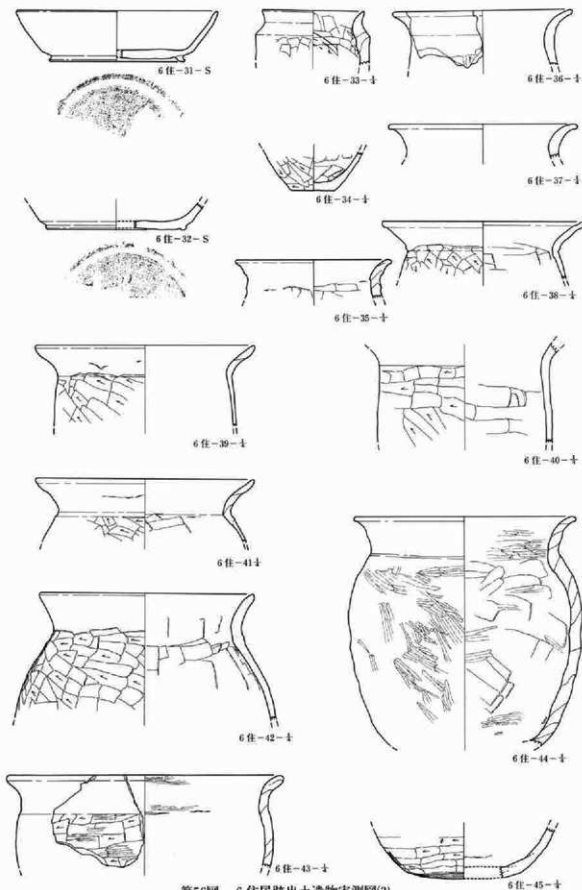
第5章 検出された遺構と遺物



第55図 6住居跡出土遺物実測図(2)

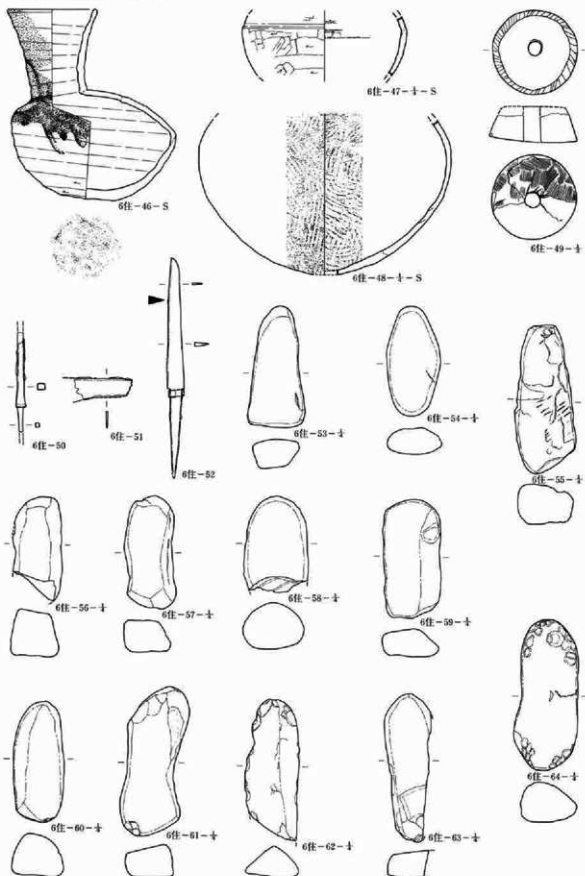


第2節 住居跡



第56図 6住居跡出土遺物実測図(3)

第5章 検出された遺構と遺物



第57図 6住居跡出土遺物実測図(4)

6号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第54図 写真図版60・61)

遺構名及び番 号	器形及 び器種	器高・口径・直径(cm) 出 土 位 置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
6住-1	環 土師	3.6 8.8 — 床面	口径が小さく、器内の厚い杯である。器表面の内外はほぼ全面にわたってへら磨きがなされている。特に内面底部近くは良好に磨かれており黒光りしている。	①内外面的写黒色、約写褐色②酸化③はば完成④1mm以下の白色粒子と石英粒子を多く含む
6住-2	環 土師	— (13.0) — フク土	器内の厚い杯であり、口縁部と体部との境に弱い稜を持つ。口縁部内外面および内面にへら磨きがなされており、黒色処理が行われている。	①内面黒色・外面灰黒色と灰褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子と石英粒子を多く含む
6住-3	環 土師	— (13.6) — フク土	口縁部と体部との境に弱い稜を持つ。口縁部外側横ナデ、内側から内面底部にかけてへら磨き。外側口縁部下はへら削り。	①内面内黒・断面と外面褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子と1~3mmの石英粒子を多く含む
6住-4	環 土師	— (14.1) — フク土	器肉が比較的厚く、口縁部と体部との境に弱い稜を持つ。口縁部は薄く、内側は内傾している。内面全面へら磨き、口縁部外側横ナデ。体部はへら削り。	①内面黒色・断面黒褐色・外面褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を多く含む ⑤石英粒子ほとんど含まず
6住-5	環 土師	— (14.0) — 床面+4	器肉が厚く、口縁部と体部との境に弱い稜を持つ。口縁部は全体に丸味を持つ。内面全面へら磨き、外面の多くもへら磨きされている。	①内面黒色・断面灰黒色・外面黒褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を多く含む
6住-6	瓿	— (15.2) — フク土	器肉が厚く、口縁部と体部との境に弱い稜を持つ。口縁部は全体的に丸味を持つ。内面口縁部付近へら磨き、体部下平へら削りの後で部分的にへら磨き。	①内面黒色・断面黒褐色・外面黒褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を多く含む、石英粒子を少量含む
6住-7	環 土師	— (8.8) — 床面	丸底の底部から、内側気味に立ち上がり口縁部に至る。体部へら削り、口縁部と内面ナデ調整。	①褐色②酸化③④⑤白色粒子ほとんど含まず1mm以下の砂粒を多く含む
6住-8	環 土師	— (11.3) — 床面+15	丸底の底部から、内側気味に立ち上がり口縁部に至る。内面に指頭圧痕あり、内面ナデ整形。	①褐色②酸化③④⑤白色粒子ほとんど含まず1mm以下の砂粒を多く含む
6住-9	環 土師	— (13.0) — フク土	やや平底気味の底部を持ち、口縁部は少し外反した後に内側気味に立ち上がる。底部へら削り。	①褐色②酸化③④⑤白色粒子ほとんど含まず1mm以下の砂粒を多く含む
6住-10	環 土師	3.2 (12.8) — 床面+3 フク土	丸底であるが平底に近づいている。口縁部の長さが長くなり、直立気味に立ち上がる。	①褐色②酸化③④⑤白色粒子ほとんど含まず1mm以下の砂粒を多く含む
6住-11	環 土師	— (13.0) — フク土	体部が長く、口縁部は短く直立気味に立ち上がっている。口縁部と内面横ナデ。外側口縁部下へら削り。	①褐色②酸化③④⑤白色粒子ほとんど含まず1mm以下の砂粒を多く含む
6住-12	環 土師	— (13.6) — フク土	体部は内側しながら外側に開き、口縁部は直立気味に立ち上がる。底部へら削り。	①褐色②酸化③④⑤白色粒子ほとんど含まず1mm以下の砂粒を多く含む
6住-13	環 土師	— (13.6) — カマド内	体部は内側しながら外側に開き、口縁部は直立気味に立ち上がる。	①褐色②酸化③④⑤白色粒子ほとんど含まず1mm~2mmの砂粒を多く含む
6住-14	環 土師	— (16.0) — 床面	大きな杯であり、後の杯より口径で2~3cm大きいしかし器形・整形等は基本的には同じである。底部~体部へら削り、口縁部内外面~内面横ナデ整形。	①褐色②酸化③④⑤白色粒子ほとんど含まず1~2mmの砂粒を多く含む
6住-15	甕形環 土師	— (18.2) — フク土 M-16	口縁部が大きく外反する特色を持ち、口径が大きい杯である。口縁部内外面横ナデ、内面横ナデ、口縁部下の外面へら削り整形。	①褐色②酸化③④⑤白色粒子ほとんど含まず1~2mmの砂粒を多く含む
6住-16	甕形環 土師	— (18.2) — フク土	口縁部が大きく外反する特色を持ち、口径が大きい杯である。口縁部内外面横ナデ、内面横ナデ、口縁部下の外面へら削り整形。	①褐色②酸化③④⑤白色粒子ほとんど含まず1~2mmの砂粒を多く含む

第5章 検出された遺構と遺物

6号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第54・55図 写真図版61)

遺構名及び番 号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出 土 位 置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
6住-17	皿形環土師	3.85 17.5 一 床下、フタ土	口縁部が少し立ち上がった後に大きく外反している口径の大きな環である。口縁部内外面横ナテ、口縁部下の外面へう割り、その部分に炭の付着あり。	①褐色②酸化③劣④白色粒子ほとんど含まず1mm以下の砂粒を多く含む ⑤外面全体に少量の炭の付着あり
6住-18	皿形環土師	4.2 (17.5) 一 カマド内	口縁部が少し立ち上がった後に大きく外反している立ち上がった部分が厚くなり、口唇部に向かい薄くなっている。内面横ナテ、口縁部下外面へう割り。	①褐色②酸化③劣④白色粒子ほとんど含まず。1-2mmの砂及び赤色粒子を含む
6住-19	皿形環土師	3.9 17.6 一 フタ土	丸味を持った底部から大きく外反する口縁部に続く外側に強い縁を持つ部分の内側に滑潤な痕跡が残る。内面横ナテ、口縁部外面へう割り。	①褐色②酸化③劣④白色粒子ほとんど含まず。1-3mmの砂粒を含む ⑤全体的に赤味を持った色調である
6住-20	蓋須恵器	— — — 床下土坑1号	環状つまみを持つ環蓋である。つまみの端部は鋭く削り込まれており、天井部と接合する部分にも深い削り込みが認められる。気泡化した自然釉がかかる。	①灰色②還元焼結③劣④1mm以下の石英粒子を少し、白色粒子と黒色粒子を多く含む。⑤黒色粒子が気泡化
6住-21	蓋須恵器	— (17.35) 一 フタ土	明確なカエリを持つ環蓋であり、環状つまみを持つものと思われる。カエリの付く部分より内側天井部にへう割り。内側天井部中央に直線状のナテ整形。	①灰色②還元焼結③劣④1mm以下の白色粒子を多く、石英粒子を少量含む
6住-22	環須恵器	— (14.4) 一 床面+3、カマド内	器向が厚く、口唇部も丸く丸く仕上げている。胎土や焼成等より見て混入品の可能性あり。	①灰褐色②酸化③劣④1mm以下の白色粒子と1-3mmの石英粒子多く含む
6住-23	碗須恵器	— (18.5) 一 フタ土	器高が低く、口径の大きな環である。器向は薄く、内面滑潤な痕跡あり。	①灰色②還元焼結③劣④白色粒子をほとんど含まず石英粒子は観察できない
6住-24	環須恵器	3.65 (13.8) (8.0) 床面+25	器高が低く、口径の大きな環である。器向は薄く、口唇部は細く丸く仕上げている。底部は手持へう割りと思われ、底部周辺、体部下端手持へう割り。	①灰色②還元焼結③劣④白色粒子をほとんど含まず、石英粒子は観察できない。
6住-25	環須恵器	3.5 (12.0) 一 フタ土	器向が薄く、口唇部は細く丸く仕上げている。底部は回転へう割り整形と思われる。内面に火跡状の痕跡あり。口縁部内外面に重ね焼痕あり。	①灰色②還元焼結③劣④1mm以下の白色粒子を多く含む。1-2mmの石英粒子をごく少量含む
6住-26	環須恵器	4.0 13.1 9.2 床面	器高のやや高い環であり、体部一口縁部は直線状で外側にやや開いている。底部は手持へう割りであり、体部下平のへう割りはなし。底部に火跡状痕跡あり。	①灰褐色②還元焼結③劣④1mm以下の白色粒子を多く含む。石英粒子はほとんど観察できない
6住-27	環須恵器	4.2 (11.7) (8.1) 床下フタ土	体部は比較的直立気味に立ち上がり、器高も高い。内面底部に渦巻状の凹凸が、外側底部中央にへう起こし時に出来る削り残しの突起が残る。	①灰白色②還元③劣④白色粒子は胎土色調が同じため不明、石英粒子もほとんど観察できない
6住-28	環須恵器	3.75 (13.1) (8.7) M-16	体部一口縁部が直線状でなく、少し波を打っている。底部は薄く、内面に渦巻状の凹凸が、外側底部中央にへう起こし時に残る渦巻状の凹凸と突起あり。	①灰色②還元焼結③劣④1mm以下の白色粒子を多く含む。石英粒子はほとんど観察できない
6住-29	環須恵器	4.2 (15.2) 11.0 床面、柱穴	底部全体に丸味を持つ環であり、体部一口縁部は直線的に外側へ開く。底部が特に厚い特色を持ち、底部内面は滑潤な痕跡あり。内面底部と外側体部下平の一部が噴炭により黒色を呈する	①灰褐色②還元焼結③劣④1mm以下の白色粒子を多く含む。1-3mmの石英粒子を少量含む。内面底部と外側体部下平の一部が噴炭により黒色を呈する
6住-30	環須恵器	4.1 (18.0) (13.3) 床面+27、M-16 24	底部全体に丸味を持つ環であるが、内側底部中央がやや内側に盛り上がっている。内側内面は滑潤な痕跡あり。外側は手持へう割り整形がなされている。	①内面・断面灰色、外面灰褐色②還元焼結③劣④1mm以下の白色粒子を多く含む。気泡化している黒色粒子を多く含む

6号住居 出土遺物観察表 (図版番号56・57図 写真図版61・62)

遺構名及び 番号	器形及 び器種	器高・口径・底径(m) 出 土 位 置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①灰色②焼成③残存④粘土⑤備考
6住-31	環 須恵器	4.0 (16.0) (10.8) 床面+42、L-17 カマド内	付高台を持つ環である。内側底部は回転ナデ整形の 後さらに指等で不定方向のナデあり、底部外側は回 転ヘラ調整後に高台を貼りつけ、ていどに整形。	①灰色②還元焼締③④1mm以下の白 色粒子を多く、石英粒子は観察できな い
6住-32	環 須恵器	— — 11.0 L-16、フタ土	削り出し高台を持つ環である。高台と底部の高さは 同じ、高台周辺を削り込んで高台を作っている。	①灰色②還元焼締③④1mm以下の白 色粒子を多く、石英粒子は不明
6住-33	小形甕 土師	— (10.8) — カマ土、床下フタ土	器内が非常に厚い小形甕と思われる。頸部は短く、 口縁部は大きく外反し、口唇部を丸く上げている 外面ヘラ削り、内面は器面が密でナデ整形。	①内側②断面黒色、外面褐色③焼化④ ⑤1mm前後の白色粒子と石英粒子を 多く含む
6住-34	甕 土師	— — 4.5 カマド内	底径が小さい甕の底部と思われる。体部外面ヘラ削 り、内面ナデ整形、底部外面ヘラ削り。	①褐色②焼化③底部周辺のみ完形④1 mm前後の砂粒と赤色粒子を少量含む
6住-35	小形甕 土師	— (16.6) — フタ土	器内の厚い小形甕である。短い口縁部が大きく外反 している。口縁部内外面横ナデ。	②内側黒色・断面・外面褐色③焼化④ ⑤1mm以下の白色粒子を多く含む
6住-36	甕 土師	— (19.0) — 床面+45	器内が厚く、口縁部が大きく外反する甕である。体 部ヘラ削り、口縁部横ナデ整形。	①断面褐色、表面黒褐色②焼化③④⑤ 1mm以下の白色粒子を多く含む
6住-37	甕 土師	— (20.0) — フタ土	器内が厚く、口縁部が大きく外反する甕であり、頸 部は35に比してさらに短い。口縁部内外面横ナデ。	①断面黒色・表面黒褐色②焼化③④⑤ 1mm以下の白色粒子を多く含む
6住-38	甕 土師	— (21.3) — 床面	口径の大きな甕である。口縁部は体部より鋭角を持 ち外反する。体部外側は底部より頸部に向かう削り	①褐色②焼化③④⑤1mm以下の白色・ 石英・赤色粒子を多く含む
6住-39	甕 土師	— (23.0) — カマド	口径の大きな甕である。口縁部は体部より鋭角を持 ち外反する。体部外側は左上方向への斜ヘラ削り。	①褐色②焼化③④⑤1mm以下の白色粒 子と砂を多く含む
6住-40	甕 土師	— — — 床下フタ土	体部にはほぼ直立気味に立ち上がっており、口縁部は 大きく外反している。体部外側横方向ヘラ削り。	①灰色②焼化③④⑤1mm以下の白色粒 子と1-3mmの砂粒を多く含む
6住-41	甕 土師	— 23.2 — 床面+46、フタ土	丸い胴部の甕と思われる。口縁部は大きく外反し、 先端近くで少し内彎する。体部外側やや横方向削り。	①褐色②焼化③④⑤1mm以下の砂粒と 白色粒子を多く含む
6住-42	甕 土師	— 22.8 — 床面+3	丸い胴を持つ大きな甕である。器内は厚く口縁部は なだらかに外反している。胴部は左方向の横ヘラ削 り、口縁部外面横ナデ整形。	①灰色②還元軟質③口縁一側上部ま ではほぼ完形④1mm以下の砂粒と白色粒 子多く含む⑤住居焼失時に火を受けた
6住-43	甕 土師	— (29.5) — カマド	器内の厚い甕であり、胴部は左横方向のヘラ削り後 1部ヘラ磨きを持つ特色を示し、粘土、色調等より みて、他の一群と異なる特色を示す。	①褐色②焼化③④⑤1mm前後の石英・ 長石粒子を大量に含む
6住-44	甕 土師	— 23.4 — 床面+20、カマド 内、フタ土	丸い胴を持つ甕であり、頸部は直に立ち上がり、 口縁部は大きく外反している。体部外面と口縁部内 側とはほぼ全面にヘラ磨きが行われており、内側内 面の一部も磨かれている特異な甕である。	①灰褐色②焼化③④⑤1mm以下の白色 粒子を多く含み、1-2mmの砂粒や赤 色粒子を少量含む
6住-45	壺 須恵器	— — (12.2) 床面+34、M-17	やや丸い底部を持つ製品と思われる。外側全面ヘラ 削りが行われており、底部周辺は手持ヘラ削りと 思われる。内面は回転ナデ整形である。	①灰色②還元焼締③④⑤粒子が密で、 ある。1mm以下の白色粒子を少量含む
6住-46	平瓶 須恵器	14.7 6.9 4.1 床面	細長い漏斗状の口縁部が、中心からずれた天井部に 付く、前部に接合面があり、天井部に粘土板状合痕 あり、体部下半に回転ヘラ削りがあり、丸底頂部に「X」 記号あり。	①灰色②還元焼締③ほぼ完形④粒子が 密であり、特徴的な粘土は観察できな い。⑤緑色の自然釉が認められる

第5章 検出された遺構と遺物

6号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第57図 写真図版62・63)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
6住-47	瓶 須恵器	— — — カマド内、フク土 M-17	肩部上に比線が施される。体部下部下に手持への竹削りによる調整跡あり。内面には早い回転力で作なうろくろ目がある。体部内面上方にしぼり目あり。	①灰色②還元焼締③厚④1mm以下の多くの黒色粒子を含む。⑤月夜野古遺跡群の製品でない可能性大
6住-48	提瓶? 須恵器	— — — フク土	提瓶か小形甕。内外面にあて目と印目があり、調整に細かいき目が施される。	①灰色②還元焼締③厚④1mm以下の多くの黒色粒子を含む
6住-49	紡錘車	— — — 床下	上半部を欠く。側部に細い削り跡が文様状に残る。底部は細い削りによる調整痕あり。軸穴は径0.8cmでていねいに穿孔されている。重さは45gである。	①灰色③面上すべて欠損。下面の一部欠損④滑石
6住-50	鉄鏝 鉄器	鏝柄中程幅-0.6 茎元幅-0.6	鏝区を持つ鏝片である。茎は断面方形で鏝舌の痕跡はない。錆化は極目気味である。鏝底部にはほぼ同じ厚さで区に至り、急に幅重ねが厚くなる。先と底部は調査時欠損。	
6住-51	板金?	長さ-4.4 幅-1.7	実存物用途不明の板金である。重ね薄く耳2ヶ所がめくれ上る。フク土より出土。	
6住-52	刀子	全長-15.1 刀長-10.2 棟重-0.4 フク土	実存刀子であり、茎先に鉄製鞘を装着している。平造りでおそらくは平棟か肉置の少ない丸棟。棟区・刃区は鋭利に作り出されている。切先は鋒がやや枯れ気味で物打は小刀区が生じていないため砥減りは少ない。棟は刀側をやや、特に矢印より切先にかけて強くうづくため、焼入れは強かった可能性あり。茎は直線的で鏝区同様の厚みで基部に至りわずかに重ねを減じる程度である。錆化は極目状でなし。小圭目が先端に単位の小さい板目である。	
6住-53	石	縦-12.7 横-6.1	全体が磨耗しており、一部が火を受けて炭素吸着。	①灰色③完形④輝石安山岩(粗粒)⑤床+4cm 重さ360g
6住-54	石	縦-11.5 横-5.7 重量-250g	全体が磨耗している。中央部幅が大きい。	①灰白色③完形④球質安山岩⑤床面
6住-55	石	縦-15.6 横-6.6 重量-520g	全体が磨耗している。幅広い部分が多く吸炭により黒色を呈している。	①灰色③完形④球質安山岩⑤床面+1-2cm
6住-56	石	縦-10.9 横-5.3 重量-420g	断面はほぼ方形を呈しており、類例としては少ない。ほぼ中央と思われる箇所が割れている。	①灰色③約角④安山安山岩⑤床面+1-2cm
6住-57	石	縦-11.9 横-5.6 重量-360g	両端がやや張り出しており、こも石としては利用しやすい石と思われる。吸炭により黒色を呈する。	①灰色③完形④輝石安山岩(粗粒)⑤床面+4cm
6住-58	石	縦-10.2 横-6.9 重量-500g	全体が磨耗しているが、他の石より磨耗の状態が悪い。	①黄褐色③1部欠損④アイサイト質凝灰岩?⑤床面+1-2
6住-59	石	縦-12.5 横-6.2 重量-370g	全体が磨耗している。一部が吸炭により黒色を呈している。	①灰色③完形④安山デイサイト⑤床面+4cm
6住-60	石	縦-12.6 横-5.5 重量-380g	全体が磨耗している。細い側の先端部に打ち欠けた跡所あり。	①灰白色③完形④安山デイサイト⑤床面+1-2cm
6住-61	石	縦-15.7 横-7.4 重量-530g	これまでの石の中では最も表面が潤沢である。潤滑部が広がっている。一部吸炭により黒色を呈す。	①灰色③完形④黒色頁岩⑤床面+4cm
6住-62	石	縦-14.8 横-5.8 重量-350g	断面三角形を呈しており、類例としては少ない。全体が磨耗している。	①灰白色③完形④黒色頁岩⑤フク土
6住-63	石	縦-15.7 横-5.0 重量-350g	全体が磨耗している。全体が吸炭により黒色を呈している。	①黒色③一部欠損④黒色頁岩⑤床面+4cm
6住-64	石	縦-15.8 横-6.8 重量-670g	粒子の荒い石であるが、表面が磨耗している。中央部が凹状を呈する石である。	①淡緑色③完形④輝石安山岩(粗粒)⑤床面+1-2cm

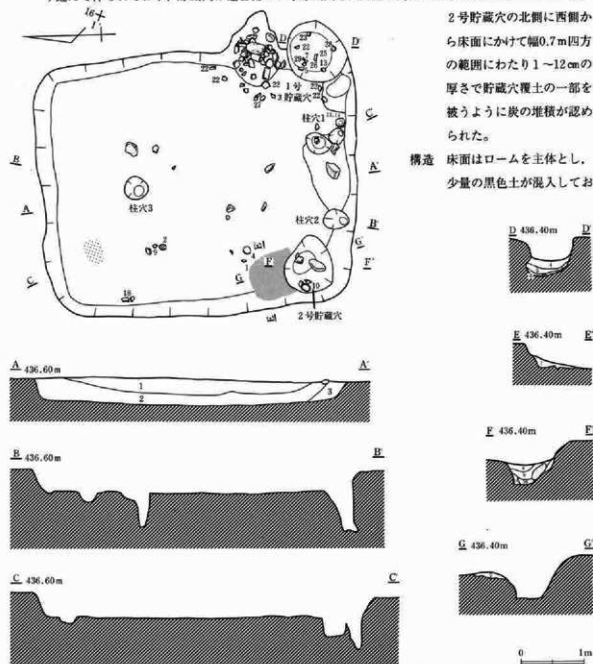
## 7号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版22 遺物写真図版63・64

位置 6号住居跡の北約15mに位置し、8・9・10号住居跡に近接して囲まれている。H-15、T-15・16 J-15グリットに属する。

概要 住居跡の掘り込みが比較的深く3本柱を持つと考えられる住居である。竈は住居東壁南寄りに壁を掘り込んで作られており、貯蔵穴は竈右側の1号貯蔵穴と西南壁の角地の2号貯蔵穴が掘られていた。

2号貯蔵穴の北側に西側から床面にかけて幅0.7m四方の範囲にわたり1~12cmの厚さで貯蔵穴覆土の一部を被うように炭の堆積が認められた。

構造 床面はロームを主体とし、少量の黒色土が混入してお



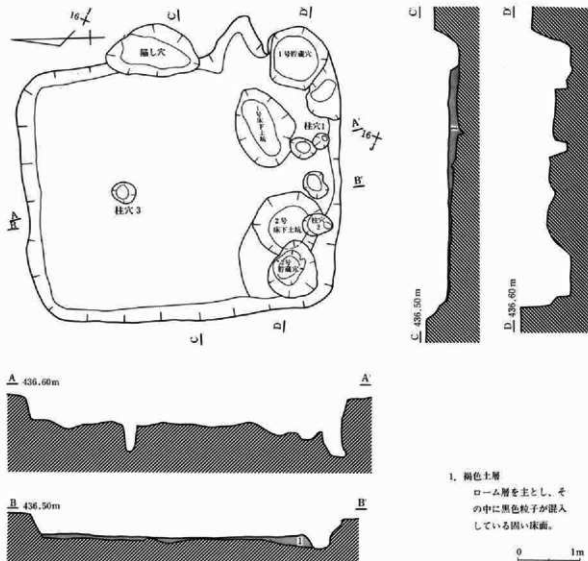
1. 黒褐色土層 黒色土中にわずかに白色軽石・ローム粒子を含む。
2. 黒褐色土層 黒色土中に少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
3. 褐色土層 ローム粒子・ロームブロック・黒色土の混入土層。
4. 黒色土層 黒色土を主とし、焼土粒子とローム粒子を含む。
5. 茶褐色土層 ローム粒子と黒色粒子の土層中に多量の焼土を含む。
6. 赤褐色土層 焼土粒子を中心とした層。
7. 暗褐色土層 炭を主とした層、少量のローム粒子を含む軟質層。
8. 黒褐色土層 黒色土を主とし、少量のローム粒子を含む軟質層。
9. 黒褐色土層 黒色土層中に少量の炭化物を含む。
10. 暗褐色土層 ロームブロック・ローム粒子を主とし、黒色土を少量含む。
11. 褐色土層 ロームを主とした層、少量の黒色粒子を含む。

第58図 7号住居跡実測図

第5章 検出された遺構と遺物

り、3本柱に囲まれた床面部分が特に低く、異色土の混入が多く踏み固められていた。柱穴3以北の床面は黒色土の混入が少なく、やや高い面となっていた。床下土坑は検出されなかった。柱穴は3個と思われる。深さは検出面よりいずれも0.5m前後であり、柱穴1・2は壁に接して掘られており、やや住居中央に傾斜している。柱穴3はほぼ垂直であり、3個の柱穴はほぼ二等辺三角形を呈していた。周溝はおそらく存在するであろうが、それと思われる痕跡は所々認められるが明らかな溝としては検出できなかった。竈右側に貯蔵穴と思われる土坑が検出され、この1号貯蔵穴は大きく深く、西壁を掘り込んでおり、東壁側の竈右袖下ぎりぎりまで掘り込んでありやや異質である。他に西南壁の角地に2号貯蔵穴が掘られており、中から石が出土した。壁は南壁以外はほぼ垂直に立ち上がっている。南壁の2柱穴に囲まれた部分の壁は、地山のロームを住居外から床面に向かいしだいに深くなるように掘り込んでおり、出入口部分を想定させる。

規模 東西方向で4.2m南北方向で5mを測り、他の住居跡同様に南北方向に長い平面形を呈している。壁高は30～40cmで、残りは比較的良好である。柱穴1は径25cm、深さ45cm、柱穴2は径30cm、深さ60cm、柱穴3は径30cm、深さ55cmである。1号貯蔵穴は東西方向90cm、南北方向1mの楕円形を呈し、深さ



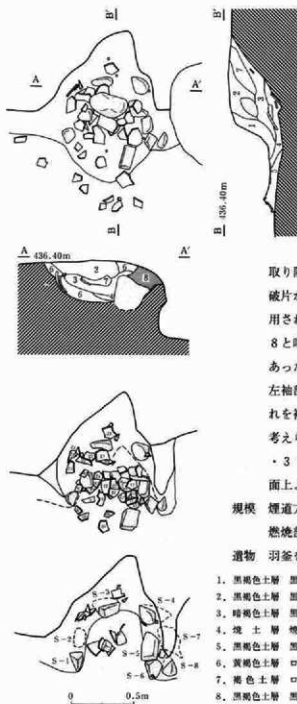
第59図 7号住居跡床下実測図



は床面より30cmである。2号貯蔵穴は東西90cm南北方向1mの楕円形を呈し、深さは床面より40cmである。柱穴1の北側に小穴があり、幅は東西方向30cm、南北方向40cm、深さ33cmである。

**遺物** 床面や覆土中より、土師質土器・埴のほぼ完形に近い製品や大量の羽釜・灰釉陶器の埴・瓶等が出土しており、覆土中より大量の羽釜の破片及び少量の土師器製の破片が出土している。

**床下** 床面調査後、床面下の基礎構造及び床面調査時で検出できなかった遺構検出のために、床面の盛土及び黒色混入を2~14cmほど取り除き、床面下調査を行なった。その結果、長軸1.2m、短軸90cm、深さ16cmの1号床下土坑と直径約1m、深さ14cmのほぼ円形を呈する2号床下土坑及び東壁の竈北側に、



第60図 7号住居跡竈実測図

縄文時代早期と思われる陥し穴が1基検出された。大きさは南北方向1.5m、東西方向80cm、深さは住居確認面より43cmであった。陥し穴中央小穴は検出されなかった。

#### 7号住居跡竈

**位置** 住居東壁やや南寄りに地山のロームを多く掘り込んで竈が構築されていた。

**構造** 竈の焚口部は住居内に位置するが、熱焼部の大部分と煙道部は壁のロームを掘り込んで住居外に作られていた。竈熱焼部中央に20×30cm大の石が落石していた。この石を

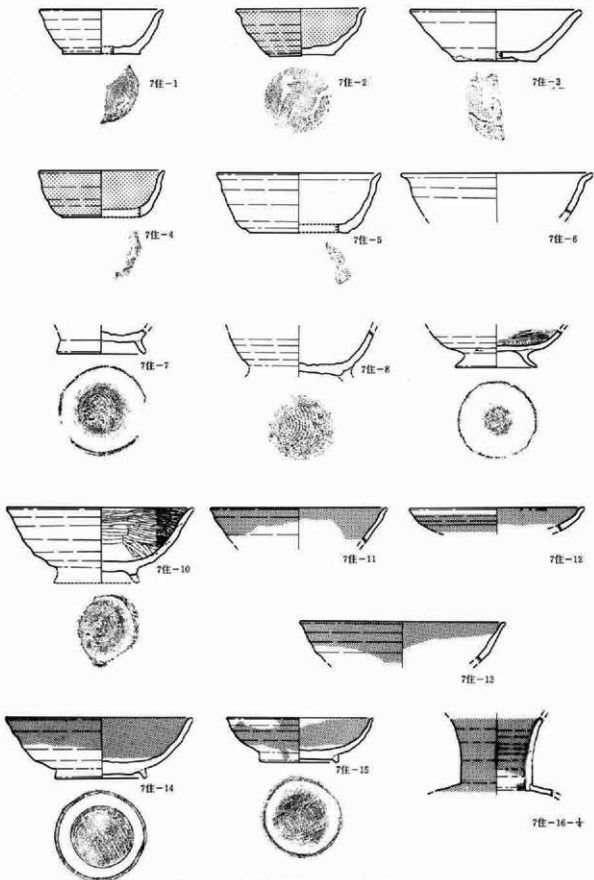
取り除くと、他の多くの放棄された竈同様に、多くの羽釜の破片が出土した。それらの遺物を取り除くと、竈構築時に使用された大きな石が7個検出された。その石にS-1~S-8と呼称し、S-1とS-3の間に石は検出されなかったが、あったものと考え、S-2をその部分に想定した。すると竈左袖部にS-1とS-3が右袖部にS-4~S-6が来てそれを補強する形としてS-7とS-8が置かれているものと考えられる。この竈は竈内より多くの石が出土したが、他の1・3・5号住居跡と異なり天井石と考えられる石が竈内や床面上より検出されなかった。

**規模** 煙道方向で1m、両袖方向で1mであり、高さは不明である。熱焼部幅は45cmであった。

**遺物** 羽釜を中心にして、多く出土している。

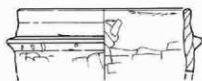
1. 黒褐色土層 黒色土層中にわずかなローム粒と焼土粒を含む。
2. 黒褐色土層 黒褐色土層中に少量のローム粒・灰・焼土粒を含む。
3. 暗褐色土層 黒色土とローム粒を主体とした層の中に多くの焼土粒を含む。
4. 焼土層 焼土を主体とした層。ローム粒を少量含む。
5. 黒褐色土層 黒色土層中にローム粒・灰・灰等を少量含む。
6. 黄褐色土層 ローム粒・焼土粒の混入土層。
7. 褐色土層 ロームを主体とした層。ローム粒・焼土粒を含む。
8. 黒褐色土層 黒色土を主体とし、ローム粒を少量含む。

第5章 検出された遺構と遺物

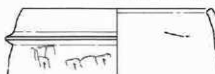


第61図 7号住居跡出土遺物実測図(1)

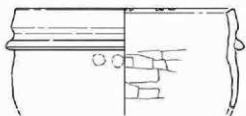
第2節 住 居 跡



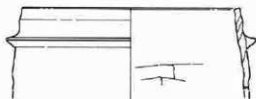
7住-17-4



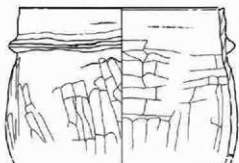
7住-18-4



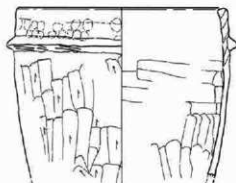
7住-19-4



7住-20-4



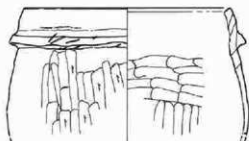
7住-21-4



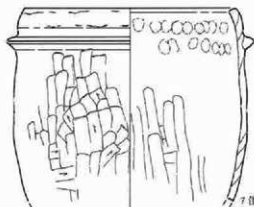
7住-22-4



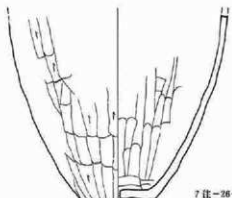
7住-23-4



7住-24-4



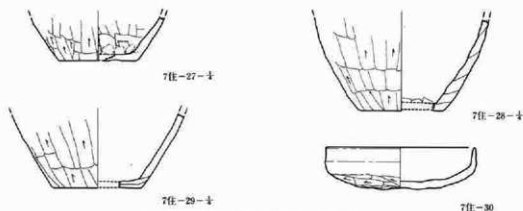
7住-25-4



7住-26-4

第62图 7号住居跡出土遺物实测图(2)

第5章 検出された遺構と遺物



第63図 7号住居跡出土遺物実測図(3)

7号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第61・62図 写真図版63・64)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(m) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④粘土⑤備考
7住-1	環土師質	3.5 (9.6) (6.2)	底部下端と底部端との境に段を持つ。口縁部下に弱い稜を持つ。底部右回転糸切痕。	①外側表面-内側口縁部灰色、口縁部下の断面と表面黒色②還元③灰
7住-2	環土師質	3.7 10.3 5.2	口縁部下に明瞭な稜を持ち、口縁部は一度直立した後に大きく外反している。	①灰黒色②還元焼成③ほぼ完形④1mm以下の白色粒子を多く含む
7住-3	環土師質	4.0 (13.6) (6.4)	カマド内	①灰白色②還元③灰④1mm以下の白色粒子を多く含む
7住-4	環土師質	— (9.8) —	床面	①表面黒色・断面灰黒色②還元焼成③灰④密
7住-5	碗?土師質	4.7 (12.8) —	1号貯蔵穴	①灰褐色②酸化③灰④1mm以下の白色粒子を多く含む
7住-6	碗?土師質	— (15.0) —	カマド内	①表面黒色・断面灰褐色②酸化③灰④白色粒子・赤色粒子を含む。⑤一部焼
7住-7	碗土師質	— — 6.7	1号貯蔵穴	①褐色②酸化③底部のみほぼ完形④1mm以下の白色粒子を多く含む
7住-8	碗土師質	— — —	カマド内	①灰白色②還元軟質③灰④1mm内外の白色粒子を多く含む器面の荒い土器
7住-9	碗	— — 6.4	フク土	①内側表面黒色・断面と高台部と表面褐色②酸化③底部と高台はほぼ完形④1mm内外の白色粒子と2mm内外の石英を含む
7住-10	碗土師質	5.0 14.5 6.3	貯蔵穴フク土	①内側表面黒色・外側表面黒褐色・断面灰黒色②酸化③高台部以外完形④1mm以下の白色粒子と1~4mmの石英含む
7住-11	碗灰釉	— (14.1) —	床面	①表面・断面灰白色・輪縁緑色と一部白②還元③灰④密
7住-12	皿?灰釉	— (13.6) —	床面	①表面・断面灰白色・輪縁緑色②還元③灰④密
7住-13	碗灰釉	— (16.0) —	1号貯蔵穴	①灰白色・輪縁緑色②還元③灰④密

7号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号61・62・63図 写真図版64)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
7住-14	埴灰桶	4.8 14.7 7.0 床面	底部が非常に厚く、細長い断面三角形の高台を持つ口縁部に外反は認められない。高台部内側に右回転糸切痕が残る。	①灰白色・輪造明～白色②還元③④⑤成淡山
7住-15	埴灰桶	3.5 11.6 6.4 フク土	浅い埴である。底部が厚く断面三角形の短い高台を持つ。口縁端部が少し外反する。	①灰白色・輪造明～白色・一部輪造り状に緑色②還元③④⑤成淡山
7住-16	広口瓶	— — — 貯蔵穴フク土	広口瓶の頸部～体部上平と思われる。体部中央をくりぬいた後に直接頸部をつけているものと思える。	①灰白色・輪造緑色②還元③頸部のみ④密
7住-17	羽釜	— (18.2) — カマド内	体部～口縁部が直立気味に立ち上がり、断面三角形の筒を持つ。口縁部はやや丸味を持つ。	①灰白色②還元③④1mm以下の白色粒子を多く1mm前後の石英少量含む
7住-18	羽釜	— (12.0) — 床面	体部～口縁部が内彎気味に立ち上がり、断面三角形の筒を持つ。口縁部はやや丸く内傾している。	①灰白色②還元③④1mm以下の白色粒子を多く1mm前後の石英少量含む
7住-19	羽釜	— (23.0) — カマド内	直立する体部～口縁部が、跗付着点でのみ内側に押し込まれている。口縁部は平で内傾している。	①褐色。内側の一部灰褐色②酸化③④1mm以下の白色粒と石英粒子含む
7住-20	羽釜	— (23.0) — カマド内	体部～口縁部がやや内傾し、断面三角形の筒を持つ口縁部は平でやや内傾している。	①内面灰褐色。断面と外面灰褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子・石英含む
7住-21	羽釜	— (21.6) — カマド内	体部は内彎しつつ立ち上がり、跗付着点下より直立気味に立ち内傾する平らな口縁部へと続く。	①灰褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を多く、2mm前後の石英少量含む
7住-22	羽釜	— (21.8) — カマド内 1号貯蔵穴	体部は内彎しつつ直立気味に立ち上がり、口縁部はやや丸味を持つがほぼ平である。口縁部に粘土部が体部に向かうへら削り痕有り。	①接合した右半分と左半分で色が異なり、2次使用を示す。右半分褐色・左半分黒色②酸化③④⑤白色粒子含む
7住-23	羽釜	— (20.6) — カマド内	体部は内彎しつつ立ち上がり、跗付着点で内側に押し込まれ、直立に立ち上がる。口縁部は平で内傾。	①表面灰褐色。内面灰褐色②酸化③④⑤1mm以下の白色粒子を多く含む
7住-24	羽釜	— (21.6) — カマド内	体部は内彎しつつ立ち上がり、跗付着点で内側に押し込まれ、直立に立ち上がる。口縁部は平で内傾。	①褐色②酸化③④⑤1mm以下の白色粒子を多く、2mm内外の石英少量含む
7住-25	羽釜	— (22.4) — カマド内	体部は直立気味に立ち上がり、口縁部は内側に強く内傾している。口縁部はやや丸味を帯びている。口縁部内側に指頭圧痕。体部外側へら削り。	①褐色②酸化③④⑤1mm以下の白色粒子を多く、1mm前後の赤色粒子と石英粒子を少量含む
7住-26	羽釜	— — (7.6) カマド内	羽釜の体部～底部と思われる。底面の一部に削り、他はナテ整形。体部外側は跗に向かうへら削り。内側は口縁部に向かう指ナテ整形。	①褐色②酸化③④⑤1mm以下の白色粒子を多く、1mm前後の石英粒子を少量含む。
7住-27	羽釜	— — (8.3) 床面	羽釜の体部下平～底部と思われる。底面は指ナテ整形。外側体部は跗に向かうへら削り。内面は横ナテ。	①褐色②酸化③④⑤1mm内外の白色粒子を多く含む
7住-28	羽釜	— — (8.8) 床面、1号貯蔵穴	羽釜の体部下平～底部と思われる。底部ナテ整形。外側体部は跗に向かうへら削り。内面は横ナテ。	①内面～断面灰褐色・外面黒色②酸化③④⑤白色粒子と2mm前後の石英含む
7住-29	羽釜	— — (9.5) 床面、カマド内	羽釜の体部下平～底部と思われる。底部ナテ整形。外側体部は跗に向かうへら削り。内面は横ナテ。	①褐色②酸化③④⑤1mm以下の白色粒子を多く、1mm前後の石英少量含む
7住-30	環土師器	3.2 (11.6) — 床面	平に近い丸底の底部を持つ厚である。口縁部横ナテ体部下平へら削り。体部下平と口縁部との間は指整形。底部は手持へら削り。内面はナテ整形。	①褐色②酸化③④⑤1mm以下の白色粒子と石英粒子を多く含む⑥他よりの搬入品と思われる

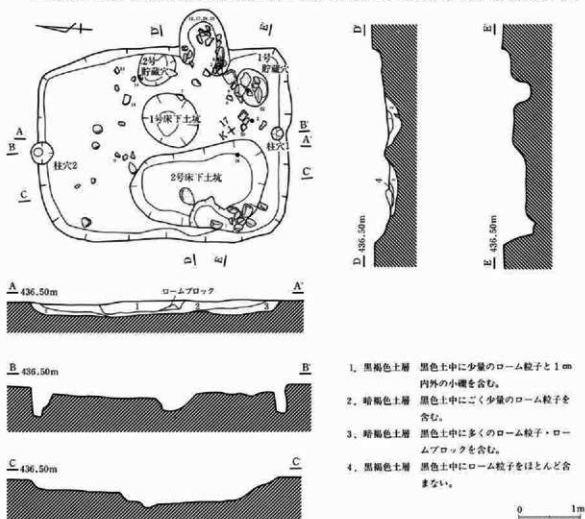
第5章 検出された遺構と遺物

8号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版23 遺物写真図版64・65

位置 7号住居跡の南側約4mに位置し、J-16・17、K-16・17グリットに属する。

概要 住居跡の掘り込みが比較的浅く、残りの悪い住居跡である。床面調査時に床下土坑のすべてを掘り上げ床下部分も同時に掘り進んだ。北壁中央部と南壁中央部の2箇所に柱穴を持つ、2本柱の家であり、当遺跡唯一の例である。床面下に2つの床下土坑を持ち、竈左右に2個の貯蔵穴を持つ。竈は東壁の南寄りに地山のロームを多く掘り込んで作られており、残りが非常に悪い。5号住居跡同様に住居内より出土した主な石について、重量測定を行なった。

構造 床面はロームを主とし、少量の黒色土の混入よりできており、踏み固められた状態ではなかった。床面中央に1つ、床面西南寄りに大きな床下土坑が検出された。床面中央の床下土坑を1号床下土坑とし、床面南西寄りの床下土坑を2号床下土坑と呼称する。この覆土はいずれも軟質で、床面としては利用されていなかったものと思われる。柱穴は北壁中央部と南壁中央部の2箇所に掘られており、南側の柱穴を柱穴1、北側の柱穴を柱穴2と呼称する。柱穴はやや住居内側に傾いて掘られた様子を示しており、柱は垂直に立てられたのではなく、住居内側に斜めに立てられた可能性が高い。このことは壁中に柱穴を持つ3・5・7号住居の柱穴と同じ傾向を示している。周溝の検出に努めたが検出できなかった。貯蔵穴は竈南側と北側にあり、南側の貯蔵穴を1号貯蔵穴、北側の貯蔵穴を2号貯



第64図 8号住居跡実測図

蔵穴と呼称する。1号貯蔵穴には大小7つの石に混じり、炭のブロックや焼土粒子が多く混入しており、2号貯蔵穴中には須恵器製の破片が多く出土した。壁は四辺とも残りが悪く、なだらかな傾斜となっており、本来の壁の在り方は理解できない。

**規模** 東西方向で3 m、南北方向で4 mを測り、他の住居跡同様に南北方向に長い平面形を呈している。壁高は16~20 cmで残りが悪い。柱穴1は直径22 cm、床面からの深さ33 cm、柱穴2は直径34 cm、床面からの深さ40 cmであった。1号床下土坑は直径80 cmのほぼ円形を呈し、深さは0.23 mであり、2号床下土坑は南北方向で2.2 m、東西方向で1.3 mのほぼ小判形を呈しており、深さは15 cmと浅い。1号貯蔵穴は直径50 cmでほぼ円形を呈しており、深さは床面より25 cmである。2号貯蔵穴は直径約60 cmの楕円形を呈しており、深さは床面より28 cmである。

**遺物** 床面や覆土中より土師質土器・埴輪や大量の羽釜の大きな破片が多く出土している。また覆土中より羽釜や土師質土器の埴輪・埴輪・羽釜・土師器や須恵器の製の破片が数多く出土している。発掘区域内においては石を産出する地区はなく、周辺においては北東部に流れる赤谷川より運び込まなければならぬ。そのため遺跡内より出土する石はすべて人の手によって運び込まれたと考えられる。その石が何故住居内床面及び覆土中より出土するのかわかる手がかりとして、5号住居跡で行なったように、大部分の石の重量測定を実施した。対象となった石は大小11個であり、内訳は0.1~0.5 kgまでの石は6個体、0.6~1 kgまでの石が3個体、1 kgの石が1個体、5.7 kgの石が1個体であった。最も多かったのは、0.1~0.5 kgの6個体であり、前に測定した5号住居跡で最も多かった。3 kg~4 kgの石6個体とは全く傾向を異にしていた。

## 8号住居跡

**位置** 住居東壁やや南寄りに地山ロームを多く掘り込んで竈が構築されていた。

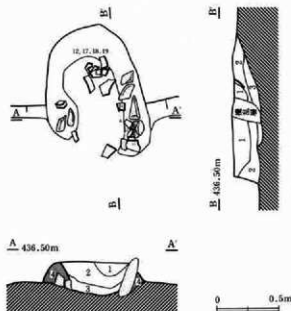
**構造** 竈の焚口部は住居内に位置するが、燃焼部の大部分と煙道部は壁のロームを掘り込んで住居外に作られている。この竈は住居の掘り込みが浅いため、表面の大部分が攪乱を受けており残りが悪い。さら

に竈構築材として用いられた石の残りが悪く袖部位置に7個体の石が出土したが、原位置を留めていると考えられるのは約半数と考えられる。このような状態のために煙道部等については全く不明である。しかし燃焼部には多くの焼土が検出されており多く使用されていたことを示している。

**規模** 煙道方向で1.1 m、両袖方向で80 cmであり燃焼部幅は約40 cmである。

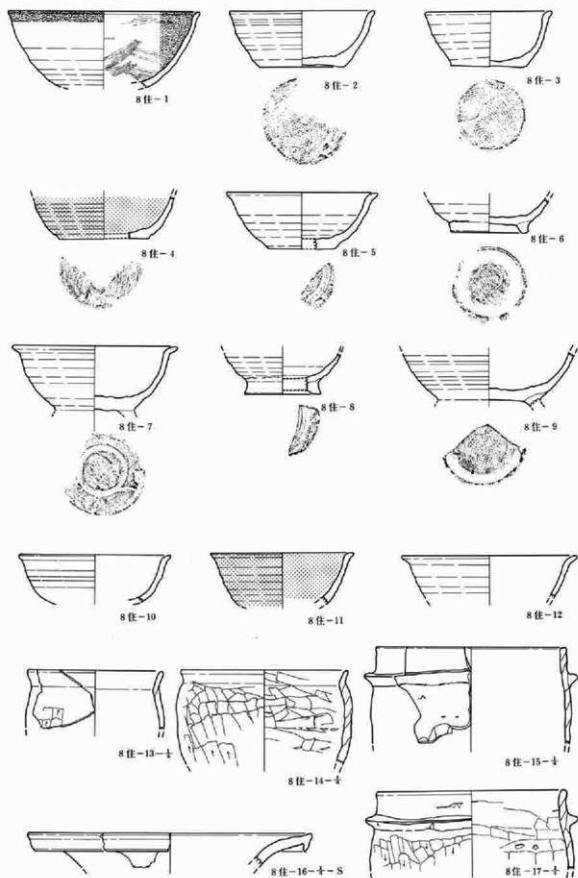
**遺物** 羽釜や土師質土器埴輪等が多く出土している。

1. 暗褐色土層 黒色土中にローム粒子・ロームブロックを多く、焼土粒子・炭化物を少量含む。
2. 暗褐色土層 黒色土中にローム・ロームブロック・焼土粒子・炭化物を少量含む。
3. 赤褐色土層 焼土粒子・炭・灰の混入土層。やわらかい。
4. 暗褐色土層 黒色土とローム粒子の混入土層。



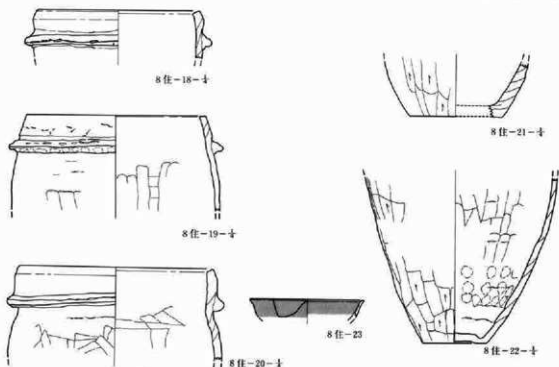
第65図 8号住居跡竈実測図

第5章 検出された遺構と遺物



第66図 8号住居跡出土遺物実測図(1)





第67図 8号住居跡出土遺物実測図(2)

8号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第66図 写真図版64・65)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
8住-1	埴 床面	— (15.0) —	ロクロ使用の埴と思われ、外面に右回転ロクロ整形痕が残る。内面は間断なくへう磨きされており、後に焼炭により黒光りを呈している。内外面とも作りが非常にいいである。	①白緑部内外面—内面全面焼炭により黒色・断面灰褐色・外面褐色②酸化③与④1mm以下の白色粒子を多く、2mm内外の石英粒子少量含む
8住-2	坏 土師質 カマド、貯蔵穴	4.4 (11.4) 6.7	底部端と体部下端の間に段有り、体部は外面に開き口縁部下で直立気味に立ち上がり、口縁部が外反する。口縁部下に強い後縁を持つ底部右回転糸切痕。	①褐色②酸化③与④1mm以下の白色粒子と石英粒子を少量含む
8住-3	坏 土師質 カマド、3号貯蔵穴 フク土	4.3 9.8 5.7	底部端と体部下端との間に段を持つ。体部は丸味を持ち立ち上がり、口縁部は器内を厚くして外反し、厚く幅広い口唇部を呈する。内面底部に渦巻状の凹凸を呈し、底部外面に右回転糸切痕を残す。	①灰白色②還元③与④1mm以下の白色粒子を多く含む
8住-4	坏 土師質 3号貯蔵穴 K-17	— — (7.2)	底部端と体部下端との間に段を持つ。体部は内彎しつつ外側へ開く。底部に右回転糸切痕が残る。	①内面黒色・断面褐色・外面灰褐色②酸化焼成③与④1mm以下の白色粒子を多く含む
8住-5	埴 土師質 フク土 カマド内	4.5 (11.9) (5.0)	底部が厚く、底部端と体部下端との間に段を持つ。底部周辺に糸切痕の消えた部分があるため、高台の付いた可能性大。厚く幅広い口唇部を呈する。	①褐色②酸化③与④1mm以下の白色粒子を多く含む
8住-6	埴 土師質 カマド内	— — 6.0	高台を持つ埴である。高台は雑に貼り付けられている。内面底部に渦巻状の凹凸が、高台部内面に右回転糸切痕が残る。	①灰褐色②酸化③底部成形・体部下平の一部残存④1mm以下の白色粒子を多く、1-2mmの赤色粒子少量含む
8住-7	埴 土師質 床面+6、フク土	5.1 (12.3) —	高台を持つ埴であり、高台ははずれている。底部が厚く、体部は強く内彎して立ち上がる。口唇部は大きく外反する。高台部内面右回転糸切痕が残る。	①表面灰褐色・断面灰白色②還元③与④1mm以下の白色粒子を多く含む

第5章 検出された遺構と遺物

8号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第66・67図 写真図版65)

遺構色及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
8住-8	埴土師質 床面	— — (5.9)	高台部は一部しか残存していないが、体部の器内に比較して厚い器肉の高台と思われる。高台の整形はいいいで、唇付部分は水平に整形されている。	①灰褐色②酸化③Ⅹ④1mm以下の白色粒子を少く少量含む
8住-9	埴土師質 床面+10、カマド貯蔵穴	— — —	高台下部の欠けている域である。口径等大きな埴と思われる。高台部内面に右回転と思われる赤切痕があり、表面ナテ整形が行われている。	①灰褐色②酸化③Ⅹ④1mm以下の赤色粒子を多く、1-2mmの赤色粒子を少量含む
8住-10	埴土師質 床面	— (12.0) —	口縁部から体部への小さな破片である。口縁部は大きく外反し、幅広くになっている。	①灰褐色②酸化③Ⅹ④1mm以下の白色粒子を多く含む
8住-11	埴土師質 床面+15、フク土	— (11.3) —	口縁部は厚く、大きく外反し、幅広い口唇部を呈している。内面横ナテ、外面クロロ目が残る。	①外面黒色・断面と内面灰褐色②酸化③Ⅹ④1mm以下の白色粒子を含む
8住-12	埴土師質 カマド内、フク土	— (14.0) —	口縁部が大きく外反している。内面横ナテ、外面にクロロ目が残る。	①内外外面黒色・断面灰白色②還元③Ⅹ④1mm以下の白色粒子を多く含む
8住-13	埴土師質 カマド左貯蔵穴内	— (6.2) —	小形埴の口縁部から体部への小破片。口縁部内外面横ナテ、体部上平へう削り、クロロ使用可能性有。	①灰褐色②酸化③Ⅹ④1mm以下の砂粒を多く、1mm前後の石英粒子少し含む
8住-14	埴土師質 床面+8	— (17.5) —	口縁部が短く、弱く外反する埴である。器内の厚い整形の跡を襲っており、内面に粘土の接合痕が明確に残る。体部外面へう削り、内面ナテ整形。	①黒褐色②酸化③Ⅹ④1mm以下の白色粒子を多く、2-3mmの赤色粒子と石英粒子を少量含む
8住-15	羽釜 カマド内、フク土	— (20.0) —	体部から口縁部がほぼ直に立ち上がる。口唇部は平で中央がやや凹状を呈する断面三角形の短い羽持つ。	①灰白色②還元③Ⅹ④1mm以下の粒子を多く2-3mmの石英粒子少量含む
8住-16	埴須恵器 カマド左貯蔵穴	— (29.8) —	大形埴口縁部の小さな破片であり、前段階の製品が運び込まれたものと思われる。口縁部は幅広くほぼ垂直に付き、端部は細く仕上げている。	①灰色②還元地焼③Ⅹ④1mm以下の粒子を多量に含む2mm前後の石英を少量含む
8住-17	羽釜(脚付?) カマド内	— (20.0) —	口唇部がやや丸味を持ち、筒は断面三角形を呈する。体部のへう削りは筒に向かう削りでなく、底部に向かうため、脚付羽釜の可能性大。	①灰褐色②酸化③Ⅹ④1mm以下の白色粒子を多く、2mm内外の石英粒子を少量含む
8住-18	羽釜 カマド内	— (17.0) —	口唇部は平で内傾している。筒上の口縁部内はやや厚くなる。筒は断面三角形を呈し、端部貼付。	①灰褐色②酸化③Ⅹ④1mm以下の白色粒子と1-3mmの石英粒子を多く含む
8住-19	羽釜 カマド内	— (19.0) —	体部から口縁部は直線状で全体が内傾している。口唇部は平では水平である。筒は着時に筒の上下を強く体部に押し込んでいる。	①内面灰褐色・外面灰褐色②酸化③Ⅹ④1mm以下の白色粒子と1-3mmの石英粒子を多く含む
8住-20	羽釜 床面+10、3号貯蔵穴	— (20.4) —	口縁部が特に厚い羽釜であり、口唇部は平で強く内傾し、中央に凹線が走る。筒は断面三角形を呈し、幅広く短い。	①外面-口縁部内外面灰白色・内面体部褐色②酸化③Ⅹ④1mm以下の白色粒子と1-3mmの石英粒子多く含む
8住-21	羽釜 カマド、貯蔵穴	— — (10.0)	羽釜の底部と思われる。底部より口縁部に向かうへう削り、内面ナテ整形、底部ナテ整形。	①灰白色②還元③Ⅹ④1mm以下の白色粒子と1-3mmの石英粒子多く含む
8住-22	羽釜 1・3号貯蔵穴	— — (6.9)	羽釜の底部と思われる。底部より口縁部に向かうへう削り、内面ナテと指整形、底部ナテ整形。	①灰白色②還元③Ⅹ④1mm以下の白色粒子と1-3mmの石英粒子多く含む
8住-23	埴緑釉 フク土	— (9.0) —	当遺跡唯一の緑釉陶器である。口径が小さく、口縁部がやや外反する。	①素地は灰褐色。釉は内外面とも濃緑色で1mm以下の黒色粒子を少し含む

## 9号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版24

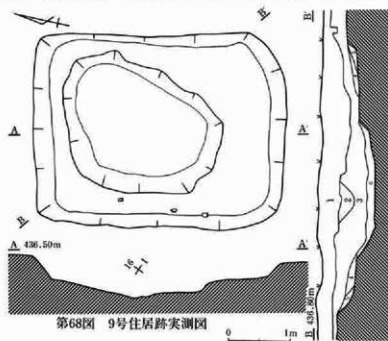
位置 7号住居跡の東約1.5mに位置し、H-15・16、I-16グリットに属する。

概要 9号住居跡と呼称したが、竈や柱穴を持たずに、出土遺物も非常に少ないため、他の一般の住居跡とは異なり、堅穴住居跡としては疑問が残るが、一応9号住居跡として取り扱った。住居跡でないなら、奈良・平安時代とはほぼ同一覆土と掘り込み面を持つ、この遺構の性格は注目される。

構造 住居内床面に、床面面積のほぼ半分を占める大きな土坑が検出された。この土坑は、耕作土からの土層断面や床面上での平面プラン確認時における観察等からみて、この住居跡に伴うものであり、住居使用時において大きな土坑となっていたことを示している。この土坑を被う蓋的施設も確認できなかった。土坑以外の床面は踏み固められたという状態ではなく、ほぼ水平なロームを床面としている。

規模 東西方向3m、南北方向4mを測り、他の住居跡と同様に、南北方向に長い平面形を呈している。壁高は20~30cmであり、床下土坑は長軸23cm、短軸20cm、深さは床面より20cmであった。

遺物 床下土坑以外の住居覆土中より、土師器と須恵器の坏数個体及び甕の破片が多く出土している。



第68図 9号住居跡実測図

1. 黒色土層 耕作土。
2. 黒褐色土層 黒色土層中にローム粒子を多量に、焼土粒子を少量含む。
3. 黒褐色土層 黒色土中にローム粒子を多量に、焼土粒子をごく少量含む。
4. 黒褐色土層 黒色土を主とし、少量のローム粒子、焼土粒子を含む。
5. 褐色土層 ロームを中心とした層 少量の黒色土を含む。
6. 褐色土層 ロームブロック、ローム粒子を主とした層、少量の黒色土を混入している。

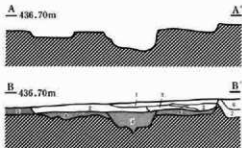
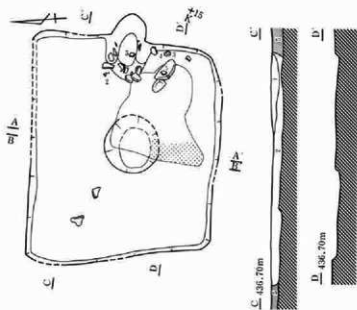


第69図 9号住居跡出土遺物実測図

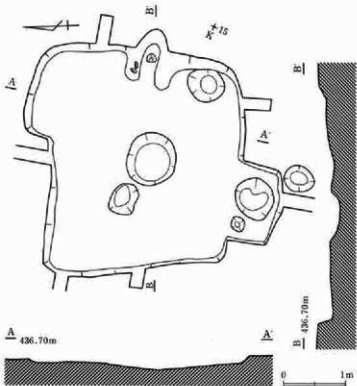
9号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第69図)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
9住-1	環土師器	— (11.0) —	口縁部が少し内押しつつ外上方へ直上上がる。口縁部の短い環である。口縁部内外面横ナデ。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を少量含む
9住-2	環須恵器	3.3 (13.0) (7.4)	口径・底径が大きく器高の低い環であり、体部下半~底部全面にわたり回転へら削り整形。	①灰色②還元③④白色粒子含まず、1mm以下の黒色粒子多く含む。他産品
9住-3	黒形環土師器	— (17.0) —	口径が大きく、外側に強く外反する環であり、口縁下外側に稜を持つ。口縁部横ナデ、体部外側削り。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を少量含む

第5章 検出された遺構と遺物



第70図 10号住居跡実測図



第71図 10号住居跡床下実測図

10号住居跡（平安時代）遺構

写真図版25 遺物写真図版65

位置 7号住居跡西約4mに位置しJ-14、K-14グリットに属する。

概要 この住居跡は、遺構確認面から、住居床面までの深さは5~10cmで非常に浅く床面はロームを掘り込んでいない。さらに住居跡覆土と覆土周辺の地山の土との区別が困難であった。最終的に図示した平面形まで確認できたが、他の例よりみて不自然であるため、ほぼ完全な形で検出はできなかったものと思われる。住居東壁に竈を持つが、柱穴や周溝等は確認できなかった。床下土坑を持つが、この床下土坑覆土とその周辺が異状に固く締まっているため硬度測定を実施した。

構造 床面は、竈周辺から床下土坑南東部周辺に確認されたが、他の部分は明らかでなかった。他の住居床面に見られるような褐色ロームの床ではなく黒色粒子を多く含んだ面であっ

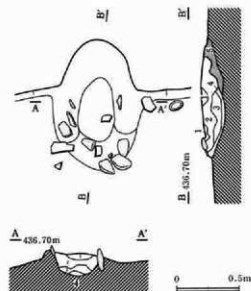
1. 黒褐色土層 黒色土中に少量のローム粒子を含む。
2. 暗褐色土層 黒色土中にローム粒子を多く含む固い土層
3. 焼土層 赤褐色を呈し固く焼けている。
4. 黒褐色土層 黒色土中にローム粒子・ロームブロックを多く含む。
5. 暗褐色土層 ロームを主とした層中に少量の黒色土の混入している地山層。
6. 黒色土層 黒色土を主とした層。ごく少量のローム粒子を含む。
7. 暗褐色土層 ローム粒子を多量に含むやわらかい層。
8. 黒褐色土層 黒色土とローム粒子の混入土層。

た。特にその中で床下土坑覆土を中心とした床面が異常なほど踏み固められていた。そこで山中式標準型土壌硬度計を用い、測定した数値を「硬度指数と支持力強度との対照表」の理論値に置き変えた結果、次のようなことが指摘できた。第70因中で床下土坑南側で点描してある部分の指示力強度は $13.97\text{kg/cm}^2 \sim 30.14\text{kg/cm}^2$ であった。特に床下土坑覆土部分が最も硬かった。点描部分以外の床下土坑覆土部分は $16.68\text{kg/cm}^2 \sim 20.09\text{kg/cm}^2$ であり、点描部分及び床下土坑部分を除く、竈西側の線で区画された部分は、 $12.82\text{kg/cm}^2 \sim 22.09\text{kg/cm}^2$ であり、やはり支持力が強かった。この線で囲まれた部分以外では $3.49\text{kg/cm}^2 \sim 8.54\text{kg/cm}^2$ であり、軟質であることを示した。この数値は、住居中央部床面下に掘り込まれていた床下土坑は住居使用時において、埋められその部分は固く締まっていたことを示している。これは前述の8・9号住居跡とは全く異なる傾向を示している。柱穴、貯蔵穴、周溝等は全く検出できなかった。壁は前述のごとく5~10cmで浅く、残りが非常に悪かった。特に住居北壁側は残りが悪く床下面まで掘り進んで約10cmの壁高を得たほどであった。他の近接する7号住居跡においては30~40cmであり比較すると残りの悪いことは明らかである。

**規模** 東西方向で3.6m、南北方向で2.9mであり、東西方向の長い唯一の例であり、このことより見て、北壁については疑問が残る、さらに北側まで住居が延びている可能性を示している。壁高は5~10cmと浅い。床下土坑は直径90cmのほぼ円形を呈しており、深さは20cm前後である。

**遺物** 床面や覆土中より土師質土器境や羽釜等が多く出土している。

**床下** 床面調査時において、北側 $\frac{1}{3}$ 及び西側の一部はすべてに床下部分まで掘り進んでいたが、他の部分の床面調査後全面にわたり床下面の調査を実施した。その結果、竈南側に直径55cmのほぼ円形で深さ8cmの土坑と床下土坑の西側に、直径40cmのほぼ円形で深さ23cmの土坑が検出された。



1. 黒色土層 焼土粒子をほとんど含まない土層。
2. 赤褐色土層 黒色土層中に細かい焼土粒子を均一に含む。
3. 焼土層 大量の焼土が厚く堆積している。
4. 褐色土層 地山のロームを主とした層。ローム粒子少量含む。
5. 黒褐色土層 黒色粒子を中心とした層。ローム粒子を少量含む。

第72図 10号住居跡竈実測図

#### 10号住居跡竈

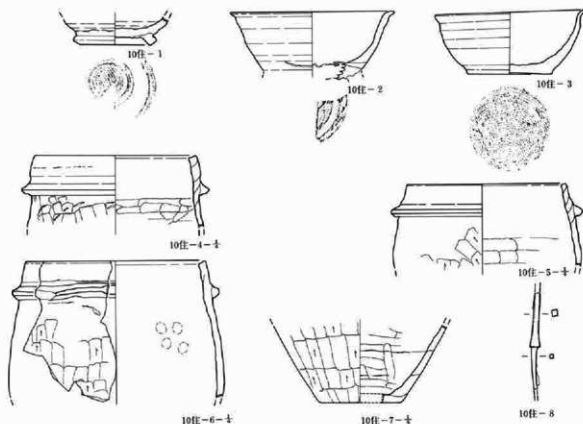
**位置** 住居東壁に地山のローム及びロームと黒色土の混入土層を掘り込んで竈が構築されていた。

**構造** 竈の焚口部及び燃燒部の約半分が住居内に位置する。竈上部はほとんどこわされており、残存の非常に悪い竈である。竈内袖部に石は7個存在したが、その中で左袖の3個と右袖の1個の石が、カマド構築時の位置を留めている可能性がある。この袖石を芯として作られた竈内燃燒部には大量の焼土が残存していた。

**規模** 煙道方向で1m、両袖方向で70cm、燃燒部幅30cmである。

**遺物** 竈内より土師質土器の境と羽釜の破片が多く出土した。

第5章 検出された遺構と遺物



第73図 10号住居跡出土遺物実測図

10号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第73図 写真図版65)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・径形(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
10住-1	碗 土師質	— — 6.1	断面方形の高台を持つ。内面底部渦巻状の凹凸を持ち、高台内側中央部に右回転糸切痕を持つ。	①灰褐色②酸化③外④1mm以下の白色粒子を多く、2mm前後の赤色粒子含む
10住-2	碗 土師質	— (13.0) —	体部下端に高台を持つ碗であり、高台がはずれている。口縁部が大きく外反し、口唇部幅が広い。	①褐色②酸化③外④1mm以下の白色粒子を少量含む
10住-3	碗 土師質	4.9 11.8 6.7	底部の厚い平底であり、底部端と体部下端との境に段を持つ。体部は内彎しつつ外上方へ開き、口縁外反。	①灰色②還元③外④1mm以下の白色粒子と石英粒子を少量含む。
10住-4	羽釜	— (17.0) —	体部から口縁部がやや内傾しつつ直立気味に立ち上がり、口唇部は平で中央やや凹状を呈する。	①褐色②酸化③外④1mm以下の白色粒子と石英粒子を多く含む
10住-5	羽釜	— (16.8) —	体部から口縁部がやや内傾しつつ直線的に立ち上がり、口唇部はやや丸味を帯びる。柄は短い。	①灰白色②還元③外④1mm以下の白色粒子を多く、1~3mmの石英少量含む
10住-6	羽釜	— (18.8) —	体部から口縁部がやや内傾しつつ口縁部に至る。口唇部は平でやや内傾しており、中央が凹状を呈する。柄は断面三角形で短く、縁に付着している。	①灰白色②還元③外④1mm以下の白色粒子を多く、1~3mmの石英粒子を少量含む
10住-7	羽釜	— — (8.5)	羽釜の体部下半~底部と思われる。体部外側は底部より口縁部に向かうへつ開り。底部はナゲ整形。	①灰褐色②酸化③外④1mm以下の白色粒子を多く1~2mmの石英少量含む
10住-8	鍔 鉄器	鍔被中程幅-0.4 基元幅-0.37x土	鍔の鍔被部から基にかけての鍔片である。鍔先、基元の欠損は調査時、鍔被部は断面方形、鍔区が残る。基はくの字状におじ曲っているのは旧時、錆化は経目状が概目流れとなる。	

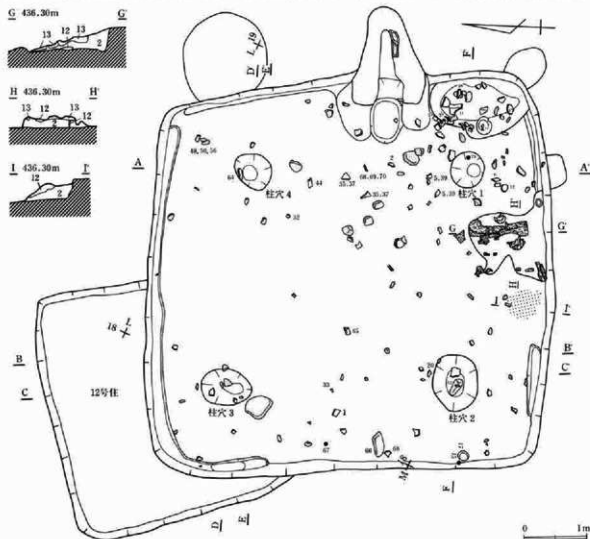
## 11号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版26 遺物写真図版65・66・67・68

位置 6号住居跡の東約4mに位置し、K-18、L-17・18・19、M-17・18グリットに属する。

概要 住居の掘り込みが深く、大きな平面形を呈し、竈も当遺跡では最大である。4本柱を持ち、床下構造の作りも非常にいいである。12号住居跡と重複し、12号住居跡の南半分を掘り込んでいる。

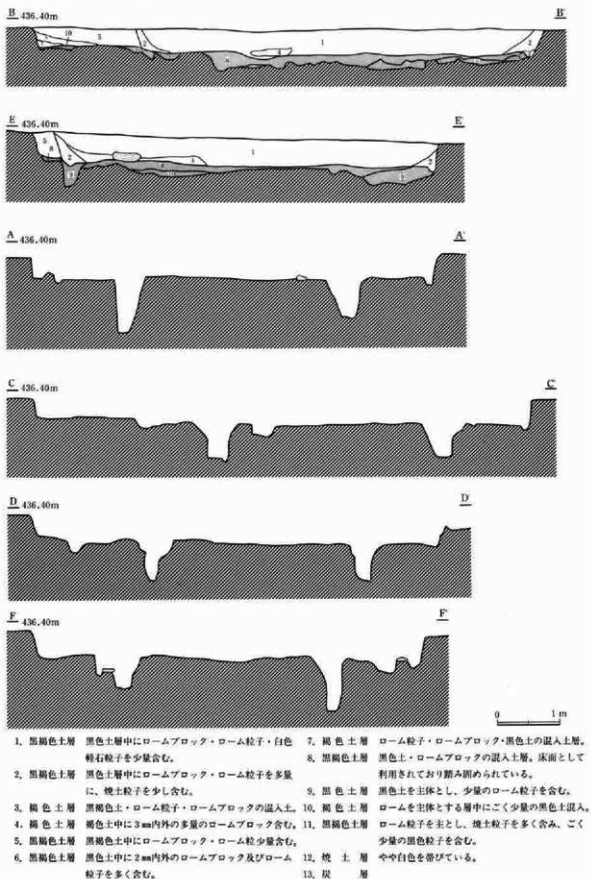
構造 床面は地山のロームを直接床面とした部分はほとんどなく、ロームを一度5~25cmほど掘り下げた後にロームブロック・ローム粒子の土を中心とし、その中に黒色土を混入した土を盛って床面を作っている。そのため床面はロームブロック・ローム粒子・黒色土の入り乱れた土より形成されている。そのため住居を埋めている土と区別して床面を検出するのに多くの困難を伴った。柱穴は4本検出されいずれも壁から1.3~1.5mの位置にあり、ほぼ垂直に掘られていた。周溝は西壁と南壁の一部以外では、ほぼ全面に掘られていたものと思われる。竈右側手前に貯蔵穴が検出された。住居南壁中央部に、南壁の外から焼土、炭化材木、カヤ材等が住居内に投げこまれたように入っており、壁の近くでは床面から30cm浮いた状態で、壁から床面中央へ約1.2mの地点ではほぼ床面に接していた。なおこの焼土の下より、須恵器と土師器の坏が重なって出土しており、良好なセットとなる。

規模 東西方向で6.2m、南北方向で6.4mで、ほぼ正方形に近い。壁高は40cmであり残りが良い。周溝幅は



第74図 11・12号住居跡実測図(1)

第5章 検出された遺構と遺物



第75図 11・12号住居跡実測図(2)



10~20cm、深さ10~20cmである。貯蔵穴の長軸幅は1.5m、幅90cm、深さ20cmである。柱穴1は幅50cm、深さ75cm、柱穴2は幅75cm、深さ52cm、柱穴3は幅60cm、深さ62cm、柱穴4は幅65cm、深さ60cm。

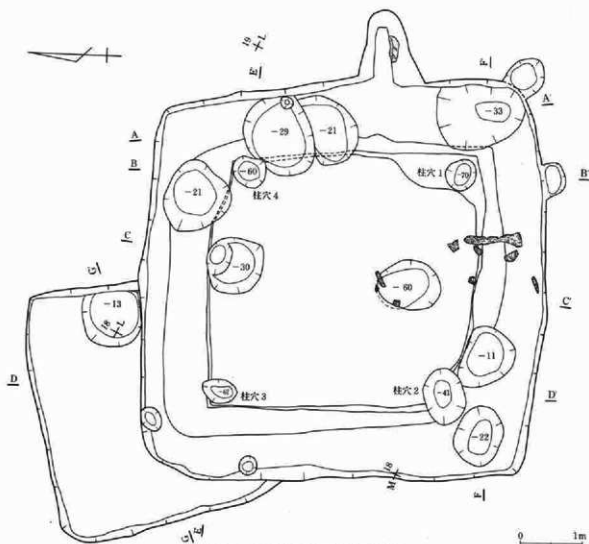
遺物 床面や覆土中より須恵器の底部へら起こしや付高台・削り出し高台の坏や環状つまみを持ちカエリを持つ坏蓋、また土師器で口径が大きく口縁部の外反する皿や、口縁部が直立する坏又こも石等多く出土。

床下 4柱穴内側の床下が4柱穴外側の床下より10cm前後深く掘り込まれていた。床下土坑は竈北側に3個、南壁西側に2個、他に床面中央より北側と南側に各1個の計7個検出されたが、床面中央部よりは検出されなかった。床下実測図中に床面より掘り込まれている深さを数字で示した。

#### 11号住居跡竈

位置 住居東壁やや南寄りに地山のロームを多く掘り込んで竈が構築されていた。

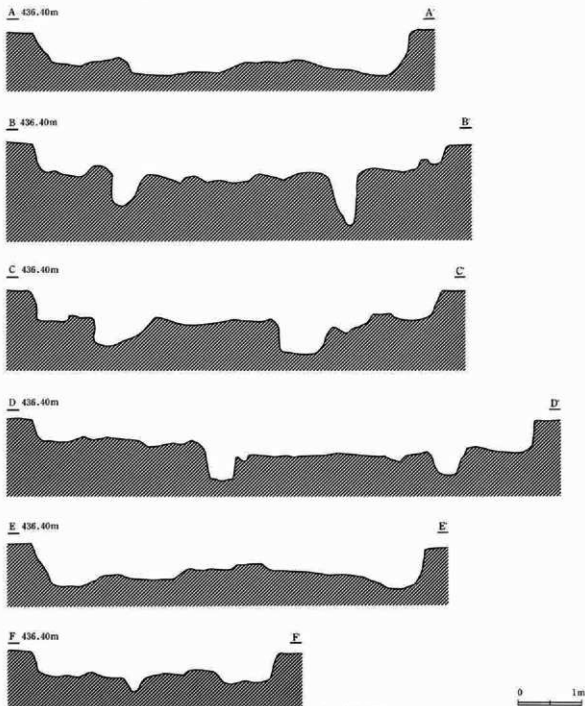
構造 竈焚口部と燃焼部のはほぼ大半が住居内に位置する大きな竈であり、当遺跡において最大の大きさを持ち、かつ奈良時代に属する住居の竈の中で最も残りの良いものである。住居内に造りつけられた左右の両袖は焚口部を除いてほぼ原形に近い状態で残存していた。又燃焼部から煙道部にかけての天井部と思われるロームは一部原形を留めていたが、焚口天井部と思われる部分のロームは、焚口部分の袖



第76図 11・12号住居跡床下実測図(1)

## 第5章 検出された遺構と遺物

と同様に燃焼部両袖程良好な残存は示していなかった。ロームで作られた袖と地山のロームとの間に黒色土が一層入っているため、竈は住居全体を掘り上げ後壁の上側の一部を煙道として掘りぬき、少量の石と大量のロームを用いて竈を構築したものである。竈構築材はロームが主であり、石は煙道部の一部と煙道部に近い袖部に一部芯材として使用しているが量は少なく平安時代の石を多く用いた竈とは大きく異なっている。住居内に位置する燃焼部は、やがて急傾斜を持って煙道部に立ち上がる。その境は住居内の下端の延長線と一致し、急傾斜からゆるやかな煙道へと転化する。その境は住居内の上端の延長線と一致する。



第77図 11・12号住居跡床下実測図(2)

規模 煙道方向で2.2m、両袖方向で1.5m、高さ約50cmである。

遺物 土師器の坏・甕、こも石等が出土している。

#### 12号住居跡 遺構写真図版26

位置 11号住居跡と重複しており、K-17・18、L-17・18グリットに属する。

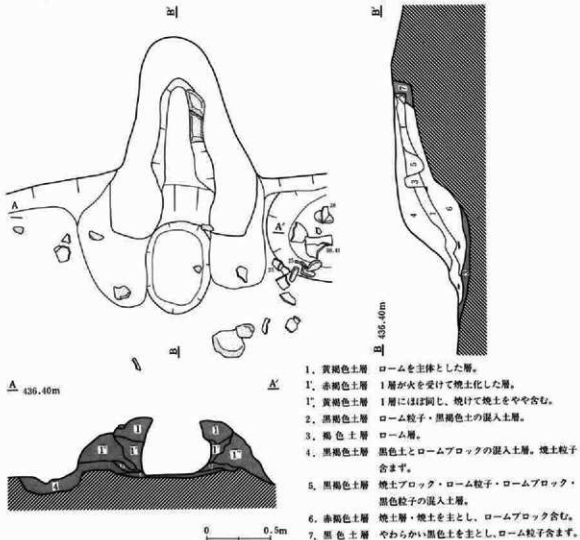
概要 11号住居跡に南約半分を切り取られているため、竈は検出されなかった。柱穴や周溝、出土遺物もなく規模も小さいために、住居跡として成り立つのかは疑問であるが、12号住居跡として取り扱った。

構造 床面はロームを主とし、黒色土を混入していた。柱穴や周溝、貯蔵穴はいずれも掘られていなかった。壁はほぼ垂直に掘られていた。

規模 東西方向で4m、南北方向は住居南半分11号住に切られているため不明である。残存部分で3.55mまで確認できた。壁高は30cm前後である。

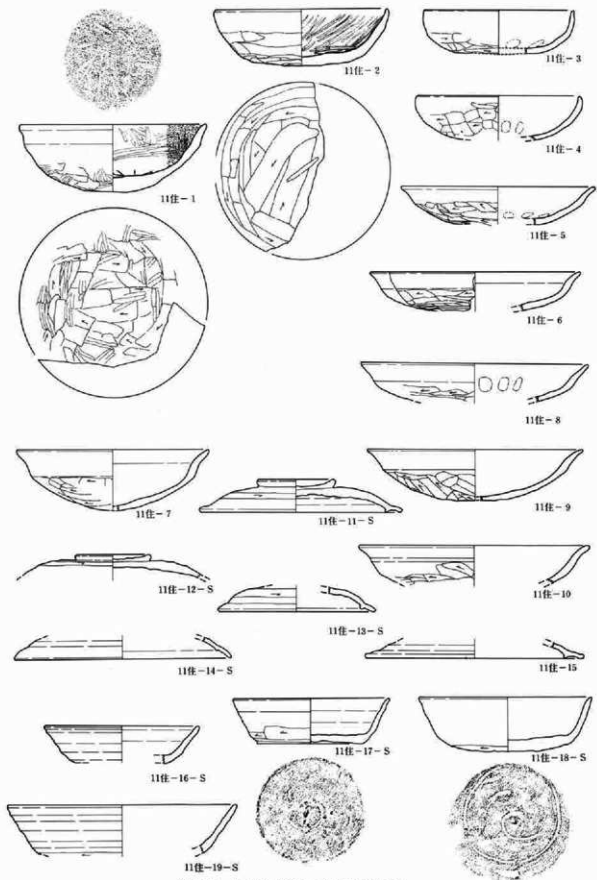
遺物 全く出土していない。

床下 床面上のローム中に黒色土の混入している層を5cm～8cmほど取り除くと、東壁中央寄りに直径1m床面からの深さ13cmほどの床下土坑が検出された。その他に柱穴等は全く検出されずに、凹凸面が検出されたのみであった。



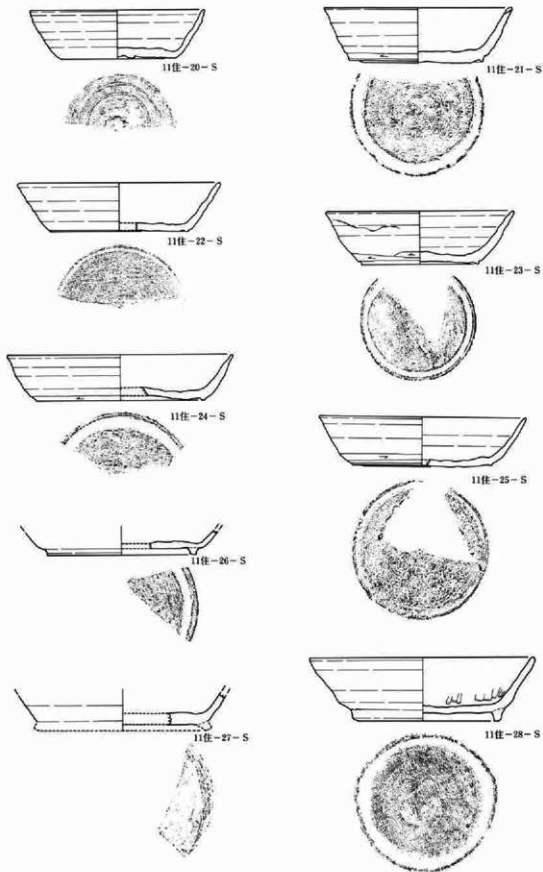
第78図 11号住居跡遺実測図

第5章 検出された遺構と遺物



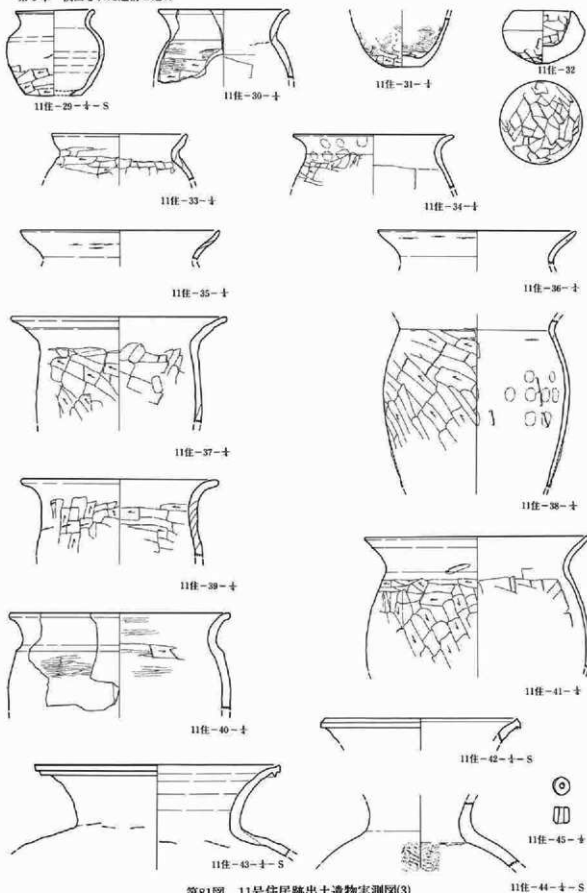
第79図 11号住居跡出土遺物実測図(1)

第2節 住居跡



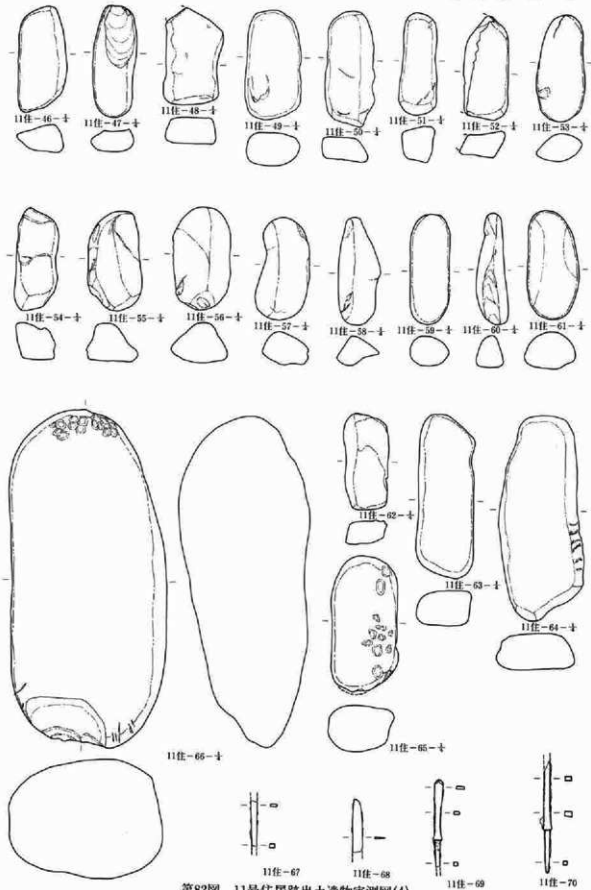
第80圖 11号住居跡出土物実測図(2)

第5章 検出された遺構と遺物



第81図 11号住居跡出土遺物実測図(3)

第2節 住 居 跡



第82图 11号住居跡出土遺物実測图(4)

第5章 検出された遺構と遺物

11号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第79図 写真図版65・66)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②地味③残存④胎土⑤備考
11住-1	坏土師器	5.2 14.0 — 床面+30	厚く丸い底部を持ち、体部は内彎しながら外側へ開く。口縁部下に弱い稜線を持つ。内外面にへう磨きが認められ、内側底部に10箇所の刻罫あり。	①表面黒色・断面灰褐色②還元③丸④細長い透明粒子を数多く含む。1mm以下の白色粒子を多く含む外地産?
11住-2	坏土師器	4.4 (13.4) — 床面+8	器内が厚く、やや平底気味である。底部より体部が外上方向へ直線的に立ち上がっており、口縁部は内彎していない。口縁-体部内側に放射状罫文あり。	①褐色②酸化③丸④1mm以下の白色粒子を少量含む⑤器形・器内の厚さ・罫文の存在等より、特異な環である
11住-3	坏土師器	— (11.7) — カマド左袖内	平底気味の底部より体部・口縁部が直立する。口縁部内外面横ナズ、外側底部へう削り。	①褐色②酸化③丸④白色粒子含まず。1mm以下の黒色・石英粒子多く含む
11住-4	坏土師器	— (12.8) — 床面+3、フタ土	丸底の底部より体部は内彎しながら外上方へ開き、口縁部は幅狭く内彎している。	①褐色②酸化③丸④白色粒子含まず。1mm以下の黒色・石英粒子を含む
11住-5	甗形坏土師器	3.0 (15.4) — 床面+10	浅い甗の環である。平に近い丸底を持ち、口縁部は外側へ大きく外反し、口縁部下で弱い稜を持つ。	①褐色②酸化③丸④白色粒子ほとんど含まず。黒色・石英粒子を少量含む
11住-6	甗形坏土師器	— (16.4) — 床面	浅い甗形を呈し、平に近い丸底より体部が立ち上がり、口縁部が外側へ大きく外反する。弱い稜を持つ。	①褐色②酸化③丸④白色粒子ほとんど含まず。黒色・石英粒子を少量含む
11住-7	甗形坏土師器	4.8 (15.2) — フタ土	浅い甗形を呈し、平に近い丸底より体部が立ち上がり、口縁部が外側へ大きく外反する。外側へう削り。内側体部に指頭圧痕状の痕跡あり。弱い稜を持つ。	①褐色②酸化③丸④白色粒子ほとんど含まず。黒色・石英粒子を少量含む 3mm内外の赤色粒子を少量含む
11住-8	甗形坏土師器	— (18.0) — 床下フタ土	甗形環としては深く、丸底の底部を持つ器である。口縁部が大きく外反し、口縁部下で弱い稜を持つ。	①褐色②酸化③丸④白色粒子ほとんど含まず。黒色・石英粒子を少量含む
11住-9	甗形坏土師器	— (17.0) — 床面	甗形環としては深く、丸底の底部を持つ。体部が外上方向に立ち上がり口縁部が大きく外反する。体部と口縁部との間に稜を持つ。	①褐色②酸化③丸④白色粒子ほとんど含まず。黒色・石英粒子を少量含む
11住-10	甗形坏土師器	— (18.0) — 床下フタ土	浅い甗形を呈し、平に近い丸底を持ち、口縁部が大きく外反する。外側口縁部下に弱い稜線を持つ。	①褐色②酸化③丸④1mm以下の白色粒子と黒色・石英粒子を多く含む
11住-11	蓋須恵器	2.6 15.7 — フタ土	環状つまみを持つ環蓋である。内面天井部に右回転の渦巻痕を残す。つまみの端部は丸い。明確なカエリを持ち、口縁部はカエリ付着分で外にやや開く。	①灰色②還元地味③丸④1mm以下の白色・黒色粒子を多く含む⑤口縁端部は丸く、下方にややせり出している
11住-12	蓋須恵器	— — — 床面	環状つまみを持つが、つまみ中央部のへこみは少ない。つまみ周辺に右回転へう削り整形あり。	①褐色②酸化③丸④1mm以下の白色粒子と2mm前後の赤褐色粒子と砂粒を含む
11住-13	蓋須恵器	— (12.4) — フタ土	口縁部の破片であるが、環状つまみを持つ環蓋と思われる。カエリを持ち、口縁端部がやや外側に開く。	①灰白色②還元灰黄③丸④白色粒子は胎土色と同じで観察できず
11住-14	蓋須恵器	— (17.0) — フタ土	かすかにカエリを残す環蓋である。口縁部はカエリ付着点より外側にやや開く。	①灰褐色②酸化③丸④1mm以下の砂粒を多く含む
11住-15	蓋須恵器	— (17.4) — フタ土	明確で長いカエリを持つが、細く弱い。口縁部はカエリ付着点より外側にやや開く。	①褐色②酸化③丸④1mm以下の砂粒と白色粒子を多く含む
11住-16	碗須恵器	— (12.3) — フタ土	底部より体部-口縁部が直線的に立ち上がる。底部はほとんど残存していないがへう整形と思われる。	①表面灰色・断面黒褐色②還元③丸④白色粒子含まず。他産地よりの輸入品
11住-17	坏須恵器	3.6 12.4 8.2 床面+34	平底を呈し、底部中央が上方へやや持ち上がる。体部-口縁部は直線的に立ち上がる。内側内面に渦巻状の凹凸・外側底部に右回転へう起こし縦横整形。	①内面灰褐色・外側表面黒色②酸化③完全④1mm以下の白色粒子を多く、2mm内外の石英粒子を少量含む他産品?



11号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号79・80・81図 写真図版66・67)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・直径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
11住-18	環須恵器	4.3 13.0 — フク土	底部が厚く丸い、体部は直線で外上方向へ開く、口縁部は丸い。底部に緩な右回転へう削り整形残存。内面全面でいねいなナデ整形で凹凸なし。	①灰褐色②還元③④⑤ 1mm以下の白色粒子・2mm前後の石英粒子・赤色粒子と5mm内外の小石を少し含む
11住-19	環須恵器	— (18.0) — フク土、L-19	体部から口縁部が直線を外上方向へ開く、内外面とも横ナデ整形でいねいに仕上げている。	①灰色②還元焼締③④⑤ 1mm以下の白色粒子を多く含む
11住-20	環須恵器	3.8 (13.8) (9.2) 床面+30、L-18	底部が厚い、体部から口縁部は直線、外上方向へ開く。内側底部にナデ整形外側底部へう起こし後回転へう整形、中央凸部残存。	①灰色②還元焼締③④⑤ 1mm以下の白色粒子を多く含む、他の粒子はほとんど観察できず
11住-21	環須恵器	4.3 (14.9) 10.5 床面	削り出し高台を持つ環である。底部と体部とも器肉が厚い。内側底部はいねいな回転ナデにより平。高台周辺は削り込まれる。高台内側回転ナデ整形。	①表面灰褐色・断面灰白色②還元③④⑤ 1mm以下の白色粒子を多く含む。2-3mmの石英粒子も多く含む。月夜野北窯
11住-22	環須恵器	3.8 (16.0) (10.9) 床面	平な底部で底部端に削り出し高台を持つ。内側面はいねいな回転ナデ整形で平。外側底部は高台削り出し後回転ナデ調整によりいねいに整形。	①外面灰褐色・断面と内面灰白色②還元③④⑤ 1mm以下の白色粒子と黒色粒子を少量含む
11住-23	環須恵器	4.2 14.7 9.2 床面、M-18	底径の少し小さな削り出し高台を持つ環である。高台は底面よりやや高くなっており、高台の役割を果たしている。高台部内側に手持へう削り整形。	①灰色②還元焼締③④⑤ 1mm以下の白色粒子を多く含む⑥体部下半へう調整
11住-24	環須恵器	3.6 (17.7) (13.4) 床面+26	口径・底径とも大きい削り出し高台を持つ環である。底部内面回転ナデ整形。外面回転へう整形。	①灰色②還元焼締③④⑤ 1mm前後の白色粒子を多く含む
11住-25	環須恵器	3.8 16.4 11.0 床面+6、フク土	口径・底径とも大きい削り出し高台を持つ環である。内側底部中央がやや凹状を呈し、回転ナデ整形。高台部内側回転へう整形、ともにいねいである。	①灰色②還元焼締③④⑤ 1-2mmの白色粒子を多量に含む⑥粒子の荒い胎土
11住-26	環須恵器	— — (11.8) フク土	付高台を持つ環である。高台は端部を縦面にいねいに仕上げている。高台部内側回転ナデ整形。	①内外表面灰褐色・断面灰色②還元焼締③④⑤ 1mm以下の白色粒子を含む
11住-27	環須恵器	— — — フク土	付高台がそっくりはずれている環である。底部が厚く、底部内外面とも回転ナデ整形。	①灰色②還元焼締③④⑤ 1mm以下の白色粒子を少し含む
11住-28	環須恵器	5.0 17.6 10.8 床面	高い付高台を持ち、口径・底径の大きな環である。器内外面とも横ナデ、高台部内側も高台付着後回転ナデ整形。高台は端部を丸く仕上げている。	①内面と断面灰白色・外面黒色②還元③④⑤ 1mm以下の白色粒子を多く含む。2mm内外の石英粒子少量含む。月夜野北窯
11住-29	小形産須恵器	8.8 7.8 6.0 床面、フク土	非常に小さな産である。底部は平で、体部は丸味を持ち、頸部より口縁部はなだらかに外反する。底部は手持へう削り。体部下半手持へう削り整形。	①灰色②還元③④⑤ 1mm以下の白色粒子を多く含む⑥粒子の密な胎土である
11住-30	小形産土師器	— (13.6) — 床下フク土	頸部より口縁部がくの字状に外反する小型甕である。体部外面の一部にへう磨き、口縁部横ナデ。	①褐色②還元③④⑤ 1mm以下の白色粒子・砂粒を多く含む
11住-31	小形産土師器	— — 3.5 貯蔵穴	口縁部を欠損しているが、内面にへう磨き後黒色処理が行なわれているため小形甕と思われる。	①内面黒色・断面と外面黒褐色②還元③④⑤ 1mm以下の白色・砂粒多く含む
11住-32	小形産?	4.1 4.6 — 床面+3	手捏土器である。還元焼成であるため須恵器の可能性有。内面指によるナデ整形、口縁部横ナデ、体部外側指によるナデ整形。	①底面黒色・他は灰白色②還元③完形④⑤ 1mm以下の白色・石英粒子多く含む
11住-33	甕土師器	— (14.4) — 床面+3、L-18	頸部と口縁部の器肉が厚い甕である。肩部横方向へう削り、肩部内側へう削り。	①外面黒褐色・内面黒色②還元③④⑤ 1mm前後の白色粒子・砂粒を多く含む

第5章 検出された遺構と遺物

11号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第81・82図 写真図版67・68)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①灰色②褐色③残存④粘土⑤備考
11住-34	小形土師器	5.6 (16.6) 一 フタ土	頸部と口縁部の器肉が厚い。口縁部が大きく外反する。口縁部外側に指頭圧痕の痕跡が残る。	①褐色②褐色③残存④粘土⑤備考
11住-35	甕 土師器	— (21.0) 一 床面+10、フタ土	器肉の薄い大きな口径を持つ甕である。口縁部先端近くで少し内彎気味に変化する。内外面横ナテ整形。	①褐色②褐色③残存④1mm以下の白色粒子と石英粒子を少量含む
11住-36	甕 土師器	— (21.0) 一 床面+31、フタ土	器肉の薄い大きな甕の口縁部の破片である。口縁部は大きく外反し長い。内外面横ナテ整形。	①褐色②褐色③残存④1mm以下の白色粒子と石英粒子を少量含む
11住-37	甕 土師器	— (22.6) 一 床面	器肉の厚い甕であり、頸部のくぼみはほとんど見られない。口縁部は長く、大きく外反している。口縁部横ナテ後のヘラ削りである。	①灰褐色②褐色③残存④1mm以下の白色粒子と石英粒子を少量含む
11住-38	甕 土師器	— — 一 床面、カマド内	器肉の薄い甕であり、口縁部はくの字状に外反している。外面は左上方向のヘラ削りである。	①褐色②褐色③残存④1mm以下の石英少量、砂粒を多量に含む
11住-39	甕 土師器	— (21.0) 一 床面、L-18	器肉の厚い甕であり、頸部はややくびれて口縁部はゆるやかに外反し、口縁端部は大きく外反する。	①灰褐色②褐色③残存④1mm以下の白色粒子と砂粒を多く含む
11住-40	甕 土師器	— (22.2) 一 フタ土、カマド	頸部と胴部との境に稜を持つ。口縁部は大きくなだらかに外反し、器肉内外面にヘラ磨き。	①黒褐色②褐色③残存④1mm内外の白色粒子を多量に含む
11住-41	甕 土師器	— (23.6) 一 床面	器肉の薄い甕であり、口縁部はくの字状になだらかに外反する。体部外面へラ削り、口縁部内外面横ナテ、体部内面にヘラ削り痕が残る。	①褐色②褐色③残存④1mm以下の砂粒を大量に含む表面が面割れているため砂粒が表面に出ている
11住-42	甕 土師器	— (20.4) 一 フタ土	口縁部幅の狭い甕であり、口縁部中央が山状に張り出している。口縁端部は鋭利に整形されている。	①表面灰色・断面灰褐色②褐色③残存④1mm以下の白色粒子を多く含む
11住-43	甕 須恵器	— (26.0) 一 床面	丸い胴部より外反気味に外上方へ頸部が開き、口縁部は2重の帯状を呈する。口縁端部は鋭利に作られており、ていねいな作りである。	①灰色②還元焼締③頸部～口縁部は完成形④1mm以下の白色粒子を多く含む
11住-44	甕 須恵器	— — 一 床面+28	胴部外面平行叩き、内面に同心円状の青海波文が残る。頸部内外面横ナテ。	①灰色②還元焼締③残存④1mm以下の白色粒子を多く、赤色粒子を少量含む
11住-45	白玉? 石製品	高さ-0.9 直径-0.8 穴の直径-3.5	両端面は凹凸状で縁であり、側面は凹凸がなく均整に整形しており、表面に縦方向の線状の刻線多数有	①淡緑色②褐色③完成形④滑石⑤床面
11住-46	石	縦-11.2 横-5.2 重量-260g	こも石の可能性はあるが、長さが短い。全面磨耗している。	①灰色②褐色③完成形④人岩⑤床面+7cm
11住-47	石	縦11.7 横-4.7 重量-190g	表面全体が磨耗している。先端両側が欠損している。	①黒色②一部欠損③黒色頁岩④フタ土
11住-48	石	縦-10.2 横-6.4 重量-310g	表面全体が磨耗している。先端の一部が欠損している。	①黒色③先端部の一部欠損④黒色頁岩⑤床面+4
11住-49	石	縦-11.4 横-5.9 重量-420g	表面全体が磨耗しているが、他の石に比較して表面が滑い。長さに比較して幅広い石である。	①灰色②完成形③輝石安山岩(粗粒)④フタ土
11住-50	石	縦12.0 横-5.5 重量-300g	表面全体が磨耗している。片側は一度表面が剥離しており、その後使用されている。	①淡緑色②完成形③凝灰岩④床面+4cm
11住-51	石	縦-10.6 横-4.1 重量-270g	断面方形に近い。表面全体が磨耗している。高さにおいても小さな石である。	①灰褐色②完成形④アイサイト質凝灰岩⑤フタ土

11号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第82図 写真図版68)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①濁色②焼成③残存④粘土⑤備考
11住-52	石	縦-10.8 横-5.0 重量-220g	欠損している部分以外の表面全体が磨耗している。	①灰褐色②横面-先端部の一部欠損④黒色頁岩⑤フク土
11住-53	石	縦-11.2 横-5.1 重量-250g	表面全体が磨耗している。石の中央部分がやや狭くなっている。	①淡緑色②定形③凝灰岩質砂岩⑤フク土
11住-54	石	縦-10.7 横-4.6 重量-340g	不定形を呈する石であり、表面全体が磨耗している。	①灰白色②定形③輝緑岩⑤フク土
11住-55	石	縦-10.5 横-5.8 重量-330g	不定形を呈する石であり、表面全体が磨耗している長さに比較して幅の広い石である。	①灰白色②定形③デイスイト質凝灰岩⑤フク土
11住-56	石	縦-10.8 横-6.2 重量-400g	不定形を呈する石であり、表面全体が磨耗している長さに比較して幅の広い石である。	①緑色②定形③ひん岩⑤床面+4cm
11住-57	石	縦-10.7 横-5.8 重量-310g	表面全体が磨耗している。石の中央部分片側がやや狭くなっている。	①淡緑色②定形③ひん岩⑤フク土
11住-58	石	縦-11.3 横-4.5 重量-170g	不定形を呈する石であり、表面全体が磨耗している。	①灰褐色、一部黒色②定形③黒色頁岩⑤フク土
11住-59	石	縦-11.6 横-4.2 重量-190g	断面玉子状の石であり、表面全体が磨耗している。均整のとれた石である。	①灰褐色②定形③黒色頁岩。⑤フク土
11住-60	石	縦-11.7 横-3.4 重量-140g	断面三角形状を呈する石であり、表面全体が磨耗している。不定形の石である。	①灰白色②定形③実質安山岩⑤フク土
11住-61	石	縦-11.4 横-5.5 重量-350g	表面全体が磨耗しており、長さに比較して幅広い石である。	①灰色②定形③実質安山岩⑤フク土
11住-62	石	縦-10.1 横-4.9 重量-220g	磨耗されている部分の少ない石である。	①黒色②定形③黒色頁岩⑤フク土
11住-63	石	縦-17.2 横-6.1 重量-750g	長さと同程度の大きな石である。表面全体が磨耗している。	①褐色②定形③輝石安山岩(粗粒)⑤カマド内
11住-64	石	縦-21.7 横-9.2 重量-1,340g	長さと同程度に大きな石であり、他に出土例は少ない。表面全体が磨耗している。	①灰褐色②定形③輝石安山岩(粗粒)⑤床面
11住-65	石	縦-14.4 横-7.2 重量-820g	幅や厚さの大きい石である。表面全体が磨耗している。	①灰色②定形③輝石安山岩(粗粒)⑤床面+38cm
11住-66	砥石	縦-35.7 横-16.0 重量-11,800g	大きな石である。両側面中央部が平で、磨耗している。その面は砥石として利用されている。	①淡緑色②定形③凝灰岩質砂岩⑤床面
11住-67	鐵 鉄器	全長-3.5 茎幅-0.5 フク土	鐵の茎片である。茎尻と踵部以上の欠損は、旧時調査時から明瞭でない。茎の断面形は方形である。錆化は軽である。	
11住-68	刀子 鉄器	全長-4.2 床面+16	刀子の物打から切先片である。物打以下の欠損は旧時調査時から不明。平造で棟は平棟か内面の少ない丸棟と考えられる。錆はやや枯れている。錆化は棟で極目状。平で板目が空目状	
11住-69	鐵 鉄器	全長-6.8 鐵先長-2.2、床面+16	小舟の鐵片である。茎尻は調査時の欠損。鐵先の欠損。鐵先の形態は尖鋭で端部のみ刃部か、踵部部の断面形は方形である。その末端に頸区が付られ茎に至る。茎は断面方形。錆化は極目状か板目状。	
11住-70	鐵 鉄器	全長-8.7 踵部 中腹-0.5、床面+16	鐵片である。鐵先は失われているが、調査時から旧時から判らない。残存部中央下に頸区がある。鈍部部の断面は方形である。錆化は極目状か板目状となる。	

第5章 検出された遺構と遺物

13号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版27 遺物写真図版68・69

位置 12号住居跡南約4mに位置し、M-18・19、N-18・19グリットに属する。

概要 住居確認面より床面までの深さが浅く、竈の残りも良好でない。この住居では住居建設時の地山の掘り込みの後で多くの黒褐色土を運び込み踏み固めて床面と竈を構築している特色を持つ。また他の住居跡でも多く認められる床下土坑が、住居使用時において床面として使用されていたものなのか、又は床下土坑の上面に蓋をして中空の状態で使用されていたものかを知るために、床面と床下土坑の床面位置での硬度測定を実施した。その結果床面と同じレベルでは硬度理論値約 $3.25\text{kg/cm}^2$ <sup>(1)</sup>を示し軟かく、踏み固められた床面の硬度理論値約 $6.78\text{kg/cm}^2$ の数字とは大きく異っている。しかし約10cmほど深い面において、堅い面が存在しており、この堅さは硬度理論値約 $6.78\text{kg/cm}^2$ で床面の値とはほぼ同じである。このことは、床下土坑を埋めてその上を床面として利用し、踏み固めていたことを示している。

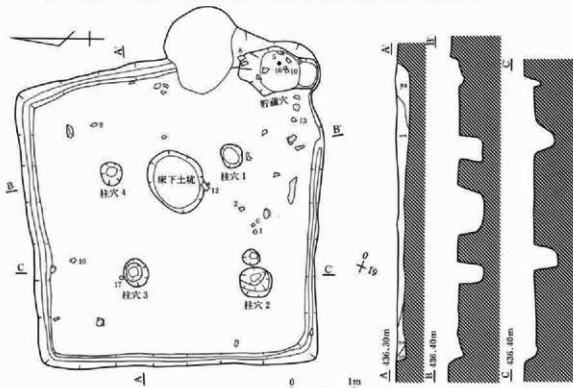
構造 床面はロームブロック・ローム粒子・黒色土の混入土層を地山のロームを掘り込んだ上に厚さ7~15cmほど搬入し踏み固めて作られている。床面中央に床下土坑が一基掘られていた。柱穴は4本、周溝は竈と貯蔵穴部分以外はほぼ全周して掘られていた。貯蔵穴は底部付近で大きく2つの穴に分かれた。

規模 東西方向で北部分で4.4m、南部分で5mと同一ではなく、南北方向では西壁で4.5m、東壁で4.9mでやはり同一ではなかった。壁高は20~25cm残りは良好でない。周溝幅は約15cm、深さ約10cmであった。柱穴1は径35cm、深さ38cm、柱穴2は径50cm、深さ30cm、柱穴3は径40cm、深さ37cm、柱穴4は径37cm、深さ35cmであり、貯蔵穴は東西方向で約70cm、深さ約35cmであった。床面中央の床下土坑は長軸方向約1m、短軸方向約80cmでやや楕円形を呈し、深さは床面より30~35cmで底面はほぼ平坦。

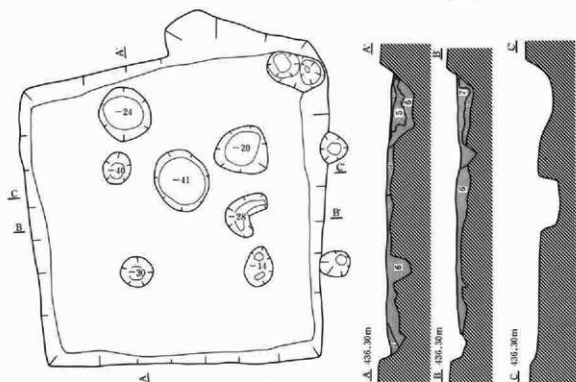
(1) 山中式標準土壌硬度計を用い、数値は「硬度指数と支持力強度との対照表」の理論値を使用した。

遺物 床面や覆土中また貯蔵穴中より鉄鎌・須恵器の甕・削り出し高台の坏・土師器の甕等多く出土。

床下 床面の土を除去すると多くの土坑が確認された。床面よりの深さを数字で示した。



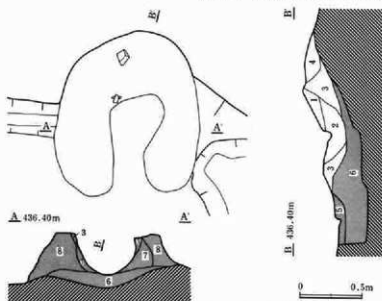
第83図 13号住居跡実測図



1. 黒褐色土層 黒色土層中にローム粒子を含む。2. 黒色土層 黒色土層中にほとんどローム粒子を含まない。3. 黒褐色土層 黒色土中にローム小粒子・ロームブロックを多く含む。4. 褐色土層 床面として利用されており固い。5. 赤褐色土層 焼土小ブロック、焼土粒子、ローム粒子の混入土層。6. 黒褐色土層 ローム粒子、ロームブロック、黒色土の混入土層。7. 黒色土層 黒色土を主体とし、少量のロームブロックを含む。

第84図 13号住居跡床下実測図

0 1m



1. 黒色土層 黒色土中に焼土粒子を含む。2. 暗褐色土層 ローム粒子・焼土粒子・炭を混入。3. 暗褐色土層 焼土ブロック 焼土粒子を主体とした土層。4. 黒褐色土層 黒色土層中にローム粒を少量含む。5. 赤褐色土層 多くの焼土粒子と少量の黒色粒を含む。6. 黒色土層 黒色土層中にロームブロックを含む(住居裏側)後床面に運び入れた土。7. 褐色土層 ロームを主体とした土層。火を受けて焼土粒子を含む。8. ロームによる袖で少量の黒色土を含む。

第85図 13号住居跡竈実測図

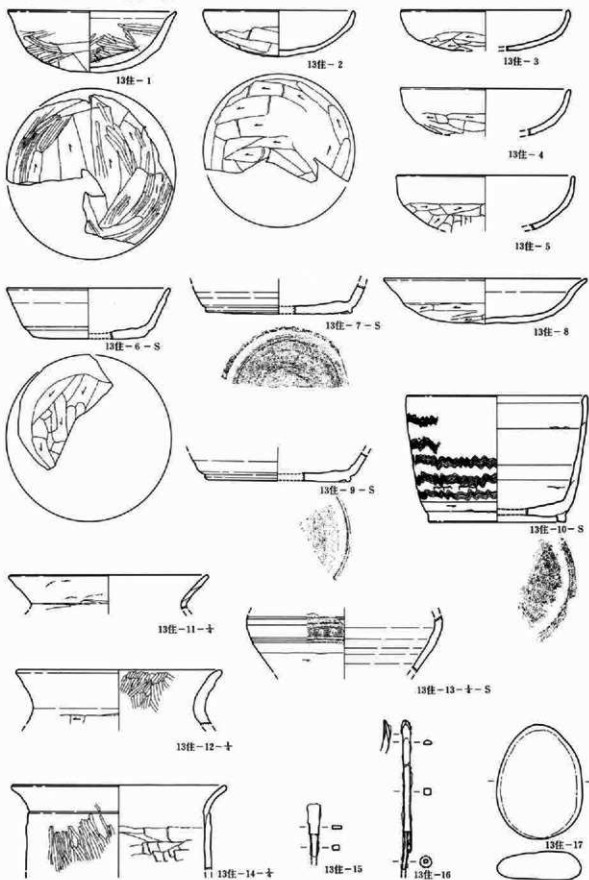
0 0.5m

## 13号住居跡竈

位置 東壁やや南寄りに地山のロームを一部掘り込んで構築される。構造 竈の焚口部と燃焼部の一部が住居内に、他は住居掘込面外に位置する。竈を構築している素材は、ロームと黒褐土と少量の石である。住居内の袖は住居発掘後、搬入され作られた床面上に、ロームを主体として作られ、住居外に位置する袖は地山のロームと黒色土を掘りぬき、その上に黒色土を主体とし、少量のローム混入土で煙道部を中心に構築している。規模 煙道方向で約1.3m、両袖方向で約1.1m、燃焼部幅約45cm。

遺物 出土していない。

第5章 検出された遺構と遺物

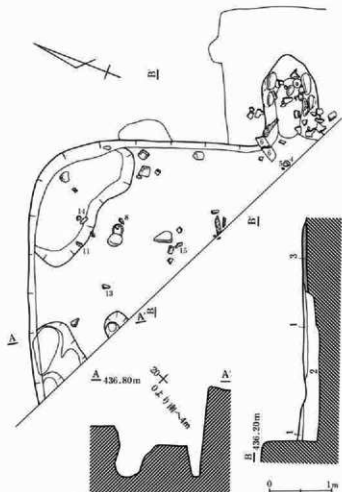


第86図 13号住居跡出土遺物実測図

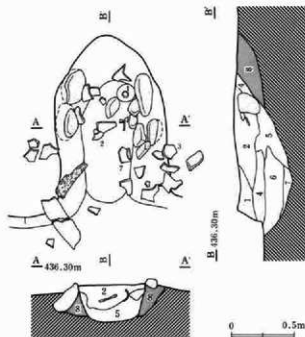
## 第2節 住 居 跡

13号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第86図 写真図版68・69)

遺構名及び番 号	器形及び器具	器高・口径・底径(m) 出 土 位 置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②地紋③残存④胎土⑤備考
13住-1	坏土師器	4.8 (13.2) — 床面	丸底を呈し、口縁部が内傾する。口縁部外側と体部の境に線を全く持たない。口縁部を除く器表全面にへう磨きが行なわれている。器内の厚い環である。	①褐色・一部黒色②酸化③④1mm以下の白色・灰色砂粒多く含む⑤器表面及び断面の色が不均一
13住-2	坏土師器	3.6 10.8 — 床面、フク土	丸底を呈し、口縁部がやや外側に開くが直立気味に立ち上がる。口縁部～内面横ナテ整形・底部へう削り、器高のある深い環である。	①褐色②酸化③④1mm以下の黒色粒子を少量含む
13住-3	坏土師器	— (13.0) — フク土	平に近い丸底を呈し、口縁部は内傾している。口縁部幅が少し広がっている。底部へう削り。	①褐色②酸化③④1mm以下の砂粒を多く含む白色粒子ほとんど含まず。
13住-4	坏土師器	— (13.0) — フク土	平に近い丸底を呈し、口縁部はやや外側に開き、長くなる。深い環である。	①褐色②酸化③④1mm以下の砂粒を多く含む白色粒子はほとんど含まず
13住-5	坏土師器	— 14.0 — 貯蔵穴、フク土	丸底を呈し、口縁部は長くやや外側に開くが直立気味に立ち上がる。口縁部下半分に横ナテ整形なし。	①褐色②酸化③④白色粒子ほとんど含まず。砂粒を少し含む。
13住-6	坏須恵器	4.0 (12.8) (5.9) 床面	平底から口縁部は外上方向へ直線立ち上がる。体部下に凹帯、底部手持へう削り。	①内面・底部・断面灰白色、口縁外側黒色②還元③④2mm内外の石英含む
13住-7	坏須恵器	— — (11.7) 床面	削り出し高台を持つ環である。平底の底部は高台より外へ出ている。底面回転へう削り。	①灰色②還元③④1mm以下の白色粒子多量、1～3mmの石英少量含む
13住-8	照形坏土師器	3.6 16.0 — 床面、貯蔵穴、フク土	平底に近い丸底を呈する。口縁部は幅広く、大きく外開する。器高の高い環である。口縁部～内面底部横ナテ、底部へう削り。	①褐色②酸化③④白色粒子含まず1mm以下の黒色粒子を少量含む
13住-9	坏須恵器	— — (11.2) 床面	削り出し高台を持つ環である。平底の底部と高台の高さは同じである。底面回転ナテ整形。	①外面黒色・断面灰褐色・内面灰白色②酸化③④1mm以下の白色粒子含む
13住-10	坏須恵器	10.0 (14.1) (10.9) 床面+3、0-20	平底に付高台を持つ環である。高台内側回転へう削り後に高台を付け、後に回転ナテ整形、高台は断面方形を呈する。体部下端と高台の間はへう削り体部右側回転流状文を5段持つ。	①灰色②還元③④1mm前後の白色粒子を多く含む
13住-11	粟土師器	— (21.0) — フク土、カマド	器内の厚い甕である。口縁部は胴部よりくの字状に大きく外反する。	①褐色②酸化③④白色粒子含まず、1mm以下の砂粒多く含む
13住-12	粟土師器	— (21.5) — 床面	器内の厚い甕である。口縁部内側にかなかなへの跡が残る。	①外面・断面灰褐色、内面黒色②酸化③④1～2mm前後の石英多く含む
13住-13	壺須恵器	— — — 床面	壺の胴部～体部上平と思われる。4本よりなる列点文を持ち、その上下に2本の沈線が認められる。	①灰色②還元③④1mm以下の白色粒子を多く含む
13住-14	坏土師器	— (22.0) — 床面	器内の厚い甕であり、体部と口縁部との間に段差を持つ。体部全表面に縦方向のへう磨き痕あり。体部は丸味を持たない形と思われる。	①褐色②酸化③④1～3mmの黒色粒子を多く含む、白色粒子は含まず
13住-15	鉄鍔	莖長中程幅-0.8 莖先幅-0.5 床面+3	鍔区を持つ鉄片である。莖は断面方形。鍔莖に踏巻の流跡はない。錆化はなほだしく乾目気味。莖端と鍔被上方は調査時の欠損。	
13住-16	鉄鍔	全長-12 莖長-3.1 莖先幅-0.8 床面+3	実存鍔である。莖は実根となる。その形態は小作りで片端で逆刺はなく丸耳となり鍔被部に至る。鍔区は莖被中程より身幅厚い、莖は莖の本質が僅かに透存し踏巻が残される。	
13住-17	石	縦-12.0 横-9.1 重量-480g	玉形を呈し、厚さの一定した形を呈している。	①緑色②完形③凝灰質黄砂質④床面



第87図 14号住居跡実測図



第88図 14号住居跡竈実測図

#### 14号住居跡 (平安時代)

遺構写真図版28 遺物写真図版69

位置 13号住居跡南約4mに位置し、O-19・20グリットに属する。

概要 奈良時代の22号住居跡と平安時代初期の38号住居跡との3軒重複の住居跡と思われる。22号住居跡の北西部を掘り込み床上約30cmの位置に14号住居跡の床面及び竈が作られていた。38号住とはほぼ同一位置及び同規模を持っていたものと思われる明確な識別はできなかった。

構造 床面はロームを主とし、多くの黒色土の混入土よりできていた。住居北東端部と北壁西寄りに土境が検出された。柱穴と思われる小穴が2つ床面北側に検出された。

規模 住居の一部のみの発掘のため、住居規模は不明、現状で東西方向2.5m、南北方向で2.3m、壁高は30cm、柱穴はいずれも直径18cm、深さ40cm前後。

遺物 土師質土器杯、埴や羽釜、甕等出土。

#### 14号住居跡竈

位置 東壁に地山のロームを多く掘り込んで竈が構築されていた。焚口部は住居内に位置するが、燃焼部から煙道部にかけては住居外に位置する。

構造 袖部は石を芯に用いて作られており、7個の石が袖部より検出された。

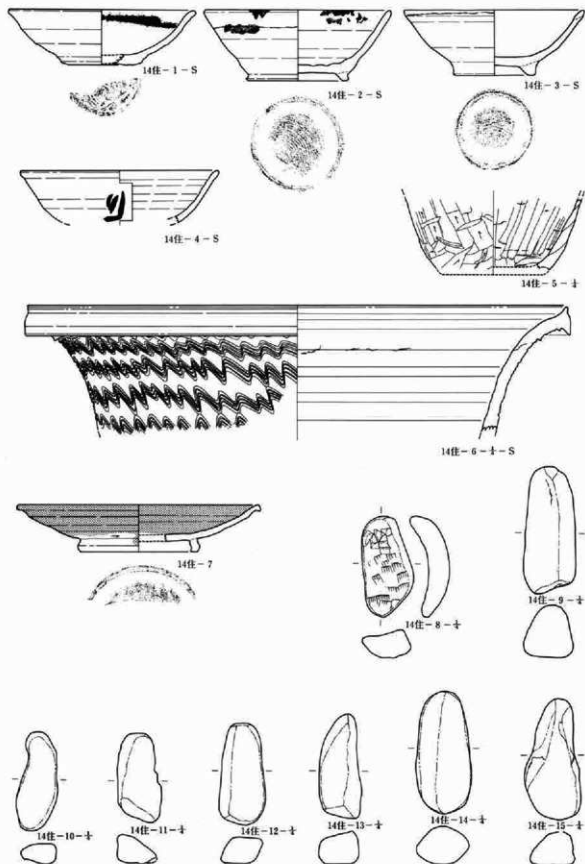
規模 煙道方向で1.4m、両袖方向で90cmあり、燃焼部幅38cmであった。

遺物 土師質土器杯・埴や土師器甕等出土。

1. 黒色土層 黒色土中に少量のローム粒子を含む。
2. 黒褐色土層 黒色土中にローム粒子・ロームでロック含む。
3. 黒褐色土層 黒色土層中に多くのローム粒子含む。
4. 黒褐色土層 黒色土層中に少量のローム粒子と木炭を含む。
5. 赤褐色土層 焼土を中心とした層。ローム粒子・炭を含む。
6. 黒褐色土層 黒色土・焼土粒子・焼土ブロックの混入土層。
7. 黒褐色土層 黒色土中にローム粒子と少量の焼土粒子を含む。
8. 黒褐色土層 焼土粒子と黒色土の混入土層。



第2節 住 居 跡



第89图 14号住居跡出土遺物実測図

## 第5章 検出された遺構と遺物

14号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第89図 写真図版69)

遺構名及び番 号	器形及び器種	器高・口径・底径(㎝) 出 土 位 置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
14住-1	環須恵器	4.4 (14.8) (6.4) カマド内	底径が小さく、口径が大きく、器高の高いものである。体部は内湾しながら外上方へ開く、口縁部は大きく外反する。口唇部は丸く仕上がっている。底部に右回転承切痕が残る。	①灰褐色②酸化③灰④1㎝前後の石英粒子を多く含む
14住-2	埴須恵器	5.7 (14.8) (7.4) カマド内	器肉が厚く、高台を持つ埴である。平な底部より体部は直線的に外上方へ開き口縁部に至る。口唇部は丸く仕上げられており、一部に灯明皿として利用されたような吸痕あり。高台は断面方形で比較的ていねい。	①灰褐色②酸化③灰④1㎝以下の白色粒子を多く、2～3㎝の石英粒子を多く含む
14住-3	埴須恵器	5.2 (14.4) 6.4 カマド内	器肉が厚く、断面台形の太い高台を持つ、体部は内湾しつつ外上方へ開く、口唇部はやや太くなっている。高台内側の承切はナデで整形されている。	①灰褐色②酸化③灰④1㎝以下の白色粒子を多量に、2㎝前後の石英を多く含む
14住-4	環須恵器	— (15.6) — フク土	体部は内湾しつつ外上方へ開く、口唇部は丸い、体部に墨書あり、字は判読不明。	①灰白色②還元③灰④1㎝以下の白色粒子を多量に、2㎝前後の石英を多く含む
14住-5	羽釜	— — — フク土	羽釜の体部下半であり、底部がそっくりはずれている。外面は肩に向かうへら削り、内面はナデ整形、内面全面が吸炭により黒色を呈している。	①外面灰褐色・断面灰黒色・内面黒色②酸化③灰④1㎝以下の白色粒子を多量に、3㎝内外の石英粒子を多く含む
14住-6	甕須恵器	— (57.8) — 床面+9	巨大な甕の口縁部である。口縁部は外面に折り返しをもうけ大きな突帯状口縁となる。胴部には4本のクシ状工具による液状文が4段以上認められる。液状の単位は寬い。	①灰白色②還元③焼成④⑤1㎝以下の白色粒子を多量に、2㎝前後の石英粒子を多く含む
14住-7	皿灰釉	3.9 (19.0) (9.3) 床面+12	断面長方形の高台を持ち、口縁部は大きく外反し外下方へ折り曲げられている。後には刷毛塗りの可能性大、高台内面回転ナデ整形。	①紫地灰色・淡黄色～透明②還元③灰④密⑤光ヶ丘1
14住-8	石	縦—10.7 横—5.7 重量—210g	大きく彎曲した小さな石である。表面全面が磨耗している。こも石等としては不適当と思われ、用途不明である。	①緑色②完形③東貢安山岩④床面+20cm
14住-9	石	縦—13.4 横—5.5 重量—600g	全体が磨耗している。断面が三角形を呈しており端部に向かい狭くなっている。図での下側端部に打ち欠けたような跡あり。	①灰色②完形③麻石安山岩(粗粒)④フク土
14住-10	石	縦—10.4 横—4.4 重量—160g	8に示した石と同様に大きく彎曲した小さな石である。全体が磨耗している。	①淡褐色②完形③砂岩④フク土
14住-11	石	縦—9.4 横—4.7 重量—170g	8に示した石にやや似て彎曲している小さな石である。全体が磨耗している。	①淡緑色②完形④ひん岩⑤床面+5cm
14住-12	石	縦—10.7 横—5.0 重量—260g	全体に均整のとれた石であり、全面が磨耗している。	①灰色②完形③石英閃緑岩④フク土
14住-13	石	縦—11.0 横—4.7 重量—260g	表面全体が磨耗しており、不定形を呈する石である。	①灰白色②完形④ひん岩⑤床面+5cm
14住-14	石	縦—13.0 横—5.9 重量—400g	表面全体が磨耗しており、均整のとれた石である。	①灰色②完形④ひん岩⑤床面
14住-15	石	縦—12.8 横—6.0 重量—320g	表面全体が磨耗しており、不定形を呈する石である。表面に小さな凹凸あり。	①淡褐色②完形④地貢東貢岩⑤床面+12cm

## 15号住居跡 遺構写真図版29

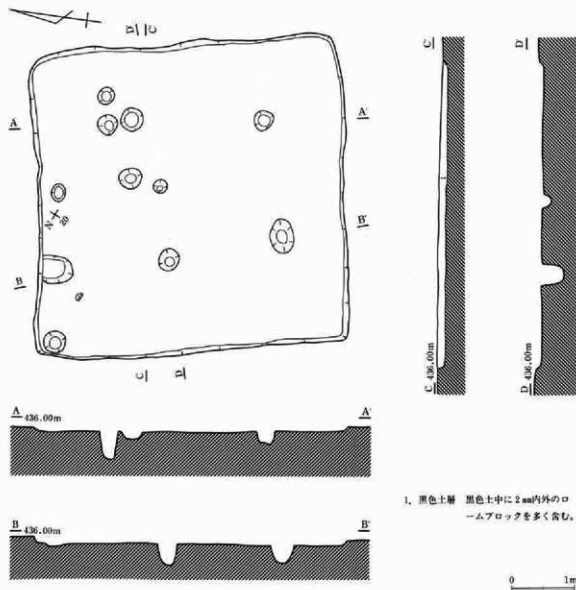
位置 13号住居跡の東約1mに接して位置し、M-19・20、N-19・20グリッドに属する。

概要 遺構確認時において、明らかにほぼ方形のプランが検出されたが、掘り込みが浅く、踏み固められた床面や竈の検出がなく、覆土中よりの出土遺物もほとんどないため、住居跡としては疑問が残る。しかしここでは15号住居跡として取り扱う。

構造 踏み固められた明瞭な床面は検出されなかった。ロームを掘り込んで住居が作られており黒褐色土が覆土となっていたので、この黒褐色土を取りのぞいたローム面を床面とみなした。多少凹凸が認められるが、平らな床面となっていた。床面に多くの小穴が検出されたが、柱穴となる可能性はほとんどなく覆土上より掘り込まれたものも数個あった。周溝、貯蔵穴等は全く検出されなかった。

規模 東西方向4.9m、南北方向4.9mではほぼ正方形を呈している。壁高は10cm前後であり浅い。

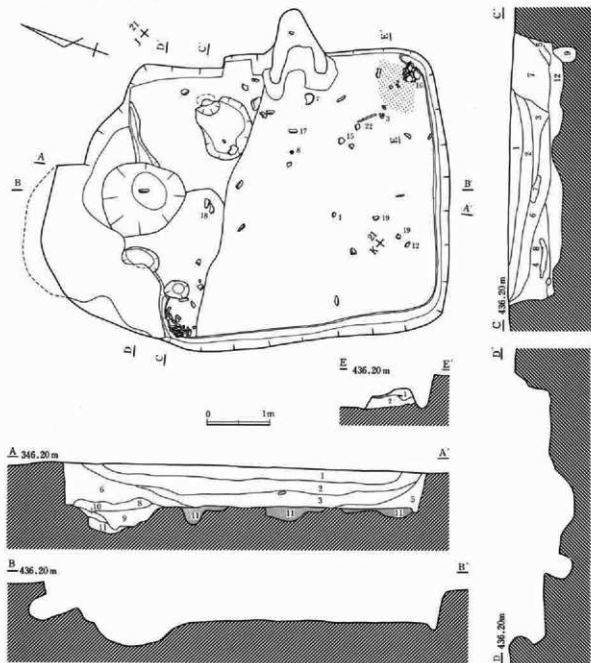
遺物 覆土中や同一グリッド内より土師器の甕や須恵器の坏蓋等の小破片が出土した。



第90図 15号住居跡実測図

1. 黒色土層 黒色土中に2m内外のロームブロックを多く含む。

第5章 検出された遺構と遺物



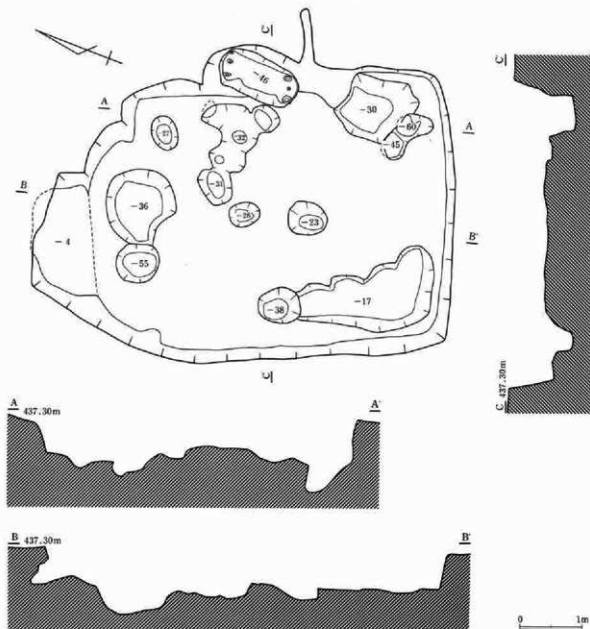
- |   |   |
|---|---|
| <p>1. 黒褐色土層 黒色土層中に多量のローム粒子を含む。ロームブロックは少なく、大きさも小さい。</p> <p>2. 黒褐色土層 黒色土層中に1~4cmのロームブロックを少量含む、ローム粒子をごく少量含む。</p> <p>3. 黒褐色土層 1層にはほとんど同じ。1層に比較して軟質である。</p> <p>4. 黒褐色土層 2層にはほとんど同じ。1層に比較してややローム粒子が少ない。</p> <p>5. 黒褐色土層 黒色土層を主とし、その中にローム粒子・ロームブロック等を少量含む。</p> <p>6. 黒褐色土層 黒色土中に大量のローム粒子と小さなロームブ</p> | <p>7. 黒色土層 黒色土を中心とする層。微量のローム粒子を含む。</p> <p>8. 黒褐色土層 黒色土層中に10cm内外のロームブロックと小さなローム小粒子を含む層（ローム採掘時に落ち込んだものと思われる）</p> <p>9. 黒褐色土層 黒色土層中に多量のローム粒子を含む層。</p> <p>10. ローム層 ソフトローム層</p> <p>11. 黒褐色土層 黒色土とローム粒子・2×3cmのロームブロックの混入土層。（住居南約当は床面として利用されており固い）</p> <p>12. 黒褐色土層 黒色土とローム粒子と小さなロームブロックの混入土層。</p> |
|---|---|

第91図 16号住居跡実測図

## 16号住居跡及びローム採掘坑 (奈良時代) 遺構写真図版29・30 遺物写真図版69・70

位置 11号住居跡の東約10mに位置し、K-21・22、L-21・22・23グリットに属する。

概要 15号陥し穴の西側一部を切って住居が作られていた。住居の掘り込みが深く、残存の良い住居跡である。竈の残りは悪い。住居南東壁の角地に小範囲にわたり焼土の堆積があった。住居北壁の大部分及び床面の北側約 $\frac{1}{3}$ はローム採掘坑と思われる遺構により掘り込まれて凹凸状を呈していた。この掘り込みは、住居北壁より北約2mほど掘られており、北側先端は上層の黒色土を避けて下層のロームを横掘りにより取り除いている。この傾向は東側にも認められる。この掘り方は粘土採掘坑にみられる粘土採集の方法と共通している。つまり必要なロームを採集するために、不用なローム上の黒色土を取り除く手間を省き、より効率的にロームを取る方法として、横から上層の黒色土をそのままにして下層のロームを取り去っているのである。床面のロームも取り去っている。しかし床面下10~20cmで



第92図 16号住居跡床下実測図

## 第5章 検出された遺構と遺物

砂質ルームになるため、床面ルームは多く取り除いていなかった。住居覆土の観察よりみて、このルーム採掘坑は住居が放棄されてまもない時期に床面上の覆土が多く堆積していない段階で掘られていることを示している。

**構造** 住居床面はルームを主とし、少量の黒色土を混入している。柱穴は検出されなかった。周溝は西、南壁にそって掘られており、竈の位置する東壁側では検出されなかった。竈南側に床下より土坑が検出されたが、貯蔵穴としては疑問である。

**規模** 住居跡は東西方向で4.5m、南北方向で約5mを呈しており、壁高は50~60cmである。ルーム採掘坑は住居跡床面部を含めると、東西方向で約4.5m、南北方向で約4m、深さは住居確認面より最も深い所で1m以上を測る。

**遺物** 床面や覆土中より土師器杯・甕、須恵器杯・杯蓋・甕、こも石、南東壁の角地の焼土層下より、ほぼ完形の土師器甕、竈南西部床面より小刀1本等が出土している。

**床下** 住居床面調査後床下の調査を行なう。床下よりは竈南と住居中央より小さな土坑が検出された。それらの土坑の床面よりの深さは、図中に数字で示した。

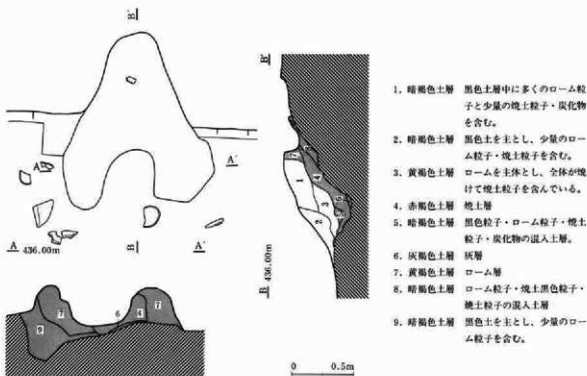
### 16号住居跡竈

**位置** 住居東壁ほぼ中央部に地山のルームを一部掘り込み、竈が構築されていた。

**構造** 竈焚口部や燃焼部の大部分が住居床面上に位置し、燃焼部の端と、煙道部は東壁を掘り込んで作られていた。つまり竈の大部分が住居内に位置する竈である。袖はルームを盛り上げて作られており、石は用いられていない。天井部のルームは残存せず、竈内にくずれ落ちている痕跡も認められなかった。煙道部の石も出土していない。残りの悪い竈である。

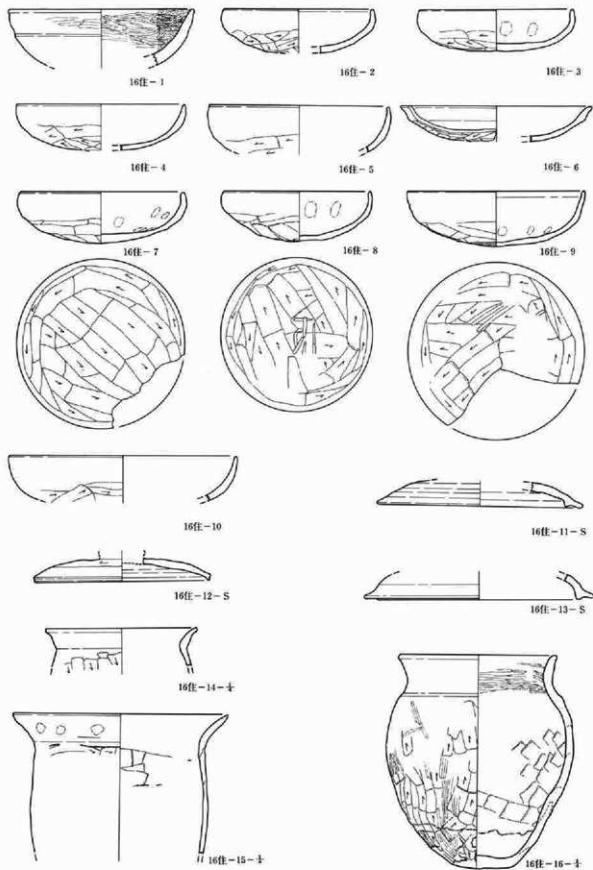
**規模** 煙道方向1.4m、両袖方向1.2m、燃焼部幅約50cmであった。

**遺物** 竈内より土師器甕の破片が多く出土している。



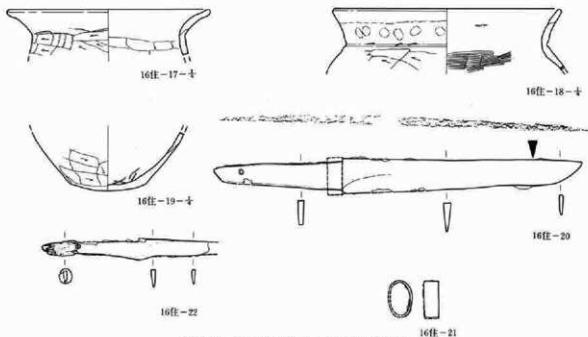
第93図 16号住居跡竈実測図

第2節 住居跡



第94図 16号住居跡出土遺物実測図(1)

第5章 検出された遺構と遺物



第95図 16住居跡出土遺物実測図(2)

16住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第94図 写真図版69・70)

遺構名及び番 号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
16住-1	環 土師器	— (14.5) — 床面+22、フク土	器内が厚く、口縁部外面に強い稜を持つ環である。内面は全面にわたっていいなへう磨きが行なわれており、内面と口唇部に吸炭による内黒処理あり。	①外面褐色・断面灰褐色・内面黒色②酸化③④1mm以下の白色粒子・石英粒子を多く、赤色粒子を少量含む
16住-2	環 土師器	— (11.7) — フク土	丸底の環である。口縁部は内傾しており、やや幅広くなっている。口縁部と底部との境に横ナデもへう削りも行なわれない部分あり。	①褐色②酸化③④⑤白色粒子含まず、1mm以下の黒色粒子を多く、2mm内外の石英と赤色粒子を少量含む
16住-3	環 土師器	3.2 (12.0) — 床面+24、フク土	丸底の環である。口縁部は内傾しており、幅広くなっている。口縁部と底部との境に横ナデもへう削りも行なわれない部分がある。	①褐色②酸化③④⑤白色粒子含まず、1mm以下の黒色粒子と1mm前後の赤色粒子を少量含む
16住-4	環 土師器	— (13.2) — フク土	丸底の環である。口縁部はやや外側に開いている。口縁部は横ナデ、体部は単位の広いへう削り、底部手持へう削り。	①褐色②酸化③④⑤1mm以下の白色粒子と石英粒子と黒色粒子を少量含む
16住-5	環 土師器	— (14.2) — 床下フク土	口縁部が大きく立ち上がる環で、口縁部横ナデ、底部手持へう削り、底部と口縁部間の削りは不明。	①褐色②酸化③④⑤1mm以下の白色粒子を多く含む
16住-6	皿形環 土師器	— (15.0) — 床下フク土	口縁部の外反する浅い環である。口縁部の幅は狭い口縁部下は手持へう削り、口縁部横ナデ、内面横方向ナデ整形。	①褐色②酸化③④⑤1mm以下の白色粒子を多く、黒色粒子を少量含む
16住-7	環 土師器	4.0 12.8 — 床面、カマド前	丸底の環である。底部より体部と口縁部が内彎しつつ立ち上がる。口縁部上半分横ナデ、下半分は指整形、体部手持へう削り。	①褐色②酸化③ほぼ定形④1mm以下の黒色粒子多く含む
16住-8	環 土師器	3.9 12.0 — 床面	丸底の環であり、底部が深い環である。口縁部上半分横ナデ、下半分指整形、体部一底部手持へう削り内面内面ナデ整形。	①褐色②酸化③ほぼ定形④1mm以下の黒色粒子を多く含む、白色粒子はほとんど観察できない

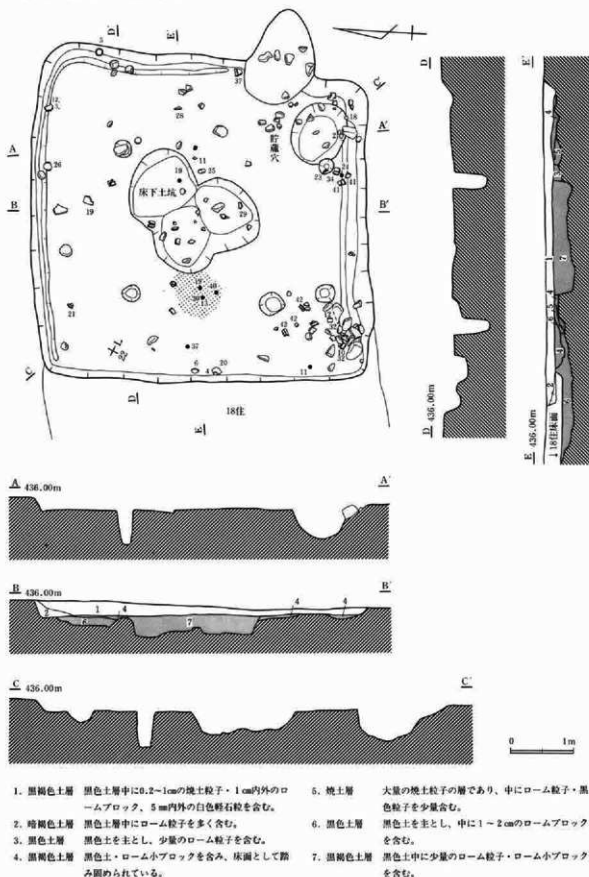


## 第2節 住 居 跡

16号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第94・95図 写真図版70)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
16住-9	坏土師器	4.3 13.8 — フク土、J-20	丸底の坏であり、口縁部は幅広く、体部は外上方へ口縁部はやや外へ開くが直立気味に立ち上がる。口縁上半分横ナゲ、下半分指整形。	①褐色②酸化③④④1mm以下の黒色粒子を多く、砂粒を少量含む
16住-10	坏土師器	— (17.8) — フク土	丸底の坏であり、口縁部は幅広い。口縁上半分横ナゲ、下半分指整形、体部～底部へ削り。	①褐色②酸化③④④1mm以下の黒色粒子を多く、赤色粒子を少量含む
16住-11	蓋須臾器	— (16.2) — フク土、J-20	太く短いカエリを持つ環蓋である。表面全面に障灰による自然釉が付着している。内面全面ナゲ整形。外面の整形は自然釉のため観察不可能。	①灰色②還元③④④1mm以下の白色粒子多く含む
16住-12	蓋須臾器	— (13.8) — 床面+14	カエリを持たない環蓋である。おそらく環状つまみを持つと思われる。肩部が下方へ短く折り返される。	①灰色②還元③④④1mm以下の白色粒子を多く含む
16住-13	蓋須臾器	— (18.2) — 床面	太く断面三角形状のカエリを持つ環蓋である。特異な形であり、他に例をみない。丸味を持つ器形がカエリを境に肩部は横下方へ方向を変えている。	①灰色②還元③④④1mm以下の白色粒子を多く含む
16住-14	小形甕	— (15.8) — フク土	頸部の器肉が特に厚い特色を持つ小形甕である。口縁端部は外に大きく外反している。体部はへ削り	①褐色②酸化③④④1mm以下の白色粒子を多く含む
16住-15	甕土師器	— (22.6) — 床面、フク土	器内の薄い甕であり、頸部～口縁部の器肉のみがやや厚くなっている。胴部は直立し、口縁部はくの字状に外反している。器表面の整形はていねいである。	①褐色②酸化③④④1mm以下の白色粒子を多く含む
16住-16	甕土師器	22.5 15.4 6.2 床面	器肉が全体に厚く、胎土の荒い小さな甕である。口縁部内面へへによる横方向の磨き調整。体部外面に口縁部に向かうへ削り、内面ナゲ整形。	①褐色②酸化③④④1mm以下の白色粒子を多量に含み、1～3mmの石英粒子を多く含む
16住-17	甕土師器	— (21.0) — 床面+30、フク土	器内の薄い甕であり、口縁部は頸部より大きく外反している。口縁部横ナゲ、体部はその後下から左上方向に向かうへ削り、体部は直立気味である。	①黒褐色②酸化③④④1mm以下の白色粒子を多く含む
16住-18	甕	— (23.0) — 床面+30	体部に丸味を持つ甕の口縁部～体部上半の一部である。口縁部中央に指頭痕状の凹凸が少し残る。肩部左上方向へ削り、内面刷毛状工具による削り。	①褐色②酸化③④④1mm以下の石英粒子を多量に含む
16住-19	甕土師器	— — (8.0) 床面+17、フク土	丸い胴部を持つ甕の底部～体部下半の破片と思われる。内面横ナゲ、外面右下方のへ削り。	①内面褐色・外面黒色②酸化③④④1mm以下の白色粒子を少量含む
16住-20	いばせの小刀鉄製	全長—29.1 床面+27	重ねの薄い小刀で、差直切先部に柄の木質が僅かに遺存し、下記銘が装着している。形状は平造で、捺形跡は錆化のためよく判らない。平造の平は肉置があるように見え、身中程から刃の造り出しを行なうが、それは弱出しかもしれない。肉置は錆化遺存のかかりにおいては始刃である。鋸は錆化状態を観察すれば、全体に赤目だら、精造造を思わせる。部分的な錆化が発達していないのはこのためか。柄子はやや縁の付いた大切先、葉は目釘穴1、尖底やや長目である。目釘穴の直径は小さく、0.4mmである。	
16住-21	同上の縁鉄製	長径—2.9 幅 —1.2 厚さ—0.2	楕円形の縁金物である。表面には有機質の痕跡が認められるが、木質のようには見えない。銅としての可能性は、銅元の幅から推察を想定すると考え難いので縁金物とした。鍛えは錆化状態からすると小芯目づいており、精造造と考えられる。	
16住-22	刀子鉄製	全長—10.5 床面+2	櫛区あり、錆が深いため刃部の位置に小刀区がある。平作りであるが、肉置は輪状となる蓋先端部に柄の木質が遺存。切先は旧時の欠損。	

第5章 検出された遺構と遺物



第96図 17号住居跡実測図

## 17号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版31・32 遺物写真図版70・71・72

**位置** 16号住居跡南約5mに位置し、18号住居跡の竈と東壁、東側床面の一部をこわしてその上に住居が作られている。K-21・22、L-21・22・23グリットに属する。

**概要** 住居の掘り込みが浅く、竈の残りも悪い。18号住居跡と西壁部分で重複し、西側の一部の床面と西壁の大部分は18号住居跡覆土を掘り込んで作られている。そのため西壁及び床面の一部は検出が困難であった。住居南西端に多くの石がまとまって出土し、その一端に羽釜の破片が出土した。

**構造** 床面はロームを主とし、多くの黒色土の混入層よりできていた。18号住居跡と重複している部分は、黒色土を主とし、少量のローム粒子・ロームブロックを含んでいた。柱穴は4本検出されており、全体として南側に片寄っていた。周溝は18号住居跡と重複している部分と、竈付近を除いて、ほぼ検出できなかった。竈右側手前に貯蔵穴が検出された。

**規模** 東西方向で5.2m、南北方向で5.4mであり、南北方向にやや長い。壁高は20~30cmで残りは良好でない。周溝幅は20~25cmで深さは2~3cmと浅い。柱穴は径約30~40cmの円形を呈しており、深さは床面より50~60cmである。貯蔵穴は長径約1mの楕円形を呈しており、深さは30cmであった。

**遺物** 床面や覆土中より多くの土師質土器・埴輪、須恵器の甕の破片、羽釜、灰陶器の皿、埴輪等が出土。

**床下** 床面中央部に床下土塊が3基お互いに切り合いながら掘られていた。いずれも長径約1.2m、短径約1mの楕円形を呈し、深さ約20cmであった。

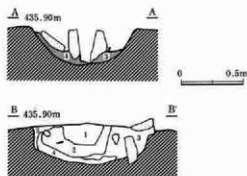
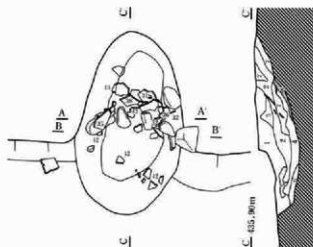
## 17号住居跡竈

**位置** 住居東壁で南壁に近い位置に地山のロームを多く掘り込み燃焼部の半分近くから煙道部のすべてが住居外に位置する竈が構築されていた。

**構造** 石を多く用いた竈であり、竈の大部分がくずれており、残りが非常に悪い。燃焼部中央に支脚石と思われる石が2個、平行に立っていた。このような例は他にはなく、どのように使用されたのか興味深い。

**規模** 煙道方向1.44m、両袖方向85cm

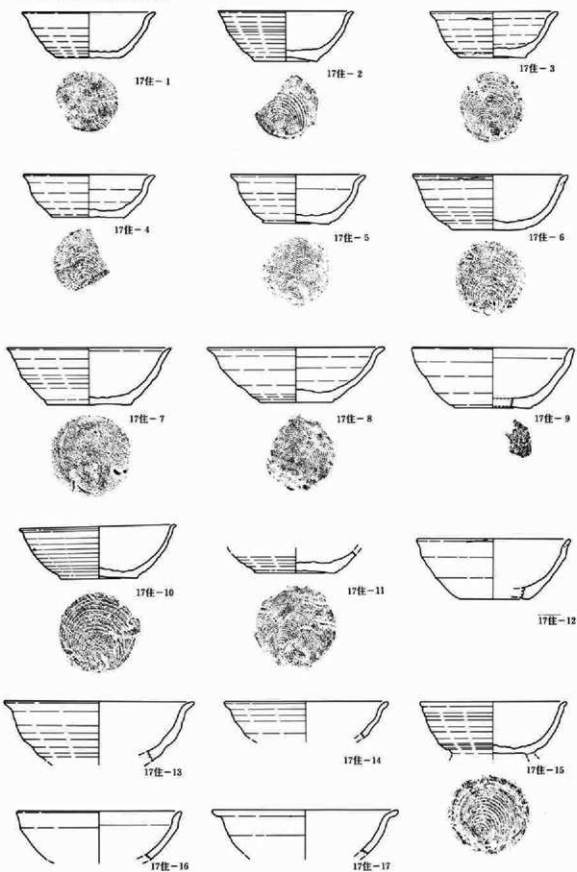
**遺物** 竈内より羽釜、須恵器の甕等出土。



1. 黒褐色土層 黒色土中に多くのローム粒子を含む。
2. 黄褐色土層 黒色土・ローム粒子・焼土の混入土層。灰を少し含む。
3. 黒褐色土層 黒色土中にローム粒子・焼土粒子を含む。
4. 焼土層
5. 黒褐色土層 黒褐色土層中に2×3cm前後のロームブロックを含む。
6. 黒色土層 焼土粒子含まず。ローム小ブロックを少量含む。
7. 黒色土層 黒色土層中にごく少量の焼土を含む。ローム粒子含まず。
8. 褐色土層 地山のローム層が熱を受けてやや焼土化した層。

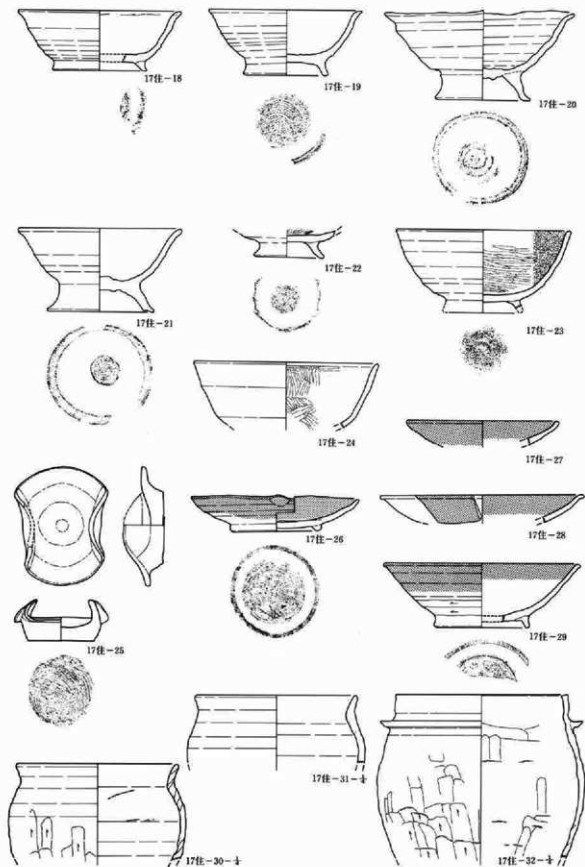
第97図 17号住居跡竈実測図

第5章 検出された遺構と遺物



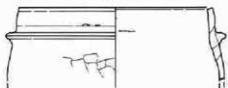
第98図 17号住居跡出土遺物実測図(1)

第2節 住居跡

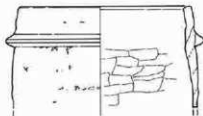


第99図 17号住居跡出土遺物実測図(2)

第5章 検出された遺構と遺物



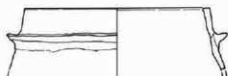
17住-33-土



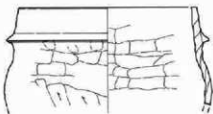
17住-34-土



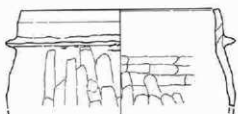
17住-35-土



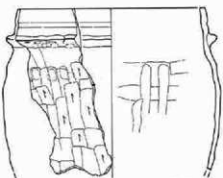
17住-36-土



17住-37-土



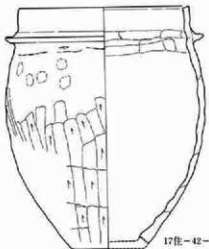
17住-38-土



17住-39-土



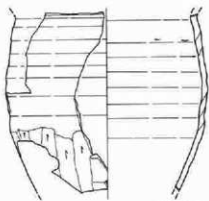
17住-40-土



17住-42-土



17住-44



17住-41-土



17住-43-土

第100図 17号住居跡出土遺物実測図(3)

17号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第98図 写真図版70・71)

遺構名及び番 号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出 土 位 置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
17住-1	坯 土師貫	3.6 (10.6) 5.0 フク土	底径が口径の $\frac{1}{2}$ 以下の環である。体部は内彎しつつ外上方へ開く、口縁部は外反する。体部にロクロ目底部右回転糸切痕、底面が磨耗している。	①内面灰黒色・断面～外面灰白色②還元③ $\frac{1}{2}$ ④1mm以下の白色粒子を多く含む
17住-2	坯 土師貫	3.9 (10.6) 4.9 貯蔵穴、フク土	底径が口径の $\frac{1}{2}$ 以下の環である。体部下端と底部端との間に段を持つ。底面右回転糸切痕を持つ。口縁部端部外反。	①口縁部外側灰白色・その他黒色②還元③ $\frac{1}{2}$ ④1mm以下の白色粒子を多量に含む
17住-3	坯 土師貫	3.6 10.1 5.2 床面+4	底径が口径の約 $\frac{1}{2}$ の環である。底部が厚く、体部下端と底部端との間に強い段を持つ。口縁部が大きく外反し底面右回転糸切痕が残る。	①褐色②酸化③ほぼ完全④1mm以下の白色粒子と石英粒子を多く含む
17住-4	坯 土師貫	3.4 (10.4) (5.6) 床面+3、貯蔵穴	底径が口径の約 $\frac{1}{2}$ の環である。体部は内彎しつつ外上方に開き、口縁部は大きく外反する。底部に右回転糸切痕が残る。	①褐色②酸化③ $\frac{1}{2}$ ④1mm以下の白色粒子を多く、2mm以下の石英粒子を少量含む
17住-5	坯 土師貫	3.9 10.6 5.2 周溝内	底径が口径の $\frac{1}{2}$ 以下の環である。体部は内彎しつつ外上方に開き、口縁部は大きく外反する。体部下端と底部端との間に強い段を持つ。	①口縁部～体部外面の一部灰色・他器表面黒色②還元③完全④1mm以下の白色粒子を多量に、石英粒子少量含む
17住-6	坯 土師貫	4.4 12.4 5.9 床面+3	底径が口径の $\frac{1}{2}$ 以下の環である。底部より体部は内彎しながら外上方へ開き、口縁部は大きく外反する内側底面中央に凸状の出っ張り、外面右回転糸切痕。	①表面灰黒色・断面灰黒色②酸化やや横焼成③ $\frac{1}{2}$ ④1mm以下の白色粒子を多く、3mm内外の赤色粒子を多く含む
17住-7	坯 土師貫	4.5 (13.0) 6.7 床面+2、フク土	底径が口径の約 $\frac{1}{2}$ の環である。体部下端と底部との間に段を持つ。体部は内彎しつつ外上方へ開き、口縁部は大きく外反する。底面右回転糸切痕。	①口縁部外側灰白色・その他黒色②還元③ $\frac{1}{2}$ ④1mm以下の白色粒子を多量に1～2mmの石英粒子少量含む
17住-8	坯 土師貫	4.3 (14.1) (5.7) フク土	底径が口径の $\frac{1}{2}$ 以下の環であり、特に底径が小さい底部端と体部下端との間に段を持つ。底部は特に厚くなり、底面に右回転糸切痕を持つ。	①体部下～底部黒色・口縁部内面灰白色②還元③ $\frac{1}{2}$ ④1mm以下の白色粒子を多く含む
17住-9	坯 土師貫	4.7 (12.9) (6.1) 床下フク土、床面	底径の小さな環である。体部は内彎しつつ外上方へ開き、口縁部は外反せずに、直立気味に立ち上がる。底端部と体部下端との間に段をもつ。	①灰褐色②酸化③ $\frac{1}{2}$ ④1mm以下の白色粒子を多く、2mm内外の赤色粒子を少量含む
17住-10	坯 土師貫	4.2 (12.4) 6.1 床面	底部端と体部下端との間に強い段を持つ。体部は丸く内彎しつつ外上方へ開き、口縁部端部大きく外反。	①灰褐色②酸化③ $\frac{1}{2}$ ④1mm以下の白色粒子を多く含む
17住-11	坯 土師貫	— — 6.4 床下フク土	底部端と体部下端との間に強い段を持つ。底面に外側右回転糸切痕を持つ。底面内側に溝巻状の凹凸あり。	①内外面及び断面黒色②還元③底部～体部下半のみほぼ完全④白色粒子含む
17住-12	坯 土師貫	— (12.0) (5.4) 床面+2、フク土	底径の小さな環である。体部は内彎しつつ外上方に開き、口縁部はやや外側に開く、底面に糸切痕の痕跡を残す。	①内外表面黒色・断面灰白色②還元③ $\frac{1}{2}$ ④1mm以下の白色粒子を多く含む
17住-13	坯 土師貫	— (15.0) — 床面+1、フク土	体部は内彎しつつ外上方へ開き、口縁部は大きく外反する。	①灰白色②還元③ $\frac{1}{2}$ ④1mm以下の白色粒子を多量に含む
17住-14	坯 土師貫	— (12.8) — 床下フク土	やや器高の低い器と思われる。体部は内彎しつつ外上方へ開く、口縁部は大きく外反する。	①内外面と断面すべて黒色②還元③ $\frac{1}{2}$ ④1mm以下の白色粒子を多く含む
17住-15	埴 土師貫	— (11.5) — フク土	高台付の埴であり、高台がそっくりはずれている。底径は口径に比較してやや大きい。体部は内彎しつつ外上方へ開き、口縁部は大きく外反する。高台部内面右回転糸切痕残る。	①灰白色②還元③ $\frac{1}{2}$ ④1mm以下の白色粒子を多く、2mm内外の白色粒子を多く含む

## 第5章 検出された遺構と遺物

17号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第96・99図 写真図版71)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色②焼成③残存④粘土⑤備考
17住-16	坏土師質	— (12.8) — 床下フタ土	体部は内彎しつつ外上方へ開く、口縁部はやや外反し、口縁部横ナメにより体部との境に弱い稜を持つ	①内面黒色・断面と外面灰黒色②還元③④1mm以下の白色粒子を多く含む
17住-17	坏土師質	— (14.8) — フタ土	体部は内彎しつつ外上方へ開く、口縁部は大きく外反する。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を多く含む
17住-18	埴土師質	5.7 (13.0) (7.5) 貯蔵穴	高台を持つ埴である。体部はやや直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。高台はていど断面三角形形状を呈し、肩部分で外側へ少し広がっている。	①表面灰白色・断面と口縁部外側の一部黒色②還元③④1mm以下の白色粒子を多量に含む
17住-19	埴土師質	5.1 (12.2) (6.8) 床面+2、床下フタ土	高い高台の付く埴である。体部はやや直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。高台は断面長方形を呈し、端部の整形がていどである。	①内面と外面の一部黒色、断面と外面の一部褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を多く含む
17住-20	埴土師質	7.1 15.0 7.5 高台の高さ1.7 床面+3	高台の高さが、環部の約半となる高い高台を持つ埴である。体部はやや内彎しつつ外上方へ開き、口縁部は大きく外反する。高台は高く、環底部分で厚く、肩部分で薄くなる。端部整形がていどである。	①外面灰白色・内面灰褐色②酸化③成形④1mm以下の白色粒子を多く、2mm内外の石英粒子を少量含む
17住-21	埴土師質	6.6 (12.8) 8.6 高台の高さ1.7 床面+8、フタ土	高台の高さが、環部の約半となる高い高台を持つ埴である。体部はやや内彎しつつ外上方へ開き、口縁部は外反する。高台は高く、環底部分で厚い。肩部分の中央に弱い凹状の溝が一周している。	①灰白色②還元③④1mm以下の白色粒子を多量に、2～3mmの石英粒子を多量に含む
17住-22	埴土師質	— — 5.7 フタ土	内面全面が磨かれており内側の埴と思われる。高台の台が外側に大きく開き、他の埴とは異なる。高台部内側に赤切痕は認められない。	①褐色②酸化③底部と高台部のみほぼ完成④1mm以下の砂粒子と1～2mmの石英粒子を多く含む
17住-23	埴土師質	— (13.6) — 床面、フタ土、K-22	内面全面がていどに磨かれており、その後に噴流による内面処理がなされている。体部のヘラ磨きは内面を4区分して横方向に磨いており、底面はすべて一定横方向のヘラ磨きである。高台内側回転ナメ	①内面黒色・断面灰褐色・外面黒褐色②還元③④1mm以下の砂粒を多く、1～2mmの石英粒子を少量含む
17住-24	埴土師質	— (14.5) — 床面+2、K-22	内面全面がていどに磨かれているが、前記の23と異なり、口縁部の磨きは縦方向であり、体部は不定方向の磨きである。	①内面黒色・断面黒褐色・口縁部を除く外面褐色②還元③④1mm以下の白色粒子と1～2mmの石英粒子多量含む
17住-25	耳皿	3.3 4.3 5.3 床面 9.2 5.6	底部が特に厚い。口縁部は横方向に開き、両面をつまみ上げ内側に大きく曲げて耳皿としている。内面整形はていどで凹凸なし。底部外面に右回転赤切痕が残るが表面が磨耗している。	①内外表面黒色・断面灰褐色②還元③ほぼ完成④1mm以下の白色粒子と石英粒子を多く含む
17住-26	輪花皿灰釉	3.0 13.3 6.8 床面+15	口縁部4箇所を指により内側にせり出して輪花としている。口縁部は外反せずにやや立ち上がる。高台は丸味を持ち、内面に右回転赤切痕が残る。	①素地灰白色・釉は淡緑色②還元③ほぼ完成④⑤⑥虎渡山
17住-27	埴灰釉	— (11.9) — 床面	浅い埴であり口縁部が外反している。釉は刷毛により施釉されている。光ヶ丘1号窯式と思われる。	①素地灰白色・釉は白色で内外面刷毛による無釉②還元③④⑤⑥虎渡山
17住-28	皿灰釉	— (16.0) — フタ土	口径の小さな皿と思われる。口縁部よりやや丸く太くなり、立ち上がる。口縁の一部は炭が付着しており、灯明皿として利用された可能性あり。	①素地灰白色・釉は淡緑色～白色②還元③④⑤⑥
17住-29	埴灰釉	5.1 (15.2) (7.1) 床面、フタ土 K-22	断面長方形の高台を持ち、体部へ口縁部は弱く内彎しつつ外上方へ開く、口縁部はやや外反している。高台内面は回転ナメ整形。	①素地灰白色・釉は淡緑色～透明②還元③④⑤⑥虎渡山



## 第2節 住 居 跡

17号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号99・100図 写真図版71・72)

遺構名及び番 号	器形及び器種	器高・口径・直径(cm) 出 土 位 置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
17住-30	甕	— (17.0) — 床面+1、M-36	ロクロ整形による甕である。丸味を持つ体部より口縁部はやや外反気味に立ち上がる。口縁から体部横ナデ、体部中頃に底部より口縁に向かうへう削り。	①灰白色②還元③④1～4mmの石英粒子を多量に含む
17住-31	甕	— (17.0) — 床面+1、カマド内	ロクロ整形による器内の厚い甕である。丸味を持つ体部より口縁部はやや外反気味に立ち上がる。口縁から体部横ナデ、体部全面横ナデ整形。	①灰白色②還元③④1～4mmの石英粒子を含む
17住-32	羽釜	— (18.4) — フク土、カマド内 床面	丸味を持つ体部が、鐙の付く付近を境に口縁部が直立気味に立ち上がる。口唇部は平でやや内傾し中央がやや凹状になる。鐙は細長い。体部外側は鐙に向かうへう削り整形。内面指によるナデ整形。	①灰褐色②酸化③④1～3mmの石英粒子を多く含む
17住-33	羽釜	— (20.6) — 床面+7、フク土	丸味を持つ体部が、鐙の付く付近を境に直立気味に立ち上がる。口唇部は平で少し内傾する。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子と1～3mmの石英粒子を多く含む
17住-34	羽釜	— (18.2) — 床面+5	やや直線気味の体部を持ち、口唇部はやや丸味を帯びている。鐙は断面三角形を呈し縁な作りで縁に貼付けている。	①灰白色②還元③④1mm以下の白色粒子と石英粒子を多く、2mm前後の赤色粒子を少量含む
17住-35	羽釜	— (19.9) — 床面+3、カマド内	丸味を持つ体部が、鐙の付く付近を境に直線気味に立ち上がる。口唇部は平でやや内傾している。鐙は短く幅広く断面三角形を呈する。	①灰褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子と2mm前後の石英粒子を多く含む
17住-36	羽釜	— (19.6) — カマド内	丸味を持つ体部が、鐙の付く付近を境に直立気味に立ち上がる。口唇部は平でやや幅広くなっている。鐙は細く外上方へつまみ出している。	①灰褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子と石英粒子を多く、2mm前後の赤色粒子を多く含む
17住-37	羽釜	— (18.3) — 床面	丸味を持つ体部が、鐙の付く付近を境に直立気味に立ち上がる。口唇部は平であり、鐙は断面三角形を呈し、太く短い、鐙下部分に指ナデ整形	①灰褐色②還元③④1mm以下の白色粒子を多く2mm前後の石英粒子を少量含む
17住-38	羽釜	— (21.0) — カマド内	丸味を持つ体部が、鐙の付く付近を境に直立気味に立ち上がる。口唇部は平であり、鐙は細長く断面三角形を呈する。体部は鐙に向かうへう削り整形。	①灰褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子少量含む2mm前後の石英粒子を少量含む
17住-39	羽釜	— (20.0) — カマド	丸味を持つ体部が、鐙の付く付近を境に直立気味に立ち上がる。口唇部は平で、鐙は短く断面三角形を呈する。鐙の下面に指の痕跡が多く残る。	①灰白色②還元③④1mm以下の白色粒子を多く、2mm前後の石英粒子を少量含む
17住-40	羽釜	— — 7.9 床面、床下フク土	羽釜の底部で、底面は薄い円板状で、体部下半の器内は厚い。底面ナデ、体部下半鐙に向かうへう削り。	①内外面灰褐色-断面黒色②酸化③④1mm以下の白色粒子と2mm前後石英含む
17住-41	甕	— — — 床面+2、床下土坑	羽釜の体部とも思われるが、体部上半にへう削りはなく、横ナデのみであることより甕の可能性大。	①黒褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子と2～3mmの石英粒子多く含む
17住-42	羽釜	— (18.0) — 床面、床下フク土、カマド内	丸味を持つ体部が、鐙の付く付近を境に直立気味に立ち上がる。口唇部は平で、やや幅広くなり内傾している。鐙は断面三角形で細長い。体部中下半は鐙に向かうへう削り、体部上半に指整形痕が残る。	①灰褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子と石英粒子を多く含む
17住-43	甕	— (30.0) — カマド内	なだらかに外反する長い口縁部を持つ、口唇部は羽釜同様に平である。内外面横ナデ、ロクロ使用か?	①灰褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を多く含む
17住-44	蓋	— — — 床下	蓋のつまみ部分と思われ、胎土、焼成方法とも土師質土器に似ている。この時期に他に類例なく特異。	①灰褐色②酸化③つまみ部のみ完形④1mm以下の白色粒子多く含む

第5章 検出された遺構と遺物

18号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版32 遺物写真図版72・73

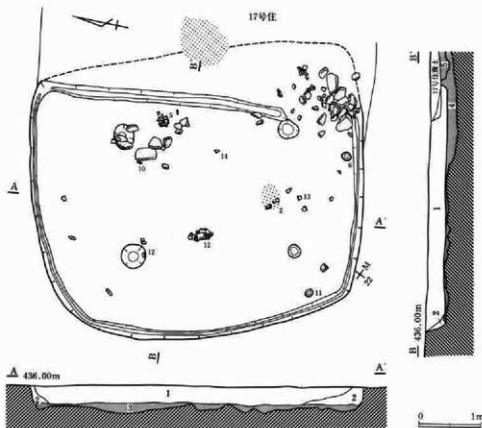
位置 17号住居跡西側に位置し、17号住居跡に東壁の上部と、竈大部分を削り取られている。K-21、L-21・22グリットに属する。

概要 住居跡の東壁及び竈の大部分を17号住居に削り取られているため、住居跡のプラン確認には困難が伴った。18号住居床土坑西側に検出された焼土部分を、位置等からみて竈の痕跡として考えたと図で示したような形が想定される。4柱穴の位置等からみて、おそらくこのような平面形であったものと思われる。竈右側手前の南壁寄りに多くの石が集められていた。焼土等は含まれていなかった。用途については不明である。

構造 床面はロームを主とし、少量の黒色土を多く混入している。柱穴は4本検出されている。周溝は竈右側手前の南壁寄りに検出された多くの集石部分と東壁部分を除いて検出できた。なお北壁と東壁の接点より、集石部に向かう周溝らしき溝が検出されているが、用途は不明である。貯蔵穴は検出されなかった。壁は浅く残りが悪く、東壁は前述のごとく検出できなかった。

規模 東西方向は、東壁の検出ができなかったため不明、推定復元で4.6m南北方向で約5.3m、壁高は35cm前後であり、周溝幅は10cm前後、深さは5cm前後、柱穴は径約40～80cmで深さは60～80cmである。

遺物 床面や覆土中より土師器環・甕、須恵器の甕等の破片が出土している。

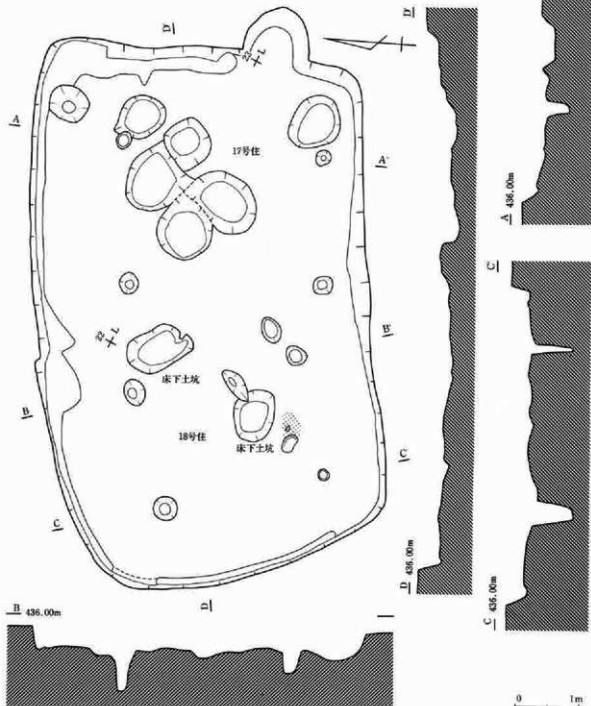


- |          |                                   |          |   |
|----------|-----------------------------------|----------|---|
| 1. 黒褐色土層 | 黒色土層中に0.2～0.4mmのロームブロック・ローム粒子を含む。 | 3. 黄褐色土層 | 黒色土層中にロームブロック・ローム粒子を多量に含む。上部は踏み固められている。 |
| 2. 黒褐色土層 | 黒色土層中に小さなロームブロック・ローム粒子を含む。        | 4. 黒色土層  | 黒色土を主とし、1～2cmのロームブロック含む。                |
|          |                                   | 5. 黒褐色土層 | 黒色土を主とし、1～2cmのロームブロック含む。                |

第101図 18号住居跡実測図

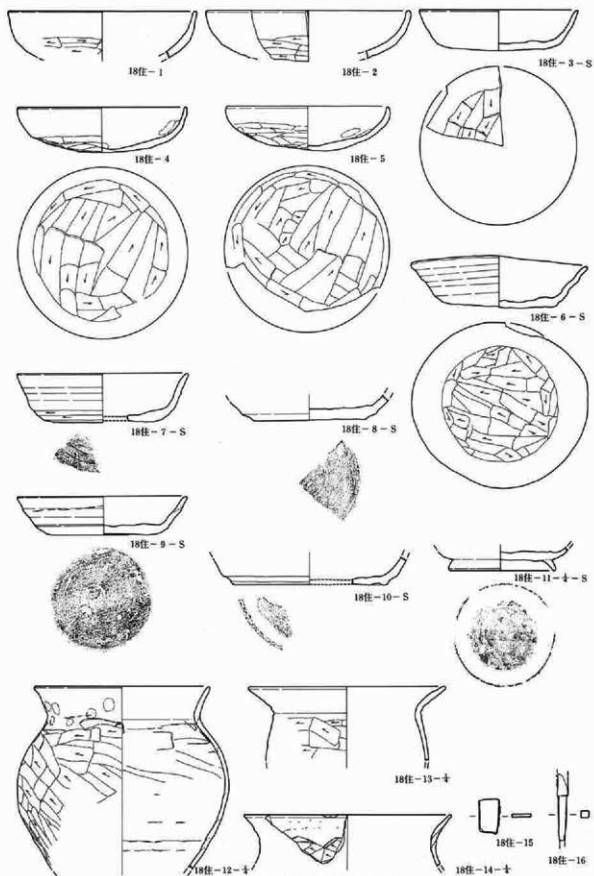
## 17・18号住居跡床下

概要 17・18号住居跡の床面調査後、床面上の黑色土の混入土をすべて取りのぞいて床下部分の構造について調査した。その結果床面調査時には検出できなかった17号住居跡竈右側手前の柱穴および、床下土坑の新たな2基の検出、18号住居跡の南側2本の柱穴、さらに18号住居跡の中央部にある床下土坑とその南にある焼土の検出ができた。床面下には土坑の他にも多くの掘り込みがあり凹凸を呈していた。



第102図 17・18号住居跡床下実測図

第5章 検出された遺構と遺物



第103図 18号住居跡出土遺物実測図

第18号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第103図 写真図版72・73)

遺構名及び番 号	器形及び器種	器高・口径・底径 (cm) 出 土 位 置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
18住-1	環 土師器	— (15.0) — 床下フタ土	丸底の環であり、口縁部上半横ナゲ、下半は指整形 体部～底部手持へ削り、口縁部はやや外側に開く。	①褐色②酸化③④⑤白色粒子含まず
18住-2	環 土師器	— (16.1) — 床面+5	丸底の環であり、口縁部はやや内傾しており、全面 横ナゲ、その下の体部へ削り。	①褐色②酸化③④⑤白色粒子含まず
18住-3	環 須恵器	3.2 (12.6) 9.6 床下フタ土	口径・底径が大きく、器高の低い環である。平底の 環であり、体部はやや内傾しつつ直線気味に外上方 へ開く。底部はやや丸味を持ち手持へ削り。	①灰白色②還元軟質③④⑤2mm内外の 石英粒子含む
18住-4	環 土師器	3.6 13.2 — 床下ビット	丸底の環であり、口縁部は強く内傾しつつ直線気味 に外上方へ開く、口縁部上半横ナゲ、下半は指整形 体部～底部は手持へ削り。	①褐色②酸化③はぼ形実④1mm以下の 砂粒と白色粒子をごく少量含む
18住-5	環 土師器	3.5 (12.8) — 床面	丸底の深い環であり、口縁部は幅広くやや内傾して いる。口縁上半横ナゲ、下半は指整形、体部～底部 は手持へ削り。	①褐色②酸化③④⑤1mm以下の砂粒を ごく少量含む
18住-6	環 須恵器	3.9 14.1 9.0 床面	焼きひずみのためか、全体がゆがんでいる。口径と 底径が大きく、器高の低い環である。体部と口縁部 は直線的に外上方へ開く、体部下端にしぼりあり、 底面手持へ削り。	①灰色②還元焼結③実形④1mm以下の 白色粒子と石英粒子を少量含む
18住-7	環 須恵器	(3.9) (13.6) (6.9) 床下フタ土	体部～口縁部が直線的に外上方へやや開く、口縁部 が強く外反、体部下半～底面回転へ削り。	①灰白色②還元③④⑤1mm以下の白色 粒子を多く含む
18住-8	環 須恵器	— — (9.0) 床下フタ土	底径の大きな環であり、体部下端と底部との境にし ぼりあり、底面回転へ削り。	①灰白色②還元③④⑤1mm以下の白色 粒子を多く含む
18住-9	環 須恵器	3.1 (13.5) 7.8 床下ビット	口径と底径が大きく、器高の低い環である。体部～ 口縁部はほぼ直線を外上方へ開く、底面は全面にあ たり右回転糸切痕あり。	①内面と断面黒色・外面黒色②還元 ③④⑤1mm以下の白色粒子と石英粒子 を多く含む
18住-10	埴 須恵器	— — (12.2) 床面+3	削り出し高台を持つ環であり、高台は低い幅が広い。 高台と底面の高きはほぼ同じ。	①灰色②還元③④⑤1mm以下の白色粒 子を多量に、2～3mmの石英少量含む
18住-11	埴 須恵器	— — 11.2 床面+2	高台の付く埴と思われる。高台は断面三角を呈し、 細長くハの字状に開く、内側底部が磨耗している。 高台部内面ははいねい回転ナゲ整形。	①灰色②還元焼結③底部と高台実形④ 1mm以下の白色粒子を多量に含む。
18住-12	甕 土師器	— 18.4 — 床面+6、フタ土	器内の薄い甕であり、器内は口縁部まで薄い丸い体 部より口縁部はくの字状に外反する口縁部は横ナゲ 体部上半は左横方向のへ削り、中部は左上方向へ 削り。	①褐色②酸化③④⑤1mm以下の石英粒 子を多量に含む
18住-13	甕 土師器	— 15.3 — 床面+8、	器内の薄い甕であり、口縁部は大きくくの字状に外 反する。口縁部横ナゲ、体部上半左横方向へ削り。	①褐色②酸化③④⑤1mm以下の石英粒 子を多く含む
18住-14	甕 土師器	— (22.0) — 床下フタ土	器内の薄い甕であるが、口縁部が少し厚い、口縁部 横ナゲ、体部は左横方向へ削り。	①褐色②酸化③④⑤1mm以下の石英粒 子を多く、2mm前後の赤色粒子少量含む
18住-15	板金 鉄器	幅 — 0.8 フタ土	側部・小口とも旧時のままである。側部に刃の作り出しは認められない。錆化は板目状である。	
18住-16	釘 鉄器	断面中程径—0.6 全長—5.1 フタ土	錆化が板目状に発達しており、鏝としては太過るので釘と考えられる。断面形方形、両端は 調査時の欠損である。	

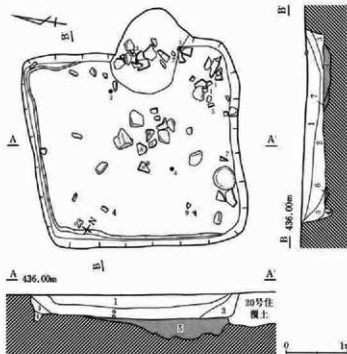
19号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版33 遺物写真図版73

位置 17・18号住居跡の南側約6～12mに位置し、M-22・23、N-22・23グリットに属する。

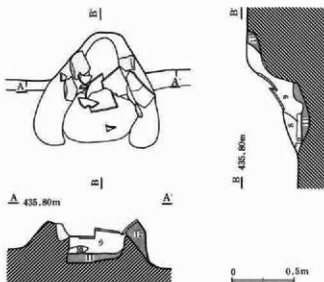
概要 住居の掘り込みは、比較的深く残りの良い住居跡である。測定できる住居中最も小型の住居である。

住居南側は20号住居跡と重複しており、20号住居跡北壁の一部を掘り込んで住居が作られていた。

構造 床面は中央部でルームの地山を床面としているが、壁に近づくにつれて、地山のルームを取り除いた後にルームブロック・ルーム粒子・黒色土の混入土で床面を築いている。柱穴、貯蔵穴等は全く検出



第104図 19号住居跡実測図



第105図 19号住居跡竈実測図

されず、周溝は20号住居跡と重複している部分を除いてはほぼ一周している。

規模 東西方向で3.4m、南北方向で3.2mを呈する。壁高は30cmである。

遺物 土師器坏・甕、須恵器坏・甕等を多く出土している。

19号住居跡竈

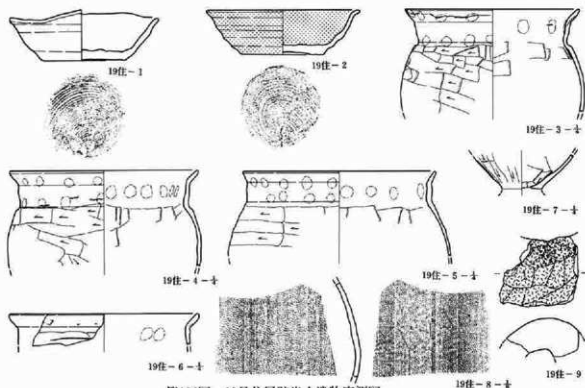
位置 住居東壁やや南寄り、地山のルーム先端部を少し削り込んで竈が構築されていた。

構造 竈内より袖石は4個体のみの出土であったが、床面上の石より見て石組の竈の可能性大。燃焼部の多くは住居内に位置する。

規模 煙道方向で90cm、両袖方向へ1m、高さ約50cm、燃焼部幅約60cm。

遺物 竈を覆うように須恵器の大きな破片が5個体、竈内からは土師器の甕の破片が出土している。

1. 黒色土層 黒色土中にルーム粒子ほとんど含まず。
2. 黒褐色土層 黒色土中に少量のルームを含む。
3. 黒褐色土層 黒色土中に多くのルーム粒子含む。
4. 黒色土層 黒色土層を主とし、ルーム粒子・ルームブロックを少量含む。
5. 褐色土層 0.1～0.5cmのルームブロック・ルーム粒子を主とした層中に黒色粒子を含む。
6. 赤褐色土層 黒色土・焼土粒子・ルーム粒子の混入層
7. 赤褐色土層 焼土粒子・ルーム粒子の混入土層、黒色土層含まず。
8. 赤褐色土層 ルーム粒子・ルームブロック・焼土粒子・焼土ブロック・黒色土の混入土層。
9. 赤褐色土層 ルーム粒子・焼土粒子の混入土層。
10. 焼土層 固く赤く焼けた層。
11. 黒褐色土層 粒子の密な土層、地山層。
12. 黒褐色土層 ルーム粒子・ルーム小ブロック・黒色土の混入土層。

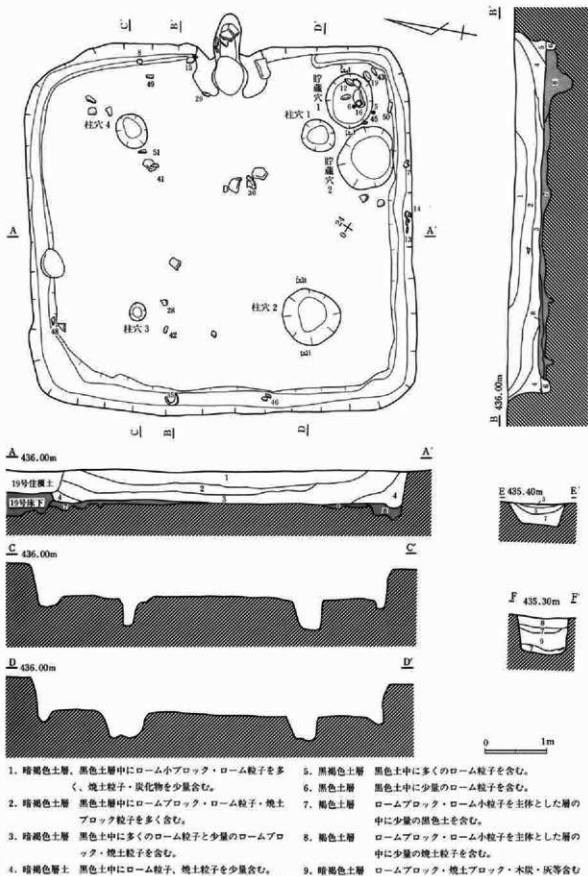


第106図 19号住居跡出土遺物実測図

19号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第106図 写真図版73)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④粘土⑤備考
19住-1	浅須恵器	4.0 11.9 6.5 厨溝上	器高の低い浅く、全体がゆがんでいる。体部はほぼ直縁であり、口縁部は弱く外反している。底部は左回転糸切跡残る。糸切後無整形。	①灰白色②還元③成形④1mm以下の白色粒子を多量に、3mm前後の石英粒子少し含む
19住-2	浅須恵器	3.5 12.3 6.5 床面、床下フタ土	体部はやや内灣しつつ外上方へ開き、口縁部は外反。底部右回転糸切痕、一部に前段階の糸切痕残る。	①表面黒色・断面灰白色②還元焼成③④1mm以下の白色粒子多く含む
19住-3	甕 土師器	— (18.4) — カマド内、フタ土 床下フタ土	コの字状口縁の甕であり、器肉が薄い。口縁部に指痕状の凹部が数箇所、体部は左方向へ削り、口縁部外側に一糸の凹部が一箇している。	①黒褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を多く、赤色粒子を少量含む
19住-4	甕 土師器	— (20.2) — 床面、床下フタ土	コの字状口縁の甕であり、器肉が薄い。口縁部に明確な段を持つ、体部上半に左横方向へ削り。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子と砂粒を多く、赤色粒子少量含む
19住-5	甕 土師器	— (20.5) — 床下フタ土	コの字状口縁の甕であるが、器肉がやや厚い。口縁部外側に凹状の痕跡あり、体部上半左横方向削り。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子と砂粒を多く含む
19住-6	浅須恵器	— (20.4) — カマド内	コの字状口縁部の口縁部と思われる。器肉が少し厚い。口縁部内外面横ナダ。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子と砂粒を多く含む
19住-7	台付甕 土師器	— — — フタ土	台付甕の底部と思われる。台部はそっくりはずれている。体部下半は底部に向かう削り。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子と砂粒を多く含む
19住-8	浅須恵器	— — — 床面	大栗の体部破片であり、内面に同心円状の叩き目を持ち外面は格子状に叩きである。摺入再利用品。	①灰色②還元焼成③一部のみ④1mm以下の白色粒子を少量含む
19住-9	羽口 土製	— — — フタ土	羽口先端部の破片であり、先端部は熱を受けて黒色となりガラス状を呈している。先端部の内側は灰褐色。外側は灰色を呈している。	①灰褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を多く、赤色粒子を少量含む

第5章 検出された遺構と遺物



第107図 20号住居跡実測図



## 20号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版34・35 遺物写真図版73・74・75

位置 19号住居跡南側に位置し、19号住居跡に北壁の上部を削り取られている。M-23、V-22・23・24、O-23・24グリッドに属する。

概要 住居跡の北壁の一部を19号住居跡に切り取られているが、20号住居跡が深く掘り込んでいたため、平面形での検出は容易に可能であった。この住居跡の床面時での柱穴確認は4個であったが、床下調査時においては、先に検出された柱穴のいずれも西側に1個づつ柱穴が検出された。おそらく4個ともある時期に柱を差し換えて家を使用していたものと思われ、住居規模の大きいことや出土遺物中に鋤の先のはほぼ完形品を出土していること等考え合わせると、特別な住居の可能性はある。

構造 床面は地山のロームを基本としており、黒色土を多く混入していない。柱穴は前述のごとく4本であり、一度4本とも掘り直している。周溝は竈付近を除きほぼ一周している。貯蔵穴が竈右側手前に2基検出されている。壁は残りが良く、いずれも垂直に近い角度で立ち上がっている。

規模 東西方向で5.9m、南北方向で6.15mで、南北方向に長い形を呈している。壁高は50~60cmで残りが良い。周溝幅は30~40cmで非常に幅が広がっている。周溝の深さは床面より15~20cmで深い。柱穴1は径50cm、深さ35cm、柱穴2は径90cm、深さ41cm、柱穴3は径25cm、深さ36cm、柱穴4は径50cm、深さ50cm、貯蔵穴1は径80cm、深さ64cm、貯蔵穴2は径1m、深さ37cmであった。

遺物 床面や覆土中より、土師器杯・甕・須恵器杯・甕・鉄器鋤の先、1号貯蔵穴より須恵器杯蓋等出土。

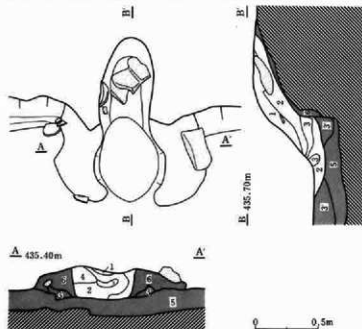
## 20号住居跡竈

位置 住居東壁ほぼ中央部に地山ロームを多く掘り込んで竈が構築されていた。

構造 竈の焚口部、燃焼部の大部分が住居内に位置し、煙道部のみ住居外に作られている。煙道部付近に石が4個体、燃焼部石袖外側に焚口天井石と思われる石が一個検出されている。他には覆土中を含めて石の出土は少ないため、ロームを主体とした竈と思われる。

規模 煙道方向で1.3m、両袖方向で1.2m、燃焼部幅0.5m、高さ約0.5mと思われる。

遺物 竈内より土師器の甕の破片が出土している。



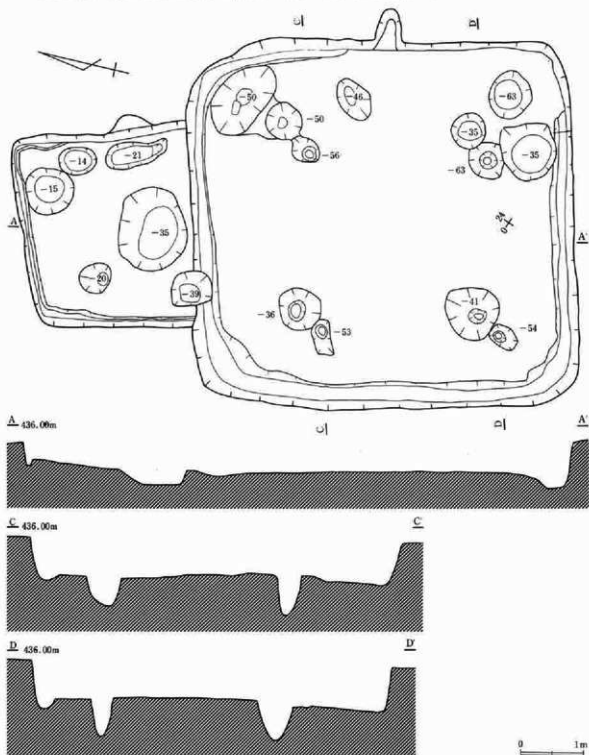
1. 黒色土層 ロームを主体とした層。少量の黒色土と焼土粒子を含む。
2. 焼土層 焼土・ローム粒子・ロームブロック、黒色土の混入土層。多量の焼土を含む。
3. 黒色土層 黒色土を主とし、ごく少量のローム粒子を含む。
3. 黒色土層 3層中により多くのロームブロックを含む。
4. 黒褐色土層 ロームブロック・ローム粒子・黒色土の混入土層。焼土粒子を含まず。
5. ローム層 (地山層)
6. 暗褐色土層 ロームを主体とし、少量の黒色土を含む層。

第108図 20号住居跡竈実測図

第5章 検出された遺構と遺物

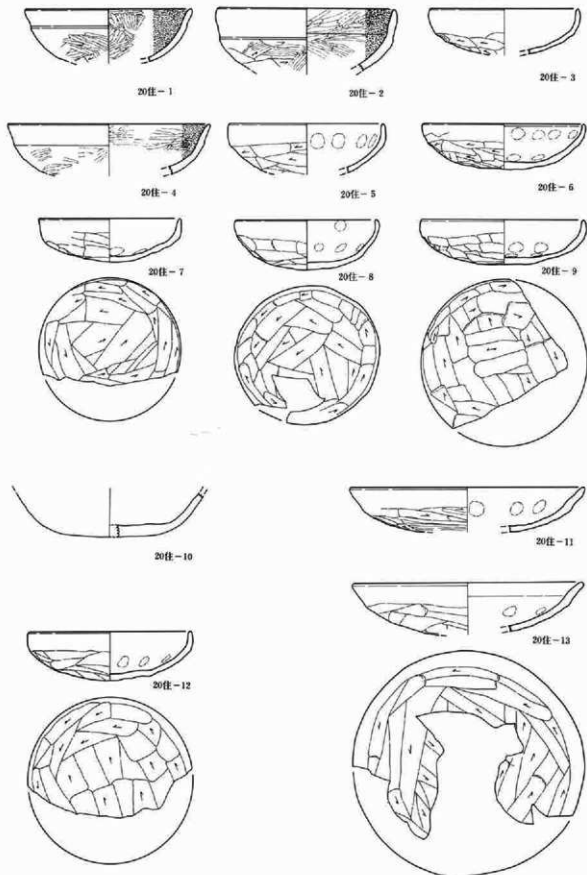
19・20号住居跡床下

19・20号住居跡の床下調査により、19号住居跡からは図示したような多くの土坑が検出された。20号住居跡からは、前述のごとく、床面調査時には検出できなかった旧柱穴4本が新柱穴のいずれも西南側にはは接して検出され、柱の建て替えを示した。また床面北東端部および竈左側手前より土坑が一基検出された。旧柱穴や土坑等の床面よりの深さは数字で図中に示した。



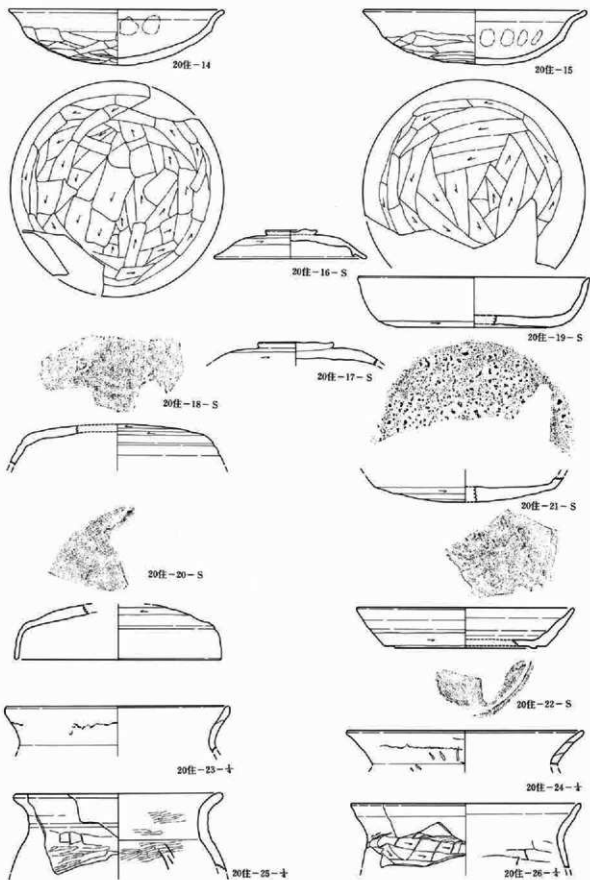
第109図 20号住居跡床下実測図

第2節 住居跡



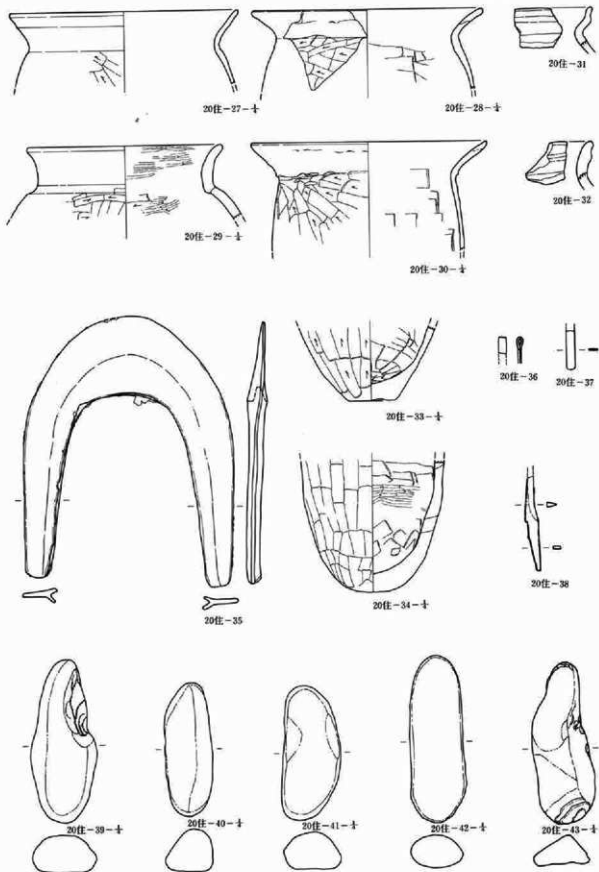
第110図 20号住居跡出土遺物実測図(1)

第5章 検出された遺構と遺物



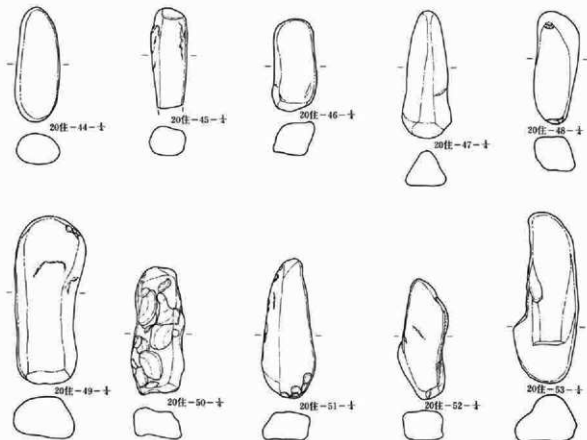
第111図 20号住居跡出土遺物実測図(2)

第2節 住居跡



第112図 20号住居跡出土遺物実測図(3)

第5章 検出された遺構と遺物



第113図 20号住居跡出土遺物実測図(4)

20号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第110図 写真図版73)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼色③残存④胎土⑤備考
20住-1	環 土師器	— (13.0) — フク土	丸底を呈する深い環と思われ、腰部~口縁部は内彎しつつ外上方に開く、口縁外面は強い横ナデを持ち腰部との境に弱い段を持つ。内面へう磨き内黒処理。	①内面黒色・断面灰褐色・外面褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を多く石英粒子と黒色粒子を少し含む
20住-2	環 土師器	— (14.0) — フク土	腰部は内彎しつつ外上方に開き、口縁部はきらかに内彎し、腰部との境に内外面とも強い段を持つ。内面全面へう磨き後吸炭による黒色処理。	①内面黒色・断面と外面灰褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を多く、2mm内外の石英粒子を少量含む
20住-3	環 土師器	— (11.8) — フク土	丸底の環であり、口縁部はほぼ直立する。口縁部上半横ナデ、下半指整形、腰部~底部手持へう削り。	①褐色②酸化③1mm前後の白色粒子を少量含む
20住-4	環 土師器	— (16.0) — フク土	やや浅い丸底の環と思われる。腰部~底部の高さに比較して口縁部が高い。口縁部内面は横方向へう磨き、内側底部は不定方向へう磨き後吸炭黒色処理。	①内面黒色・断面灰褐色・外面灰褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を多く含む
20住-5	環 土師器	— (12.2) — フク土	口縁部はやや内彎しつつ立ち上がる。口縁部横ナデ、腰部は手持へう削り。	①褐色②酸化③④白色粒子ほとんど含まず、黒色粒子少量含む
20住-6	環 土師器	3.6 (12.8) — 貯蔵穴内石の上	浅い丸底の環である。口縁部の高さも低くやや異質の環である。口縁部横ナデ、腰部~底部手持へう削り。	①褐色②酸化③④白色粒子ほとんど含まず、1mm以下の黒色粒子と石英粒子をごく少量含む

## 第2節 住 居 跡

20号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号110・111図 写真図版73・74)

遺物名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①褐色②酸化③残存④胎土⑤備考
20住-7	坏土師器	3.4 11.1 — 床面+25	丸底の坏であり、口縁部は直立している。口縁部横ナデ、体部～底部手持へう割り。内面全面横ナデ整形。	①褐色②酸化③④④1mm以下の白色粒子と2mm前後の赤色粒子をごく少量含む
20住-8	坏土師器	4.0 11.1 — 床面+5、フク土	全体が丸く、平円状を呈する。口縁部は狭く内側に揃っており、横ナデ整形、体部～底部は手持へう整形、内面全面ナデ整形、内面に指頭圧痕状の凹状部を少し残す。	①褐色②酸化③④④1mm以下の白色粒子・石英粒子・黒色粒子を多く含む
20住-9	坏土師器	3.5 (13.0) — カマド石袖中	やや浅く、底部が平に近い丸底の坏である。口縁部上平横ナデ、下平指整形、体部～底部手持へう整形、内面全面横ナデ整形。	①褐色②酸化③④④白色粒子ほとんど含まず、3mm内外の赤色粒子を少量含む⑤底部外側吸込により黒色を呈す
20住-10	坏土師器	— — — フク土	平底に近い丸底の坏であり、他の出土例は少ない。底部全体は表面割離して凸凹しており、内面はていねいな横ナデ整形。	①褐色②酸化③④④1mm以下の白色粒子を少量、1mm前後の赤色粒子を少量含む
20住-11	甎形坏土師器	— (18.4) — フク土、N-24	口径の大きな坏であり、底部が丸く、体部は内彎しつつ大きく外側へ開き、口縁部も大きく外反する。口縁部横ナデ、体部～底部手持へう割り。	①褐色②酸化③④④白色粒子含まず、1mm以下の白色粒子と黒色粒子をごく少量含む
20住-12	坏土師器	3.9 12.7 — 野藏穴内石の上	底部中央がほぼ平底を呈し、体部は内彎しつつ外方へ開き、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。口縁部横ナデ、体部～底部手持へう割り。	①褐色②酸化③④④白色粒子ほとんど含まず、1mm以下の石英粒子を少量含む
20住-13	甎形坏土師器	4.0 17.9 — 床面+34、O-24	口径の大きな坏であり、底部が丸く、体部は内彎しつつ大きく外側へ開き、口縁部も大きく外反する。口縁部横ナデ、体部～底部手持へう割り。	①褐色②酸化③④④白色粒子ほとんど含まず、1mm以下の石英粒子、黒色粒子を少量含む
20住-14	甎形坏土師器	4.5 17.0 — 床面+34	口径の大きな坏であり、底部が丸く、体部は内彎しつつ大きく外側へ開き、口縁部は外側に開き大きく丸味を持つ。口縁部内側に指頭圧痕状の痕跡あり、体部～底部手持へう割り。	①褐色②酸化③④④1mm以下の白色粒子を少量、1mm以下の石英粒子を多く含む
20住-15	甎形坏土師器	4.2 17.4 — 床面+5	口径の大きな坏であり、底部が丸く、体部は内彎しつつ大きく外側へ開き、口縁部はさらに外側へ外反する。体部～底部のへう割りが荒い。	①褐色②酸化③④④1mm以下の白色粒子と黒色粒子を少量含む
20住-16	甎須恵器	2.2 13.0 — 野藏穴内石の上	円盤状のつまみを持ち、カエリを持つ不蓋である。口径が小さく、円盤状のつまみを持つ事等は他の住居では認められない。カエリは短くつまみ出している。内外面すべて回転ナデ整形、へう割りなし。	①灰色②還元焼成③完形④1mm以下の白色粒子を多量に含む
20住-17	甎須恵器	— — — フク土	円盤状のつまみをもつ不蓋であり、おそらくカエリを持つと思われる。つまみ端部がやや盛り上がるが中央部は平である。	①灰色②還元焼成③④④白色粒子ほとんど含まず
20住-18	不蓋須恵器	— — 13.8 フク土	口径の大きな、箱形を呈する不蓋と思われる。天井端部に弱い沈線を持つ。右回転整形跡が残る。	①褐色②酸化③④④1mm以下の白色粒子を多量に含む
20住-19	坏須恵器	— (18.3) 12.0 床面	口径の大きな坏である。口縁部は内側に削られている。底面は障灰による自然動と砂粒が付着。	①灰色②還元焼成③④④1mm以下の白色粒子を多く含む
20住-20	不蓋須恵器	— (16.0) — フク土	口径の大きな箱形を呈する不蓋と思われる。天井部は丸味を持ち、端部に弱い沈線を持つ。天井部へう割り。	①灰色②還元焼成③④④白色粒子ほとんど含まず、気化した黒色粒子を多く含む

第5章 検出された遺構と遺物

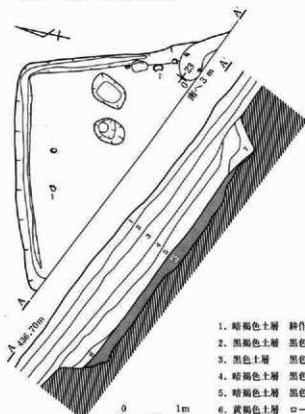
20号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第111・112 写真図版74・75)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤調考
20住-21	環須恵器	— — (14.1)	口径の大きいやや丸底の環と思われる。底部の器内が特に厚い。底部外面左回転ヘラ削り、荒いヘラ削りである。	①灰色②還元焼成③④1mm以下の白色粒子を多く、3mm内外の石英粒子を少量含む
20住-22	環須恵器	3.3 (17.2) (11.2) フタ土	低い付高台を持つ環であり、高台は底部端に付かず、やや内側に付き、幅狭く低い。高台の外側はややせり出ている。体部下半ヘラ削り。	①灰色②還元焼成③④1mm以下の白色粒子を少量含む
20住-23	甕土師器	— (23.6) — フタ土	口径の大きい甕であり、口縁部の器内はやや厚く、口縁部は外反せずに直立気味に立ち上がる。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を多く含む
20住-24	甕土師器	— (25.0) — カマド袖	口径の大きい甕であり、口縁部の器内はやや厚い。口縁外面に粘土接合痕あり。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を多く含む
20住-25	甕土師器	— (21.8) — フタ土、N-22	体部が丸い器内の厚い甕である。口縁部は直に立ち上がり、やがて大きく外反する。器表内外面ともヘラ削りが行われている。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を多量に含む
20住-26	甕土師器	— (24.3) — フタ土、N-22	長胴で器内の薄い甕である。口縁部は内彎しつつ外上方へ開き、上半で一度内側に方向を変える。体部外面横方向ヘラ削り。口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子と石英粒子を少量含む
20住-27	甕土師器	— (24.0) — フタ土	長胴で器内の薄い甕である。体部外面横方向ヘラ削り。口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子と石英粒子を少量含む
20住-28	甕土師器	— (24.6) — 床面+1	長胴の甕と思われるが、やや器内が厚い。口縁部はややくの字状に外反する。体部外面横方向ヘラ削り。口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を多く、2mm前後の赤色粒子を少量含む
20住-29	甕土師器	— (20.0) — 床面、フタ土	体部が丸く器内の厚い甕である。口縁部は直立気味に立ち上がり、上半でやや外反する。器表内面ヘラ磨き。口縁部外面横ナデ、体部ヘラ削り。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を多量に、2mm前後の石英粒子を多く含む
20住-30	甕土師器	— 24.6 — 床面、フタ土	長胴で器内の薄い甕である。やや丸味を持つが直立気味の体部より口縁部はくの字状に外反する。口縁部はやや上方に立ち上がる。	①黒褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子と石英粒子を少量含む
20住-31	甕土師器	— — — フタ土	口縁部が短く、S字状をやや呈する。内外面横ナデ。	①内面黒色・断面と外面灰褐色②酸化③口縁部小破片④1mm前後の石英含む
20住-32	甕土師器	— — — フタ土	口縁部の器内が厚く、口縁部外面はば中央に凸部を持つ。内外面横ナデ。	①内面灰褐色・外面灰黒色②酸化③口縁部小破片④1mm前後の石英粒子含む
20住-33	甕土師器	— — 4.7 フタ土、床下フタ土	器内の厚い甕の体部下半～底部である。特に底部は厚くなっている。外面は底部より口縁部に向かうヘラ削り、内面はナデ整形。	①黒褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を多く、2mm前後の石英粒子を多く含む
20住-34	甕土師器	— (15.2) — フタ土	器内の特に厚い甕の体部下半～底部である。底部は丸底を呈している。器表内外面にわたり、ていどいなかへラ磨きが行なわれ、吸塵による黒色処理あり。	①表面黒褐色で一部黒色・断面灰黒色内面黒色②酸化③④1mm以下の白色粒子を多く含む
20住-35	磁鉄器	— — — 重量-320g 周溝内	大身の罐で袋は矢筈状に造り出される。先端は隅丸状に尖る。内蓋は錆化のかぎりにおいて裏面はやや平気味であるが、それでも輪状の内蓋があり、表面は顕著である。錆は錆化状態から小生目と考えられ、部分的な錆みつたところから精製と推測される。袋の作り出しは2枚の地板金による懸持前と考えられる。刃作りおよび田跡の錆出しは極めて少なく、錆化のかぎりにおいては甘い。	



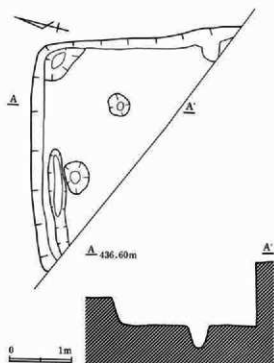
20号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第112・113図 写真図版75)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部形状等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
20E-36	吊? 鉄製品	幅-0.7 吊し覆長-0.7 フク土	鋼製板金を折り曲げて吊か紐通の金具である。平ごしらえは平滑で側面は角ばらず平い。面擦入なされる。環は折り曲げで扁平となる。端部は調査時の欠損である。	
20E-37	吊? 鉄製品	幅-0.7 外形厚-0.5 フク土	36と接合はしないが、ほぼ同様であるため、同一のものと考えられる。	
20E-38	刀子 鉄製品	全長-7.1 淵元重む-0.3 葉長3.9 淵溝内	小形刀子である。切先は調査時の欠損であるが、鍔元から物打にかけ、また棟の走行から考え刃長は5cm未満と考えられる。平造りであるが棟は錆化のため明瞭でないが、平棟か、肉置の少ない丸棟と考えられる。棟は大きくうつ向いている。棟区の作り出した明瞭、刃部は研減り顯著と考えられ、刃区位置以上に刃部位置が上る。錆化は極立っていないため赤目か細かな板目である。	
20E-39	石	縦-17.0 横-7.0 重量-670g	全面が磨耗している。片面半分が欠けているが、その面も磨耗している。	①緑色③完形④石英閃緑岩
20E-40	石	縦-14.1 横-5.1 重量-420g	全面が磨耗している。片面が欠けているが、その面も磨耗している。	①緑色③完形④ひん岩⑤床面+7cm
20E-41	石	縦-14.0 横-6.4 重量-510g	全面が磨耗している。中央部がやや幅広い。	①薄緑色③完形④石英閃緑岩⑤床面+5cm
20E-42	石	縦-17.4 横-6.0 重量-530g	全面が磨耗している。細長く均整のとれた石である。片面に白色粒子が大きくせり出している。	①薄緑色③完形④アイサイト質凝灰岩⑤床面
20E-43	石	縦-16.9 横-6.7 重量-400g	全面が磨耗しており、形は不定形で片側が細く尖っている。	①茶色③完形④地質頁岩⑤フク土
20E-44	石	縦-11.9 横-4.7 重量-270g	全面が磨耗しており、小さな石である。全体に均整がとれている。	①白色③完形④地質頁岩⑤床面+52⑤床面+52cm
20E-45	石	縦-(10.5) 横-3.8 重量-210g	全面が磨耗しており、小さな石である。全体に均整がとれている。	①灰白色③一部欠損④地質頁岩⑤フク土
20E-46	石	縦-9.6 横-4.7 重量-250g	全面が磨耗しており、長さの短い小さな石である。	①灰白色③完形④アイサイト質凝灰岩⑤淵溝内
20E-47	石	縦-13.4 横-5.2 重量-340g	全面が磨耗しており、断面三角形を呈する。	①灰白色③完形④ひん岩⑤淵溝内
20E-48	石	縦-11.9 横-4.8 重量-310g	全面が磨耗しており、断面が菱形を呈している。	①灰色③完形④凝灰岩質砂岩⑤床面+35cm
20E-49	石	縦-17.6 横-7.4 重量-960g	大きな石であり、全面が磨耗している。中央部がやや狭くなっている。	①薄緑色③完形④ひん岩⑤床面
20E-50	石	縦-13.5 横-5.6 重量-360g	全面が磨耗している。表面に凸凹が多く、不定形な石である。	①灰色③完形④黒色頁岩⑤床面+18cm
20E-51	石	縦-14.6 横-5.7 重量-350g	全面が磨耗している。先端部が打ち欠けたように欠損している。	①黒色③完形④黒色頁岩⑤フク土
20E-52	石	縦-12.6 横-5.4 重量-330g	全面が磨耗している。先端部が打ち欠けたように欠損している。	①灰黒色③完形④黒色頁岩⑤フク土
20E-53	石	縦-18.0 横-6.9 重量-690g	全面が磨耗している。側面が欠けており不定形な石である。	①緑色③完形④ひん岩⑤フク土



第114図 21号住居跡実測図

1. 暗褐色土層 耕作土、黒色土中に白色軽石粒子を多く含む軟質土層。
2. 黒褐色土層 黒色土を主とし、粘性を少し持ち、白色軽石粒子を少量含む。
3. 黒色土層 黒色の最も強い土層、粘性を持ちやや硬質である。
4. 暗褐色土層 黒色土中に多くのローム粒子を含む。
5. 暗褐色土層 黒色土中に多くのローム粒子・ロームブロックを含む。
6. 黄褐色土層 ロームブロック・ローム粒子を中心とした層中に少量の黒色粒子含む。
7. 赤褐色土層 焼土ブロック・焼土粒子・黒色土・ローム粒子の混入土層。
8. 黒色土層 ロームブロックを主体とし、黒色土を混入する床面下の土層である。



第115図 21号住居跡床下実測図

### 21号住居跡（平安時代） 遺構写真図版35

遺物写真図版75・76

**位置** 20号住居跡の西約2.5mに位置し、O-22・23グリッドに属する。

**概要** 住居跡南側斜め半分以上が、調査区域外であるため、調査できたのは、北側斜め半分以下であった。竈も左袖と燃焼部のごく一部の調査しかできなかった。

**構造** 床面は地山のロームの上に、黒色土と多くのロームブロックを含む層よりできていた。柱穴は明らかでないが、おそらく柱穴と思われる小穴が1個検出されている。周溝は竈付近以外はほぼ検出できた。

貯蔵穴は、他の住居跡では竈右側手前に検出される例が多いが、当住居跡では、その部分を発掘してないため不明である。

**規模** 西壁と南壁の検出ができなかったため、住居規模については不明である。しかし北壁はほぼ検出ができたものと思われる、その長さは3.4mの可能性がある。柱穴と思われる小穴は、直径35cmで深さ45cmであった。壁高は30cm、周溝幅は15～20cmで深さは床面より3～4cmと浅い。

**遺物** 床面や覆土中より土師質土器環・皿・灰釉陶器の皿・壺等を多く出土している。

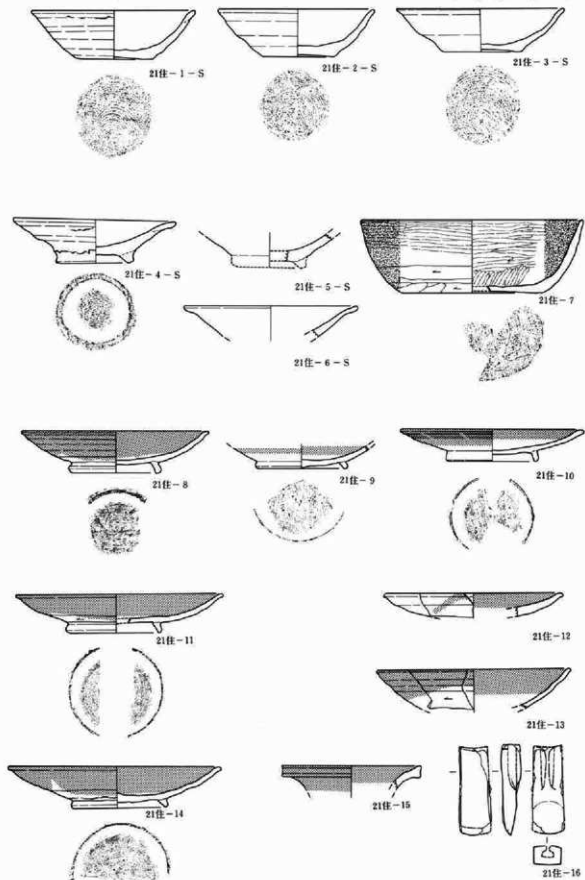
**床下** 床下調査により、新たに北壁西寄りに直径約40cm深さ20cmの土坑が検出された。

### 21号住居跡竈

**位置** 住居の東壁に地山ロームを一部掘り込んで竈が構築されていた。

**概要** 竈の左袖部と燃焼部の一部のみの調査である。燃焼部より多くの焼土が検出された。規模は実測できず、遺物も出土していない。

第2節 住居跡



第116図 21号住居跡出土遺物実測図

## 第5章 検出された遺構と遺物

21号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第116図 写真図版75・76)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色②酸化③残存④胎土⑤備考
21住-1	環須恵器	3.8 12.8 6.2 床面+27	底径が口径の $\frac{1}{2}$ 以下の環であり、全体的に器肉が厚い。底部端と体部下端との境に弱い段を持つ。全体的に丸い。底部に右回転糸切痕が残る。	①褐色②酸化③④2mm前後の石英粒子と1mm以下の白色粒子を多く含む胎土粒子が濃い
21住-2	環須恵器	3.75 12.1 5.6 フク土	底径が口径の $\frac{1}{2}$ 以下の環であり、全体的に器肉が厚く、特に底部が厚い。口縁部がやや弱く外反する。底部に右回転糸切痕が残る。	①灰白色②還元③④1mm以下の白色粒子と2mm前後の石英粒子を多く含む胎土粒子が濃い
21住-3	環須恵器	3.4 13.2 5.2 フク土	底径が口径の $\frac{1}{2}$ 以下の環であり、体部下半～底部周辺が特に厚く、境に段を持つ。口縁部が弱く外反する。底部に右回転糸切痕が残る。	①灰褐色②酸化③④ほぼ成形⑤1mm以下の白色粒子と2～3mmの石英粒子を多く含む。濃い胎土
21住-4	皿須恵器	3.6 12.8 6.2 フク土	器高が低い皿である。器肉が厚く、断面台形の高台を持つ。口縁部は大きく外反する。高台部内側に右回転と思われる糸切痕を残す。	①高台部と高台内側黒色、他は全面褐色②酸化③④ほぼ成形⑤1mm以下の白色粒子と2～3mmの石英粒子を多く含む
21住-5	埴須恵器	— — — フク土	高台の付く埴と思われる。高台ははずれている。器内外面横ナデ整形。	①灰白色②還元③④1mm以下の白色粒子と2～3mmの石英粒子を多く含む
21住-6	皿?須恵器	— (13.5) — フク土	皿の口縁一体部の破片と思われる。下部部が高台の粘土片あり。口縁部が大きく外反する。	①灰褐色②還元③④1mm以下の白色粒子と2～3mmの石英粒子を多く含む
21住-7	埴	5.8 (17.4) (11.1) 床面+1	底径・口径・器高ともに大きい。右回転と思われる糸切痕を持つ底面以外の全器面をていねいに磨き、吸炭により黒色を呈している。非常にろくろ、接合してもすく割れてしまう。	①黒褐色②酸化③④1mm以下の粒子の非常に密な胎土であり白色・赤色粒子を少量含む
21住-8	皿灰輪	3.3 14.5 7.0 フク土	底部～口縁部まで丸味を持ち、口縁端部が外反する。高台は細長い長方形を呈し、端部がやや内側に彎曲する。高台部内側回転ナデ整形。光ヶ丘1号窯式。	①灰白色、輪は薄緑色～透明②還元③④⑤密
21住-9	皿灰輪	— — 7.0 フク土	皿の底部と思われる。高台は断面方形に近いが端部は丸い。高台部内側回転ナデ整形、中央に凸部あり。	①灰色、輪は白色～透明②還元③④⑤密⑥内外面に少し段が付着
21住-10	皿灰輪	2.5 (14.5) 7.5 フク土	浅い皿であり、細長い高台を持つ。口縁部の器肉が厚くなり口唇部は丸い。高台部内側回転ナデ整形。	①灰色、輪は白色～透明②還元③④⑤密⑥内面に重焼痕あり、輪は刷毛塗り
21住-11	皿灰輪	3.15 16.2 7.1 フク土	浅い皿であり、高台部は細長く、端部は削られ、やや三ヶ月状を呈する。輪は刷毛塗り、光ヶ丘1号。	①灰色、輪は薄い部分で透明、やや厚い部分で白色、厚い部分で緑色③④⑤密⑥輪は刷毛塗り
21住-12	皿灰輪	— (13.9) — フク土	皿の小さな口縁部破片と思われる。口縁端部が少し外反する。	①灰色、輪は薄緑色②還元③④⑤密
21住-13	埴灰輪	— (15.2) — フク土	埴の小さな口縁部破片と思われる。外面体部下半にへう割りが認められる。	①灰色、輪は白色～透明②還元③④⑤密⑥輪は刷毛塗りの可能性大
21住-14	皿灰輪	— 16.5 7.5 フク土	浅い皿であり、底部～口縁部まで丸味を持つ。口縁部がやや外反する。高台は断面やや三角形を呈し高台内側は回転ナデ。光ヶ丘1号窯式。	①灰色、輪は薄い部分で透明、やや厚い部分で、白色、厚い部分で薄緑色②還元③④⑤密⑥輪は刷毛塗り
21住-15	皿灰輪	— 11.0 — フク土	皿の頸部～口縁部の破片と思われる。口縁部は厚い。	①灰色、輪は透明～緑色②還元③口縁部のごく小さな破片④密
21住-16	手斧鉄器	全長・6.9 箇中央における重ね-1.2 切先幅-2.4	手斧・斧である。箇を折り曲げて作り出し、中に木質の遺存がある。刃端はやや丸い。刃先の表面と裏面では表側に胎状の肉置があり、裏面はやや平に近い。側面は錆化が顕著であるため明確ではないが平ではなく肉置のある丸い面取りであろう。	

## 22号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版36 遺物写真図版76

位置 21号住居跡の西に近接し、14号住居跡と重複し、O-20・21グリットに属する。

概要 住居跡の南側斜め約半分が調査区域外であるため、調査できたのは、北側の斜め約半分のみであった。

また竈が築かれていたと思われる部分には、13号土坑により竈の大部分が掘り取られていた。また住居西側は14号住と重複しており、覆土上面を掘り込まれていた。

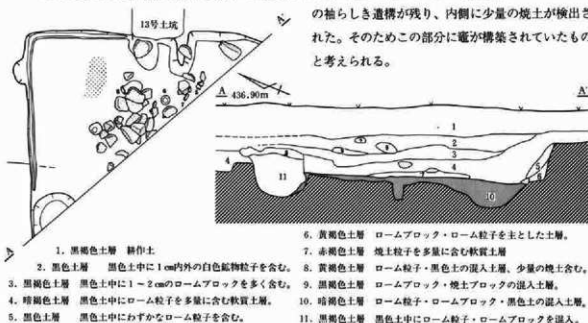
構造 床面はロームを主体とし、黒色土・ロームブロック・ローム小粒子等を多く混入していた。床面に小穴は確認されたが、柱穴らしきものは検出されなかった。周溝は竈周辺以外で検出できた。貯蔵穴は、21号住居跡同様に検出されなかった。

規模 西壁、南壁の検出ができなかったため不明。壁高は50cm前後、周溝幅は約10cm、深さ約2cm。

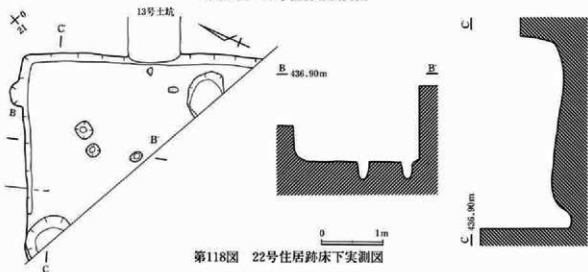
遺物 竈左側袖手前にはほぼ完形の土師器甕、床面や覆土中より、土師器环、須恵器环、斐等出土。

## 22号住居跡竈

13号土坑と22号住居跡と接する部分の土坑内より多くの焼土が検出され、22号住居内においては竈の袖らしき遺構が残り、内側に少量の焼土が検出された。そのためこの部分に竈が構築されていたものと考えられる。

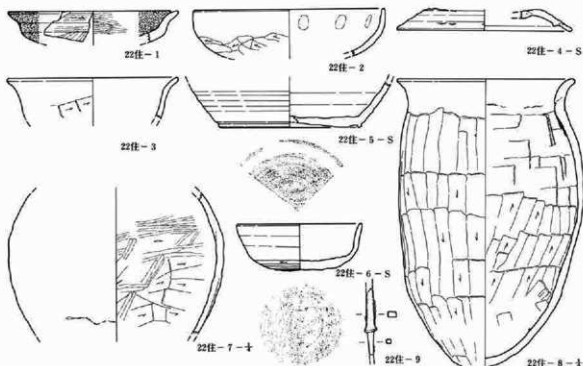


第117図 22号住居跡実測図



第118図 22号住居跡床下実測図

第5章 検出された遺構と遺物



第119図 22号住居跡出土遺物実測図

22号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号119図 写真図版76)

遺構名及び 番号	器形及 び器種	器高・口径・底径 (cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
22住-1	環 土師器	— (13.5) — 床下フタ土	口縁部が大きく外反し、口縁部と体部の間に接を持つ。内外面へラ磨き後吸炭による黒色処理。	①内外面及び断面黒色②還元③口縁部～体部の小破片④白色粒子を多く含む
22住-2	環 土師器	— (15.1) — 床下フタ土	口縁部の長い環であり、口縁部内側に指窪圧痕状の痕跡を持つ。体部外面子持へラ削り。	①褐色②酸化③④⑤白色粒子ほとんど含まず、1mm以下の石英粒子少量含む
22住-3	環 土師器	— (13.5) — フタ土	環の口縁部破片と思われるが明確ではない。器内が薄く、口縁部が大きく外反している。	①褐色②酸化③④⑤1mm以下の白色粒子を多く含む。⑥混入品と思われる
22住-4	蓋 須恵器	— (13.8) — フタ土	カエリを持つ環蓋であり、天井部は平となっている。内外面すべてにわたりていねいな作りである。	①外面黒色・断面褐色②酸化③④⑤密、粒子はほとんど観察できず
22住-5	埴 須恵器	— — (11.4) 床面+46	底部に削り出し高台を持つ環であり、高台と底部との高さはほぼ同じ。高台内側右回転へラ削り。	①灰色②還元③④⑤1mm以下の白色粒子を多く含む。
22住-6	環 須恵器	3.6 9.9 — 床面	底径及び口径の小さな環であり、器高がやや高い。口縁部内外面横ナデ。底部右回転へラ削り。	①灰色②還元③横ナデ④⑤1mm以下の白色粒子を多く含む
22住-7	甕 土師器	— — — 床面	丸い胴部を持つ甕の破片と思われる。外面ナデ整形内面はナデ整形の後でへらによる整形。	①外面と断面褐色・内面褐色②酸化③④⑤1mm以下の白色粒子を多く含む
22住-8	甕 土師器	30.6 18.6 — 床面	器内の厚い長胴の甕である。丸味をもつ体部より口縁部は直立気味に立ち上がり、端部で外反する。体部外面は底部に向かうへラ削り、体部内面は口縁部に向かうナデ、底部は丸く仕上げられている。	①褐色②酸化③④⑤1mm前後の白色粒子、石英粒子を多く含む粒子の多い胎土
22住-9	甕 鉄器	甕被部中程度-0.7 基光幅-0.4	甕の甕被部・薬部片である。甕被以上・薬片は調査時の欠損である。甕被部に黒区が見られる。甕被断面形、薬断面形は方形である。錆化は軽がやや眼目ところに流れる。	

第2節 住 居 跡

23号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版36  
遺物写真図版76

位置 16号住居跡の東約13mに位置し、H-23・24、I-23・24グリットに属する。

概要 住居跡の北側部分が調査区域外であったため、調査できたのは南側の約きであった。竈部分も調査範囲にはいっていたが、残りは良くなかった。

構造 床面はロームを主とし、少量の黒色土を含む。柱穴・周溝・貯蔵穴はいずれも検出されず、土坑が1基のみ検出された。

規模 東西方向3.15m、南北方向は北壁まで未発掘で不明、壁高は断面で25cm。

遺物 床面や覆土中より土師質土器杯・壺、須恵器羽釜、灰釉陶器皿・杯等出土。

床下 床下調査により床下面より多くの土坑が検出された。その他の部分全面が凸凹状を呈していた。

23号住居跡竈

位置 住居東壁に竈が構築されたと思われる痕跡を多く残すが、明確ではない。

概要 焼土、袖部の一部と思われるローム等が検出されているが、明確ではない。

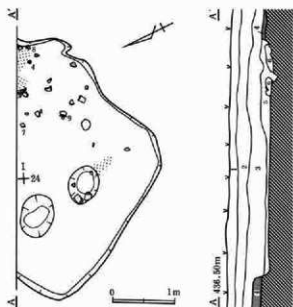
規模 不明。

遺物 出土せず。

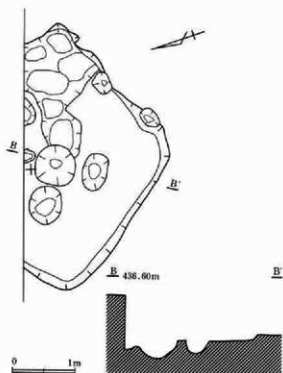
23号住居跡炉

概要 竈の他に床面南側中央部に炉が検出された。炉の西側には2個の石が、東側には2個の羽釜の破片が検出された。

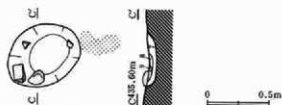
規模 東西方向では60cm、南北方向で60cm。



第120図 23号住居跡実測図



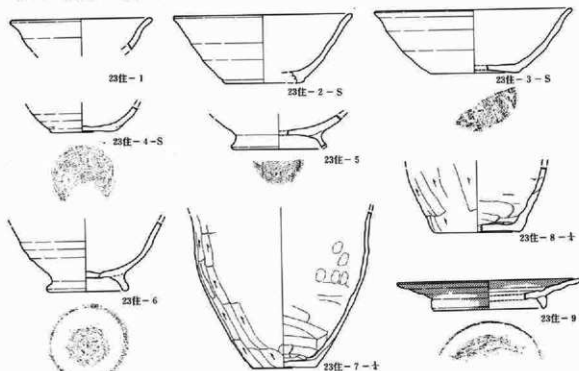
第121図 23号住居跡床下実測図



第122図 23号住居跡炉実測図

1. 暗褐色土層 (制作土) 2mm内外の白色軽石粒子を含む。
2. 黒褐色土層 上層より固く黒色が強い。1mm内外の白色軽石粒子を含む。
3. 黒色土層 黒色土層中にローム粒子を少量含む。
4. 黒褐色土層 黒色土層中にローム粒子を均一に含む。
5. 黒褐色土層 黒色土層中に多くのローム粒子・ローム小ブロックを含む。
6. 赤褐色土層 焼土粒子を多く含む上層。
7. 褐色土層 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭を含む。
8. 焼土層 焼土粒子を多く含む。
9. 黒色土層 少量のローム粒子を含み、焼土粒子を含まず。

第5章 検出された遺構と遺物



第123図 23号住居跡出土遺物実測図

23号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第123図 写真図版76)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、或形、調整、底部整形等の特色	①灰色②還元軟質③④1mm以下の白色粒子と1mm前後の石英粒子を多く含む
23住-1	環 土師貫	— (10.9) — 床下フタ土	口径が小さく、口縁部が大きく外反する環である。内外面横ナデ。	①灰色②還元軟質③④1mm以下の白色粒子と1mm前後の石英粒子を多く含む
23住-2	環 須恵器	5.4 (14.0) (6.0) I-23	底部より体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部はなだらかに外反する。	①灰褐色②還元③④1mm以下の白色粒子を多く含む
23住-3	環 須恵器	5.0 (15.4) (7.0) 床下フタ土	2と同様に体部は底部より直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部はなだらかに外反する。底部に回転糸切痕を獲すが残りは良好でない。	①灰褐色②還元③④1mm以下の白色粒子を多く、石英粒子を少量含む
23住-4	環 土師貫	— — 5.0 フタ土	底径の小さな環であり、体部は内彎しつつ外上方へ開く。体部下端と底部端との境に段を持つ。	①灰白色②還元軟質③④1mm以下の白色粒子と2mm前後の石英粒子を含む
23住-5	塊 土師貫	— — — 床下フタ土	高さ高い台を持つ塊であり、高台はていどいにつくられている。高台部内側回転ナデ整形。	①黒褐色②還元③④1mm以下の白色粒子と2mm前後の石英粒子を多く含む
23住-6	塊 土師貫	— — 6.0 床下フタ土	高い高台の付く塊である。体部は内彎しつつ立ち上がり、口縁部は外反するものと思われる。内側器表面は割離しており、高台内側は回転ナデ整形。	①灰褐色②還元③④1mm以下の白色粒子と2-3mmの石英粒子を多く含む
23住-7	羽釜 床面	— — (6.5)	羽釜の体部中央から底部にかけての破片である。体部外面は筒に向かうへく削り、内面は横ナデ、底部はナデ整形。	①灰褐色②還元③④1mm以下の白色粒子を多く、2-3mmの石英粒子を少量含む
23住-8	羽釜 フタ土	— — (8.4)	羽釜の体部下半から底部にかけての破片である。体部外面は筒に向かうへく削り、底面はナデ整形。	①灰褐色②還元③④1mm以下の白色粒子と2-3mmの石英粒子を多く含む
23住-9	皿 灰胎	— 14.4 (8.8) 床面	段皿の小破片である。高台は大きく、断面は三角形を呈する。口縁部は横方向へ開く。	①灰色、胎はほぼ還元②還元③④⑤断面



## 24号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版37 遺物写真図版77

位置 23号住居跡の南約3mに位置し、I-24・25、J-24・25グリットに属する。

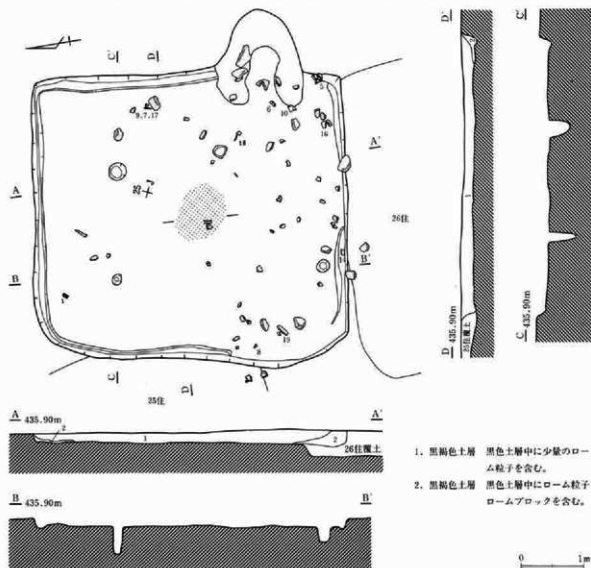
概要 住居の掘り込みが浅く、竈の残りも悪い。25号住居跡の東側と竈部分を掘り込み、26号住居跡の北壁部分を一部掘り込んで作られていた。床面中央に竈と思われる遺構が検出された。

構造 床面はロームを主とし、少量の黒色土を混入している。柱穴と思われる掘り込みは、床面北側に2個検出されたが、南側には床面下の調査時においても柱穴は検出できなかった。周溝は西南コーナー部を除いてほぼ検出されたが、貯蔵穴は検出できなかった。

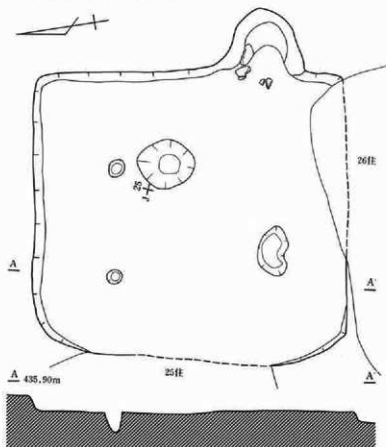
規模 東西方向で4.5m、南北方向で5mを測り、南北方向に長い平面形を呈している。壁高は30~40cmであり、周溝幅は15~20cmで深さ0.4~6cmと浅い、東側の柱穴は直径26cm、深さ35cm、西側の柱穴は直径18cm、深さ40cmである。

遺物 床面や覆土中より土師質土器杯・壺、須恵器の羽釜、灰釉陶器の皿・壺、鉄器の破片等出土。

床下 床面調査後床面の盛土と黒色土の混入土を取り除き、床面下の調査を実施した。その結果東側柱穴の南側に0.9×1m、深さ18cmの土坑と、南西寄りの床面下に80×50cmで深さ10cmの楕円形の土坑が検出



第124図 24号住居跡実測図



第125図 24号住居跡床下平面図

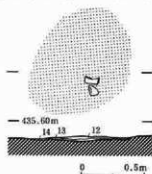
された。

24号住居跡竈

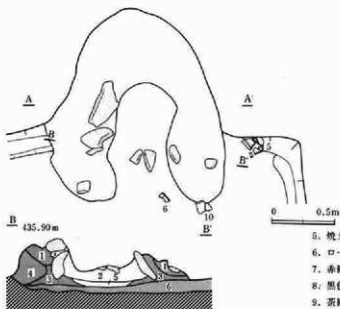
東壁の南寄りに竈が構築されていた。左袖に石が2個検出されたが、右袖部に固定された石はなく、竈内覆土中よりビニールが出土したため上部は攪乱されていた。規模は煙道方向1.5m、両袖方向1.4mである。

24号住居跡炉

竈他に床面中央部に床面が固く赤く焼けた面が検出された炉と思われる。炉上に焼土等の出土はほとんどなし。規模は0.7×0.9mで焼土の厚さは約2cmであった。



第126図 24号住居跡炉実測図



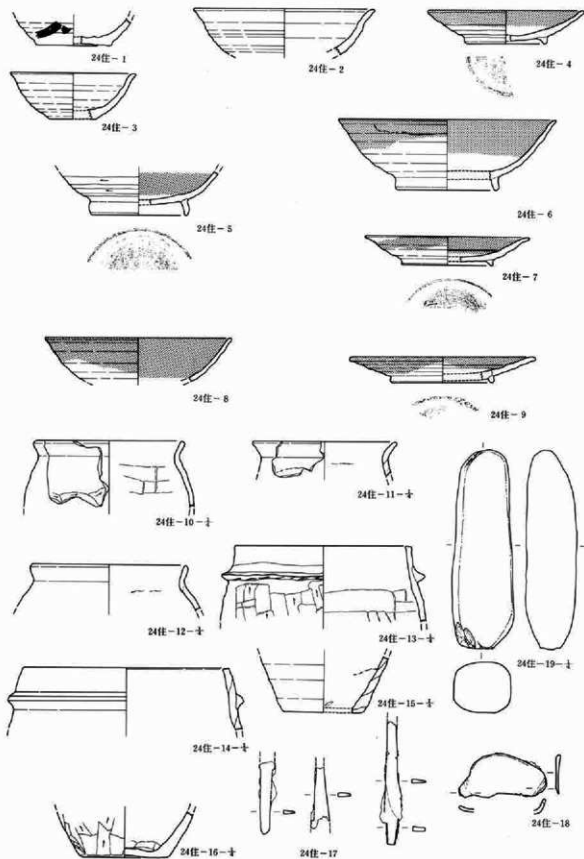
1. 黒色土層 ロームを主体とし、ごく少量の黒色粒子を含む。
2. 黒褐色土層 黒色土を主体とし、焼土粒子を多く含む。
3. 黒褐色土層 黒色土を主体とし、ローム粒子を多く混入する。
4. 黒色土層 黒色土中にローム粒子ほとんど含まない。

第127図 24号住居跡竈実測図



5. 焼土層 固く赤色に焼けた層。
6. ローム層。
7. 赤褐色土層 焼土粒子・ローム粒子・黒色土の混入土層
8. 黒色土層 焼土粒子・ローム粒子含まず、ビニールを混入。
9. 茶褐色土層 黒色土中に焼土粒子を多く含む。
10. 焼土層 焼土を中心とし、黒色土を含む。
11. 黒色土層 ローム粒子・焼土粒子を黒色土中に含む。
12. 焼土層 1-2cmの厚さで固く赤褐色の焼土層。
13. 黒褐色土層 少量の焼土粒子・黒色土の層。
14. 黒色土層 火を受けて固くなっている層。

第2節 住居跡



第128図 24号住居跡出土遺物実測図

第5章 検出された遺構と遺物

24号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第128図 写真図版77)

遺構名及び番 号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部形状等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
24住-1	環土師器	— — (6.1) 床面+6	体外側に皿蓋を持つ。体部下端と底部端との境に段を持つ。底部に右側転車切痕。	①灰褐色②酸化③灰④1mm以下の白色粒子を多く石英粒子を少量含む
24住-2	埴土師器	— (14.5) — フク土	内壁しつち立ち上がる体部より口縁部は外反するため、体部に強い段を持つ。	①灰白色②還元③灰④1mm以下の白色粒子を多く、2~3mmの石英少量含む
24住-3	環土師器	3.6 (9.8) (3.6) 床下フク土	底径が1径の厚以下の環である。外反する口縁部下の体部に襷を持つ。	①灰白色②還元③灰④1mm以下の白色粒子を多く、石英粒子を少量含む
24住-4	皿灰輪	— (12.0) — フク土	底部~口縁部が丸味を持ち、口縁部がやや玉縁状に丸味を持つ。高台内側回転ナデ整形。	①灰白色、輪は薄緑で一部白色②還元③灰④密⑤虎渡山
24住-5	埴灰輪	— — (7.6) 床面+13	細長い高い高台を持つ深い壺である。外側体部下平へ削り、高台部内側回転ナデ整形。	①灰白色、輪は薄緑②還元③灰④密
24住-6	埴灰輪	5.6 (17.2) (7.7) 床面、カマド内	高い高台を持つ壺である。体部は内壁しつち外上方へ開き、口縁部はなだらかに外反する。	①灰白色、輪は白色②還元③灰④密⑤虎渡山
24住-7	段皿灰輪	2.3 (13.1) (7.3) 床面	体外内側に低い段を持つ段皿である。口縁部は大きく横方向へ開く。高台部内側回転ナデ整形。	①灰白色、輪は薄緑で特に薄い部分は白②還元③灰④密
24住-8	埴灰輪	— (14.8) — 床面+8	体部は内壁しつち外上方へ開き、口縁部はほとんど外反していない。	①灰白色、輪は多くが透明で厚い部分で緑色②還元③灰④密
24住-9	段皿灰輪	2.1 (14.3) (7.8) 床面、フク土	体外内側に深い削り込みを持つ段皿であり、口縁部は大きく外へ開く。底部が特に厚くなっている。	①灰白色、輪は透明、点状に黄色い粒子散乱②還元③灰④密
24住-10	壺	— (15.5) — 床面+9	体部は丸く、口縁部はくの字状に外反、口唇部は平で口縁部内外面横ナデ、ロクロ使用の可能性大。	①灰褐色②酸化③灰④1mm以下の白色粒子と2mm前後の石英粒子を多く含む
24住-11	小形壺	— (15.3) — フク土	体部は丸く、口縁部はくの字状に外反、口唇部は丸い。口縁部内外面横ナデ。	①灰褐色②酸化③灰④1mm以下の白色粒子を多く含む
24住-12	小形壺	— (16.4) — カマド内	体部は丸く、口縁部はやや外反するが直立気味に立ち上がる。口唇部やや平、ロクロ使用の可能性大。	①黒褐色②還元③灰④1mm以下の白色粒子を多く2mm前後の石英を少量含む
24住-13	羽釜	— (18.9) — カマド付近	体部は丸味をもち、口縁部は内傾し口唇部は平。体部外側は筒に向かうへ削り、ヘラが筒下部に当たる。	①灰褐色②還元③灰④1mm以下の白色粒子を多く2~3mm石英を少し含む
24住-14	羽釜	— (22.0) — 床面+7	口縁部は内傾し、口唇部は平で中央部がやや凹状になる。筒は断面三角形で短い。	①灰褐色②還元③灰④1mm以下の白色粒子を多く、2~3mmの石英少し含む
24住-15	壺	— — (8.4) カマド付近	体部下平内外面とも横ナデで削りがなため羽釜ではない。器形は一必要として取り扱った。	①灰白色②還元③灰④白色粒子や石英粒子観察できず
24住-16	羽釜	— — (9.4) 床面+5、フク土	羽釜の体部下平~底部である。外側体部下平は筒に向かうへ削り、底部ナデ整形。	①黒褐色②還元③灰④1mm以下の白色粒子を多く、2mm前後の石英を少量含む
24住-17	刀子鉄器	— — — 床面+2	3體体の刀子は基部と、若干の身部片である。鏃元の痕は平直りを示すが、鏃は遺存が少なく、作り込みは明確でない。錆化は極目状ではない。	
24住-18	鉄器	厚さ-6.1 上方端部 厚さ-0.2 床+2	用途不明の鉄器である。欠損はない。図上は端部でやや厚目である。下方はやや薄目となり左・右に耳の曲がある。	
24住-19	石	縦-21.0 横-6.6 重量-1,310g	細長く、断面はほぼ隅丸方形を呈する。図での下端部分に打ち欠けた痕跡を多く残す。	①黒色②赤色③黒色頁岩④床面+5cm

## 第2節 住 居 跡

### 25号住居跡 (平安時代)

遺構写真図版37・38

遺物写真図版77

位置 24号住居跡の西に重複して位置し

I-23-24、J-23-24グリットに属す。

概要 24号住居跡に竈を含む住居東側を削り取られている。また現在の耕作面に近く、住居の掘り込みも浅く又ロームをほとんど掘り込んでいないため、検出に困難が多かった。24号住居床下部に竈の痕跡を求めたが、検出できなかった。

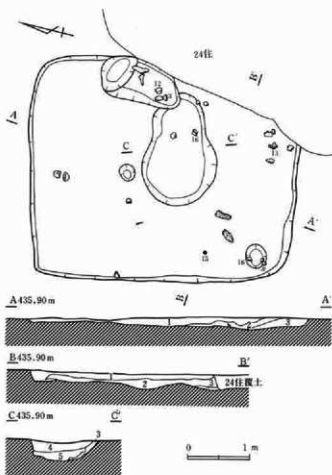
構造 床面はローム混じりの黒褐色土層であり、中央床面は固く踏まれていたが、壁近くは非常に軟質であった。柱穴、周溝、貯蔵穴は検出されなかった。

規模 東西方向で3.5m、南北方向で4.2mと南北方向に特に長い長方形を呈している。壁高は8~15cmと浅い。

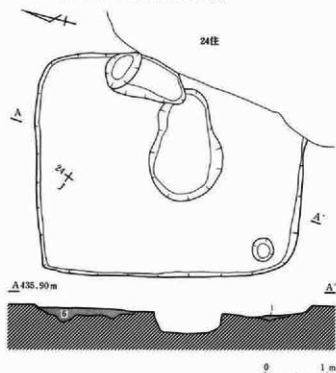
遺物 床面や覆土中より土師質土器・埴輪、須恵器羽釜、鉄器の小破片等出土。

床下 床面調査後、床面の黒色土とローム粒子の混入した層を取り除き、床下調査を実施した。柱穴や貯蔵穴は検出されなかったが、床面は中央より長軸1.8m、短軸1.1m、深さ30cmの床下土坑と、東壁近くより長軸1.3m、短軸70cm、深さ24cmの床下土坑が検出された。中より出土遺物は全く認められなかった。

1. 黒色土層 黒色土層中に少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
2. 黒褐色土層 黒色土中に焼土粒子・木炭の粒子が少量混入している。
3. 黄褐色土層 ローム粒子を主成分とした層。ごく少量の黒色粒子を含む。
4. 黒色土層 黒色土中に少量のローム粒子を含む。
5. 黒褐色土層 黒色土中にローム粒子を少量含む。
6. 黄褐色土層 ローム粒子・ロームブロックを主とし黒色土を多く混入している。

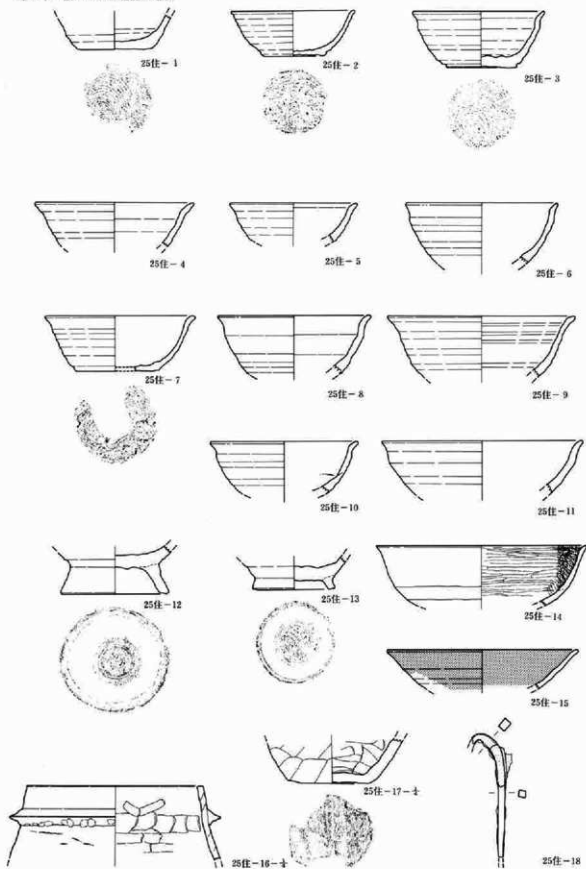


第129図 25号住居跡実測図



第130図 25号住居跡床下実測図

第5章 検出された遺構と遺物



第131図 25号住居跡出土遺物実測図

## 第2節 住 居 跡

25号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第131図 写真図版77)

遺構名及び番 号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出 土 位 置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②地紋③残存④胎土⑤需考
25住-1	環 土師質	— — (4.8) フク土	底部の器内の厚い環であり、底面に右回転糸切痕が残る。	①灰褐色②酸化③④④1mm以下の白色粒子と石英粒子を多く含む
25住-2	環 土師質	3.5 9.7 5.0 フク土	器内の薄い環であり、体部はやや内押しつつ外上方へ開き、口縁部は強く外反する。体部下端と底部端との境に段を持つ。	①灰褐色②酸化③④④1mm以下の白色粒子と石英粒子を多く含む
25住-3	環 土師質	4.4 10.4 5.6 床面+12	底部の器内が特に厚い環であり、体部はやや内押しつつ外上方へ開き、口縁部は大きく外反する。内側底面に渦巻状の凸凹が、外面に右回転糸切痕が残る。	①灰褐色②酸化③④④1mm以下の白色粒子と石英粒子を多く含む
25住-4	環 土師質	— (10.0) — フク土	体部はやや内押しつつ外上方へ開き、口縁部は大きく外反する。内外面横ナデ整形。	①灰褐色②酸化③④④1mm以下の白色粒子と石英粒子を多く含む
25住-5	環 土師質	— (10.0) — フク土	口径の小さな環であり、口縁部は大きく外反する。器表内外面横ナデ。	①褐色②酸化③④④1mm以下の白色粒子と石英粒子を多く含む
25住-6	環 土師質	— (12.0) — フク土	器高のやや高い又は境であり、体部はやや内押しつつ外上方へ開く。口縁部は大きく外反する。	①黒褐色②酸化③④④1mm以下の白色粒子と石英粒子を多く含む
25住-7	環 土師質	— 11.8 6.7 床下フク土	底部の器内が薄く、体部はやや内押しつつ外上方へ開き、口縁部は外反する。底面に右回転糸切痕が残る。	①黒褐色②酸化③④④1mm以下の白色粒子と石英粒子を多く含む
25住-8	環 土師質	— (11.9) — フク土	器内の厚い環又は境であり、口縁部はなだらかに外反する。内外面横ナデ整形。	①灰褐色②酸化③④④1mm以下の白色粒子を多く含む
25住-9	環 土師質	— (14.9) — 床面+7、フク土	口径の大きな環又は境であり、口縁部はなだらかに外反する。器表内外面にロクロ削を多く残す。	①灰色②還元③④④1mm以下の白色粒子を多く、2mm前後の石英少量含む
25住-10	環 土師質	— (11.6) — フク土	口径の小さな環又は境である。口縁部は大きく外反する。内外面横ナデ。	①褐色②酸化③④④1mm以下の白色粒子を多く、石英粒子を少量含む
25住-11	環 土師質	— (15.9) — フク土	口径が大きく、器内のやや厚い環である。口縁部と体部との境に強い段を持つ。口縁部は外反する。	①灰褐色②酸化③④④1mm以下の白色粒子と石英粒子を多く含む
25住-12	埴 土師質	— — 8.5 床面+11	高い高台を持つ埴の底部と高台部である。高台登付の部分は鋭角でていねいに整形されている。	①褐色②酸化③高台部と底部のみほぼ完形④1mm以下の白色粒子を多く含む
25住-13	環 土師質	— — 6.6 床面+11	底部の器内が特に厚い環である。高台は断面方形を呈し、登付部分は鋭角でていねいに整形されている	①灰褐色②酸化③高台部と底部のみほぼ完形④1mm以下の白色粒子を多く含む
25住-14	埴?	— (16.7) — フク土	ロクロ使用酸化焙焼成で、内面全面へラ磨きの埴である。吸灰により黒色を呈する。へラ磨きは口縁部西側で横方向、底部は横方向、体部下半へラ磨り。	①口縁部内外面と内面全面黒色、口縁部下の外面褐色、断面加焼色②酸化③④④1mm以下の白色粒子を多く含む
25住-15	埴輪 灰輪	— (15.1) — 床面+12、フク土	やや浅くなる埴であり、口縁部はやや外反する。	①灰白色、胎土全面透明で点状に灰色粒子を混入②還元③④④密
25住-16	羽釜	— (18.8) — 土坑内	体部はやや丸味をもつが、ほぼ直線で口縁部に至る。口縁部は平で隅は断面三角形を呈する。	①灰白色②還元③④④1mm以下の白色粒子を多く、2mm前後の石英少し含む
25住-17	甕	— — 9.0 フク土	器内が厚い。体部外側は口縁部に向かうへラ磨り、内側はナデ、底部に木炭痕が残る。	①外面灰色・断面灰白色・内面黒色②還元③体部下と底部のみほぼ完形
25住-18	鉄器	全長—9.6 中程—0.6 フク土	頸端を折り曲げた全具であり、曲り部以下は断面方形で釘状である。曲り部に青のような薄積状物質と木質が付着、裏面も同様に取り付け部の遺存がある。錆化は釘状に縦目立つ。	

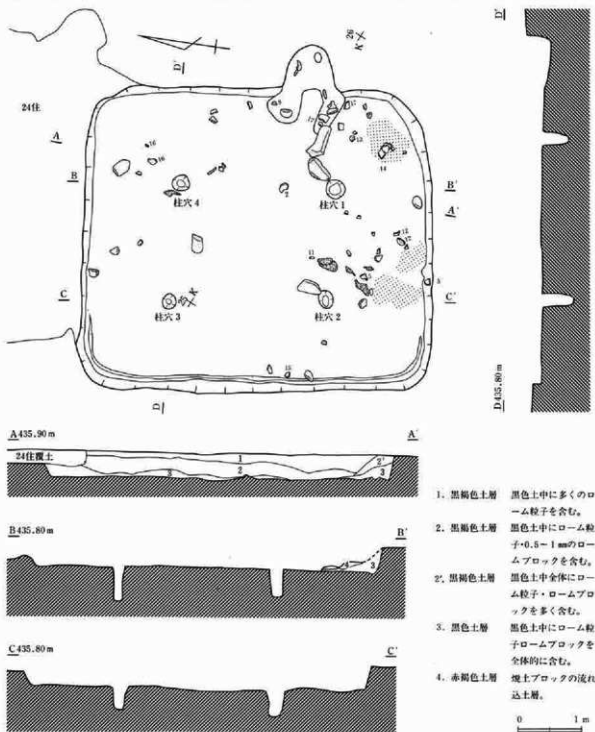
第5章 検出された遺構と遺物

26号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版38・39 遺物写真図版77・78

位置 24号住居跡の南に重複して位置し、J-24・25、K-24・25グリッドに属する。

概要 24・25・26号住居跡の3軒重複中の一軒であり、24号住居跡により北壁の一部を削り取られていることや、出土遺物の比較等より見て、26号住居跡は3軒中最古である。3軒の中では住居の掘り込みが最も深く、竈の残りも非常に良好であった。

構造 床面はロームを主とし、少量の黒色土を含む。他の住居にみられたような黒色土とロームの混入土に



第132図 26号住居跡実測図

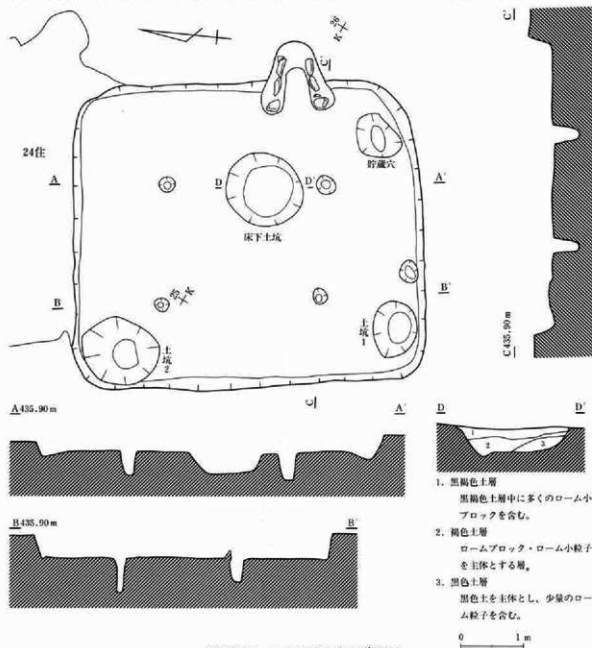


より成る厚い床面は形成されていなかった。柱穴は4個検出され、周溝は西壁のほぼ全面と南北壁の西側端部分より検出されたのみであった。竈右側に貯蔵穴が検出された。柱穴2の南側に多くの焼土と炭が住居外の南側より投げ込まれたように検出された。その在り方は11号住居跡に見られたものと多くが共通しており、いずれも住居放棄後、少し埋まりつつある状態で投げ込まれたものと見える。

規模 東西方向4.8 m、南北方向5.6 mで他の住居跡同様に南北方向に長い長方形を呈する。壁高は20~30 cmであり、比較的残りが良い。周溝幅は10~20 cmで深さは5~6 cmであり浅い。貯蔵穴は長軸方向で70 cm、短軸方向で60 cm、深さ30 cmである。柱穴1は直径30 cm、深さ40 cm、柱穴2は直径30 cm、深さ43 cm、柱穴3は直径23 cm、深さ54 cm、柱穴4は直径26 cm、深さ35 cmであった。

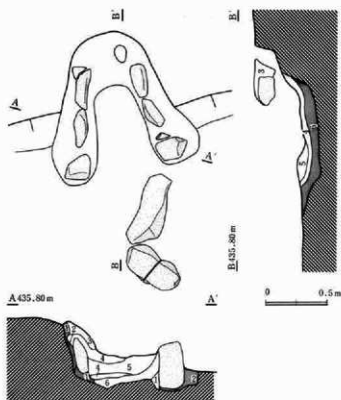
遺物 床面や覆土中より土師器環・甕、須恵器環・环蓋・甕、鉄器の破片等多数出土。

床下 床面調査後混入している黒色土を取りのぞき床下調査を行なった。その結果竈左手前に床下土坑が



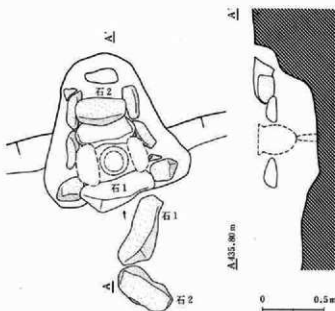
第133図 26号住居跡床下実測図

第5章 検出された遺構と遺物



1. 黒色土層 黒色土を主体として、少量のローム粒子を含む。
2. 褐色土層 ロームを主体とし、ごく少量の黒色土を含む。
3. 黒褐色土層 ローム粒子を多く含み、少量の黒色土を含む。
4. 焼土層
5. 赤褐色土層 焼土粒子を多く含み、黒色粒子・ローム粒子を少量含む。
6. 黒褐色土層 黒色土を主体とし、ローム粒子・焼土粒子を含む。

第134図 26号住居跡竈実測図



第135図 26号住居跡竈推定復元図

一基、他に二基の土坑が検出された。床下土坑は直径約1.2m、深さ28cmであり土坑1は長軸85cm、短軸70cm、深さ10cmであり、土坑2は長軸1.2m、短軸1m、深さ15cmでいずれも浅く床下土坑と異なる。

26号住居竈

位置 住居東壁やや南寄りに、地山のロームと、ローム上の黒褐色土を掘り込んで竈が構築されていた。

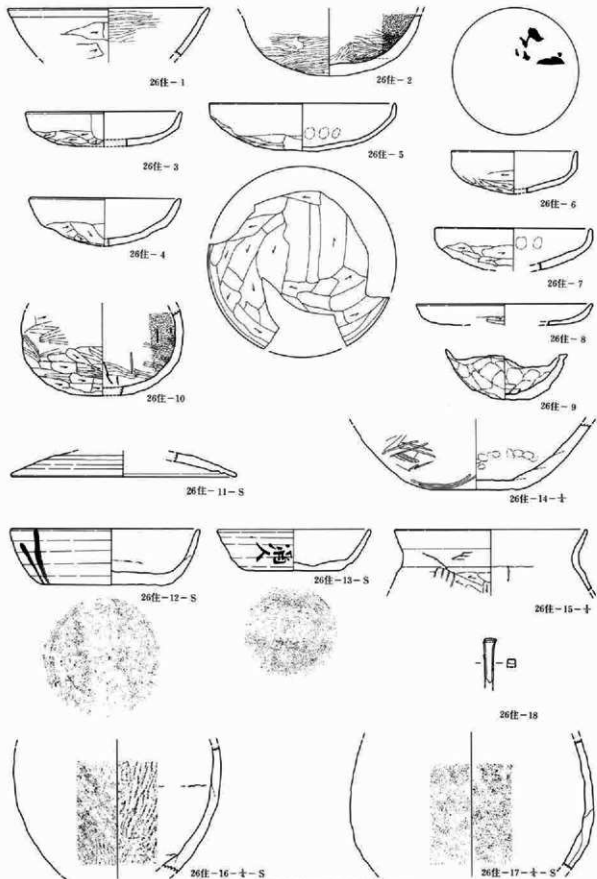
構造 石を大量に使用し、ローム及び粘土を用いて構築した竈である。袖石の大部分と煙道部の天井部を含む多くの部分が残存しており、3・5号住居跡に次ぐ残りの良い竈であった。焚口天井石と煙道部手前に位置すると思われる天井石が、竈手前に落ちていた。それらの石と、竈内に残存していた石を組み合わせて復元して見ると、第135図のような形が考えられる。地山のロームを掘り込んだ後に、天井石を支える袖石を天井石の高さを計算に入れて、左右3個づつ埋め込む。次に粘土とロームを用いて、焼成部上を避けて、煙道上に2石と焚口天井石を1石乗せる。焼成部上の壁の左右には、別な石を置いて、焼成天井部を作り、石と石の間で石と壁の間にロームや粘土を埋め込んで、壁を固定する。このようにして、焼成部の壁の周辺に多くの空間を確保し、焼成効率を上げることができたのではないだろうか。

第135図に示した復元図で、点描のある石は現存し、元位置を保っている石、点描のない石は現存したが位置を動かした石である。また点線の石は現存しないが推定した石を意味している。

規模 煙道方向で1.3m、両袖方向で1.2mであり、焼成部幅は40～50cmである。

遺物 土師器環・鬘、鉄器の破片等出土。

第2節 住居跡

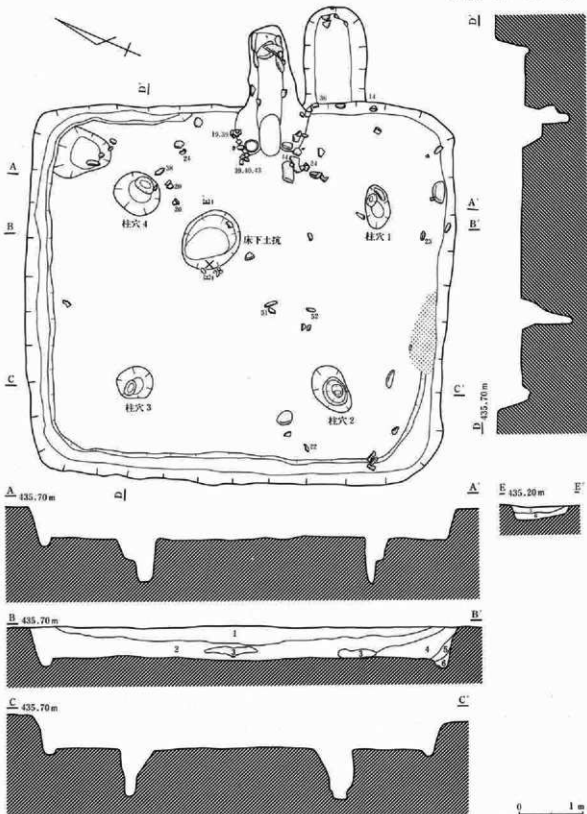


第136圖 26号住居跡出土遺物実測図

第5章 検出された遺構と遺物

26号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第136図 写真図版77・78)

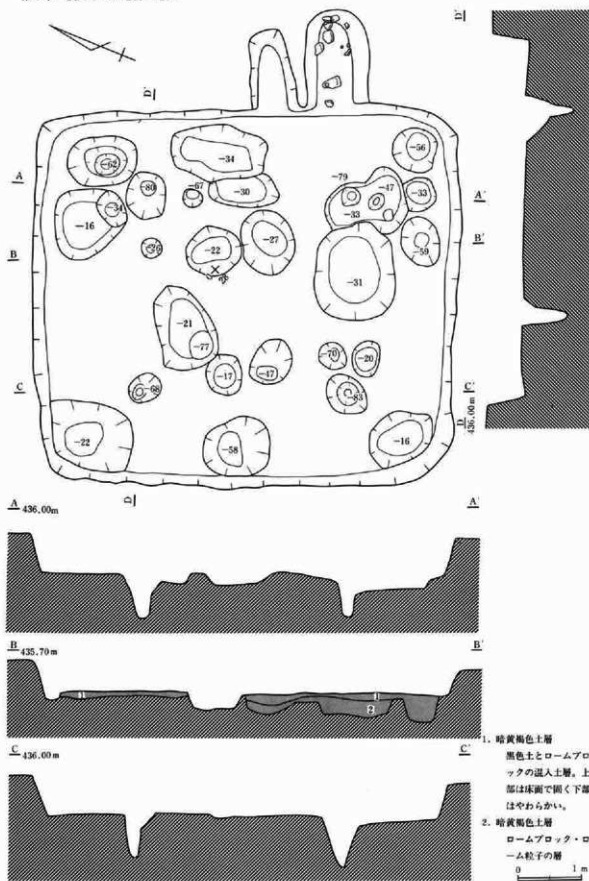
遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②地質③残存④胎土⑤備考
26住-1	環土師器	— (15.9) — カマド内	体部から口縁部がほぼ直線であり、口縁部はほとんど外反しない。内面にややへう磨きあり。	①褐色②酸化③④⑤密、白色粒子を含まず
26住-2	埴土師器	— — — 床面+6	丸底の埴であり、内外面とも実にていねいにへう磨きが行われて、内面はその後吸炭により黒色。	①内面黒色・断面灰褐色・外面の約4/5黒色で4/5褐色②酸化③④赤色粒含む
26住-3	環土師器	— (12.5) — カマド内	平底状を呈する丸底の埴。器高が低く口縁部が高い口縁部上半横ナデ、下半指整形、体部へう削り。	①褐色②酸化③④⑤1mm以下の石英粒子を少量含む、白色粒子含まず
26住-4	環土師器	— (12.0) — フク土	器高のやや高い器であり、口縁部上半横ナデ、下半指整形、体部へう削り。	①褐色②酸化③④⑤1mm以下の石英粒子を少量含む、白色粒子含まず
26住-5	環土師器	3.8 14.8 — 床面+36、フク土	丸底を呈する底部より、口縁部は直立気味に立ち上がる。口縁部横ナデ、体部へう削り。	①褐色②酸化③④⑤1mm以下の石英粒子を少量含む、白色粒子含まず
26住-6	環土師器	— (10.1) — フク土	口径の小さな環であり、口縁部は長い。口縁部横ナデ、体部から底部手持へう削り。内面底部に墨書があるが、判読できない。	①褐色②酸化③④⑤1mm以下の石英粒子を多く、黒色粒子を少量含む
26住-7	環土師器	— (12.5) — カマド内	丸底の環であり、口縁部は短い。口縁部横ナデ、体部へう削り。内面に墨の付着あり。	①褐色②酸化③④⑤1mm以下の石英粒子を多く、黒色粒子を少量含む
26住-8	環土師器	— (14.0) — 床下フク土	口径が大きく、器高の浅い器であり、皿に近い形を呈する。口縁部横ナデ、体部手持へう削り。	①褐色②酸化③④⑤1mm以下の石英粒子を多く、黒色粒子を少量含む
26住-9	環土師器	3.4 9.6 — 床面+8	手製の土器である。内外面すべて指整形で凸凹状を呈する。横ナデ整形は全く認められない。	①褐色②酸化③④⑤ほぼ定形⑥1mm以下の白色粒子を少量含む
26住-10	埴土師器	— — — カマド内	鉄脚を呈する体部をもつ埴と思われる。器器内外面の多くをへうで磨き、内面は吸炭により黒色を呈す。	①外面褐色・断面灰褐色・内面黒色②酸化③④⑤1mm以下の石英多量に含む
26住-11	甕須恵器	— (17.8) — 床面+32、K-14	カエリを持つ環蓋である。カエリはつまみ出して作られており、カエリの周辺が削り取られている。	①灰白色②還元③④⑤1mm以下の白色粒子を多く、2~3mmの石英少し含む
26住-12	環須恵器	4.4 15.0 9.5 床面+16	口径と底径の大きな環であり、全体的にゆがんでいる。底部外側は、おそらくへう起こしにより切られた後全面回転へう整形、さらにナデ整形、ロクロ右。	①灰色②還元③④⑤ほぼ定形⑥1mm以下の白色粒子を多く含む、全体的に粒子の細い胎土である
26住-13	環須恵器	3.2 (12.0) 7.5 床面+23	口径の小さな環であるが、底部内は回転ナデで整形し、底部外面は回転へう整形で、体部外面まで削る「沼入」と思われる墨書あり。ロクロ左回転。	①灰色②還元③④⑤1mm以下の白色粒子を多く、2mm前後の白色粒子を少量含む
26住-14	甕土師器	— — 9.0 床面+21	丸胴の甕と思われる。内面のほぼ全面にわたり刷毛整形があり、外面に植物の基状の痕跡あり。	①褐色②酸化③底部へう削り④1mm前後の石英・赤色粒子多く含む
26住-15	甕土師器	— (24.0) — 床面+29、フク土	器内の浅い甕であり、口縁部の外反は強い。ややコの字状口縁を意図させる。	①褐色②酸化③④⑤1mm以下の白色粒子と黒色粒子を少量含む
26住-16	甕須恵器	— — — 床面+13、フク土	内面にやや弧状のあて目が全面に残り、外面はナデ整形。胎入品と思われる。	①灰色②還元地質③体部の一部破片④1mm以下の白色粒子を多く含む
26住-17	甕須恵器	— — — 床面+5、フク土	内面にやや弧状の浅いあて目が全面に残り、外面は細い平行甲子目が残る。	①灰色②還元地質③体部の一部破片④1mm前後の白色粒子と石英粒子多く含む
26住-18	釘鉄器	全長—3.4 フク土	釘の頭を含む上半である。下半は調査時の欠損。断面は方形であり、頭はめくれあり。錆化は縦目状である。	



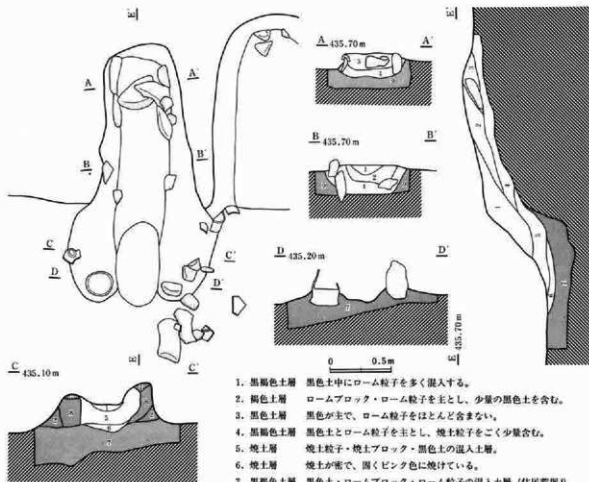
1. 暗褐色土層 黒色土層中にローム粒子・焼土粒子・炭化物の粒子をごく少量含む。 2. 暗褐色土層 黒色土層中に多くの焼土粒子と、少量の炭化物粒子を含む。 3. 黄褐色土層 黒色土層中に多くのロームブロック・ローム粒子と少量の炭化物粒子を含む。 4. 黄褐色土層 黒色土層中に多くのローム粒子と少量の炭化物・焼土粒子を含む。 5. 黄褐色土層 ローム粒子・ローム小ブロックを中心とした層中に少量の黒色土を含む。 6. 赤褐色土層 焼土粒子・焼土ブロックの層。わずかにロームブロックを含む。

第137図 27号住居跡実測図

第5章 検出された遺構と遺物

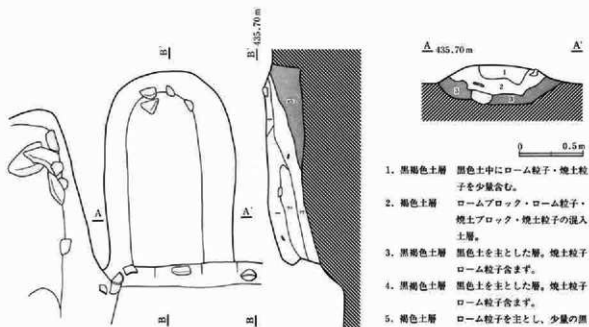


第138図 27号住居跡床下実測図



第139図 27号住居跡竈実測図

1. 黒褐色土層 黒色土中にローム粒子を多く混入する。
2. 褐色土層 ロームブロック・ローム粒子を主とし、少量の黒色土を含む。
3. 黒色土層 黒色が主で、ローム粒子をほとんど含まない。
4. 黒褐色土層 黒色土とローム粒子を主とし、焼土粒子をごく少量含む。
5. 焼土層 焼土粒子・焼土ブロック・黒色土の混入土層。
6. 焼土層 焼土が密で、固くピンク色に焼けている。
7. 黒褐色土層 黒色土・ロームブロック・ローム粒子の混入土層。(住居範囲り後床面全体に入れた土)
8. 黄褐色土層 ロームを主とした層。



第140図 27号住居跡竈実測図

1. 黒褐色土層 黒色土中にローム粒子・焼土粒子を少量含む。
2. 褐色土層 ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子の混入土層。
3. 黒褐色土層 黒色土を主とした層。焼土粒子ローム粒子含まず。
4. 黒褐色土層 黒色土を主とした層。焼土粒子ローム粒子含まず。
5. 褐色土層 ローム粒子を主とし、少量の黒色土を含む堆山の層。

## 第5章 検出された遺構と遺物

### 27号住居跡（奈良時代） 遺構写真図版40 遺物写真図版78・79・80

- 位置** 26号住居跡の南1.8m、20号住居跡の東南約1.3mに位置し、N27・28、O-27・28グリットに属する。
- 概要** 住居の掘り込みが深く、規模の大きい住居跡である。東壁に竈が2基検出され、調査の結果北側の竈が住居放棄時まで使用された竈であり、南側の竈は住居内に袖部や燃焼部がなく、壁外に煙道部のみの残存であったため、古い竈であることが確認できた。北側の竈を新竈、南側の竈を旧竈と呼称する。南壁中央部に近い床面に焼土が1.3×0.3mの範囲で床面より18~20cmほど浮いた状態で検出された。おそらく住居放棄後投げ込まれたものであり、11・26号住居の例に近い性格のものと考えられる。
- 構造** 床面はロームを主とし、少量の黒色土とロームブロック・ローム粒子の混入土よりできていた。床面中央よりやや北東寄りに床下土坑が一基検出されており、覆土は床面として踏まれていない状況を示した。床面北東端に土坑が一基検出された。柱穴は4個検出され、いずれも大きく深い柱穴となっていた。周溝は南壁東寄りと東部竈南部に検出されなかったが、他の部分では幅広く検出された。貯蔵穴は床面北東端の土坑がそれに該当する可能性はあるが、明らかでない。壁はいずれもほぼ直立しており、四壁とも共通している。
- 規模** 東西方向で6m、南北方向で6.8mで他の住居跡同様に南北方向に長い長方形を呈している。壁高は50~70cmで深く、住居の残りは良好である。周溝幅は20~40cmで広く、深さは10cm前後で深い。柱穴1は70×40cmの楕円形を呈し、深さは70cm、柱穴2は80×50cmの楕円形を呈し、深さは80cm、柱穴3は直径約60cmの円形を呈し、深さ70cm、柱穴4は直径約70cmの円形を呈し、深さは70cmである。床下土坑は直径約90cmで深さは30cmで浅い。床面北東端の土坑は70×80cmの大きさで、深さは40cmである。
- 遺物** 床面や覆土中より、土師器環・甕や須恵器環・環蓋・壺・鉢及び石等が大量に出土しており、当遺跡内において、出土遺物の最も多い住居跡の一つである。
- 床下** 床面調査後、床面の黒色土や黒褐色土を5~10cmほど取り除き、床面下調査を行なった。その結果床面下より、ほぼ全面にわたり多くの土坑や小穴が検出された。大きさは一定しないが、床面の深さは20~30cmのグループと40cm前後のグループに分かれるようである。図上に示した数字は床面下よりマイナスの数字である。

### 27号住居跡新竈

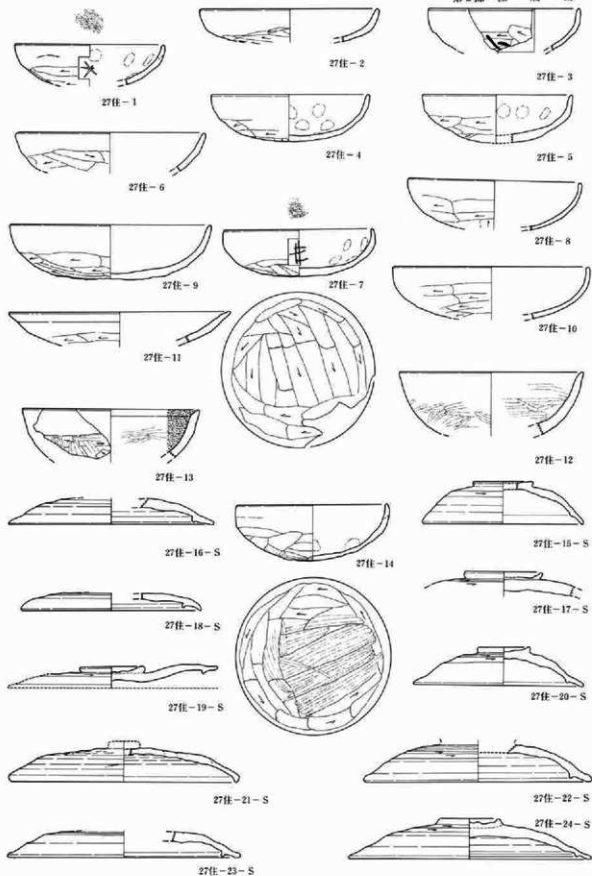
- 位置** 住居東壁やや南寄りに最初に作られた旧竈の北側に近接して、地山のロームの一部とローム上の黒褐色土を掘り込んで新竈が構築されていた。
- 構造** 焚口から燃焼部の大部分が住居内に位置し、燃焼部のごく一部と煙道部が住居外に作られている。平安時代の3・5号住居跡と異なり、ロームを多く削り込んでいない。袖部はロームと黒褐色土を盛り上げて作られており、煙道部以外は袖部に多くの石を用いていない。焚口部左袖には土師器甕を倒置して袖の芯としていた。煙道部先端部分には多くの石を用いて一部煙道部天井石も残存していた。
- 規模** 煙道方向で2.1mを測り、非常に長い。両袖方向で1.1m、燃焼部幅40cm、高さ約80cmであった。
- 遺物** 左袖の芯に使われていた土師器の甕のみの出土であった。

### 27号住居跡旧竈

- 概要** 新竈の南側に位置し、煙道部のみの残存であった。覆土中より焼土は検出されなかった。新竈同様に煙道部先端に多くの石を用いていた。煙道幅は約1m、長さは残存部で1.7mであった。竈内より出土遺物は認められなかった。

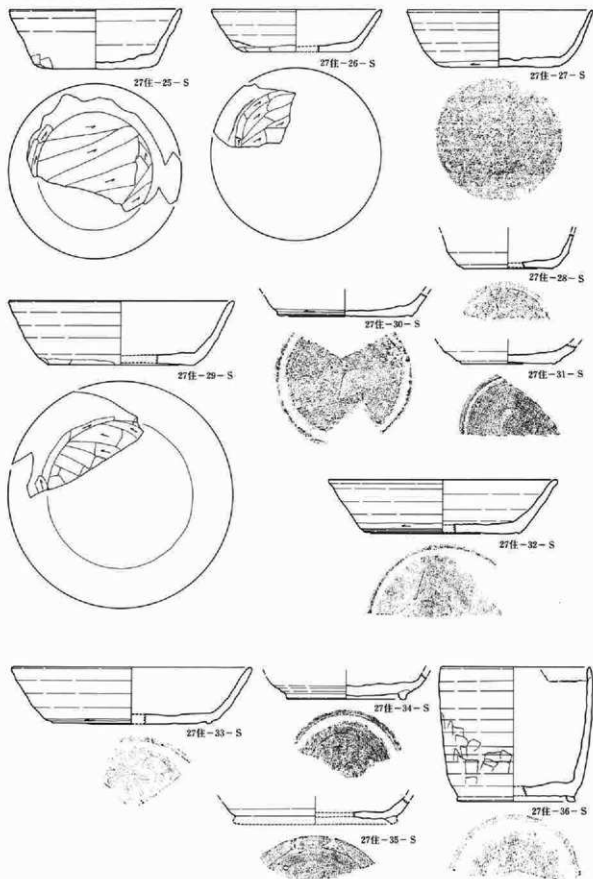


第2節 住居跡



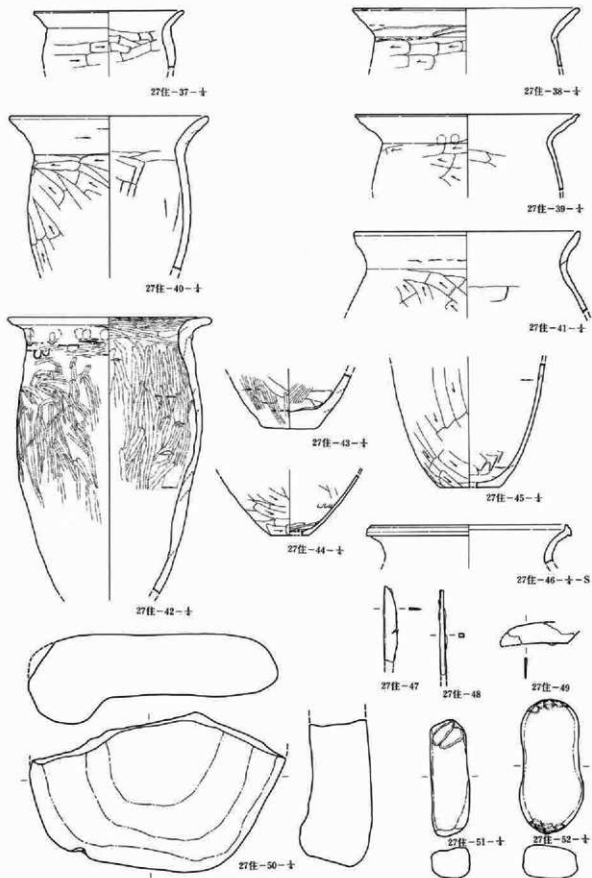
第141图 27号住居跡出土遺物実測図(1)

第5章 検出された遺構と遺物



第142図 27号住居跡出土遺物実測図(2)

第2節 住 居 跡



第143图 27号住居跡出土遺物実測图(3)

第5章 検出された遺構と遺物

27号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第141図 写真図版78・79)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(mm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子と黒色粒子をごく少量含む
27住-1	環土師器	— (11.9) —	丸い底部の環であり、口縁部は短く直立気味に立ち上がる。内側体部にへうによる割印あり。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子と黒色粒子をごく少量含む
27住-2	環土師器	— (14.1) — フク土、O-27	器高の低い皿状の環である。口縁部は長く、やや外側に開く。底部はやや丸味を持つ。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子と黒色粒子をごく少量含む
27住-3	環土師器	— (11.8) —	器高が高く、底部が丸くなる環である。口縁部はやや直立気味に立ち上がる。体部に判読不明の墨書。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子と黒色粒子をごく少量含む
27住-4	環土師器	— (12.4) —	平底に近い丸底の環であり、口縁部は直立気味にやや外側へ開く。口縁部上半横ナデ、下半指整形。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子と1mm前後の石英粒子をごく少量含む
27住-5	環土師器	— (12.0) —	やや器内の厚い環である。口縁部は全面横ナデ整形。外側体部-底部へう削り、内面横ナデ整形。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子と2mm前後の赤色粒子をごく少量含む
27住-6	環土師器	— (15.0) —	口径が大きく器高の低い環であり、口縁部は大きく外上方へ開く。口縁部横ナデ、体部へう削り。	①褐色②酸化③④1mm以下と1mm前後の白色粒子少量含む
27住-7	環土師器	3.7 11.8	器内がやや厚く、底部が平に近く、やや箱状を呈する環である。口縁部はやや内傾している。体部外側に割印あり、口縁部全面横ナデ。	①褐色②酸化③ほぼ実形④1mm以下の白色粒子と石英粒子を多く含む
27住-8	環土師器	— (13.5) —	全体的に弧状を呈する環であり、口縁部幅は狭く、横ナデ整形。体部-底部は幅広いへう削り。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子と黒色粒子をごく少量含む
27住-9	環土師器	— (15.9) — 床下フク土	口径が大きく、浅い環である。底部は平に近い平底であり、全面手持へう削り。口縁部横ナデ整形。	①褐色②酸化③④1mm以下の石英粒子と2mm前後の赤色粒子を多く含む
27住-10	環土師器	— (15.5) —	全体的に弧状を呈する環である。口縁部は内側しつつ立ち上がり端部がやや丸くなる。	①褐色②酸化③④1mm以下の黒色粒子と石英粒子を多く含む
27住-11	皿形環土師器	— (17.5) —	口径の大きな環であり、浅く口縁部が大きく外側へ開く。口縁部内外面横ナデ整形。	①褐色②酸化③④1mm以下の石英粒子と黒色粒子を多く含む
27住-12	埴土師器	— (14.4) —	器内が厚く、器高の高い埴である。内外面に多くにへう磨きが行われている。	①灰褐色②酸化③④1mm以下の石英粒子と赤色粒子と金色の雲母を含む
27住-13	環土師器	— (14.1) —	器内が厚く、器高の高い埴である。口縁部がやや内傾する。内外面へう磨き後内面吸灰により黒色を呈す。	①外面-断面灰褐色・内面黒色②酸化③④1mm以下の白色・石英多く含む
27住-14	環土師器	4.3 12.0 灰面+34	丸底を呈する器高の深い環である。口縁部は直立気味に立ち上がり横ナデ整形。体部-底部は手持へう削り、内面横ナデでいねいな整形。	①褐色②酸化③1mm以下の石英粒子と黒色粒子・赤色粒子をごく少量含む
27住-15	蓋須恵器	— (12.6) —	環状を呈すると思われるつまみを持ち、カエリを持つ環蓋である。器高が高い。カエリは割くつまみ出している。天井部にへう削りあり。	①灰色②還元焼練③④1mm以下の白色粒子を多量に含む
27住-16	蓋須恵器	— (16.4) —	カエリを持つ環蓋であり、カエリの部分を境に外側にはほぼ平に開き、内側は傾斜を持つ。	①外面黒色・断面と内側灰褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を多く含む
27住-17	蓋須恵器	— — —	環状のつまみを持つ環蓋のつまみと、天井部の破片である。つまみ中央部は薄く、一部はずれている。	①灰褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を多く、2-3mmの石英少量含む
27住-18	蓋須恵器	— (14.2) — 床下フク土	カエリを持つ環蓋であり、その部分を境に16でみられた変化はなし。天井部にへう削りあり。	①灰色②還元焼練③④1-3mmの白色と赤色粒子を少量含む

27号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第141・142図 写真図版79)

遺構名及び 番 号	器形及 び器種	器高・口径・底径(cm) 出 土 位 置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
27住-19	甕 須恵器	— — — 床面+18、フク土	環状のつまみを持ち、カエリを持つ環蓋である。焼きむずみを起こしている。	①灰色②還元焼成③灰④1mm以下の白色粒子を少量含む
27住-20	甕 須恵器	3.0 13.4 — 床面	環状のつまみを持ち、カエリを持つ器の高けい環蓋である。カエリはつまみ出し整形で低い。カエリの付く部分を境に丸い天井部が変化する。ロクロ右回転。	①灰褐色②酸化③灰④1mm以下の白色粒子を多く、2～3mmの石英粒子を少量含む
27住-21	甕 須恵器	— (17.8) — フク土	つまみははずれているが、径の小さいものである。カエリはなく、端部を折り曲げている。ロクロ右。	①灰褐色②還元焼成③灰④1mm以下の白色粒子を少量含む
27住-22	甕 須恵器	— (17.6) — 床面+21、フク土	つまみははずれているが、痕跡よりみて環状と思われる。低いカエリを持つ。ロクロ右回転。	①外面灰色・断面と内面褐色②酸化③灰④1mm以下の白色粒子を多く含む
27住-23	甕 須恵器	— (18.4) — 床面+12	高いカエリを持つ環蓋であり、天井部はヘラ削りにより平である。カエリは付着点で天井部変化する。	①灰褐色②酸化③灰④1mm前後の白色粒子と石英粒子を少し含む
27住-24	甕 須恵器	3.2 (19.0) — 床面+37、フク土	口径の小さな環状つまみを持ち、カエリを持つ環蓋である。カエリは全体が幅広く低くならぬかである。カエリを境にやや天井部は外側に開く。ロクロ右。	①黒色②還元③灰④1mm以下の白色粒子を多く含む
27住-25	環 須恵器	4.6 (13.6) 9.2 フク土	口径に比較して器高の高い環であり、口縁部はほぼ直線形で外上方へ開く。底部は手持ヘラで不定方向のヘラ削り。ロクロ右回転。	①灰色②還元焼成③灰④1mm以下の白色粒子を多く、2～3mmの石英粒子をごく少量含む
27住-26	環 須恵器	3.3 (13.4) (8.5) フク土	器高の低い環である。平底の底部から口縁部はほぼ直線に外上方へ開く。体部下平～底部手持ヘラ削り。	①灰褐色②還元③灰④1mm以下の石英粒子と白色粒子を多く含む
27住-27	環 須恵器	4.5 14.6 9.8 フク土	口径に比較して器高の高い環である。口縁部はほぼ直線形で外上方へ開く。内面底部ナゲ整形、外面底部と体部下平回転ヘラ整形、後ナゲ整形。ロクロ右。	①灰褐色②還元焼成③灰④1mm以下の白色粒子を多く、2～3mmの石英粒子を多く含む。粒の粗い胎土である
27住-28	環 須恵器	— — (7.1) フク土	直径の小さな環である。底部にへら起こしの痕跡を残す。	①灰褐色②酸化③灰④1mm前後の石英粒子と赤色粒子を少量含む
27住-29	環 須恵器	5.0 (18.0) (11.6) フク土	口径に比較して器高の高い環である。体部下平回転ヘラ削り、底面手持ヘラ削り。ロクロ右回転。	①灰褐色②還元焼成③灰④1mm以下の白色粒子を多く含む
27住-30	環 須恵器	— — 10.9 フク土、0～27・28	削り出し高台の環である。高台は体部下端と底部端の接する部分に位置し、底面と高さは同一である。高台内面回転ナゲ整形。ロクロ右回転。	①褐色②酸化③灰④1mm以下の白色粒子を多く、1mm前後の石英粒子を少量含む
27住-31	環 須恵器	— — (7.1) フク土	削り出し高台の環である。低い高台である。内側底部ナゲ整形、外面底面回転ナゲ整形。	①灰白色②還元③灰④1mm以下の白色粒子を多く、2mm前後の石英少量含む
27住-32	環 須恵器	— (18.1) (12.7) フク土	削り出し高台の環である。高台は体部下端と底部端の接する部分に位置し、底面より低い。高台部内側ナゲ整形。ロクロ右回転。	①灰褐色②還元③灰④1mm以下の白色粒子を多く、2mm前後の石英粒子を少量含む
27住-33	環 須恵器	— (19.0) (12.7) 床下フク土	削り出し高台の環である。底面がやや丸味を持ち、底部中央は高台より突出する。ロクロ右回転。	①灰褐色②還元③灰④1mm以下の白色粒子を多く、2mm前後の石英少量含む
27住-34	環 須恵器	— — (9.6) フク土	付高台の環である。高台はていねいに整形されており、端部を削り込んでいる。ロクロ右回転。	①灰褐色②還元③灰④1mm以下の白色粒子を多く含む
27住-35	環 須恵器	— — — フク土	付高台の環である。高台はすべてははずれている。底部にへら起こしの痕跡を残す。	①灰白色②還元③灰④1mm以下の白色粒子と石英粒子を多く含む

第5章 検出された遺構と遺物

27号住居跡 出土遺物観察表 (図版番地第142・143図 写真図版79・80)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(mm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②酸化③残存④胎土⑤備考
27住-36	鉢 須恵器	10.5 11.8 9.4 床面+34、カマド内、 0-27・28、フク土	高台の付く深い楕円であり、鉢と呼称した。底面は平で体部はほぼ直線で直立気味に立ち上がる。高台は体部下手をへら削りした後底部端に付けてあり、断面四角形を呈する。口縁右回転。	①外側灰色・内面灰褐色②酸化③㊶④1mm以下の白色粒子と2mm前後の石英粒子を多く含む、赤色粒子を少量含む
27住-37	壺 土師器	— (16.0) — 床下フク土	器内の厚い小形の甕である。口縁部は外反しナデ整形。体部外側は右横方向のへら削り。	①褐色②酸化③㊶④1mm前後の白色粒子を多く、黒色粒子を少し含む
27住-38	壺 土師器	— (24.0) — 床面	器内の薄いくの字状口縁を持つ甕である。体部外側に左横方向のへら削り。口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③㊶④1mm以下の白色粒子を多く、赤色粒子を少量含む
27住-39	壺 土師器	— (23.8) — 床面、フク土	器内の薄い大形の甕である。口縁部はくの字状に外反し、端部に近い外側に凹状の沈線が一周している。	①褐色②酸化③㊶④1mm以下の白色粒子と黒色粒子を多く含む
27住-40	壺 土師器	— (20.8) — 床面、フク土	器内の厚い長胴の甕である。口縁部は長く、なだらかに外反する。体部外面は左上方向のへら削り。口縁部内外面横ナデ、内面全面横ナデ。	①灰褐色②酸化③㊶④1mm以下の白色粒子を多く、2mm前後の石英粒子と赤色粒子を少量含む
27住-41	壺 土師器	— (23.9) — フク土	器内の薄い口径の大きな甕である。口縁部はなだらかに外反し、口縁端部は直立気味に立ち上がる。	①褐色②酸化③㊶④1mm以下の白色粒子を多く、黒色粒子を少量含む
27住-42	壺 土師器	— 20.5 — カマド左輪	器内が特に厚い長胴の甕である。器内の厚い口縁部は大きく外反し、端部は水平に近いほど外側へ開く。器面の内外面のほぼ全面にわたりへら削りが行われており、実にいい作りである。	①黒褐色・身は褐色②酸化③㊶④1mm前後の白色粒子と石英粒子を多量に含む、赤色粒子を少量含む
27住-43	壺 土師器	— — 6.0 床面	底面の厚い甕の底部一体部下半の破片である。器面内外面へら削り、底部外側ナデ整形。	①黒褐色②酸化③㊶④1mm以下の白色粒子を多く、2mm前後の石英を少量含む
27住-44	壺 土師器	— — (4.0) 床面+30、フク土	器内の薄い甕の底部一体部下半の破片である。器表面に炭化物が多く付着している。底面ナデ整形。	①黒褐色②酸化③㊶④1mm以下の白色粒子を多く含む
27住-45	壺 土師器	— — (6.2) フク土	器内の薄い甕の底部一体部の破片である。体部外側は底部に向かうへら削り。底面ナデ整形。	①外面黒褐色・断面と内面褐色②酸化③㊶④1mm以下の白色粒子を多く含む
27住-46	壺 須恵器	— (20.6) — フク土	壺の口縁部の破片である。口縁端部は上下につまみ出されており、幅広くなっている。	①表面灰色・断面灰褐色②酸化③㊶④1mm以下の白色粒子を多く含む
27住-47	刀子 鉄器	全長-5.9 挿元重ね -0.3 刃部長- 5、フク土	小身の刀子である。鍔元から切先まで遺存するが、茎は調査時の欠損である。平造りでは鍔は錆化のため明瞭でないが、平鍔か肉厚の少ない丸鍔と考えられる。鋒はやや付き物打も変形していないため研削りは少ない。区は明瞭でなく成り行で茎に至っている。錆化は軽でない。	
27住-48	鉄器	全長-6.6 中程の幅 -0.4、フク土	棒状の鉄である。鋳の塊状にしては細すぎる。断面は方形であり、錆化は軽である。太い側の先端は調査時の欠損である。	
28住-49	鉄器	全長-5.2 最大幅- 1.5、フク土	遺存が悪く用途不明である。錆化は軽目でない。図左上は調査時の欠損。	
27住-50	石	縦-27.7 横-16.9 重量-5300g	外側が高く、内側の低い石であり、他からの転用品と思われる。内面の一部が磨耗している。	①薄い褐色③㊶④石英質緑岩⑤カマド
27住-51	石	縦-13.3 横-4.2 重量-270g	全面が磨耗している。片側端部が打ち欠けたように欠損している。	①薄緑色②完形④ひん岩⑤床面+28cm
27住-52	石	縦-14.0 横-6.7 重量-470g	全面が磨耗している。断面形は玉子状で均一のとれた石である。	①灰褐色②完形④輝石安山岩(粗粒) ⑤床面+28cm

## 28号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版41 遺物写真図版80・81

位置 24・26号住居跡の東約27m、33号住居跡の東約12m、34号住居跡の南約2mに位置し、J-31・32グリットに属する。

概要 29号住居跡と中心軸を少しずらして、ほとんどの部分が重複している。古い住居跡を掘り込み、竈を伴って検出された住居跡を28号住居跡とし、28号住居跡に大部分を削り取られていた古い住居跡を29号住居と呼称した。29号住居跡覆土を掘り込んで28号住居跡が作られているため、重複部分の土層断面に掘り込み面が検出されるわけであるが、検出されなかった。おそらく29号住居跡が多く埋まらない段階で28号住居跡が作られたためであろう。両住居内出土土器を検討した結果も、ほぼ同一期内遺物であると考えられる。

構造 床面は地山のロームを主とし、多くの黒色土を混入していた。床面に小穴が2個検出されたが、柱穴と思われる掘り込みは検出されず、また周溝も全く検出されなかった。竈右側に貯蔵穴が検出された。壁はほぼ直に立ち上がり、重複していない部分で良好に検出された。

規模 東西方向で3.6m、南北方向で約3.7mを呈し、ほぼ正方形に近い住居跡であり、19号住居跡に次ぐ小さい規模となっている。壁高は45cm～50cmと深く残りは良好である。貯蔵穴は約75cmの円形を呈しており、深さは約30cmとなっている。

遺物 床面や覆土中より土師器杯・甕、須恵器杯・坏蓋等を多く、鉄器の破片や石を少量出土している。

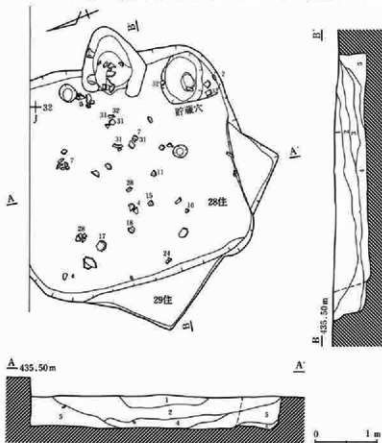
床下 床面調査後床面の黒色土や黒褐色土を取り除き、床面下の調査を行なった。その結果床面の作りは均一でなく、中央部を高く掘り残して、壁に近い周辺部を深く掘っていることが判明した。このような

傾向は他の住居跡では認められなかった現象である。床下面中央やや東寄りに石が検出された。また床下全面にわたり凹凸面で検出された。しかし小穴や床下土坑等は検出されなかった。

## 28号住居竈

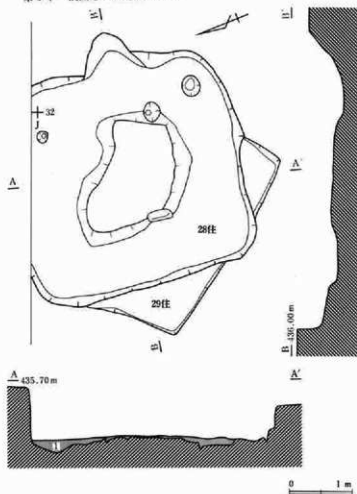
位置 住居東壁やや南寄りに、地

1. 暗褐色土層 黒色土中に5cm内外のロームブロックを多く含む。
2. 黒褐色土層 黒色土中にローム粒子をわずかに、焼土粒子を部分的にわずかに含む。
3. 褐色土層 黒色土中に1cm内外のロームブロック・焼土ブロック・ローム粒子と焼土粒子を含む。
4. 黒褐色土層 黒色土中に多くのローム粒子・ロームブロックを含む。
5. 暗褐色土層 ロームブロック・ローム粒子と黒色土の混入土層。
6. 暗褐色土層 ロームブロック・ローム粒子を主とした層中にごく少量の黒色粒子を含む。

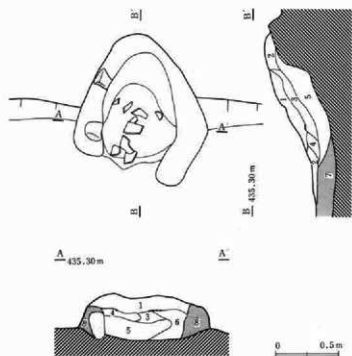


第144図 28-29号住居跡実測図

第5章 検出された遺構と遺物



第145図 28・29号住居跡実測図



第146図 29号住居跡竈実測図

山のロームを多く掘り込んで竈が構築されていた。

構造 竈の焚口部は住居内に位置したが、燃焼面の大半から煙道部にかけては壁を掘り込んで住居外に作られていた。袖石は2個検出されたのみであり、基本的には石を多く用いずに、ロームを主として構築された竈である。

規模 左袖方向で約1m、右袖方向で約1.2mであり、燃焼部幅は約50～60cmである。

遺物 竈内より土師器の甕が多数出土している。

29号住居跡 (奈良時代)

遺構写真図版41

概要 28号住居跡により、住居の大部分を掘り取られている。竈や柱穴、土坑、周溝等も全く検出されていない。床面は29号住居跡より約10cm浅く作られていた。床面の確認範囲は狭く凹凸が多く、明確なことは確認できなかった。

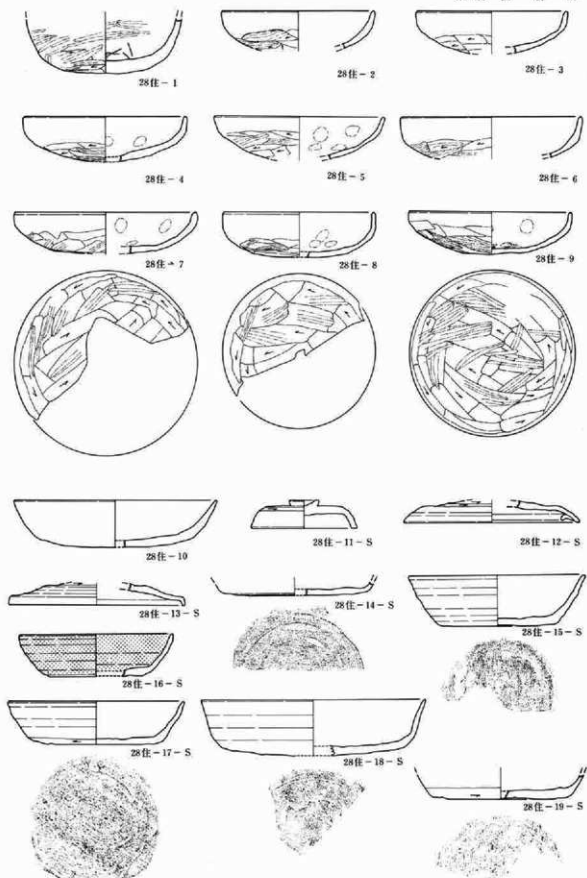
規模 東西方向3.3m、南北方向は北壁が未発掘のため不明、壁高は約35cmであった。

遺物 全く出土していない。

1. 褐色土層 ローム粒子・焼土粒子・黒色粒子の混入土層。
2. 黒色土層 黒色土層を主とし、少量のロームブロック・ローム粒子を含む。
3. 赤褐色土層 焼土粒子を多量に、黒色土・ローム粒子を少量含む。
4. 褐色土層 ロームブロック・ローム粒子の層
5. 赤褐色土層 焼土層・焼土粒子・焼土ブロック 黒色粒子の層。
6. 褐色土層 ローム粒子・焼土粒子の層。
7. 黒褐色土層 黒色土を主とし、多くのロームブロック・ローム粒子の混入土層。少量の焼土粒子を含む。
8. 黒褐色土層 ソフトロームを主体とし、少量の黒色土を含む。

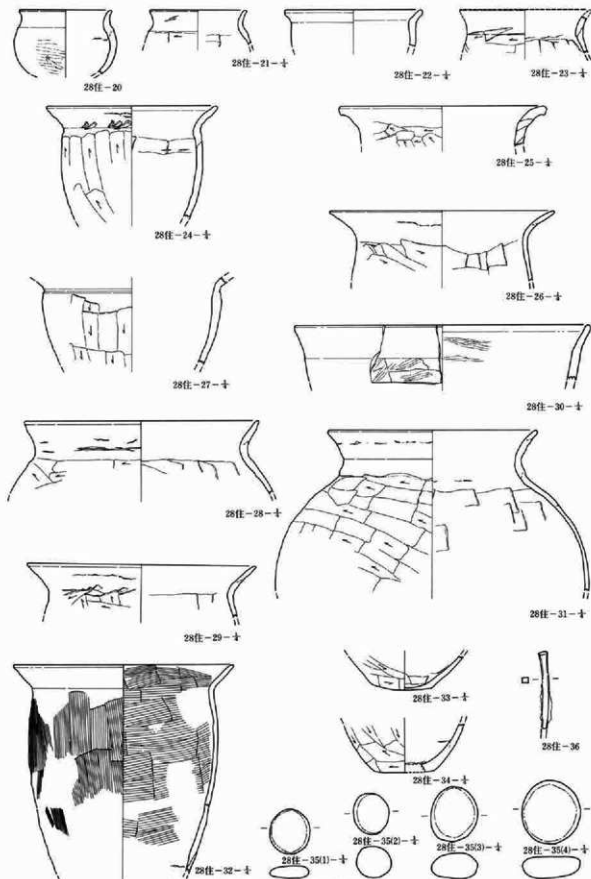


第2節 住居跡



第147图 28号住居跡出土遺物実測图(1)

第5章 検出された遺構と遺物



第148図 28号住居跡出土遺物実測図(2)

28号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号147図 写真図版80・81)

遺構名及び番 号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出 土 位 置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①灰色②焼成③残存④胎土⑤窯考
28住-1	坏 土師器	— — — フク土	器肉の厚い環であり、特に底部が厚い。内外面へラ磨きが行われている。吸灰はなし。	①褐色②酸化③灰④1mm以下の白色粒子を多く、2~3mmの石英少し含む
28住-2	坏 土師器	— (12.0) — 床面	丸底の浅い環であり、口縁部も底部よりの丸味の延長上立ち上がる。口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③灰④1mm以下の白色粒子と黒色粒子を少量含む
28住-3	坏 土師器	— (12.0) — フク土	丸底の環であり、口縁部は外上方に開く体部より直立気味に立ち上がる。口縁部が長い。	①褐色②酸化③灰④1mm以下の白色粒子と2mm前後の砂粒少量含む
28住-4	坏 土師器	— (12.6) — 床面+25、フク土	丸底の環であり、口縁部は外上方に開く体部より直立気味に立ち上がる。口縁部は短い。	①褐色②酸化③灰④1mm以下の白色粒子と黒色粒子を少量含む
28住-5	坏 土師器	— (13.6) — フク土	丸底の環であり、口縁部は短く外上方へ開く。口縁部横ナデ、体部と底部手持へラ削り。	①褐色②酸化③灰④1mm以下の白色粒子と黒色粒子を少量含む
28住-6	坏 土師器	— (14.4) — フク土	丸底の環であり、口縁部は長く全面横ナデ整形。口縁の長きに比較して器高は低い。	①褐色②酸化③灰④1mm以下の白色粒子と黒色粒子を少量含む
28住-7	坏 土師器	— (14.3) — 床面+12	平底に近い丸底の環である。体部は内側しつつ外上方へ開き、口縁部は直立気味に立ち上がる。	①褐色②酸化③灰④1mm以下の白色粒子と黒色粒子を少量含む
28住-8	坏 土師器	— (11.9) — フク土	平底に近い丸底の環である。口縁部が長く直立する。全体に箱形を呈する。	①褐色②酸化③灰④1mm以下の白色粒子と黒色粒子を少量含む
28住-9	坏 土師器	3.4 12.8 — カマド、フク土	丸底を呈する環であり、口縁部は短く直立気味に立ち上がる。口縁部横ナデ、体部へ口縁部手持へラ削り。	①褐色②酸化③ほぼ完全④白色粒子ほとんど含まず、1mm以下の黒色粒子を少量含む
28住-10	坏 土師器	— (16.0) — フク土	平底に近い丸底の環であるが、口縁部は長く直線を外上方へ開く。器形がやや須恵器に似ており異常。	①褐色②酸化③灰④白色粒子ほとんど含まず、赤色粒子少量含む
28住-11	蓋 須恵器	2.3 (8.3) — 床面+18	小形の蓋であり、小形蓋の蓋と思われる。環状のつまみは、上部が平で中央部が凹伏となり、他の環蓋のつまみと異なる。カエリは持たない。	①灰色②還元焼成③灰④1mm以下の白色粒子を多く含む
28住-12	蓋 須恵器	— (13.8) — フク土	カエリを持つ環蓋である。カエリは外から内側へ折り込んでいる。カエリを境に天井部の変化なし。	①灰色②還元焼成③灰④1mm以下の白色粒子を多く含む
28住-13	蓋 須恵器	— (13.8) — フク土	カエリを持たない環蓋であり、端部を下方へ折り曲げている。	①黒褐色②酸化③灰④1mm以下の白色粒子を多く、赤色粒子を少量含む
28住-14	坏 須恵器	— — (11.8)	環の底部であり、底面全面に右回転へラ削り整形痕が残る。	①内面灰色・断面灰白色・外面黒色②還元③灰④1mm以下の白色粒子を含む
28住-15	坏 須恵器	— (13.8) 9.0 床面+23、フク土	器高の高い環であり、平底より体部と口縁部が直線を外上方へ開く。底面右回転へラ削り整形痕ナデ整形。	①灰色②還元焼成③灰④1mm以下の白色粒子を多く含む
28住-16	坏 須恵器	3.3 (12.0) (7.5) 床面+41、フク土	器高の低い小さな環である。底面は手持へラ削り整形と思われる。	①外面黒色・断面灰白色②焼成③灰④1mm以下の白色粒子を多く含む
28住-17	坏 須恵器	3.4 14.0 8.7 床面+55、フク土	口径が大きく器高の低い環である。外側底面は全面回転へラ整形後ナデ整形。内側底面ナデ整形。	①表面灰色・断面灰白色②還元③灰④1mm以下の白色粒子を多く、2~3mmの白色粒子少量含む
28住-18	坏 須恵器	— (17.8) (14.0) 床面+20	口径・底径とも大きな環である。底面に回転へラ削り整形痕を残したままナデ整形。	①灰白色②還元③灰④1mm以下の白色粒子と石英粒子を多く含む

## 第5章 検出された遺構と遺物

28号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第147・148図 写真図版81)

遺構名及び番	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
28住-19	坏須恵器	— (8.2) フク土	底径の大きな坏であり、外側底面にヘラ起こしの痕跡を残したままでナゲ整形。内側底面ナゲ整形。	①灰褐色②還元③㊦④1mm以下の白色粒子を多く含む
28住-20	小形甕土師器	— (7.4) フク土	非常に小形の甕である。丸い体部より短い口縁部がなだらかに外反する。	①黒褐色②還元③㊦④1mm以下の白色粒子を少量含む
28住-21	小形甕土師器	— (10.4) フク土	器内の薄い小形の甕の口縁部である。体部左横方向へハゲ削り、口縁部横ナゲ整形。	①黒褐色②還元③㊦④1mm以下の白色粒子を多く含む
28住-22	小形甕土師器	— (14.0) フク土	器内の厚い小形甕の破片である。やや丸味を持つ体部より、口縁部は外上方へ開く。	①灰褐色②還元③㊦④1mm以下の石英粒子を多く含む
28住-23	小形甕土師器	— — —	器内の薄い小形甕の破片である。口縁部の器内は体部より厚い。体部左横方向のヘラ削り。	①断面と外側褐色・内面黒色②還元③㊦④1mm以下の白色・石英粒子含む
28住-24	甕土師器	— (18.0) 床面+35、フク土	器内の厚い甕であり、体部はやや丸味を持つが、直立気味に立ち上がり、口縁部はくの字状に外反する。	①黒褐色②還元③㊦④1mm以下の石英粒子を多く含む
28住-25	甕土師器	— (21.6) フク土	特に器内の厚い口縁部の小破片である。直立気味の体部より口縁部は大きく外反する。	①褐色②還元③㊦④1mm以下の白色粒子を多く含む
28住-26	甕土師器	— (23.8) カマド内	器内の薄い甕の破片である。丸味を持つ体部より口縁部は大きく外反する。体部は左上方向へハゲ削り。	①褐色②還元③㊦④1mm以下の白色粒子を少量含む
28住-27	甕土師器	— — —	器内が厚く、頸部に沈線を持つ甕であり、体部は底部に向かう直線のヘラ削りであり異質である。	①褐色②還元③㊦④1mm以下の白色粒子を多く、2mm前後の石英少し含む
28住-28	甕土師器	— (24.9) 床面、フク土	器内の薄い丸胴の大きな甕と思われる。口縁部はなだらかに外反している。	①褐色②還元③㊦④1mm以下の白色粒子を少量含む
28住-29	甕土師器	— (24.2) カマド内フク土	器内の薄い甕の破片である。口縁部外側に粘土帯の接合痕が残る。体部は左上方向へハゲ削り。	①褐色②還元③㊦④1mm以下の白色・黒色・石英粒子を多く含む
28住-30	鉢土師器	— (21.8) フク土	鉢の口縁部の破片と思われる。口縁部横ナゲ、体部へハゲ削り後部分的にヘラ磨き。	①黒褐色②還元③㊦④1mm以下の白色粒子を多量に、赤色粒子を少量含む
28住-31	甕土師器	— (22.4) 床面+9、フク土	器内の薄い大きな丸胴の甕である。胴部最大径は33cm前後と大きい。体部は左上方向へハゲ削り。	①褐色②還元③㊦④1mm以下の白色・黒色・石英粒子を多く含む
28住-32	甕土師器	— (23.3) 床面、カマド内フク土	器内の薄い長胴の甕であり、口縁部外側を除く全部面に刷毛目が残る実に特異な甕であり、器内の他地域においてその例を知らない。	①褐色②還元③㊦④2mm前後の白色・赤色・石英粒子を多く含む特異な胎土である
28住-33	甕土師器	— — 6.5 フク土	器内の薄い甕の体部下半～底部の破片である。底面もヘラ削りで整形されている。	①褐色②還元③㊦④1mm以下の黒色粒子を多く含む
28住-34	甕土師器	— — 6.3 フク土	器内の厚い甕の体部下半～底部の破片である。底部もヘラ削りで整形されている。	①褐色②還元③㊦④1mm以下の白色粒子を多く、赤色粒子を少量含む
28住-35(1)	丸石	横-4.2 重量40g	表面が磨耗している。円盤状の石である。	①薄褐色②尖形③実質岩④フク土
28住-35(2)	丸石	横-3.8 重量80g	表面が磨耗している。楕圓形の石である。	①薄褐色②尖形④石英⑤緑褐色⑥フク土
28住-35(3)	丸石	横-5.0 重量90g	表面が磨耗している。不定形で片側が厚い。	①灰白色②尖形③実質岩④フク土
28住-25(4)	丸石	横-6.2 重量150g	表面が磨耗している。大きな円盤状の石である。	①薄褐色②尖形③実質岩④石⑤胎土
28住-36	鉄器	全長-6 中程の幅-0.5 フク土	棒状鉄器で、両端部は旧時のままである。太い端部の頭はめくれ取り状となる。断面は方形錆化は極目気味。	

## 30号住居跡 (奈良時代) 遺物写真図版42 遺物写真図版81・82

位置 28・29号住居跡の南約8mに位置し、L-32・33、M-32・33グリットに属する。

概要 住居の掘り込みの浅い4本柱の住居跡であり、規模は小さく、竈の残りも悪い。

構造 床面はロームブロックと黒褐色土の混入土よりできていた。その面が2面検出され、いずれの床面とも踏み固められていた。柱穴は4個検出され、上下床面とも共通位置であった。周溝は竈手前以外全面に認められた。竈右側手前に小土坑があるが浅すぎるため貯蔵穴ではないものと思われる。

規模 東西方向で4.6m、南北方向で4.6mでほぼ正方形を呈しており、壁高は上の床面まで約18cm、下の床面まで約21cmであった。周溝幅は12cm～15cmで深さは3～4cmと浅い。柱穴1は直径20cm、深さ40cmで柱穴2は直径25cm、深さ55cm、柱穴3は直径40cm、深さ50cm、柱穴4は直径40cm、深さ50cmであった。下の床面調査時にて4本柱のほぼ中央に長軸1.1m、短軸90cm、深さ40cmの床下土坑が検出された。

遺物 床面や覆土中より土師環・甕、須恵器環等が出土した。

床下 床下調査により竈手前に小穴が検出された。

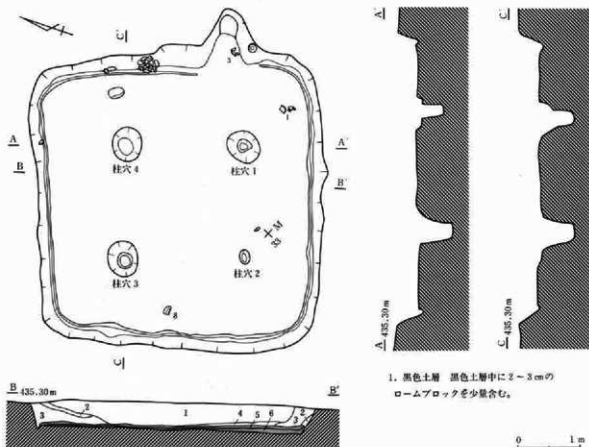
## 30号住居跡竈

位置 住居東壁南寄りに、地山のロームを多く掘り込んで竈が構築されていた。

概要 竈構築材と思われる石は全く出土していないため、ロームを用いて作られた竈である。燃焼部の多くは東壁を掘り込んで作られており、住居外に竈の多くが作られている竈である。

規模 煙道方向で約1.1m、両袖方向で約90cm、燃焼部幅は約50cmであった。

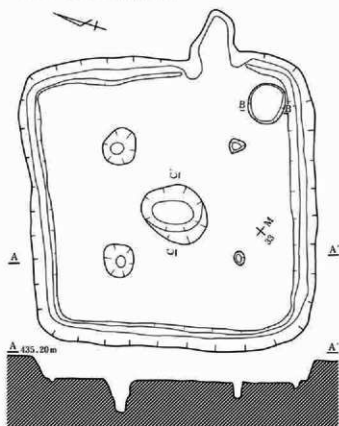
遺物 全く出土していない。



1. 黒色土層 黒色土層中に2～3cmのロームブロックを少量含む。

第149図 30号住居跡実測図

第5章 検出された遺構と遺物

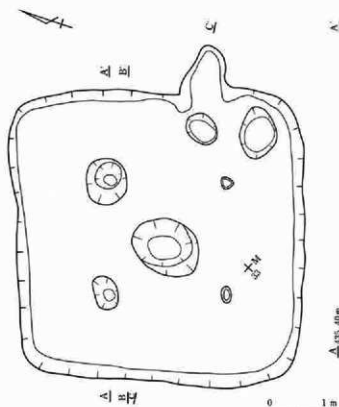


第150図 30号住居跡中間床面実測図

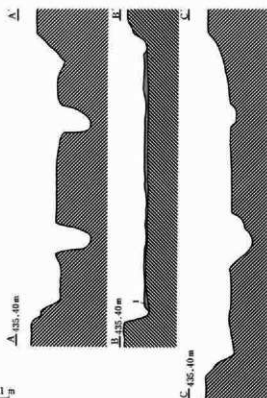
1. 暗褐色土層 黒色土中にローム粒子を多く、白色軽石粒を少量含む。
2. 黄褐色土層 黒色土中に多量のロームブロック・ローム粒子を含む。
3. 黒褐色土層 黒色土中にローム粒子を少量含む。
4. 暗褐色土層 黒色土中にローム粒子・炭の破片を少量含む。
5. 黄褐色土層 ロームを主とした床面、踏み固められている。
6. 黒褐色土層 黒色土を主とし、ローム粒子を少量含む粘性のある土層。
7. 黒褐色土層 黒色土中に多くのローム粒子・ロームブロックを含む。表面は固い。
8. 褐色土層 ロームブロック・ローム粒子の層。

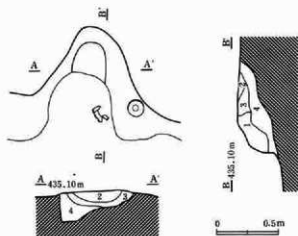


0 1m

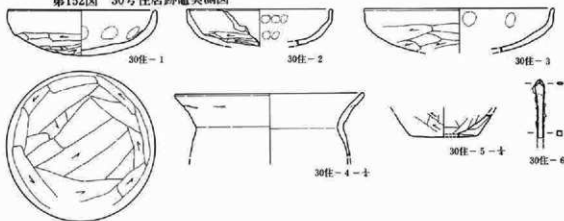


第151図 30号住居跡床下実測図





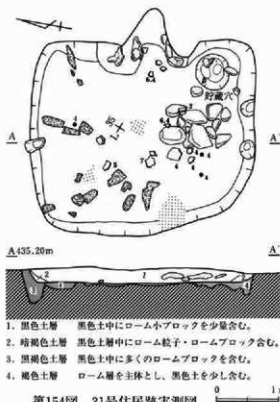
第152図 30号住居跡電気測図



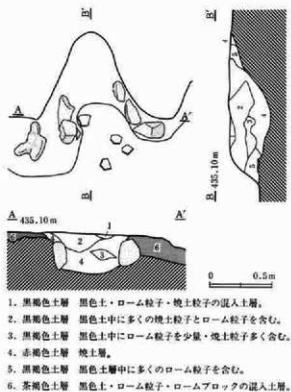
第153図 30号住居跡出土遺物実測図

30号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第153図 写真図版81・82)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②酸化③残存④粘土⑤備考
30住-1	环土師器	3.6 11.8 — フク土	丸底の环であり、器内が厚い。口縁部は短く直立気味に立ち上がる。内面に指頭圧痕、口縁部上半横ナゲ、下半指整形。体部一底部手持へく削り。	①褐色②酸化③ほぼ実形④1mm以下の黒色粒子・石英粒子・白色粒子を少量含む
30住-2	环土師器	— (11.5) — フク土	平底に近い丸底の环である。体部は外上方に開き、口縁部は直立気味に立ち上がり短い。口縁部横ナゲ。	①褐色②酸化③④⑤1mm以下の白色粒子・赤色粒子を少量含む
30住-3	环土師器	5.5 (12.8) 5.7 フク土	丸底の环であり、口縁部は直立する。口縁部横ナゲ、体部と底部外面の表面は剝離して凸凹状を呈する。	①褐色②酸化③④⑤1mm以下の黒色粒子と石英粒子を少量含む
30住-4	甕土師器	— (20.0) — フク土	器内の薄い甕であり、口縁部外面中央に粘土接合痕あり、外側体部の器面は荒れている。	①褐色②酸化③④⑤1mm以下の白色粒子と石英粒子を少量含む
30住-5	甕土師器	— — (6.6) フク土	器内の薄い甕の体部下半～底部の破片である。底部中央は特に薄くなっている。	①褐色②酸化③④⑤1mm以下の黒色粒子を少量含む
30住-6	鉄線	全長—6.1 幅—0.7 莖部の幅重—0.4	剣先形の鉄線で線先から莖部にかけての破片である。莖部端部は調査時の欠損である。莖部の断面は方形である。錆化は径目状でなく板目状に見える。⑤フク土	



第154図 31号住居跡実測図



第155図 31号住居跡竈実測図

31号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版43

遺物写真図版82

位置 30号住居跡東約6mに位置し、K-34・35、L-34・35グリッドに属する。

概要 遺構の残存が良好でなく、他の住居跡のように明確な方で検出することができなかった。住居の床面上には、多くの炭化物が検出された。

構造 床面はロームを主とし、多くの黒褐色土が混入していた。柱穴、周溝は検出されず、竈南側の住居東南の端に貯蔵穴が検出された。

規模 東西方向で3m、南北方向で3.6mで、南北方向に長い平面形を呈している。壁高は25cm～28cmで浅い。貯蔵穴は直径約53cmのほぼ円形を呈し深さは50cm前後である。

遺物 床面上や覆土中より須恵器の坏や底部に胸の付く脚付羽釜等が出土した。

床下 床面調査後床下の調査を実施した、その結果床面中央と床面北東寄りに浅い土坑が検出された。

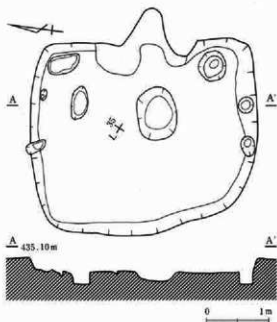
31号住居跡竈

位置 住居東壁の多くを掘り込んで構築されている。

構造 石を袖の芯に用いて、ローム被覆している。

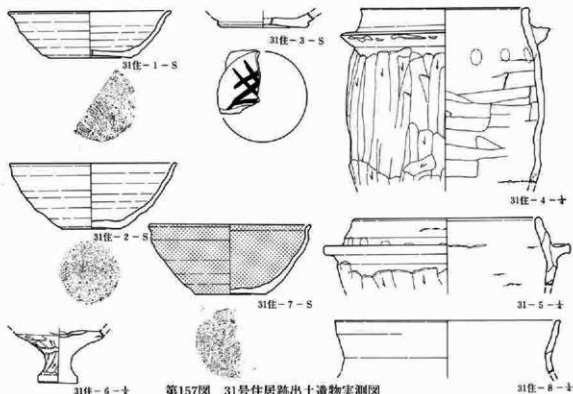
規模 煙道方向で1.1m、両袖方向で約1.3mである。

遺物 竈内より出土していない。



第156図 31号住居跡床下実測図

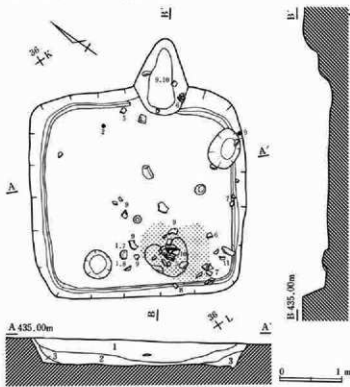




第157図 31号住居跡出土遺物実測図

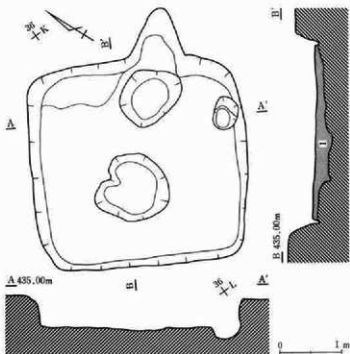
31号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第157図 写真図版82)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(m) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①黒色②焼成③残存④胎土⑤備考
31住-1	環須恵器	3.7 (13.0) 6.6 フク土	底径の小さな環であり、体部はやや内彎しつつ外上方へ開き、口縁部は外反する。底部右回転未切痕。	①口縁部の一部と断面灰白色・他の表面黒色②焼成③④⑤白色粒子多く含む
31住-2	埴須恵器	5.2 13.2 4.8 フク土	底径がきわめて小さく、器高の高い埴である。体部はやや内彎しつつ外上方へ開き、口縁部やや外反。	①灰白色で一部黒色②還元③ほぼ実形④1mm以下白色粒子と2mm前後石英
31住-3	環須恵器	— — (6.6) フク土	未切を持つ底部破片で、底部端と体部下端の境に段を持つ。底面に墨書あり、判読は不明。	①灰白色②還元③④⑤1mm以下の白色粒子と2mm前後の石英粒子多く含む
31住-4	羽釜	— 17.8 — 床面、フク土	脚付羽釜と思われる。胴は太く大きく断面三角形を呈する。口唇部は平やや内傾する。体部外側は底部に向かうへら削りで、他の多くの月夜野型羽釜と違である。この特色は脚付羽釜と一致する。	①灰白色②酸化③④⑤1mm以下の白色粒子と2-3mmの赤色粒子を多く含む石英粒子はほとんど観察できない
31住-5	羽釜	— (19.2) — フク土	脚付羽釜と思われる。胴は細く先端の幅がやや広い。口唇部が丸く、体部外側は底部に向かうへら削り。	①灰白色②還元焼成③④⑤1mm以下の白色粒子と1-3mmの石英粒子多く含む
31住-6	羽釜	— — 3.9 フク土	脚付羽釜の脚部である。羽釜の底部を作った後に太く短い脚を付けている。脚の先端は細くなり、脚底部は平、羽釜の内側底部は渦巻状の凹凸となる。	①灰白色②還元③④⑤1mm以下の白色粒子と1-3mmの石英粒子を多く含む
31住-7	埴須恵器	— 15.5 — フク土	底径の小さな環であり、器高が高い。口縁部は一度直に立ち上がりすぐに外反する。底部右回転未切痕。	①黒色②焼成③④⑤1mm以下の白色粒子と石英粒子を多く含む
31住-8	壺土師器	— (23.8) — フク土	土師器の壺と思われるが、口唇部が平である。このような土師器は他に認められないため特異である。残存部分はすべて横ナデ整形でへら削りなし。	①褐色②酸化③④⑤1mm以下の白色粒子を多く、石英粒子を少し含む



1. 黒褐色土層 黒色土層中に2cm内外のロームブロックと白色鉱物粒子含む。
2. 暗褐色土層 黒色土層中に少量のローム粒子を含む。
3. 黒色土層 黒色土を主とし、ごく少量のローム粒子を含む。

第158図 32号住居跡実測図



1. 黒色土層 床面下のロームブロック・ローム粒子の層、上面は固い。

第159図 32号住居跡床下実測図

### 32号住居跡 (奈良時代)

遺構写真図版44 遺物写真図版82・83  
 位置 31号住居跡の東約1.5mに近接して位置し、K-35・36グリットに属する。

概要 奈良時代の住居跡としては、規模の小さい一群に属する。住居の掘り込みは深く、竈の残りも比較的良好であった。竈を持つ住居跡であるが、他に竈の反対側の床面上に、焼土が住居中央の東側に向かい馬蹄形を呈するが跡が検出された。如の中央付近より土師器の甕が検出された。このように焼土が厚く馬蹄形を呈して堆積するが、天井部は持たないとしても奥壁や側壁を持つ構造が考えられ、このような例は、当遺跡において38号住居跡で検出されており、焼土の中より多くの土師器の甕が出土している。焼土は竈の周辺に多く散布していた。

構造 床面はロームを主とし、多くのロームブロックと黒褐色土の混入層よりできていた。柱穴は掘られてなく、周溝はほぼ全面に確認でき貯蔵穴は検出できなかった。床面南壁東側に小土坑が、西壁北寄りの床面に浅い小土坑が検出された。壁は比較的良好に残存していた。

規模 東西方向で3.3m、南北方向で3.44mで南北方向に長い長方形を呈していた。壁高は45cm前後である。周溝幅は25～35cmで深さは5cm前後である。床面南壁東側の土坑は直径1m前後、深さ約0.3mである。

遺物 床面や覆土中より土師器環・甕、

第2節 住 居 跡

須恵器環・坏蓋等が出土した。

床下 床面調査後床面の黒褐色土を20～60cmほど取り除いた。その結果多くの凹凸面が検出された。竈手前に幅90cm、深さ6cmの土坑、床面中央に幅1.2m深さ20cmの土坑が検出された。

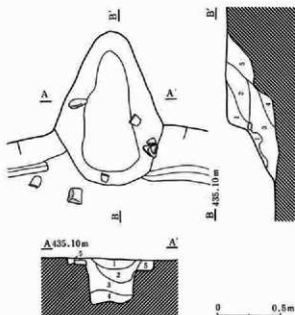
32号住居跡竈

位置 住居東壁のほぼ中央や南寄りに、地山の黒褐色土、ロームを掘り込んで竈が構築されていた。

構造 竈の焚口部は住居内に位置するが、燃焼部の大部分と煙道部は壁の位置から外側にかけたの部分に作られている。竈袖に石はほとんど用いていない。ロームを主として構築したと思われる。

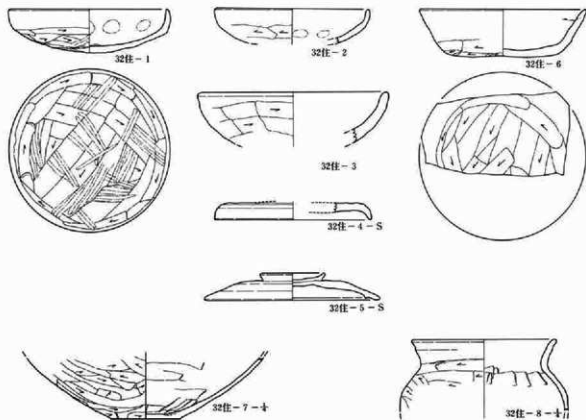
規模 煙道方向で1.2m、両袖方向で80cm、燃焼部幅約50cmであった。

遺物 土師器の坏と甕が出土している。



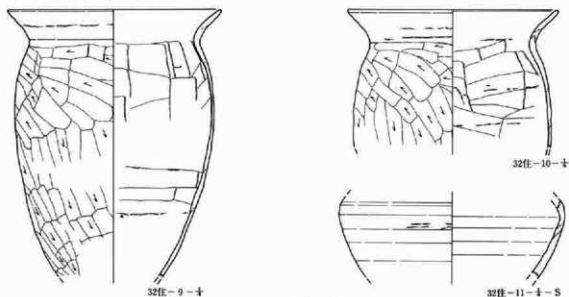
1. 暗褐色土層 黒色土層中に少量のローム粒子和焼土を含む。
2. 黄褐色土層 ロームを大量に含んだ層。焼土粒子和含む。
3. 赤褐色土層 ロームが焼けて焼土となった層。黒色土と混入。
4. 黒褐色土層 黒色土中に1cm内外のロームブロックを混入。
5. 黒色土層 地山の黒色土に近い層。少量の焼土粒子和含む。

第160図 32号住居跡竈実測図



第161図 32号住居跡出土遺物実測図

第5章 検出された遺構と遺物



第162図 32号住居跡出土遺物実測図

32号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第161・162図 写真図版82・83)

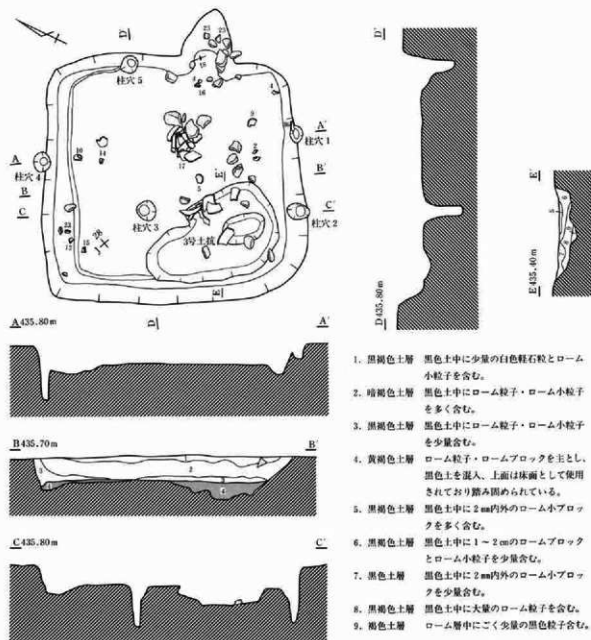
遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部成形等の特色	①色調②焼成③残存④出土⑤備考
32住-1	環土師器	3.4 12.4 床面、フク土	丸底の浅い環であり、口縁部が長く直立する。口縁部横ナデ、底部ヘラ削り。内面はていねいな横ナデ。	①褐色②酸化③ほぼ完形④1mm以下の白色粒子ほとんど含まず
32住-2	環土師器	— (12.2) フク土	丸底の浅い環であり、口縁部は短く直立する。口縁部横ナデ、体部-底部ヘラ削り。	①褐色②酸化③④1mm以下の黒色粒子と砂粒を少し含む、白色粒子少量含む
32住-3	埴土師器	— (15.2) カマド、フク土	器内の厚い丸底の環である。1と2の環とは色調や胎土も異なる。内面はていねいな横ナデ。	①外面と断面褐色、内面黒褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を多く含む
32住-4	蓋須恵器	— (12.4) フク土	短頸蓋の蓋と思われる。天井部は平で端部を下方に折り曲げている。天井部全面口右回転ヘラ削り内側回転ナデ整形。	①灰色②還元焼成③④1mm以下の白色粒子を多く含む
32住-5	蓋須恵器	— (14.0) フク土	環状のつまみを持つ環蓋である。カネリはつまみ出して作られており細く低い。天井部降灰による灰積。	①灰色②還元焼成③④1mm以下の白色粒子を多く含む
32住-6	環須恵器	3.8 (13.2) (8.7) 床面	体部はほぼ直線に外上方へ開く、口縁部に外反はなし。底部手持ヘラ削り、内側はていねいな回転ナデ。	①灰色②還元焼成③④1mm以下の白色粒子と2-3mmの石灰粒子多く含む
32住-7	甕土師器	— (7.2) 床面、フク土	丸い胴部を持つ大きな甕である。体部外側ヘラ削り、内側ナデ整形、底部ヘラ削り。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を少量含む
32住-8	甕土師器	— (15.2) フク土、カマド	丸い胴部を持つ甕である。口縁部はくの字状に外反する。肩部左横方向ヘラ削り。	①黒褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子わずかに含む
32住-9	甕土師器	— 22.5 床面、フク土	器内の薄い長胴の甕である。口縁部のみ器内がやや厚い。肩部は左横方向ヘラ削り、胴中央より下は右下方ヘラ削り。内面ナデ整形。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を少量含む
32住-10	甕土師器	— 22.2 ヘッパイ内	器内の薄い長胴の甕である。肩部は左横方向ヘラ削り、胴中央より下は右下方ヘラ削り。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子と黒色粒子を少量含む
32住-11	蓋須恵器	— — フク土	蓋の破片かと思われるが、詳しくは不明。器内外面横ナデ整形。	①灰白色②還元③割片④1mm以下の白色粒子を多く含む

## 33号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版45 遺物写真図版83・84

位置 24・26号住居跡の東約12mに位置し、I-27・28、J-27・28グリットに属する。

概要 調査時点において使用されていた農道を移動して、その下を調査した結果検出された住居跡である。住居の掘り込みは比較的深いが、竈の残りは良好ではなかった。平安時代に属する住居跡であるが3・5・7号住居跡同様に柱跡を持つ。しかし柱穴の位置が従来と異なっており異質である。

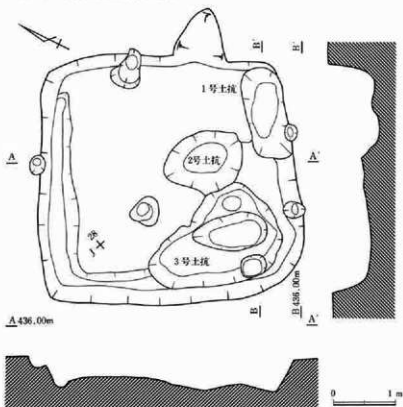
構造 床面はロームを主とし、少量の黒褐色土よりできていた。床面南西端部に大きな3号土坑が検出された。柱穴は南壁を掘り込むように1、2号柱穴の2個が検出され、その中で西側の柱穴2は深いが柱穴1は浅い。床面中央やや北西側に柱穴3、北壁と東北の東壁に柱穴4、5を持つ。周溝は住居北壁全面と東壁の北側と西壁の北側に検出された。しかし検出されなかった南側の部分においては、土坑等が多く掘られていたため検出できなかったが、存在していた可能性は高い。



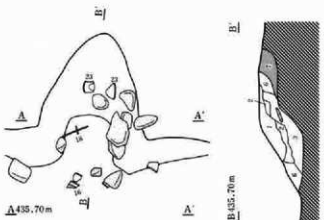
第163図 33号住居跡実測図

0 1m

第5章 検出された遺構と遺物



第164図 33号住居跡床下実測図



1. 黒褐色土層 黒色土中に多くのローム粒子を含む。
2. 褐色土層 ロームを中心とした土層。少量の焼土粒子を含む。
3. 焼土層
4. 黒色土層 黒色土層中に少量のローム粒子を含む。
5. 褐色土層 ロームを中心とし、少量の黒色土を含む。
6. 赤褐色土層 黒色土を中心とし、少量の焼土をほぼ均一に含む。
7. 黒色土層 地山の土層。

第165図 33号住居跡竈実測図

貯蔵穴については、竈右側手前に1号土坑が検出され、これが貯蔵穴に相当する可能性はあるが不明である。壁は南壁の2柱穴間がやや内側に斜めになっており、7号住居跡と同じ傾向を示しており、出入口部分が想定される。

規模 東西方向で3.95m、南北方向で4.2m。柱穴1の直径30~40cm、深さは遺構確認面より20cm。柱穴2の直径25~35cm、深さは床面より60cm。柱穴3の直径35cm、深さは床面より60cm。柱穴4の直径30cm、深さは床面より50cm。柱穴5の直径25cm、

深さは床面より50cm、周溝幅は35~45cm、深さは8~10cm、壁高は30~40cmであった。

遺物 床面や覆土中より須恵器坏・埴、羽釜、甌、土師器の甕等出土。

床下 床面調査後床面表土を除去し、床下調査を行なう。その結果1、2号土坑を確認。

33号住居跡竈

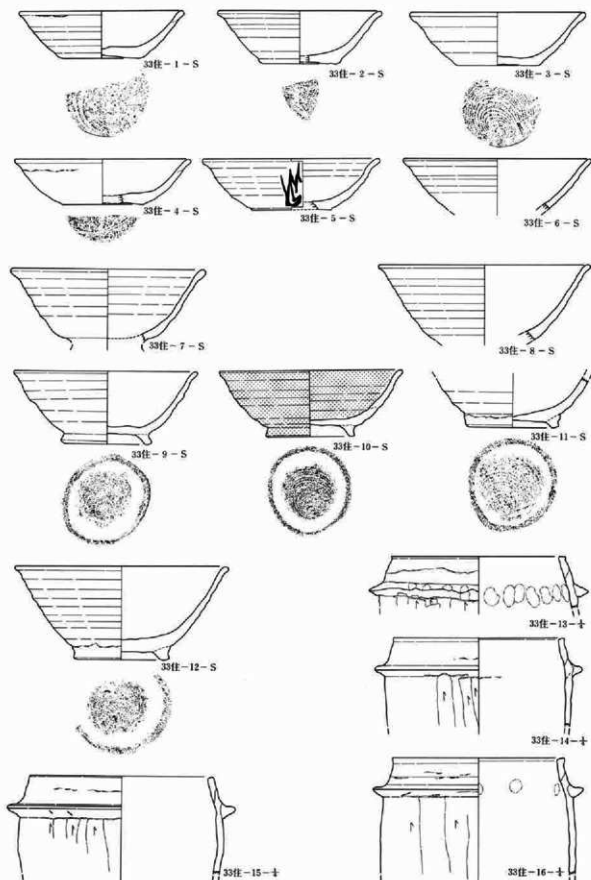
位置 住居東壁やや南寄りに地山のロームを多く掘り込んで構築されていた。

構造 竈内袖石部を中心として多くの石が検出された。しかし組み合わせられた個所は少なかった。石を主とし、ロームを用いて作られた竈と思われる。焚口は住居内であるが、煙道部は住居外に位置する。

規模 煙道方向で約1.1m、両袖方向で約0.9m、焼部幅0.4mであった。

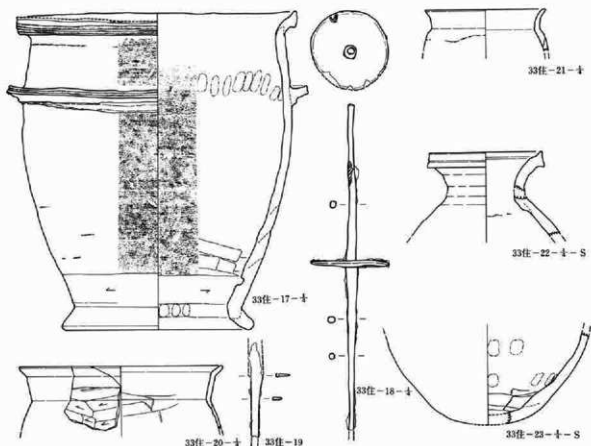
遺物 鉄製紡錘車が出土した。

第2節 住居跡



第166図 33号住居跡出土遺物実測図(1)

第5章 検出された遺構と遺物



第167図 33号住居跡出土遺物実測図(2)

33号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第166図 写真図版83)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②地成③残存④胎土⑤備考
33住-1	環須恵器	3.7 12.8 6.2 床面+12	平底の底部より体部は直線的に外上方へ開く、口縁部は外反せず。底部に右回転糸切痕が残るが磨耗している。直線を基準とした環である。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を多く、2mm前後の石英粒子を少量含む
33住-2	環須恵器	4.2 (12.8) (5.8) 床面+7	平底のやや厚い底部より、体部はやや曲線を帯びて外上方へ開く、口縁部が弱く外反する。体部下端と底部端との境に段を持つ。底面に右回転糸切痕。	①表面黒色・断面と底部灰白色②還元③④1mm以下の白色粒子と2mm前後の石英粒子を多く含む
33住-3	環須恵器	4.2 (13.7) 6.5 フク土	平底の底部より体部は外上方へ開く、口縁部はやや外反し、口縁端部にやや丸味を持つ。底面右回転糸切痕。直線を基準とした環である。	①灰白色・底面のみ黒色②還元③④1mm以下の白色粒子を多く、2mm前後の石英少し含む
33住-4	環須恵器	3.4 (13.4) (6.5) 床面+3	平底のやや厚い底部より、体部はやや曲線を帯びて外上方へ開き、口縁部はゆるやかに外反する。	①灰褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を多く、2mm前後の石英少し含む
33住-5	環須恵器	4.0 (14.2) (6.4) 床面	体部は内彎しつつ外上方へ開き、口縁部は大きく外反する。体部外側に墨書あり、判読はできなかった。	①黒褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を多く、2mm前後の石英少し含む
33住-6	環須恵器	— (15.0) — フク土	体部は内彎しつつ外上方へ開き、口縁部は少し外反する。内外面横ナデ。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子と1mm前後の石英粒子を多く含む
33住-7	施須恵器	— (15.2) — フク土	小さな底径の底部より体部は内彎しつつ外上方へ開く、口縁部は玉縁状を呈す。高台を持つ。	①灰褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子と石英粒子を多く含む



33号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第166・167図 写真図版83・84)

遺構名及び番	器形及び器種	器高・口径・底径 (cm)	出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
33住-8	埴須恵器	—	(16.5) フク土	体部はほぼ直線に外上方へ開き、口縁部はなだらかに外反する。深い埴である。	①灰褐色②酸化③④⑤ 1mm以下の白色粒子と石英粒子を多く含む
33住-9	埴須恵器	5.7 14.4 6.7	床面+16	平な底部より体部は少し内彎しつつ外上方へ開く、口縁部が少し外反。高台部は断面が方形で腹付部分はやや丸い。高台部内側に右回転糸切痕が残る。	①外側黒褐色・内側灰褐色②酸化③④⑤ 1mm以下の白色粒子と2mm前後の石英粒子を多く含む
33住-10	埴須恵器	5.2 14.5 7.0	床面+13、フク土	平な底部より体部は少し内彎しつつ外上方へ開く、口縁部は少し外反する。高台部は断面がほぼ方形であり、高台部内側に右回転糸切痕が残る。	①外面黒色・断面灰色②還元焼成③④⑤ 1mm以下の白色粒子を多く、2mm前後の石英粒子少量含む
33住-11	埴須恵器	—	(12.0) フク土	底部中央が薄く、底部端と体部の器厚が厚い。高台は断面三角形に近く、踵に環状部が付いている。	①灰白色②還元③④⑤ 1mm以下の白色粒子と2mm前後の石英粒子を多く含む
33住-12	埴須恵器	7.3 (16.7) 7.5	床面+3、フク土	口径が大きく深い埴である。器内の厚い底部より口縁部はほぼ直線に外上方へ開き、口縁端部がやや外反する。高台は断面方形を呈し、高台部内側糸切痕。	①黒褐色②酸化③④⑤ 1mm以下の白色粒子と石英粒子を多く含む
33住-13	羽釜	—	(18.3) 床面+26	体部から口縁部は内彎し、口唇部は平である。踵は断面三角形。整形は体部より踵に向かうへう削り。	①灰色②還元焼成③④⑤ 1mm以下の白色粒子と2mm前後の石英粒子を多く含む
33住-14	羽釜	—	(18.0) 床面+25、フク土	直立気味の体部より、踵部を経過して口縁部は内彎する。口唇部は平で中央に凹状の沈線が走る。踵に向かうへう削りで、へうの一部が踵下端まで延びる。	①灰白色②還元③④⑤ 1mm以下の白色粒子と2mm前後の石英粒子を多く含む
33住-15	羽釜	—	(19.2) 床面+25、フク土	体部から内彎しつつ口縁部に至る。口唇部は平でやや内彎。体部より踵に向かうへう削り。	①灰白色②還元③④⑤ 1mm以下の白色粒子と2mm前後の石英粒子を多く含む
33住-16	羽釜	—	(18.0) 床面+4、フク土	直立気味の体部より、踵部を境に口縁部は内彎する。口唇部は平でやや太くなる。踵に向かうへう削り。	①灰白色②還元③④⑤ 1mm以下の白色粒子と2mm前後の石英粒子を多く含む
33住-17	瓶須恵器	33.5 29.8 19.6	床面+25	大形の瓶であり、全面ナデ整形でへう削りは全くなし。底部は端を外側へ折り曲げ、底部はもたない。底部に近い体部下の片側に3個所の穴を持ち反対側は1個の穴しか残存していないが、3個あったと考えられ、平行した3本の棒が想定できる。	①灰白色②還元③④⑤ 1mm以下の白色粒子と、2mm前後の石英粒子を大量に含む。③このような瓶は当遺跡内において唯一の出土例である。
33住-18	鉄輪車鉄器	全長-25.5 円盤部径-6.3 フク土		鉄製輪車である。輪棒の中心に径6.3cmの鉄製円盤が取り付け付く。輪の断面は円形で、一端は本来の端部である。輪の一端に未成の平糸が巻付られ、終端工程の一端が加れる。錆化状態は、輪部では柘目状の錆化は見られず、円盤部分も同様で、柘目状である。遺存度は良好である。	
33住-19	刀子鉄器	全長-7.4 最大の重む-0.3		刀子片で重、物打から上方を欠損、欠損は調査時である。遺存が悪く全体に不明瞭である。錆化は柘目状でない。	
33住-20	壺土師器	—	(21.6) 床下フク土	器内の薄いコの字状口縁の裏である。内側でもコの字状の状態が良く認識できる。肩部左横方向削り。	①褐色②酸化③④⑤ 1mm以下の白色粒子をごく少量含む
33住-21	小形壺土師器	—	(12.7) フク土	器内のやや厚い小形の壺であり、口縁部がコの字状を呈している。肩部にへう削りなく横ナデ整形。	①黒褐色②酸化③④⑤ 1mm以下の白色粒子と1mm前後の石英粒子を多く含む
33住-22	壺須恵器	—	(12.0) フク土	壺の頸部~口縁部の破片である。口縁部は幅広く中央部に一条の沈線が走る。	①灰褐色②酸化③④⑤ 1mm以下の白色粒子と石英粒子を多く含む
33住-23	壺須恵器	—	床面+26、カマド内	壺の頸部~底部にかけての破片であり、22と同一製品の可能性大。内外面横ナデ整形。底部刷毛整形。	①褐色②酸化③④⑤ 1mm以下の白色粒子と石英粒子を多く含む

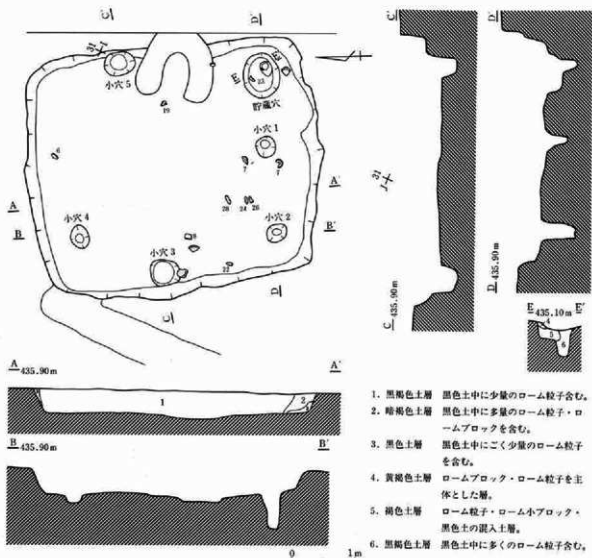
34号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版46 遺物写真図版84

位置 33号住居跡の東約8mに位置し、I-30、J-30・31グリットに属する。

概要 現耕作面から住居跡確認面までの土の堆積が浅いが、住居の掘り込みが深いため残りは良好であった。住居西側に西壁の一部を切っている溝が検出された。この溝は平面、土層、土質調査の結果住居跡より新しく最近掘られたものと判明した。竈煙道部の一部は調査区域外に延びているため調査できなかった。奈良時代に属する住居跡としては、規模が小さく4本柱を持たず出土遺物も少ない。

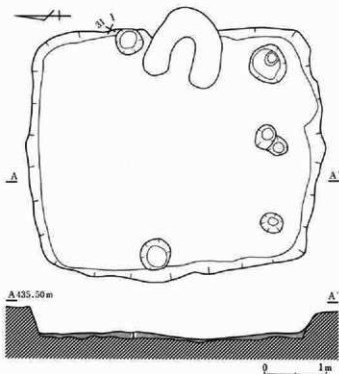
構造 床面は地山のロームを用いており、表面に黒色土、黒褐色土の混入が認められた。全般に固い床面となっていた。床面には小穴が検出されたが南側の2つの小穴は深さ配置等よりみて柱穴の可能性が高いが他の3小穴は浅く配置も不定形であるため柱穴としては疑問である。周溝は壁の下にそれらしき痕跡を留めていた部分が、北壁部から東壁竈北部分で認められたが、明確に検出できなかった。竈右側手前に貯蔵穴と思われる小穴が検出され、中より石が出土した。壁は浅く四壁ともやや斜めであるが、直立気味に立ち上がり、ほぼ同一傾向を示した。

規模 東西方向で3.9m、南北方向で4.5m、他の住居跡同様に南北方向に長い長方形を呈している。壁高は



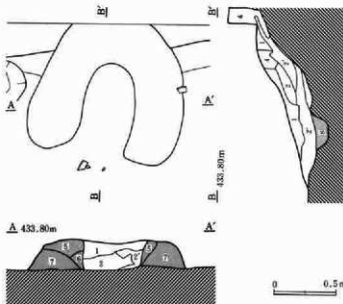
第168図 34号住居跡実測図

## 第2節 住居跡



1. 黄褐色土層 ロームブロック・ローム粒子を主とし黒色土を少量含む。

第169図 34号住居跡床下実測図



1. 黄褐色土層 ロームを主体として、わずかに黒色粒子を含む。 2. 赤褐色土層 ロームを主体とし、焼土化している。少量の炭を含む。 2'. 赤褐色土層 2層に近いが、焼土粒子の量がやや少ない。 2''. 赤褐色土層 焼土層、固く焼けている。 3. 赤褐色土層 上部は焼土層、下部はローム層。 4. 赤褐色土層 ローム層、焼土粒子・黒褐色土の混入土層。 5. 黒褐色土層 焼土粒子・ローム粒子・黒色土の混入土層。 6. 赤褐色土層 ローム粒子・焼土粒子の混入土層。 7. 褐色土層 ロームブロック・ローム粒子・黒色土の混入土層。 8. 黒色土層 黒色土を主とし中に少量のローム粒子を含む。

第170図 34号住居跡竈実測図

40cm前後で比較的残りが良い。柱穴の可能性のある2小穴のうちで東側の小穴1は直径40cm、深さ30cm、西側の小穴2は直径30cm、深さ50cmであった。貯蔵穴は長軸で70cm、短軸で60cm、深さ20cmであり貯蔵穴中央の小穴は深さ40cmであった。小穴3は直径50cm、深さ30cm、小穴4は直径30cm、深さ15cm、小穴5は直径50cm、深さ30cm。

遺物 床面や覆土中より土師器環・斐、須恵器環・環蓋等と破片が出土。

床下 床面調査後、床面下の構造及び床面調査時で検出できなかった遺物検出のため、床面の黒色土、黒褐色土を取り除き、床下調査を実施した。その結果小穴1に接して新たな小穴が1つ検出された。

### 34号住居跡竈

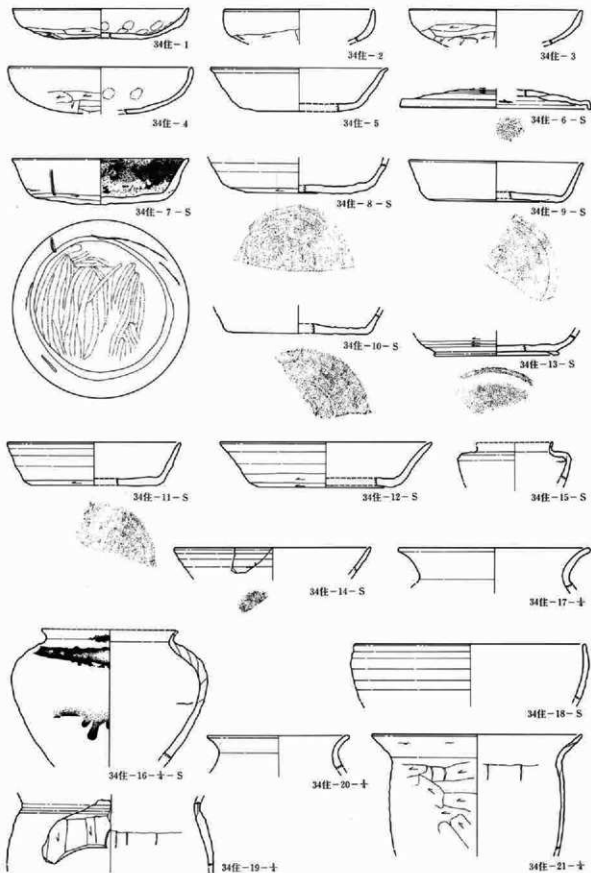
位置 住居東壁ほぼ中央に、地山の黒褐色土、ロームを多く掘り込んで竈が構築されていた。

構造 竈は、住居規模と比較すると大きく、大量のローム、焼土粒子よりできていた。焚口部と燃焼部の大部分は住居内に位置し、燃焼部の一部と煙道部が住居外に位置していた。竈内より大きな石は検出されないため、ロームと黒褐色土を主として構築された竈と思われる。

規模 煙道方向では、煙道部の先端が調査区域外のため調査できなかったため不明。現状で1m、両袖方向で1.2m。

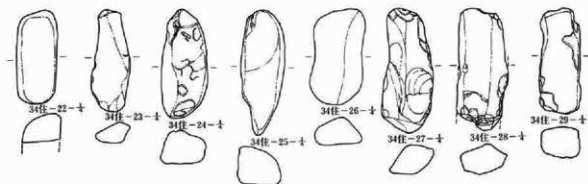
遺物 焚口部付近より土師器斐の頸部破片が、竈石上部に土師の斐の破片が出土している。

第5章 検出された遺構と遺物



第171図 34号住居跡出土遺物実測図(1)

## 第2節 住 居 跡



第172図 34号住居跡出土遺物実測図(2)

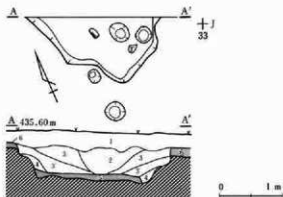
34号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第171図 写真図版84)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(mm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①褐色②酸化③灰④白色粒子ほとんど含まず、黒色粒子を少量含む
34住-1	環土師器	2.4 (14.0) — フク土	ほぼ平底で皿に近い環である。口縁部は外上方へ立ち上がり、内外面横ナデ、体部へ底部へ削り。	①褐色②酸化③灰④白色粒子ほとんど含まず、黒色粒子を少量含む
34住-2	環土師器	— (12.0) — フク土	浅く皿に近い環であり、口縁部はほぼ直立する。口縁部上半は強い横ナデ、下半は指整形。	①褐色②酸化③灰④白色粒子ほとんど含まず、黒色粒子を少量含む
34住-3	環土師器	— (13.8) — フク土	浅い丸底の環である。口縁部は外上方へ立ち上がる。口縁部横ナデ、体部へ底部へ削り。	①褐色②酸化③灰④白色粒子ほとんど含まず、黒色粒子を少量含む
34住-4	環土師器	— (14.6) — フク土	やや深味を持つ丸底の環である。口縁部上半横ナデ、下半指整形。底部へ削り。	①褐色②酸化③灰④白色粒子ほとんど含まず、黒色粒子を少量含む
34住-5	環土師器	3.4 (14.1) — フク土	ほぼ平底を呈する環であり、体部は直線的に外上方へ開く。口縁部がやや外反する。特異な環である。	①褐色を帯びない褐色で1~4の褐色と異なる②酸化③灰④密
34住-6	蓋須恵器	— (15.1) — 床面+7、フク土	口径の大きな環蓋である。カエリは持たず、肩部が下方に折られており、内側肩部を鋭利に整形している。内側にへらによる×印の刻印あり。	①断面灰色・表面黒色②還元③灰④1mm以下の白色粒子を多く含む
34住-7	環須恵器	3.6 13.8 — 床面+10	底径の大きな環であり、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部が外反する。底面は指による一定横方向のナデであり、回転ナデやへら削りは行なわれていない。クロコ右回転。	①灰色②還元③炭粉④1mm以下の白色粒子を多く、黒色粒子を少量含む
34住-8	環須恵器	— — (8.3) フク土	やや丸底の環であり、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。底面はへら起こし後、右回転へ削り整形、へら起こしの痕跡は残る。	①断面灰白色・外面黒色②還元③灰④1mm以下の白色粒子を多く含む
34住-9	環須恵器	3.2 (13.7) (10.7) フク土	底径の大きな環であり、底部中央が上へ持ち上がる。体部は直線的に外上方へ開く。底部右回転へ削り、口縁部内外面横ナデ整形。	①灰色②還元③灰④1mm以下の白色粒子を多く、黒色粒子を少量含む
34住-10	環須恵器	— — (10.0) フク土	平底の環であり、体部は直線的で外上方へ開く。底部右回転へ削り。	①断面・内外面とも黒色②還元③灰④1mm以下の白色粒子を多く含む
34住-11	環須恵器	3.4 (13.6) (10.0) フク土	底径の大きな環であり、体部は直線的に外上方へ開く。口縁部は外反せず、体部下平と底面は右回転へ削り。底部内外面ともいっぺん整形である。	①灰色②還元③炭粉④1mm以下の白色粒子を多く、1~3mmの白色粒子を少量含む
34住-12	環須恵器	3.5 (16.7) (10.7) フク土	底径のやや小さな環であり、体部は外反しつつ外上方へ開く。体部下平~底部右回転へ削り。	①灰色②還元③灰④1mm以下の白色粒子を多く含む

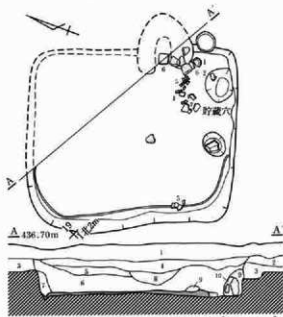
第5章 検出された遺構と遺物

34号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第171・172図 写真図版84)

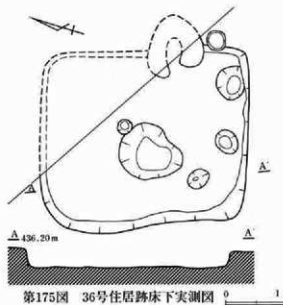
遺構名及び番 号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①灰色②焼成③残存④胎土⑤薄煮
34住-13	環須恵器	— — (9.2) フタ土	平底の底部に外側に張り出す高台を持つ環である。高台は端部を鋭利に仕上げている。体部下半部回転ヘラ削り。高台部内面回転ナデ整形。	①灰色②還元焼成③④1mm以下の白色粒子を多く、黒色粒子を少し含む
34住-14	環須恵器	— (15.6) — フタ土	環の口縁部小破片であり、6の環と同様なヘラによる×印の刻印あり。	①黒褐色②還元③小破片④1mm以下の白色粒子を多く含む
34住-15	短頸壺須恵器	— — — フタ土	小形な短頸壺の小破片である。頸部はやや外反しつづ立ち上がり、肩部が張る。内外面横ナデ整形。	①灰色②還元焼成③④1mm以下の白色粒子を多く含む
34住-16	短頸壺須恵器	— — — フタ土	頸部は短く外上方へ開く。肩部は器内が厚く丸味を持つ。内外面とも回転を伴う横ナデ整形。外面のほぼ全面にわたる降灰による輪が厚く付着する。	①灰色②還元焼成③④1mm以下の白色粒子を多く、1~3mmの白色粒子を少量含む
34住-17	甕土師器	— (20.2) — フタ土	器内の厚い甕の口縁部と思われる。口縁部はくの字状に外反するものと思われるが、残存部が少ないため不明。口縁部内外面横ナデ整形。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子と1mm前後の石英粒子を多く含む
34住-18	埴?須恵器	— (18.2) — フタ土	深い器形であり、他に類例がないため、用途不明。埴として扱う。口縁部付近で玉縁状を呈する。	①灰色②還元焼成③④1mm以下の白色粒子を多量に含む
34住-19	甕土師器	— — — 床面+5	器内の厚い甕の体部~口縁部の小破片である。体部は下方向に向かう直線のヘラ削りである。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を多く含む
34住-20	小形甕土師器	— (14.8) — 床面+16、フタ土	器内の厚い小形甕の口縁部破片である。丸味を持つ頸部より口縁部はなだらかに外反する。	①黒褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を多く含む
34住-21	甕土師器	— (21.9) — フタ土	器内の薄い長柄の甕である。口縁部はくの字状になだらかに外反する。肩部は左横方向へ削り。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子と石英粒子を多く含む
34住-22	石	縦-9.7 横-4.7 重量-190g	表面全体が磨耗している小さな石であり、縦方向に割れている。下端中央に敲打痕あり。	①黒色③④⑤黒色頁岩⑥床面+3cm
34住-23	石	縦-10.7 横-4.2 重量-110g	表面全体が磨耗している小さな石である。他の石と比較しても特に小さく、軽い石である。	①褐色③は④⑤⑥黒色頁岩⑦床面
34住-24	石	縦-11.4 横-4.9 重量-250g	表面全体が磨耗している小さな石である。中央部で幅広くなっている。	①薄緑色③④⑤⑥アイサイト質凝灰岩⑦床面
34住-25	石	縦-13.1 横-4.6 重量-320g	表面全体が磨耗している。中央部で幅広く、図での上端部に敲打痕あり。	①灰色③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿㋀㋁㋂㋃㋄㋅㋆㋇㋈㋉㋊㋋㋌㋍㋎㋏㋐㋑㋒㋓㋔㋕㋖㋗㋘㋙㋚㋛㋜㋝㋞㋟㋠㋡㋢㋣㋤㋥㋦㋧㋨㋩㋪㋫㋬㋭㋮㋯㋰㋱㋲㋳㋴㋵㋶㋷㋸㋹㋺㋻㋼㋽㋾㋿㌀㌁㌂㌃㌄㌅㌆㌇㌈㌉㌊㌋㌌㌍㌎㌏㌐㌑㌒㌓㌔㌕㌖㌗㌘㌙㌚㌛㌜㌝㌞㌟㌠㌡㌢㌣㌤㌥㌦㌧㌨㌩㌪㌫㌬㌭㌮㌯㌰㌱㌲㌳㌴㌵㌶㌷㌸㌹㌺㌻㌼㌽㌾㌿㍀㍁㍂㍃㍄㍅㍆㍇㍈㍉㍊㍋㍌㍍㍎㍏㍐㍑㍒㍓㍔㍕㍖㍗㍘㍙㍚㍛㍜㍝㍞㍟㍠㍡㍢㍣㍤㍥㍦㍧㍨㍩㍪㍫㍬㍭㍮㍯㍰㍱㍲㍳㍴㍵㍶㍷㍸㍹㍺㍻㍼㍽㍾㍿㏀㏁㏂㏃㏄㏅㏆㏇㏈㏉㏊㏋㏌㏍㏎㏏㏐㏑㏒㏓㏔㏕㏖㏗㏘㏙㏚㏛㏜㏝㏞㏟㏠㏡㏢㏣㏤㏥㏦㏧㏨㏩㏪㏫㏬㏭㏮㏯㏰㏱㏲㏳㏴㏵㏶㏷㏸㏹㏺㏻㏼㏽㏾㏿㐀㐁㐂㐃㐄㐅㐆㐇㐈㐉㐊㐋㐌㐍㐎㐏㐐㐑㐒㐓㐔㐕㐖㐗㐘㐙㐚㐛㐜㐝㐞㐟㐠㐡㐢㐣㐤㐥㐦㐧㐨㐩㐪㐫㐬㐭㐮㐯㐰㐱㐲㐳㐴㐵㐶㐷㐸㐹㐺㐻㐼㐽㐾㐿㑀㑁㑂㑃㑄㑅㑆㑇㑈㑉㑊㑋㑌㑍㑎㑏㑐㑑㑒㑓㑔㑕㑖㑗㑘㑙㑚㑛㑜㑝㑞㑟㑠㑡㑢㑣㑤㑥㑦㑧㑨㑩㑪㑫㑬㑭㑮㑯㑰㑱㑲㑳㑴㑵㑶㑷㑸㑹㑺㑻㑼㑽㑾㑿㒀㒁㒂㒃㒄㒅㒆㒇㒈㒉㒊㒋㒌㒍㒎㒏㒐㒑㒒㒓㒔㒕㒖㒗㒘㒙㒚㒛㒜㒝㒞㒟㒠㒡㒢㒣㒤㒥㒦㒧㒨㒩㒪㒫㒬㒭㒮㒯㒰㒱㒲㒳㒴㒵㒶㒷㒸㒹㒺㒻㒼㒽㒾㒿㓀㓁㓂㓃㓄㓅㓆㓇㓈㓉㓊㓋㓌㓍㓎㓏㓐㓑㓒㓓㓔㓕㓖㓗㓘㓙㓚㓛㓜㓝㓞㓟㓠㓡㓢㓣㓤㓥㓦㓧㓨㓩㓪㓫㓬㓭㓮㓯㓰㓱㓲㓳㓴㓵㓶㓷㓸㓹㓺㓻㓼㓽㓾㓿㔀㔁㔂㔃㔄㔅㔆㔇㔈㔉㔊㔋㔌㔍㔎㔏㔐㔑㔒㔓㔔㔕㔖㔗㔘㔙㔚㔛㔜㔝㔞㔟㔠㔡㔢㔣㔤㔥㔦㔧㔨㔩㔪㔫㔬㔭㔮㔯㔰㔱㔲㔳㔴㔵㔶㔷㔸㔹㔺㔻㔼㔽㔾㔿㕀㕁㕂㕃㕄㕅㕆㕇㕈㕉㕊㕋㕌㕍㕎㕏㕐㕑㕒㕓㕔㕕㕖㕗㕘㕙㕚㕛㕜㕝㕞㕟㕠㕡㕢㕣㕤㕥㕦㕧㕨㕩㕪㕫㕬㕭㕮㕯㕰㕱㕲㕳㕴㕵㕶㕷㕸㕹㕺㕻㕼㕽㕾㕿㖀㖁㖂㖃㖄㖅㖆㖇㖈㖉㖊㖋㖌㖍㖎㖏㖐㖑㖒㖓㖔㖕㖖㖗㖘㖙㖚㖛㖜㖝㖞㖟㖠㖡㖢㖣㖤㖥㖦㖧㖨㖩㖪㖫㖬㖭㖮㖯㖰㖱㖲㖳㖴㖵㖶㖷㖸㖹㖺㖻㖼㖽㖾㖿㗀㗁㗂㗃㗄㗅㗆㗇㗈㗉㗊㗋㗌㗍㗎㗏㗐㗑㗒㗓㗔㗕㗖㗗㗘㗙㗚㗛㗜㗝㗞㗟㗠㗡㗢㗣㗤㗥㗦㗧㗨㗩㗪㗫㗬㗭㗮㗯㗰㗱㗲㗳㗴㗵㗶㗷㗸㗹㗺㗻㗼㗽㗾㗿㘀㘁㘂㘃㘄㘅㘆㘇㘈㘉㘊㘋㘌㘍㘎㘏㘐㘑㘒㘓㘔㘕㘖㘗㘘㘙㘚㘛㘜㘝㘞㘟㘠㘡㘢㘣㘤㘥㘦㘧㘨㘩㘪㘫㘬㘭㘮㘯㘰㘱㘲㘳㘴㘵㘶㘷㘸㘹㘺㘻㘼㘽㘾㘿㙀㙁㙂㙃㙄㙅㙆㙇㙈㙉㙊㙋㙌㙍㙎㙏㙐㙑㙒㙓㙔㙕㙖㙗㙘㙙㙚㙛㙜㙝㙞㙟㙠㙡㙢㙣㙤㙥㙦㙧㙨㙩㙪㙫㙬㙭㙮㙯㙰㙱㙲㙳㙴㙵㙶㙷㙸㙹㙺㙻㙼㙽㙾㙿㚀㚁㚂㚃㚄㚅㚆㚇㚈㚉㚊㚋㚌㚍㚎㚏㚐㚑㚒㚓㚔㚕㚖㚗㚘㚙㚚㚛㚜㚝㚞㚟㚠㚡㚢㚣㚤㚥㚦㚧㚨㚩㚪㚫㚬㚭㚮㚯㚰㚱㚲㚳㚴㚵㚶㚷㚸㚹㚺㚻㚼㚽㚾㚿㞀㞁㞂㞃㞄㞅㞆㞇㞈㞉㞊㞋㞌㞍㞎㞏㞐㞑㞒㞓㞔㞕㞖㞗㞘㞙㞚㞛㞜㞝㞞㞟㞠㞡㞢㞣㞤㞥㞦㞧㞨㞩㞪㞫㞬㞭㞮㞯㞰㞱㞲㞳㞴㞵㞶㞷㞸㞹㞺㞻㞼㞽㞾㞿㟀㟁㟂㟃㟄㟅㟆㟇㟈㟉㟊㟋㟌㟍㟎㟏㟐㟑㟒㟓㟔㟕㟖㟗㟘㟙㟚㟛㟜㟝㟞㟟㟠㟡㟢㟣㟤㟥㟦㟧㟨㟩㟪㟫㟬㟭㟮㟯㟰㟱㟲㟳㟴㟵㟶㟷㟸㟹㟺㟻㟼㟽㟾㟿㠀㠁㠂㠃㠄㠅㠆㠇㠈㠉㠊㠋㠌㠍㠎㠏㠐㠑㠒㠓㠔㠕㠖㠗㠘㠙㠚㠛㠜㠝㠞㠟㠠㠡㠢㠣㠤㠥㠦㠧㠨㠩㠪㠫㠬㠭㠮㠯㠰㠱㠲㠳㠴㠵㠶㠷㠸㠹㠺㠻㠼㠽㠾㠿㡀㡁㡂㡃㡄㡅㡆㡇㡈㡉㡊㡋㡌㡍㡎㡏㡐㡑㡒㡓㡔㡕㡖㡗㡘㡙㡚㡛㡜㡝㡞㡟㡠㡡㡢㡣㡤㡥㡦㡧㡨㡩㡪㡫㡬㡭㡮㡯㡰㡱㡲㡳㡴㡵㡶㡷㡸㡹㡺㡻㡼㡽㡾㡿㢀㢁㢂㢃㢄㢅㢆㢇㢈㢉㢊㢋㢌㢍㢎㢏㢐㢑㢒㢓㢔㢕㢖㢗㢘㢙㢚㢛㢜㢝㢞㢟㢠㢡㢢㢣㢤㢥㢦㢧㢨㢩㢪㢫㢬㢭㢮㢯㢰㢱㢲㢳㢴㢵㢶㢷㢸㢹㢺㢻㢼㢽㢾㢿㣀㣁㣂㣃㣄㣅㣆㣇㣈㣉㣊㣋㣌㣍㣎㣏㣐㣑㣒㣓㣔㣕㣖㣗㣘㣙㣚㣛㣜㣝㣞㣟㣠㣡㣢㣣㣤㣥㣦㣧㣨㣩㣪㣫㣬㣭㣮㣯㣰㣱㣲㣳㣴㣵㣶㣷㣸㣹㣺㣻㣼㣽㣾㣿㤀㤁㤂㤃㤄㤅㤆㤇㤈㤉㤊㤋㤌㤍㤎㤏㤐㤑㤒㤓㤔㤕㤖㤗㤘㤙㤚㤛㤜㤝㤞㤟㤠㤡㤢㤣㤤㤥㤦㤧㤨㤩㤪㤫㤬㤭㤮㤯㤰㤱㤲㤳㤴㤵㤶㤷㤸㤹㤺㤻㤼㤽㤾㤿㥀㥁㥂㥃㥄㥅㥆㥇㥈㥉㥊㥋㥌㥍㥎㥏㥐㥑㥒㥓㥔㥕㥖㥗㥘㥙㥚㥛㥜㥝㥞㥟㥠㥡㥢㥣㥤㥥㥦㥧㥨㥩㥪㥫㥬㥭㥮㥯㥰㥱㥲㥳㥴㥵㥶㥷㥸㥹㥺㥻㥼㥽㥾㥿㦀㦁㦂㦃㦄㦅㦆㦇㦈㦉㦊㦋㦌㦍㦎㦏㦐㦑㦒㦓㦔㦕㦖㦗㦘㦙㦚㦛㦜㦝㦞㦟㦠㦡㦢㦣㦤㦥㦦㦧㦨㦩㦪㦫㦬㦭㦮㦯㦰㦱㦲㦳㦴㦵㦶㦷㦸㦹㦺㦻㦼㦽㦾㦿㧀㧁㧂㧃㧄㧅㧆㧇㧈㧉㧊㧋㧌㧍㧎㧏㧐㧑㧒㧓㧔㧕㧖㧗㧘㧙㧚㧛㧜㧝㧞㧟㧠㧡㧢㧣㧤㧥㧦㧧㧨㧩㧪㧫㧬㧭㧮㧯㧰㧱㧲㧳㧴㧵㧶㧷㧸㧹㧺㧻㧼㧽㧾㧿㨀㨁㨂㨃㨄㨅㨆㨇㨈㨉㨊㨋㨌㨍㨎㨏㨐㨑㨒㨓㨔㨕㨖㨗㨘㨙㨚㨛㨜㨝㨞㨟㨠㨡㨢㨣㨤㨥㨦㨧㨨㨩㨪㨫㨬㨭㨮㨯㨰㨱㨲㨳㨴㨵㨶㨷㨸㨹㨺㨻㨼㨽㨾㨿㩀㩁㩂㩃㩄㩅㩆㩇㩈㩉㩊㩋㩌㩍㩎㩏㩐㩑㩒㩓㩔㩕㩖㩗㩘㩙㩚㩛㩜㩝㩞㩟㩠㩡㩢㩣㩤㩥㩦㩧㩨㩩㩪㩫㩬㩭㩮㩯㩰㩱㩲㩳㩴㩵㩶㩷㩸㩹㩺㩻㩼㩽㩾㩿㪀㪁㪂㪃㪄㪅㪆㪇㪈㪉㪊㪋㪌㪍㪎㪏㪐㪑㪒㪓㪔㪕㪖㪗㪘㪙㪚㪛㪜㪝㪞㪟㪠㪡㪢㪣㪤㪥㪦㪧㪨㪩㪪㪫㪬㪭㪮㪯㪰㪱㪲㪳㪴㪵㪶㪷㪸㪹㪺㪻㪼㪽㪾㪿㫀㫁㫂㫃㫄㫅㫆㫇㫈㫉㫊㫋㫌㫍㫎㫏㫐㫑㫒㫓㫔㫕㫖㫗㫘㫙㫚㫛㫜㫝㫞㫟㫠㫡㫢㫣㫤㫥㫦㫧㫨㫩㫪㫫㫬㫭㫮㫯㫰㫱㫲㫳㫴㫵㫶㫷㫸㫹㫺㫻㫼㫽㫾㫿㬀㬁㬂㬃㬄㬅㬆㬇㬈㬉㬊㬋㬌㬍㬎㬏㬐㬑㬒㬓㬔㬕㬖㬗㬘㬙㬚㬛㬜㬝㬞㬟㬠㬡㬢㬣㬤㬥㬦㬧㬨㬩㬪㬫㬬㬭㬮㬯㬰㬱㬲㬳㬴㬵㬶㬷㬸㬹㬺㬻㬼㬽㬾㬿㭀㭁㭂㭃㭄㭅㭆㭇㭈㭉㭊㭋㭌㭍㭎㭏㭐㭑㭒㭓㭔㭕㭖㭗㭘㭙㭚㭛㭜㭝㭞㭟㭠㭡㭢㭣㭤㭥㭦㭧㭨㭩㭪㭫㭬㭭㭮㭯㭰㭱㭲㭳㭴㭵㭶㭷㭸㭹㭺㭻㭼㭽㭾㭿㮀㮁㮂㮃㮄㮅㮆㮇㮈㮉㮊㮋㮌㮍㮎㮏㮐㮑㮒㮓㮔㮕㮖㮗㮘㮙㮚㮛㮜㮝㮞㮟㮠㮡㮢㮣㮤㮥㮦㮧㮨㮩㮪㮫㮬㮭㮮㮯㮰㮱㮲㮳㮴㮵㮶㮷㮸㮹㮺㮻㮼㮽㮾㮿㯀㯁㯂㯃㯄㯅㯆㯇㯈㯉㯊㯋㯌㯍㯎㯏㯐㯑㯒㯓㯔㯕㯖㯗㯘㯙㯚㯛㯜㯝㯞㯟㯠㯡㯢㯣㯤㯥㯦㯧㯨㯩㯪㯫㯬㯭㯮㯯㯰㯱㯲㯳㯴㯵㯶㯷㯸㯹㯺㯻㯼㯽㯾㯿㰀㰁㰂㰃㰄㰅㰆㰇㰈㰉㰊㰋㰌㰍㰎㰏㰐㰑㰒㰓㰔㰕㰖㰗㰘㰙㰚㰛㰜㰝㰞㰟㰠㰡㰢㰣㰤㰥㰦㰧㰨㰩㰪㰫㰬㰭㰮㰯㰰㰱㰲㰳㰴㰵㰶㰷㰸㰹㰺㰻㰼㰽㰾㰿㱀㱁㱂㱃㱄㱅㱆㱇㱈㱉㱊㱋㱌㱍㱎㱏㱐㱑㱒㱓㱔㱕㱖㱗㱘㱙㱚㱛㱜㱝㱞㱟㱠㱡㱢㱣㱤㱥㱦㱧㱨㱩㱪㱫㱬㱭㱮㱯㱰㱱㱲㱳㱴㱵㱶㱷㱸㱹㱺㱻㱼㱽㱾㱿㲀㲁㲂㲃㲄㲅㲆㲇㲈㲉㲊㲋㲌㲍㲎㲏㲐㲑㲒㲓㲔㲕㲖㲗㲘㲙㲚㲛㲜㲝㲞㲟㲠㲡㲢㲣㲤㲥㲦㲧㲨㲩㲪㲫㲬㲭㲮㲯㲰㲱㲲㲳㲴㲵㲶㲷㲸㲹㲺㲻㲼㲽㲾㲿㳀㳁㳂㳃㳄㳅㳆㳇㳈㳉㳊㳋㳌㳍㳎㳏㳐㳑㳒㳓㳔㳕㳖㳗㳘㳙㳚㳛㳜㳝㳞㳟㳠㳡㳢㳣㳤㳥㳦㳧㳨㳩㳪㳫㳬㳭㳮㳯㳰㳱㳲㳳㳴㳵㳶㳷㳸㳹㳺㳻㳼㳽㳾㳿㴀㴁㴂㴃㴄㴅㴆㴇㴈㴉㴊㴋㴌㴍㴎㴏㴐㴑㴒㴓㴔㴕㴖㴗㴘㴙㴚㴛㴜㴝㴞㴟㴠㴡㴢㴣㴤㴥㴦㴧㴨㴩㴪㴫㴬㴭㴮㴯㴰㴱㴲㴳㴴㴵㴶㴷㴸㴹㴺㴻㴼㴽㴾㴿㵀㵁㵂㵃㵄㵅㵆㵇㵈㵉㵊㵋㵌㵍㵎㵏㵐㵑㵒㵓㵔㵕㵖㵗㵘㵙㵚㵛㵜㵝㵞㵟㵠㵡㵢㵣㵤㵥㵦㵧㵨㵩㵪㵫㵬㵭㵮㵯㵰㵱㵲㵳㵴㵵㵶㵷㵸㵹㵺㵻㵼㵽㵾㵿㶀㶁㶂㶃㶄㶅㶆㶇㶈㶉㶊㶋㶌㶍㶎㶏㶐㶑㶒㶓㶔㶕㶖㶗㶘㶙㶚㶛㶜㶝㶞㶟㶠㶡㶢㶣㶤㶥㶦㶧㶨㶩㶪㶫㶬㶭㶮㶯㶰㶱㶲㶳㶴㶵㶶㶷㶸㶹㶺㶻㶼㶽㶾㶿㷀㷁㷂㷃㷄㷅㷆㷇㷈㷉㷊㷋㷌㷍㷎㷏㷐㷑㷒㷓㷔㷕㷖㷗㷘㷙㷚㷛㷜㷝㷞㷟㷠㷡㷢㷣㷤㷥㷦㷧㷨㷩㷪㷫㷬㷭㷮㷯㷰㷱㷲㷳㷴㷵㷶㷷㷸㷹㷺㷻㷼㷽㷾㷿㸀㸁㸂㸃㸄㸅㸆㸇㸈㸉㸊㸋㸌㸍㸎㸏㸐㸑㸒㸓㸔㸕㸖㸗㸘㸙㸚㸛㸜㸝㸞㸟㸠㸡㸢㸣㸤㸥㸦㸧㸨㸩㸪㸫㸬㸭㸮㸯㸰㸱㸲㸳㸴㸵㸶㸷㸸㸹㸺㸻㸼㸽㸾㸿㹀㹁㹂㹃㹄㹅㹆㹇㹈㹉㹊㹋㹌㹍㹎㹏㹐㹑㹒㹓㹔㹕㹖㹗㹘㹙㹚㹛㹜㹝㹞㹟㹠㹡㹢㹣㹤㹥㹦㹧㹨㹩㹪㹫㹬㹭㹮㹯㹰㹱㹲㹳㹴㹵㹶㹷㹸㹹㹺㹻㹼㹽㹾㹿㺀㺁㺂㺃㺄㺅㺆㺇㺈㺉㺊㺋㺌㺍㺎㺏㺐㺑㺒㺓㺔㺕㺖㺗㺘㺙㺚㺛㺜㺝㺞㺟㺠㺡㺢㺣㺤㺥㺦㺧㺨㺩㺪㺫㺬㺭㺮㺯㺰㺱㺲㺳㺴㺵㺶㺷㺸㺹㺺㺻㺼㺽㺾㺿㻀㻁㻂㻃㻄㻅㻆㻇㻈㻉㻊㻋㻌㻍㻎㻏㻐㻑㻒㻓㻔㻕㻖㻗㻘㻙㻚㻛㻜㻝㻞㻟㻠㻡㻢㻣㻤㻥㻦㻧㻨㻩㻪㻫㻬㻭㻮㻯㻰㻱㻲㻳㻴㻵㻶㻷㻸㻹㻺㻻㻼㻽㻾㻿㼀㼁㼂㼃㼄㼅㼆㼇㼈㼉㼊㼋㼌㼍㼎㼏㼐㼑㼒㼓㼔㼕㼖㼗㼘㼙㼚㼛㼜㼝㼞㼟㼠㼡㼢㼣㼤㼥㼦㼧㼨㼩㼪㼫㼬㼭㼮㼯㼰㼱㼲㼳㼴㼵㼶㼷㼸㼹㼺㼻㼼㼽㼾㼿㽀㽁㽂㽃㽄㽅㽆㽇㽈㽉㽊㽋㽌㽍㽎㽏㽐㽑㽒㽓㽔㽕㽖㽗㽘㽙㽚㽛㽜㽝㽞㽟㽠㽡㽢㽣㽤㽥㽦㽧㽨㽩㽪㽫㽬㽭㽮㽯㽰㽱㽲㽳㽴㽵㽶㽷㽸㽹㽺㽻㽼㽽㽾㽿㿀㿁㿂㿃㿄㿅㿆㿇㿈㿉㿊㿋㿌㿍㿎㿏㿐㿑㿒㿓㿔㿕㿖㿗㿘㿙㿚㿛㿜㿝㿞㿟㿠㿡㿢㿣㿤㿥㿦㿧㿨㿩㿪㿫㿬㿭㿮㿯㿰㿱㿲㿳㿴㿵㿶㿷㿸㿹㿺㿻㿼㿽㿾㿿



第173図 35号住居跡実測図



第174図 36号住居跡床下実測図



第175図 36号住居跡床下実測図

## 35号住居跡

位置 29号住居跡西2mに位置し、J-32・33グリットに属する。

概要 土層断面や平面形等より見て、住居跡の一部と思われるが、部分的のみで多くの部分が不明である。試掘時に床面下まで掘り下げた。

規模 東西規模不明、壁高は約40cmである。

遺物 全く出土していない。

1. 黒褐色土層 耕作土。
2. 暗褐色土層 桑畑時の埋戻し層。
3. 暗褐色土層 黒色土中に多くのローム粒子を含む。
- 3'. 暗褐色土層 3層にはほぼ同じだが、砂質である。
4. 暗褐色土層 黒色土とローム粒子の混入土層。
5. 黄褐色土層 ロームブロックを主体とした層。
6. 黒褐色土層 黒色土中にごく少量のローム粒子と白色軽石粒子を含む。

## 36号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版47

遺物写真図版85

位置 16号住居跡北約9mに位置し、H・I-19グリットに属する。

概要 住居跡の北側部分と竈の大部分が調査区域外のため、一部のみの調査であった。特に竈は残りが良好と思われたにもかかわらず一部のみの調査であり残念であった。

構造 床面はロームを主とし、少量の黒色土の混入により形成されていた。柱穴、周溝等は検出されなかった。竈右側手前に貯蔵穴が検出された。

規模 東西方向2.8m、南北方向3.3m、壁高36cm。貯蔵穴は長軸方向55cm、短軸方向45cm、深さ6cmで浅い。

遺物 竈右側手前部分に多くの羽釜の破片が、他に床面や覆土中より須恵器環・甕、羽釜等の破片が多く出土した。

1. 黒褐色土層 耕作土、やわらかい土層で白色軽石粒子を含む。
2. 黒色土層 固い土層で、白色軽石粒子を少量含む。
3. 黒褐色土層 黒色土中に少量のローム粒子を含む。
4. 黒色土層 黒色土中にローム小ブロックを少量含む。
5. 黒色土層 4層に近いが、ローム小ブロックを多く含む。
6. 黒褐色土層 黒色土とローム粒子・ロームブロック混入土層。
7. 黒色土層 黒色土中にごく少量のローム粒子を含む。
8. 黒色土層 黒色土中に多くの炭を混入する。
9. ローム層
10. 埴土層

第5章 検出された遺構と遺物

床下 床面調査後、床面で検出できなかった遺構や床下構造を調べるために床面の黒褐色土を5cm前後取りのぞいた。その結果床面中央部浅さ10cm前後で大きさは長軸1m、短軸95cmの床下土坑が、またその床下土坑の南西側に25cm前後で深さ5cm前後の小穴が1基検出された。その他床下全面は多くの凹凸面となっていた。

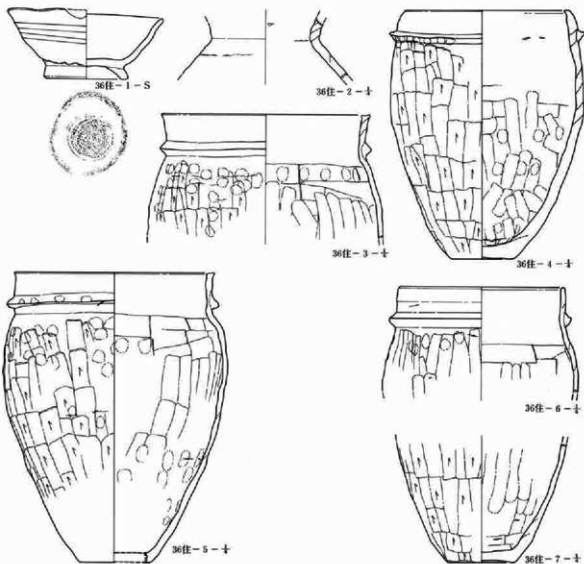
36号住居跡竈

位置 住居東壁のやや南寄りと思われる位置に壁を多く掘り込んで竈が構築されていた。

概要 右袖の多くと左袖の一部、焚口の一部のみといった、竈の一部分のみの調査であったため全体については不明であるが、調査の結果袖石を多く用いた竈であり、燃焼部の多くと煙道部が住居外に位置することが明らかとなった。

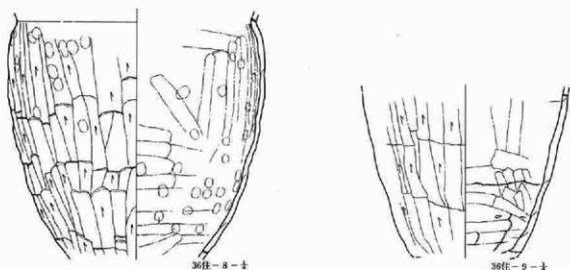
規模 不明である。

遺物 竈内より大量の羽釜が出土した。接合の結果5個体分の羽釜の破片であった。



第176図 36号住居跡出土遺物実測図(1)





第177図 36号住居跡出土遺物実測図(2)

36号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第176・177図 写真図版85)

遺構名及び番 号	器形及 び器種	器高・口径・底径(mm)	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
36住-1	埴 須恵器	5.5 (12.4) 6.7 床面+5、フク土	全体に焼きむずみのある埴である。高台は太く長く外側へ開く。体部は直線的に内外上方向き。口縁部はほとんど外反しない。高台部内側右回転糸切痕。	①灰色②還元③④④1mm以下の白色粒子を少量含む
36住-2	蓋 須恵器	— — — 床面+2	蓋の頸部~口縁部にかけての小破片と思われる。器表内外面とも横ナデ整形。	①灰色②還元③④④1mm以下の白色粒子を多く、1mm前後の石英少量含む
36住-3	羽釜	— (22.0) — 床面+4、カマド内	丸味を持つ体部より、髷付着点を経過し、直立する口縁部へ連なる。口唇部は平で中央部が凹状になる。外面は髷に向かうへう削りだが髷までは届かない。	①表面灰白色・断面灰黒色②還元③④④1mm以下の白色粒子を多く、2~3mmの石英粒子を少量含む
36住-4	羽釜	26.0 (17.4) (6.8) 床面+2、フク土	平な底部より、体部は内側しつつ外上方へ開き、髷付着点でも変化しないまま口縁部に至る。口唇部は平だが丸味を持つ。体部の整形は底部より髷に向かう直線的なへう削りであり、髷下部まで削られており、髷下部にへう痕あり。古い形態の月夜野型羽釜。	①黒褐色②還元③④④1mm以下の白色粒子を多く、3mm前後の赤色粒子を少量含む
36住-5	羽釜	30.6 21.2 7.4 床面+2、カマド内、フク土	平な底部より体部はほぼ直線的に内外上方向き、肩部は丸味を持つ。髷付近より口縁部は直立し口唇部は平でやや内傾する。体部外面は髷に向かうへう削りであり、髷下部の体部は横ナデ整形。	①灰色②還元③④④1mm以下の白色粒子と2~3mmの石英粒子を多く含む
36住-6	羽釜	— 17.3 — 床面+4、カマド内	体部上半に丸味を強く持つ羽釜であり、髷を境に口縁部は直立する。口唇部は平で中央部に凹線を持つ。髷に向かうへう削りで、髷近くまで削りがある。	①灰褐色②還元③④④1mm以下の白色粒子を多く、2mm前後の石英粒子を少量含む
36住-7	羽釜	— — (6.8) 床面+2、フク土	羽釜の底部~体部下平である。外側表面は底部端より髷に向かうへう削り。内面はナデ整形。	①灰白色②還元③④④1mm以下の白色粒子を多く含む
36住-8	羽釜	— — — カマド内	羽釜の体部破片である。残存状況よりみて5に近い形になるものと思われる。外側体部は髷に向かうへう削り、内側体部はナデ整形。大きい羽釜である。	①灰白色②還元③④④1mm以下の白色粒子と2~3mmの石英粒子を多く含む
36住-9	羽釜	— — — カマド内	羽釜の体部破片と思われる。外側体部は髷に向かうへう削り、内側体部はナデ整形。	①灰褐色②還元③④④1mm以下の白色粒子と2~3mmの石英粒子を多く含む

第5章 検出された遺構と遺物

37号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版47 遺物写真図版85・86

位置 9号住居跡の北約7mに位置し、H-14グリットに属する。

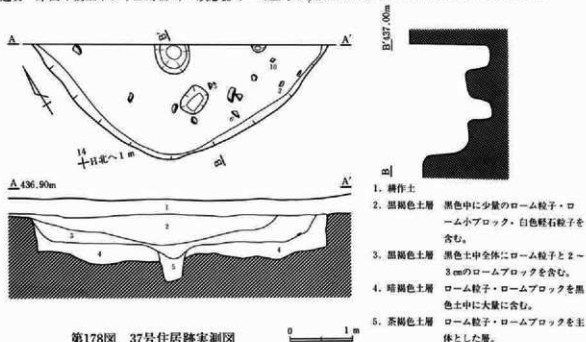
概要 住居跡の北側大部分が調査区域外であったため、南側一部のみの調査であった。そのため詳細については不明である。床面より焼土も全く検出されなかった。

構造 床面はロームを主とし、多くの黒褐色土層の混入によりできていた。床面は全体的に軟質であり踏み固められた様子は示していなかった。小穴が床面より2個検出されたが、柱穴に相当するものかについては不明である。周溝、貯蔵穴についても検出されなかった。

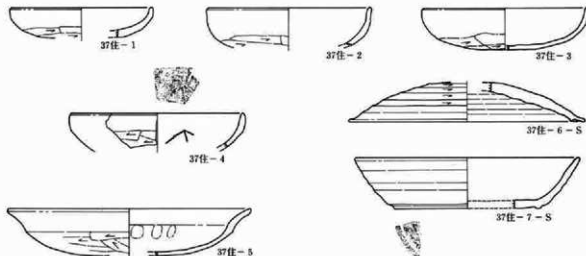
規模 住居跡の東西、南北規模とも確定できない。壁高は50cmと高い。床面中央寄りの小穴は直径50cm、深さ60cmで、南壁寄りの小穴は長軸4.5m、短軸3.5mで深さ33cmであった。

床面 床面の黒褐色を取り除いた結果、床下より多くの凹凸面が検出された。

遺物 床面や覆土中より土師器環・須恵器環・環蓋等が検出された。しかし出土量は少量であった。

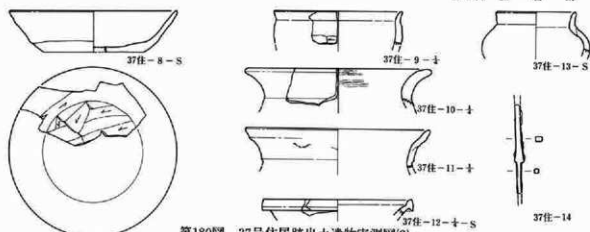


第178図 37号住居跡実測図



第179図 37号住居跡出土遺物実測図(1)

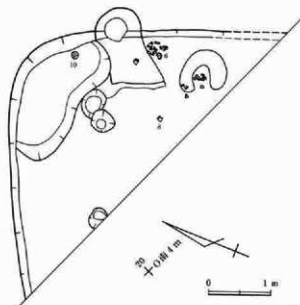
## 第2節 住居跡



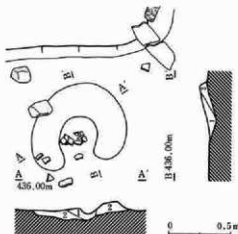
第180図 37号住居跡出土遺物実測図(2)

37号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第179・180図 写真図版85・86)

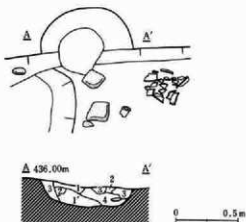
遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
37住-1	坏土師器	— (11.2) — フク土	平底に近い丸底の坏である。口縁部は短く直立する。口縁部横ナゲ、体部～底部へ削り。	①褐色②酸化③④⑤白色粒子ほとんど含まず
37住-2	坏土師器	— (12.8) — フク土	全体に箱形を呈する坏であり、口縁部は長く直立する。口縁部上半横ナゲ、下半指整形。	①褐色②酸化③④⑤白色粒子ほとんど含まず
37住-3	坏土師器	3.3 (12.9) — 床面、フク土	平底に近い丸底の坏である。口縁部は少し内彎しつつ外上方へ開く。口縁部上半横ナゲ、下半指整形。	①褐色②酸化③④⑤白色粒子ほとんど含まず
37住-4	坏土師器	— (13.8) — フク土	丸底のやや深くなる坏の口縁部小破片である。内側にへらにより編割がなされている。内容不明。	①褐色②酸化③④⑤白色粒子含まず、1mm以下の黒色粒子を少量含む
37住-5	皿形坏土師器	— (19.4) — 床面+5	口径が大きく、口縁部が大きく外反する坏である。体部～底部へ削り、口縁部横ナゲ。	①褐色②酸化③④⑤1mm以下の白色粒子をわずかに含む
37住-6	蓋須恵器	— (18.6) — 床面+20	カエリを持つ環蓋である。つまみの痕跡は全く残っていない。天井部はほとんど右回転へ削り。	①灰色②還元③④⑤1mm以下の白色粒子を少量含む
37住-7	坏須恵器	4.05 (17.8) (11.6) フク土	削り出し高台を持つ坏である。体部は直線的に外上方へ開く。高台部内外面右回転へ削り。	①灰色②還元③④⑤1mm以下の白色粒子を多く含む
37住-8	坏須恵器	3.3 (13.2) (8.0) フク土	底径のやや小さくなる坏である。体部は直線の外上方へ開く。底面は手持つ削り、体部下半へ削り。	①灰色②還元③④⑤1mm以下の白色粒子を多く含む
37住-9	小形甕土師器	— (13.5) — フク土	小形の甕の口縁部～体部上半の小破片である。口縁部は短くやや外反する。体部外側左横方向へ削り。	①褐色②酸化③④⑤1mm以下の白色粒子を少量含む
37住-10	甕土師器	— (19.8) — 床面+39	器内の厚い甕の口縁部破片である。口縁部は短く、大きく外反する。内側器面にへら磨きあり。	①褐色②還元③④⑤1mm以下の白色粒子と2mm前後の石英粒子を多く含む
37住-11	美土師器	— (19.3) — フク土	器内の薄い甕の口縁部破片である。口縁部は外反した後で少し上方に立ち上がる。	①褐色②還元③④⑤白色粒子をほとんど含まない
37住-12	壺須恵器	— (15.6) — フク土	口縁部の小破片であるため詳細は不明であるが、小形壺の破片と思われる。	①灰色②還元③④⑤1mm以下の白色粒子を少量含む
37住-13	短頸甕須恵器	— (6.0) — フク土	小形短頸甕の小破片と思われる。頸部は短くやや外反し、口唇部は丸い。内外面についていない横ナゲ。	①灰色②還元③④⑤白色粒子ほとんど含まず
37住-14	鉄線鉄器	全長-6.9 尾端部重-0.4	鐵の覆被から蓋にかけてである。蓋・覆被の断面は方形である。中程に鐵線を持つ。錆は極目している。	



第181図 38号住居跡実測図



第182図 38号住居跡炉実測図



第183図 38号住居跡甕実測図

### 38号住居跡 (奈良時代) 遺物写真図版86

**位置** 14号住居跡と大部分が重複して位置し、0-19・20グリットに属する。

**概要** 14号住居跡調査時において、平面形、出土遺物、竈、炉等の検出状況よりみて、一軒の住居跡ではないことが考えられた。しかし最後まで明確な区分はできなかった。そこで現場での知見をもとに、2軒を分離して、14号住居跡と38号住居跡とした。38号住居跡は竈と炉を持つ住居跡である。

**構造** 床面、柱穴、貯蔵穴、周溝等についても、14号住居跡と重複しているため明確に検出できなかった。床面等においても14号住居跡にはほぼ同じであったものと思われる。奈良・平安時代の遺物が出土していたが分離は困難であった。

**規模** 現状で東西方向2.5m、南北方向で2.3m、壁高23cm。

**遺物** 床面や覆土中より土師器環・斐、鉄器の破片等が出土。

#### 38号住居跡炉

**位置** 竈右側手前に位置する。この位置に竈の他に炉を持つ例は他では認められなかった。

**概要** 西側に開く馬蹄形の焼土が厚さ6cm前後堆積しており、中央は焼土混入の黒色土であった。

**規模** 直径約80cmで、熱焼部幅は直径約30cmであった。

**遺物** 炉内より土師器甕の破片が多く出土。

1. 黒色土層 黒色土中に少量の焼土粒子を含む。
2. 焼土層 赤く固く焼けている。

#### 38号住居跡竈

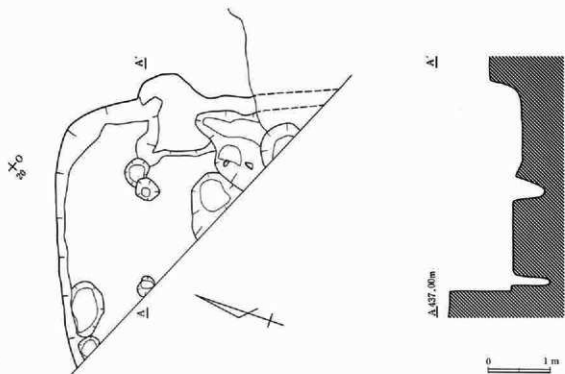
**位置** 住居東壁に壁を掘り込み、竈が構築されていた。

**概要** 竈位置、構造等について、他の例と異なる点が多い。床下調査より見て、熱焼部の大部分は住居内に位置した。

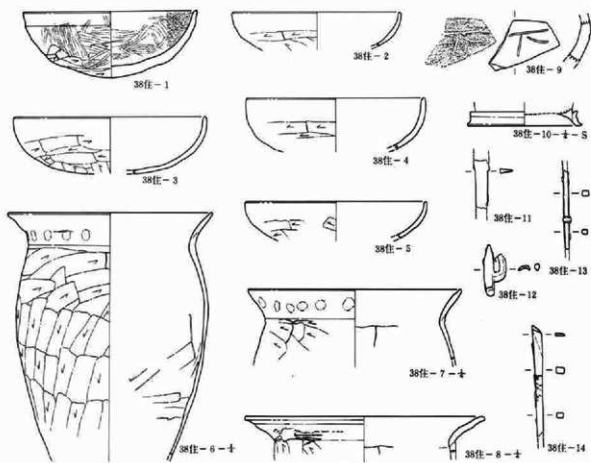
**規模** 煙道方向は推定1.25m、両袖方向80cm。

**遺物** 須恵器甕、斐等出土。

1. 焼土層 焼土、ローム粒子、黒色土の混入土層。
1. 焼土層 赤色の焼土層。
2. 黒色土層 ごく少量の焼土粒子を含む。
3. 黒色土層 ロームを主体とし、ごく少量の黒色粒子を含む。
4. 黒褐色土層 ローム粒子、黒色土、焼土粒子の混入土層。



第184图 38号住居跡实测图



第185图 38号住居跡出土遺物实测图

第5章 検出された遺構と遺物

38号住居跡 出土遺物観察表 (図版番号第185図 写真図版86)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④出土⑤備考
38住-1	環土師器	5.2 13.8 — 床下フク土	器内の厚い丸底の環であり、口縁部と体部との境に弱い稜を持つ。内外面へ磨きが行なわれており、内面に吸炭による内黒処理が行なわれている。	①底面のみ黒褐色・他全面黒色②酸化③④1mm以下の白色粒子と1mm前後の石英粒子を多く含む
38住-2	環土師器	— (15.4) — 1号土坑、フク土	丸底の環であり、口縁部はやや長く、上平横ナデ、下半指整形、体部下半～底部へ削り。	①黒褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を少量含む
38住-3	環土師器	— (15.4) — 床下フク土	平底に近い丸底の環であり、全体的に深い。底部より体部はゆるやかに内嚙しつつ外上方へ開き、口縁部は直立する。口縁部横ナデ、体部～底部へ削り。	①褐色②酸化③④白色粒子ほとんど含まず
38住-4	環土師器	— (14.2) — 床下フク土	3に似て全体に深く丸い器形であり、口縁部は直立する。口縁部横ナデ、体部へ削り。	①褐色②酸化③④白色粒子ほとんど含まず
38住-5	環土師器	— (14.5) — フク土	丸底の浅い環であり、口縁部は短く直立気味に立ち上がる。口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を少量含む
38住-6	甕土師器	— 21.6 — 床面	器内の薄い長割の甕であり、最大径を口縁部に持つ。胴部上半は右上方に向かうへ削りであり異質、胴中央より下部は左下方へ削りでありこれも異質、他地域よりの舶来品の可能性あり。	①褐色②酸化③灰濁部分ほぼ完形④1mm以下の白色粒子と長石粒子と思われる砂粒を多く含む
38住-7	甕土師器	— (22.2) — ヘッパイ内	器内の薄い長割甕の破片である。口縁部横ナデ、胴部外面左横方向へ削り。	①褐色②酸化③④1mm以下の石英粒子と砂粒を多く含む
38住-8	甕土師器	— (25.0) — 床面	器内の薄い長割甕の破片である。口縁部横ナデ、胴部は口縁に向かうへ削り。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を少量含む
38住-9	壺?	— — — フク土	器内の厚い破片であり、壺の可能性あるが不明。別費あり、判読不明。	①褐色②酸化③小破片④1mm以下の白色粒子を多量に含む
38住-10	壺 須恵器	— — 12.0 床面	長頸壺の高台部破片と思われる。底部は大きくハの字状に張り出し、残付部分は平になっている。	①灰色②還元焼成③高台部のみ完形④1mm以下の白色粒子を多く含む
38住-11	刀子 鉄器	全長—3.7 フク土	刀子の物打部片である。両端は調査時の欠損である。造り込みは平造りで、縁は錆化のため不明瞭であるが糸柱が肉置の少ない丸縁と考えられる。錆は根目状でない。	
38住-12	引手? 鉄器	長辺—4 短辺—1.8、フク土	引手か吊手の鉄製金具と考えられる。質量がなく軽く薄金である。	
38住-13	鉄皿 鉄器	全長—6.1 幅—0.7 皿縁中程の幅—0.4 2号土坑、フク土	縁区を持つ鉄皿惣柄から破片である。両端部とも調査時の欠損である。縁は発達していないが一箇所。蓋、裏縁の断面形状は方形である。錆化は根目状に発達せず目に見える。	
38住-14	鉄器	全長—8.6 皿先—2.8 皿縁長—1.3 幅—0.6 フク土	小身の皿である。尖根片切先である。蓋端は調査時の欠損である。皿先は片切状に肉を落す。縁は直線的である。皿区は明瞭でない。部分的に筋帯痕、尖根痕を残さないで存在することから、工具として転用した可能性あり。つまり筋帯は握りのためである。錆化は根目状でない。	

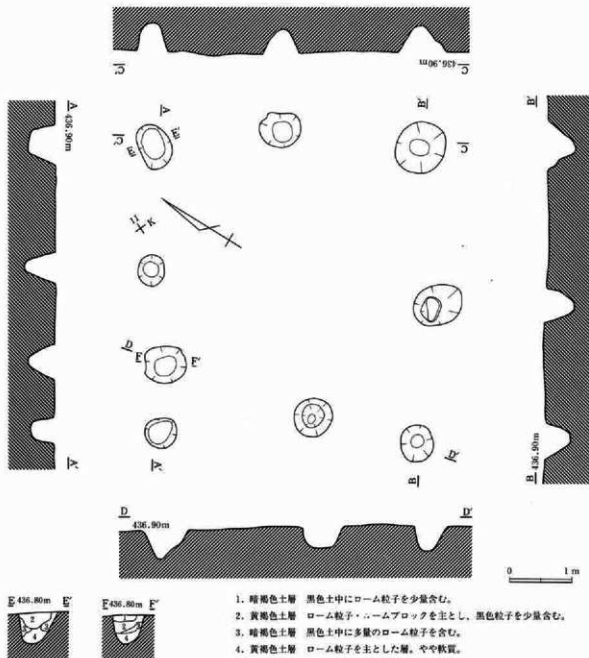
### 第3節 掘立柱建物遺構・井戸跡・集石跡・小鍛冶跡・溝

#### 1号掘立柱建物遺構 遺構写真図版48

位置 1・2号住居跡の東南約8mに位置し、J-11、K-11・12、L-11グリッドに属する。

概要 柱穴と思われる小穴が9本検出されている。東側の柱穴5本は規則的に配置されているが、西側の4本は配置において規則性がなく、一直線上に配置されていない。やや疑問が残るが、1号掘立柱建物遺構として取り扱った。遺構内側において風倒木痕が1箇所、浅い小穴が3箇所検出されている。

規模 南北方向で北側が5m、南側が5.35m、東西方向で西側が4.6m、東側が5mであり一定していない。柱穴の大きさは、40~80cmであり統一性がない。深さは30~40cmでありほぼ一定している。

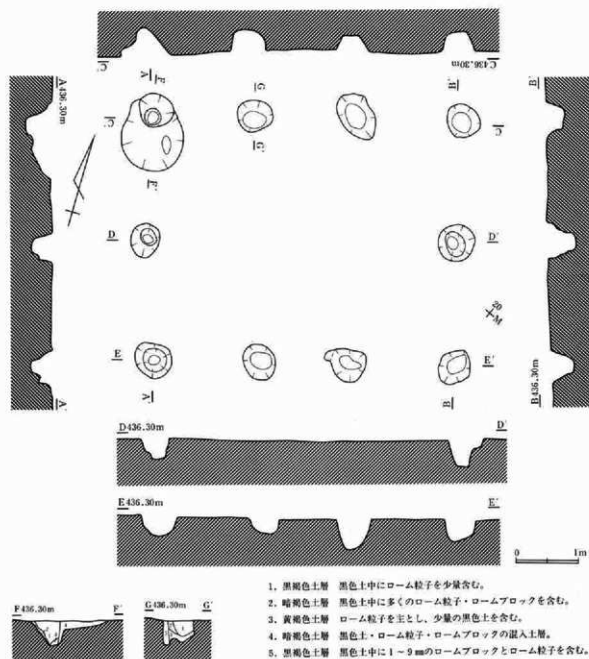


第186図 1号掘立柱建物遺構実測図

第5章 検出された遺構と遺物

2号掘立柱建物遺構 遺構写真図版48

位置 13・14・15号住居跡に近接し、11号住居跡と重複している。L-19、M-19・20グリッドに属する。  
 概要 11号住居跡の覆土を掘り込んで、北側中央の2柱穴は作られている。11号住居跡は奈良時代初期の住居跡と考えられているため、それ以降に作られた遺構である。1号掘立柱建物遺構と異なり、2間×3間の規則的な柱穴を持つ遺構であり、柱穴は10本検出されている。内側に柱穴は検出されていない。  
 規模 柱穴の中心間における距離で測る規模は、東西方向で約4.8m、南北方向で約3.9mであり、東西方向に長い長方形を呈している。柱穴間は、東西間で西側が1.65m、中央が1.5m、東側で1.65mであり、中央部分が少し狭くなる。南北方向では北側と南側でいずれも約19.5mと等距離であった。柱穴の深さは20～40cmとなっていた。このように平面形においては実に規則性の高い柱穴の配置であった。



第187図 2号掘立柱建物遺構実測図

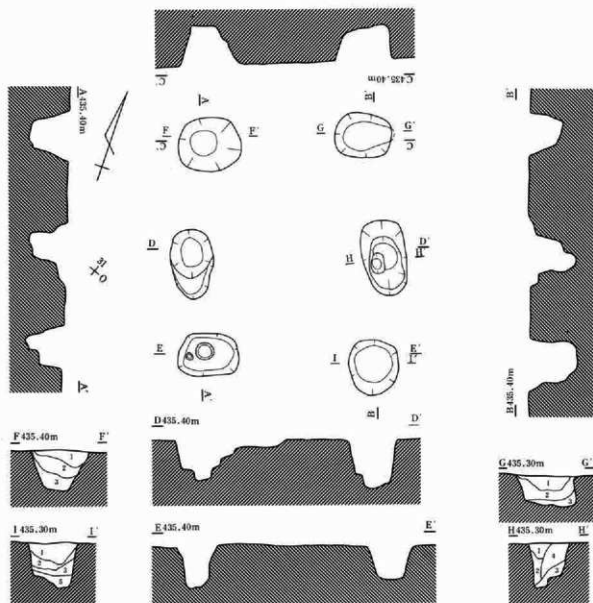


3号掘立柱建物遺構 遺構写真図版49

位置 30号住居跡の西約8mに位置し、N-30・31グリットに属する。

概要 1間×2間の小規模な掘立柱建物遺構である。小さいため西側と南側に延びる可能性があり、そこで西側の調査範囲を精査し追求した。しかし柱穴は検出できず。南側も調査範囲限界まで追求したが、やはり検出できなかった。おそらく6本柱よりなる1間×2間の規模であったものと思われる。柱穴は1・2号掘立柱建物遺構と異なり大きい。

規模 柱穴の中心間における距離で測る規模は、東西方向で約2.8m、南北方向で約3.3mであり、2号掘立柱建物遺構と異なり南北方向に長い長方形を呈している。柱穴間は南北方向で約1.6m前後であり、ほぼ中間に2柱穴が来る。柱穴の幅は70cm～1m前後で大きく、深さは60～80cmと深い。



1. 暗褐色土層 黒色土中にロームブロックを多く含む。
2. 黒褐色土層 黒色土中にローム粒子を少量含む。
3. 黄褐色土層 ローム粒子を主体として少量の黒色土を含む。
4. 暗褐色土層 黒色土中にローム粒子を多数に含む。
5. 黒色土層 黒色土を主とし、少量のローム粒を含む。

第188図 3号掘立柱建物遺構実測図

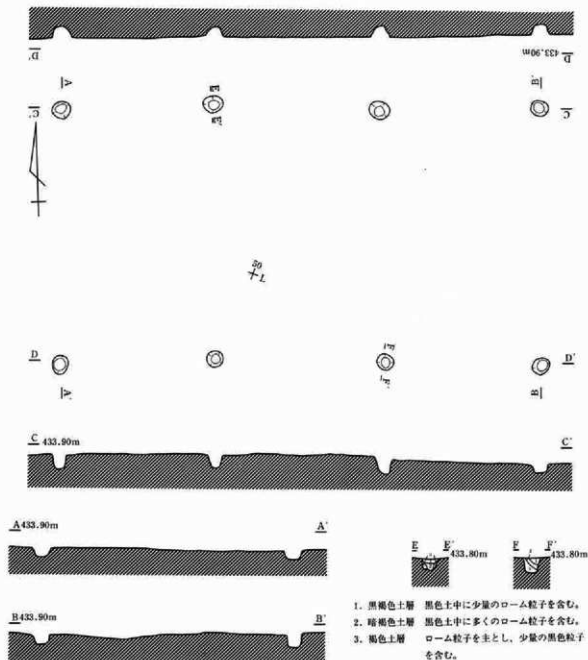
第5章 検出された遺構と遺物

4号掘立柱建物遺構 遺構写真図版49

位置 奈良・平安時代の住居群や1・2号掘立柱建物遺構とは大きく離れており、別の一群と思われる。最も近い32号住居群からでも、東約63mほど離れており、近接する遺構としては縄文時代の13・14号陥し穴と、5号掘立柱建物遺構がある。所属するグリットはK-49・50、L-49・50グリットである。

概要 1～3号掘立柱建物遺構と異なり、柱穴は小さく極めて浅い。覆土も異なっている。覆土の比較より見て新しい段階での遺構と考えられる。1間×3間の規模を持ち、ほぼ等間隔に柱穴が検出された。

規模 柱穴の中心間における距離で測る規模は、東西間で約7.6m、南北間で約4mであり、東西方向に長い長方形を呈している。東西方向の4柱穴間の距離は約2.5mであり、ほぼ一定している。南北間の距離は約4mであった。柱穴の幅は30cm前後と極めて小さく、深さは現状で15～25cmと浅い。



第189図 4号掘立柱建物遺構実測図

0 1m

5号掘立柱建物遺構

遺構写真図版50

位置 4号掘立柱建物遺構の南東に近接して位置し、K-51・52、L-51・52、M-51・52グリットに属する。

概要 4号掘立柱建物遺構の南東にはほぼ直交して位置する。柱穴の大きさ、深さ、覆土等においてもほぼ同一である。おそらく同一時期の関連遺構と考えられる。柱穴はさらに南側まで延びるものと思われるが、現状で1間×5間の南北方向に長い長方形を呈している。西側の柱列はほぼ直線であるが、東側の柱列は直線からはずれる柱穴がある。

規模 柱穴の中心間における距離で測る規模は、東西約3.3m、南北は調査範囲内で12m。南北2柱穴間は全てほぼ2.4m、柱穴の幅は25~30cm、深さは20~30cm。



第190図 5号掘立柱建物遺構実測図

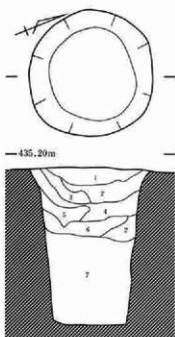
**井戸跡** 遺構写真図版50

**位置** 30号住居跡の東約4.5m、31号住居跡の北約1.5mに位置し、K-34グリットに属する。

**概要** 円形を呈し深く掘られた遺構である。井戸の可能性を考えて井戸として扱った。断面部は漏斗状を呈する。覆土上面に多くの円礫がレンズ状に堆積しており、人為的に埋められたことを物語る。

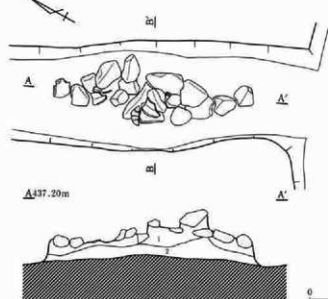
**規模** 直径は上端で1.9m、中程で1.6m、底部で1.15m、深さは2.45mであった。

**遺物** 全く出土していない。



第191図 井戸遺構実測図

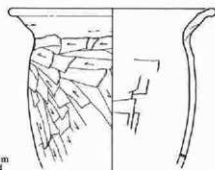
1. 円礫層 1~10cmの円礫がレンズ状に堆積している。
2. 黄褐色土層 ローム粒子の層。少量の黒色土を含む。
3. 黒褐色土層 ローム粒子・ロームブロックと黒色土の土層。
4. 黒褐色土層 黒色土層中にまだら状にロームブロック堆積。
5. 褐色土層 ロームを主とし、少量の円礫を含む。
6. 黒色土層 黒色土層中にわずかにロームブロックを含む。
7. 黒褐色土層 黒褐色土を主とする層。以下の土層作成せず。



第192図 集石遺構実測図、出土遺物実測図



1. 黒色土層 黒色土中にごく少量のローム粒子を含む。
2. 黒褐色土層 黒色土中に多数にローム粒子を含む。



**集石遺構** 遺構写真図版50 遺物写真図版86

**位置** 2号溝の覆土中に位置し、N-10グリットに属する。

**概要** 2号溝が中央部において約10cmほど埋った段階で、10~20cm程の大きさの石が20個体以上1個所に集められていた。

**規模** 石の範囲で、南北方向16m、東西方向5.5mであった。

**遺物** 石の上より奈良時代に属すると思われる土師器の甕が出土。口径は22cm、色調は褐色、残存は蓋、胎土中に白色粒子と石英粒子含む。

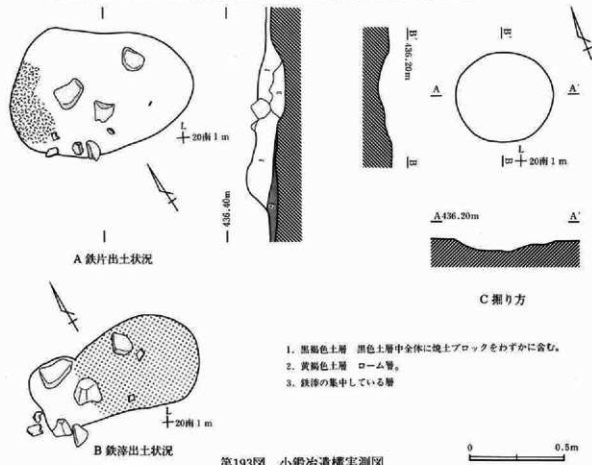
小鍛冶遺構 第193図 遺構写真図版50 遺物写真図版86

位置 11号住居跡の東3mに位置し、K・L-20グリットに属する。

概要 村主道跡で検出した小鍛冶遺構は1箇所である。本体はほとんど形状を留めておらず、掘り方の検出により床の部分だけが僅かに残存した。また小鍛冶遺構の周辺には鉄滓と鉄片が分布している。残存する小鍛冶遺構床面の掘り方は円形を呈していた。

規模 円形を呈する掘り方の規模は径約50cm、深さは7cm程度の浅いすり鉢状を呈す。上部構造は欠損しているため不明である。

遺物 多くの鉄滓があり、分布状況は小鍛冶遺構掘り方床面の真上に乗る状況を呈していた。鉄滓の大きさは平均化しており、径2~3cmφである。数点の礫が周辺から出土しており、すべてが熱を受け、その内1点には鉄分が融解して付着している。鉄滓は出土量全体で3.8kgであり、1片の鉄滓中には鉄分の残りはほんの僅かしかないと感じられる。また鉄片(チップ)が集中して分布する。概ね1~2mmで細長い形状を呈していた。また羽口片が8片検出できた。同遺構から土師器甕の口縁部と胴部の小破片が出土した。1点は奈良時代の甕で、他の1点は平安時代坏と思われる。



第193図 小鍛冶遺構実測図

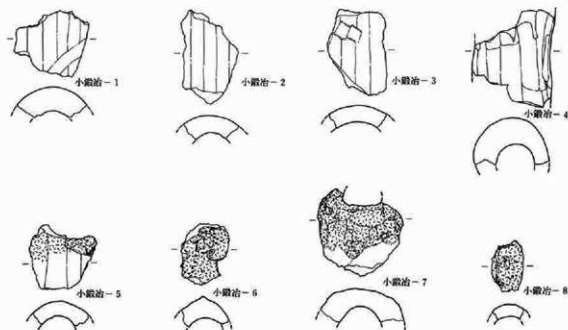
1・2号溝

位置 1・2号住居跡の南に位置し、K-8、L-7・8、M-7・8・9、N-7・9グリットに属する。

概要 東西方向の溝を2号溝、南北方向の溝を1号溝とし、2号溝が新しい。1号溝は北側で、2号溝は1・2号住居近くでそれぞれ検出が困難となる。

規模 1号溝は長さ約11m、幅90cm、深さ10~14cm、2号溝は長さ約17m、幅80cm、深さ20cm前後である。

第5章 検出された遺構と遺物

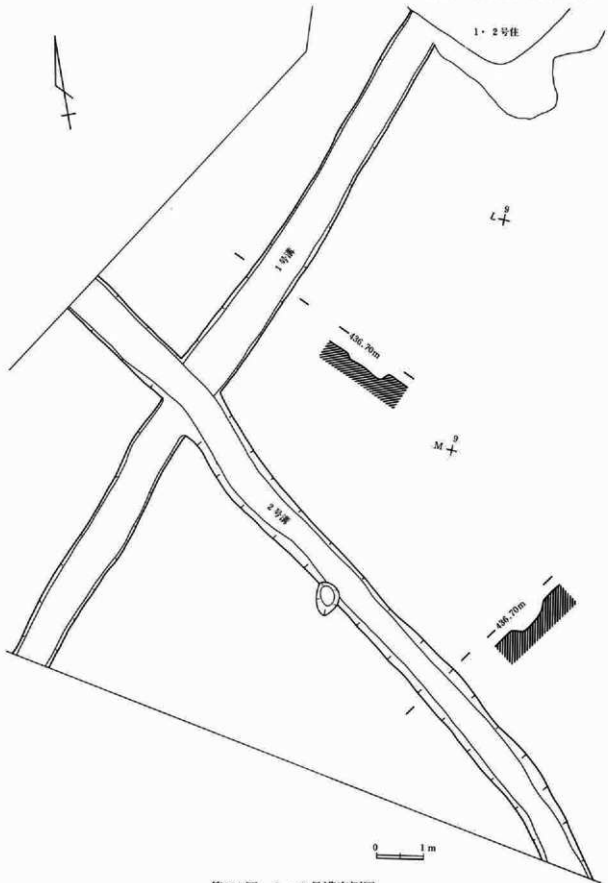


第194図 小鍛冶遺構出土遺物実測図

小鍛冶 出土遺物観察表 (図版番号第194図 写真図版86)

遺構名及び番 号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
小鍛冶-1	羽口 フク土	— — —	羽口の小破片である。図での上半約半分は下半と異なり黒色を帯びており還元状態に近い。小鍛冶の炉壁に差込まれていた部分と思われる。	①灰褐色と灰白色の部分が入り乱れている②酸化③④1mm以下の白色粒子を多く、2-3mmの白色粒子を少し含む
小鍛冶-2	羽口 フク土	— — —	羽口の小破片である。図での上部が炉壁に近い。内面は空気の流通のためか全面褐色、内面は棒状の工具で丸い中心穴を調整している。	①内面褐色・外面の上半灰褐色下半褐色②酸化③④1mm前後の金雲母と長石粒子と思われる砂粒を含む
小鍛冶-3	土製品 フク土	— — —	羽口の小破片であり、器肉が少し薄い。外面に色調の差はなし。外面ナデ整形、内面は細い棒状工具により調整している。	①褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を多く含む
小鍛冶-4	羽口 フク土	— — —	羽口の小破片である。中央の穴が中心よりずれており、器肉の厚さが一定していない。外面ナデ整形、内面に凸凹等整形痕無し。	①外面の上半約半分灰下半及び断面と内面褐色②酸化③④1mm以下の石英・長石・白色粒子を多く含む
小鍛冶-5	羽口 フク土	— — —	羽口先端部の破片である。先端部にガラス状の鉄滓が密着している。先端より約3.5cm下の部分で灰色を呈している。	①先端黒色、下半部灰色②還元③④1mm前後の白色粒子を多く含む
小鍛冶-6	土製品 フク土	— — —	羽口先端部の小破片である。表面は熱により乳白化している。内側は先端部より離れるに従い褐色を帯びてくる。	①外面灰褐色・断面内側褐色・外側黒褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子と石英粒子を多く含む
小鍛冶-7	羽口 フク土	— — —	羽口先端部の小破片である。先端部はガラス状で、先端の下半分は乳白化している。内側先端部灰色、下部灰褐色。内側ナデ整形。	①外面灰褐色・断面黒褐色・内側灰褐色②酸化③④1mm前後の石英・長石粒子を多く含む
小鍛冶-8	羽口 フク土	— — —	羽口先端部の小破片である。外側は全面ガラス状になっている。内側ナデ整形。	①外側黒色・内側一部褐色②酸化③④1mm以下の白色粒子を多く含む

第3節 掘立柱建物遺構・井戸跡・集石跡・小銀冶跡・溝



第195図 1・2号溝実測図

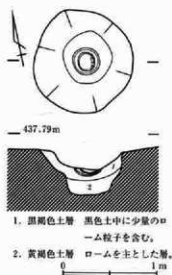
#### 4節 土器埋設小穴・土坑・陥し穴・グリッド出土遺物

土器埋設小穴 (奈良時代) 遺構写真図版51 遺物写真図版87

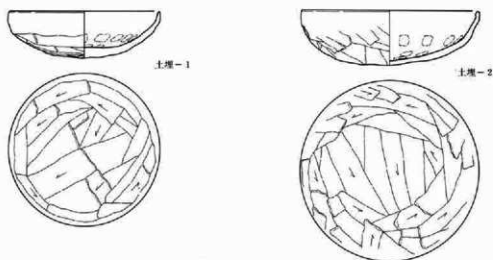
位置 10号住居跡北約4mに位置し、J-13グリッドに属する。

概要 多くの小穴が集中している地区の中に位置し、その中でこの小穴からのみ大小2個体の坏が完形品として出土した。坏は小形の坏が大形の坏の中に入った状態で重なって出土した。他の周辺の小穴と規模、覆土等において特別な違いは認められなかった。

規模 円形を呈しており、直径約53cmである。深さは遺構確認面より25cmである。土器は表土より12cmほど下に埋められており、小穴の底部からは10cmほど浮いていた。



第196図 土器埋設小穴実測図



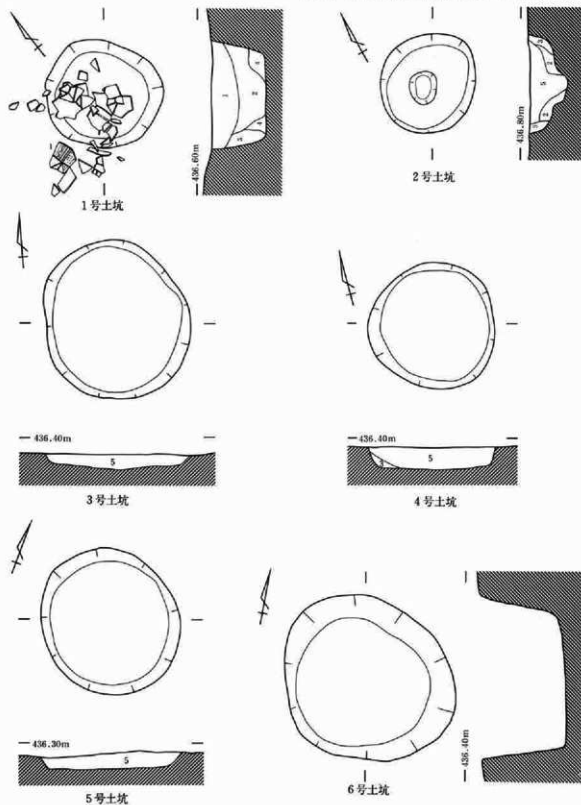
第197図 土器埋設小穴出土遺物実測図

土器埋設小穴 出土遺物観察表 (図版番号第197図 写真図版87)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(m) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②地色③残存④胎土⑤備考
土器埋設-1	坏 土師器	4.3 13.8 — フク土	口縁の内挿する大形の丸底坏である。口縁部は短く内挿し、横ナデ整形、体部～底部はへう削り。内面は全面でいねいなナデ整形で指頭圧痕残る。	①褐色②酸化③ほぼ完形④1mm以下の白色粒子和黑色粒子を少量含む
土器埋設-2	坏 土師器	3.6 11.7 — フク土	丸底の坏であり、口縁部は短く直立気味に立ち上がる。口縁部横ナデ、体部～底部へう削り、内面は全面でいねいなナデ整形で指頭圧痕残る。	①褐色②酸化③ほぼ完形④1mm以下の白色粒子和黑色粒子を少量含む



第4節 土器埋設小穴・土坑・陥穴・グリッド出土遺物

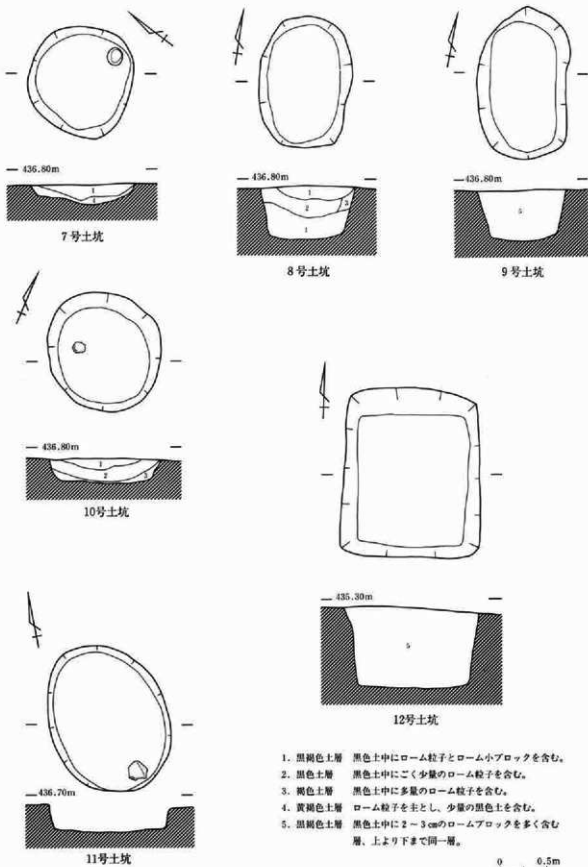


1. 暗褐色土層 黒色土中に少量のローム粒子を含む。  
 2. 茶褐色土層 黒色土中にローム粒子を多く含む。  
 3. 黄褐色土層 ローム粒子を主体とした層。  
 4. 黄褐色土層 ロームブロックを主体とした層。  
 5. 黒褐色土層 黒色土中にローム粒子を少量・3mm内外のロームブロックを少量含む。

第198図 1～6号土坑実測図

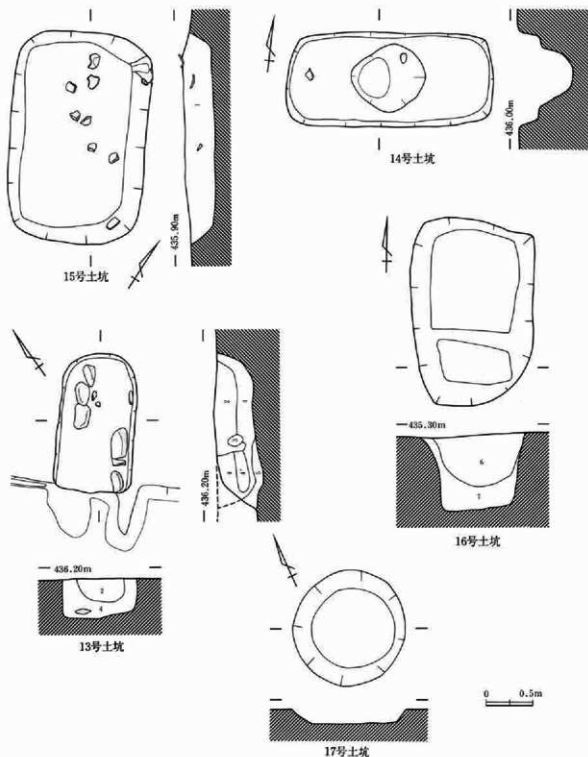
0 0.5m

第5章 検出された遺構と遺物



第199図 7～12号土坑実測図

第4節 土器埋設小穴・土坑・陥し穴・グリッド出土遺物



- |  |  |
|--|--|
| <p>1. 黒褐色土層 全体にローム粒子和ロームブロックが混入し、一気に増進した可能性が高い。</p> <p>2. 黒褐色土層 黒色土とローム粒子、ロームブロックの混入土層。</p> <p>3. 褐色土層 ロームブロックの層。</p> <p>4. 褐色土層 ローム粒子を主とし、ロームブロック・黒色土の混入土層</p> <p>4. 褐色土 多量のローム粒子を主とし、少量の黒色土含む。</p> | <p>5. 黒色土層 黒色土層中に焼土粒子、焼土ブロックの混入土層 (22号住居跡の一部を掘り込んでこの土坑が作られた。22号住居跡の掘り込み部分に焼土が多くあったために、この土坑の底に焼土が流れ込んだもの)</p> <p>6. 黒褐色土層 黒色土中に多くのローム粒子を混入している。</p> <p>7. 黒色土層 黒色土を主とし、少量のローム粒子を含む。</p> |
|--|--|

第200図 13～16号土坑実測図

## 第5章 検出された遺構と遺物

### 1号土坑 遺構写真図版51 遺物写真図版87

位置 2号土坑の北東約11m、6号土坑の西約11mに位置し、I-12グリットに属する。

概要 ほゞ円形を呈する土坑であり、深さも深い。この土坑の覆土より縄文時代中期土器片（半完形）がまとまって出土している。

規模 直径は60cm前後であり、深さは約60cmで深い。

遺物 縄文時代中期の口縁から胴部にかけての變形土器。

### 2号土坑 遺構写真図版51

位置 1号掘立柱建物遺構の東約3m、4号住居跡北東約7mに位置し、K-12グリットに属する。

概要 ほゞ円形を呈する浅い土坑であり、中央部がさらに一段と深く掘り込まれている。

規模 直径約1.5~1.6mであり、深さは中央部で60cmである。

### 3号土坑 遺構写真図版51

位置 11・12号土坑の北東約2m、4号土坑の東約50cmに位置し、K-18グリットに属する。

概要 3・4・5号土坑が近接して位置し、直径や深さにおいてもほゞ同一であり、関連している可能性有り。

規模 直径は長軸で1.6m、短軸で1.5mであり、深さは約18cmである。

### 4号土坑 遺構写真図版51

位置 11号土坑の北東約1.5m、3号土坑の西約50cmに位置し、K-18グリットに属する。

概要 3号土坑とほゞ同じであるが、少し口径が小さく深く掘り込まれている。

規模 直径は1m前後であり、深さは35cm前後である。

### 5号土坑 遺構写真図版51

位置 11号住居跡東壁の一部を掘り込んで作られており、K-18・19、L-18・19グリットに属する。

概要 3号土坑に規模・覆土は実によく似ており、同一目的で掘られた可能性あり。

規模 直径は1.5mであり、深さは15cm前後である。

### 6号土坑

位置 7号住居跡に近接して位置し、H-15グリットに属する。

概要 他の多くの土坑と異なり深い円形の土坑である。

規模 直径は長軸方向で1.9m、短軸方向で1.6mであり、深さは90cmで深い。

遺物 覆土中より縄文式土器片が1点出土している。

### 7号土坑 遺構写真図版52

位置 1号掘立柱建物遺構の北約1mに近接して位置し、J-10・11グリットに属する。

概要 浅い円形の土坑であり、東端近くの底部に小穴を持つ。

規模 直径は1.8m前後であり、深さは30cm前後である。

### 8号土坑 遺構写真図版52

位置 4号住居跡の東約3.5mで9・10号土坑と近接して位置し、M-12グリットに属する。

概要 楕円形を呈し、比較的深い土坑である。

規模 直径は長軸方向で約2.05m、短軸方向で約1.5mであり、深さは85cmで深い。

### 9号土坑 遺構写真図版52

位置 5号住居跡の北西約3mに位置し、8・10号土坑に近接し、M-12・13グリットに属する。

**概要** 楕円形を呈する土坑であり、深い。覆土は多くのロームブロックを含む一層であるため、人為的埋設か。

**規模** 長軸方向で約1.2m、短軸方向で約70cmであり、深さは40cmでやや深い。

#### 10号土坑 遺構写真図版52

**位置** 5号住居跡の北西約3mに位置し、8・9号土坑に近接し、M-13グリッドに属する。

**概要** ほゞ円形を呈する土坑であり、西側に石が1個体出土した。

**規模** 直径で1.8m前後であり、深さは40cmであった。

**遺物** 覆土中より土師質土器の埴と須恵器の環が出土している。

#### 11号土坑

**位置** 10号住居跡の南西約4mで、8・9・10号土坑の一群から北東約7mに位置し、L-14グリッドに属する。

**概要** 少し楕円形を呈する土坑であり、南側に石が1個体出土した。

**規模** 長軸方向で約1.6m、短軸方向で約1.26mであり、深さは28cmでやや深い。

#### 12号土坑 遺構写真図版52

**位置** 30号住居跡の北東約3.5mで、16号土坑と井戸跡に近接し、K-33グリッドに属する。

**概要** 方形を呈する土坑であり、9号土坑同様に覆土は一層であり、人為的な埋設が考えられる。

**規模** 長軸方向で約1.75m、短軸方向で約1.45mであり、深さは82cmで特に深い。

#### 13号土坑 遺構写真図版52

**位置** 22号住居跡の竈と思われる遺構をそっくり掘り抜いて、土坑が造られている。近くには東4.5mに14号土坑があり、O-21グリッドに属する。

**概要** 長方形を呈する土坑であり、覆土中より20-40cmほどの大きな石が多く出土した。また22号住居跡と接する底部には大量の焼土が検出された。竈燃焼部分に相当するものと思われる。

**規模** 南西側の壁は検出されなかったが、現状で長軸方向1.45m、短軸方向80cm、深さ40cmであった。

#### 14号土坑 遺構写真図版52

**位置** 21号住居跡の北1.2m、19・20号住居跡の西2m前後に位置し、N-22グリッドに属する。

**概要** 長方形を呈する浅い土坑であり、中央部に深い小穴が1つ掘られている。

**規模** 長軸方向で2.18m、短軸方向で1mであり、深さは中央小穴で55cm、小穴周辺で20cmである。

#### 15号土坑 遺構写真図版52

**位置** 20号住居跡の北東約5.5mに位置し、周辺に土坑は検出されなかった。M-25グリッドに属する。

**概要** 長方形を呈する浅い土坑であり、土坑としてはやや異質である。

**規模** 長軸方向で2.22m、短軸方向で1.42mであり、深さは約30cmである。

**遺物** 覆土中より須恵器の長須壺と思われる体部下半～底部の破片が出土している。

#### 16号土坑

**位置** 30号住居跡の北0.5mと近接して位置し、K-32グリッドに属する。

**概要** 長方形に近い土坑である。底部は2段に分かれており、南側の底部が一段高い。

**規模** 長軸方向で1.95m、短軸方向で1.3m、深さは浅い底部で78cm、深い底部で約90cmであった。

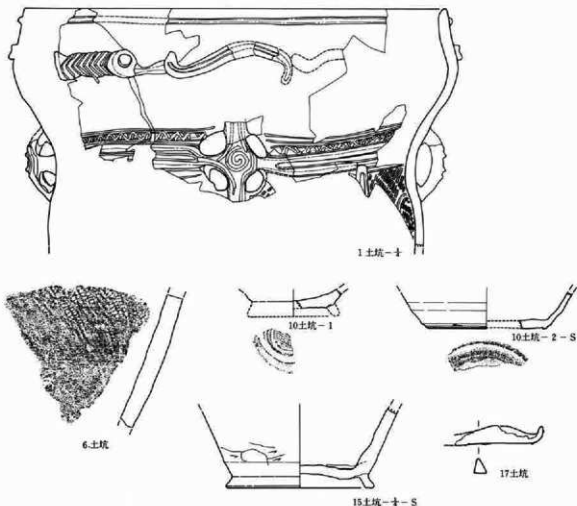
#### 17号土坑

**位置** 16号土坑の南東約170.5mに位置し、他の土坑群とは群が異なる。L-68グリッドに属する。

**概要** 円形を呈する土坑であるが、小さく浅い。

**規模** 直径で1.1m、深さは約10cmで浅い。

第5章 検出された遺構と遺物



第201図 1・6・10・15・17号土坑出土遺物実測図

1・6・10・15・17号土坑 出土遺物観察表 (図版番号第201図 写真図版87)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色②焼成③残存④胎土⑤備考
1土坑	深鉢 縄文	— (44.0) —	葉形土器の口縁から胴上半にかけて。器厚9mm—1.1cm。内面はやや丁寧な調整が行われている。口縁部無文帯に隆帯、頸部に把手。胴部には縄文施文。原体はR上。	①外面にいり黄褐色・内面灰褐色②良③口縁から胴部上半にかけては粗砂を含む
6土坑	深鉢 縄文	— — 6号土坑フタ土	深鉢形の胴部片。器厚は1.1—1.4cm。内面ややていねいな調整。外面に縄文施文。原体はL上/R。	①外面にいり黄褐色・内面褐色②良③胴部片④細砂を含む
10土坑-1	埴 土師質	— — フタ土	土師質土器の底部破片と思われる。高台ははずれている。高台内面に糸切痕が残る。	①灰色②還元焼成③火④1mm以下の白色粒子を多く含む
10土坑-2	埴 須恵器	— — (9.5) フタ土	削り出しと思われる高台を持つ埴である。高台は比較的高く、明確に調整。高台部内外面へ削り。	①灰色②還元焼成③火④表面に気泡化した黒色粒子が多く認められる
15土坑	長頸瓶 須恵器	— — 11.6 フタ土	上半部は明らかでないが、長頸瓶の可能性あり。内側底部輪なナゲ整形。高台部内側は糸切でなくナゲ。	①灰色②還元③火④3mm前後の赤色粒子を少量含む
17土坑	大打金 鉄器	最大長—8	錆化顕著で遺存不明である。図は左右ほぼ対象とした時の復元像である。形態は山形で、横断面は隅丸の山形を呈す。鍛えは不定方向の錆割れが顕著である。	

## (3) 陥し穴

村主遺跡からは縄文時代の陥し穴16基が検出された。このうち1号陥し穴から14号陥し穴は、大原Ⅱ遺跡検出の1号陥し穴から21号陥し穴とその形態や規模がほぼ同一であり、一定間隔に配列すること等から考えて同一群を構成するものと考えられる。同一群構成は35基となる。しかし、これは限られた路線内での調査結果であるから、実際はさらに多数の陥し穴が同一群を構成していたものと思われる。少なくとも9号陥し穴から10号陥し穴までの長さ約50mの路線外には多数の陥し穴の存在が予想される。そしてその構築時期は縄文時代早期頃と考えられる。

## 1号陥し穴 遺構写真図版53

L-74、M-74グリッドにかけて第Ⅳ層中で検出された。2号陥し穴の南西約5.5mのところの位置する。上面の規模は230×90cmの長楕円形、底面は180×25cmの中央で狭まる長楕円形を呈し、面積約0.67m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-15°-E。確認面からの深さは125cmであり、底面からビット3個を検出した。P<sub>1</sub>の深さ18cm、P<sub>2</sub>24cm、P<sub>3</sub>18cmをそれぞれ測る。覆土は7層に分かれた。第1層・茶褐色土、第2層・黒褐色土、第3層・暗褐色土、第4層・黒色土、第5層・黄褐色土、第6層・暗褐色土、第7層・黄褐色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。

## 2号陥し穴 遺構写真図版53

K-74、L-74・75グリッドにかけてローム層直上で検出された。1号陥し穴の北東約5.5mのところの位置する。上面の規模は185×175cmの楕円形、底面は125×70cmの長方形を呈し、面積約0.89m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-15°-W。確認面からの深さは110cmであり、底面からビット1個を検出した。ビットの深さは47cmである。覆土は5層に分かれた。第1層・黒色土、第2層・黒色土、第3層・暗褐色土、第4層・黄褐色土、第5層・黄褐色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。

## 3号陥し穴 遺構写真図版53

L-71グリッドにおいて検出されたが、遺構が路線外に延びているために完掘することはできなかった。4号陥し穴の南東約10.5mのところの位置する。確認面からの深さは105cmであり、覆土は6層に分かれた。第1層・黒褐色土、第2層・黒褐色土、第3層・暗褐色土、第4層・暗褐色土、第5層・黄褐色土、第6層・暗褐色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。

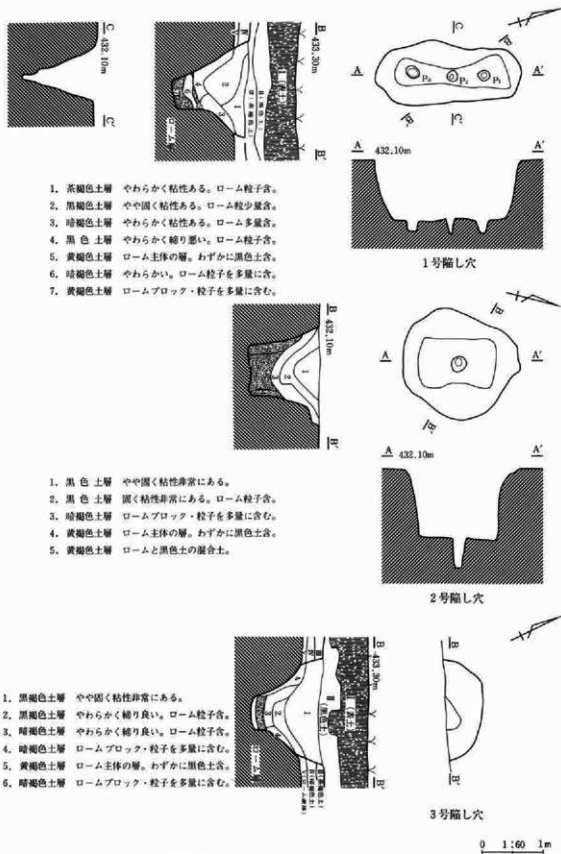
## 4号陥し穴 遺構写真図版53

K-69、L-69グリッドにかけてローム層直上で検出された。5号陥し穴の東約4.7mのところの位置する。上面の規模は223×110cmの長楕円形、底面は182×40cmの長楕円形を呈し、面積約0.75m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-14°-E。確認面からの深さは110cmであり、底面からビット3個を検出した。P<sub>1</sub>の深さ20cm、P<sub>2</sub>22cm、P<sub>3</sub>20cmをそれぞれ測る。覆土は6層に分かれた。第1層・黒褐色土、第2層・黒色土、第3層・暗褐色土、第4層・黄褐色土、第5層・黄褐色土、第6層・暗褐色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。

## 5号陥し穴 遺構写真図版54

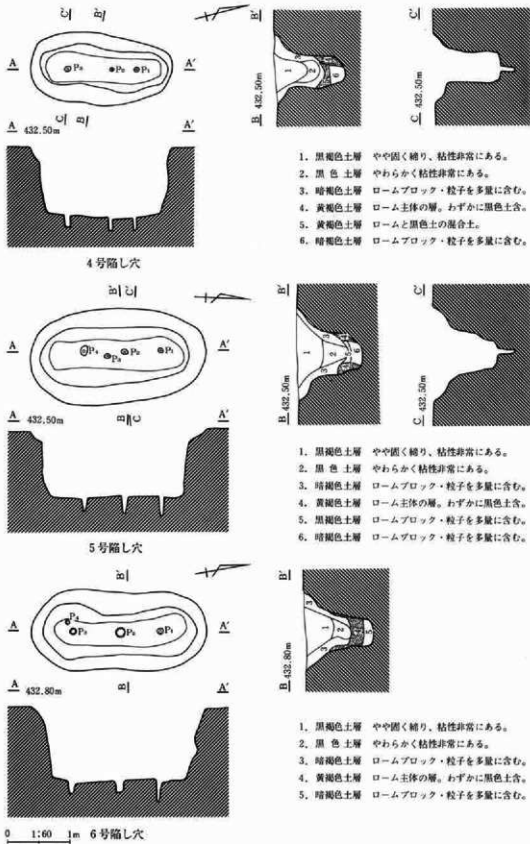
K-68、L-68グリッドにかけてローム層直上で検出された。4号陥し穴の西約4.7mのところの位置する。上面の規模は276×150cmの長楕円形、底面は210×45cmの長楕円形を呈し、面積約0.95m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-4°-W。確認面からの深さは105cmであり、底面からビット4個を検出した。P<sub>1</sub>の深さ30cm、P<sub>2</sub>26cm、P<sub>3</sub>26cm、P<sub>4</sub>20cmをそれぞれ測る。覆土は6層に分かれた。第1層・黒褐色土、第2層・黒色土、第3層・暗褐色土、第4層・黄褐色土、第5層・黒褐色土、第6層・暗褐色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。

第5章 検出された遺構と遺物

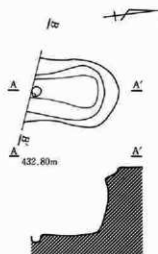
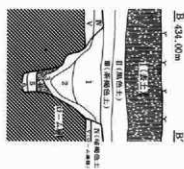


第202図 1・2・3号陥し穴実測図



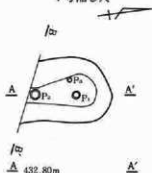
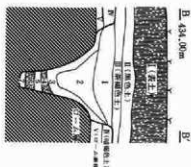


第203図 4・5・6号陥し穴実測図



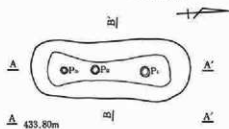
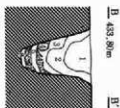
7号陥し穴

1. 黒褐色土層 やや固く締り、粘性非常にある。
2. 黒色土層 やや固く締り、粘性非常にある。
3. 暗褐色土層 ロームブロック・粒子を多量に含む。
4. 黄褐色土層 ローム主体の層。わずかに黒色土含。
5. 黒褐色土層 ロームブロック・粒子を多量に含む。
6. 暗褐色土層 ロームブロック・粒子を多量に含む。



9号陥し穴

1. 黒褐色土層 やや固く締り、粘性非常にある。
2. 黒色土層 やや固く締り、粘性非常にある。
3. 暗褐色土層 ロームブロック・粒子を多量に含む。
4. 黄褐色土層 ローム主体の層。わずかに黒色土含。
5. 黒褐色土層 ロームブロック・粒子を多量に含む。
6. 黄褐色土層 ローム主体の層。
7. 暗褐色土層 ロームブロック・粒子を多量に含む。



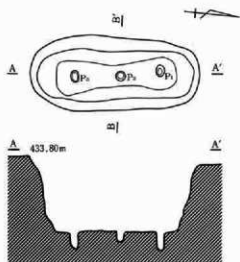
10号陥し穴

1. 黒褐色土層 やや固く締り粘性がある。
2. 暗褐色土層 やや固く締り粘性が非常にある。
3. 暗褐色土層 ロームブロック・粒子を多量に含む。
4. 黄褐色土層 やわらかく締り悪い。ローム主体層。
5. 暗褐色土層 やわらかく締り悪い。ローム主体層。
6. 黒色土層 やわらかく締り悪い。ローム粒子含。
7. 黄褐色土層 やわらかく締り悪い。ローム主体層。
8. 暗褐色土層 やわらかく締り悪い。ローム粒子含。

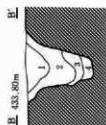
第204図 7・9・10号陥し穴実測図

0 1:80 1m

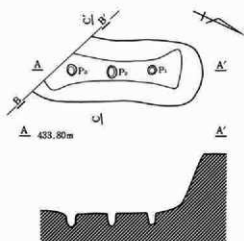
第4節 土器埋設小穴・土坑・陥し穴・グリッド出土遺物



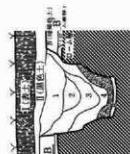
11号陥し穴



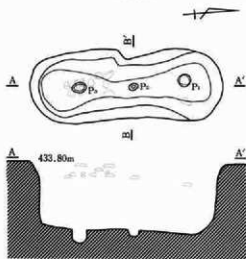
1. 黒褐色土層 やや固く締る。白色軽石を含む。
2. 暗褐色土層 やわらかく粘性非常にある。
3. 暗褐色土層 やわらかく粘性非常にある。
4. 茶褐色土層 粘性非常にある。ローム粒子多量含。



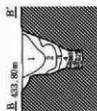
12号陥し穴



1. 黄褐色土層 ロームブロックを含む。人為的埋土。
2. 黒褐色土層 やや固く締り粘性ある。ローム粒含。
3. 暗褐色土層 やや固く締り粘性非常にある。
4. 暗褐色土層 やわらかく粘性非常にある。
5. 黄褐色土層 粘性非常にある。ローム主体の層。
6. 黒色土層 粘性非常にある。ローム粒子を含む。
7. 黄褐色土層 ローム主体の層。わずかに黒色土含。
8. 暗褐色土層 粘性非常にある。ローム粒子多量含。



13号陥し穴

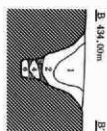


1. 黒褐色土層 やや固く締り粘性ある。ローム粒含。
2. 暗褐色土層 粘性非常にある。ローム粒子多量含。
3. 黄褐色土層 ロームブロック・粒子を多量に含む。
4. 暗褐色土層 粘性非常にある。ローム粒子多量含。
5. 黄褐色土層 ローム主体の層。わずかに黒色土含。
6. 茶褐色土層 ロームと黒色土の混合土。
7. 黄褐色土層 ロームと黒色土の混合土。
8. 暗褐色土層 ロームと黒色土の混合土。

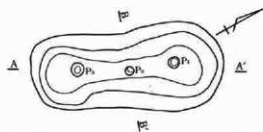
0 1:60 1m

第205図 11・12・13号陥し穴実測図

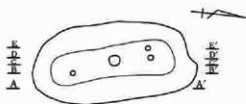
第5章 検出された遺構と遺物



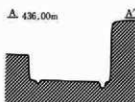
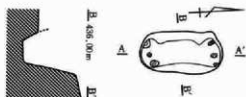
1. 黒褐色土層 やや固く粘性ある。ローム粒子を含む。
2. 暗褐色土層 粘性非常にある。ローム粒子多量含。
3. 黄褐色土層 ローム主体の層。わずかに黒色土含。
4. 暗褐色土層 粘性非常にある。ローム粒子多量含。
5. 黄褐色土層 ロームブロック・粒子を多量に含む。
6. 暗褐色土層 粘性非常にある。ローム粒子多量含。



14号陥し穴



8号陥し穴



15号陥し穴



16号陥し穴

第206図 14・8・15・16号陥し穴実測図



## 6号陥し穴 遺構写真図版54

L-64・65グリッドにかけてローム層直上で検出された。8号陥し穴の西約2.2mのところに位置する。上面の規模は278×120cmの長楕円形、底面は210×45cmの長楕円形を呈し、面積約0.8m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-8°-E。確認面からの深さは120cmであり、底面からピット4個を検出した。P<sub>1</sub>の深さ34cm、P<sub>2</sub>19cm、P<sub>3</sub>18cm、P<sub>4</sub>16cmをそれぞれ測る。覆土は5層に分かれた。第1層・黒褐色土、第2層・黒色土、第3層・暗褐色土、第4層・黄褐色土、第5層・暗褐色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。

## 7号陥し穴 遺構写真図版54

L-64グリッドにおいて第IV層中で検出されたが、遺構が路線外に延びているために完掘することはできなかった。6号陥し穴の西約2.7mのところに位置する。現状での上面規模は(140)×100cm、底面は(105)×30cmの中央で狭まる長楕円形を呈するものと思われ、面積約0.42m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-6°-E。確認面からの深さは127cmであり、底面からピット1個を検出した。ピットの深さは10cmである。覆土は6層に分かれた。第1層・黒褐色土、第2層・黒色土、第3層・暗褐色土、第4層・黄褐色土、第5層・黒褐色土、第6層・暗褐色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。

## 9号陥し穴 遺構写真図版54

L-63グリッドにおいて第IV層中で検出されたが、遺構が路線外に延びるために完掘することはできなかった。7号陥し穴の西約3mのところに位置する。現状での上面規模は(135)×95cm、底面は(110)×25cmの中央で狭まる長楕円形を呈するものと思われ、面積約0.4m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-6°-E。確認面からの深さは150cmであり、底面からピット3個を検出した。P<sub>1</sub>の深さ26cm、P<sub>2</sub>25cm、P<sub>22</sub>22cmをそれぞれ測る。覆土は7層に分かれた。第1層・黒褐色土、第2層・黒色土、第3層・暗褐色土、第4層・黄褐色土、第5層・黒褐色土、第6層・黄褐色土、第7層・暗褐色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。

## 10号陥し穴 遺構写真図版54

M-53グリッドにおいてローム層直上で検出された。11号陥し穴の東約3mのところに位置する。上面の規模は254×90cmの長楕円形、底面は195×30cmの中央で狭まる長楕円形を呈し、面積約0.77m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-2°-E。確認面からの深さは112cmであり、底面からピット3個を検出した。P<sub>1</sub>の深さ25cm、P<sub>2</sub>19cm、P<sub>3</sub>15cmをそれぞれ測る。覆土は8層に分かれた。第1層・黒褐色土、第2層・暗褐色土、第3層・暗褐色土、第4層・黄褐色土、第5層・暗褐色土、第6層・黒色土層、第7層・黄褐色土層、第8層・暗褐色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。

## 11号陥し穴 遺構写真図版55

M-52・53グリッドにかけてローム層直上で検出された。10号陥し穴の西約3mのところに位置する。上面の規模は271×114cmの長楕円形、底面は190×34cmの中央で狭まる長楕円形を呈し、面積約0.83m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-3°-W。確認面からの深さは119cmであり、底面からピット3個を検出した。P<sub>1</sub>の深さは28cm、P<sub>2</sub>14cm、P<sub>3</sub>25cmをそれぞれ測る。覆土は4層に分かれた。第1層・黒褐色土、第2層・暗褐色土、第3層・暗褐色土、第4層・茶褐色土である。覆土からは遺物の出土はなかった。

## 12号陥し穴 遺構写真図版55

M-51、N-51グリッドにかけてローム層直上で検出されたが、遺構が路線外に延びているために完掘することはできなかった。11号陥し穴の西約7.8mのところに位置する。上面の規模は(236)×95cmの中央でやや狭まる長楕円形、底面は(200)×30cmの中央で狭まる長楕円形を呈し、面積約0.81m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-26°-W。確認面からの深さは113cmであり、底面からピット3個を検出した。P<sub>1</sub>の深さ20cm、P<sub>2</sub>20cm、P<sub>3</sub>

## 第5章 検出された遺構と遺物

21.5cmをそれぞれ測る。覆土からは遺物の出土はなかった。

### 13号陥し穴 遺構写真図版55

K-49、L-49グリッドにかけてローム層直上で検出された。14号陥し穴の南東約6mのところに位置する。上面の規模は305×93cmの中央で狭まる長楕円形、底面の規模は268×24cmの中央で狭まる長楕円形を呈し、面積約1.18m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-2°-E。確認面からの深さは106cmであり、底面からピット3個を検出した。P<sub>1</sub>の深さ20cm、P<sub>2</sub>9cm、P<sub>3</sub>20cmをそれぞれ測る。覆土は8層に分かれた。第1層・黒褐色土、第2層・暗褐色土、第3層・黄褐色土、第4層・暗褐色土、第5層・黄褐色土、第6層・茶褐色土、第7層・黄褐色土、第8層・暗褐色土である。覆土最上層から礫11点が出土している。このうち7点は焼礫である。

### 14号陥し穴 遺構写真図版55

K-48、L-48グリッドにかけてローム層直上で検出された。13号陥し穴の北西約6mのところに位置する。上面の規模は305×120cmの中央でやや狭まる長楕円形、底面は246×27cmの中央で狭まる長楕円形を呈し、面積約1.08m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-24°-E。確認面からの深さは103cmであり、底面からピット3個を検出した。P<sub>1</sub>の深さ26cm、P<sub>2</sub>24cm、P<sub>3</sub>17cmをそれぞれ測る。覆土からは遺物の出土はなかった。

### 8号陥し穴

L-64・65グリッドにかけてローム層直上で検出された。6号陥し穴の東約2.2mのところに位置する。上面の規模は265×125cmの長楕円形、底面は200×50cmの長楕円形を呈し、面積約0.97m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-17°-W。確認面からの深さは120cmであり、底面からピット4個を検出した。覆土からは遺物の出土はなかった。

なお、当陥し穴は縦スライス調査を実施した。

以上、1号陥し穴から14号陥し穴の事実記載を行ったが、この他に2基の陥し穴が村主遺跡から検出されている。15・16号陥し穴がそれであるが、他の陥し穴とはその形態や規模、さらに配列等著しく異なっている。

### 15号陥し穴 遺構写真図版55

J-21グリッドにおいて16号住居跡（奈良時代）と重複して検出された。当陥し穴は住居跡によって壊されている。上面の規模は133×65cmの長楕円形、底面は126×36cmの長楕円形を呈し、面積約0.47m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-4°-E。確認面からの深さは98cmであり、底面からピット6個を検出した。ピットの深さはいずれも浅い。覆土からは遺物の出土はなかった。

### 16号陥し穴

M-14、N-14グリッドにかけて5号住居跡（平安時代）と重複して検出された。当陥し穴は住居跡によって壊されている。上面の規模は115×60cmの長方形、底面は102×35cmの長方形を呈し、面積約0.32m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-10°-E。確認面からの深さは80cmであり、底面からピット2個を検出した。P<sub>1</sub>の深さ23cm、P<sub>2</sub>の深さ37cmである。覆土からは遺物の出土はなかった。

15・16号陥し穴は、奈良時代・平安時代の住居跡によってそれぞれ壊されていることから判断して、構築時期をそれ以前に設定できる。しかし縄文時代の所産とするには村主遺跡内からでは判断材料に乏しい。そこで沢一つ隔てた十二原Ⅱ遺跡検出の陥し穴群を介在させ比較検討すると、その形態や規模、主軸方向等共通する要素をみつけることができる。十二原Ⅱ遺跡検出の陥し穴群の構築時期は縄文時代前期前葉以前に求められる。当遺跡検出の15・16号陥し穴も同様な時期にその構築が考えられるであろうか。

## 第4節 土器埋設小穴・土坑・陥し穴・グリッド出土遺物

村主遺跡検出の陥し穴一覧表

No.	グリッド	上面 cm (長径×短径)	底面 cm (長径×短径)	上面 長径/短径	底面積 (m <sup>2</sup> )	底面 長径/短径	深さ (cm)	主軸方向	ビット数	出土遺物
1	L-74, M-74	(230×90)	(180×25)	2.56	0.67	7.20	120	N-15°-E	3	
2	K-74, L-74-75	(185×175)	(125×70)	1.06	0.89	1.79	110	N-15°-W	1	
3	L-71	((?)×(165))	((?)×(55))	—	—	—	105	—	—	
4	K-69, L-69	(223×110)	(182×40)	2.03	0.75	4.55	110	N-14°-E	3	
5	K-68, L-68	(276×150)	(210×45)	1.84	0.95	4.67	105	N-4°-W	4	
6	L-64-65	(278×120)	(210×38)	2.32	0.80	5.53	120	N-8°-E	4	
7	L-64	((140)×100)	((105)×30)	(1.40)	(0.42)	(3.50)	127	N-6°-E	(1)	
8	L-64-65	(265×125)	(200×50)	2.12	0.97	4.0	120	N-17°-W	4	
9	L-63	((135)×95)	((110)×25)	(1.42)	(0.4)	(4.4)	150	N-6°-E	(3)	
10	M-53	(254×90)	(195×30)	2.82	0.77	6.50	112	N-2°-E	3	
11	M-52-53	(271×114)	(190×34)	2.38	0.83	5.59	119	N-3°-W	3	
12	M-51, N-51	((236)×95)	((200)×30)	2.48	(0.81)	6.67	113	N-26°-W	3	
13	K-49, L-49	(305×93)	(268×24)	3.28	1.18	11.17	106	N-2°-E	3	層11点
14	K-48, L-48	(305×120)	(246×27)	2.54	1.08	9.11	103	N-24°-E	3	
15	J-21	(133×85)	(126×36)	2.05	0.47	3.50	98	N-4°-E	6	
16	M-14, N-14	(115×60)	(102×35)	1.92	0.32	2.91	80	N-10°-E	2	

※ 上面の規模は遺構確認面における規模である。

※ 深さは確認面からの深さである。ただし、1・3・7・9・12号はローム漸移層上の暗褐色土層から掘り込まれている。

※ 3・7・9・12号陥し穴は遺構が路線外に延びているために完掘することはできなかった。

※ ( )内数値は完掘されなかったために現状のままを表示している。

※ 各陥し穴の覆土堆積状態の線引き、注記はすべて同一人(調査担当者)により行われている。これは大原Ⅱ遺跡検出の陥し穴群についても同様である。

※ 陥し穴覆土内のスクリーン・トーンはローム主体の層を表示している。

※ 陥し穴上に堆積する土層説明は以下のとおりである。

第Ⅰ層 表土層 やわらかく締り悪い。EPを含む。

第Ⅱ層 黒色土層 やわらかく粘性非常にある。EPを少量含む。

第Ⅲ層 茶褐色土層 やわらかく締り良い。粘性が非常にある。

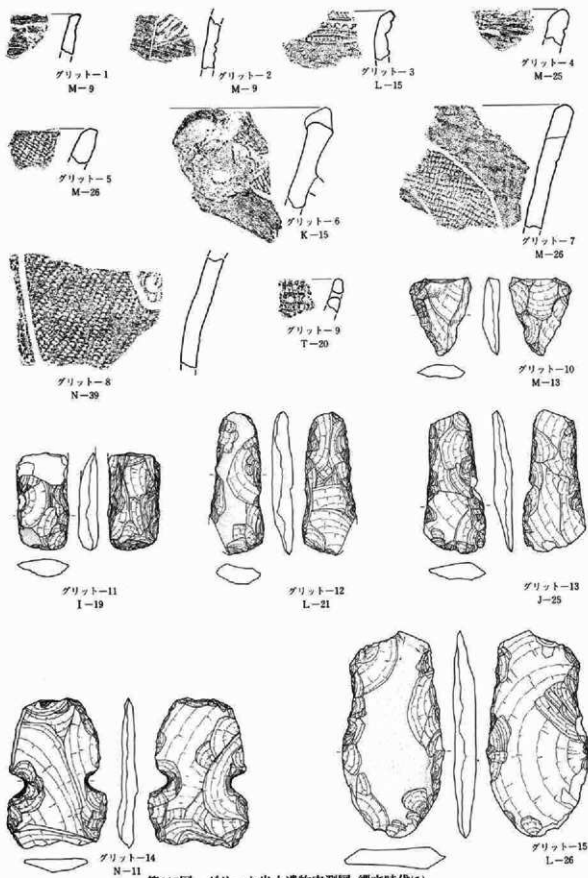
第Ⅳ層 暗褐色土層 やわらかく締り良い。粘性が非常にある。

ローム粒子を少量含む。

第Ⅴ層 ローム漸移層

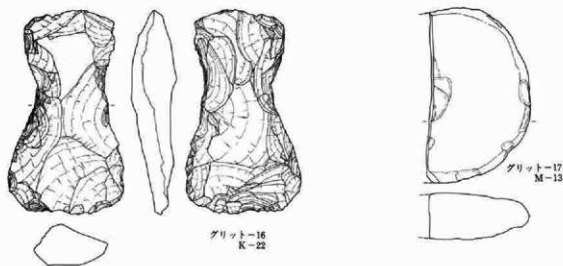
第Ⅵ層 ローム層

第5章 検出された遺構と遺物



第207図 グリット出土遺物実測図 縄文時代(1)





第208図 グリット出土遺物実測図 縄文時代(2)

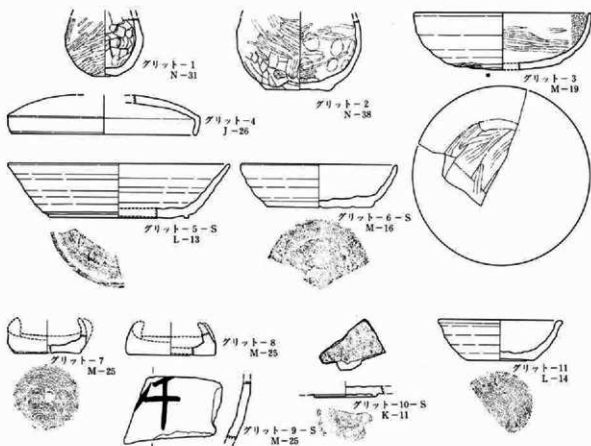
グリット 出土遺物観察表 (図版番号第207図)

遺構名及び番	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④土⑤備考
村主 グリット1	深鉢 縄文	— — — M-9	口唇部は内側が伏を呈し、刻目が付される。器厚7mm~9mm。外面は沈線の区画内に沈線を充填。	①外面にふい赤褐色・内面橙色②良③口縁部片④含繊維⑤輪が島台式
村主 グリット2	深鉢 縄文	— — — M-9	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。竹筴状工具を用い沈線の区画内に沈線を充填。蓋面はナズ仕上げ。	①外面にふい赤褐色・内面橙色②良③胴部片④含繊維⑤輪が島台式
村主 グリット3	深鉢 縄文	— — — L-15	深鉢形土器の口縁部片で口唇部に刻目。器厚7mm~9mm。内面は丁寧な調整。	①外面暗赤褐色・内面にふい黄褐色③口縁部片④雲母・砂礫を含む⑤五領ケ台式
村主 グリット4	深鉢 縄文	— — — M-25	深鉢形土器の口縁部片で口唇部は丸味をもつ。器厚1.5cm。内面は粗い調整。外面にはL/Rの縄文施文。	①外面黒灰色・内面灰褐色②良③口縁部片④石英・粗砂を含む
村主 グリット5	深鉢 縄文	— — — M-26	深鉢形土器の口縁部片。器厚1.4cm~1.8cm。内面は横ミダキ。外面に縄文施文。原体はL/R。	①外面淡黄色・内面黒灰色②良③口縁部片④石英・粗砂を含む
村主 グリット6	深鉢 縄文	— — — K-15	深鉢形土器の口縁部片。器厚1.5cm。内面は粗い調整が行われている。外面に縄文施文。原体はL/R。	①外面淡黄色・内面黒灰色②やや良③口縁部片④石英・粗砂を含む⑤加曽利E式
村主 グリット7	深鉢 縄文	— — — M-26	深鉢形土器の外脣する口縁部片。器厚1.2cm~1.6cm。内面は粗い調整が行われている。外面には沈線によるアーチ状区画内に縄文充填。原体はL/R。	①外面淡黄色・内面にふい黄褐色②やや良③口縁部片④石英・粗砂を含む⑤加曽利E式
村主 グリット8	深鉢 縄文	— — — N-39	深鉢形土器の胴部片。器厚1cm~1.3cm。内面は横ミダキが行われている。外面は縄文施文。原体はR/L。	①外面にふい橙色・内面にふい橙色②良③胴部片④粗砂を含む⑤加曽利E式
村主 グリット9	深鉢 縄文	— — — T-20	深鉢形土器の口縁部片で口唇部に刻目がある。器厚7mm~9mm。内面は丁寧な調整。	①外面にふい褐色・内面赤褐色②良③口縁部片④粗砂を含む⑤輪穿孔
村主 グリット10	石器	縦-6.2 横-5.0 重量-40g M-13	片面調整スクレイパー。比較的薄手の割片に細かな調整刻線を施し、刃部を作り出している。	③完形③黒色頁岩

第5章 検出された遺構と遺物

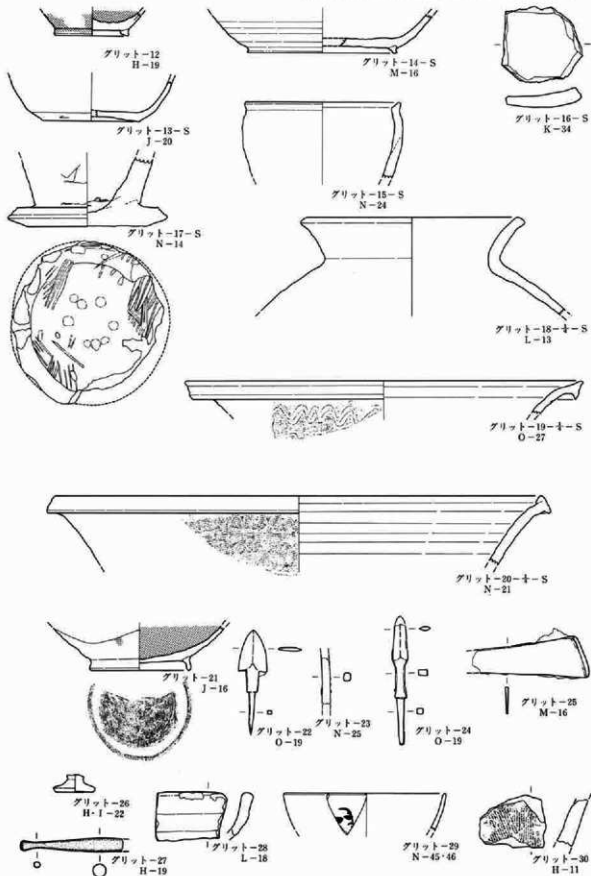
グリット 出土遺物観察表 (図版番号第207・208図 写真図版86・87)

遺構名及び 番 号	器形及 び器種	器高・口径・底径(cm) 出土 位 置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤胎考
村主 グリット11	石器	縦—(7.7) 横—4.1 重量—70g I—19	打製石斧(短冊形)。両側縁がほぼ直線的である。	③基部欠⑤黒色頁岩
村主 グリット12	石器	縦—11.4 横—4.3 重量—100g L—21	打製石斧(短冊形)。両側縁がほぼ直線的である。	③完形⑤黒色頁岩
村主 グリット13	石器	縦—10.3 横—5.0 重量—80g J—25	打製石斧(撥形)。両側縁が内側に彎曲している。	③完形⑤黒色頁岩
村主 グリット14	石器	縦—12.0 横—8.0 重量—150g N—11	打製石斧(分銅形)。胴部ほぼ中央の両側縁に抉り込み状の加工を行っている。	③完形⑤黒色頁岩
村主 グリット15	石器	縦—16.3 横—8.2 重量—310g L—26	打製石斧(撥形)。一側縁が内側に彎曲している。	③完形⑤黒色頁岩
村主 グリット16	石器	縦—16.1 横—9.2 重量—450g K—22	打製石斧(分銅形)。胴部ほぼ中央の両側縁に抉り込み状の加工を行っている。	③完形⑤黒色安山岩
村 主 グリット17	磨石	縦—13.8 横—8.3 重量—500g M—13	器面に磨耗痕、側縁に敲打痕が認められる。	③イ



第209図 グリット出土遺物実測図 古墳～近世(1)

第4節 土器埋設小穴・土坑・陥し穴・グリッド出土遺物



第210図 グリッド出土遺物実測図 古墳～近世(2)

第5章 検出された遺構と遺物

グリット 出土遺物観察表 (図版番号第209・210図 写真図版87)

遺構名及び番号	器形及び器種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①灰褐色②酸化③灰④1mm以下の白色粒子を多く含む
グリット-1	無蓋壺 土師器	— — 1.8 N-31	口縁部は欠損しているが、上げ底風の無蓋壺であろう。外面は荒い割れの刷毛目後全面へう研磨。内面は指ナゲ後上半部横ナゲ。古墳時代石田川平期前。	①灰褐色②酸化③灰④1mm以下の白色粒子を多く含む
グリット-2	鉢 土師器	— — 5.1 N-38	口縁部の欠けた広口壺である。内面中位は指頭が顯著で下部はへう削り、上半部はへう研磨を残す。外面はへう削り後刷毛上半部を研磨している。	①灰褐色②酸化③灰④1mm以下の白色粒子を多く含む
グリット-3	環	— (13.6) — M-19	底部は丸く、体部と口縁部は内彎しつつ上方へ開く。内面は全面研磨後吸炭により黒色を呈する。底面へう削り、ロクロ使用の可能性あり。	①外面褐色・内面黒色②酸化③灰④1mm以下の白色粒子を多く含む
グリット-4	蓋 灰釉	— (14.5) — J-26	灰釉の蓋であり、非常に出土例の少ない器形である。天井部は丸く、端部は下方へ長く折り曲げている。天井部は全面釉、天井部以外の器表面横ナゲ。	①濃地灰色・釉薄緑②還元③灰④密
グリット-5	環 須恵器	4.3 (17.4) (11.1) L-13	口径・底径とも大きな削り出し高台の環である。高台と高台内側の底部の高さは同じ。高台周辺は削り込まれている。体部-口縁部は直線で外上方へ開く。	①灰色②還元焼結③灰④1mm以下の白色粒子を少量、1mm前後の黒色粒子を多く含む。⑤ロクロ右回転
グリット-6	環 須恵器	3.4 (12.2) (8.1) M-16	器高の低い小形の環であり、体部は内彎しつつ外上方へ開く。底面に右回転へう切痕が無調整のままに残る。体部下端と底部端との境に段を持つ。	①外面黒色・断面と内面灰白色②還元③灰④1mm以下の白色粒子と1-2mmの石英粒子を多く含む
グリット-7	耳皿	— — 5.1 M-25	耳皿の底部-体部の破片である。底部中央に0.5cmの穴がつけられている。底面右回転糸切痕。	①灰白色②還元③底部のみ完形④1mm以下の白色粒子を多く含む
グリット-8	耳皿	— — (6.8) M-25	耳皿の底部-体部の小破片である。底面に右回転糸切痕が残る。	①灰白色②還元③体部のみ完形④1mm以下の白色粒子を多く含む
グリット-9	壺 須恵器	— — — M-25	須恵器壺体部の小破片と思われる。体部外側に墨書が書かれているが判読できず。	①灰色②還元③体部の小破片④1mm以下の白色粒子を多く含む
グリット-10	環 須恵器	— — — K-11	高台を持つ環であり、高台は付か削り出し不明。内側底面へうによる磨きあり、判読できず。	①灰色②還元③底面の小破片④1mm以下の白色粒子を少し含む
グリット-11	環 土師質	3.2 9.9 5.3 L-14	小形の環である。口縁部は内彎しつつ上方に開き、一度や立ち上がった後に口縁部は少し外反する。底面に右回転糸切痕を残す。	①灰褐色②酸化③灰④1mm以下の白色粒子を多く含む
グリット-12	長頸瓶 灰釉	— — 8.0 H-19	長頸瓶の底部と思われる。断面台形の高台が付き、端部は内側に削り込まれている。高台部内側回転へう削り。内面に渦巻状の凸凹が残る。	①濃地灰色・釉薄緑②還元③底部のみ完形④密
グリット-13	環 須恵器	— — (7.6) J-20	底径のやや小さい環である。体部は内彎しつつ外上方へ開く。底面は右回転へう削り調整。	①灰色②還元焼結③灰④1mm以下の白色粒子を多く含む
グリット-14	環 須恵器	— — (11.8) M-16	短い高台を付けた環である。体部は内彎しつつ外上方へ開き、高台は断面三角形を呈する。高台部内側回転ナゲ整形。ロクロは右回転と思われる。	①灰褐色②酸化③灰④1mm以下の白色粒子を多く含む
グリット-15	埴 須恵器	— (12.0) — N-24	器高の深い埴であり、31号住居跡出土須恵器に近似する。口縁部は外反し、口唇部は内傾する。	①灰色②還元焼結③灰④1mm以下の白色粒子を多く含む
グリット-16	壺 須恵器	— — — K-34	須恵器壺の小破片である。周辺部をすべて削り落としており、内側は磨耗している。転用品である。	①灰褐色②還元③小破片④1mm以下の白色粒子を多く含む

第4節 土器埋設小穴・土坑・陥し穴・グリッド出土土物

グリッド 出土土物観察表 (図版番号第210図 写真図版87)

遺構名及び番号	器形及び品種	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形、成形、調整、底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
グリット-17	鉢 須恵器	— — 9.4 N-14	鉢の底部～腰部下半である。底部は厚く大きい円盤状を呈し、腰部は直線的に外上方へ立ち上がる。円盤状底部の端は上下方向より削り三角形を呈し、底面はナメ整形。内側底部は平底でなくU字状である。	①灰色②還元③底部と腰部下半のみはほぼ完全④1mm以下の白色粒子を多く含む
グリット-18	壺 須恵器	— (22.0) — L-13	須恵器壺の口縁部～肩部の破片である。口縁部は肩部よりくの字状に外反し、口縁端部に折り返し等は行なわれていない。内面波状であり、外面平行円形。	①灰白色②還元③欠④1mm以下の白色粒子を多く含む
グリット-19	壺 須恵器	— (30.9) — O-27	須恵器大壺の口縁部の小破片である。口縁部は幅広く作られ、端部は鋭角となり中央部に凸帯を持つ。頸部に2本単位の波状文を数段持つ。	①黒色②還元焼練③小破片④1mm以下の白色粒子を多く含む
グリット-20	壺 須恵器	— (51.6) — N-21	須恵器大壺の口縁部～頸部の小破片である。口縁部は幅広く厚く作られており、端部も丸い。頸部に5本単位の波状文を数段持つ。	①灰色②還元焼練③1mm以下の白色粒子を多く含む
グリット-21	坑 灰釉	— — 7.6 J-16	底面より腰部は内押しつつ外上方へ開く、外側底面はほぼ平だが、内側底面は中央部が凹状になり、その部分の器肉が薄い。高台部内側ナメ整形。	①灰白色、釉は薄緑色～透明②還元③欠④赤⑤内面は黒灰による釉と砂粒等が溶着している
グリット-22	鉄鉢 鉄器	全長-7.9 匙柄長-1.6 高さ-3.7 最大重ね-0.4 O-19	有柄平根形の鉢で、完形である。腹刺を持つ蓋・蓋被とも短い。蓋先は偏平で殆ど刃的で、その部分内裏がある。蓋被の断面形は扁平な長方形である。蓋の断面形は方形である。錆化は椀目状でなく、主目が椀目の小さな単位に見える。	
グリット-23	鉄器	全長-3.9 N-25	棒状の鉄器で、断面は隅丸方形を呈する。両端は調査時の欠損である。錆化は椀目状である。	
グリット-24	鉄鉢 鉄器	全長-9 匙柄中程幅-0.7 O-19	有柄、根形の鉢で先端・蓋灰を失うが旧時か調査時か不明。中程に凹区がある。蓋先は刺形、両刃となるが肉裏が少ないため鋭は顕著でなかったと考えられる。蓋に踏巻状の横帯が見られるが跡が残っていないので、本来の形であるか疑問。錆化は椀目でない。	
グリット-25	鎌 鉄器	全長-9.2 匙柄長-2.9 最大の重ね-0.4 M-16	鉄鎌片で切先を失う。調査時の欠損。耳の返りを持つ右利用の鎌である。刃はやや内彎するため研減りと考えられるが、全体にしっかりしている。刃作りは片刃というよりもわずかに置し平造りに近い。穂は直線的である。柄の痕跡はない。錆化は椀目でない。	
グリット-26	蓋 陶器	1.3 2.8 — H-1-22	つまみを持つ小さな蓋である。底面に右回転の糸切痕あり。17-18世紀代の製品と考えられる。	①表面黒褐色の鉄輪・断面灰色②還元③ほぼ完形④赤⑤産地不明
グリット-27	煙管 銅製	全長-8.0 最大径-1.0 H-19	煙管の吸い口部分である。板金を筒状に丸め、合せ目に銀線付が残る。合せはつぎ寄り半分がはがれている。同場所よりラウ及び履道は未検出であった。	①黒褐色③完形④江戸時代後期か
グリット-28	撞鉢 陶器	— — — L-18	内外面に鉄輪が施されている撞鉢の口縁部破片である。ざんぐりした淡黄灰色の業地で軟質。	①素地淡黄灰色・釉黒褐色③口縁部小破片④赤⑤17-18世紀代で美濃焼
グリット-29	碗 磁器	— — — H-11	磁器の碗の口縁部小破片である。外面に染付あり。	①素地灰白色・釉透明③口縁部小破片④赤⑤伊万里系で18世紀代
グリット-30	撞鉢 陶器	— — — N-45-46	内外面に鉄輪が施されている撞鉢の小破片である。内面に13+α条の筋目あり。	①素地淡黄灰色・釉黒褐色③腰部小破片④赤⑤18-19世紀代で美濃焼

## 第6章 調査成果の整理と考察

### 第1節 遺構について

発掘調査を進めてゆく中で大原Ⅱ遺跡と村主遺跡は、耕作土から遺構確認面までの土の堆積が厚く、遺構の残りは良好であることに気付いた。そのためできる限り高い位置で遺構の検出ができるよう努力して調査にあたった。発掘作業を進めてゆく中で、多くの疑問が浮かびあがってくる。それらの多くは歴史を解く大きな錠となるはずである。今回はその中から村主遺跡6号住居跡にみられた焼失住居の状態から上屋構造の問題と、竈の調査を行なう中で常日頃より感じていた竈の廃棄の問題の2題について考えをまとめてみた。

#### (1) 焼失住居跡にみられる上屋構造と竈の扱いの一例

——村主遺跡6号住居跡の調査例から——

はじめに

県内において、焼失住居跡と考えられている調査例が多く報告されている。それらの例を詳しく観察することにより、各時代を通しての上屋構造を探る大きな手がかりをつかむことができると思う。しかし県内において現段階では、その分野での研究が充分行なわれているとは言えないのが現状である。村主遺跡調査の結果、6号住居跡が焼失住居跡であり、多くの炭化材を残していたことが明らかとなった。さらに調査の進捗中で、この住居跡は引越した後に焼失していることが考えられてきた。そこでこの住居跡の調査を通して考えられる上屋構造と、引越をした後の竈の扱いについて考えてみたい。なお図や写真は6号住居跡説明の項に示してある。

##### (1) 住居跡の構造と検出時の様相

6号住居跡は、村主遺跡で調査された38軒の奈良・平安時代の住居群の中のはほぼ中央に位置しており、奈良時代初期の住居跡の中の1軒である。住居の掘込面での規模は、東西方向で6.3m、南北方向で6.8mを測り、他の住居跡同様南北方向にやや長い平面形を呈している。壁高は50~60cmで、周溝幅15~20cm、深さ5cm前後であった。柱穴は4本検出され、直径は50cm前後であり、深さは70cm前後であった。住居東壁に竈が構築されていたが上半部が欠損しており、残存は良好でなかった。住居内より屋根材と思われる炭化材の多くが残存していた。それをていねいに検出し、調査後それらの炭化材を取りのぞくと、焼失前の住居の放棄された状態が良好に検出できた。このようにこの住居跡では、ある程度の住居の上屋構造の想定と、地表面下の構造を結びつけて理解する手がかりを得ることができた。さらに住居跡がどのようにして放棄されてゆくのかの過程及び竈に対する考え方等々多くの問題点を提供してくれた。

##### (2) 床面に残された炭化材及び床面と壁に残された焼土の状態から考えられること。

6号住居跡の床面上に残存していた多くの炭化材は、後に記しているような理由から上屋構造の構築材が床面に落ち込んで、後に火を受けて炭化材として多くが残ったと理解している。

床面に残っている炭化材をよく観察すると以下の特色に気付く。その特色について①~⑨まで列記し、その特色より考えられる事について①~⑨で記した。

- ① 第50図や図版20・21で明らかのように、床面上には炭化材が大量に住居中央に向かい放射状に落ちている。
- ② 炭化材の大きさは12cm前後の角材を含み、太い垂木を使用している。
- ③ 竈上部と南壁中央部に近い床面上に炭化材がほとんど散布していない。
- ④ 4柱穴の位置に柱の炭化材が全く残存していない。また柱が倒れたような炭化材も検出されない。

- ⑤ 4柱穴に囲まれた床面中央部には、太い炭化材が全く検出されていない。
- ⑥ 4本柱を支柱として、梁が固定され、この梁に垂木が結びつけられていたものと思われる。その梁の炭化材が全く検出されていない。
- ⑦ 放射状の炭化材のみで、横方向の炭化材はほとんど検出されていない。
- ⑧ 住居確認、および確認されない以前における耕作土中を含めて壁の外側に炭化材が全く検出されていない。

⑨ 炭化材の上面では、遺物がほとんど検出されていない。

これらの特色より以下のことが考えられる。

- ① 垂木はあまり隙間を持たずに梁にならべてたてかけてあった。
- ② 垂木は12cm前後と太いため、火事により燃えて灰とならずに炭として残った。また加工材を含んでいるため、転用材の利用も一部で考えられる。
- ③ 竈と住居南壁中央部の上屋構造は、他の個所と異なるものであった。竈部分は火を用いるために、他の壁面上の屋根と異なり、竈専用の屋根を持っていた。その構造とは、住居中央に向かう放射状の垂木ではなく、竈煙道方向を長軸(梁)とした屋根が太い木材等を用いて作られていた可能性が考えられる。また南壁中央部に近い床面が他の個所と上屋構造が違うということは、おそらくこの部分が住居の出入口であり、出入口方向(南北方向)に細長い屋根が母屋の屋根とは別に架けられていたものと思われる。そのため住居床面中央に向かう放射状の垂木の炭化材が少ないのも左証である。
- ④ 大量の垂木の炭化材があるにもかかわらず、柱材らしきものが全く検出されていない。柱穴断面調査等においても全く柱の炭化材らしきものが検出できなかった。おそらく柱は4本ともぬき取られていたものと思われる。
- ⑤ 4本柱内側の屋根材は、外側の太い垂木を中心とした屋根材と異なり、燃えやすく炭化材として残りにくい細かい材料を用いているため、炭化材として残らなかったのではないだろうか。つまり、地面から4本柱間の梁までの間の垂木材と、4本柱間の梁から天井部に向かう最も高い屋根材は異なっており、地面から4本柱までの頑強な屋根材の上に細く軽量の屋根材を用いて作られていたことが考えられる。
- ⑥ 大量の炭化材が検出されたにもかかわらず、垂木を支える梁の炭化材が全く検出されない。この梁も柱同様に持ち去られたものと思われる。
- ⑦ 4本柱外側の屋根材の骨組は太い垂木を多く梁に掛けて作っており、格子状に横木を用いた構造ではないため横方向の炭化材が検出されないものと思われる。横方向の木も垂木を固定させるために用いられている可能性はあるが、細かい材料であったものと思われる。
- ⑧ 住居確認面である壁外側には炭化材もあった可能性はあるが、風化や後世の耕作等により消えていったものと思われる。
- ⑨ 住居内に残された遺物は、ごく少量の小破片を除けば炭化材の下より出土した。これは住居放棄後遺物の流入がほとんど行なわれていなかったことを示し、また焼失前に存在したであろう多くの完形品に近い・甕等の遺物は、住居使用中に焼失したなら、大部分は運び出すことができずに、炭化材の下に埋もれているものと思われる。しかし調査の結果炭化材の下より出土した遺物は、完形品はほとんどなく接合しても1個体とならない破片が大部分であった。これは引越後の焼失を物語っていると思われる。

①～⑨までの観察結果より考えられることは以上のものであった。

次にこれらの炭化材を除くと、床面と壁面の一部に焼土化した部分が確認された。床面においては、出入

## 第6章 調査成果の整理と考察

口部と思われる南側を除く部分の柱穴より内側にかけた幅40～70cmにわたり帯状に床面が赤く焼けていた。壁面にあつては、竈部分と出入口部分と思われる南壁中央部を除く全壁面に焼土化した部分があり、その部分は壁の上面から床面までの全面ではなく、約60cmの壁高のうちの中位置部分より20～40cmほどの壁面のみである。その上下部分はほとんど焼土化していないのである。この現象は何を意味するのであろうか。床面の焼土化については次のことが考えられる。

床面の炭化材と床面の焼土化した部分を重ね合わせてみると炭化材先端の床面中央部と接した内側部分の床面が焼土化していることが判明した。つまり床面上の垂木の先端と床面の接した部分の床は空気が充分供給され焼けて焼土化したと考えられる。太い垂木が重なるように接する垂木下の床面は焼けていないのである。壁中位置の焼土化についてはなぜこのような現象が起こるのか理解できない。考えられる可能性としては、住居外より住居内に倒れ込んでいる垂木は、壁を柱にしており、壁上部と床面との間には0.6m以上の隙間がある。そのため充分ともいえなくとも空気の流通がある。そのため壁を柱に架けている垂木は焼けやすい。その炭は下方の床面に当らず、また柱として接する壁上部の垂木は燃えにくいいためその部分は焼土化しないことは考えられないだろうか。このような理由から壁中位置のみ焼土化したのではないだろうか。

次に竈に目を移してみると、次のことが指摘できる。竈は極めて残りが悪く燃焼部や煙道部すべてがこわれており焚口天井石が燃焼室内に落ち込んでいる。袖部も残りが悪い。さらによく観察すると、こわれた竈内に落ちている焚口天井石の上に、炭化材が被うようにかぶさっており、焚口及び燃焼部の袖部がくずれており、その上に炭化材が重なっていた。この炭化材は煙道部には認められなかった。これらの状況から次のことが考えられる。住居が焼失した以前に竈はこわれていた。さらに考えを進めるなら住居中央部の覆土や床面上の炭化物及び床面の焼土部分を見る限り、住居放棄後長期間経過しない時点で焼失していることが考えられるため、竈がほぼ完形で残存していたなら、これほどこわれることは考えられない。このような状況より住居焼失以前に、竈はこわれたのではなく、こわされていたのである。竈中央部の支石をぬき去り焚口天井石を落とし、両袖部をくずしているのである。引越し以前に竈をこわしたと思われる例は他にも多く、2・5・7・26号住居等においても可能性があり多く検出されている。次に屋根、垂木等の骨組みの上に乗る屋根材について観察してみる。重なり合った垂木の上をよく観察すると、カヤの炭化した束が数箇所より検出された。燃えやすいことや、炭化しても弱くつぶれて粉状を呈しているものが多いが、1本1本を観察すると、カヤの幹や表皮であることが確認できた。大量のカヤが屋根材として外側を覆っていたものと思われる。次に壁面をよく観察すると、壁の下に多くの炭の堆積が目目される。その中には壁を被覆したであろうカヤの炭化物も検出され、さらにカヤを支えた壁面のクイと思われる炭化物も検出された。しかしそのカヤが壁に伴うものなのか、屋根からくずれ落ちたものなのかを区別することはできなかった。

以上の観察結果及び観察により、この6号住居跡が焼けて埋まるまでの順序として以下のことが考えられる。①住居の使用停止を決める。②住居内の完形土器および必要破片その他の必要な家財道具を新しい引越先へ運び出す。③竈の支脚を抜き去り、焚口天井部や袖部等をこわして、竈の機能を停止させる。④4本柱内側の天井材をくずす。⑤梁をはずし、垂木や屋根材を住居床面上に落とす。⑥柱を抜き去り、梁材同様に住居外に持ち出す。⑦火をつけて焼失させる。⑧住居内はやがて埋没し、住居外の屋根材は風化及び耕作等により破壊される。

1遺跡1焼失住居跡調査例の観察のみで考えられたことについて記してきた。そのため多くの誤りや考え方の違いが含まれていると思われる。今後も機会を持ってさらに追求してゆきたい。(中沢 悟)

参考文献 前原 豊・川島雅人「第9号住居跡と出土遺物」『市道連絡発掘調査団』長野県佐久市教育委員会 1976



## (2) 竈の廃棄について — 村主遺跡における平安時代の竈を中心とした竈の様相 —

はじめに

県内において平安時代に属する住居跡は数多く発掘調査が実施されてきており、それに伴い多くの竈も調査されてきた。しかし調査例が増加したにもかかわらず、竈の使用法や構造についての研究は充分進んでいるとは思われない。その原因の1つとして、竈の使用法を良好に物語る残りの良い竈の発掘例が極めて少ないことがあげられる。我々が竈の調査を行なう時、竈の焚口天井石が使用時の位置で残った例や、支脚が残されたままの例はきわめて少ない。残っている焚口天井石も焚口手前の床面上に落ちていて、粘土や地山の土等で固定してあるはずの袖石も1～2石がはずれている例が多い。そして竈焚口手前の床面上に多くの石が散乱しているという状態が多いように思われる。このような状態は、何故起こるのであろうか。調査例の中には、自然崩壊や後世の耕作等により竈がこわされた例も多いと思われるが、自然崩壊とするなら、我々の調査により、落ちた石や粘土を元の位置にもどすことにより竈の復元も可能と思われるが、そのような例は極めて少なく、また後世の耕作等による破壊とするなら、住居覆土上面ではなく、住居埋没前と思われる床面上に多くの石が散乱していることと矛盾する。また耕作等による破壊が行なわれたとしても、住居内で最も低く、竈内にあり、周辺の破壊から最も守られているはずの支脚石がほとんど竈内に残存していないことは何故であろうか。これらの事例を考え合わせると、住居廃棄時において、竈の支脚石を抜き取り、使用不可能となるような人間の行為、つまり竈の機能停止を行なうための一定の行動がそこに存在したのではないだろうか。このようなことについて考えてみたい。

## (1) 竈はこわれるのか、こわされるのか

村主遺跡の調査を進める中で、3号住居跡の竈を発掘する機会を得た。他の竈同様に範囲確認から始め、竈上に堆積した覆土を除去してゆくと、燃焼部中央と思われる部分より、羽釜の口縁部がほぼ完形で出土した。さらに焚口部においては、天井石が2つに折れてはいたが、袖石に乗ったままの状態であることが判明した。煙道部天井石の一部が欠損しているため、その部分より羽釜の胴部周辺から底部に向けて掘り進む。この部分は、住居内覆土と異なり極めて軟質であった。羽釜の底部は、石製支脚の上に置かれており、燃焼部中央に据えられていたほぼ完形の羽釜は支脚の上に乗せて使用されていた。完形の羽釜を支脚石の上に乗せて、燃焼部の天井は多くの平らな石を袖部や煙道部天井石から羽釜の胴下部に接するように設置されていた。石と羽釜との隙間は割れた他の羽釜の破片を転用して埋めていた。また燃焼部左袖外側に、割れた羽釜の破片3枚が重ねて置いてあった。おそらく竈使用中に中央の完形の羽釜と天井石との間に新たな空間ができた時、炎や煙が出ないように補修するための材料として準備していたものと考えられる。このような状態で検出された例は県内ではほとんどないため、この3号住居跡の竈の例を1つの標準例として考えを進めたい。では他の住居跡の竈は、このような竈が、どのような状態となった段階で検出されているのであろうか。村主遺跡においては、2・5・6・7・11・26号住居跡の竈の残りが比較的良く、その中で、石を多く用いている奈良時代の26号住居跡と平安時代の5・7号住居跡の竈の例をとり検討してみたい。

5号住居跡の竈は、焚口天井石が焚口手前の床面上に落ちており、煙道部天井石の2石がロームにより固く覆われてほぼ原位置を留めて残存していた。支脚石は残存していなかった。竈使用時の状態に復元するため焚口手前に落ちていた天井石を最も手前の袖石の上に載せてみた。乗せることはできたが、燃焼部の幅が狭くなりすぎて、中央に羽釜が据えられなくなることが明らかとなった。そのため残存していた焚口の袖石は、最前列の石ではなく、さらに焚口手前に1石ずつ袖石の存在していた可能性を示した。その袖石ははずされ

## 第6章 調査成果の整理と考察

ていたのである。これらの調査結果より、3号住居跡の竈を参考として推定復元したのが第46図である。

7号住居跡の竈では、焚口天井石と思われる長い石や煙道部の天井石は検出されなかった。調査により、燃焼部中央に大きな石が、あたかも意識的に投げ込まれたような状態で検出された。そして左袖石中央部の1石と支脚が抜きとられていた。燃焼部中央に落ちていた石を除くと、下から羽釜を中心とした遺物が多く出土した。このような状況はすべての天井石と支脚石をはずし、大きな石を燃焼部中央に置くことにより、この竈はもう使えませぬという意志表示を竈の神様や家族又は近所の人々に対し示しているかのように思えるのである。

26号住居跡は、奈良時代に属する住居跡であるが、ここの竈も石組のため平安時代の竈とほぼ同様な作りであったと考えられる。焚口手前の床面上から、焚口天井石と思われる細長い石と、煙道天井部と思われる細長い石が検出された。その2石を推定復元してみると第135図のようになった。つまりこの竈では袖石は抜き去っていないで、天井石を床面上に落としているのである。当然支脚石は残されていない。

このように、比較的竈構築材を多く残存し、竈構造の復元及び放棄する時の方法等が推察できそうな例は県内各地より報告されている。その1例として第211図に示した沼田市石黒遺跡B区5号住居跡とD区5号住居跡、また群馬町の北原遺跡34・49号住居跡、さらに昭和村糸井宮前遺跡27号住居跡や藤岡市中遺跡3号住居跡等を例にあげることができる。いずれも石を多く用いた竈で、焚口天井石がはずされており、支脚石が検出されていない例と思われる。このように燃焼部中央の使用中の羽釜又は鑿を持ち去った後、支脚石を抜き取ることを第1条件として、焚口天井石をはずすことを第2条件と、以下燃焼部天井石と煙道部天井石の一部又はすべてをはずし、焚口天井石の乗る袖石の1～2石を抜き去ることを第3条件として、竈が、竈として機能しなくなるような作業を行なっているのではないだろうか。このような竈崩壊の原因として、他にも自然崩壊や後世の耕作等による行為も当然含まれてくるとは思われるが、その他に、人間の意志によるこのような行為が強く存在したのではないだろうか。つまり、竈は、こわれるだけではなく、こわされていると理解したい。

### (2) 竈に利用した石の再利用について

村主遺跡は、遺構確認面がローム上の黒褐色土であり、多くの住居跡はロームを掘り込んで構築されていた。調査区全体がそのような状態であり、竈に利用できるような石をこの付近より採取することは、北側に流れる赤谷川の河川敷まで行かなければできなかったものと思われる。今日における遺構面と河川敷との比高差は約35mであり、かならずしも今日と奈良・平安時代の河川敷とは同一ではないと思われるが、やはり大きな石を多く採取し、集落内に運び込む事はたやすいことではなかったと思われる。平安時代において、竈を構築する際には、多くの石を用いており、少なくとも、焚口天井石1石・袖石6～12石・煙道部天井石3～4石・燃焼部天井石2～4石・支脚用の石の合計13～22石は必要であったと思われ、それ以上の石がさらに補強用材として用いられていたと考えられる。これらの石は、1軒の竈を作る際に必要となり、住居放棄時においては不要となるはずである。そのため次の竈を作る際に抜き取ってゆき利用することがより合理的と考えられる。しかし多くの調査例が物語るように、支脚の石は大部分が抜き取られているが、その他の竈内の多くの石は、おそらく床面上の石も含めると、多くの石が残されている例が多い。特に袖石に至っては多くの部分で残存しており、入手困難と思われる細長い焚口天井石さえ、床面上に残されている例が少なくないのである。ただし竈内で使用されている石のすべてが新たに河川敷等より持たされた新しい石とは限らず、中には袖石として使用された石で火を受けていない面が過去において火を受けた痕跡を持つ7号住居S-7のような例も存在する。しかし竈に使用された多くの石は、次の住居に持ち込まれることなく放置され、新たな竈には新たな石を大部分用いて構築されているように思えるのである。なぜこのようなことが行なわれているのであろうか。

## (3) 住居と竈の引越に伴う竈の廃棄について

これまで述べてきたように、引越等により住居が使用されなくなった時点における竈に対する行為、つまり再利用がたやすくできなくなるような一種の破壊行為は、何故行なわれているのであろうか。また新たに竈を構築する際に、従来使用していた竈から多くの石を抜き取って再利用することを避けているのは、何故であろうか。それらの現象の中に竈に対する人の考え方を読みとることはできないであろうか。これらの疑問に対する1つの考え方として次のことが考えられる。竈を新しく作るということは、新たな家を作り、引越することが前提と考えられる。その場合新しい家は、古い家の近くに、古い家と竈を利用して作られる。つまり新しい家の竈は、古い家の竈とは全く別に作られるのである。家と竈が完成し、家財道具等の引越を行なう時、竈も引越を行なうのである。竈の引越とは竈内で消えることなく保ちつづけられていたであろう火を取り出し、竈内燃焼部の中心にあり竈の代表的存在でありかつ移動の比較的たやすく行なえるもの、つまり支脚石がそれに該当するわけであるが、その支脚石を抜き去り、新しい竈へ移すこと、これが古い竈より火を移して引越するのと同じような竈の引越とは考えられないだろうか。支脚石の抜き去られた古い竈は、そのままの状態でもとして放置すること避けて、竈としての機能を失なわせることにより初めて竈でなくなり、その時点で放棄しているのではないだろうか。竈としての機能を失なわせるための行為としては、これまで述べてきたような焚口天井石をはじめとした天井石の多くや、袖石の一部等はずすことであり、このような一種の儀式が行なわれていたのではないだろうか。またこのような経過のため、古い住居内の竈に使用された竈内の石は、基本的には新しい家の竈に使用されていないのではないだろうか。またこのような一般例の中で、ほぼ完全形で竈の残存していた3号住の竈は、引越に伴う基本的な作業を全く行っていない、実に例外的な例であり、これを好例として考えてきたが、逆になぜ行なわれなかったのかについても実に興味深い。

## おわりに

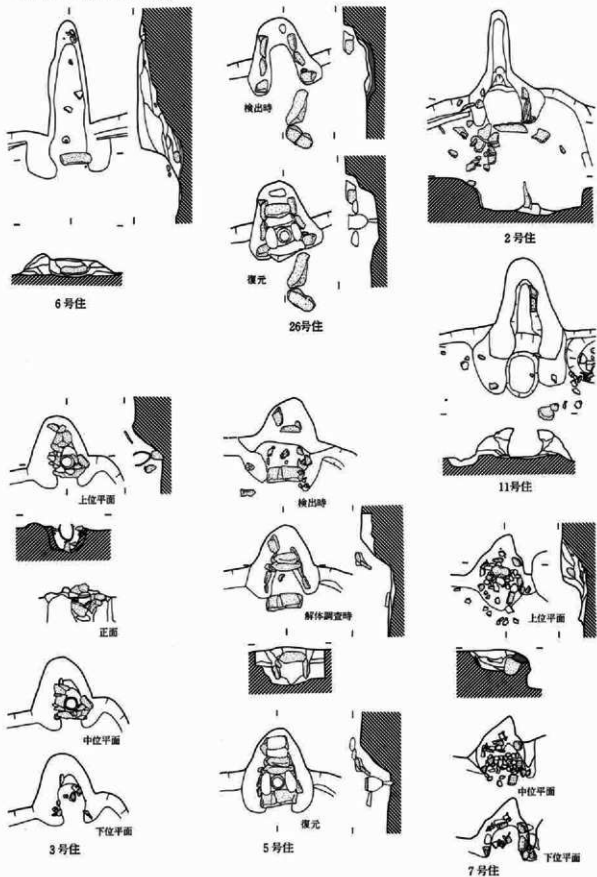
竈の調査を行なう中で、何故残りが悪いかについて考えてきた。その考え方の1つをまとめてみると、以上のことが考えられた。しだいに竈に対する信仰心・竈の神様としての存在に考え方が近づいてきた。またこのような在り方は、古墳時代の竈とは大きく異なるようであり、その違いについても、今後問題化してゆく必要があると思われる。村主遺跡発掘終了後、藤岡市上栗須遺跡の発掘調査を行なった。その遺跡は粘土地帯の中にあるため、竈自体が一種の焼き物に近い状態となり、煙道の残りが非常に良好であった。しかし燃焼部と焚口部の天井部が良好に残存していた例はなく、さらに天井部が燃焼部に落下していた例もほとんど検出できなかった。つまり燃焼部と焚口部の天井は大部分はざされていのである。このような例は、他に多く検出されており、今後も検出されてゆくであろう。さらに調査を進める中で、竈に反映されているであろう、人間の意志について考えてゆきたい。

(中沢 悟)

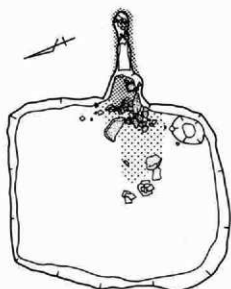
## 参考文献

- (1) 鬼形芳夫・依田治雄ほか「北原遺跡」群馬町教育委員会ほか 1986
- (2) 水田 念・石北直樹「石碓遺跡」沼田市教育委員会ほか 1985
- (3) 石守 晃・山口逸弘ほか「赤井宮前遺跡Ⅰ」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- (4) 長谷部達雄ほか「森遺跡・中Ⅰ遺跡・中Ⅱ遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- (5) 桐原 健「古代東国における竈信仰の一面」『国学院雑誌』第78巻9号 1977

第6章 調査成果の整理と考察



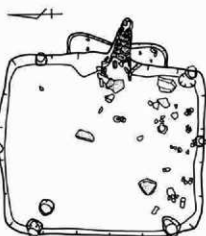
第211図 村主遺跡における竈の残存・崩壊・復元状況



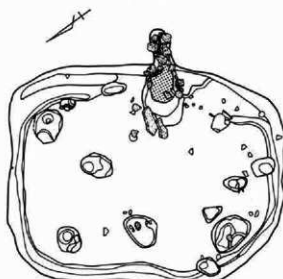
群馬町北原遺跡34号住



沼田市石黒遺跡B区5号住



沼田市石黒遺跡D区5号住



昭和村糸井宮前遺跡27号住



藤岡市中遺跡3号住



群馬町北原遺跡49号住

第212図 県内における石を用いた竈の崩壊状況例

## 第2節 遺物について

### (1) 遺物の取り扱いについて

発掘調査を進めてゆく中で、土器を中心として多くの遺物が出土してくる。それらの遺物に対し、どのような意味づけを行ない、どのような方法で取り上げたら最も有効な調査となり得るのであろうか。このことについて考えつつも、多くの遺構と遺物の中にあつて実施できた方法は、従来行なってきた方法と同じである。発掘調査を進めてゆく中で遺構確認のできない出土箇所やまだ検出できない状況時における遺物はグリットで取り上げ、遺構内より出土した覆土上層の小破片は、覆土遺物として取り上げた。そのため平面図や断面図等において記録はとっていない。遺構覆土の下層～床面にかけての遺物も小破片に関してはその多くを、覆土上面出土の遺物と同様に取り上げた。大きな破片や床面上の小破片を中心として柱状に残して、平面実測と写真撮影を行なった。平面実測図中の片端に遺物番号・遺物名と出土遺物の残存状態・標高及び床面よりどのくらい浮いているか又は床面下であるか等について記録した。

発掘調査の結果、住居跡や土坑さらに明確な遺構の検出できなかった地区等から土器や石器その他の遺物17850個が検出された。それらは縄文時代・弥生時代・奈良時代・平安時代・中近世時代と多くの時代にわたっている。その中で奈良時代に属する遺物が全体の約65%であり、最も多いことを示した。各遺構出土の遺物については、遺構ごとに概略を述べ、実測図と遺物観察表をのせてできるだけ詳細な報告に努めた。

これらの遺物を調査してゆく中で、数多くの情報を提供してくれた。今回はその中から月夜野町を含む県北地区で多く分布し、県央や県南ではほとんど出土の知られていない月夜野型羽釜の問題と、数は多くないが、やはりこの地域のみ分布している脚付羽釜の問題、さらに住居内出土の鉄器を主とした鉄製遺物についてまとめることができた。またその他に遺物としては胎土分析や土器序列等も行なったが、これについては第3節と第4節で取り扱った。遺構内、特に住居内より出土する土器については、出土の在り方からどのように使用され放棄されてゆくかの過程と土器の再利用の問題等まだまだ追求してゆかなければならない問題が山積している。今回はまとめることができなかったが、いずれ機会を見てそれらの問題についてもまとめてゆくつもりである。

### (2) 遺構別遺物出土状況一覧表について

この一覧表は、遺跡内出土遺物の中で報告書中に実測図を載せなかったものすべてについて、時代別に遺構名・器種・器形・残存部分の位置・非版組総数・版組遺物等について細かく分類して作成したものである。この中にはその遺構を使用した時代の遺物のほかに、遺構が放棄されてからの遺物も当然多く含まれている。それらを一切の選択なしにすべて載せたものである。この一覧表を詳しく検討してゆくに従来見落されてきた住居跡等の遺構放棄後に持たされた遺物の問題について、多くのことを教えてくれる。今回奈良時代に関しては序列図を作成し文章化することができたが、平安時代に関してはできなかったためこの一覧表を充分分析するところまではいかなかったように思える。また奈良時代の壘の分類にあたってヘラ磨きの有無で分けずに器内の厚いのと薄いので分けた。これはヘラ磨きがかならずしも全面にわたって行なわれているわけではないので、これも1つの方法だったと思う。今後さらにこの一覧表から多くのことを検討してみたい。

(中沢 悟)









### (3) 月夜野型羽釜の様相と月夜野古窯跡群

はじめに

群馬県の北部に位置する利根郡月夜野町に、月夜野古窯跡群が存在する。この古窯跡で生産された製品の中に、月夜野型羽釜<sup>11)</sup>と呼ばれる特色を持つ羽釜が含まれており、この羽釜の分布範囲を追ってみると、利根沼田・吾妻の各郡という限定された県北の山間地域を中心に分布しており、渋川市を含む県央や県西・県東地区には分布していないことに気づく。そこでこの特色ある月夜野型羽釜の実態を把握し、分布範囲を明らかにし、あわせて県西・県東地区に認められない独自性の強い他製品の存在等を考え合わせて、この月夜野型羽釜を生産・供給していた月夜野古窯跡群の在り方<sup>12)</sup>の一端について検討を加えてゆきたい。

月夜野型羽釜の名称や特色については、以前提起したことがある<sup>13)</sup>。その後この名称は県北の報告例を中心として用いられてきており、しだいに定着しつつある。しかしこの提起は『埋文月報』№40という事業団内を主対象とした刊行物であり、紙面の都合上字数に制約され、図示した図面も小さく、縮尺も不統一であった。また村主道跡の調査により、月夜野型羽釜の変遷も明らかになりつつある。そこで先の『埋文月報』の報告内容を受けて、月夜野型羽釜の詳しい様相について再度紹介してゆきたい。

#### (1) 県内における羽釜の様相と須恵器生産の様相

県内における羽釜の様相については、羽釜を出土する10～11世紀代の遺構が多く調査されている地域と、この時期の調査例の少ない地域とがあり、全体としての様相は明らかでない。そのため県内全体の様相は充分明らかとは言えない。しかし現段階で考えられる様相は以下の様である。

県内における羽釜は、10世紀～11世紀にかけて多くの地域より出土している。その出土の在り方は、多くの煮沸器の中の1つとして使用されたような状態ではなく、一定時期においては、煮沸器の中で主体を占めて使用されていた状況を強く示しているのである。このように羽釜は、県内において大きな存在となっている。しかしこの羽釜は、出現の時期や使用された状況及び県南の平野部では一般に出土することがない月夜野型羽釜の存在にみられるように、地域差を持っている。それらの地域差は、当然前代における土器生産の在り方やその他の動きとも大きく関係しているものと思われる。県内全体の様相はこのように同一でなく、特色ある地区に分けて考えることにより理解が容易となる。

県内を大きく分けて考える時、羽釜を初期段階で生産したと考えられる須恵器生産窯の在り方と深い関係が指摘できる。県内の須恵器窯は、大きく県北山間地域と旧利根川の西と東の3地域に区分できる。県北地域は月夜野古窯跡群が知られ、7世紀末～10世紀前半代までの操業が想定されている。渋川市を含む県西地域の窯跡では、安中市秋間・高崎市乗附・吉井町多比良・藤岡市金井・沢沢等の古窯跡群が知られ、7世紀前半～10世紀前半代までの操業が想定されている。県東地域では太田市金山・笠懸村山階・鹿ノ川・新里村雷電山・鶴ヶ谷・桐生市菱町等において多くの古窯跡群が知られ、6世紀～10世紀前半代までの操業が想定されている。このように県内においては、操業時期および規模や生産の主体の時期は異なるが、10世紀前半代までは須恵器生産が行なわれている。その中で羽釜の生産の始まる10世紀代での様相は、県北では月夜野古窯跡群において盛んに須恵器の坏や埴や羽釜が多く生産されており、県西では吉井町や高崎市の小塚で須恵器坏や埴などの他に大形器種として甕と羽釜が生産されている。それに対し、県東では、現在のところ集落内において、多くの須恵器坏や埴が10世紀前半代までは出土するが、生産窯は多く確認されていない。

## (2) 月夜野型羽釜の様相

## ① 生産と分布

県北地域、特に月夜野古窯跡群を持つ月夜野町で羽釜が出現してくる時期は、共伴する須恵器環・埴等より見て、「清里・降場遺跡」の序列観で見ると第3期に属する10世紀前半代であると考えられる。この出現時期については、県央の時期と同様である。しかしここで出土する羽釜は、県南の平地で一般的に出土する羽釜と、器形や調整方法においてやや異なり、月夜野型羽釜と呼ばれる大きな特色を持つ製品である。その羽釜は、深沢B支群1・2号窯や、洞A支群4号窯・藪田A支群等において須恵器環や埴等とともに出土が確認又は想定されている。ここで生産された羽釜は、県北地域の広範囲に持ち込まれ、北は水上町北貝戸遺跡、月夜野町では梨の水平遺跡・村主遺跡・藪田東・藪田遺跡等で出土している。また沼田市石黒遺跡、昭和村永井宮前遺跡、中棚遺跡等でも多く出土しており、また月夜野町の南西方面では中之条町五十嵐遺跡等において出土している。しかし北部山間地をはずれる渋川市から南の地域では、現在のところ全く出土していない。この地域では、月夜野型羽釜でない県南に広く分布する羽釜が大量に出土しているのである。今後この渋川市以南において、月夜野型羽釜が出土しても、数はきわめて少ないと考えられる。つまり月夜野型羽釜は、現在のところでは、利根・沼田・吾妻地方というごく限定された群馬北部山間地のみ分布している。

## ② 月夜野型羽釜の変遷

県内における羽釜出現の系譜や意味については、ほとんど明らかでない。月夜野型羽釜と、それ以外の県西・県東地区の一般の羽釜が存在し、出現時期がほぼ同じと考えられるなら、製作方法において少なくとも2つの流れを認めることが可能である。県西の羽釜については、「清里・降場遺跡」の中で変遷について説明した。そこで別の流れを持つ月夜野型羽釜は、どのように変遷してゆくかについて、以下説明し、月夜野型羽釜の様相について内容を深めたい。

月夜野型羽釜は、出現段階における器形や調整方法に特色を持ちつつ、しだいに変化してゆき、また同時に共伴する埴や埴も須恵器から土師質土器へと大きく変わってゆく。その変化の在り方については、10世紀から11世紀にかけての調査例が少なく、充分明らかでないが、現段階では4段階に分けて一応考えている。

## (第216・217図)

## 第1段階

羽釜出現段階と考えられる。この段階の羽釜は『壘文月報』で触れたように「利根・沼田・吾妻地域における羽釜の大部分は、鐙の付く地点を大きな変換点として、口縁部が立ち上がっていくという特色を持つ。他の地域の羽釜は鐙の付く地点でこれほど大きな変化は認められない。また、それにも増して大きな特色として整形方法の違いが認められる。利根・沼田・吾妻地域の羽釜は、鐙より下の整形が基本的にヘラ削りによりなされており、このヘラ削りはほぼ直線でもしも底部付近から口縁部の鐙に向かって行われている。ヘラの一部は鐙まで到着し鐙下部にヘラの当たった痕跡を明瞭に残す羽釜を多く見かける。それに対しこの地域以外の羽釜は鐙から下の胴中央部においては横ナデ整形の上からヘラ削り整形が行われている。このヘラ削りは先の利根・沼田・吾妻地域の羽釜に見られたように、底部から鐙に向う直線方向の削りではなく、胴左上から底部右下に向う斜の削りである。このように両者においては器形及び整形方法において大きな違いが認められる。」<sup>(1)</sup>という内容を持つ。そしてこの時期に共伴する遺物は、大部分須恵器の環・埴であった。それが第2段階以降の10世紀後半代で、土師質土器を共伴してくる段階になると、器形上の変化と整形方法が大きく異なってくる。

## 第6章 調査成果の整理と考察

### 第2段階

器形においては、第1段階と異なり、鈿の付く地点を大きな変換点として口縁部は立ち上がってゆかない。少しの変化は認められるが、全体的に内彎しつつ直立気味に立ち上がってゆく。第1段階と大きく異なるのは、鈿より下の体部が短くなり、全体として器高が低くなることと、ヘラ削りの方法である。第2段階のヘラ削りは、第1段階同様に「鈿より下の整形が、基本的にヘラ削りによりなされており、このヘラ削りはほぼ直線で、しかも底部付近から口縁部の鈿に向けて行なわれている…」ここまで共通する。しかし第2段階では、削りの単位が細く短く、鈿まで到着するには3～6回以上の削りを行なっているのである。これは大きな違いである。

### 第3段階

器形においては、第1段階に近く、「鈿の付く地点を大きな変換点として、口縁部が立ち上がっていくという特色を持つ<sup>11)</sup>…」しかし第1段階の羽釜と比較して器高が低いことと、鈿より下の胴部が大きく彎曲して張り出していることにおいて異なる。調整方法のヘラ削りに関しては、従来は鈿に向かい鈿の下まで削られていたが、この第3段階に至ると、胴部の上半部までは削るが、鈿の下の胴部上端まで、鈿に向かう縦方向のヘラ削りが行なわれなくなる製品が多く出現してくる。その部分は左横方向のヘラ削りが行なわれる製品と、指等による調整が行なわれている製品との2種類が存在するようである。

### 第4段階

この段階の製品は出土例が少なく、実体は不明である。村主遺跡に近い大原2号住居跡<sup>12)</sup>より、その段階と思われる羽釜が出土している。共存遺物は土釜のみであり、おそらく11世紀以降の製品と思われる。図示した羽釜は、鈿より上の口縁部が短く、大きく内彎している。鈿より下の調整は鈿に向かう直線のヘラ削りであり、このヘラ削りが底部より鈿に向かう削りであることに関しては、月夜野型羽釜の伝統を守っている。このように月夜野型羽釜は、独特な特色を持ち、11世紀代までその特色は持ち続けているのである。今後資料が増加することにより、11世紀代の羽釜の特色についてさらに明らかにしていきたい。

### ③ 土師器との関係

県北の月夜野古窯跡群においては、9世紀段階より多くの須恵器環・塚等が生産されている。そのため月夜野町等においては、住居内より土師器環類は9世紀前半頃よりほとんど出土しなくなる。煮沸器としての土師器口の字状口縁の甕は、9世紀段階においてはほぼ唯一の土製品であったため、依然として使用され続けている。しかし10世紀代になり羽釜が使用されてくると、ほとんど使用されなくなり、やがて出土しなくなる。この傾向は出土量や器種構成等において、多少の違いはあるにしても、月夜野型羽釜が供給されている沼田市石墨遺跡や昭和村中瀬遺跡等においても指摘できそうであり、この県北地域においては、ほぼ画一的な供給・需要体制が存在していたと思われる。県南の地域の様相と大きく異なった特色を示している。

### (3) 月夜野型羽釜と月夜野古窯跡群

このように、月夜野古窯跡群において生産された月夜野型羽釜は、独自の器形や調整方法を持ち、限定された地域のみで供給されていた。また月夜野型羽釜だけでなく、他の製品や技法等においても、月夜野古窯跡群は独自性を持っており、このことの意味については、以下の事例により次のことが考えられる。月夜野古窯跡群の大規模採集は、大きく2段階に分かれて行なわれたと考えられ、第1段階は7世紀末より8世紀の段階であり、第2段階は8世紀末又は9世紀初頭～10世紀前半代の段階である。そしてこの第1段階の製品は、県南の他地域と器形や調整及び器種の組合せ等において共通するが、第2段階の製品は、第1段階の製品と異なるだけでなく、県南の製品とも以下の点において大きく異なっているのである。

① 月夜野型羽釜の存在。これまで述べてきたように、県南地区と異なる月夜野型羽釜を製作し、利根・

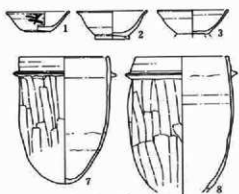
沼田・吾妻地区という限定された県北山間地域へ供給していること。

- ② ロクロ回転の違い。第1段階で見られないロクロ左回転の製品が第2段階で多く出現してくる。9世紀以降の段階では、県南地区においてもこのような左回転の製品はほとんど認められない。
- ③ 盤Aの存在。第2段階の当初において、盤Aが認められる。このような器形は第1段階や県南地区でも全く認められない特殊な器形である。
- ④ 須恵器における調整方法の違い。第1段階後半の沢入A支群においては、甕の内側が素文のあて目であり、口縁部・頸部間に波状文は認められなかった。第2段階の洞A支群においては、甕の内側に同心円状の当て目と、口縁部・頸部間に一般的な波状文が認められる。技法的には第1段階との間に新旧の逆転現象がある。同一工人の流れの中でこの現象を理解するには不整合性が多い。
- ⑤ 東北地方との関連が考えられる製品の存在。第2段階で9世紀後半の一時期において、須恵器の甕に似た平らな口唇部を持ち胴部に叩きを持つ酸化焰焼成の甕が存在すること。また底部糸切で体部下半に手持の篋削りを施している環の存在その他瓦等においても月夜野古窯跡群と東北地方との関連が考えられる。このような現象は第1段階では認められなかった。

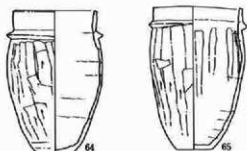
さらに加えるならば、第2段階における脚付羽釜の存在や藪田・藪田東遺跡で認められるような9世紀後半代より多くの焼成の環が生産されていること等をあげることができるであろう。このように第2段階における須恵器の製品は、第1段階と大きく異なり、新たな別系統の工人が主体となり操業された可能性が高い。さらにその工人達は、技術系統が県南とは異なる工人の流れを汲む人々で、県南における共通した強い規制による統一的な器形・調整方法に強制されることなく、ある程度独自性の発揮できた体制下での操業が可能であったことを物語っているのではないだろうか。また月夜野型羽釜の分布から見た月夜野古窯跡群の在り方は、前述のごとく、判根・沼田・吾妻地区にほぼ限定されて分布していることより、この地方に供給するために律令制社会の中で意図的に配置された工人集団であったことを示している。このことは、別の項で述べている前代に展開された秋間古窯跡群にとって変わり、吉井古窯跡群が、県央への供給を主対象とした生産窯であったと考えられることと大きく異なり、そこに政治的な大きい動きが想定される。(中沢 悟)

- (1) 中沢 悟 「月夜野型羽釜について」『埋文月報』No.40 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- (2) 中沢 悟・大江正行ほか「月夜野古窯跡群」月夜野町教育委員会 1985
- (3) 中沢 悟 「出土土器の分類と編年」『清里・陣場遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- (4) 大賀 健ほか「北貝戸遺跡」『関越自動車道(新潟線)水上町埋蔵文化財発掘調査報告書』水上町遺跡調査会ほか 1985
- (5) 熊登 健・下城 正 「梨の水平遺跡」群馬県教育委員会 1977
- (6) 原 雅信ほか「藪田東遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- (7) 下城 正・関 晴彦ほか「藪田遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- (8) 水田 念・石北直樹 「石墨遺跡」沼田市教育委員会ほか 1985
- (9) 石守 晃・山口逸弘ほか「糸井宮前遺跡Ⅰ」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- (10) 黒岩丈夫・富澤敏弘ほか「中棚遺跡」昭和村教育委員会ほか 1983
- (11) 金井公夫ほか「大塚遺跡群」中之条町教育委員会 1985
- (12) 飯塚卓二・下城 正ほか「十二原遺跡・大原遺跡・前中原遺跡」1982
- (13) 関 晴彦 「奈良・平安時代の土器」『藪田遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- (14) 羅年因参照のこと
- (15) 花岡敏一・原 雅信・中沢 悟 「藪田東遺跡出土土器の胎土分析」『藪田東遺跡』1982の中で紹介している。
  - ・13の文献中で「(iii) 須恵器と同様の胎土をもった酸化焰焼成の煮沸器」の中で紹介している。
  - ・大江正行・中沢 悟 「月夜野古窯跡群の成立とその背景」『月夜野古窯跡群』1985の中で指摘している。
- (16) 大江正行・中沢 悟 「月夜野古窯跡群の成立とその背景」『月夜野古窯跡群』月夜野町教育委員会 1985

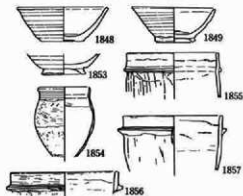
第6章 調査成果の整理と考察



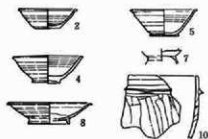
水上町北貝戸遺跡 8号住



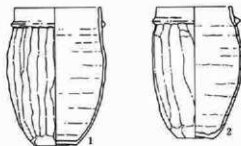
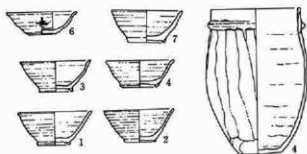
月夜野町飯田東遺跡 5号住



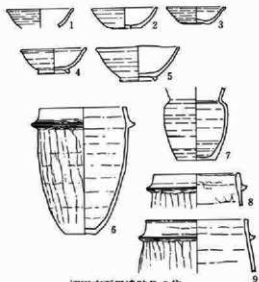
昭和村中瀬遺跡NH-3号住



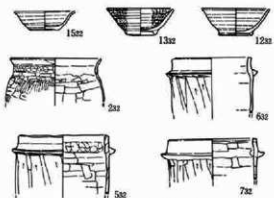
中之条町五十嵐遺跡



月夜野町梨の木平遺跡 1号住



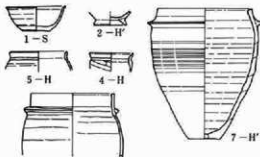
沼田市石黒遺跡D 7住



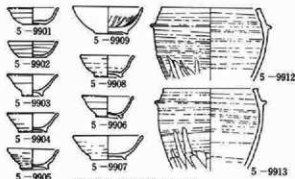
昭和村糸井遺跡32号住

第213図 県北部における羽釜を伴う遺跡

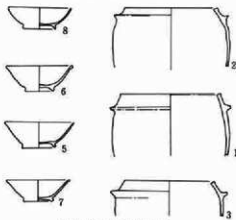
第2節 遺物について



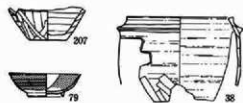
渋川市有馬条理遺跡HH-11号住



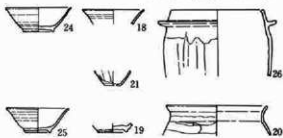
吉井町黒能遺跡群99号住



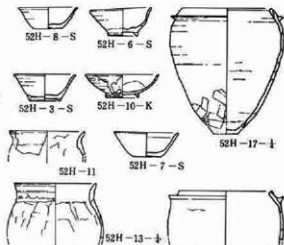
高岡市郷土遺跡27号住



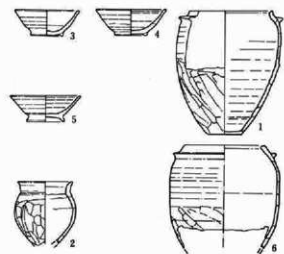
藤岡市郷の内遺跡GH-63号住



北橋村分郷八崎遺跡12号住



前橋市・吉岡村清里陣馬遺跡52号住



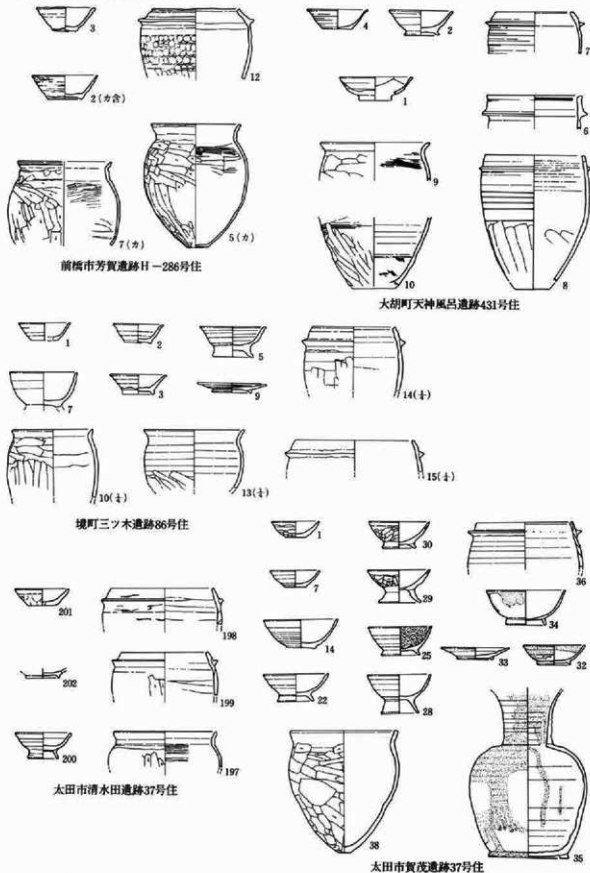
群馬町北原遺跡22号住



高崎市中尾遺跡C-50号住

第214図 県西部における羽釜を伴う遺跡

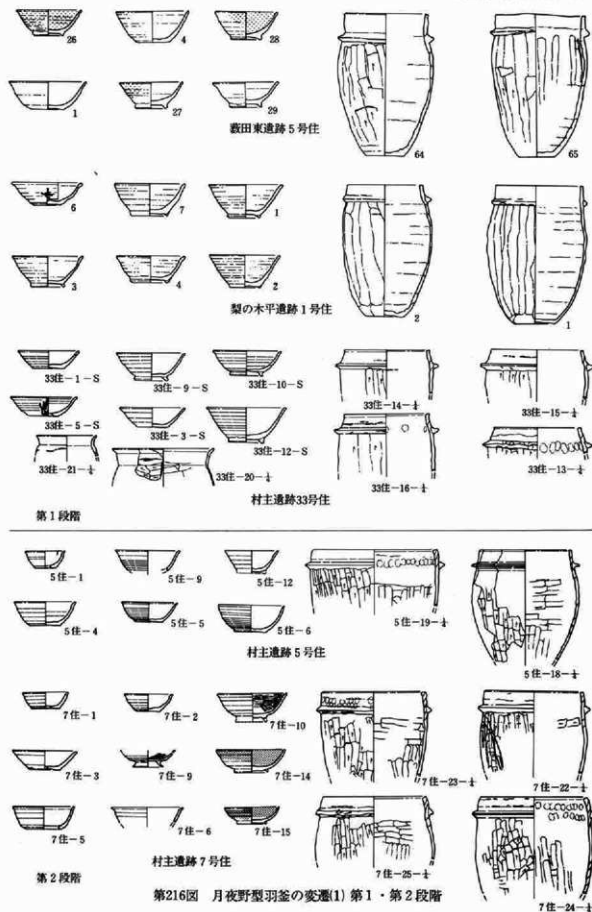
第6章 調査成果の整理と考察



第215図 県東部における羽釜を伴う遺跡



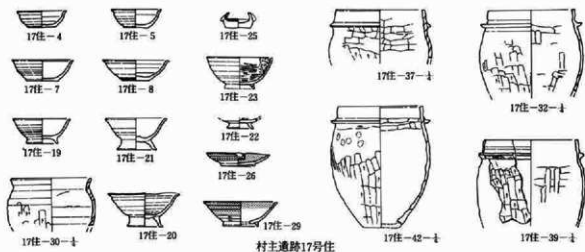
第2節 遺物について



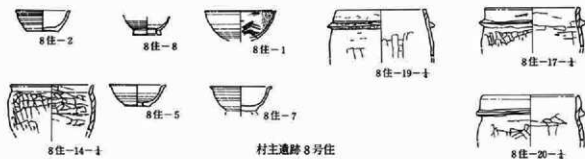
第6章 調査成果の整理と考察



村主遺跡 3号住

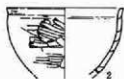


村主遺跡 17号住



村主遺跡 8号住

第3段階



第4段階

大原遺跡 2号住



第217図 月夜野型羽釜の変遷(2) 第2・第3段階

#### (4) 脚付羽釜について

群馬県の北部に位置する利根郡月夜野町に、月夜野古窯跡群が存在する。この古窯跡群で生産された製品の中に、羽釜でありながら、底部に支脚を持つ製品が含まれている。このような羽釜は、県央や県南において出土していないため、注目されていなかった。ところが近年、月夜野町や沼田市において、完形品や支脚の付く底部破片が多く発見されるようになり、この底部に支脚の付く羽釜について、脚付羽釜と呼称して、「月夜野古窯跡群」1985の中で実測図を伴ない多くの事例を紹介した。また沼田市石墨遺跡D区12号住より完形品が出土しており、出土状況や共存遺物とともに「石墨遺跡」1985の中で紹介されている。しかし多くの実測図を伴ない、まとまった形で報告はなされていないため、ここで現段階における脚付羽釜の様相について簡単に報告し、月夜野古窯跡群を理解するための一助としたい。

脚付羽釜とは、羽釜の底部に支脚の付いた羽釜のことである。しかし特色はこれだけでなく、器形や調整方法においても特色を持ち、ほぼ同時期に使用されている月夜野型羽釜と比較すると、多くの点で異なっている。月夜野型羽釜の器形は「鈎の付く地点を大きな変換点として、口縁部が立ち上がってゆくという特色を持つ」一方脚付羽釜は鈎の付く地点で口縁部に大きな変化はなく、全体的に内擗している体部より鈎上の口縁部まで一連で続いている。中には月夜野型羽釜と逆に鈎を境に内傾している製品も認められる。底面につけられている支脚は、断面観察によれば、底部を作った後で貼りつけていることが明らかである。調整方法においては、月夜野型羽釜の大部分の口唇部が平らに削られて内傾しているのに対し、脚付羽釜の口唇部は丸くなっている。また両者とも体部外面においてはほぼ全面に直線のヘラ削りが行なわれているが、月夜野型羽釜では、ヘラ削りの方向が、底部より鈎に向かってのに対し、脚付羽釜は全く逆で、鈎付近より底部に向かって削られている。このように月夜野型羽釜と脚付羽釜は、近似しているようにも見えるが、多くの点において異なっている。

脚付羽釜は、現在のところ月夜野町と沼田市の2市町のみで出土が確認されている。しかし脚付羽釜は月夜野型羽釜と同様に月夜野古窯跡群内で生産されていると考えられるため、今後は月夜野型羽釜の出土する地域より出土の可能性はある。しかし出土したとしても数は月夜野型羽釜と比較するときわめて少量であると思われる。脚付羽釜は月夜野町の月夜野古窯跡群中の真沢A支群と須磨野A支群<sup>(1)</sup>、集落遺跡として村主遺跡・藪田遺跡<sup>(4)</sup>・洞1遺跡<sup>(5)</sup>・後田遺跡から出土しており、沼田市においては石墨遺跡・戸神諏訪遺跡<sup>(7)</sup>において出土が知られる。なおこの脚付羽釜の脚部と思われる製品が最初に紹介されたのは、昭和16年であり、山崎義男氏の報告をあげることができる。山崎氏は真沢陶窯址の紹介の中で出土遺物の実測図を示し、脚付羽釜の脚部の破片と蓋と考へ、羽釜とセットで「蓋付埴」として紹介したが、破片であり現在としては誤った見解であったが、本稿を作成する際に多くの啓発を得た。以上が脚付羽釜について、現在明らかとなったことである。しかし出土例は総数でも50個体はを超えていないと思われ、実態についてはまだまだ不明である。これまで指摘してきた特色についても、今後多くの点で修正してゆく必要が出てくると思われる。今後資料の増加を待って、報告の修正と脚付羽釜の持つ意味について考えてゆきたい。(中沢 悟)

(1) 中沢 悟・大江正行ほか「月夜野古窯跡群」月夜野町教育委員会 1985

(2) 水田 念・石北直樹「石墨遺跡」沼田市教育委員会ほか 1985

(3) 中沢 悟「月夜野型羽釜」『埋文月報』No.40 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984

(4) 下城 正・関 晴彦ほか「藪田遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985

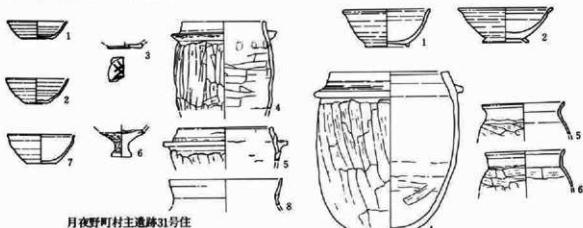
(5) 1986年報告書刊行予定。脚付羽釜の存在については、下城正氏の御教示による。

(6) 現在報告書作成中、脚付羽釜の存在については、大江正行氏の御教示による。

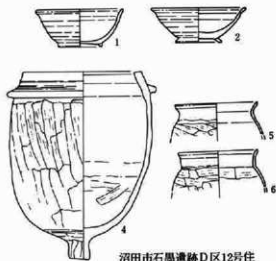
(7) 1983年に発掘調査が行なわれている。脚付羽釜の存在については、小野和之氏の御教示による。

(8) 山崎義男「上野国利根郡月夜野二窯跡に就いて」『古代文化』1941

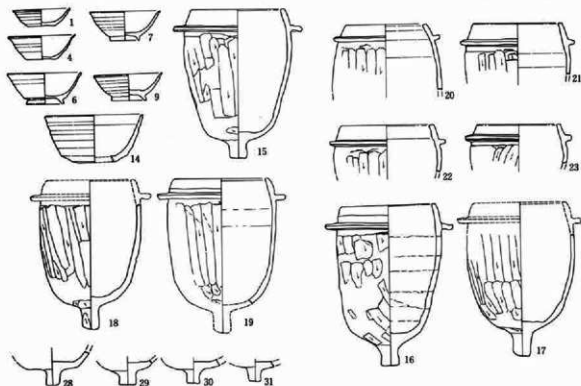
第6章 調査成果の整理と考察



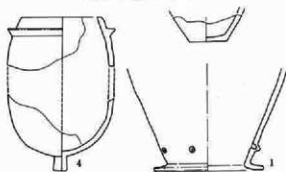
月夜野町村主遺跡31号住



沼田市石黒遺跡D区12号住



月夜野町須磨野A支群



月夜野町真沢A支群

第218図 脚付羽釜出土遺跡

## (5) 出土の鉄製遺物について

## ——村主遺跡出土、奈良・平安時代鉄製遺物の検討——

はじめに

整理担当から鉄製遺物を実見し、整理上に寄与せよとの申し込みがあり、本稿はそれを受けて作成したものである。遺物を一見したところ34の住居数にもかかわらず、出土総数35点、出土率は1.06個と高く、その中に小刀、鍬（踏踏か）先など稀少性の高い製品も含まれ、なおかつ古墳時代より後出した時代の集落における不明確な鉄器の有様を示していたので以下、この点を中心に触れたい。

また本稿で扱う製作年代は、伴出土器によって下された住居の相対年代をあてはめ用いるが、類多でない出土量と根本となる住居跡が10世紀以降、不足気味である点、あるいは鉄器の伝世性など不特定な要素を考慮すると必ずしも土器で区分された細かな年代観が鉄器の製作年代に直結するとは考え難く、ここでは100年毎の世紀区分で扱いたい。おおまかな年代観は今後、検討の蓄積をもって徐々に狭げなければならないと考えている。

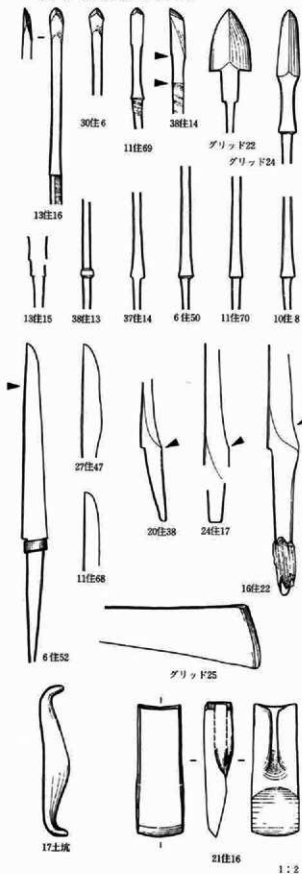
## 1. 鉄製遺物の種別と機能

出土の鉄製遺物の種別は形態および使用痕上から次のように分類されるが用途不明はここでは除外したい。

- 武器、鍬、刀子、小刀<sup>5)</sup> ○工具、手斧、刀子、紡錘車 ○農具、鍬先、鎌 ○生活用具、火打金、釘
- 用途不明、金具類、棒状鉄、板状鉄
- 鍬

鍬は形態上、鍬先、寛被、茎の3部位から構成されている。鍬先の形は剣型（30住6、11住69）、片刃剣型（13住16）、刀身型（38住14）、三角形（グリット22）、柳葉型（グリット24）の5形態が認められる。このうち38住14の刀身型例は棟・刃側に小さな区を設けており、グリット24は柳葉型としたが刃区下が埋せた型となり、両例ともに特殊な形態である。寛被部は短身の11住69・38住14、グリット22・24、13住15など除くと全般的に長身であるが、あえて欠なわれている鍬先部を想定すれば、遺存する寛被の細い点、細い寛被部で大身の鍬先を支持するのは不合理であることなどから細根小身の鍬先が考えられる。おそらくは13住16、30住6、11住69、38住14などに見られる剣型か刀身型であったと思われ、欠損の寛被も13住16と同級かそれと大差ない長さであろう。茎形態は鍬区と轄区がある。さらに鍬区は表・裏に区のない扁平な37住14、グリット22、13住15例と表・裏・側部に区のある13住16、11住69、グリット24、6住50、11住70、10住8の二者がある。轄は表・裏・側の四面に区をもうけた38住13が唯一である。茎の横断面形はすべて隅丸方形か方形であり、円形は無い。拵に関しては13住16の鍬区下に寛の一部が残る。寛は直線的な竹状の組織で、その上を横に平巻に踏巻痕がある。踏巻に経りはなく藤のような直線方向の組織である。寛の太さは寛被元の太さとはほぼ同じである。11住69の区下に勝手下りとなつた条線は古代の茎鋸目にしては深過ぎるし、仮りにあったとしても1000年以上の錆化の中で遺存したとは考え難く、おそらくは茎と寛との接着剤に繊維を巻付けたか、鍬を工具として用いた時の柄巻かとも考えられる。鍬使用の跡は10住11の基瓦が半回転ほどく字状に捻り曲っており、それは錆化の状態からすれば堆積土中で生じたものではなく、廃棄以前の旧時に生じていたと判断される。今日に伝世した江戸時代の矢の穂先（鍬）は未装着の穂先を除けば多かれ少なかれ寛から抜き取る際に

第6章 調査成果の整理と考察



第219図 鏃・刀子・鎌・火打石・手斧模式図

生じた捻れや曲りが生じており、10住11の捻れ曲りも同様の結果と考えられる。このことは狩猟など実用に帰したか、鏃先が欠損したか、筈に癖・損傷が生じたかの理由に因したであろう。

鍛えは37住14がやや柾目立った錆化のほかは板目状の錆化であり、県内出土の古墳時代鏃の多くからすれば板目状の錆割れはやや少なく、精鍛されている。錆化の進行は埋没環境に左右されるが、鍛目の方向性は埋没環境や埋没年代の古さに影響される訳ではなく本来的なものである。

砂磨は、付図-1の場合、遺存の厚みを前提に、研磨を想定して切刃、鎧筋を加えたものである。鎧筋が明瞭でないのは13住16、30住6の鏃先元と穂被先の稜、38住14の鏃先平から先にかけての稜、グリッド22・24の鎧筋である。これらはグリッド24を除き僅かな稜であるため鍛造時点よりも、焼入後の整形以降、おおむね研によって作り出されたと類推される。この場合、強い意識の基に研ぎ出された後であるか否か前3例について不明であるが、後2例は始刃であって、刃の総体面積が多いため、稜立てることを意識して研がないと研ムラが生じてしまい、刃部の研全般にも不合理が生じてしまうので意識は必然であったと考えられる。

○刀子

刀子は8点の出土があり、帯佩用と考えられる6住52、工具としたと考えられる27住47、20住38、24住17、16住22など、二大別される。帯佩用と考えられる6住52は、優美な姿、また矢印から切先にかけて櫛がやや窄くため錠子に強い焼入れが想定でき、鍛えは錆化が空目があり、拵は鉄繩を着装し、研成りは見られないなど、しっかりした作刀、拵、所持者の扱いの丁寧さを知ることができる。このことは削る、切るための単面的な目的ばかりでなく、見る、見られるために製作されたことを意味し、製作から所持者に至るまで一貫した目的に沿った左証である。出土住居は大形であり、しかも住居跡年代が8世紀初頭頃である点を考慮すれば律令制に制式化された可能性のある帯佩用刀子と類推される。したがって

6住52は武器の範疇としたが、平素は雑用に供したと思う。佩用、帯用とせずに帯佩用と両者を折衷したのは服装によって用法が異なると考えられるのと制度上の区分が明確化されていないためである。

この刀子の形態は、平作りで棟は錆化のため明瞭でないが平棟かそれに近い形状である。区は棟、刃側ともきっちりしており、おそらくは貫刺とならし後に鍔掛を行い作り出したのであろう。鍔は近世に至るまで製作労力の高い高価な鉄器で鍔掛主体（鍔掛される金属器）に多く用いられたか否かによって鍔掛主体の作位が意味される。したがってこの刀子は当時の全般からすれば作位は高かったと考えられる。茎は細長く、尻は調査時の欠損で残存しないが、遺存の端部は細まっているので、この先はやや丸みをおびた尖尻と考えられる。研出しの癖は見られない。拵は茎先に鉄製長円形筒鍔が掛けられている。鍔としたのは身幅より、その筒金の幅の方が狭いからである。この鍔の存在から拵は呑口式である。柄は茎が長いので振袖のような曲り柄でなく直の柄であったかもしれない。

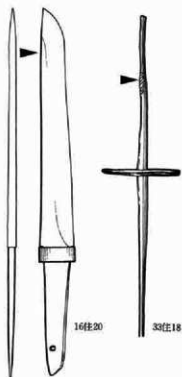
工具とした27住47、20住38、24住17、16住22は全体の作り込みが甘く、切る、削るために単面的な目的で製作されたと考えられる。いずれも平造りで、棟は錆化し、明瞭でないが平棟か、それに近い形状である。平造の刃部は新身の時点で、茎元の延長上に作り出されるのが製作上の一般形で、20住38、24住17、16住22のように鍔元に切刃の後が生じたのは研磨りの結果と考えられ、刃区が無いのも消耗の証左となるが、ただし正倉院の刀子にある切刃の後を有する例は鍔元の象嵌の消耗を防ぐほか研磨減りとは別の理由あり、この場合の比較にはならないと考えられる。この3例には小刀区（矢印）がある。小刀区は削られる主体物の削り出し位置、深さを確実にするのを目的とし設けられた機能部分名称である。3点を見るかぎりには於ては遺存しており、旧時の研磨に際し意識して研れたのは確かで、工具に対する工人意識を感じることが出来る。棟区は20住38、16住22に認められるが区の隅はやや丸く、新身時点における作込みの甘さが認められる。そのことは2点とも切れ物として製作されたため、各部に対する美的な面での完成度の高さが要求されなかったことを意味している。茎は20住38、24住17、16住22に残り、20住38が栗尻丸山形、24住17が栗尻で切り平山形、16住が栗尻高山形を呈する。24住17は茎が著しく短く、旧時に載ち切られた可能性がある。拵は16住22の茎尻に柄の木質が残るほかは見られない。遺存した木質の方向性は茎棟に沿って走り、これが柄の方向性を示しているとすれば切先は可成り解くものと考えられる。

鍛に柃目の例は無く、板目付しているが錆ぶくれが認められる。

#### ○小刀 16住20

16住20から出土した小刀がある。作込みからして鈍、山刀のような雑用工具ではない。何故、長・大刀子とせずに小刀としたかは後述する。形状は平造りであるが鍔元に切先に研出した際の後部が僅かながら見られ、この研出しの前後に雑用に供された場合もあったかもしれない。平造りに後を生じさせるのは当時の一般形ではなく、刃を付けることだけを目的として研いだ証左であり、研が下手なのである。それであっても全体的に船刃状の肉置がある。棟は錆化のため明瞭でないが平棟かそれに近い形状である。棟はやや俯き、切先端部より物打側3、4cmに最も顕著な側所（矢印）があり、これは切先の銚子部に強い焼入れを作業した結果であると判断される。茎は長く、入山形を呈し、尻に目釘穴があるが、懸通しを行うほど大きくはないので目釘のみの機能と考えられる。茎元に鉄製長円形筒鍔が掛けられている。

鍛えは錆化からすれば柃目立ってはならず板目であり、極端な錆ぶくれ、棟の錆割れの少ない点から精鍛と考えられる。焼入れは、図中矢印に棟の解く側所があり、それは切先の焼入れが物打側より強く入れる意識、つまり切先の銚子に焼入れをきちんと行なおうとする意識とその結果であると判断でき、そうした技法上の意識は周到な計画に基づく場合に限られ、良工の所作を窺わせるものがある。



第220図 小刀・紡錘車模式図 1:3

一方に刃表を示す刃作り部があり、袋内に木質が遺存する。刃表・裏の区別がなければ斧であるが、区別がなされているので手斧と判断される。木質は斧元より2.5cmの深さまで認められ、袋の尻端までは達していない。

鍛えは錆化からすると板目がつんでおり精鍛であるが全体的に錆化が進み不定方向に錆割れ、剥落しそうな状態にある。錆割れは刃部で刃側を平行弓成りに割れ込んでいるため焼入れの刃渡り部分を示しているのかもしれないが研磨例の無い現状において断言はできない。

#### ○紡錘車 38住18

33号住居跡から軸付の紡錘車が出土している。紡錘車は鉄製の円盤で、鉄製の軸を取り付けている。軸部の一端は旧態を留め、未成の繊維が左上り(矢印)の方向に残る。

鍛えは軸部で鉄釘を見るような程の錆割れは顕著でなく板目づいていて、紡錘車は空目をまじえた板目状をなしている。

#### ○鍛先(踏踏先か) 20住35

20号住居跡周溝内から大身の鍛先が出土している。鍛とした理由は次のとおりである。床の入る袋部断面の角度は図右側が急で左側が緩やかである。使用減りは平面図右側の右刃先に見ることができ、左・右ほぼ対照であった時に最大5mmほど磨耗している。これは製作当初からあったのではなく、その損耗部分だけ他の刃部より鋭利になっているので確かに使用痕である。鍛か鍛かの点に関しては鍛は引きし、鋸は突き起して、人間が動力となって用いることを前提とすれば、右利なら鍛の穂先刃部右側が、鋸なら左頭側に使用減りが生ずるはずで、この使用減りを本例にあてはめれば右側の減りで鍛と判断されるが、柄の長さ、柄と床との角度により使用減りは微妙に変化する。さらに牽引した場合には犁としての使用となり、長身の床と柄

拵は平面図裏の切先部に、僅か木質の遺存を認めるが他に付着はない。鞘の痕跡であろう。鋸を何故鋸としたのかは次の理由による。同様の金物に、緑金、口金(鏝口金)、鋸の三通りがあるが、口金とすると鋸元身幅とほぼ同じ幅であって間に鞘木の作り出しが入る隙間はなく、口金にはならない。緑とするか鋸にするかは、当代におけるこの種の鞘口と柄との関係が呑口式であったと考えられるから、呑口式の場合の緑と鋸は同一金物で兼ねていて区分することができないのである。ただ機能や目的からすれば緑は装飾性と柄に強度を保たせるための筒金で、鋸は刀身の保護、保存のため刀身を鞘中で浮かせる金具である。この内容を呑口式にあてはめれば筒金の鞘側が鋸に、柄側が緑の機能を果たことになる。しかし、この筒金は古墳時代以来、伝統的に用いられた装具で、鐙が掛けられている場合は鋸として機能するため本稿では鋸としたい。

なお本例の出土した16号住居跡は大形住居であり、所持者の地位が示唆される。

#### ○手斧 21住16

21号住居跡覆土から出している。形は袋部を持つ鉄斧の形態である。平面形は先広がり長方形で、横断面は袋側で広く、表側で狭く作られている。縦断面は袋側に刃裏を示す平滑面がもうけられ、



をもうけ足と手で押し起しながら用いた場合には踏鋤となり得る。それぞれ力点の作用により減り方が異なり、別途の用い方であるが、ここでは名称に関しての言及であるので別途の用法は次に触れたい。

形態は図の平面右が表、左側が裏面となる。特徴としては近世から現代の鍬先裏が平らであるのに対し、本例は裏の方がふっくらとしている。刃先は表側が喙状に内をおき、裏側は内置が少ない。表・裏の袋部端にはそれぞれ使用傷が認められ、表側に凹み(矢印)、裏側にめくれ(矢印)が生じている。大きさは古墳時代の鍬先からすればすぶる大身であり、前代と同じ用法であれば道具に振り回されることにもなりかねない。とすれば前代の鍬形態との間に一画期があることになり、また別途の用法である踏鋤も捨て難い。

踏鋤は正倉院に子日鋤が伝存しており、鋤先が剣先型で大身のところは本例に類似している。踏鋤であれば、足と手で押し起すため穂先刃部右側が本例と同様に減ると考えられるのでその点は一致し、むしろ鍬とするよりも妥当性があると思われるが、これは机上の考えであって今後、県内出土の同級4例の実査と、資料増加を待ち再考したい。

鍛えは錆ぶくれ、錆割れが少なく、空目から板目づいてる。

○鎌<sup>14</sup> グリット25

M-16より鎌の出土がある。形態は棟が直線的で耳の返りが顕著でないのと棟側、刃側の棟の高まりがさほど変りなく、本例の特徴となっている。刃部は研減りが少なく使用度は未だ少なかったと見なされる。刃作りは片刃であるが顕著でなく、表側の内置も少ない。

鍛えは錆化状態からすれば征目になっておらず板目気味である。

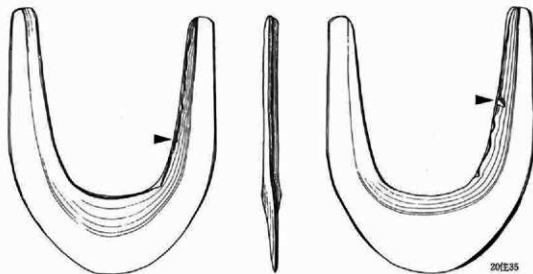
○火打金<sup>17</sup> 土坑17

錆化顕著で遺存不良である。図は左右ほぼ対称とした時の復元像である。形態は山形で、横断面は隅丸の山形を呈す。

鍛えは不定方向の錆割れが顕著である。

## 2. 器種揃えとその傾向

村主遺跡調査区における奈良・平安時代の消長は前章の分析によって7世紀後半、9世紀後半から10世紀



※トーンは使用減り推定範囲を示す

第221図 鍬(踏鋤か)先模式図 1:3

第6章 調査成果の整理と考察

住居跡・ 個別遺 構名称	出土土 器の年 代概	武器		農具		工具		生活		そ の 値
		小 刀	佩 用 刀 子	鎌	鍬	工 具 刀 子	手 鋸	削 削 金	火 打 釘	
22号住	7C後	-	1	-	-	-	-	-	-	-
13号住	7C末	-	2	-	-	-	-	-	-	-
2号住	8C前	-	-	-	-	-	-	-	-	-
6号住	*	-	1	1	-	-	-	-	-	1
9号住	*	-	-	-	-	-	-	-	-	-
11号住	*	-	3	-	-	1	-	-	-	-
16号住	*	1	-	-	-	1	-	-	-	-
18号住	*	-	-	-	-	-	-	-	1	1
20号住	*	-	-	-	1	1	-	-	-	-
27号住	*	-	-	-	-	1	-	-	-	2
28号住	*	-	-	-	-	-	-	-	-	1
30号住	*	-	-	-	-	-	-	-	-	1
32号住	*	-	-	-	-	-	-	-	-	-
34号住	*	-	-	-	-	-	-	-	-	-
37号住	*	-	1	-	-	-	-	-	-	-
38号住	*	-	2	-	-	1	-	-	-	1
4号住	8C中	-	-	-	-	-	-	-	-	-
26号住	*	-	-	-	-	-	-	-	1	-
18号住	奈良・平安	-	-	-	-	-	-	-	1	-
19号住	9C後	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1号住	10C前	-	-	-	-	-	-	-	-	-
14号住	*	-	-	-	-	-	-	-	-	-
21号住	*	-	-	-	-	-	1	-	-	-
31号住	*	-	-	-	-	-	-	-	-	-
33号住	*	-	1	-	-	-	-	-	-	1
36号住	*	-	-	-	-	-	-	-	-	-
14号住	10C中	-	-	-	-	-	-	-	-	-
3号住	10C後	-	-	-	-	-	-	-	-	-
5号住	*	-	-	-	-	-	-	-	-	-
10号住	*	-	1	-	-	-	-	-	-	-
24号住	*	-	-	-	-	3	-	-	-	1
25号住	10C末	-	-	-	-	-	-	-	-	1
7号住	11C前	-	-	-	-	-	-	-	-	-
8号住	*	-	-	-	-	-	-	-	-	-
17土坑	*	-	-	-	-	-	-	1	-	-
O-19	10C後	-	2	-	-	-	-	-	-	-
M-16	8C前	-	-	1	-	-	-	-	-	-
N-25	奈良・平安	-	1	-	-	-	-	-	-	-

附表1 村主遺跡・出土鉄器集計表

前半、10世紀前半から11世紀初頭の3段階に盛期が  
 捉えられ、ここではそれを第1～第3段階と称し、  
 各段階に伴う器種揃えとその傾向について触れるが、  
 その前に、鉄器がどのように扱われ、製作年代をど  
 のように捉えたらよいかを少し考えてみたい。

上毛野における奈良時代に先だつ段階の鉄は半島  
 からの招来や西国からの搬入に頼り、上野において  
 は平安時代中期以降、砂鉄原料による在地の和鉄生  
 産へと徐々に転換されて行った。現在までのところ、  
 県内の製鉄関連遺跡の中では出土須恵器の年代から  
 8世紀代の渋川市金井製鉄遺構が最も古く、さらに  
 金井沢碑文中に見える鍛師磯部君身麻呂の存在や初  
 期鍛手刀の製作が推測されることなどを考え併せれ  
 ば、ある程度、整った形の生産体制は8世紀頃より  
 始まったと考えられる。しかし県内の製鉄甲の発見  
 は9世紀以降に多く、量産体制の確立は9世紀以降  
 として大過ないであろう。鉄加工は早くから行われ  
 ていたようで5世紀終末には輪の羽切、鉄滓を伴う  
 住居跡例があり、それ以降、徐々に増加する傾向に  
 ある。この過程にあっても生産された鉄器は大量な  
 熱源と労力から生れただけに貴重な存在で、流布し  
 た鉄器は使用、消耗したとしても廃棄されることな  
 く再生産が繰り返されたのである。この流れは近世、  
 近代まで続いている。その結果として古代・中世鉄  
 器は古墳の副葬物を除くとすれば、名物や記念物と  
 なった武器・武具などが僅か世に残されたに過ぎず  
 他は再生産されて、鉄文化が鉄文化を抹消した形と  
 なった。したがって住居跡出土の鉄器類は往時を偲  
 ぶ貴重な残留物と見なされるが、残留物はただ単に  
 紛失物としての存在ばかりでなく、故意に住居内に  
 納置した場合も考えられる。例えば、祭祀に関連し  
 た行為が考えられ、現在でも民間信仰に矢・小刀あ  
 るいは職人であれば工具を、農業を営む者であれば  
 農具をそれぞれ種々の形で用いたりもする。しかし  
 道具を通じての信仰は自然神に対する個有の在り方  
 などとは異なっているため一定の法則性そこから導  
 き出すのは困難であり、さらに出土鉄器は共同体係  
 において祭祀と見なされる場合は良いとしても一般

## 第2節 遺物について

的に祭祀を示唆する状況はほとんど無いといっても良く、漠然と捉えたら紛失物が祭祀に伴うかの識別は不可能に近い。しかし出土鉄器の個々の出土位置や出土の在り方を見直すと、紛失物として解決できない側面の方が多いのに気付く。それを村主遺跡出土例にあてはめると次のとおりである。

0-19より出土した2点の鍬(グリット22・24)は、やや大根の鍬であり、近接した出土位置の関係は、ただ単に紛失物として存在する以外の理由があろう。

38住13は住居跡内土坑から出土している。土中に鉄器を埋没させれば錆化消耗し、利器としての機能は数週間で失われてしまう。土中に埋没させる行為は、故意でなければ出来ないことである。この意味では床面上ないし、その近辺に置くのも錆化を早める原因であり、故意に通ずると考えられる。13住15・16の鍬が床面より上方3cmから出土し、16の基には鍬の残存があり、裸であった訳ではない。20住38の刀子が周溝内、24住17の刀子が床面より上方2cm、16住22の刀子も床面より2cmの位置である。

16住の小刀、18住の紡錘車、20住の鍬(踏踏か)先などは大形製品であり紛失物とは考えがたい。鍬先は平安時代に租税の対象に散された史料もあり、20住居跡が営まれた8世紀前半という時代性を考慮すれば鍬(踏踏か)先などは村落における共同所有物品で、無くせば責任を問われる代物と考えられるが、そう考えるのは現代的感覚であろうか。もし、そうした行為が許されるならば、20住居の主は農事の統治者か司祭者の可能性があり、出土した住居が大形であるのも特権階級を示唆している。小刀は地位に伴う可能性があり、それは後述するが個人所有物と考えられる。紡錘車はカマドから出土している。調査担当者の説明によれば竈支脚取り廃棄後の崩落土中から出土したとの事であるから、竈近辺の周壁より上方に置かれていたことになる。竈支脚取りは祭祀行為<sup>13</sup>と考えられており、それを裏付けるように県内でも一般的に行われている。一方、紡錘車のような大形鉄器となればなるほど、その道具あるいは道具にまつわる神々に対する信仰に恒久性と依存度が高まると考えられるが、そうした時に何故、竈の支脚と一緒に紡錘車ばかりでなく大形鉄器を持って行かなかったのだから理解し難い点が残される。

紛失物と云えそうなのは3点だけである。8世紀前半と考えられる焼失住居、6号住居跡の鉄器が焼失したことを考えれば紛失物の範疇で扱われて良いであろう。

次に鉄器の年代観について考えたい。鉄器で住居跡の床面に伴って出土した例は少なく、多くが床から離れた状態で出土している。それを自然現象に主因ありとするには1,000年強の年代では考え難く、それ以外の理由を必要とする。まず第一に鉄器の保管がある。鉄器の保管は現在でも湿度が少なく通気の良い場所に置くのが常であり、仮りに錆が生じれば砥石減り以上に鉄身が消耗してしまう。それを防ぐため、金属器の基本的な扱いは古代でも同様かそれ以上のはずで、住居内に置く場合、土間や湿度の多い敷物上に置く姿は想像できず、棚上であるとか榑木裏に挟むとか通気のよい箇所への納置が考えられる。とすれば住居廃棄後の埋没過程で棚上や榑木裏に鉄器が置れていたなら、建築材の倒壊時に、あらかじめ入り込んだ埋没土上に落ちることとなり、そこを発掘すれば床から離れた状態で鉄器が出土するのも当然の結果である。このため本稿では埋没土から出土した鉄器であっても本来的には各住居に伴った可能性が高いと考えたい。しかし住居跡の凹みを祭祀に用いた場合や、不特定な理由により、まま鉄器が置かれた時についてはこの限りではないが、今後、資料検討の蓄積を計り不特定原因を考えてゆくつもりである。こうした点を前提に、以下各段階の鉄器揃えとその傾向を考えたい。

### 第1段階 7世紀後半～8世紀前半

鍬、帯備用刀子、工具刀子、鍬(踏踏か)先がある。この段階の住居数18(53%)、鉄器数(75%)、1住居当り1.5個の割合で出土した。鍬は片刃剣型、剣型、刀身型があり、出土鍬の大半がこの段階に集中し、18棟

## 第6章 調査成果の整理と考察

中6の住居跡から出土している。それは旧時における弓の数揃え、あるいは弓が身近な存在であったことを意味し、農耕村落であったにせよ別側面を窺わせるものがある。実際に10住8に使用か修理した形跡がある。6住52の刀子、16住20小刀は帯佩用と考えられ、大形住居跡から出土している点から所持者の地位が示唆され、地域において律令制の浸透を感じさせるものがある。工具としての刀子は16住22、27住47にあり、日常的な工作を物語っている。農具として大形鎌（踏鋤か）先が、最も古い一群の一つとみなされる20号住居跡から出土し、村落の古い段階に農耕が裏付けされる。

鉄器の総体から見れば小刀・鋸（踏鋤か）先などの大形鉄器または帯佩用刀子の出土した住居跡は大形住居で所持者または管理者に特権階層を想定でき、刀子や鋸など小形鉄器が出土した中・小規模住居跡の居住者との間に鉄器から見ても階層差が認められた。

この第1段階に鋸の出土が多いのは時期的な特徴なのか、山間部における特徴か、この村落の内的特徴なのかは、今後、各遺跡の検討蓄積を待たなければならない。第1段階と第2段階との間に空白の時代が存在するが、第1段階の終末時に集落移動を余儀なくされ、人々が鉄器を置き去ったという形跡はない。

### 第2段階 9世紀終末～10世紀中頃

住居跡数の少ない段階で検討に必要な絶対量が不足している。この段階の住居数8（24%）、鉄器数3（8%）、1住居当り0.4個の割合で出土した。紡錘車と33号住居跡から出土した工具刀子の例がある。紡錘車には未成の縦縞痕があり、布織りが示唆される。正倉院には群馬、新田、佐位、多胡郡内などから上納した麻布が残され、広域にわたり麻の栽培が行われていたと考えられ、北毛地域でも近年まで栽培が行われ物産の一つであった。鉄製紡錘車は県内では8世紀後半の松井田町愛宕山4号住居跡例が古く、以降、徐々に増加傾向にある。

### 第3段階 10世紀後半～11世紀前半

鋸、工具刀子、手斧がある。この段階の住居数8（24%）、鉄器数6（17%）、1住居当り0.8個の割合で出土した。鋸はO-19から出土したやや大根の鋸があるが総体的には減少傾向にあり、弓に対する依存程度の低下が感じられる。替ってか工具類が存在し、24号住居跡から3本の工具刀子が、21号住居跡から手斧が出土している。

鉄器出土量は住居跡数からすれば占める割合が第1段階より減少し、再生力の向上を窺わせ、その一方で信仰と考えられる納置も少なくなる。

なお、鉄器類の反映に砥石があるが、金属器の調整に可能な定形の砥石の出土は皆無であった。おそらく砥ぎ場が遠距離にあったか、持ち去ったかのいずれであろう。水の便を考えれば当遺跡の立地から前者の可能性が高い。

## 3. 小刀と鋸の問題点

鉄器類を通観し、問題点があるのに気付く。一つは16住20の小刀で当時の軍器は官の定めるほか、官の統制品であり、一般には帯佩用できないと考えられる時代でありながら存在すること、いま一つは鋸が古墳時代よりも小形、軽量化されている点である。

### (1) 16住20の小刀について

本稿を草する前に「第7号墳出土の小刀の研磨」と題して触れたとおり、本級は横刀と大刀子との間の大きさや姿や形は刀の延長上にあるため、あえて小刀と称した。この種の大きさや作込みに関し、必ずしも明確な規定はないが、関保之助氏が『日本書紀』崇峻天皇紀、『延喜式』彈正台の記事を用いて概念を推定され

た「ここにいる小刀、すなわち大型の刀子であると思われ（中略）小刀を誤読して「ちいさがたな」という（以下略）」とし、刀と大刀子との間にある本紙を小刀として説明された。また氏は「これら的大型刀子は献物帳に注してある小刀という式に当ててよい」としておられるので大型刀子という呼称であっても良いと思われるが、大型刀子は、本来的に刀子の延長上にあるもので、種として刀の延長上にあるものではないことを踏まえれば小刀を種名称とするのが適切かと考えられる。氏の考え方は『東大寺献物帳』に記載がありながら正倉院から出庫してしまった「金銀作小刀一口（以下略）」を解釈する際に述べられたものである。さらに小刀という種名称は別の意味で存在に必要性がある。それは常佩用に何故、刀子が制式化したのか、その経緯を踏まえた時にである。

律令制の初期段階で大刀は儀仗のためのいわば一時的帯佩用であったのに対し、刀子は身を守るため公私に常佩用されたと史料解釈されるが「延喜式」などに、必要以上とも思える規制を加えた記事が散見する。そのことから思いのほか佩用に階位規制が強られていたのと常佩用もたらす危害を感じとることができる。事実、『日本書紀』崇峻天皇紀に三十余人の死殺をはじめ『三代実録』仁和二年四月三日の条、『小右記』長和五年三月十日の条に刀子、小刀を用いて殺、傷に及んだ記事がある。それに加えて、大刀子・長刀子・小刀を佩用してよいという記事は『延喜式』彈正台にある衛府の武官に五寸以上の長刀子佩用を許す記事を除くほか、小刀については管見に触れず、律令制が整った段階に小刀が常佩用されていた形跡は窺えない。しかし小刀は7世紀代の古墳から比較的多く出土し、帯佩用を示唆する例も少なくないので、7世紀から8世紀初頭の間に略装佩用から常佩用という経過をへて、常佩用小刀がもたらす危害力が要因となり刀子佩用に制式転換されたと推測される。小刀が史料に現われないのは、おそらく律令制の先駆をなす大化改新前後において小刀に対し何らかの規制があり、律令制の時代に至って上位特権層の常佩用あるいは工具小刀は除き、大半は製作を止め、それに伴い、名称も類多に用いる必要が無くなったためと類推される。そうした中にもあっては刀剣、武具の個有名称とその意味は時の為政者が替っても伝世性が示すとおりさぶる重要視され、小刀の名称などでも平安時代中期以降、しばしば史料に散見し、後世に再び現われるのである。

16住20の小刀は8世紀前半の特権階層が示唆される大形住居跡から出土している。8世紀前半頃は前述のように帯佩用が禁止されてからある程度の時代が経過した頃と考えられるが、制度的に見て、史料から形骸化は感じられず、この住居の主が何故、小刀を所持できたのか疑問視される。

当時は律令制による兵役と兵装、軍糧も人民の犠牲によるところが大きく、奈良時代から平安時代初頭に行なわれた夷征行動も東国に負担を強いて成り立ち、特に、東国経営の中継基盤に置かれた上野国（公）と人民にとって東北地方への出兵は切実な問題であったであろう。蕨手刀を系統的に追求された石井昌国氏は、瀬戸の地を上信地方に求めておられ、蕨手刀の出現こそは武装に創意を凝らした活路の動力としようとして生れた結果であり、小刀も同様に、身近に置かれた戦訓の基に必要とした刀とすることができるのではないだろうか。夷征行動の反映と考えたい。

このような地域で軍需関連やそれを維持、管理するための制度を運用する際、畿内、河内地域と同等であったとは考えられず、小刀に対しても異なる扱いであった可能性もたれる。8世紀代の小刀の出土例を見ると群馬県内では松井町可愛岩山4号住居跡から8世紀後半の例が、さらに近県にも類例があり、それら複数例の存在を考えれば8世紀全般を通じ既ね帯佩用できたものと捉えられるのではないだろうか。可能であったとすれば小刀は入庫管理された一般的な維持の外に、佩用が黙認されていた場合、功績を賞て佩用が許された場合、必要に応じて帯佩用が制度化されていた場合など、いくつかの特権的な個人所有の形が推測される。したがって本例は、そのような背景の中で用いられた佩用小刀と考えたい。

## 第6章 調査成果の整理と考察

### (2) 出土の鏃について

当遺跡から15点の鏃の出土がある。うち5点を除くと奈良時代が主体の第1段階の住居跡から出土し、第2・3段階は極端に減少する。これらの使用目的は、奈良時代と後代の検出率を比べると奈良時代の方が検出率が高いため再生率は後代に比べ低いとすることや奈良時代住居跡から分散傾向をもって比較的多く出土することなどから、鏃あるいは鉄器に対して余裕が見られ、村落が夷征行動や戦乱の禍中に置かれた時にこうした余裕が持てるとは考えられず、周辺の自然環境を含めれば鏃の使用は生業の一端に用いられた可能性が極めて高いと推測される。つまり狩猟であり、道具として用いた弓矢の存在である。

出土鏃のうち区、韓から鏃先まで遺存した例は5例に過ぎず、他は鏃被先より先を欠損している。欠損部は広根から尖根が想定できる短莖鏃の13住15を除くと、いずれも細く、長い莖鏃であり、それをもって大根の鏃先を支持したとは強度上および莖、鏃の均衡上から考え難いため第219図の欠損鏃は細根の鏃先であったと想定される。13住16の鏃先のように小さめの細根ではなかったろうか。以上のように欠損部を想定し、全体像を推推すると、前代の7世紀の鏃よりも小身であるのに気付く。このことを検討する場合、さらに多くの量を扱いたいところであるが、余り拡大し過ぎると地域性や遺跡の個有特質が損なわれるので当遺跡が立地する沼田盆地の同時代の集落遺跡から求めたい。沼田市石墨遺跡<sup>111)</sup>では9世紀末のB 8号住居跡から短莖鏃尖根鏃1点、利根郡昭和村中棚遺跡<sup>112)</sup>では9世紀後半のNH 2貯蔵穴(住居跡)から飛燕鏃に類似した短莖鏃鏃が、11世紀前半のNH 6床面(住居跡)からやや長目の莖鏃をもつ尖根鏃が、同村糸井宮前遺跡<sup>113)</sup>では10世紀前半の33号住居跡から尖根鏃が1点出土している。残念ながら奈良時代の例を補強することは出来なかったが、それ以降の補足となり得るであろう。7世紀代の比較資料は、沼田市奈良古墳群<sup>114)</sup>に既出しているが、時期限定が困難であり、卑近な例として原南、西毛地域の奥原古墳群<sup>115)</sup>から求めたい。奥原古墳群は群馬郡榛名町にあり、35基の古墳が調査された。年代は出土土器から6世紀終末ないし7世紀初めに築造起源があり、7世紀前半に築造主体が置かれる古墳群である。図化された出土鏃は203点を数え、有柄で区・韓から鏃先まで残存し、旧状の知れる例は37点である。

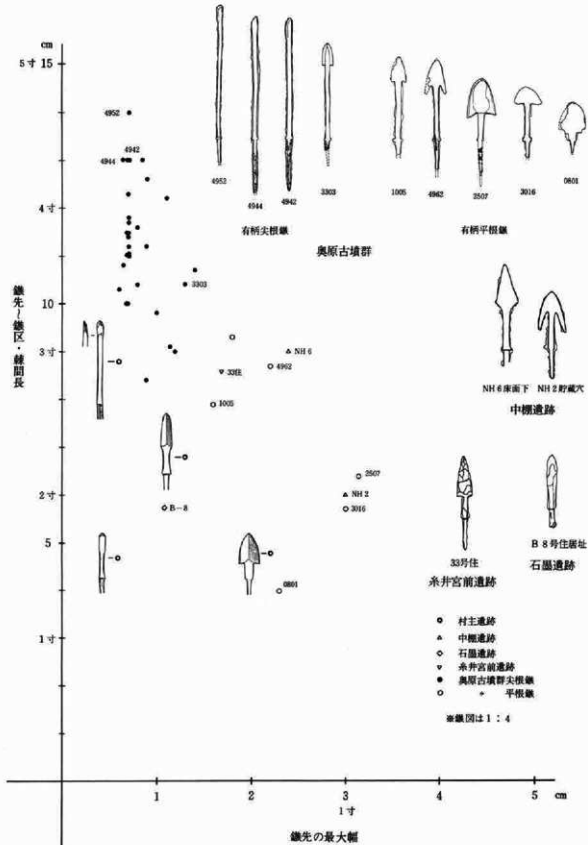
これらを扱って作成したのが第222図である。グラフの横軸は鏃先の最大幅を、縦軸は鏃先から区・韓までの長さを実測図から測定し記入した。奥原古墳群出土の無柄鏃は含まれていないが、特異な形、必要と思われる例は右上に掲げた。番号は同報告で使用された遺物番号である。村主遺跡出土の38住14は区的位置が判然とせず曖昧なので除外した。

グラフ化の結果、村主例11住69、13住16は奥原例の細根～尖根鏃よりも鏃先の最大幅が狭く、小さい傾向があり、尖根～平根鏃としたグリット22・24は奥原例よりも短い傾向にある。石墨・中棚・糸井宮前例も中棚例のNH 6を除けば奥原例の尖根～平根鏃より短目の傾向がある。NH 6が出土した住居跡は11世紀前半である。

この比較を要約すれば村主例は奥原例より鏃の短少傾向がある。さらに資料操作時の所見を加えれば、奥原例に見られた韓を持つ多量の鏃は、38住13に1点しか見られず、また莖鏃の長い細根鏃は奥原例と村主遺跡の7世紀後半から8世紀前半の住居跡から出土した例に多く見られ、以降は減少しており、いずれも時代の推移を感じさせるものがあつた。

鏃の短小化や小形化は莖との均衡上から、ある程度、莖の短少を反映していると考えられる。さらに弓の弾力程度と矢羽による補足が加わって、有効射程が決まるのであり、したがって鏃の長・短や重みは弓の性能を示唆する重要な決め手となるのである。村主遺跡出土鏃から用いられた弓を想定すると、正倉院には27張りの弓と、3,740本の矢が伝世しているが『東大寺献物帳』に記載された弓100張および矢100具は恵美押勝の

第2節 遺物について



第222圖 沼田盆地における奈良・平安時代有柄鐵と奥原古墳群出土鐵対比圖

## 第6章 調査成果の整理と考察

乱の際に出庫され、現存の弓と矢は後に返還されたとされ、弓と矢が対応するとは必ずしも言い切れないようである。弓は長いもので2.23m、短いもので1.66mあって2m前後のものが多く長弓に属するとされている。これに対して矢は末永雅雄氏によると「この頃の矢は正倉院御物・法隆寺・奈良市般若寺に伝存されるが、矢柄二尺四・五寸、鏃の長さで若干の差はあるが、その全長は二尺七・八寸から三尺を限度とする。」と実査の所見を述べておられ矢の全長は後世の長弓用に当る。鏃は氏の測図例の中から細根で細く、長い莖部の7点を抽出し鏃先から区・棘までを測ると約13cmが2点、約11cmが2点、9cmが1点、8.5cmが2点、平均は10.7cmで奥原例の細根～尖根鏃の平均的な位置よりやや低く、小さ目の3点は村主例の13住16に近い。

また出土例では、大阪府土保山古墳、栃木県七廻り鏡塚古墳から長弓に属す例が、京都府産土山古墳から半弓に属す例がある。6世紀代とされる七廻り鏡塚例は、2張出土し、欠損はあるものの約2mを推定できるとされ、それに対して矢は完全遺存はないものかろうじて連続した莖から全長80～85cmの長さが示されている。この長さは三重県石山古墳の例、80～85cmと共通する。鏃は無柄平根鏃を除くと74本の細根鏃が出土し、鏃先から区までの長さは身の長い例で10.6cm、短い例で10.0cmとまとまっており、平均は10.2～10.3cmで、村主例13住16に近い例である。

5世紀後半とされた土保山古墳から6本の弓の完存例がある。長さは2m弱で、後世の長弓に属し、七廻り鏡塚の例に近い大きさであるが、鏃、鏃の詳細は明瞭でない。

5世紀代とされた産土山古墳から一部欠損しているが2張りの後世にいう半弓が出土している。2張とも1.25m前後と遺存状況から推定されている。鏃は無柄平根鏃が少数出土しているが鏃の記述がないので遺存していないようである。

既知資料を掲げてみたが、後世の長弓に相当する大きさの弓に伴う矢は80～90cmの長さで考えうるほか後世の半弓に相当する弓の矢は不詳であった。おおよその概念を求めることはできたが実例不足から鏃・莖・弓を大きさの関係で知るには至らなかったのである。しかし当遺跡では冒頭で触れたように、情況解釈から生業の一端としての弓が考えられるのであって、この前提に立てば、草木の生い繁る山間に分け入り長弓用いて狩猟を行ったことは妥当性において考えずらく、機動性の高い半弓の使用が考えられ、ひいては鏃がやや小身であるのも理解が付くであろう。

以上、弓・鏃について若干の検討を加えたが、弓には致命的な問題がある。木製のためほとんど遺存せず遺存したとしても弾力の程度が復元製作によらなければ判らない点である。それにより鏃・莖の大きさ、重量からくる相互関係がはじめて理解でき、使用目的も明らかとなり得るであろう。現実的には、なかなか困難なことで、まず鏃からの検討を進め、一定の到達点に達する必要がある。単純な内容であれば、時代の推移に伴う大きさ、重量の変化はあるか否か、平地・山地の遺跡で大きさや重量に差があるか否か、地域色がどの程度あるのか、むろん形態の変遷を踏まえてである。

さらにいま一つ付け加えたい。本稿を草するについて検討した内容に弩の存在がある。軽量・小形鏃が手弩鏃と関連するかと思ったからである。弩は史料から実物に対する概念を定め難いが、643人を動員して一具の造弩を行うほどの難解複雑な大型兵器的な規模のものから、手弩とあるように小型機構のものまであったようで、的・中力、攻撃力に優れた武器であった。末永雅雄氏が指摘するように大陸の弩と同様なものであったとすると手弩の矢は史料に見る弩用の飛鏃とは別の短く小さめの矢であったろう。すこぶる高い的中率を考えれば狩猟にも適しているのかもしれないが、軍器の使用は官の定めによる制度的な問題や、扱いに専門性を要することから、狩猟に用いられた可能性は極めて低いであろう。弩は夷征行動に伴い多用されているため、その中継基地たる上野国にとっても密接な存在であったはずで事実、上野国府の兵庫にも25具の手弩



が存在していたのである。(大江正行)

(注)

- (1) この場合、分類上であって、機能上ではない。
- (2) 後藤守一「弓矢」『原始時代の武器と武具』(雄山閣) 1996による。
- (3) 本間昭治ほか「正倉院の刀剣」正倉院事務所編集(日本経済新聞) 1974による。
- (4) 駒方貞亮「農具の歴史」(至文堂) 1965、「日本の鎌・鉋・鋳」(大日本農政会編) 1979、朝岡康二『鉄器農具と政治の研究』(法政大学出版局) 1986を参考にした。
- (5) 田中作治郎氏は牽引すれば犁とならざる可能性を指摘しておられ、それに対し、駒方貞亮氏は子日輪に踏踏を考えておられる。現在でも説の分かれるところである。  
駒方貞亮「農具の歴史」(至文堂) 1965、田中作治郎「本邦の古代に於ける須臾、久波及び加呂須の区別に就いて」『考古学雑誌』第4巻第5・11号 1911-1912。
- (6) 佐渡郡赤堀村19号墳の横穴式石室前から同鏡が出土している。大きさは横幅15.5cm、長軸長17.5cmである。古墳の主体的な年代は出土遺物の年代から7世紀中頃と考えられる。松村一昭「赤堀村地蔵山の古墳」(赤堀村教育委員会) 1977。  
沼田市石巻遺跡B区10号住より横幅13.3cm、長軸長14.6cmの同鏡が出土している。岡住居跡は6世紀前半である。木田隆・石北直樹「石巻遺跡」(沼田市教育委員会、群馬県教育委員会、日本道路公団) 1985  
前橋市芳賀地区出土とし(前橋市教育委員会)、前橋中央公民館郷土展示室に同鏡が陳列されている。1984発見。  
上野国分寺中間地域遺跡より同鏡の出土があり、平安時代とされている。群馬県歴史文化財調査センター展示室に陳列された。1985発見。
- (7) 高崎幸男「火の道具」(柏書房) 1985を参考にした。
- (8) 和州から8世紀中頃と考えられる底部回転調整の須臾器環が出土している。井上昭雄「金井製鉄遺跡発掘調査報告書」(法川市教育委員会) 1975。
- (9) 石井昌国氏は「東北地方で発見される兼手刀のなかに、上信地方から発見される兼手刀と全く同型のものが僅少な量発見されるのは従来の土人と関東・中部地方人との交流がうかがわれ、その発達した刀姿が東北刀の型式をしめすのを見ると、その地源はひとまず関東・中部地方に求めたくなる。」としておられる。『兼手刀』(雄山閣) 1966。
- (10) 石塚久則・大江正行「歌舞伎B遺跡」『上武国道地域歴史文化財調査報告書』Ⅲ 1976 61号住居跡にその例がある。
- (11) 両石巻遺跡跡では、B区10号住居跡の北壁にもたれかかって出土し、祭祀に関連した可能性がある。
- (12) 朝原健「古代東国における銅器の一面」『国学院雑誌』第78巻第9号 1977。
- (13) 群馬県立歴史博物館に展示されている。
- (14) 大江正行「第7号墳出土の小刀の研削」『清里・長久保遺跡』(群馬県教育委員会・群馬県歴史文化財調査事業団) 1986。
- (15) 岡田文治、牧江・増地尾崎元春「奈良時代の刀装」『新版日本刀講座』(雄山閣) 1968。
- (16) 末永雅雄氏は大刀について古墳時代から奈良時代にかけて新羅系、高麗様式から唐様に転換したことを指摘し、加えて尾崎元春氏は、「衣服用」武官礼服の系から、武官の佩刀を横刀と解し、その形式は文武天皇の大宰府令が唐制に倣った際のもので考えておられる。二氏に限らずとも奈良時代刀装には他種の指輪が多く、佩用刀もその一端にあった可能性が極めて高い。末永雅雄「正倉院大刀の意義」『正倉院大刀外伝』(日本経済新聞社) 1977、尾崎元春「正倉院刀録」及び「東大寺藏物帳」所載の刀装の種類と名称について「正倉院の刀装」(日本経済新聞社) 1977。
- (17) たとえば「皇大神宮儀式帳」延暦二三年月読宮遷奉 神射十六種(中略)小刀二柄。  
『観世音寺資財帳』無実(天慶四年益去)(中略)小刀拾餘柄。
- (18) 神会川原原遺跡において8世紀後半とされた189号住居址から帯佩用と考えられる刀姿良好で、重ね厚く、目釘、鎌を着装した例が出土している。『向原遺跡』第5分冊(神会川原教育委員会) 1983。  
『在野工業団地』(群馬県教育委員会) 1976にも住居址出土例あり。
- (19) 木田隆・石北直樹「石巻遺跡」(沼田市教育委員会、日本道路公団) 1985。
- (20) 黒谷文夫・高澤敏弘「中継遺跡」(群馬県昭和村教育委員会、群馬県教育委員会、日本道路公団) 1985。
- (21) 石守美・山口逸弘「永井宮前遺跡」(群馬県歴史文化財調査事業団、群馬県教育委員会) 1985。
- (22) 木田隆・石北直樹氏の銅鏡により1983発見。古墳群については田島鶴村「奈良古墳群」『群馬県史』資料編3 1981に詳しい。
- (23) 海沢重昭・松本浩一ほか「奥原古墳群」(群馬県教育委員会、群馬県歴史文化財調査事業団) 1983。
- (24) 末永雅雄「弓矢」『日本上代の武器』(弘文堂) 1941の複製版(木耳社) 1956による。
- (25) 小林行雄「宝塚の武器」『世界考古学大系』日本冊(平凡社) 1961。
- (26) 藤原明「土屋山古墳発掘調査概報」(高槻市教育委員会) 1960
- (27) 大和久重平「七廻り鹿塚古墳」(帝國地方行政学会) 1974。
- (28) 海原末治「竹野郡竹野土山古墳の調査(下)」『京都府文化財調査報告書』第廿一冊(京都府教育委員会編) 1955。
- (29) 大和初重「弓矢」『世界考古学大系』日本冊(平凡社) 1969。
- (30) 『延喜式』巻四九「兵庫室」<sup>通稱</sup>一具 單 弓六百 箭三人。
- (31) 『日本三代実録』巻三九 出羽国元慶五年四月二五条に(前略) 弩廿九具、手弩一百具(後略)とあり弩と手弩の区別がある。
- (32) 末永雅雄「弩」『日本上代の武器』(弘文堂) 1941の複製版(木耳社) 1956による。
- (33) 『日本紀』巻六 仁明天皇承和四年辛丑の記事に(前略) 不具射一弩之飛鏑、とある。
- (34) 33の後に庫中の弩が不調であること、その操作を習熟させる者がいないで鎮守府に准じ野郎を置くことを懸望している。
- (35) 『上野国史』によれば長三年交替無実として、手弩武備五具ほかを上げていた。このことにより辺地にも置かれていた野郎は上野国にも存在し、その統率の基に運用されていた設備があったことが判る。

## 第3節 化学分析

## 村主遺跡出土土器を中心とした胎土分析

花岡 紘一 (群馬県工業試験場)

中沢 悟 (群馬県埋蔵文化財調査事業団)

はじめに

月夜野町では、奈良・平安時代を中心として多くの須恵器と瓦の生産が行なわれ、それについての研究も古くからなされていた。研究成果の多くも公表され、今日しだいに全体像が明らかになりつつある。ここで生産された平安時代の製品には、県南地域では認められない多くの特色を持つものが多い。その例としては月夜野型羽釜・脚付羽釜・藪田・藪田東遺跡に多い9世紀代の燻焼成の坏・洞A支群や藪田遺跡で出土する高い高台を持つ盤形の皿等をあげることができる。それらの特色を持つ製品の供給範囲を調べてゆくと、利根沼田・吾妻地域にそれらの製品の多くは分布しており、県南地域には、現状では出土していないことに気付く。つまり平安時代の月夜野古窯跡群は、県北の山間地域を対象とした大きな産地であった。このように器形や焼成方法の特色より、産地と消費地との関係を知ることができたわけであるが、製品中に含まれている胎土が、産地により特色を示すならば、胎土分析により、産地を限定することが可能となる。

胎土分析は、このような大きな可能性を持っており、県内においては多く実施され、成果も公表されてきた。しかし現状では分析試料が少なく、県内全体を覆う成果は不十分である。今回はその作業の一つとして利根地域における胎土分析を前回行なわれた藪田東遺跡の成果の上に、新試料を追加し検討を加えたものである。本稿の化学的な記述を花岡が、考古学的な内容の記述を中沢が行った。

## 1. 試料について

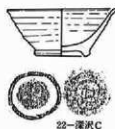
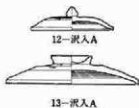
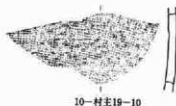
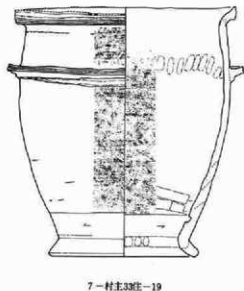
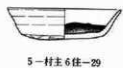
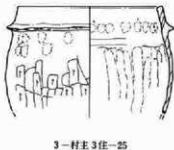
村主遺跡は奈良・平安時代の遺跡であり、住居内より多くの須恵器が出土している。それらの須恵器の大部分は、月夜野古窯跡群中のいずれかの窯により生産されたものと考えられる。月夜野古窯跡群については、現在8支群が想定されており、その中で洞A・沢入A・深沢B・真沢A・水沼Aの5支群で窯体が確認されており、出土遺物が明らかな支群は洞A・藪田A・沢入A・須磨野A・深沢B・深沢Cの6支群である。今回深沢B・須磨野A支群の胎土分析試料を加えると、6支群すべての胎土分析値が出そろったことになる。しかし今回村主遺跡出土の須恵器を観察すると、従来知られていた各支群の製品と異なる一群が多く確認されており、なお多くの未知の支群が想定された。そのような状況の中であるが、現状において得られた試料より、村主遺跡出土須恵器が、どの支群に最も近いかを知るために分析試料を選択した。

以下、窯跡群の立地基盤に不可欠な地質や製作地同定に必要な須恵器の胎土傾向について触れておきたい。

## (1) 地質と胎土傾向

窯跡の立地する地質については、すでに詳しく報告されている<sup>(9)</sup>。大きく分けると南北に分かれる2地質上に位置しており、各支群は北側の石英安山岩質凝灰岩を主体とした須磨野A・深沢B・C・水沼A・真沢A支群と南側の緑色凝灰岩を主体とする沢入A・藪田A・洞A支群に分かれる。いずれも基盤は第3系に時期する。それらの各支群より出土した須恵器の胎土を仔細に観察すると、各支群は立地する生成基盤ごとにほぼ共通した胎土傾向を示す。これにより生成基盤層と須恵器胎土とは直接的な関係があることが明らかとなった。

第3節 化学分析



第223图 胎土分析遺物実測図1)

第6章 調査成果の整理と考察



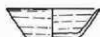
23-深沢C



24-深沢C



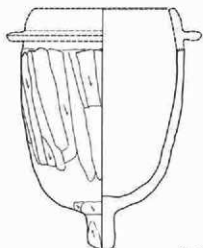
25-藪田東3住



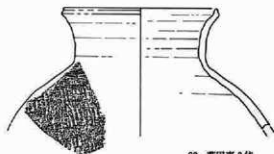
26-藪田東3住



27-藪田東3住



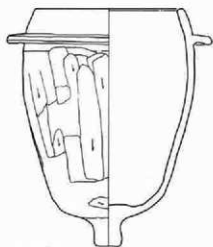
31-須磨野A-18



28-藪田東3住



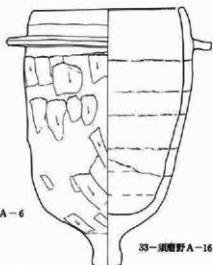
29-藪田東3住



32-須磨野A-15



30-須磨野A-6



33-須磨野A-16

第224図 胎土分析遺物実測図(2)



第6章 調査成果の整理と考察

胎土分析資料観察表(2)

資 料	時 期	器 形 類	胎 土 の 肉 眼 観 察	備 考
16 沢入A	8 C 中頃	環蓋 須恵器	内外面は褐色、断面は灰色を呈する酸化焙焼成の環蓋であり、口縁部小破片である。素地は均質で陶土質、白色・黒色粒子を少量含む。	胎土傾向B 実測図なし
17 沢入A	8 C 中頃	大甕 須恵器	内外面ともに黒褐色を呈する酸化焙焼成の大甕体部破片である。外面に平行印き、内面に篆文のあて目がみられる。素地は均質で陶土質、白色・黒色粒子を少量含む。	胎土傾向B 実測図なし
18 深沢B1号窯-1	10C 前半	環 須恵器	灰色を呈する還元焙焼成の環である。胎土中に1mm以下の白色粒子を多量に、1mm前後の石英粒子を多く含む。底面に右回転糸切痕。	胎土傾向A
19 深沢B3号窯-1	10C 前半	環 須恵器	所褐色を呈する酸化焙焼成の環である。胎土中に1mm以下の白色粒子を多量に、1mm前後の石英粒子を多く含む。18の石臼様に底径が小さく、体部下端と底部端との境に段を持つ。底面に右回転糸切痕。	胎土傾向A
20 深沢B4号窯	10C 前半	壺 須恵器	表面灰白色で断面の一部で灰褐色を呈する、還元焼成である。胎土中に1mm以下の白色粒子を多量に、1mm前後の石英粒子を多く含む。	胎土傾向A
21 深沢C	10C 中頃	埴 須恵器	褐色を呈する酸化焙焼成の埴である。胎土中に石英粒子と白色粒子を多く含んでいる。黒色粒子は認められない。	胎土傾向A
22 深沢C	10C 中頃	埴 須恵器	褐色を呈する酸化焙焼成の埴である。胎土中に石英粒子と白色粒子を多く含んでいる。黒色粒子は認められない。	胎土傾向A
23 深沢C	10C 中頃	羽釜	褐色を呈する酸化焙焼成の羽釜である。胎土中に石英粒子と白色粒子を多く含んでいる。微量の黒色粒子を含む。	胎土傾向A
24 深沢C	10C 中頃	羽釜	表面が炭素吸着により黒色を呈しており、断面及び内側の一部がやや褐色を呈している。胎土中に多くの石英粒子と白色粒子を含む。	胎土傾向A
25 藪田東3号住	9 C 後半	環 須恵器	灰白色を呈する還元軟質焼成の環である。胎土中に1mm内外の白色粒子を多く含む。砂粒含まず密な胎土。黒色粒子はほとんど含まず。	胎土傾向B ロクロ左回転
26 藪田東3号住	9 C 後半	環 須恵器	還元焼成の環であり、断面内側底部に褐色、他の表面に炭素吸着あり。胎土中に1mm内外の白色粒子を多く含む。黒色粒子はほとんど含まない。砂粒含まない密な胎土。	胎土傾向B ロクロ左回転
27 藪田東3号住	9 C 後半	環 須恵器	酸化焙焼成の環であり、胎土中に1mm前後の白色粒子を多く含む。黒色粒子はほとんど含まず。砂粒含まない密な胎土。	胎土傾向B ロクロ右回転
28 藪田東3号住	9 C 後半	壺 須恵器	1mm内外の白色粒子を多く含む。黒色粒子はほとんど認められない。砂粒含まず密な胎土。	胎土傾向B
29 藪田東3号住	9 C 後半	壺 須恵器	1mm内外の白色粒子を多く含む。黒色粒子はほとんど認められない。砂粒含まず密な胎土。	胎土傾向B
30 須磨野A-6	10C 前半	埴 須恵器	灰白色を呈する還元焼成の埴である。胎土中に1mm以下の白色粒子を多量に、1mm内外の石英粒子を多く含む。ロクロ右回転。	胎土傾向A
31 須磨野A-18	10C 前半	羽釜 (脚付)	灰白色を呈する還元軟質焼成の脚付羽釜である。胎土中に1mm以下の白色粒子と1-2mmの石英粒子を多量に含む。	胎土傾向A
32 須磨野A-15	10C 前半	羽釜 (脚付)	褐色を呈し、一部分灰白色を呈する脚付羽釜である。胎土中に1mm以下の白色粒子と1-2mmの石英粒子を多量に含む。	胎土傾向A
33 須磨野A-16	10C 前半	羽釜 (脚付)	灰白色を呈し還元軟質焼成の脚付羽釜である。胎土中に1mm以下の白色粒子と1-2mmの石英粒子を多く含む。	胎土傾向A

それらの胎土の内眼観察による特色は以下の通りである。

- A. 石英安山岩質凝灰岩の基盤（深沢以北地区）、深沢B・深沢C・須磨野Aの各支群と8世紀前後の未発見の窯。胎土は、製品の製作された時代により密度や気泡の状態及び焼成方法の違いによる色調等が異なる。8世紀前後～8世紀中頃までの坏・埴・甕等の製品の大部分は灰色を呈する還元焼成であり、胎土は密である。しかし9世紀～10世紀代の坏・埴・羽釜は灰白色又は褐色を呈し、焼締られた製品は少なく、特に10世紀代に至ると多くが褐色を呈し、胎土中に気泡が多い。このように同一地域内においても焼成方法等が異なるため、胎土の状態は少なからず異なる。しかし以下の2点は共通する。

- ① 1mm以下の白色粒子を多量に含む。
- ② 1～2mmの石英粒子を多く含む。

以下胎土傾向Aと称する。

- B. 緑色凝灰岩の基盤（沢入以南地区）、沢入A・敷田A・洞Aの各支群と8世紀前後の未発見の窯。胎土は上記の地区同様時代に焼成・密度・気泡・色調等が異なる。しかし以下の2点は共通する。

- ① 1mm以下の白色粒子を多量に含む。
- ② 1～2mmの石英粒子はほとんど含まない。1mm以下の石英粒子を含むが、量は非常に少ない。

以下胎土傾向Bと称する。

## (2) 試料の選択

今回の分析試料の選択は、本報告の性質上村主遺跡試料を中心とするものであるが、月夜野窯跡群内における村主遺跡出土須恵器の位置づけが可能になるように、従来行ってきた成果も集めて検討資料とした。

村主遺跡の資料は、平安時代の3・31・33号住居跡と奈良時代の6号住居跡の資料及び平安時代の19号住居跡内より出土した古墳時代と思われる鍛入須恵器を胎土分析の試料とし、他に従来分析を行っていない深沢B支群、須磨野A支群の試料及び分析の少ない沢入A支群の資料の分析を行った。

## 2. 分析の意図と目的

- (1) 1・2・3は10世紀後半の村主遺跡3号住居跡出土の坏・埴・羽釜であり、器形の特徴からみてほぼ同一時期の製品と考えられる。胎土傾向は1と3が同様であるが、2は焼成にみられるようにやや異質である。同一住居内のこれらの3個体は、胎土分析の結果どのような傾向を示すであろうか。
- (2) 4・5・6は8世紀前後に属する村主遺跡6号住居跡より出土した須恵器である。月夜野古窯跡群ではこの時期の窯は確認されていない。しかし胎土傾向はBに近いので、月夜野古窯跡群中の南側に想定される窯の製品の可能性が高い。胎土分析により、従来知られているどの支群に最も近いであろうか。
- (3) 7は10世紀前半の村主遺跡33号住居跡より出土した甕である。10世紀前後の甕は、集落内より出土例は少なく、生産地は深沢C支群で知られている。胎土分析の結果よりみて、どの支群に最も近いであろうか。
- (4) 8と9は10世紀前半の村主遺跡31号住居跡より出土した脚付羽釜と思われる。同一住居内よりの出土であるが、胎土傾向が異なり、8が胎土傾向B、9が胎土傾向Aである。この脚付羽釜の生産地は須磨野Aと真沢Aの2箇所知られており、いずれも胎土傾向Aの地区である。そのため胎土傾向Bの製品の存在により、緑色凝灰岩の基盤でも生産されていた可能性が示唆されることになる。
- (5) 10は9世紀後半の村主遺跡19号住居跡より出土した須恵器甕である。おそらく古墳時代に属する製品

村主遺跡・月夜野古副都府資料

試料	成分		SiO <sub>2</sub> (%)	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	TiO <sub>2</sub> (%)	CaO (%)	MgO (%)	K <sub>2</sub> O (%)	Cu/K	Sr/Rb
	3	6									
1	3	6	66.3	21.7	7.70	1.46	0.55	0.13	0.96	0.76	1.18
2	*	-9	69.4	16.8	5.80	1.06	0.56	0.95	0.83	0.89	4.00
3	*	-25	67.3	20.3	9.12	0.96	0.53	0.78	1.90	0.65	1.36
4	6	21	72.5	20.2	4.15	1.04	0.18	0.46	1.21	0.21	0.80
5	*	-29	73.3	19.6	4.66	0.81	1.10	0.13	1.15	1.27	2.47
6	*	-28	78.0	18.2	3.25	0.85	0.54	0.76	1.29	0.57	0.82
7	33	19	69.4	26.1	3.17	0.78	0.76	0.37	0.89	1.11	1.90
8	31	4	69.5	21.7	3.91	1.06	0.49	0.80	2.26	0.30	1.35
9	*	-6	70.6	23.9	3.12	0.92	1.18	0.74	1.82	0.86	1.54
10	18	10	72.7	21.0	3.37	0.88	0.36	0.57	0.64	0.30	0.40
11	11	18	69.1	24.0	3.95	0.71	0.58	0.43	0.88	0.87	1.76
12	*	*	77.8	18.0	35.0	0.68	0.51	0.84	0.90	0.77	2.29
13	*	*	77.4	17.5	2.76	0.62	0.48	0.41	0.56	1.14	2.50
14	*	*	68.2	18.5	2.42	0.64	0.50	0.46	1.96	0.36	2.10
15	*	*	66.0	21.0	5.19	0.66	0.78	0.45	1.45	0.78	2.84
16	*	-28	70.6	18.4	2.96	0.67	0.57	0.76	1.75	0.43	1.92
17	*	*	66.5	20.5	5.14	0.73	0.85	0.75	1.32	0.83	2.21
18	深部B	*	71.5	22.9	4.55	0.94	0.99	0.93	1.31	1.00	1.29
19	*	*	67.0	22.0	3.75	0.80	1.06	0.31	1.24	1.14	1.94
20	*	*	69.5	22.9	4.64	0.85	0.85	0.17	1.49	0.76	1.86
21	深部C	*	65.2	21.0	2.94	0.67	0.78	0.38	1.36	0.79	2.43
22	*	*	66.1	25.0	2.41	0.66	0.90	0.43	1.46	0.84	3.24
23	*	*	64.2	20.4	3.04	0.64	0.77	0.30	1.38	2.97	0.77
24	*	*	66.0	20.3	2.23	0.62	1.05	0.40	1.46	0.99	3.04
25	観音堂3住	*	66.3	20.0	4.20	0.68	0.48	0.50	1.76	0.36	1.63
26	*	*	66.0	19.2	3.36	0.70	0.48	0.44	1.46	0.44	1.42
27	*	*	67.0	18.0	4.56	0.65	0.41	0.45	1.51	0.38	1.50
28	*	*	66.4	21.4	4.39	0.74	0.45	0.51	1.36	0.46	1.75
29	*	*	66.2	22.8	3.69	0.76	0.40	0.50	1.43	0.39	1.45
30	須藤野A	*	69.9	22.0	3.95	0.78	1.02	0.08	1.64	0.83	1.69
31	*	*	71.6	21.4	3.10	0.78	1.01	0.07	1.64	0.82	1.40
32	*	*	69.5	22.8	3.50	0.93	0.87	0.25	1.43	0.80	1.70
33	*	*	69.3	24.5	3.85	0.93	1.01	0.39	1.43	0.83	1.58
34	洞A	*	68.6	18.4	4.29	0.82	0.70	1.12	1.49	0.62	1.79
35	*	*	66.7	18.7	5.51	1.02	0.48	0.77	1.36	0.47	0.86



であり、転用品として住居内に持ち込まれたものであろう。この時期には現状で把握できた月夜野古窯跡群での操業は薄いと考えられている。ではこの甕はこの産地で生産されたものであろうか。

- (6) 11~17は、8世紀中頃の沢入A支群より出土した坏・坏蓋である。この支群は過去において14~17の4個体が胎土分析されている。しかし分析結果数値が広い範囲にわたるためさらに3点追加した。一支群として広い範囲に分布する傾向を示すのであろうか。
- (7) 18・19・20は10世紀代の深沢B支群出土の坏・甕であり、従来この支群の存在は知られていたが、出土遺物を実現することが出来なかったため、胎土分析は行なわれていなかった。今回資料を得て初めて胎土分析を行なった。近接するC支群や他の支群との関係はどのようであろうか。
- (8) 31~33は10世紀前半代の須磨野A支群出土の境と脚付羽釜である。この支群は最近報告された支群であり、脚付羽釜を多く出土していることで注目される。今回胎土分析を行なった。1支群の胎土傾向に共通性が認められるのであろうか。又他の支群との関係はどのようであろうか。

なお21~24は深沢C支群出土の境と羽釜であり、25~29は藪田A支群の工人集落と考えられている藪田東遺跡3号住居跡より出土した坏・甕の資料であり、いずれも藪田東遺跡の報告書の中で示した資料であり、各支群の様相を知るために示した。

### 3. 分析方法及び測定条件

#### 1. 分析方法及び測定条件

蛍光X線分析 分析用試料は各試料を $10\mu\text{m}$ 以下に粉砕し、5~10gを径4cmの円板に成型して使用した。測定条件は次のとおりである。

蛍光X線分析装置：理学電機(株)製KG-4型

X線管球：銀封陰極 50kV, 20mA

分光結晶：Fe, Sr, RbにはLiF ( $2d=4.028\text{\AA}$ )

Ca, K, Ti, AlにはEDDT ( $2d=8.808\text{\AA}$ )

MgにはADP ( $2d=10.64\text{\AA}$ )

検出器：LiFを使用したとき、S・C、EDDT、ADPを使用したときP・C

時定数：1

計数法：Fe, Ca, K, Ti, Sr, Rbはチャートにより、Si, Al, Mgは定時計数法によった。なおチャートは $4^\circ/\text{min}$ とした。

波高分析器：積分方式

測定線： $\text{FeK}\beta$ ,  $\text{CaK}\alpha$ ,  $\text{KK}\alpha$ ,  $\text{TiK}\alpha$ ,  $\text{SiK}\alpha$ ,  $\text{AlK}\alpha$ ,  $\text{MgK}\alpha$ ,  $\text{SrK}\alpha$ ,  $\text{RbK}\alpha$  の各1次線を使用した。

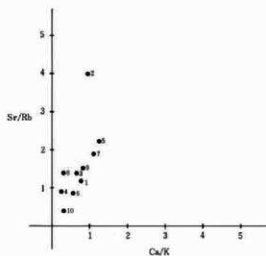
X線照射面積：20mm $\phi$

標準試料：群馬県埋蔵文化財調査事業団から依頼を受けた土器(203, 205, 210, 213, 215, M-1 M-10, M-11, M-17, M-25, S-17)を化学分析し標準試料とした。

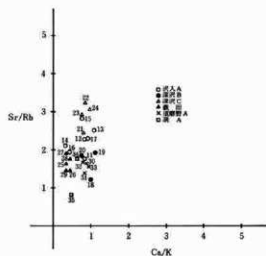
#### 4. 試験結果

以下に、分析目的の(1)~(8)について結果を報告する。

- (1) 試料1・3は近似値にあり、須磨野A・深沢支群に近いこの支群は胎土傾向Aの地区であり、肉眼による胎土傾向の観察とほぼ一致した。しかし胎土傾向Bの洞A・藪田A支群にも近い。また2は $\text{Sr}/\text{K}$



第225図 村主遺跡住居跡試料



第226図 月夜野窟跡群試料

値が高く異質である。

- (2) 試料4と6は $Ca/K \cdot Sr/Rb$ 値とも低く、胎土傾向Bの洞A支群に近い。
- (3) 試料7は深沢B支群の値に近い。深沢C支群とは大きく異なる。
- (4) 試料8は篠田A支群に近く、試料9は須磨野A支群に近い。いずれも肉眼観察結果と胎土分析結果が一致する傾向にあった。
- (5) 試料10は $Ca/K \cdot Sr/Rb$ 値とも低く、月夜野窟跡群中に該当する支群なし。県内においては安中市秋間古窟跡群中の分析数値に最も近い。
- (6) 試料11～17は分析数値が一定せずに、胎土傾向A・B地区とも分布し、一つの支群のまとまりとしてはつかみにくい。
- (7) 試料18・19・20は、ほぼ一定の数値を示し、須磨野A支群の値に近い。
- (8) 試料31～33は、ほぼ一定の数値を示し、深沢B支群の値に近い。

#### まとめ

月夜野古窟跡の製品と思われる須磨器を数多く胎土分析し、そこに土器の表面観察では把握できない特色を抽出し、土器の器形や整形・調整・焼成等の特色と同様な主要な一要素として活用できないだろうか、胎土分析を行ってきた。その結果各支群の特色やまとまり、肉眼観察と分析結果の一致、他産地との識別等において多くの成果をあげてきた。しかし分析試料が少ないことや、その他の理由により、なお一層の試料の増加が望まれる。このことは、他の土器要素である器形や整形・調整・焼成等の要素でも同じことが言える。このように試料の選択や分析数値の理解の方法等において、多くの問題点を内在しつつも、土器認識の大きな要素としてその値が定着しつつあるのではないだろうか。以下に今回の胎土分析により感じた点について記してまとめたい。

- (1) 月夜野古窟跡群中6支群の分析試料を集めることができた。しかし洞A支群の試料が少なく、支群としての傾向はつかめない。今後追加してゆく必要がある。

- (2) 6支群とも重なり合いながらほぼ一定の数値内に集まる傾向を示している。
- (3) 沢入A支群の試料は8個体と多い。しかし数値が広い範囲に分布する傾向を示した。
- (4) 深沢B支群と、C支群は近接しているにもかかわらず、 $Ca/K$ 値においてはほぼ同一であるが、 $Sr/Rb$ 値において大きく異なり、別のグループの感を呈した。
- (5) 村主遺跡3号住居跡出土の土師質土器の分析数字は、他の須恵器と大きく異なった。今後試料の追加により、須恵器の一群と異なる数字であるかどうかを確認したい。明らかに異なるならば、土師質土器認定において、大いに意味を持つものであろう。
- (6) 各支群の立地する基盤より分けた胎土傾向A地区とB地区産の須恵器は、肉眼観察ではほぼ明らかに識別可能であるが、胎土分析結果の $Sr/Rb$ 値では区別できない。従来知られている試料をもとに $Ca/K$ 値で境を認めるならば0.7以上が胎土傾向Aの製品であり、以下が胎土傾向Bの製品となる。 $Ca/K$ 値0.7に妥当性はあるだろうか。またなぜこのような数値で差が現われるのであろうか。
- (7) 月夜野古窯跡群採集以前において、集落内や古墳等より出土する須恵器はどこから搬入されていたのであろうか。この問題に関して従来は明確な答えは出せなかった。今回10の變を試料として用いた結果分析数値がほぼ安中市秋間古窯跡群中出土須恵器に近いことや、肉眼観察により胎土中に多くの黒色粒子が観察できた等の結果により、この變は秋間古窯跡群中の製品の可能性が高くなった。今後試料の増加を望みたい。

## 註

- (1) 山崎義男「上野国利根郡月夜野二窯跡に就いて」『古代文化』1941
- (2) 井上唯雄「群馬県利根郡月夜野町陶窯跡発掘調査報告書」月夜野町教育委員会 1937
- (3) 原 繁信他「飯田東遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- (4) 下城 正・岡崎幸他「飯田遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- (5) 大江正行・中沢 悟他「月夜野古窯跡群」月夜野町教育委員会 1985
- (6) 中沢 悟「月夜野型羽釜について」埋文月報No.40 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- (7) 中沢 悟「月夜野窯跡群の概要」埋文月報No.42 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984の中で使用し、(5)の文献の中で詳しく紹介している。
- (8) a) 「土器の胎土分析」『塚原古墳群』(群馬県教育委員会) 1980年  
 b) 「瓦の胎土分析」『天代瓦窯遺跡』(中之条町教育委員会) 1982年  
 c) 「湯井遺跡出土須恵器の胎土分析」『湯井遺跡』(群馬県教育委員会) 1981年  
 d) 「瓦の胎土分析について」『山王庵寺跡第7次発掘調査報告書』(前橋市教育委員会) 1982年  
 e) 「土器の胎土分析について」『清里・陣場遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1982年  
 f) 「飯田東遺跡出土土器の胎土分析」『飯田東遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1982年  
 g) 「大釜遺跡・金山古墳群出土土器の胎土分析」『大釜遺跡・金山古墳群』(群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1983年  
 h) 「奥原・古墳群出土須恵器の胎土分析」『奥原古墳群』(群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1983年  
 i) 「月夜野古窯跡群の胎土分析」『土器部会研究資料No.2』(群馬歴史考古同人会) 1983年  
 j) 「赤井宮前遺跡出土須恵器の胎土分析」『赤井宮前遺跡Ⅰ』(群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1985年
- (9) a) 大江正行「月夜野古窯跡群の地質と須恵器の胎土傾向」『土器部会研究資料No.2』(群馬歴史考古同人会) 1983年  
 b) 相京建史「月夜野古窯跡群の立地と地質」『月夜野古窯跡群』(月夜野町教育委員会) 1985年

## 第4節 出土土器の分類と検討

### (1) 奈良時代を中心とした土器群について

— 村主遺跡出土の土器群を中心とした序列作業と土器群の様相 —

はじめに

- (1) 奈良・平安時代における土器群の動向
- (2) 群馬県内における奈良時代を中心とした土器研究の歩み
- (3) 第1期類の土器群
- (4) 第2期類の土器群
- (5) 年代観について

おわりに

はじめに

村主遺跡では、第5章で述べてきたように縄文時代の陥し穴・土坑と奈良・平安時代の竪穴住居跡・土坑等が多く検出された。その中で出土した土器群を詳しく分析検討してゆくと、土器群が大きく変化している段階が数回にわたり確認できた。その変化は社会生活の中での食生活や土器生産体制、さらに政治的な動きと少なからず連動した結果の反映と思われる。土器は自ら変化するものではなく、社会的要求の変化に適應するために変化すると考えられるからである。村主遺跡においては、奈良時代前後～8世紀中頃の住居と平安時代9世紀後半の住居から10世紀末の住居が多く検出されている。しかし8世紀末～9世紀前半にかけての住居は検出されなかった。その段階の住居は、近接する藪田・藪田東遺跡や同じ月夜野町内の大釜遺跡で確認されているため、それらの住居出土遺物を援用することにより、ほぼ奈良時代前後～10世紀末までの月夜野町内を中心とした地域における土器群の様相について漠然とながら理解できそうである。今回その作業を進めたが、筆者の力量不足のため報告書の中では奈良時代前後～8世紀後半の土器群に限定して報告することとなった。ここでは、奈良・平安時代における土器群全体の動向について簡単に触れて、平安時代の土器群については、近いうちに別の機会を発表してゆきたいと考えている。

#### (1) 奈良・平安時代における土器群の動向

奈良時代の土器を知るために、奈良・平安時代全般を通した土器群の動きを見てみたい。住居内より出土する土器群で、出土状況や出土品から見て明らかに共伴しないであろう土器を除く土器群は、同時存在であると考えられる。これらの土器群は、近接する住居や他の遺跡においても多くの点において共通する。しかし出土数や器形、組合せ等、まったく同一であった事例はまず存在し得ない。これは発掘された住居内の土器が生活時そのままの状態で見出された例がないことや、各住居においてそこに居住する人間の家族構成、集落内での位置や役割、生産地との需要と供給の問題等の制約下で、各住居の生活の表現が異なるからである。そうした背景が同時存在でありながらも、使用される器類に均一性を欠く原因を成しているものと考えられる。さらに器も新しい器類と古い器類が共存し、その存在の在り方も他の住居と構成上に相違が認められるのが一般的であろう。

しかし一定の時間の経過の中で、土器の諸様相を比較検討してゆくと、ほぼ半世紀単位の時間の経過の中で、新しい器類の導入、器類の変化、技法の相異など土器類に大きな変化をもたらしている。特定の器類の出現から消滅の過程は、小さな変化が連続していく。またそれぞれの器類は互いに同一の歩調をたどるものではなく、器類間でそれぞれ相違をなす。その変化は複雑であるが約半世紀という期間の長い一定の時間の経過の中で、他の時期の土器群と比較すると、器類の変化の認識を容易にし、土器の諸様相の変遷をたどることができる。村主遺跡を中心とした地域からみた奈良・平安時代における土器様相の変遷の指標は次のように概略的にとらえることができる。

奈良時代の第1期類は、口径15cm以上の環が多く使用された段階である。口径12～19cmの環の存在に見られるように、従来の環に大口径の環が加わり、環の器種構成が豊かになり、多く出土してくるようになる。またこの段階より削り出し高台の環が生産され、蓋は環状つまみにカエリを持つ製品が出現し主体をなす。奈良時代第2期類は、口径15cm以上の須恵器の環がほぼ出土しなくなり、口径15cm以下で器高も低くなる段階である。大口径の環や削り出し高台の環等が姿を消し、器種構成が変化し、一定幅の規格品が主流を占める。蓋のカエリがほぼ消失し、糸切技法が導入されてくる。平安時代第1期類は、環の糸切無調整の段階である。須恵器の大量生産がほぼ最高に達し、集落内において土師器環をしのぐようになる。環の糸切無調整は、月夜野町を含む利根川以西の地区では、8世紀後半代のある時期より多く採用されてきており、利根川以西においては、糸切後の再調整が8世紀末頃まで行なわれていたようである。それが平安時代になるとやがて県内全体として糸切後の再調整がほぼ行なわれなくなっていくようである。器高はだいに高くなる。平安時代第2期類は、口径15cm前後の環に高台の付く塊出現以降の段階である。環に高台の付く器高の高い塊は7世紀末前後の段階で、金属器の模倣と思われる環の流れとして一時的に限定された遺跡で出土し又別に8世紀後半代から9世紀前半代に口径10cm前後の小口径で器高の高い塊が出土する。しかしこれらの塊は、9世紀後半代より住居内より多く出土する環に高台の付く塊とは異質である。平安時代第3期類は羽釜の出現以降の段階である。従来煮沸器は土師器製がほぼ独占していたが、この段階より須恵器の中から羽釜が作られるようになり、煮沸器として主流を占めていく。須恵器の環・塊は軟質や酸化焰焼成となり作りも雑でこの段階以降はほとんど出土しなくなる。平安時代第4期類は、土師質土器出現以降の段階である。土師質土器は、須恵器の環や塊と異なりていねいな作りと調整を持ち、今日に見られる吸物椀を想定させる器を含む土器種であり、この段階より須恵器の環や塊に変わって大量に採用されてくる。県南で認められる第5期類以降については、月夜野町周辺では明らかでない。

このように土器群が変化するのは、従来の器では果たすことのできなかつた器に対する新しい要求や考え方が存在していたからである。この要求に適応するために、時には政治・経済的な動きとも大きく関連して土器生産が行なわれていたものと思われる。このように土器に反映されているであろう社会的要求を読みとり、この要求をもたらした社会の変化について考えることも大切ではないだろうか。

## (2) 群馬県内における奈良・平安時代を中心とした土器研究の歩み

県内における土師器の主な研究は、昭和33年・34年に行なわれた入野遺跡の成果をまとめた井上唯雄氏の研究からあげることができるであろう。井上唯雄氏はこの報告書の中で、県内の土師器出土の遺跡をこまかく分析検討した。そして住居内出土の一括遺物を中心に、内容の類似しているものをまとめ、それぞれを一つの生活様式の「型」として第1型式から第5型式まで設定した。そして各型式における土器形態の特色・用途・機能までを指摘し、住居内に反映されている当時の土器文化の様相についても触れている。さらに各

## 第6章 調査成果の整理と考察

型式にあてた年代観は、榛名山の1嶺二ツ岳噴出の浮石層との関連、墨書土器、灰釉陶器との共存関係等から行なっている。当時本格的な発掘のほとんどなされていない状況下での研究としては、高く評価されるであろう。報告書の中で第1型式より第5型式まで分類し、出土土器の特色について述べているが、今回、村主遺跡報告の奈良時代前後から8世紀代にかけて遺物に該当はなく、その以前の段階の調査であったと思われる。しかし平安時代における土師器と須恵器の在り方については、今日においても多くの点において妥当性が認められる。

昭和40年代の後半にはいと、関越自動車道、上越新幹線、上武国道といった大規模開発が始まり、それに伴うかのようにバイパス道路、団地造成、圃場整備事業等が行なわれ、従来では考えられないような大規模発掘が行なわれるようになった。それらの成果を一部取り入れた形で、井上唯雄氏は「群馬県内における歴史時代の土器」(昭和53年)を発表された。その後今日まで8年経過しているが、全県的な範囲で土器を論じた論考としては唯一のものとなっており、その価値は高い。氏は県内で調査された遺跡の一覧表や、各時期の代表的な遺跡と住居を紹介し、出土遺物に詳しい説明をされている。類型は奈良時代を2類、平安時代を4類に類別し編年した。

これらの研究の歩みは、奈良・平安時代を中心とした土器全般の研究の歩みであり、特に奈良時代に力点を置いた研究ではなかった。その点はその後の土器研究においても同様であるが、奈良～平安時代の土器を序列図を用いて説明した報告が昭和53年以降数多く提示されるようになった。しかし県内における奈良・平安時代の土器群研究は、最近増加しつつあるとは言え、体系的に土器研究が行なわれているとは言いがたく、まだまだ不明点が多い。土器序列図を伴う記載は多いが、近県を始めとする他地域での研究成果を県内の土器群に照らし合わせて土器をならべているといった例が多く、その結果土器をならべることは行なったが、そこから何かを導き出すといった姿勢で取り組んだ例は少ないようである。調査例の多くなった今日、それらの資料からより多くの情報が導き出せるような研究が望まれているように思われる。








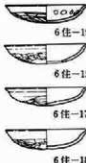


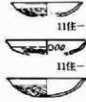
### (3) 第1期類の土器群

村主遺跡においては、この段階より集落が検出されている。この段階の大きな特色としては、出土してくる土器群の多くが、前代の古墳時代土器群と大きく異なる点にあり、住居内より出土した土師器や須恵器は、数や種類が多く変化に富んでいる。土師器においては坏B・坏B'・坏Cが、須恵器においては坏B・坏B'・蓋Aと蓋A'がこの段階より多く生産・使用されていたものと思われ、現象的に見てやがてこれらの製品は第2期類でだいに器の種類が減少し、器の形も変化した新しい器も一部で採用されていくようである。つまりこの第1期類の土器群は、旧来の土器群が残る中で、この段階に先だち既に始まっていた新しい土器群が本格的に住居内で使用され始め、それが定着していった段階と考えられよう。

この第1期類は、土器群全体としての大きな変化は認められないため、第1期類として扱った。その中であえて古い要素と新しい要素を見出す試みを行なうなら、27号住居Bにより古い要素が認められた。土師器坏Bが27号住居においては7個体出土しており、坏Bの中で覆土とグリット出土の破片が接合した土器で形明らかに異なる27住-2の坏を除けば、口径÷器高がすべて3.5以下であり、全体的に深い坏のみであった。このことは他の6・11号住居では認められなかった。さらにこの口径÷器高が3.5以上であるか否かは、須恵器坏Aにおいても、第1期類と第2期類を分ける大きな要素の一つとなっている。そこでこの違いに注目して27号住居は他の6住や11住より古い要素が一部に認められることが考えられる。しかしこれは同時期区分内での変化と考えて扱った。

## (1) 土師器の様相

土師器は坏A・坏A'・坏B・坏B'・坏C・甕A・甕A'・甕Bと多くの器形を含む。このように多くの器形を含むのは、古墳時代以来の伝統的器形と技法を持つ製品と、新しく採用されてくる器形と技法を持つ製品が同時に使用されているためと思われる。この中で坏A・坏A'・甕A・甕A'が古墳時代以来の伝統を引く製品と思われ、これらの製品は、第2期以降の8世紀中頃から後半の段階に至っては、月夜野町を中心とした地域においてほとんど使用されなくなる。また坏A・坏A'と甕A・甕A'がこの段階まで使用されていることはおそらく月夜野町周辺の独特な様相であり、平野部の地区と大きく異なると思われる。坏B・坏B'・坏C・甕B・甕B'に関しては、県南の多くの地域で一般的に多く使用されている製品であり、器肉の厚さを比較するとはるかに薄くなっており、胎土粒子も比較的密で明るい褐色を呈している製品が多い。それに対し旧来の影響下にある坏A・坏A'・甕A・甕A'は、胎土粒子が荒く黒褐色を呈している製品が多い。このように第1期類の土器群には、月夜野町を中心とした地域における在地的特色の強い在地的土器群と県内各地で一般的に出土する一般的土器群が共存した段階と考えられる。

土 師 器				
坏A	坏A'	坏B	坏B'	坏C
 27住-13 27住-12		 27住-4 27住-7 27住-14	 27住-9	
 6住-1 6住-4 6住-2	 6住-6	 6住-8 6住-10 6住-13	 6住-14	 6住-19 6住-15 6住-17 6住-18
 11住-1		 11住-4 11住-3		 11住-5 11住-8 11住-9

第227図 第1期類の土師器(1)

## 第6章 調査成果の整理と考察

① **坏A・坏A'** (ヘラ磨きを持つ坏で口径15cm未満の坏を坏A・15cm以上の坏を坏A')とした。内黒処理が行なわれている製品が多い)

基本的には大部分の坏の内外面にヘラ磨きが行なわれて、内面に黒色処理が行なわれている。大小の2種類に分けられる。大は6号住より出土した6住-6の1点のみであった。これらの坏類は出土しても他の坏類と比較すると数が少ない。数量で見ると、27・6・11号住の3軒で実測した総数は9個体であり、同じような器形の坏B・坏B'の実測数が26個体であるため、坏A・坏A'の占める割合は25%となっており、少ないことを示している。坏A・坏A'を詳しく観察すると、6住-1のように口縁部外側に明瞭な稜を持つ製品や、同一住居内の6住-4や27住-13のように、口縁部が内傾している製品もあり、さらに6住-6のように口縁部が外反する製品も含む。またヘラ磨きの箇所が異なったり、内黒処理が行なわれていない27住-12と26住-1のような製品も存在する。これらの坏は、第1期類ではほぼ姿を消してゆくものと思われ、第1期類以前の古墳時代の影響を強く残している製品群と思われる。残念ながら現段階において、この地区周辺では、第1期類に近接する前段の土器群についての報告がないため、不明な点が多い。今後の報告に期待したい。

序列に使用した坏Aは27住-12・13と6住-1・2・4と11住-1及び坏A'の6住-6の計7個体である。口径は坏Aが14cm前後が多く、坏A'は2点のみであるが15.2cmと15.9cmであった。器高は5cm以上が多い。口径÷器高で数値を出してみると、すべて3以下であり、口径に対し器高が高いことを示している。27住-12・13は内外面ヘラ磨き後27住-12は内黒処理はなく、27住-13は内黒処理が行なわれている。6住-1・2は、口径が14cm以下で器高も5cm以下の小さな坏Aである。この小さな坏Aは6住-3でも認められるため、この住居で特に多く使用されていた。6住-1・2・4と11住-1は内外面ヘラ磨き後内黒処理が行なわれている。口径15cm以上の坏A'は6住より出土した6住-6のみであり、口径は15.2cm、器高は5.4cmと高い。内外面ともヘラ磨きが行なわれており、内黒処理がなされている。

② **坏B・坏B'** (ヘラ磨きを伴わない口径15cm未満の坏を坏B、以上の坏を坏B')とした)

坏A・坏A'が時代の流れの中で、存在基盤が失われ消えてゆくという状況の中で、坏A・坏A'の果たしてきた機能を次に果たしていくのが、この坏B・坏B'と思われる。この土器群は県央や県南さらに利根川の西や東等の地域により差はあるが、この段階以降9世紀前後～10世紀代まで存在し、機能を果たしてゆくのである。坏A・坏A'と坏B・坏B'の違いは、旧来の坏A・坏A'が基本的には口縁部内外面を含めた器表面に、横ナデ又はヘラ削りの後からヘラ磨き認められ、内黒処理が行なわれている坏であり、器内が薄く、胎土粒子が荒く、色調は黒褐色を呈している製品が多く、器表面に焼キムラと思われる色の違う部分を含む製品を一部に含んでいるのに対し、新しく採用されてくる坏B・坏B'は器表の調整は、口縁部内外面が横ナデで、他の器表面はナデかヘラ削りであり、ヘラ磨きは認められず、内黒処理も認められない。器内が薄く、胎土粒子は密で、明るい褐色を呈しており、焼キムラ等と考えられる黒色を帯びている部分は少なく、製品によっては何らかの窯体の使用さえ想定させる製品である。両者における器形の違いは、口縁部の作り方が図でわかるように異なることや、旧来の坏A・坏A'が深い丸底であることにに対し、浅く平底にやや近い底部を持つことがあげられる。また調整技法その他の特色よりみて、新しく採用されていった坏B・坏B'は、坏A・坏A'と比較してより簡素化された坏という一面も持っているようである。

序列に使用した坏Bは27住-4・7・14、6住-8・10・13、11住-3・4と坏B'の27住-9、6住-14の計10個体である。口径は坏Bが11.3cm～13.8cmで平均すると12.4cmとなっている。坏B'は2点のみであり口径は15.9cmと18cmであった。坏Bの器高は残存が悪く不明な坏が多いが、実測より推定した数字で



は3.2cm~4.3cmであり、平均すると約3.5cmである。坏Bの口径÷器高は、2.8~4.3であり、平均すると約3.5である。しかし27号住の坏Bの口径÷器高はすべて3.5以下であり、6号住と11号住においては6住-8を除けばすべて3.5以上であり、27号住の口径÷器高の平均は3.13であり、6号住と11号住の同比率は3.68であり、坏Bについては両者において口径に対する器高の違いが明らかとなった。つまり、27号住の坏Bはより深い特色を持っているのである。坏Bと坏B'の調整方法は、口縁部横ナデ、内面ナデであり、その内面にわずかな頭圧痕の痕跡を所々に残し、体部外側へラ削りを基本としている。第2期類後半以降に多く認められる口縁部横ナデ部分と体部~底部のへラ削りとの間に認められる指頭圧痕等を残す調整はこの段階で全く認められない。

③ 坏C（口縁部が大きく外側へ開く坏で、口径は15cm以上の製品が多く、皿型坏として本文中では扱った。

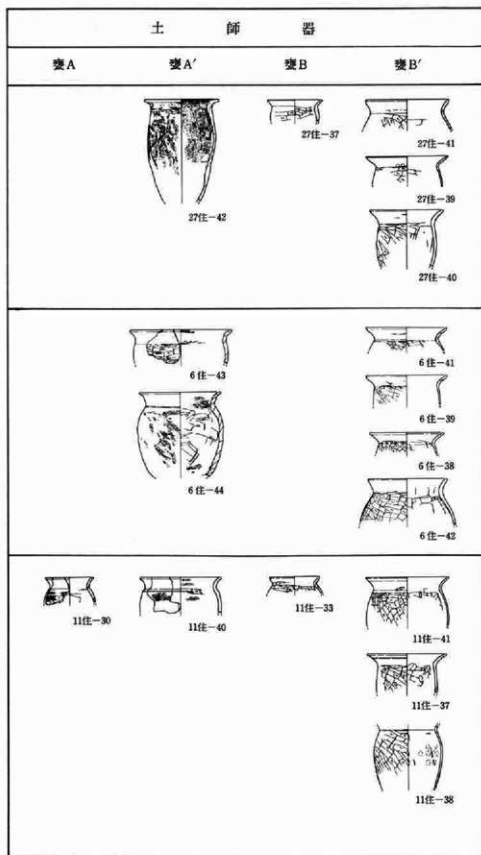
この製品も坏B・坏B'と同様にこの段階より多く出現してくる新しい製品であり、胎土や色調、さらに焼成方法や調整方法等においても坏B・坏B'とはほぼ共通している。やがてこの第1段階を過ぎると、ほとんど出土しなくなる。このように、8世紀前後の頃から8世紀前半代といった限定された期間内を中心として使用されていた特異な製品である。前代の土師器にその系譜をたどることは、口径においてはできたとしても、器形においてはできないであろう。時期指標となりうる特徴的な器形である。口径は大きく、口径に比較して浅く丸底を呈しており、口縁部が大きく外反する。県内各地より坏B・坏B'と同様に多くの地域で出土する土器である。

序列に使用した坏Cは、6住-15・17・18・19と11住-5・8・9の計7個体である。口径は15.4~18cmであり、平均すると17.2cm。器高は推定値が多いが、3.2~4.3cmであり、平均値は3.9cmである。口径÷器高は4.1~5であり、平均値は約4.5である。口径に対し器高が高いか低いを示している。底部はなだらかな円状を呈し、口縁部は1度立ち上がり、その後大きく外反している。口縁部内外面横ナデで体部~底部手持へラ削りであり、体部内面はナデ調整であるが、坏B・坏B'同様に内面に指頭圧痕の痕跡をわずかに残している。

④ 甕A・甕A'（へラ磨きを伴う口径20cm未満の甕を甕A、口径20cm以上の甕を甕A'とした。）

基本的にへラ磨きのある甕であり、器内が厚く、胎土や色調においても坏Aや坏A'に近く、古い要素を持つ甕である。このへラ磨きは小形甕である甕Aの11住-30以外の序列図に使用した大甕は全て内外面で認められる。特に27住-42は内外面とも実にいいいに磨き上げている。甕A・甕A'は大小あるが、両者をあわせた実測総数は3住居で6個体であり、同じ機能を持つと考えられる新しい甕Bと甕B'の実測数21と占める割合で比較すると、甕A・甕A'は、約22%であった。このことは、坏の中でへラ磨きを持つ坏A・坏A'の占めた割合約25%に近い数字となっている。このように古い流れを汲むと思われる甕A・甕A'は、この段階を境としてほとんど使用されなくなり、甕B・甕B'が主流を占めていくようになるのである。

序列に使用した甕Aは11住-30の1個体であり、甕A'は27住-42と6住43・44と11住-40の計5個体である。甕Aの11住-30は口径が13.6cmである。口縁部は横ナデ調整、口縁部下の外側体部はへラ削り後にへラ磨きが行なわれている。内側にへラ磨きは認められない。甕A'の27-42は、口径20.5cmで口縁部は水平に近いほど外側に折り曲げられている。器表面は、口縁部が横方向のへラ磨き、体部の中央やや下部まで実にいいいな木目の細かい縦方向へラ磨き、器表外面は口縁部横ナデで頭部に指頭圧痕を残す。頭部下の一部分横方向へラ磨き、体部は内面ほどではないが、いいいな縦方向のへラ磨きが認められる。表面のへラ削り痕はほとんど確認できなかった。6住-43は口径29.5cmであり、内側口縁部に横方向へラ磨き、外側口縁部横ナデ、口縁部下の体部にへラ削り後横方向のへラ磨きが認められる。6住-44は口径



第228図 第1期類の土師器(2)

23.4cmで43に似た器形であり、口縁部が直線でやや外側に立ち上がった後にゆるやかに外反している。器表内面は口縁部が横方向へラ磨き、体部はへラ削り後所々に横方向へラ磨き、外側へラ磨き横ナデ、体部は横やや斜方向のへラ磨きが認められ、へラ削りの痕跡は認められない。11住-40は口径23.2cmで、器表内面は横方向へラ磨き、外面は口縁部横ナデ、体部横方向へラ磨きであり、へラ削りの痕跡は認められない。

⑤ 甕B・甕B' (へラ磨きを伴わない口径20cm未満の甕を甕B、以上の甕を甕B'とした。)

坏B・坏B'・坏Cとともにこの第1期類より多く採用され、主流を占めてゆく甕である。前述のごとくこの段階における甕B・甕B'は、実測版組された甕の中で約78%を占めており、多く使用されていた。この甕は坏B・坏B'・坏Cとともに坏A・坏A'・甕A・甕A'と比較するならば器内が薄く、色調は褐色で焼きムラが少なく、胎土粒子が比較的細かい特色をもつ。これらの甕は底部まで復元できる製品がほとんどないため、不明な点も多く、また器内がすべて薄いわけでもなく、厚い製品も存在しているため一様ではない。またそれらの製品の中に壺の存在も想定できるが、現状では不明であった。甕Bが少量で甕B'が多く使用されている。

序列に使用した甕Bは、27住-37と11住-33の2個体であり、甕B'は27住39・40・41と6住-38・39・41・42と11住-37・38・41の計12個体である。甕Bは27住-37の口径が16cm、11住-33の口径が14.4cmであり、口縁部はくの字状に外反し、器内がやや厚い。口縁部は内外面とも横ナデ調整であり、口縁部下の器表内外面とも横方向のへラ削りである。甕B'は口径が20.8-23.9cmで約3cmの内に差が納まるため統一されている。これらの甕B・甕B'は、いずれも口縁部横ナデで、器表外面口縁部下は体部下半より、口縁部へ向かうへラ削りが多く、器表内面口縁部下は11住-38以外はへラ削りが認められ、11住-38は指頭圧痕が残る。その中で、6住-41は小破片であるため不明な点も多いがやや異質であり、外面のへラ削りの単位が短く、他の甕よりやや水平に近い左上方向のへラ削りである。

## (2) 須恵器の様相

須恵器は坏A・坏A'・坏B・坏B'・蓋A・蓋A'・壺・甕等が多く出土し、その他鉢や平瓶等が出土する。これだけ大小の坏や蓋・甕等が一般の住居内より多く出土することは、それ以前には認められないことであり、土器器の坏や甕等で認められた新しい動きとともに、この段階の特色を示している。その中で出土量の特に多い坏A・坏A'・坏B・坏B'・蓋A・蓋A'についてその特色を考えてみたい。

第1期以前で、この時期に至る移行期を除く古墳時代終末期の坏は、基本的には丸底であり、口径も小さいものが多く、種類や出土量も多くなった。それがこの段階に至ると古墳時代の坏とは異なり、大部分が平底化している。口径は13cm前後の製品から18cm前後の製品を含み、さらに上野の特徴である削り出し高台の坏Bや付高台の坏も多く生産されている。また蓋に関しては、環状つまみ(丸い粘土板を天井部に貼り付け、帷帳を回しながら中央部を強く押し周辺部を持ち上げ端部を調整してつまみとしている)にカエリを持つ蓋Aが大量に生産され、集落内で使用されている。この環状つまみにカエリを持つ製品は群馬県に圧倒的に多いため、上野における特徴的な製品と思われる。この蓋の口径も坏と同様に13cm前後の製品から、18cm前後の製品まで出土している。このように第1期類の須恵器の多くは、前代の古墳時代の須恵器と多くの点において異なっている。

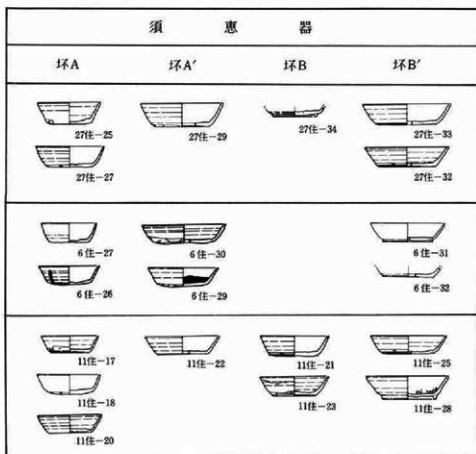
1住居内にこれだけ多くの大小の坏や削り出し及び付高台の坏さらに大小の蓋等が持ち込まれた段階はそれに先だつ時期では認められない。ここ村主遺跡は、須恵器生産地に近接しているためか、たしかに他の同時期に相当する集落内出土の須恵器より出土量が多いと思われる。しかし量の差はあるにしても、県内各地

第6章 調査成果の整理と考察

よりこの段階に相当する住居内からは、同じような特色を持つ坏や蓋が出土しているのである。さらにその製品を生産したであろう須恵器窯も、それ以前の限定された小地域での生産から大きく変化し、県内各地で採業が開始されているのである。例をあげるなら県南では、藤岡市須賀窯跡・吉井町末沢窯跡が確認されており、窯跡関連遺跡として吉井町川福遺跡が調査報告されている。県西では、安中市秋間古窯跡群があり、県東では新田郡笠懸古窯跡群や勢多郡新里古窯跡群等が知られている。おそらく県内各地ではほぼ時期を同じくして、これらの上野における特徴的な坏や蓋、大小の坏等が製作使用され始めたのではないだろうか。それがこの第1期類の段階であるととらえたい。そこに上野における窯業生産の組織化が認められ、また律令統制の一端が想定できる。

① 坏A・坏A' (口径16cm未満の坏を坏A、16cm以上の坏を坏A'とした。)

基本的には全てが平底であり、底径が大きく、器高の低い坏である。底部の切り離しは切り離し後再調整されている製品が多いためか明らかでないが、再調整されていない坏やその後糸切を用いた坏との比較検討から基本的にヘラ起こしによるものと考えている。6住の26や29、11住の18等において底部がやや丸味を持つが、これはヘラ起こし等の再調整の段階でそうなっただけであり、基本的には平底であると考えている。それらの底面の調整を観察すると、ヘラ起こし後その痕跡を残している6住-27や11住-17の製品や、ヘラ起こし後手持ヘラ調整を行なっている27住-25・26・29や6住-26・29・30の製品がある。またヘラ起こし後回転ヘラ調整を行なっている11住-18・20・22、さらにヘラ起こし後回転ヘラ調整を行ない、その後で指



第229図 第1期類の須恵器(1)

等によると思われるナデ調整を行なっている27住-27のような製品が存在しており様々である。その中で口径が12cm前後と小さい製品にヘラ起こし後無調整の製品が多いことが、他の住居跡出土製品等を含めた全体傾向として指摘できそうである。ロクロ回転は、観察した限りにおいてすべて右回転である。

序列に使用した坏Aは27住-25・27、6住-26・27、11住-17・18・20と坏A'の27住-29、6住-29・30、11住-22の計11個体である。口径は坏Aが11.7~14.6cmであり平均すると約13.2cmであり、器高は3.6~4.6cmであり、平均すると約4.1cmである。口径÷器高は3~3.6cmであり平均すると約3.3cmである。器高について見ると、 $\frac{1}{6}$ の小破片である27住-26と11住-16の2個体以外のすべての坏Aの器高は3.5cm以上である。また口径÷器高が前記の2個体及び11住-20以外の数字はすべて3.4以下である。この数字は、第2期類での数字、例えば口径÷器高の平均値でみれば約3.9となっていること等と比較するならば大きく異なり、第1期類の坏Aが第2期類の坏Aと比較すると器高が高いことを示しており、第1期類と第2期類を分ける大きな要因の一つとなっている。

② 坏B・坏B' (削り出し高台または付高台を持ち、口径16cm未満の坏を坏A、以上の坏を坏A'とした) 高台を持つ坏であり、持たない坏よりいいにつくられている坏が多い。大部分の坏の底部内外面とも再調整が行なわれているため内外面の底面とも平らで、轆轤回転に伴う渦巻状の凹凸はほとんど認められない。口径15cm未満と以上で坏B・坏B'と分けているが未満の坏Bの口径は27住-34は不明であるが、他の11住-21の口径が14.9cmで、11住-23の口径が14.7cmであるため、15cmに近い。このことは、削り出し高台及び付高台等の高台を持つ坏は、大部分が口径15cm前後より大きいことを意味している。付高台は高く、高台としての役割は充分果たしているが、削り出し高台は削り出した高台部が小さく低い。しかも削り出した後で削り出し高台の内側底面を削り取ることをしていない。そのため削り出された高台と、底面の高さに差がなく削り出された高台は、高台としての役割をほとんど果たしていないのである。製品の中には削り出し高台が全体に充分削り出されていないものまで存在している。このことは、削り出し高台を作ることには大きな意味があったと思われるが、それはあくまでも、削り出し高台という形を重要視していねいに作られたものであり、そこに大きな意味があり、削り出し高台を高台として使用することにはさほどの意味は存在していなかったのではないだろうか。つまり削り出し高台は作ること、形を整えることに意味があり、高台としての機能を果たすことには重要な力点は置かれていなかったのではないだろうか。

序列に使用した坏Bは27住-34、11住-21・23と坏B'の27住-32・33、6住-31・32、11住-25・28の計9個体である。この中で削り出し高台が坏Bの11住-21・23と27住-32・33、6住-32、11住-25であり数が多い。坏B'の口径は16~19cmであり、平均すると約17cmであり、器高は3.8~4.5cmであり平均すると約4.2cmである。坏A・坏A'の口径平均は13.2cmであり、器高平均は約4.1cmであったため、坏B・坏B'は口径平均において約4cm弱の大きな差が認められるが、器高に関しては約0.1cmという平均差であり、ほとんど器高に関しては差がないことを示している。口径÷器高に関しては当然大きな違いが存在している。

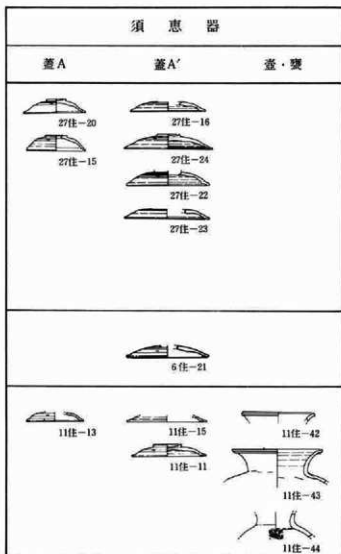
③ 蓋A・蓋A' (環状つまみを持つ蓋で、口径15cm未満の蓋を蓋A、以上の蓋を蓋A'とした)

環状つまみを持つ蓋であり、この第1期類においては、基本的にかエリを持っている。この環状つまみ(口径5cm前後で薄く丸い粘土板を天井部に貼り付け、轆轤を回しながら中央部を強く押し周辺部を持ち上げ、端部を調整しているつまみ)は、宝珠つまみとは全く形が異なるものであり、このつまみは時代が新しくなるにつれて、周辺部が上に立ち上がってゆき、端部を横方向からヘラ削りにより鋭く削るといった調整も認められなくなる。やがて8世紀末の頃からつまみ中央部が盛り上がる製品が多く、火山に見られる外輪山のような形等へと変化していくようである。他の土師器の坏Bや壺Bさらに須恵器の坏Aとともに全体

## 第6章 調査成果の整理と考察

的な時の流れとともに変化しつつ、少なくとも9世紀代頃までは使用されていき、当遺跡周辺では蓋が使用されなくなる段階まで使用されてゆくのである。一方この環状つまみにつくカエリは、環状つまみとセットとして第1期類の段階より採用されたようであるが、大きく変化した環状つまみは平安時代にはいっても、蓋が使用されなくなるまで採用されていたのに対し、このカエリはほぼ8世紀前半の時期で採用されなくなったようである。カエリがなくなり、蓋の端部は下方へ折りまげられ、坏と組み合わせて使用されていくようである。

蓋Aと蓋A'は、口径の大きさにより分けたわけである。その結果蓋Aは3個体で蓋A'は7個体であった。つまり小口径の坏は大口径の蓋の $\frac{1}{2}$ 以下の量しか出土していないのである。この傾向は第2期類に至ると蓋Aは大釜遺跡3号住より2個体実測図示されているのみであり、蓋A'は村主遺跡26・34号住より各1点と大釜遺跡より4個体出土しており、2:6であり、さらに小口径の蓋Aの占める割合は少なくなっている。蓋Aは9世紀以降になると、基本的に坏・碗の蓋としては出土しなくなるとと思われる。このことは、蓋は小口径の坏に付くものは少なく、口径15cm以上の坏又は碗等に付くものが多いことを示しているのではないだろうか。



第230図 第1期類の須恵器(2)

蓋の器高について調べてみると、第1期類の蓋の高さは2~2.9cmであり、第2期類の蓋の高さは後述の一部の蓋を除けば1.4~2cmであった。このことは、第1期類の坏の器高が、第2期類の器高の高さより高いことと関連して、器高の高い坏には、器高の高い蓋が使用されていたことを示しているのではないだろうか。器高が9世紀以降再び高くなると、蓋もやはり器高が高くなっているため、このような傾向は存在していると思われる。

序列に使用した蓋Aは27住-15・20、11住-13で蓋A'は27住-16・22・23・24、6住-21、11住-11・15の計10個体である。27住-15と20はいずれも器高が高い。環状つまみは高さが低く肉置も少ない。カエリは小さいがていねいに整形されている。11住13は27住の蓋Aと比較すると器高が2cmのためやや低くなっている。つまみの肉置はやはり少ない。カエリは27住の蓋Aと比較するとやや大きく作り出されている。27住-16・22・23・24は口径が16.4~19cmで大きく器高は2~2.9cmであり高い。つまみはやはり肉置が少なく、カエリもていねいに調整されているが小

#### 第4節 出土土器の分類と検討

さい。6住-21は口径約17.3cmで器高は2.5cmであった。カエリはやや高く口縁部下端まで作り出されている。11住-11は口径15.7cm、器高2cmであり、11住-15は口径17.4cm、器高は不明である。いずれの蓋ともカエリはやや高く口縁部下端まで作り出されている。11住の蓋の口縁部はカエリ部分より外側でやや従来の角度を変えて横方向へ延びて丸い口縁部部となっている。この点は27住の蓋とやや異なっている。

#### ④ 壺・甕

須恵器坏や蓋がこの第1期前の8世紀前後の時期より多く使用されていくことは明らかのようにであるが、では須恵器壺や甕はいつ頃から、どのような形で使われ始めたのであろうか。従来考えられてきたように住居内に貯蔵用の容器としてほとんどの家で使用されていたのであろうか。もしそうなら住居内あるいは遺跡内において壺・甕は大きいから破片数が大量であると思われるためもっと多く検出されても良いと思われる。しかしそれほど多くないのは何故であらうか。序列で使用した27・6・11号住より出土した壺・甕は付表1の通りである。

付表1 27・6・11号住居跡出土須恵器壺・壺と坏の出土表

		27号住		6号住		11号住		合計		総数
		実測版組	破片	実測版組	破片	実測版組	破片	実測版組	破片	
壺	口縁部	1	3	0	2	2	0	3	5	8
	体部	0	51	2	32	1	32	3	115	118
坏	口縁～底部	6	16	10	4	11	8	27	28	55
	体部～底部	5	18	1	3	2	9	8	30	38

この表で見る限り、3軒の須恵器壺の総数は126片で須恵器坏の総数は93片である。たしかに壺の数が多いが、1つの壺が割れた時できる破片数は坏の数倍であるため、全体量としてはいかにも少ない。さらに割れた場合、口縁部の破片数は、体部の破片数と比較して少ないのは当然であるにしても、壺の口縁部の数は、わずかに8個体である。口縁部で見ると1軒に3片の破片さえ出土していないのであり、坏の1軒あたりの口縁部破片数約18個体とは全く異なるのである。つまり住居内より出土する壺は、口縁部より底部に至る部分の平均的出土ではなく、体部の破片が圧倒的に多く、口縁部は体部破片のわずか0.06%であり、しかもその口縁部破片も一部を除き小破片が多く、坏に認められるような全体の $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{3}$ の製品は全く出土していないのである。このことは住居内において壺として機能し得る状態での壺の使用は少なかったことを意味しているのであろうか。あるいは壺が使用されている段階で割れた場合、口縁部は住居外にすてられ、体部破片のみが住居内に残されたのであろうか。しかし住居外の発掘で口縁部と底部が多く出土した例はほとんどないであろう。また住居内に残される壺の破片は、体部が大部分であるというのは、いかなる理由からであろうか。さまざまな理由が考えられると思われるが、次のことは考えられないであろうか。1住居内で使用される壺は1軒に数個体使用されることはなく、1～2個で、家によっては使用されていなかったことも多いのではないだろうか。その完形の壺の他に各家では、壺の完形品ではなく、壺の体部破片を持ち込んで利用しやすい形に割って、それを皿や物を置く台その他として、転用して利用していたのではないだろうか。そのため転用品として利用しにくい口縁部や底部の破片は住居内に持ち込んでいないのではないだろうか。さらに不可解なこととして、壺の出土量は全体的に多くないにもかかわらず、それらの破片を詳しく調べてみると、口縁部や体部の破片のいずれにも指摘できることであるが、1～2個体の壺の破片ではなく、調整方法

## 第6章 調査成果の整理と考察

や焼成等において明らかに別の甕であろうと思われる製品が多く、さらに復元しようにも1個体として復元できない製品が多いのである。それはこのように最初から甕の破片は、転用品として利用することを目的として多くの破片から適当な体部破片を選び、住居内に持ち込んで使いやすい形に割って利用していたための現象からくる当然の在り方であったとは考えられないであろうか。

序列に使用した甕は11住-42・43・44の3個体である。同一住居より3個体の出土であるが、11住-42は残存が実測部分の $\frac{1}{10}$ 、43は口縁部を欠くがほぼ完形、44は $\frac{1}{5}$ と様々である。3個体は口縁部の作りや口径及び胎土等の違いからみて、同一個体の破片ではないと思われる。また43は竈右側貯蔵穴手前に接して、口縁部を上にして床面上より出土した。口縁部～頸部はほぼ完形であるが、この甕の体部破片と思われる出土量は多くない。おそらくこの43は頸部以下の体部が破損したため、体部はすべて、口縁部分のみをうまく割り残して土師器又は須恵器の丸底の壺・甕等を置くときの台として利用したものと思われる。同じような例として6住-42の土師器甕をあげることができる。

### (4) 第2期類の土器群

第1期類は、古墳時代の土器群から大きく様相を異にして多種多様な土器群として展開した段階である。この段階で形成された土器様式は、基本的には平安時代の9世紀まで形や大きさ、組み合わせ等が変化しつつ継承されていくわけである。その変化が比較的大きく現われたのがこの第2期類である。第2期類の大きな特色とは、須恵器環Aにおいて器高が低くなっていく現象と、環A'・環B・環B'の著しい減少による環の器種構成の変化を指標としてあげることができる。その他に土師器環や甕の種類減少、さらに糸切の導入及び新しく採用されてゆく器形の導入等をあげることができる。須恵器環Aにおいて器高が低くなっていく現象とは、須恵器環の中で多く使用され、9世紀以降も採用されてゆく口径15cm未満の環Aを第1期類の環Aと比較した場合、口径にあまり変化はないが、器高において第2期類の環Aは低くなっているという特色を持つ製品が多いという意味である。これを口径÷器高の数字で調べてみると、第1期類の環Aは大部分が3.5未満であったのに対し、第2期類の環Aの口径÷器高の数字は3.5以上であった。つまり口径に対し、第2期類の環Aはより器高が低くなっているのである。また須恵器環器種構成の変化とは、口径15cm以上の環A'と環B'が第1期類においては多く使用されていたが、第2期類に至るとほとんど出土しなくなることであり、その他の特色としての土師器環や甕の減少とは、土師器環A・環A'・甕A・甕A'が第2期類ではほとんど出土しなくなることであり、糸切の導入とは、沢入A支群2地区出土の環に糸切が認められ、この第2期類後半と思われる大釜遺跡3号住出土環Aの中に糸切が多く認められること等より、おそらく第2期類より、しだいに糸切技法が導入されていったものと思われる。この糸切も一時期又は一部に糸切後周辺ヘラ調整が行なわれたと思われるが、大部分は再調整なしの製品が多いように思われる。つまり8世紀後半代のある段階より、糸切後の再調整は基本的に行なわれないことが考えられるのである。このことは利根川東の伊勢市や太田市周辺の遺跡と大きく異なるようであり、利根川西と東全体を見通した場合興味深く、今後の利根川西と東の遺跡の内容に注目してゆきたい。さらに新しく採用されてゆく器形とは、盤と高台の付く器高の高い境が想定されるが、出土例が少なく明確でない。このように旧来の伝統を引く土師器環A・環A'・甕A・甕A'と須恵器で口径15cm以上の環A'・環B'が必要性を失ないその多くがしだいに消えてゆき、新たな生活の中で真に必要なとされた器のみが残る使用され続け、そして新しい形・技法・器形等が一部に導入されていった段階、それが第2期類であると思われる。



## (1) 土師器の様相

土師器は坏A・坏A'と坏B・変B・変B'が出土している。坏Aと坏A'はこの段階まで残存しているが、やがて消えてゆき、変A・変A'は出土していない。出土する住居があっても良いと思われるが、出土しても数は少なく、やがて出土しなくなる製品と思われる。この段階で旧来の古墳時代の土器の影響下にあった土器群は大部分が消えてゆき、新しい時代の土器群へと統一されてゆくのである。坏Cに関しては、第1期類で出現したにもかかわらず、第2期類に至っては、26号住と34号住において出土していない。この時期の他の住居跡においては出土する住居もあると思われるが、全体としては出土しなくなる傾向である。

## ① 坏A・坏A'

前代に少量使用されていた製品が、この段階まで残ったといった感じである。ヘラ磨きが行なわれており、内黒処理も全てではないが行なわれている。坏Aと坏A'が少量出土している。

序列に使用した土器は、26住-1・2である。26住-1は口縁部の小破片であり、口径も確実ではないが、おそらく15cm以上であると思われる。ヘラ磨きは内面のみ行なわれており、外面はヘラ削りのままである。26住-2は、第1期類で多くの製品に認められたように器内外面に実についていないヘラ磨きが行なわれており、内面はその後内黒処理が行なわれている。

## ② 坏B・坏B'

前代まで数は少ないが出土が認められていた口径15cm以上の坏B'が消え、口径15cm未満の坏Bのみが出土する。そして第1期類に認められた口径13cm以下の坏類は数が減少し、口径13cm以上の坏類が多くなる傾向を示している。さらにこの段階の後半期に至ると、口縁部の幅がしだいに広くなり、横ナデの部分が幅広くなり、ヘラ削りの行なわれる範囲がしだいに狭くなり、横ナデのある部分と底部ヘラ削りのある部分との間に、指等によるナデ又は指頭圧痕等を残す調整部分帯を持つ坏がしだいに多くなる傾向を持つ。そして器高が低くなっているためしだいに平底に近い形へと移行しているようである。この延長上として9世紀代の土師器坏に連なるとされるわけである。しかしこの段階の集落の調査例が少なく、実態については明らかでない。見通しとしてはこの段階の後半において、しだいに土師器坏が減少してゆき、やがて使用されなくなっていくことである。現段階としては、月夜野町において9世紀以降と考えられる段階で土師器の坏の出土は知られていない。もしこれが事実であるなら、県内の各地で9世紀代まではほぼ使用されなくなる地域もあるが、多くの地域においては土師器の坏が9世紀以降も使用され続けているため、この地区の様相と大きく異なるわけである。そのため9世紀以降においても、土師器坏の存在は否定できないが、ほぼ使用されなくなっていることは言えそうである。この原因の1つとしては割削り機能を持つ須恵器坏の大量生産が考えられる。

序列に使用した坏Bは、26住-3・5・7、34住-1・3・4、大釜遺跡3住-45・46・47の計9個体であり、坏B'は出土していない。口径は12.5~14.8cmで平均すると約13.7である。器高は3.6~5.6cmで平均すると約3.3である。口径÷器高は3.6~5.6であり、平均すると約4.2である。これを第1期類の坏Bと比較すると、口径平均は第1期類が2.4cm、器高平均が約3.5cm、口径÷器高の平均が3.5であったため、第2期類の坏Bは口径が大きく、器高がやや低く、口径÷器高は大きく異なり、口径に対し、器高が低くなっていることを示している。

## ③ 坏C・変A・変A'

旧来の変A・変A'が姿を消し、変B・変B'が使用されてゆく。大小の組合せは大的変Bが多く、小的変Bが少量使用されてゆくという形で、この後の9世紀代まで基本的なセットとして使用されてゆくようである。さらに県央や県南地域においては、この変Bは小形台付変として使用されてゆく例が多い。月夜野地方に

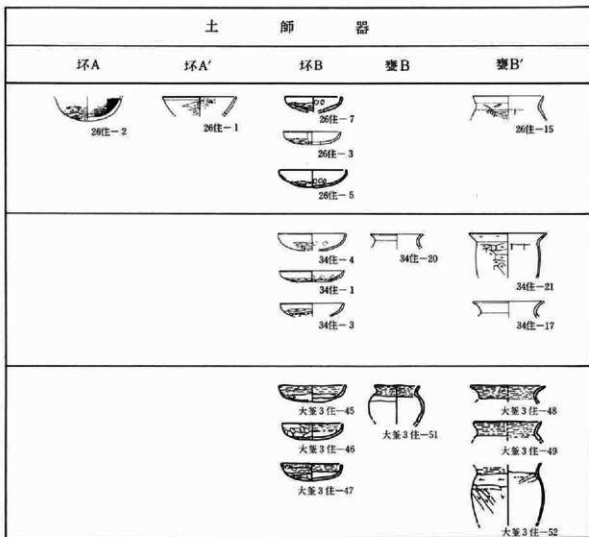
第6章 調査成果の整理と考察

おける小形台付甕の出土例は少ないが、使用されていたようである。口径20cm上の甕B'は前代から比べるとさらに器内が薄くなり、しだいに肩部が張り出してくる傾向を強めている。

序列に使用した甕Bは34住-20、大釜遺跡3住-51で甕B'は26住-15、34住-17・21、大釜遺跡3住-48・49・52の計8個体である。甕Bの口径は34住-20で14.8cm、大釜遺跡3住-51で13.1cmであった。甕B'の口径は20~24cmであった。いずれも残存部分は口縁部分を中心としており少なく、詳しい様相は明らかでない。

(2) 須恵器の様相

この時期の調査例は少なく、実体について明確でないが、第1期類と比較するなら口径16cm以上の坏A'や坏B'が出土しなくなり、器種構成の変化が認められる。蓋に関しては環状つまみにカエリといった基本的な形から、環状つまみの端部が高くなり、よりつまみやすくなったこと、さらにカエリが消えて、口縁端部が下方へ折り曲げられる製品が大部分となるようである。また口径が19cm前後と大きな製品が大釜遺跡3号住や、

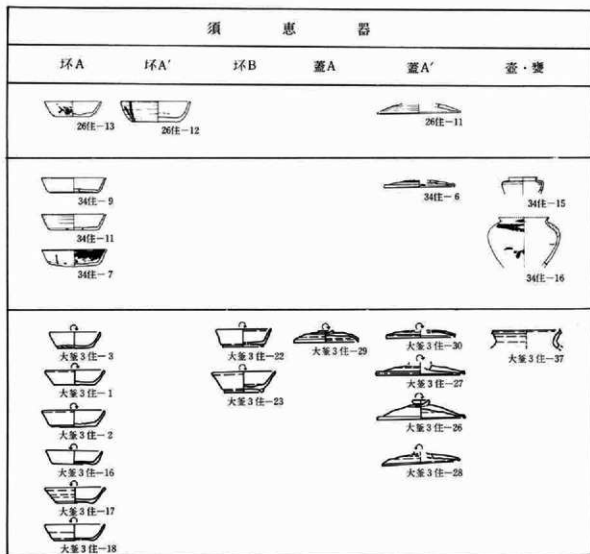


第231図 第2期類の土師器

この段階の前半に位置付けられるであろうと考えられる沢入A支群からも数個体出土している。この時期の坏は両遺跡においても、口径が19cm前後と大きな製品は盤以外には認められない。また盤は口径21cm以上の口径を持つため、盤の蓋としても疑問であり、この大口径の蓋の存在について理解できない。またこの時期においては、新たな器形として盤や口径10cm前後で他の坏と器形の異なる高台の付く小形碗、さらに骨蔵器にひんぱんに用いられた台付短頸壺や瓦塔等もこの段階で生産されているようである。甕については、第1期類同様に出土量は少ない。

## ① 坏A・坏A'

坏Aはこの時期の須恵器の主体を占める製品であり、多く出土してくる。しかし第1期類に見られたように、口径は13cm前後の製品が多いわけであるが、器高は第1期類の坏が3.3~4.6cmであり、平均すると4cm以上であるのに対し、第2期類の坏Aの器高は、2.3~3.6cmであり平均すると3.3cmとなる。このことは、約0.7cmほど器高が低くなっていることを示している。口径の違いについては、第1期類坏A 8個体の口径平均が13.2cmで、第2期類坏A 10個体の口径平均は13.0cmでやや第1期類の坏が大きい傾向を示したがほぼ近い。



第232図 第2期類の須恵器

## 第6章 調査成果の整理と考察

このことは、第2期類に至ると口径はわずかに小さくなる可能性はあるが、それ以上に器高が低くなる傾向を強く示しているのである。

口径15cm以上の坏Aは、この段階にやや残るがこの段階ではほぼ終了してゆくようである。この段階前半で県内の一部においては糸切技法が導入されていくようである。今日までに明らかとなっている月夜野町地区においては、この第2期類の後半段階では明らかに糸切が導入されてくる。しかし第2期類前半においては、坏底部が全面にわたり再調整されているため、回転糸切なのか、ヘラ起こしなのか識別できない。一部に回転糸切が導入されていたとしても、多くはヘラ起こしと考えている。回転糸切技法が多く導入されてくるのは、第2期類後半の段階からと考えている。その第2期類後半の時期と考えている大釜遺跡3号住居跡より多くの回転糸切を伴う坏Aが出土している。第1期類の段階において、月夜野町ではごく少量の左回転の坏等が確認されているが、大部分はロクロ右回転の製品であった。ところが回転糸切痕が明らかに坏の底面に残されるようになった第2期類後半の時期と考えている大釜遺跡3号住居跡の出土例で見ると、回転糸切無調整の坏は全てが左回転となっているのである。右回転の坏は、ヘラによる再調整でロクロ切り難し方法の全く確認できない坏又は回転糸切後底部周辺を回転ヘラ削りによる再調整の行なわれている坏のみとなっているのである。そしてその後このロクロ左回転の坏は、9世紀以降も多く製作使用されてゆくのである。

序列に使用した坏Aは26住-13、34住-7・9・11、大釜遺跡3住-1・2・3・16・17・18で坏Aは26住-12、大釜遺跡3住-22・23の計13個体である。26住-12は右回転であり底部は右回転ヘラ調整であるが、26住-13は左回転であり底部は左回転ヘラ削りである。26住-13の口径÷器高は3.7であり3.5以上であるため第2期類以降の大多数の坏Aと一致する。34住-7・9・11はいずれもロクロ右回転であり、底部は右回転ヘラ調整が行なわれている。大釜遺跡3住-1・2・3はロクロ右回転であり、底面は2と3が回転ヘラ調整で、1がヘラ起こし後無調整である。大釜遺跡3住-16・17・18はいずれもロクロ左回転であり、左回転糸切後無調整である。

### ② 坏B・坏B'

出土例が少ないため不明な点が多いが、大釜遺跡において坏Bは出土している。ただし削り出し高台と口径15cm以上の坏B'は姿を消しているようである。

序列に使用した坏Bは、大釜遺跡3住-22・23の2個体であり、すべてロクロ右回転である

### ③ 蓋A・蓋A'

第1期類以来続いてきた環状つまみにカエリといった基本形がくずれて、カエリが基本的に消失している。環状つまみは、従来は高さがなく扁平であったが、肉置が多くなり端部が立ち上がりつまみ部分の器高が高くなる。カエリが消えた蓋は、端部が下方に折り曲げられて坏口縁部の上からかぶせてズレないように工夫してある。この段階の坏は、前述のごとく器高が低くなっている。それに合わせるかのように蓋の多くは器高が低く扁平となっている製品が多い。第1期類の坏の器高が高く、蓋の器高も比較的高かったのと対照的である。やはり坏と蓋とはセットとして組み合わせた時の全体のバランスとして連動しているようである。しかし器形についてはこのようなことが考えられるが、口径で見ると、15cm以下の蓋が少なく、15cm以上の蓋が多い。これに見合うはずの坏が見当たらないのである。蓋は第1期類から見ると、口径15cm以上の製品が圧倒的に多く、15cm以下の製品は第1期類において少量出土する程度である。さらに平安時代に至っては、ほとんど口径15cm以上の製品となっている。坏に関しては、口径15cm以上と未満の2種類に分かれることより、口径15cm未満の坏に関しては大部分が最初から蓋を使用しない器として扱われていたのではないだろうか。

序列に使用した蓋Aは大釜遺跡3住-29で蓋A'は26住-11、34住-6、大釜遺跡3住26・27・28・30の計7個体である。この中で26住-11のロクロ回転は右、34住-6のロクロ回転は不明、大釜遺跡3住-26・27・29・30のロクロ回転は右、28はロクロ回転左であった。口径は蓋Aの大釜遺跡3住-29が14cm、ツマミ部を除く高さ2cmで、蓋A'は口径15~19.4cmであり、平均約17.2cmである。ツマミを除く器高は大釜遺跡3住で見ると1.4~1.8が3個体、3住-26が特に高く3cmとなっている。この中で3住-26の器高は特に高いため、他の蓋とは別な容器の蓋が考えられる。3住-26の蓋を除く4個体の器高の平均は約1.7であり、低いことを示している。

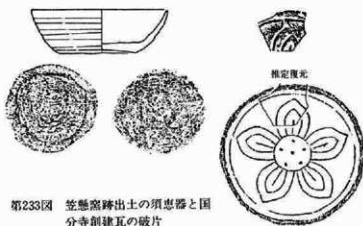
#### ④ 甕・壺

小形短頸壺・短頸壺・甕が出土しているが、出土数が少なく実態は明らかでない。しかしこの第2期類から短頸壺が住居内より出土していることは、沢入A支群より出土している骨甕器として多用された台付短頸壺と同壺に多く使用されている独特な蓋の存在と考え合わせると興味深い事柄である。

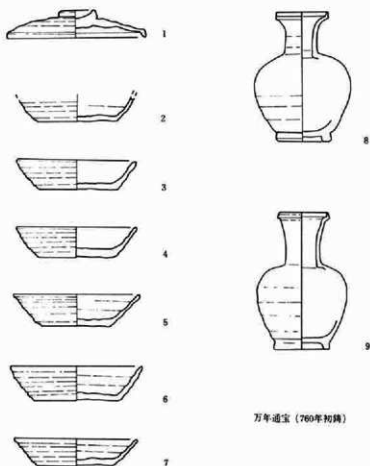
序列に使用した壺・甕は、34住-15・16と大釜遺跡3住-37の甕である。34住-16は外面のほぼ全面にわり降りによる軸が厚く付着しており、硬く焼き締められている。短頸壺という特別な形であることと、この軸が意図的に施釉されていると思われることより、特別の用途のために作られた製品の可能性があり興味深い。

### (5) 年代観について

年代根拠として示し得る県内資料は、『清里・陣場遺跡』の中で示した以外、今日でも持ち合わせていない。今回は奈良時代を主として考えているため、この時代に該当する年代根拠を2つあげ、第1期類と第2期類の年代観について考えてゆきたい。その年代根拠とは、『清里・陣場遺跡』の中で示した笠懸古窯跡群中より土野岡分寺創建瓦と近接して出土した8世紀中頃と想定される須恵器坏と、初埴760年の万年通宝を伴う8世紀後半段階と想定される松井田町愛宕山遺跡4号住出土の須恵器坏の2例である。詳しい内容については除くが、器形や底部調整において同一ではない。口径に関してはいずれも15cm以下であるが、笠懸古窯跡群中出土の須恵器坏は、底部が回転へら調整であり、中央に回転糸切と思われる痕跡を持つ。口径÷器高は約3.2である。これに対し愛宕山遺跡4号住出土の須恵器坏は、底部がすべて回転糸切であり、切離後へら調整は行なわれていない。口径÷器高は3.9~4.7となっており、口径に対し器高が低いことを示している。このような両者の違いから、笠懸古窯跡群出土の須恵器坏を8世紀中頃とし、愛宕山遺跡4号住出土の須恵器坏を8世紀第3~第4四半期の頃と想定しておきたい。この想定に妥当性が認められるものとして、作成した序列図の中の土器と比較すると、笠懸古窯跡群中出土の須恵器は、第2段階と考えられる村主遺跡26住-12に近く、愛宕山4号住出土の須恵器は、第2期類の村主遺跡34住と大釜遺跡3号住出土の須恵器坏に近い。このような状況より、第2期類の時期を、8世紀後半代が中心となる時期と想定したい。では第1期類はどうであるかという、時期を決める根拠が見当たらない。第1期類の中において大きな変化は認められないようであり、また第1期類に至るまでの移行期としての段階も認められない。いわば前代の古墳時代とは大きくかけ離れた土器群がたかたか完成されたかのような形で現われているのである。一応現状として第1期類を第2期類に先だつ、8世紀前半代を中心とした8世紀前後の段階から8世紀中頃までの段階として幅広く考えておきたい。



第233図 笠懸窯跡出土の須恵器と国分寺創建瓦の破片



松井田町委宕山遺跡  
第4号住居跡出土遺物

第234図 年代決定に用いた資料 (清里・陣場遺跡 P 316より引用)

續日本紀卷十七 聖武天皇天平勝寶元年四月一閏五月 ○戊寅、上野國碓氷郡人外從七位上石上郡君諸弟、尾張國山田郡人外從七位下生江臣安久多伊豫國宇和郡人外大初位下凡直鎌足等各獻當國々分寺知識物並授外從五位下。

續日本紀卷十七 聖武天皇(天平勝寶元年閏五月一七月)

上野國勢多郡小領外從七位下上毛野朝臣足人、各獻當國々分寺知識物並授外從五位下。

## おわりに

従来県北においては、8世紀前後の土器を出土する堅穴住居跡の調査例はなく、県南においても多いとは言えなかった。そのため県内全体についての見通しは充分でなかったように思われる。今回県北の月夜野町において多くの8世紀前半代の堅穴住居跡を調査することができた。そこで資料不足を承知の上であえて土器群の見通しを含めて考えをまとめてみた。この時代はまだ明らかでない点が多いため多くのまちがいや考え方の違いが含まれていると思う。しかし与えられた資料の中で何かを導き出そうと努力してみた。今後資料の増加を待って更に修正してゆきたい。

最後に、小稿をまとめるにあたり、井上唯雄氏、鬼形芳夫氏、金子真土氏、大江正行氏、酒井清治氏に多大なる御教示を頂いた。文末ながら記して感謝の意を表らわしたい。(中沢 悟)

## (注)

- (1) 井上唯雄『入野遺跡』1962
  - (2) 井上唯雄『群馬県下の歴史時代の土器』『群馬県史研究』第8号 1978
  - (3) 山田下誠『天神風呂遺跡』群馬県大胡町教育委員会 1981
  - (4) 中沢 悟『出土土器の分類と編年』『清里・降幡遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981
  - (5) 井上唯雄『歌舞伎遺跡における土器の編年』『歌舞伎遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
  - (6) 大江正行・中沢 悟『群馬県における平安時代の年代観について』『シンポジウム 関東地方における9世紀代の須恵器と瓦』立正大学文学部考古学研究室 1982
  - (7) 井上 太『古墳時代から平安時代の土器について』『本宿・塚土遺跡調査報告書』富岡市教育委員会 1981
  - (8) 志村 哲『堀ノ内遺跡群出土土器の分類と編年』『A1 堀ノ内遺跡群』群馬県藤岡市教育委員会 1982
  - (9) 岡崎眞子『出土土器の分類と編年』『有馬桑原遺跡』沖田地区 平安時代。群馬県渋川市教育委員会 1983
  - (10) 坂口 一・三浦京子『住居伴出土器の相対年代』『中尾(遺物篇)』群馬県教育委員会ほか 1984
  - (11) 坂本 隆『古代の遺物・遺構について』『鹿野堂遺跡(1)』群馬県教育委員会ほか 1984
  - (12) 唐沢保之『奈良・平安時代の土器の分類について』『芳賀東照宮遺跡1』前橋市教育委員会 1984
  - (13) 小島敏子『賀茂遺跡出土の平安時代の土器について』『賀茂遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
  - (14) 山平一吉『古墳・平安時代の土器について』『B4 株木遺跡』群馬県藤岡市教育委員会ほか 1984
  - (15) 岡崎 晴彦『奈良・平安時代の土器』『敷田遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1985
  - (16) 神谷佳明『平安時代の土器について』『赤井宮前遺跡1』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
  - (17) 石比呂直樹『奈良・平安時代』『石巻遺跡』沼田市教育委員会ほか 1985
  - (18) 井川洋雄『古墳時代・奈良時代の土器について』『三ツ寺遺跡・保渡田遺跡・中里天神塚遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1985
  - (4) 土器全体の動きを知る手段として便宜上試みた。ここで1つの基準として3.5を用いたがこの数字は他の遺跡において適当であるかは検証していない。しかし8世紀代全体として土器の動きを知る手段としては有効であると思われる。
  - (5) 藤岡市教育委員会奥平一古比氏の案内により現地にて確認
  - (6) 戸田有二『群馬県吉井町下五反田・末沢遺跡』『考古学研究室発掘調査報告書』国士館大学文学部考古学研究室 1984
  - (7) 茂木由行・矢島 浩ほか『川根遺跡』吉井町教育委員会 1986
  - (8) 大江正行『群馬県における古代遺跡の背景』『群馬文化』199号 1984
  - (9) 群馬歴史考古同人会『土器部会研究資料』No.1 1983
  - (10) 群馬歴史考古同人会『秋間古墳群』群馬歴史考古同人会土器分科会 1982
  - (11) 岡田秀作『群馬県安中市葛原遺跡』『日本考古学年報』18 1970
  - (12) 群馬歴史考古同人会『土器部会研究資料』No.1 1983
  - (13) 尾崎喜左衛門『群馬県新田郡鹿ノ川瓦窯址』『日本考古学年報』I 1948
  - (14) 新里村教育委員会『新里の遺跡』1984
- 集落遺跡として、この段階で環状ツマミにカエリを持つ壺や割り出し高台の両方又は一方でも出土する遺跡は高崎市では鹿野堂遺跡と保渡田遺跡と中尾遺跡が、また群馬町では三ツ寺遺跡が、また藤岡市では中尾遺跡と株木遺跡が、前橋市では芳賀岡遺跡・坂町では三ツ木遺跡・新田町では塚原遺跡・太田市では小町遺跡等と認められる。他にも数多く出土しているものと思われる。
- (12) 村主遺跡では、8世紀後半の住居数が少なく、特に後半でも新しい段階の住居が検出されなかったため同じ月夜野町の大釜遺跡の資料を使用させていただき、土器群の流れを追ってみた。この中で大西氏はクロコ陶紀と糸町の問題について詳しく触れている。『大釜遺跡・金山古墳群』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1983

(2) 奈良・平安時代の律令制下における土器生産体制の確立から崩壊への問題について

— 村主道跡出土の土器群を中心とした県内土器群の動向 —

はじめに

- (1) 奈良・平安時代における土器生産体制への移行・確立期
- (2) 奈良・平安時代における土器生産体制の転換・発展期
- (3) 奈良・平安時代における土器生産体制の衰退・崩壊期
- (4) 須恵器窯の在り方から見た生産体制の変化と画期

おわりに

はじめに

これまで(1)奈良時代を中心とした土器群について、の中でくり返して述べてきたように第1期類以降の土器群は、古墳時代の土器群とは多くの点において異なっている。あたかも新しい政治体制の確立に向けて、推進者の力により一般の土器文化をも変革していったような感さえるのである。政治や経済が変わったとしても一般庶民の土器様式までも改革するには、土器生産体制の整備を含めた相当に強大な政治・経済的な力が存在しなければ不可能と思われる。おそらくそのような動きが、7世紀後半の段階より始まり、8世紀前後の段階に至って具体化し確立していったのではないだろうか。従来もこのようなことは、多くの人により考えられていたものと思われる。今回奈良時代を中心とした土器群の整理を行なう中で、なお一層古墳時代の土器群との違いを強く印象づけられたしである。またこの土器群も確立から平安時代になるとやがて崩壊の過程をたどるわけであるが、そのとらえ方について、どのように区分して表現して良いか分からなかった。一定律令制社会の中での変化と考へ、語句は適当であるか疑問もあるが、律令制下における土器生産体制の確立から崩壊の過程として理解し表現した。なお古墳時代の土器群との比較については、月夜野町における調査報告例は、近接する諏訪遺跡においてなされているが、資料が少なく時代的にもやや連続性に欠けるため、県央の三ツ寺Ⅲ・保渡田遺跡の報告書を使用させていただき比較検討の資料とした。

(1) 奈良・平安時代における土器生産体制への移行・確立期(7世紀後半～8世紀前半期)

古墳の築造が終了し、上植木廃寺や金井廃寺・山王廃寺等が創建されていった段階であり、おそらく郡衙や国府等が造営され、機能していった段階に相当する。

県北の村主道跡においては、旧来の伝統を引き継いでいると思われるヘラ磨きを持つ環A・環A'・甕A・甕A'等が、新しく採用されていったと思われる環B・環B'・甕B・甕B'とともに住居内で使用されているが、量は少ない。また新しく採用されてくる環や甕が、旧来の環と甕から発展していった製作されたとは考えられないため、旧来の環と甕が基本的にヘラ磨きを伴うという認識が正しいなら、土師器に関しては、最初の段階は新旧の両者を含むがやがてほぼ全てが新しく採用されていった器種・器形になると理解されよう。しかしこのように古墳時代の土師器と奈良時代を中心とした土師器が明確に区分できる地区は県内において少ない。特に環に関しては第1期類以前の段階より新しい器形が採用されており、それが環Bに深く関係していると思われ、県北の村主道跡とは大きく異なるようである。そのため県央・県南において古墳時代終末期の土師器環と奈良時代の土師器環Bの区分には、むずかしい点が多いと思われる。

従来県央や県南における地域においては、古墳時代と言われてきた土器群と、奈良時代の土器群との境は



どの土器をもって区別していたのであろうか。また奈良時代の土器群は、奈良時代つまり710年頃から確立したのであろうか。このような点について筆者は詳しくない。しかし古墳時代と奈良時代を分ける土器群として、出土量の多い土師器環において、須恵器環を模倣したと言われている体部上位に稜を持つ環が古墳時代の環であり、稜を持たずに短い口縁部が直立又はやや内傾する環を奈良時代の環と認識していたような気がする。具体的な資料としては三ツ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡序列の第7分類期にあたる三ツ寺Ⅲ遺跡68号住一22・30の環である。この環は従来奈良時代の環であり、同じ住居出土の14～17等の環が古墳時代以来の環であると認識されていたようである。この段階のやや後になる三ツ寺遺跡・保渡田遺跡序列の第9分類期に至ると、口縁部に稜を持つ環はほとんど出土しなくなり、短い口縁部が直立又はやや内傾する環のみとなるのである。次の第10分類期に至って、村主遺跡第1期類の土器群と共通する段階になるのである。三ツ寺遺跡・保渡田遺跡序列第9分類期と短い口縁部が直立又はやや内傾する土師器環は、従来考えられてきたように古墳時代の環ではなく新しい奈良時代の環であろうか。この環が、古墳時代終末期における中で、新たな律令社会の動きを最も早く土器として反映していった製品の1つなのであろうか。焼成や色調等においても旧来の環とはやや異質な部分を持つのである。この点に関しては、村主遺跡では該当する住居が検出されなかったため不明であり、今後の課題としたい。なお、三ツ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡序列の第8・第9分類期と思われる段階の中において、大口径の須恵器環や高台付盤や蓋等が出土することがあるが、おそらくこの段階より第1期類へ向けての須恵器生産は一部地域において始まっており、官衛等においては使用されていたことも考えられる。

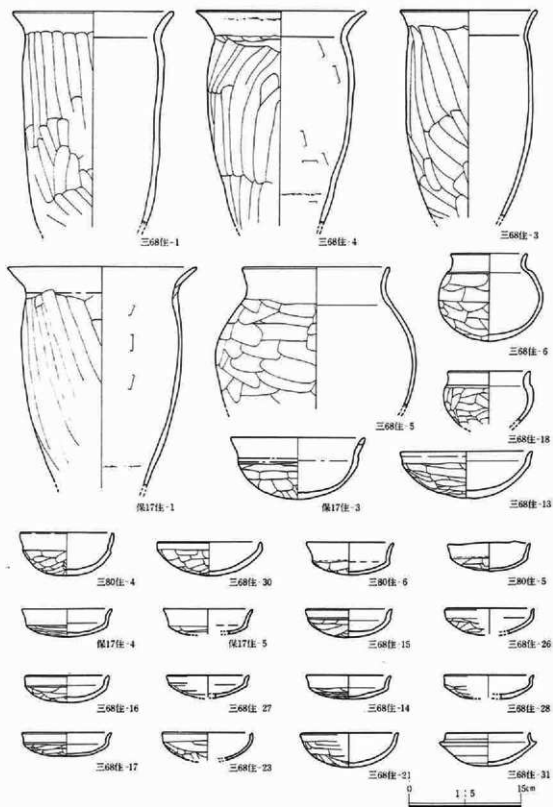
古墳時代における土師器の環は、基本的には須恵器環の形に近い器形を呈していた。それがこの第1期類に至ると、須恵器環が平底を呈したにもかかわらず、丸底であり、古墳時代以来の伝統を引き継いでいるのである。この土師器環は、第1期類では環B・環B'として扱った。古墳時代以来の器形を保っているが、しだいに口縁部幅が広くなり、器高が低くなっていき、口径÷器高がしだいに3.5以上となる。また土師器環Cの出現は、まさにこの段階を特徴づける大きな動きであった。他に甕等においても特色はあるが、この段階が、前代の古墳時代の土器群といかに違うかを示す土器群として須恵器環・蓋があげられよう。第1期類以前の古墳時代終末期の須恵器環や蓋は、堅穴住居内より出土する量が少なく、環等が出土しても大部分の製品は口径が小さく丸底を呈していた。それが第1期類になると環・蓋の出土量が多くなり、平底を呈した大小の環や環状ツマミにカエリを持つ環の大小の蓋、さらに削り出し高台や付高台を持つ大口径の環まで出現してくるのである。このように古墳時代の土器群と大きく異なる土器群が第1期類の段階の前段で準備され、それが第1期類の段階で確立していったものと考えられるのである。

## (2) 奈良・平安時代における土器生産体制の転換・発展期(8世紀中頃～9世紀代)

国分寺が創建・造営されていく段階である。

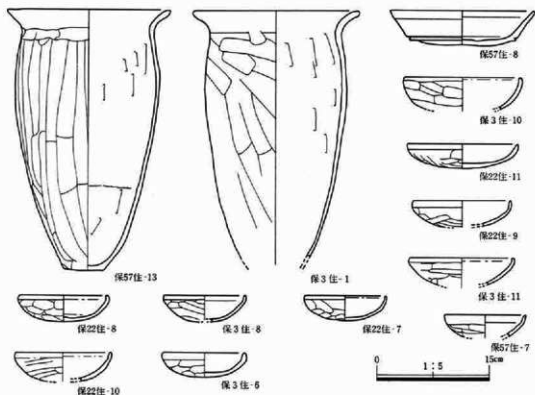
第1期類において、古墳時代の土器群と大きく異なる土器群が成立したが、それらの多くの器種構成が変化し、整理されて新しい器種も追加されていく段階である。第1期類でみられた勢いは感じられないが、やがて8世紀の終わりに段階になると、規格化された須恵器環・蓋等が大量生産され始め、9世紀前後の段階において、土師器環をうまわるようになり、須恵器生産の歴史の中で最大生産量と規模を持つ段階へとなる。須恵器環で見ると、口径15cm以上の削り出し高台や付高台の環や環状ツマミにカエリを持つ蓋等が基本的には使用されなくなり、高台付の堦等が導入され、ロクロよりの切り離し技法としてへう起しから回転糸切技法が導入されていくのである。土師器に関しては、旧来の環A・環A'・甕A・甕A'や大口径の環Cが使用さ

第6章 調査成果の整理と考察

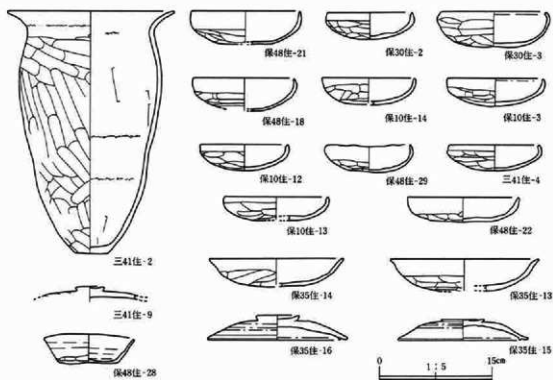


三ツ寺川遺跡・保渡田遺跡第7分頓期

第235図 古墳時代における土器群の1例（三ツ寺川遺跡・保渡田遺跡 P547より転載）



三ツ寺田遺跡・保渡田遺跡第9分類期



三ツ寺田遺跡・保渡田遺跡第10分類期

第236図 古墳時代～奈良時代における土器群の1例(三ツ寺田遺跡・保渡田遺跡 P549より転載)

## 第6章 調査成果の整理と考察

れなくなる。つまり第1段階の終わりから第2段階の前半にかけての8世紀中頃から旧来の伝統を持つ製品が姿を消し、大口径の土師器坏Cや須恵器坏A'・坏B等が姿を消し、真に堅穴住居内で使用されてゆくのにふさわしい器のみが残り、それが第2段階の8世紀後半代より糸切技法も導入されて大量生産されてゆく段階である。ここで整理された土器類は、土師器と須恵器のいずれかにしても、器形変化は伴ながら8世紀後半代から9世紀段階まで使用されてゆくのである。月夜野町周辺における土師器の坏は、9世紀前後の段階よりほとんど出土しなくなるが、県央・県南地域においては、9世紀～10世紀段階まで使用されてゆき、變に関しては、月夜野町周辺においても、羽釜の出現段階まで多く使用されてゆく。須恵器坏に関しては、9世紀前後より月夜野町周辺においては、集落内におけるほぼ唯一の盛器として土師器坏を消滅させる勢いで大量に生産されてゆき、堅穴住居内より大量に出土してくる。

### (3) 奈良・平安時代における土器生産体制の衰退・崩壊期(9世紀末～10世紀代)

#### 国分寺の補修とその後の崩壊段階

今回の序列図では提示できなかった平安時代の9世紀末～10世紀代を考えている。集落内であれほど大量に出土していた須恵器の坏や埴が、しだいに粗雑な作りとなり、還元焼締焼成から軟質な焼成へ、さらに酸化焙焼成に近くなってゆき、やがて土師質土器が大量に生産されてくると須恵器坏や埴は消えてゆくのである。土師器變に関しては器肉が薄く、実に精巧にできていた製品がやや器肉が厚くなり、羽釜が多く使用されてゆくとやがて消えてゆくのである。またこの段階では、新しい器形として須恵器生産の中から羽釜が作られ、大量に生産されてゆく。このように8世紀前後に前代の土師器や須恵器と大きく異なり、新たな器形技法・調整方法をもって実に統一性のとれた姿で登場してきた土師器と須恵器は、この10世紀代をもって、その主たる流れが終わろうとしているのである。この段階以降の10世紀末～11世紀代において集落内より出土してくる土師器の坏は、県南地区においてのみ出土し、その坏も器肉が厚く、調整方法や器形等においても従来の坏とは大いに異なる。また土師器變についても土釜と呼ばれる形で出土してくるが、やはり前代の器肉の薄い統一性のとれた變ではなく、器肉が厚く器形や調整方法等においても統一性のない變となっている。主遺跡 認められたように、月夜野町周辺においても須恵器の坏や埴は消え、土師質土器が登場してくる。この土師質土器は、須恵器の技術その他の影響下で作られているわけではあるが、生産廠の在り方や焼成・器形その他において、須恵器とは同一に考えるには無理があり、8世紀前後より成立した統一性のある大きな力に支えられての須恵器生産ではなく、別の形での生産を考えることにより妥当性があると思われるのである。

### (4) 須恵器窯の在り方より見た生産体制の変化と画期

第1期期より多くの須恵器坏・蓋等が出土してくるわけであるが、それらの製品の大部分は県内の須恵器窯での生産と考えられる。ではこのように多くの須恵器の供給を可能にした須恵器窯は、第1期期の以前と以後において大きな変化が認められるのであろうか。もしこの第1期期に近い前段階において、県内各地にそれまでとは異なる多くの須恵器窯が配置されていたなら、須恵器窯の成立には大きな政治経済的なきの中で始めて成立操業が可能となると考えられるため、そこに律令制下における土器生産体制の確立へ向けた大きな政治的なきを読みとることができるのではないだろうか。さらに前述のごとく集落遺跡においては、10世紀頃より須恵器の製品に大きな変化が現われ、やがて坏・埴・蓋等が出土しなくなるのである。つまり従来の須恵器生産体制が崩壊したと考えられるわけで、そこに須恵器窯を支えた土器生産体制の崩壊を読み

とることができるのではないだろうか。県内における須恵器生産の動きについて現状で考えられる範囲について1981年2月に神奈川考古同人会が行なった「シンポジウム 古代末期～中世における在地系土器の諸問題」の中のコメントの一人としての筆者の発言内容の一部をここに再録して、第1期類以前と以後において、須恵器窯がいかにか異なっているかについて説明したい。

「群馬県における須恵器生産は、古墳時代を中心とした段階と、白鳳・奈良・平安時代を中心とした段階の2段階に大きく分かれ、それを細分してゆくと古墳時代が2段階で白鳳・奈良・平安時代が3段階の計5段階に分かれます。第1段階として、6世紀代中頃から後半にかけての太田市金山丘陵周辺を中心とした小地域での産産段階があります。この地域の須恵器生産は一部が9世紀代でも採業していますが、基本的には6世紀代を中心としており、製品の多くは古墳等に供献されているものと思われます。第2段階として、太田市金山丘陵周辺での採業と1部重複するであろうと思われる7世紀前後の段階で採業を始めている安中市秋間古窯跡群での生産段階があります。この窯跡群では、大量に生産が行なわれており、古墳や7世紀末以降においては集落等においても多くの製品が供給されて、9世紀代まで採業が続きますが、中心は7～8世紀代と思われます。この窯跡群は、第3段階以降県内各地ではほぼ同時に須恵器窯が開業されていくという状況の中で器形や技法及び生産体制を含めた全般的な部分で母胎としての役割を果たしたのではないだろうかと考えられます。第3段階は、7世紀後半から8世紀前半代の段階であり、この段階は、それ以前の段階での生産窯が限定された地域での生産であったのに対し、県内の東西南北という各地に須恵器窯が意図的に同時期に配置され開業されていったと考えられる段階であり、大きな展開期であると思われます。またこの段階の集落内においては、上野独自とも言える削り出しや付高台を持つ大小の坏や環状つまみにカエリを持つ坏蓋等が多く出土しています。具体的な窯跡としては、東部で新里古窯跡群や笠懸古窯跡群、西部では秋間古窯跡群、南部で吉井古窯跡群や藤岡古窯跡群、北部で月夜野古窯跡群と多くの古窯跡群の展開をあげることができます。しかしこの段階も8世紀前後を1つのピークとしており、中頃はしだいに生産量が減少している傾向を示します。第4段階は、8世紀後半から9世紀後半代にかけての段階である。須恵器生産において糸切技法が採用され、第3段階で認められた坏に見られる口径の大小や削り出し高台等の多様化した製品が姿を消し、単一化され、大量に生産され、集落内で多く使用された段階である。特に9世紀以降になると、住居内で使用される坏・埴輪としては土師器坏が減少し、須恵器坏が過半数を占めるようになり、須恵器生産地である月夜野地区の集落では、9世紀以降土師器の坏はほぼ完全に姿を消して須恵器の坏が独占しています。この状況は消費地がこの段階に須恵器生産地に近接しているかないかによって大きく異なるようでもあります。この4段階の具体的な窯跡としては、西で安中市秋間古窯跡、東で笠懸古窯跡群と桐生古窯跡群南で吉井古窯跡群、藤岡古窯跡群、北で月夜野古窯跡群をあげることができます。第5段階は、9世紀末から10世紀の段階であり、須恵器生産の変質と消滅の段階であります。従来の須恵器は、還元焼成を常とし基本的には灰色をしていました。ところが9世紀以降灰白色を呈する軟質な坏や埴輪が多くなり、10世紀に至ると赤褐色をした酸化焼成の坏や埴輪が現われてきます。また形も従来の坏や埴輪だけでなく、皿や羽釜等も出現します。このように焼成方法や器まで大きく変化し、やがて10世紀中頃以降においては住居内からは基本的には出土しなくなります。具体的な窯跡としては、北は月夜野古窯跡群、南は吉井古窯跡群と乗附古窯跡群、東は笠懸古窯跡群と太田古窯跡群中の萩原支群等をあげることができます。

このような状況について、現在確認されている須恵器窯について、数字で見ると、次のようです。なおこの数字は今後調査の進展に伴い変化します。県内の窯跡群は11箇所を確認されており、支群で年代のほぼ明らかなのが58支群あります。それを年代別に示すなら、6世紀代が5支群で全体の8%、7世紀代

## 第6章 調査成果の整理と考察

が8支群で全体の14%、8世紀代が19支群で全体の33%、9世紀代が15支群で全体の26%、10世紀代が11支群で全体の19%となっています。8～9世紀代で全体の60%を占めています。11世紀代については存在は知られていません。参考までに『東日本須恵器窯跡地名表』より出した関東各県全体の8～9世紀代の支群割合は約66%でした。このように、10世紀代になると須恵器窯は非常に減ってきます。県内におけるこれ以降の土器群は、土師器と須恵器製作技術の延長上に来ると考えられる土師質土器が県内の多くの地域で製作使用されているようです。」

### おわりに

このように、奈良時代を中心とした土器群について序列を作成し、土器説明を行なう中や、今回文章化できなかったが、平安時代の土器群の序列図を作成した中で考えてきたこと、及び清里、陣場遺跡の整理作業以降考えてきたこと等を考え合わせて、書き留めてみた。作業を進めてゆく中で、古墳時代と奈良時代の土器群との間の違いが予想以上に大きかったことに驚いた。村主遺跡における第1期類の須恵器の搬入量は、他の遺跡と比較してたしかに量が多いと思われる。しかし量の多少は別にしても、この段階より大口径の坏や環状つまみにカエリを持つ蓋や削り出し高台の坏等が生産され、集落内に入ってくることは全体的な傾向として認められるようである。またこのような坏蓋は、北武蔵の一部や下野西部の北山古窯跡からも出土しており、周辺の国にも少なからず影響を及ぼしていたようである。また上野においては、このように自国内で須恵器を生産していたわけであるが、この段階に須恵器窯を持たない南武蔵や相模等においては、他国特に美濃須恵器系又は東海系の製品の搬入が考えられているようである。搬入品であるため、出土量は多量ではないが村主遺跡第1期類とほぼ同じ時期と考えられる段階に大口径の坏や蓋等が出土しているのである。つまり第1期類の8世紀前後から8世紀前半代の段階においては、口径15cm以上の坏や蓋は、上野・武蔵・相模を始めとした関東各県において、新しい社会の中での食器類の在り方の重要な要素と位置づけられていたのではないだろうか。

最後に小稿をまとめるにあたり、井上雅雄氏、鬼形芳夫氏、大江正行氏に多大なる御教示を頂いた。文末ながら記して感謝の意を表わしたい。

(中沢 悟)

### (注)

- (1) 井上雅雄「古墳時代・奈良時代の土器について」『三ツ寺遺跡・保渡田遺跡・中里天神塚古墳』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 ほか 1965
- (2) 栃木県佐野市北山窯跡では、付高台とこの削り出し高台が併存されている。群馬県外における生産地としては唯一であろう。大川清「大伏窯跡」『東北自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』栃木県埋蔵文化財発掘調査報告書 5 1972
- (3) 埼玉路上里町立野南遺跡2号住からは、村主遺跡第1期類の坏や蓋によく似た製品が数多く出土している。富田和夫・赤瀬浩一ほか『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群1丁目・川越田・極沢』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告46 1985

参考文献 酒井清治「北武蔵における7・8世紀の須恵器の系譜について」『研究紀要第8号』埼玉県立歴史資料館 1986

神奈川考古学会『シンポジウム奈良・平安時代土器の諸問題』神奈川考古 第14号 1983

群馬県内における古窯跡群の概要一覧表

窯跡群名	支群名	窯跡数	築造年代	所在地	焼成器種	備 考	文 献	
月夜野	洞 A	4	8 C末~10 C	利根郡月夜野町	瓦、埴・水盤・高坏・甕・埴・皿・坏・磁・把手・羽釜	口部趾に波状紋を持つ埴がある	(1) (2)	
	飯田 A		9 C~10 C	#	埴・埴・羽釜・甕・耳・皿・甕・青磁器	窯体は確認されていない。須原製工人集落	(3) (4)	
	沢入 A	2	8 C前~後	#	埴・甕・埴・高坏・埴・甕・青磁器	現状で月夜野最古の支群である	(5)	
	深沢 B	4	10 C	#	埴・埴・甕・羽釜	羽釜が埴や坏と排出されている	(5)	
	深沢 C		10 C	#	埴・埴・甕・埴・甕	窯体は確認されていない	(5)	
	須原野 A		10 C	#	埴・埴・鉢・附付埴釜	窯体は確認されていない。附付羽釜を多く出土	(2)	
	真沢 A	1	10 C	#	埴・埴・甕・羽釜・甕	附付羽釜を出土している	(2)	
	水沼 A	1	10 C?	#	埴・埴・耳・皿・瓦(近くの前中津路跡より想定)	窯体内外より出土物なし	(5)	
	中之条	天代	2	8 C前	吾妻郡中之条町伊勢町	瓦	製品の一部は金井窯跡に供給	(6)
		里見			群馬郡種市町里見		窯跡として疑問視されている	(7)
相津谷津			7 C後~9 C前	安中市秋間丘陵	埴・甕・長頸壺・甕・甕	7 C代の須原窯跡が多く存在している	(8)	
吾ヶ谷津			7 C後~9 C前	#	埴・高坏・甕・平甕・長頸壺・甕		(5)	
高根			7 C後~9 C前	#	埴・埴・甕・皿		(8)	
河原		2	8 C~9 C	#	瓦・埴		(9)	
梅山		2	7 C末	#	埴・埴・甕	埴は手持の足利り	(3)	
小日向		1	8 C前	#	埴・甕・甕	埴は細輪甕形	(3)	
吉井		下五反田	3	9 C後~10 C	多野郡吉井町	瓦・埴・埴・甕・黒字埴・羽釜・甕	瓦が出土しているが、焼成品としては疑問	(10) (2)
		津 沢	2	8 C中	#	埴・甕・埴・甕・埴・甕・土鈴・埴甕	数片の瓦片を含有が公平は須原窯である	(10) (2)
	糠木族		9 C	#	瓦(甕瓦・瓦瓦)	文字瓦をはじめとして、瓦が多く焼けている。下五反田・河原支群を包含した窯跡の数は多く、おそらく県内でも最も大規模の窯跡群の1つと思われる	(10) (2)	
	清滝寺跡		9 C	#	文字瓦・須原器		(10) (2)	
	山ノ神		9 C	#	瓦・須原器		(10) (2)	
	敷 野	小 峯		8 C末~10 C初	高崎市寺尾町小峯	瓦・埴・埴・羽釜	数基の窯が想定できる	(10)
		岩 崎		8 C前半	多野郡吉井町岩崎	皿・高坏・甕	大正郵政の調査。その後明らかでない	(10)
		金 山	3	8 C前	藤岡市日野山	瓦・須原器	国分寺創建段階における官の専属窯	(10) (2)
		伊 沢	4	8 C	藤岡市日野沢	須原器	4基以上の窯体が確認されている	(10)
		大 崎		8 C前後	埴・甕・短頸壺・広口甕・高台付埴・東西甕・横甕	炭灰趾・製鉄址等が同時に発掘される	(10)	
新 道			7 C中~8 C初	勢多郡新里村新川	瓦・須原器	県下最古の上棟木炭甕の瓦を創建時から8 C初頭まで生産	(10)	
鶴ヶ谷		1	7 C末~8 C前	勢多郡新里村鶴ヶ谷上鶴ヶ谷	埴・長頸壺	施文にクハ目を残す	(10)	
山 原			8 C中~10 C初	新田郡笠懸村山原	瓦・埴・甕・埴・甕	国分寺創建段階における官の専属窯	(10)	
鹿ノ川			8 C中~10 C初	新田郡笠懸村鹿ノ川	瓦	国分寺窯	(10)	
桐 生		上小友		8 C後~9 C前	桐生市栗町上小友	埴・埴・鉢・長頸壺・甕	坏の胎趾は糸切痕と疑いしが現在	(10)
	原ノ小	2	8 C前	桐生市栗町原ノ小	埴・埴・甕・皿・鉢・鉢	口部趾に波状紋を持つ埴がある	(10)	
	泉電寺	1		桐生市栗町泉電寺	須原器		(10)	
	曲ノ坂	2	8 C前	桐生市栗町曲ノ坂	須原器		(10)	
	太 田	寺今川	7	6 C後	太田市寺今川	埴・高坏・甕・埴・埴・皿・鉢・鉢	精緻強張大甕	(10) (2)
		小 山	1	6 C後	太田市東金井字龜山	埴・高坏・皿・埴・甕・甕	施に肩部跡あり。太田金山窯跡群の調査対象で最古	(10)
		辻 小	3	6 C後	太田市東金井字辻小	埴・甕・高坏・埴・甕	長1.3mの小甕あり	(10)
		八 幡	3	6 C末~7 C前	太田市東金井字八幡	埴・埴・高坏・埴・甕	他に数基の窯跡あり	(10)
		入 瀨	6	6 C後	太田市東金井字入瀨	埴・甕のみ	調査のみ	(10)
		萩 原		7 C後・9 C後	太田市武吉萩原	瓦	寺今川等に瓦を供給。近接して10 Cの須原窯あり	(10)

(大江正行・中沢 編 1985)

『月夜野古窯跡群』 1985より引用

- 文 献
- (1) 井上進道『群馬県利根郡月夜野町陶跡群発掘調査報告書』月夜野町教育委員会 1972 (昭和47年)
  - (2) 山崎義男『上野野田利根郡月夜野2窯跡に就いて』『古代文化』1941 (昭和16年)
  - (3) 下城 徹『飯田窯跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983 (昭和58年)
  - (4) 下城 正・岡崎宗治『飯田遺跡群』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985 (昭和60年)
  - (5) 中沢 哲・大江正行他『月夜野古窯跡群』月夜野町教育委員会 1985 (昭和60年)
  - (6) 大江正行・川原喜久治他『天代瓦窯遺跡』中之条町教育委員会 1982 (昭和57年)
  - (7) 山崎義男『群馬県東足尾遺跡』『日本考古学年報』7 1958 (昭和33年)
  - (8) 大江正行『群馬県における古代窯跡群の発展』『群馬文化』199号 1984 (昭和59年)
  - (9) 群馬歴史考古学会『土曜部会研究資料』No.1 1983 (昭和58年)
  - (10) 田島伊作『榎水郡秋間町の古瓦瓦見記』『上毛及上毛人』209 1984 (昭和59年)
  - (11) 高田孝博『歴史時代』[安中市誌] 1984 (昭和59年)
  - (12) 藤田寿博『群馬県安中市河原遺跡』『日本考古学年報』18 1979 (昭和54年)
  - (13) 国士館大学文学部考古学研究室『下五反田窯跡発掘調査報告書』1976 (昭和51年)
  - (14) 橋本 勉『奈良・平安時代』『古井町誌』1974 (昭和49年)
  - (15) 群馬歴史考古学会『土曜部会研究資料』No.1 1983 (昭和58年)
  - (16) 山崎義男『中野市河原の陶器発掘に就いて』『上毛及上毛人』158 1930 (昭和5年)
  - (17) 松田 貞『日野山金井中原の布目瓦窯跡に就いて』『上毛及上毛人』63 1917 (大正6年)
  - (18) 藤岡市教育委員会『上野・金山瓦窯跡』1966 (昭和41年)
  - (19) 山下重信『八ヶ峰遺跡発掘報告』『群馬文化』199 1984 (昭和59年)
  - (20) 若手正行『新田郡土大甕』『地野』5号 1931 (昭和6年)
  - (21) 家永三郎『新田出土土大甕の古瓦瓦見記』『岡谷古代文化』1 1949 (昭和24年)
  - (22) 尾崎喜左衛門『群馬県新田郡鶴ヶ谷川瓦窯跡』『日本考古学年報』1 1948 (昭和23年)
  - (23) 佐藤芳一『上野・上小友窯跡』『立正大学部論叢』32号 1964 (昭和39年)
  - (24) 山崎義男調査報告『山原および原の鳥遺跡調査報告書』1974 (昭和49年)
  - (25) 倉田芳明『群馬県太田市宮ノ沢遺跡の発掘』『日本考古学協会第38年全国大会要旨』1972 (昭和47年)
  - (26) 桐生大学考古学研究室『群馬県太田市宮ノ沢遺跡 第1—1次発掘調査報告書』1968—1976
  - (27) 橋沢重昭『群馬県太田市龜山窯跡』『日本考古学年報』18 1965 (昭和40年)
  - (28) 倉田芳明・坂詰芳一『太田市金井字辻小遺跡発掘調査報告書』1968 (昭和43年)
  - (29) 桐生大学考古学研究室『太田市金井字八幡遺跡発掘調査報告書』1968 (昭和43年)
  - (30) 桐生大学考古学研究室『太田市東金井字入瀨遺跡発掘調査報告書』1969 (昭和44年)
  - (31) 中之条町教育委員会『新里の遺跡』1984 (昭和59年)
  - (32) 国士館大学文学部考古学研究室『群馬県吉井町下五反田・末沢窯跡』『考古学研究室発掘調査報告書』1984 (昭和59年)





## 第5節 ま と め

大原Ⅱ遺跡・村主遺跡の調査を通して明らかとなったこと、また感じてきたことについてここに記し、まとめとしたい。

1. 検出された遺構の中で、弥生時代および平安時代の住居跡はすべて台地の中央部ではなく、沢の近くに作られていた。台地の中央部は、縄文時代の陥し穴が多く検出されており、他は土坑等であった。このように住居跡が台地の端部、特に北西寄りの台地に多い傾向は、3年間にわたる調査の中で同じような傾向を示した。おそらく湧水における地下水位の問題と深く関係していると思われる。これについては、第2章第1部の中で詳しく触れている。
2. 縄文時代の陥し穴は、両遺跡で合計38基検出された。これだけ多くの陥し穴が列をなして検出された遺跡は数多くなく、また初年度に調査された諏訪遺跡での陥し穴と規模等において異なるので、その用途を含めて興味深い。また陥し穴の断面スライス調査を行ない、底部に設置されていた複数の楕状の痕跡（逆茂木）を確認することができ、大きな成果をあげることができた。
3. 奈良時代の住居跡は18軒検出された。その中で8世紀前後から8世紀前半代の第1期類と考えられる住居は10軒あり、8世紀後半代と考えられる住居は7軒であった。9号住は第1期類の可能性を持つ。8世紀前後から8世紀前半代の住居跡の調査例は、月夜野町においてはほとんどないため重要な意味を持つ。
4. 第1期類奈良時代の住居跡は、多くが調査部のほぼ中央にまよって位置している。西端に位置する2号住と東端に位置する30号住はやや異質であり、住居規模においても第1期類の中で最も小さい住居となっている。他の第1期類の住居跡は、長辺がすべて5m以上となっており、6・11・20・27号住は長辺が6m以上であり、この遺跡最大の規模を持っている。第2期類の住居跡は、第1期類の住居跡を囲むように位置しており、やや散在的である。住居規模は長辺で3.4m～5.6mとなっており、第1期類に最も近いと思われる26号住が最大規模5.6mを持っている。これらの現象から、第1期類の住居は居住区の中央部に位置し大規模であった。第2期類以降の住居は第1期類の住居を囲むように建てられ、住居規模も縮小の傾向を示している。
5. 平安時代の住居は9世紀後半で1軒、10世紀前半代の羽釜を伴う段階で7軒、10世紀後半代の土師質土器を伴う段階で8軒の計16軒が検出された。奈良時代に認められたような住居規模に一定の時期差の認められるような傾向は認められなかった。
6. 焼失家屋であった6号住居跡からは、大量の炭化材が出土した。また床面や壁等の焼土化の現象から、住居の上屋構造について知る大きな手がかりをつかむことができた。その1部については、第6章第1節①焼失住居にみられる上屋構造と竈の扱いの1例の中でまとめた。採集した炭化材の多くは材質分析までは至らなかったため、今後分析する機会を持ち、垂木材や屋根材また壁材等について検討を加えたい。
7. 多くの発掘調査を進める中で、奈良・平安時代の竈の残りの悪い原因が明らかでなかった。今回の調査により、ほぼ使用時の状態を保った竈や、残存状況の良好な竈、さらに廃棄の状況の推測できる竈等を調査することができた。その結果残りの悪い竈の原因について、ある程度理解できそうである。その内容については、第6章第1節②竈の廃棄についての中でまとめた。
8. 従来羽釜を伴う竈の使用法については、充分明らかでなかった。羽釜の銚を竈燃焼部天井に位置する石に架けて竈内に浮かせて使用するのではないかと考えられたこともあった。しかし今回村主遺跡3号住居

## 第6章 調査成果の整理と考察

跡でほぼ使用時の状態を保っていた竈が調査されたことにより、古墳時代の竈と同様に支脚の上に置かれて使用されていたことが明らかとなった。さらにこのことより、竈には基本的に支脚が伴うことが類推でき、支脚のない竈の多くは支脚が意図的に抜き去られていることが考えられた。

9. 出土土器を詳しく検討してゆく中で、数多い事項について知ることができた。特にその中で、奈良時代の土器群が、前代の古墳時代の土器群と大きく異なっていたことが明らかとなった。その点については、第6章第4節1)奈良時代を中心とした土器群について、(2)奈良・平安時代の律令制下における土器生産体制の確立から崩壊への問題について、の中で詳しく触れた。
10. 月夜野町における平安時代の住居跡調査例は数多い。しかしその大部分は須恵器の坏や埴を多く使用している段階の10世紀前半代までの調査例であり、土師質土器を出土するようになる10世紀後半代の調査例は極めて少なかった。そのため月夜野町や県北における地域での土師質土器の実体については、従来不明であった。今回の調査により土師質土器を伴う住居が多く検出されたため、この県北地域の土師質土器について1部を知ることができた。その様相は県央地域と多くの点において共通していた。
11. 月夜野町は、県北最大の月夜野古窯跡群の存在する地域である。そのため生産地域としての特色もすでに明らかとなってきた。その点については、第6章第2節3)月夜野型羽釜の様相と月夜野古窯跡群、(4)脚付羽釜について、の中で触れた。
12. 第1期類奈良時代で住居内より大量に出土してくる須恵器は、現在月夜野古窯跡群中から窯跡が発見されていない。他産地との胎土等の比較から見て、おそらく月夜野古窯跡群中の製品と思われる。ではなぜ従来の月夜野古窯跡群の存在する上組地区を中心とする地区からは集落を含めて8世紀前後から8世紀前半代の須恵器は出土しないで、赤谷川の対岸である村主遺跡から大量に出土したのであろうか。
7. 奈良・平安時代における村主遺跡は、月夜野町において従来不明であった時期を埋める重要な遺跡であることが明らかとなった。月夜野古窯跡群の中で、この村主遺跡は古窯跡群の出発段階と崩壊段階及び崩壊後の集落を中心として構成されていることが明らかとなった。

以上の点をはじめとした多くの問題点について今後も関心を持ちつづけてゆきたい。(中沢 悟)

# 圖 版





大原II遺跡・村主遺跡及び月夜野町中央部航空写真



大原II遺跡 西側航空写真



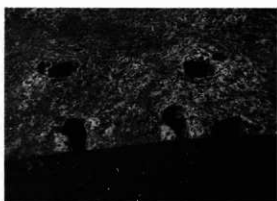
大原II遺跡 東側航空写真



1号住居跡全景（北から）



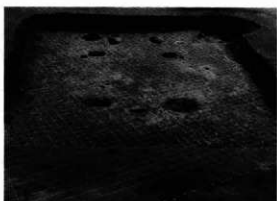
1号住居跡出入口柱穴（東から）



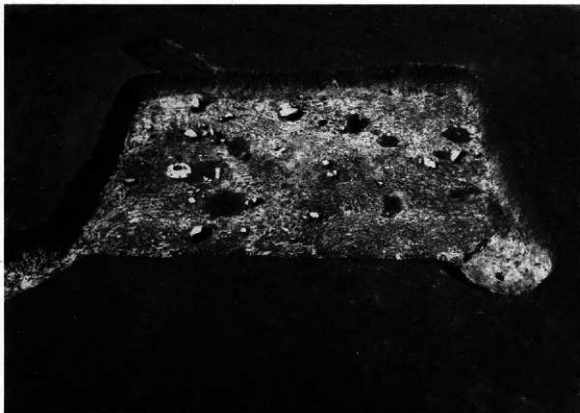
2号住居跡出入口柱穴（東から）



3号住居跡出入口柱穴（東から）



2号住居跡床面硬度測定状況（北から）



2号住居跡全景（南から）



3号住居跡全景（西から）





住居跡・陥し穴・グリット



1号陥し穴全景 (南から)  
1号陥し穴セクション (南から)



3号陥し穴全景 (南西から)  
3号陥し穴セクション (北東から)



4号陥し穴全景 (北東から)  
4号陥し穴セクション (北東から)



5号陥し穴全景 (北東から)



5号陥し穴セクション (南西から)



6号陥し穴全景（北東から）

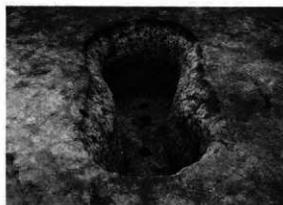


6号陥し穴セクション（北東から）

7号陥し穴はローム層直上で検出された。上面の規模は298×108cmの中央で狭まる長楕円形、底面は273×34cmの中央で狭まる長楕円形を呈し、面積約1.44㎡である。主軸方向はN-38°-E。確認面からの深さは110cmであり、底面からビット5個を検出した。覆土は8層に分かれたが、第1層は人為的埋土であった。同様な事例は、2・9号陥し穴にもみられた。



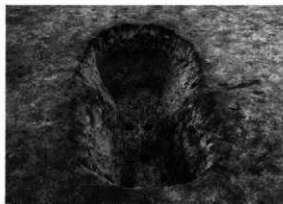
7号陥し穴セクション（北東から）



8号陥し穴全景（北東から）



8号陥し穴セクション（南西から）



9号陥し穴全景（北東から）



9号陥し穴セクション（南西から）



10号陥し穴全景 (北東から)



10号陥し穴セクション (北東から)



11号陥し穴全景 (南西から)



11号陥し穴セクション (北東から)



13号陥し穴全景 (北から)



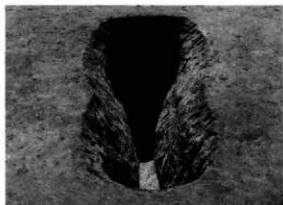
13号陥し穴セクション (北から)



16号陥し穴全景 (北から)



16号陥し穴セクション (南から)



17号陥し穴全景（北東から）



17号陥し穴セクション（南西から）



18号陥し穴全景（北東から）



18号陥し穴セクション（南西から）



19号陥し穴全景（北から）



19号陥し穴セクション（南から）



20号陥し穴全景（北東から）



20号陥し穴セクション（北東から）



21号陥し穴全景 (南西から)



14号陥し穴全景 (北東から)



22号陥し穴全景 (東から)



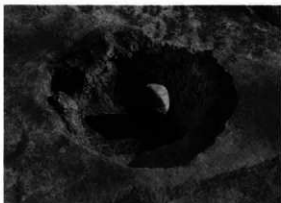
22号陥し穴セクション (南から)



1号土坑全景 (東から)



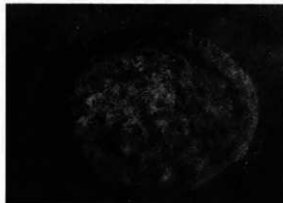
2号土坑全景 (東南から)



3号土坑全景 (西から)



4号土坑全景 (南東から)



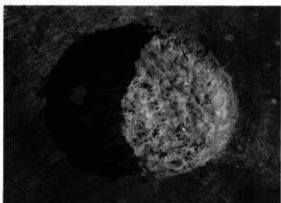
5号土坑全景 (南から)



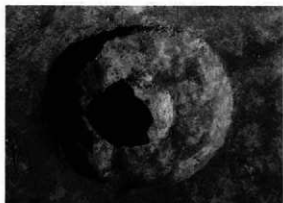
6号土坑全景 (南から)



7号土坑全景 (南から)



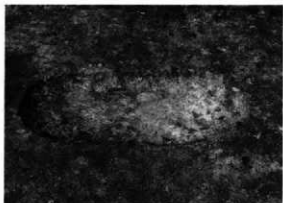
8号土坑全景 (南から)



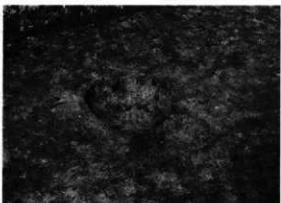
9号土坑全景 (南から)



10号土坑全景 (東から)



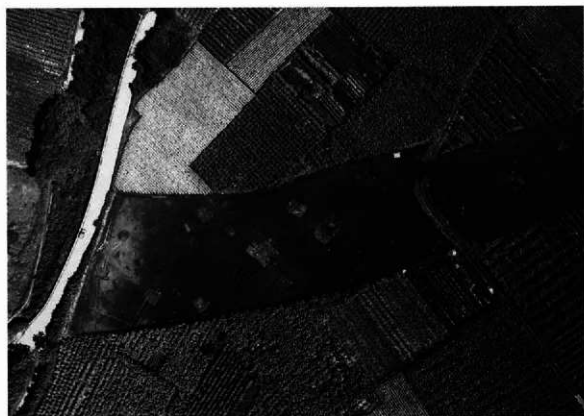
12号土坑全景 (南西から)



13号土坑全景 (南西から)



大原Ⅱ・村主遺跡 遠景（東から）



村主遺跡 西側航空写真

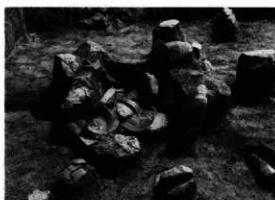




1号住居跡全景（南から）



1号住居跡土層堆積状況（東から）



1号住居跡遺跡全景（契口から）



1号住居跡竈袖石（契口から）



1号住居跡竈袖石（煙道から）



2号住居跡全景（南から）



2号住居跡礎全景(1)（南から）



2号住居跡礎全景(2)（南から）



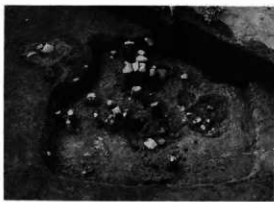
2号住居跡礎基礎部（南から）



2号住居跡礎袖部分（東から）



3号住居跡全景(竈発掘後) (北から)



3号住居跡全景(竈発掘前) (北から)



3号住居跡竈 (奥口から)



3号住居跡竈 (上面より)



3号住居跡竈 (煙道から)



3号住居跡竈（焚口から）



3号住居跡竈（煙道方向から）



3号住居跡竈（羽釜除去後）



3号住居跡竈（羽釜と焚口天井石除去後）



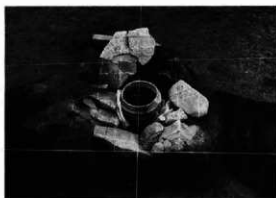
3号住居跡竈（1部復元）



3号住居跡竈及び住居跡床下全景 (北から)



3号住居跡竈 (左斜方向から)



3号住居跡竈 実測状況 (竈口から)



3号住居跡北側遺物出土状況 (西から)



3号住居跡東側遺物出土状況 (北から)



4号住居跡全景（西から）



4号住居跡土層堆積状況（東から）



4号住居跡床下全景



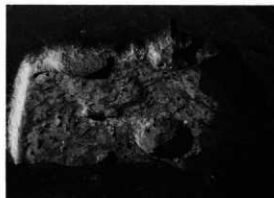
4号住居跡竈(1)（竈口から）



4号住居跡竈(2)（竈口から）



5号住居跡全景（西から）



5号住居跡床下全景（西から）



5号住居跡竈土層面（西から）



5号住居跡竈全景（竈口から）



5号住居跡竈（煙道から）



6号住居跡全景（西から）



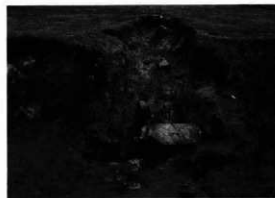
6号住居跡土層堆積状況（西から）



6号住居跡炭・遺物取り除き後の全景（西から）



6号住居跡床面全景（西から）

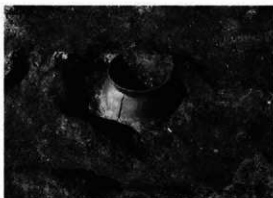


6号住居跡竈（焚口から）





6号住居跡炭化材検出時における全景（西から）



6号住居跡竈右手前埋没釜（西から）



6号住居跡南壁側出土こも石（北から）



6号住居跡竈炭堆積状況（南西から）



7号住居跡全景 (西から)



7号住居跡床下全景 (西から)



7号住居跡竈内遺物出土状況(1) (竈口から)



7号住居跡竈内遺物出土状況(2) (竈口から)



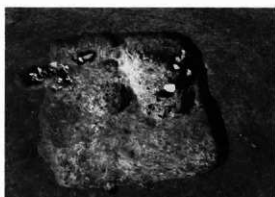
7号住居跡竈補石 (竈口から)



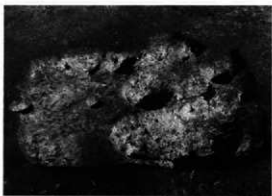
8号住居跡全景（西から）



8号住居跡遺物取り除き後全景（西から）



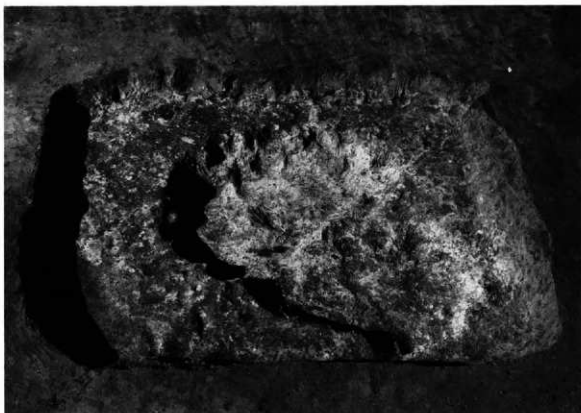
8号住居跡床下全景（北から）



8号住居跡遺物取り除き後床下全景（西から）



8号住居跡竈全景（竈口から）



9号住居跡全景（東から）



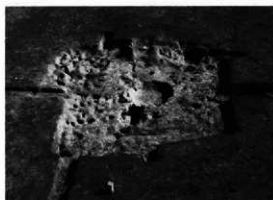
9号住居跡土層堆積状況（南西から）



10号住居跡全景（西から）



10号住居跡床下状況（西から）



10号住居跡床下全景（西から）



10号住居跡遺全景（西から）



10号住居跡遺（南西から）



11・12号住居跡全景（北から）



11号住居跡床下全景



11号住居跡竈（奥口から）



11号住居跡竈袖部断面（南から）



11号住居跡焼土炭流れ込み部分



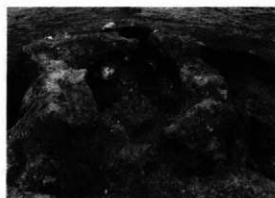
13号住居跡全景



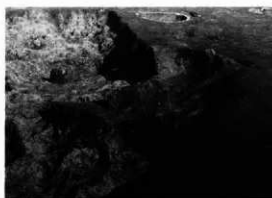
13号住居跡床下全景(1) (西から)



13号住居跡床下全景(2) (西から)



13号住居跡竈 (竈口から)



13号住居跡竈断面 (南から)



14号住居跡全景（北から）



14号住居跡(1)（北から）



14号住居跡(2)（北から）

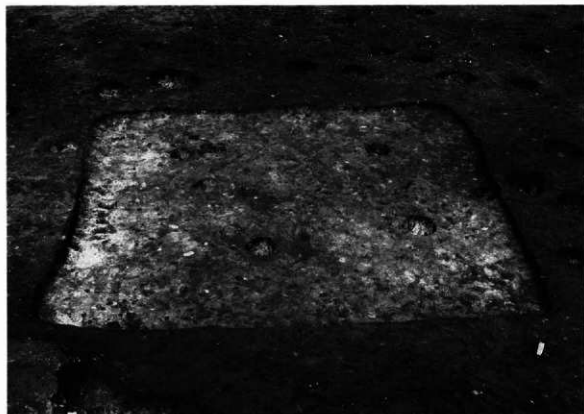


14号住居跡竈袖石（竈口から）



38号住居跡ヘツツイ（西から）

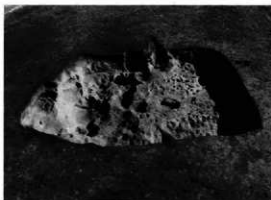




15号住居跡全景（西から）



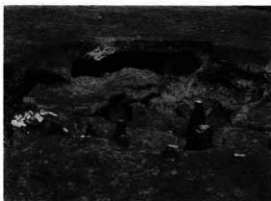
16号住居跡全景（西から）



16号住居跡床下全景 (西から)



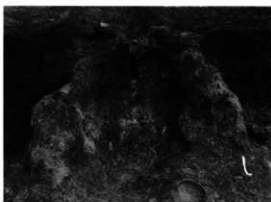
16号住居跡北側ローム採掘坑 (西から)



16号住居跡北側ローム採掘坑 (南から)



16号住居跡竈内土層堆積状況 (南から)



16号住居跡竈 (焚口から)



16号住居跡北西壁端出土こも石 (南から)



16号住居跡小刀出土状況 (西から)



16号住居跡甕出土状況 (西から)



17号住居跡全景（西から）



17号住居跡竈土層堆積状況（焚口から）



17号住居跡遺物出土状況（焚口から）



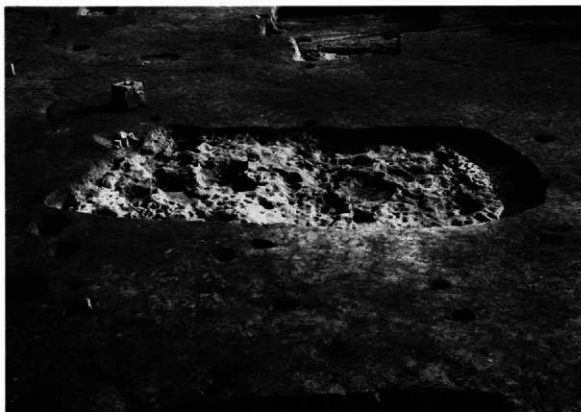
17号住居跡竈内石出土状況（焚口から）



17号住居跡遺物出土状況（南から）



18号住居跡全景（西から）



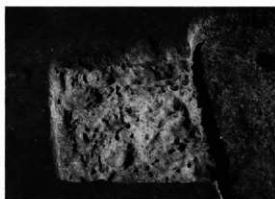
17・18号住居跡床下全景（北から）



19号住居跡全景（西から）



19号住居跡床下状況（西から）



19号住居跡床下全景（西から）



19号住居跡竈上須恵器出土状況（竈口から）



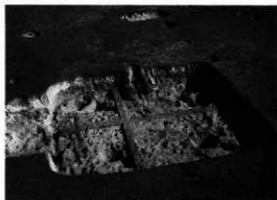
19号住居跡竈全景（竈口から）



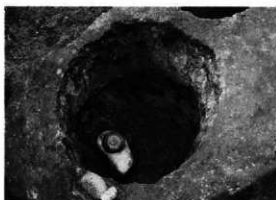
20号住居跡全景（西から）



20号住居跡遺物取り上げ後全景（西から）



20号住居跡床下全景（西から）



20号住居跡貯蔵穴内遺物出土状況（西から）



20号住居跡竈全景（竈口から）



20号住居跡鉄製鋤出土状況（東から）



21号住居跡全景（北から）



22号住居跡全景（東から）



23号住居跡全景（南から）

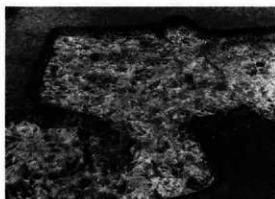




24・25号住居跡全景（西から）



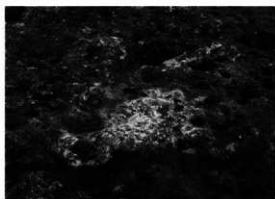
24号住居跡土層堆積状況（西から）



24号住居跡床下全景（西から）



24号住居跡竈土層堆積状況（竈口から）



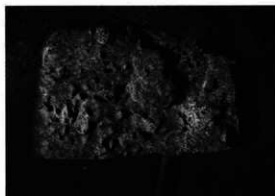
24号住居跡<sup>1</sup>（西から）



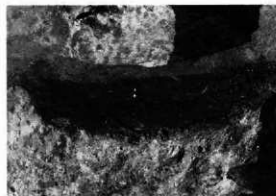
25号住居跡全景（西から）



25号住居跡床下土層堆積状況（西から）



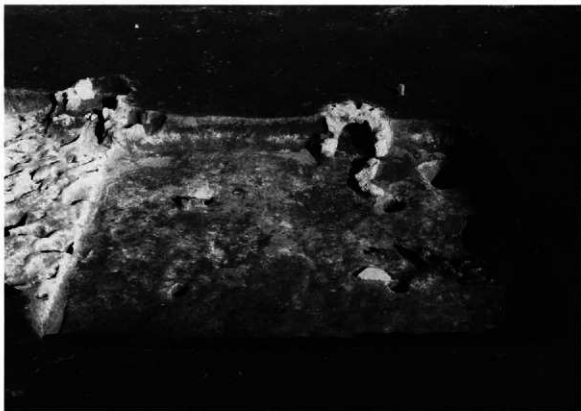
25号住居跡床下全景（西から）



25号住居跡床下土坑土層堆積状況（西から）



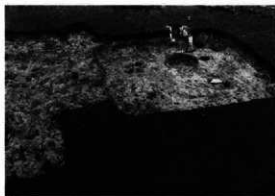
26号住居跡全景（西から）



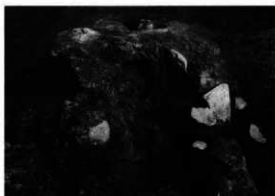
26号住居跡全景（西から）



26号住居跡土層堆積状況（南から）



26号住居跡床下全景



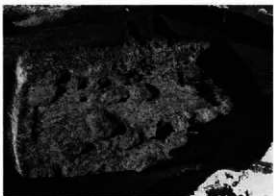
26号住居跡(1)（笑口から）



26号住居跡(2)（笑口から）



27号住居跡全景（北から）



27号住居跡床下全景（西から）



27号住居跡竈土層堆積状況（竈口から）



27号住居跡竈（竈口から）



27号住居跡旧竈（西から）



28・29号住居跡全景（西から）



28・29号住居跡遺物出土状況（南から）



28・29号住居跡土層堆積状況（南から）



28号住居跡竈内土層堆積状況（南西から）



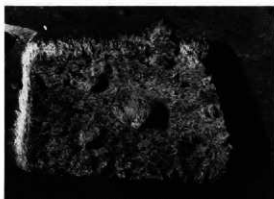
28号住居跡竈（焚口から）



30号住居跡全景（西から）



30号住居跡上面床検出状況（西から）



30号住居跡床下検出状況（西から）



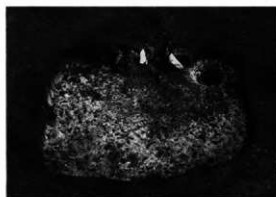
30号住居跡土層堆積状況（南から）



30号住居跡竈（西から）



31号住居跡全景(1) (西から)



31号住居跡全景(2) (西から)



31号住居跡床下全景 (西から)



31号住居跡竈土層堆積状況 (南から)



31号住居跡竈 (焚口から)



32号住居跡全景（西から）



32号住居跡遺物出土状況（西から）



32号住居跡竈内土層堆積状況（竈口から）

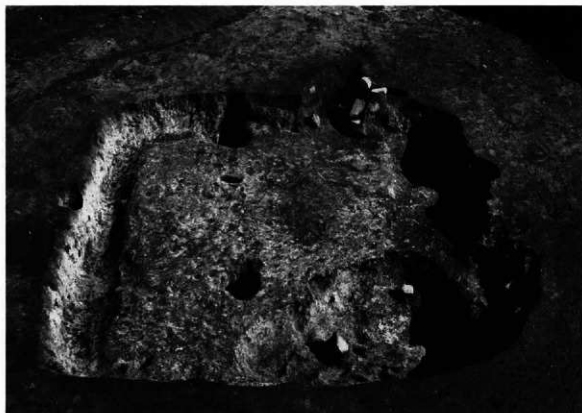


32号住居跡竈（竈口から）



32号住居跡ヘッツイ（東から）

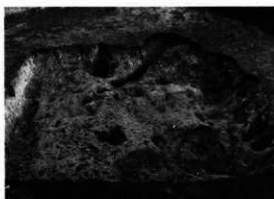




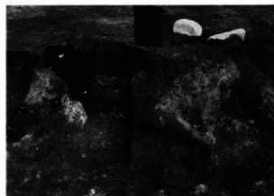
33号住居跡全景（西から）



33号住居跡遺物出土状況（西から）



33号住居跡床下全景（西から）



33号住居跡竈内土層横状況（焚口から）



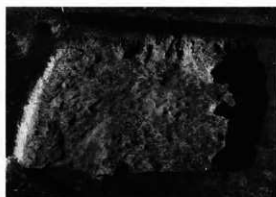
33号住居跡竈内鉄製紡錘車出土状況（焚口から）



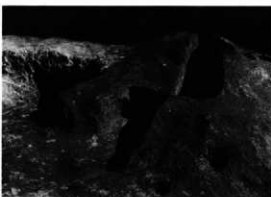
34号住居跡全景（西から）



34号住居跡土層堆積状況（南から）



34号住居跡床下全景（西から）



34号住居跡竈内土層堆積状況（竈口から）



34号住居跡竈（竈口から）



36号住居跡全景（西から）



37号住居跡全景（西から）



1号掘立柱建物遺構（西南から）



2号掘立柱建物遺構（南から）



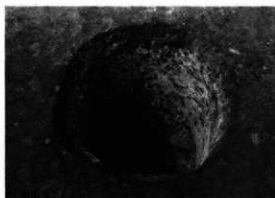
3号掘立柱建物遺構（東から）



4号掘立柱建物遺構（南から）



5号掘立柱建物遺構 (東から)



井戸跡 (東から)



集石遺構 (北から)



小鍛冶跡 (南から)



小鍛冶跡 (南から)



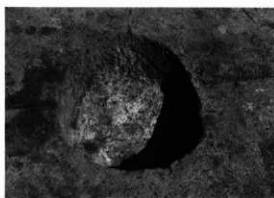
土器埋設小穴 (南から)



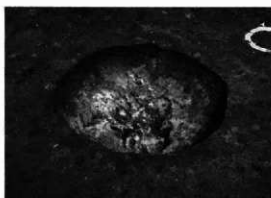
1号土坑 (西から)



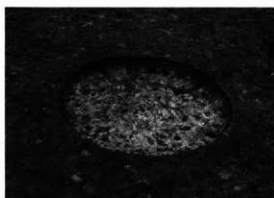
1号土坑 (西から)



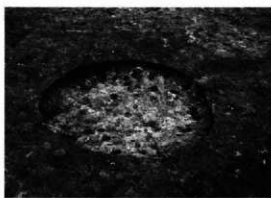
1号土坑 (西から)



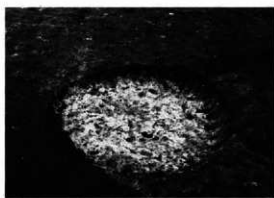
2号土坑 (西から)



3号土坑 (南から)



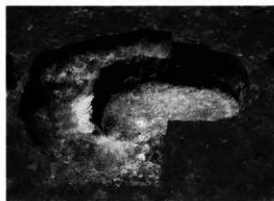
4号土坑 (南から)



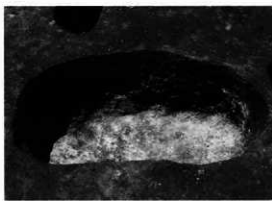
5号土坑 (南から)



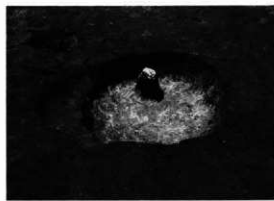
7号土坑 (南から)



8号土坑 (東から)



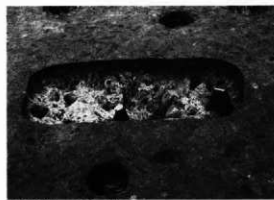
9号土坑 (東から)



10号土坑 (東から)



13号土坑 (北から)



14号土坑 (西から)



15号土坑 (東から)

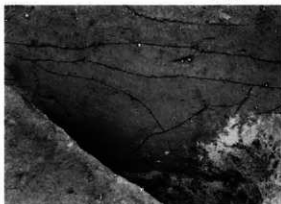


12号土坑 (東から)

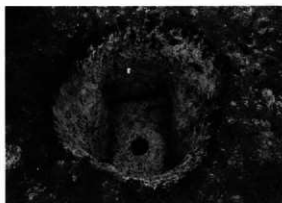




1号陥し穴全景 (北東から)



1号陥し穴セクション (北東から)



2号陥し穴全景 (北から)



2号陥し穴セクション (北から)



4号陥し穴全景 (北東から)



3号陥し穴セクション (北東から)



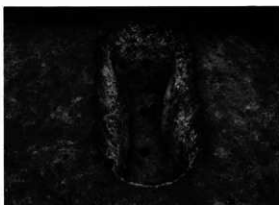
4号陥し穴セクション (北東から)



5号陥し穴全景 (北から)



5号陥し穴セクション (北から)



6号陥し穴全景 (北から)



7号陥し穴全景 (北から)

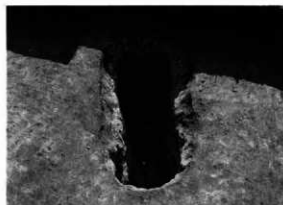


10号陥し穴全景 (北から)

10号陥し穴セクション (北から)



9号陥し穴全景 (北から)



11号陥し穴全景 (北から)



11号陥し穴セクション (北から)



12号陥し穴全景 (東から)



12号陥し穴セクション (北から)



13号陥し穴遺物出土状況 (西から)



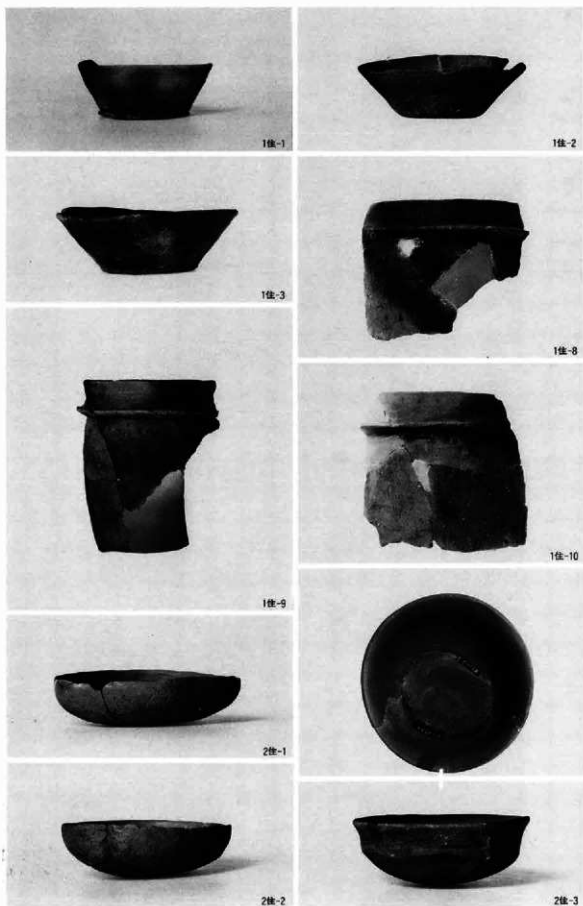
13号陥し穴セクション (北から)



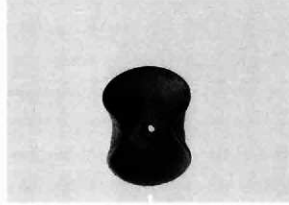
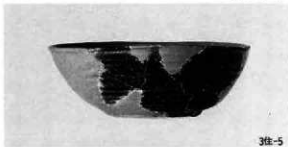
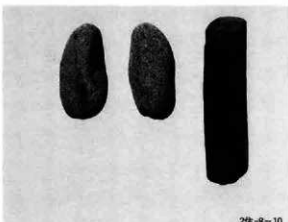
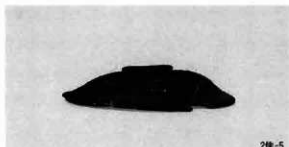
14号陥し穴全景 (北東から)

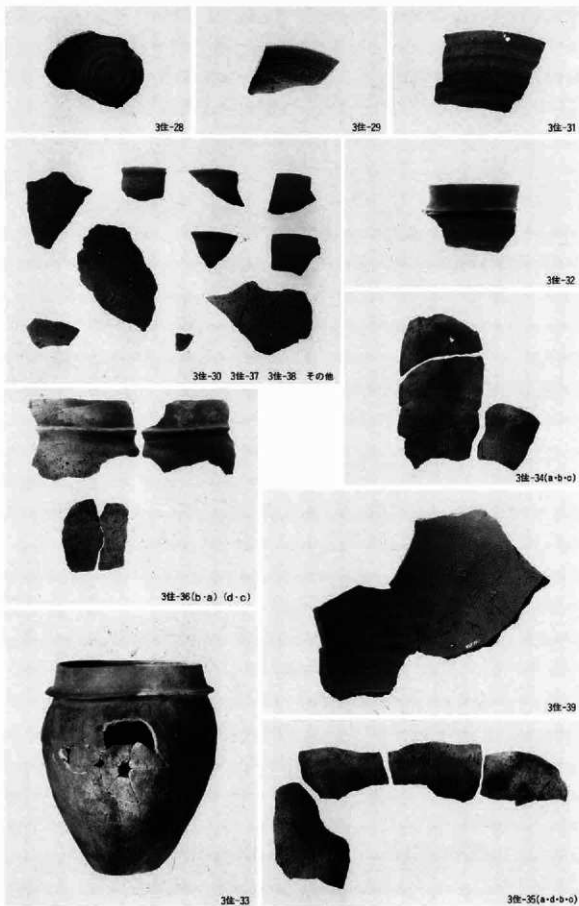


15号陥し穴全景 (西から)



1・2号住居跡出土遺物





3号住居跡出土遺物



3住-14



3住-15



3住-19



3住-21



3住-24



3住-26



4住-2



5住-4



5住-5

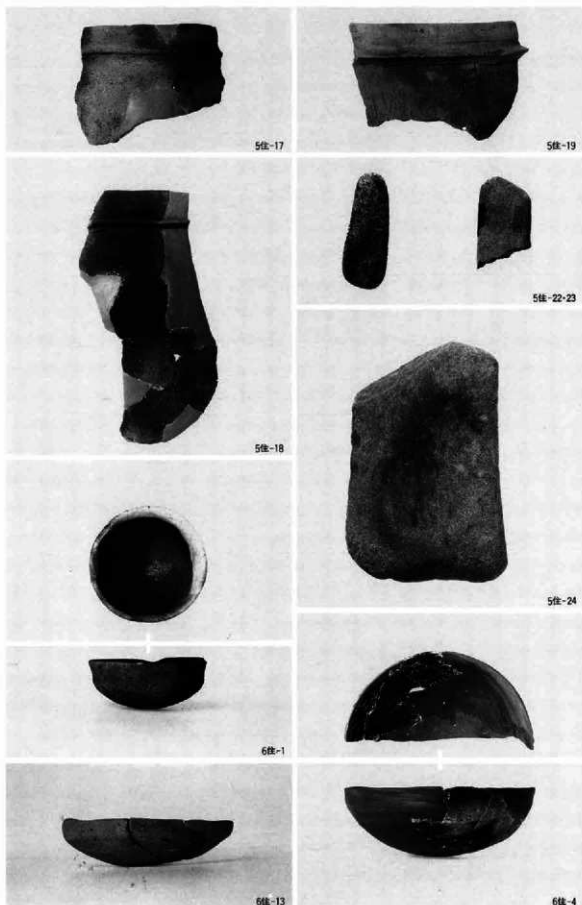


5住-12



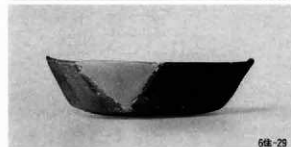
5住-6



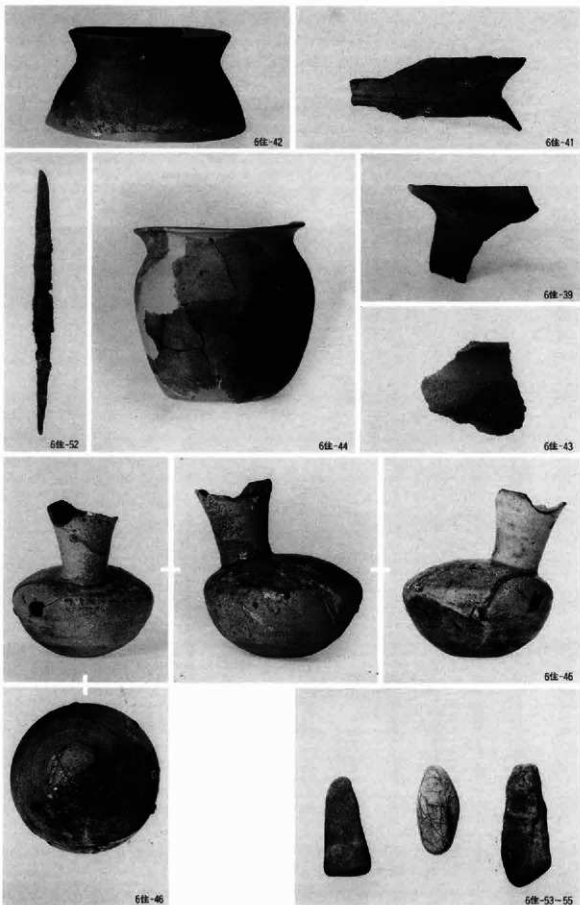


5-6号住居跡出土遺物

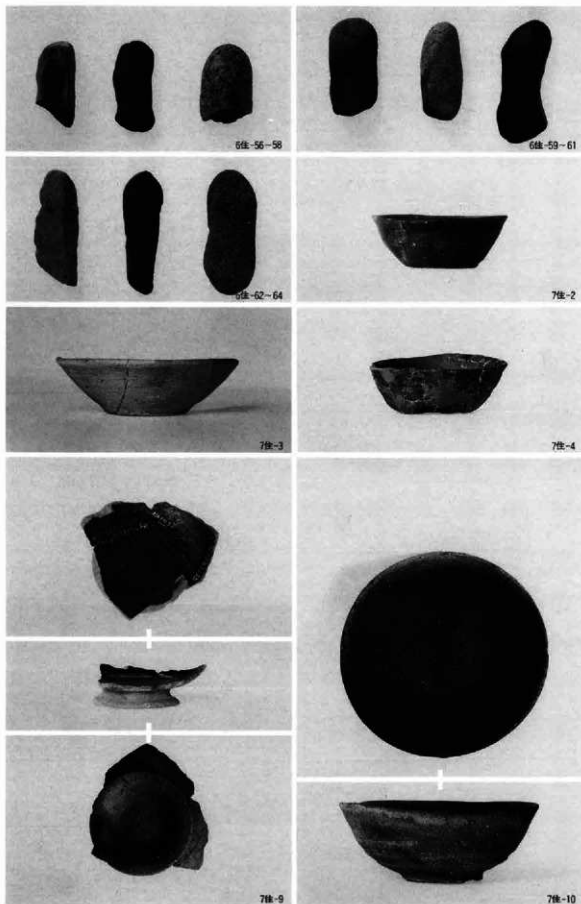




6号住居跡出土遺物



6号住居跡出土遺物



6・7号住居跡出土遺物



7住-14



7住-15



7住-16



7住-21



7住-22



7住-26



7住-23



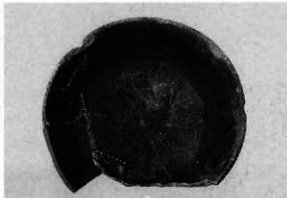
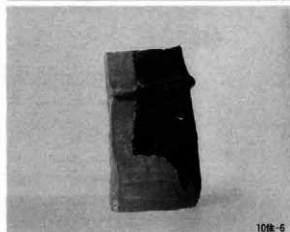
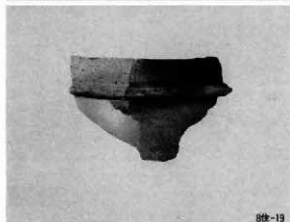
7住-30

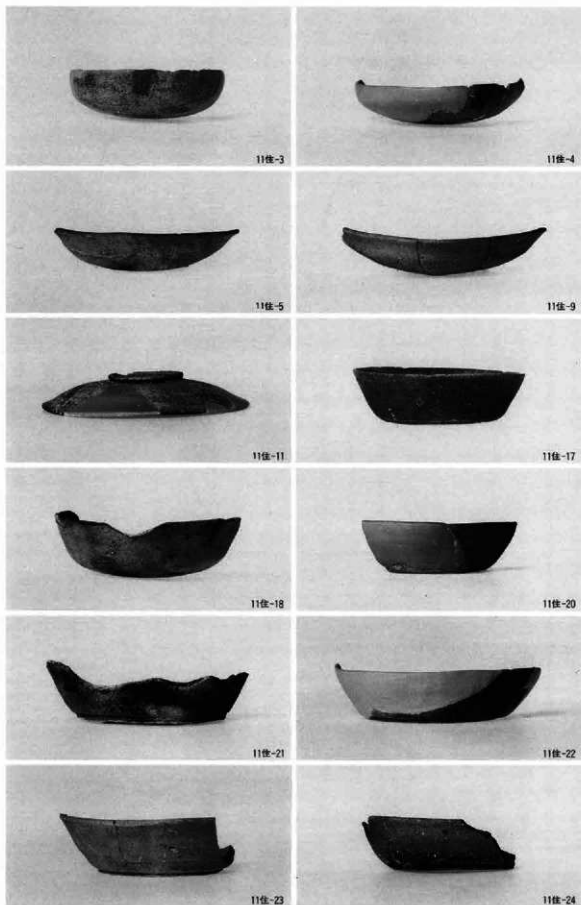


8住-2

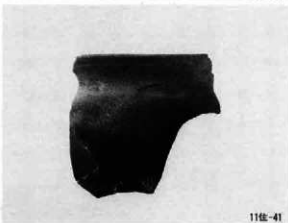


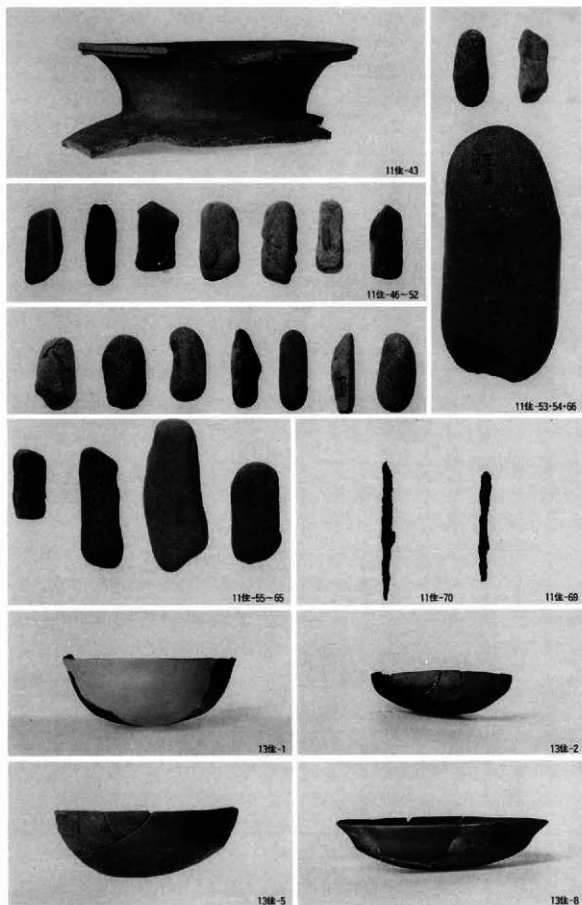
8住-1





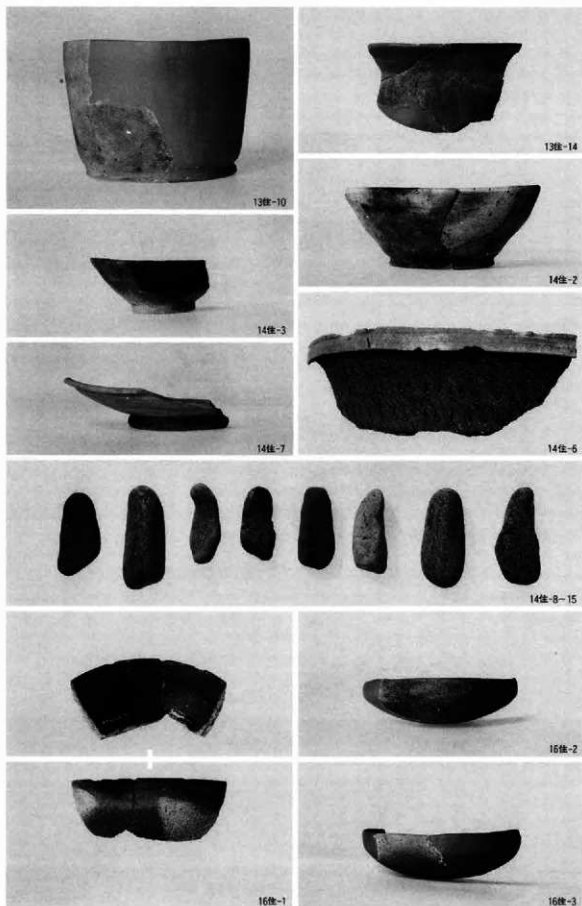
11号住居跡出土遺物



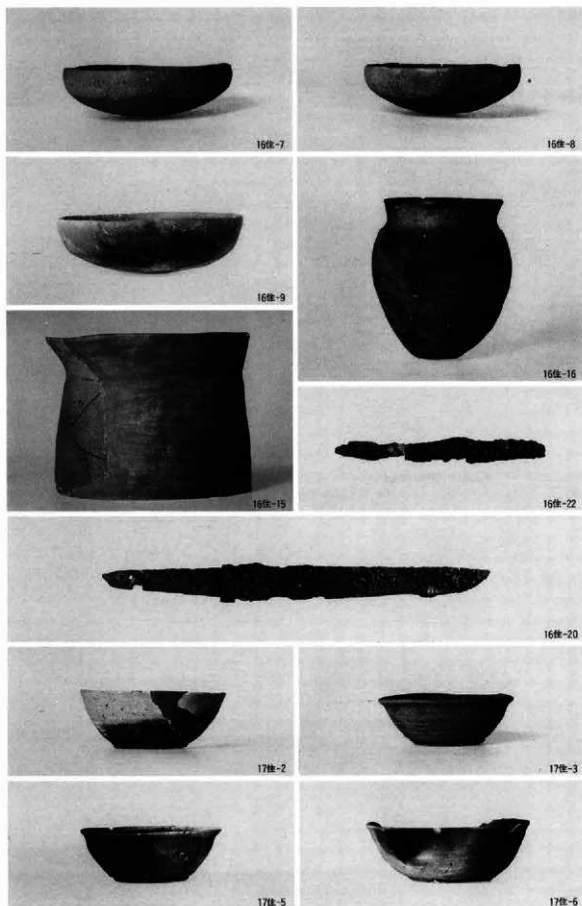


11・13号住居跡出土遺物

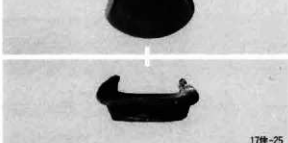
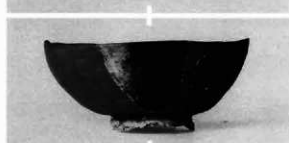




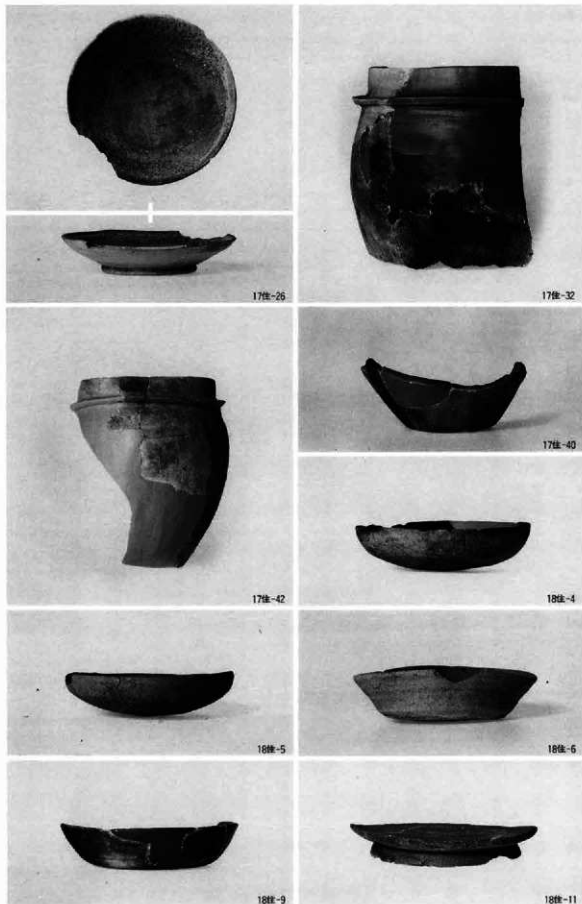
13・14・16号住居跡出土遺物



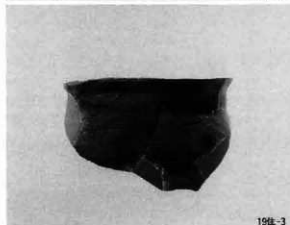
16・17号住居跡出土遺物



17号住居跡出土遺物



17・18号住居跡出土遺物





20住-9



20住-11



20住-12



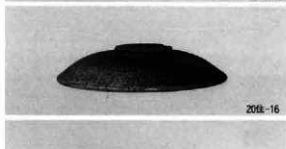
20住-13



20住-14



20住-15



20住-16



20住-22



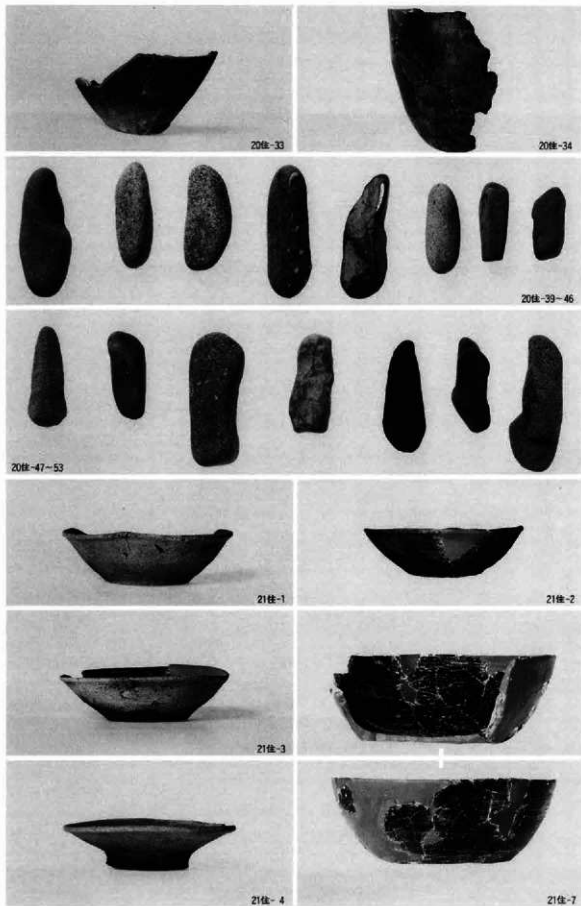
20住-29



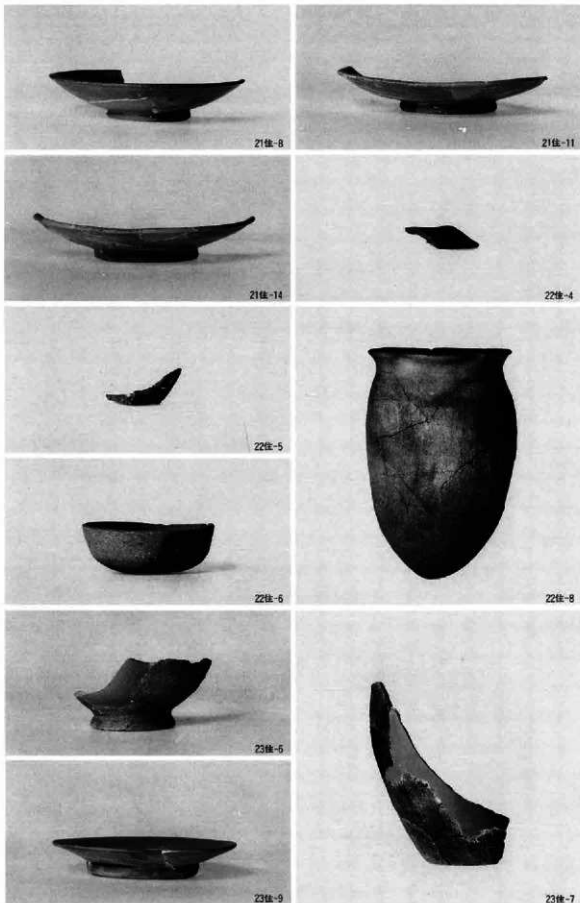
20住-35



20住-30

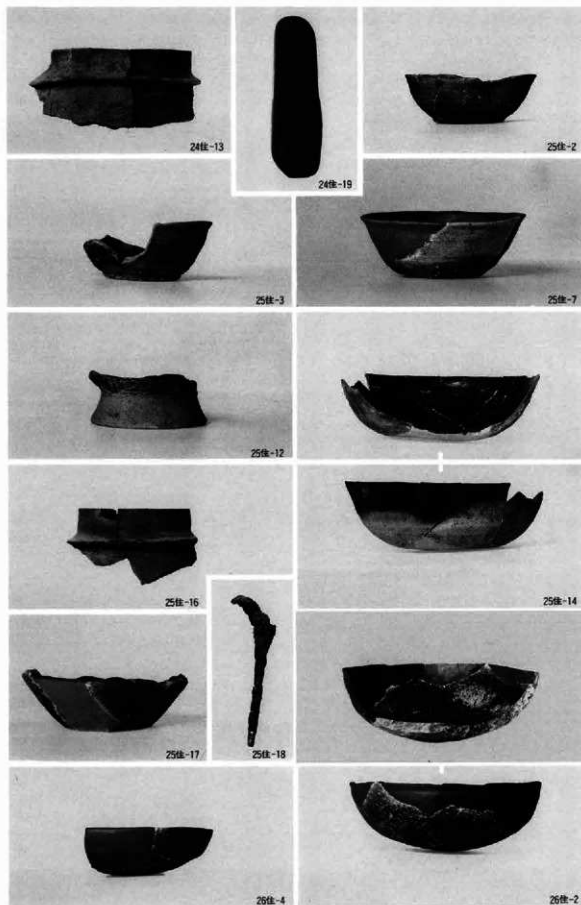


20・21号住居跡出土遺物

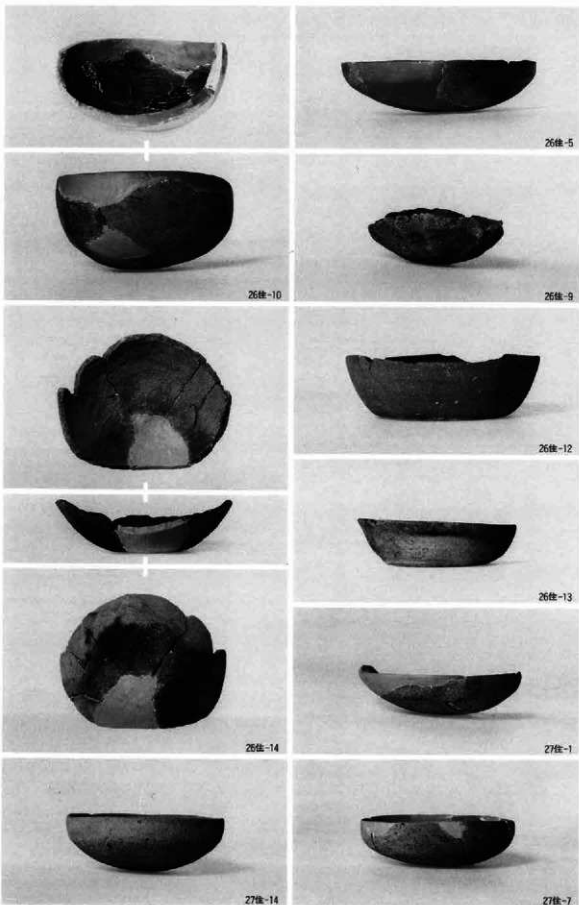


21・22・23号住居跡出土遺物

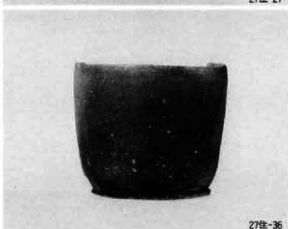
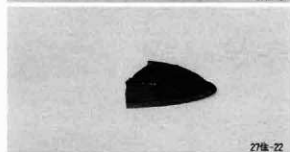
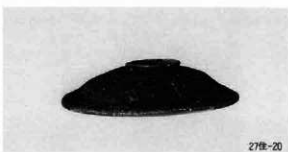


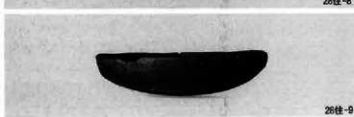
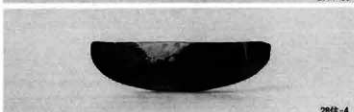
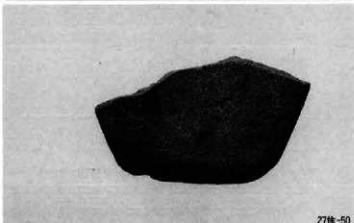
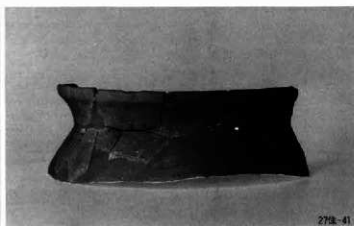


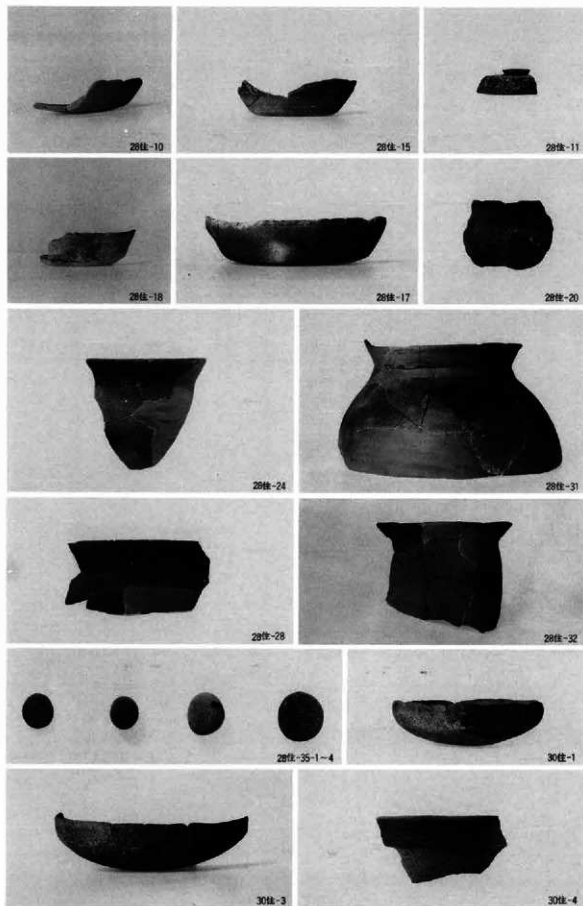
24・25・26号住居跡出土遺物



26・27号住居跡出土遺物



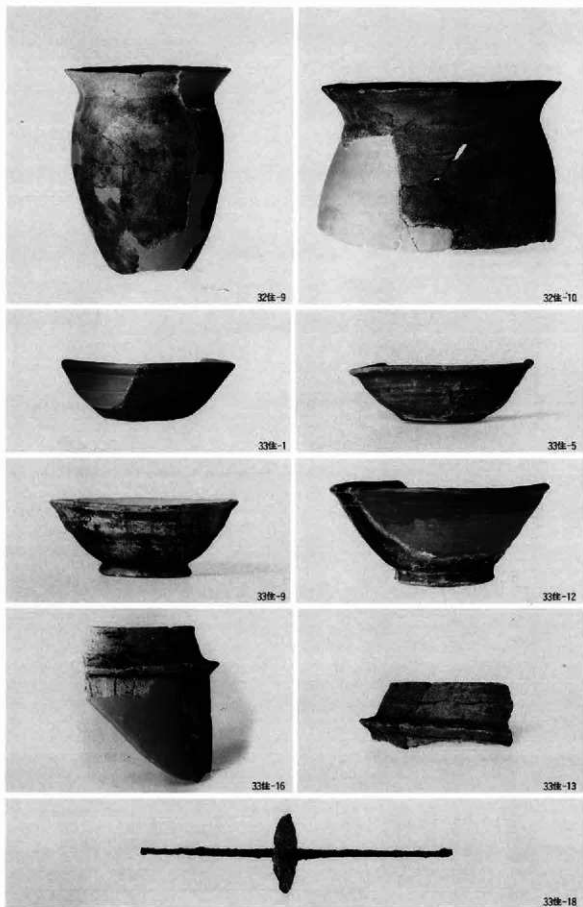




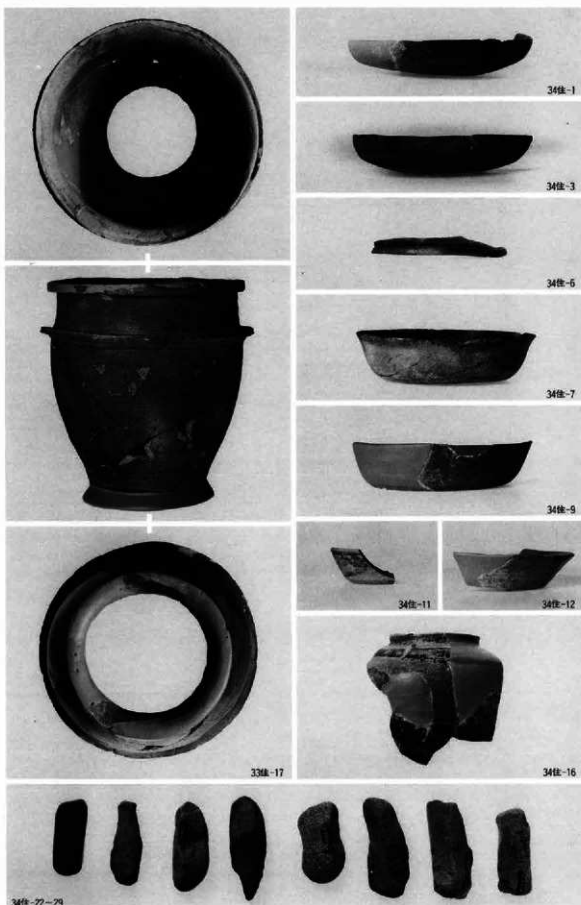
28・29・30号住居跡出土遺物



30・31・32号住居跡出土遺物

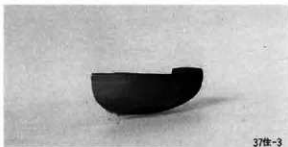
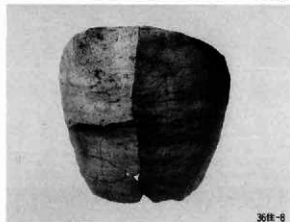
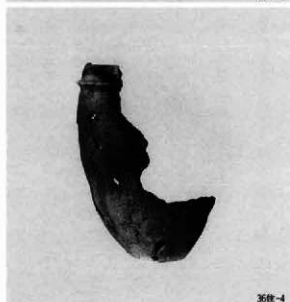


32・33号住居跡出土遺物

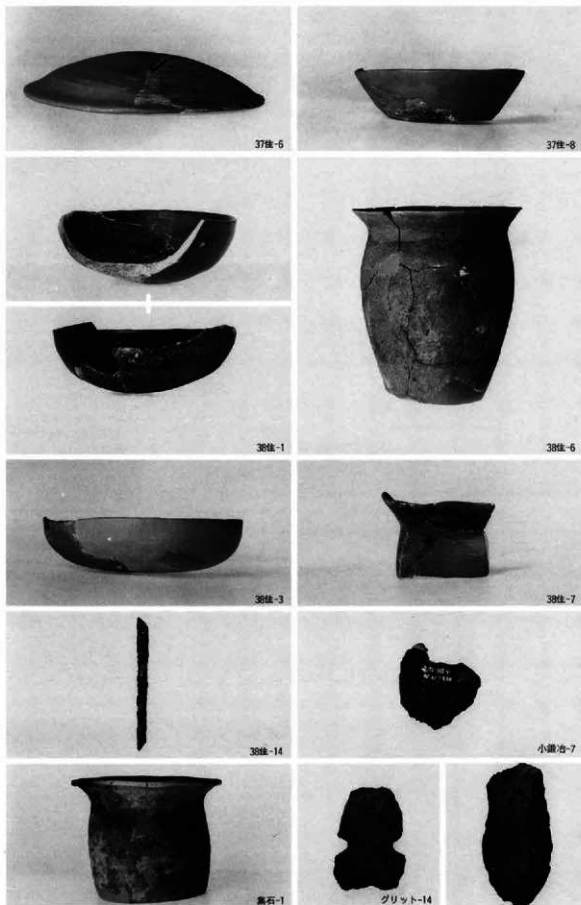


33・34号住居跡出土遺物



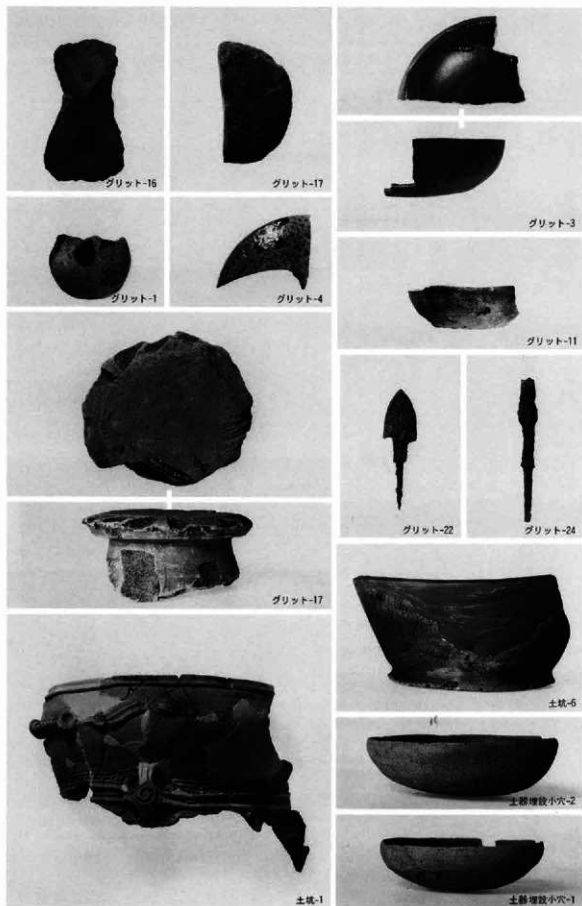


36・37号住居跡出土遺物

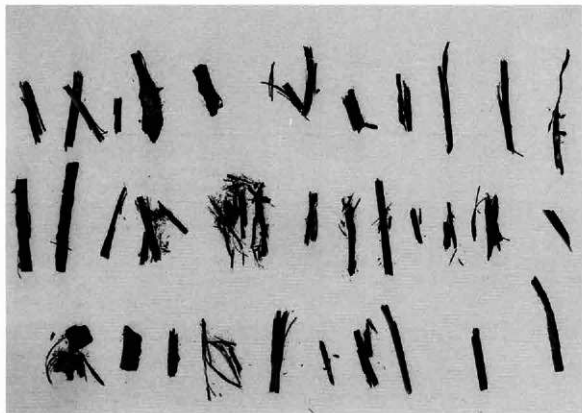


37・38号住居跡、小鍛冶、集石、グリット出土遺物

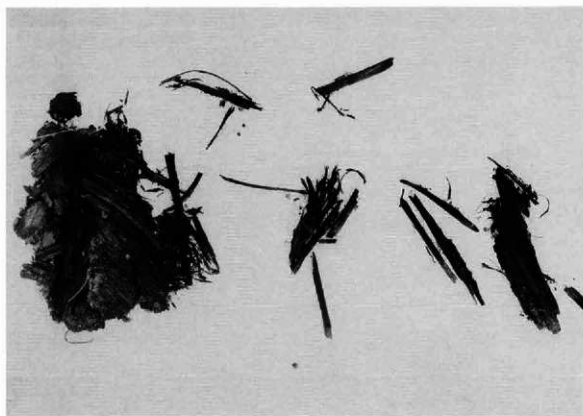
グリット-15



グリット、土坑、埋設小穴出土遺物



6号住居跡出土 カヤの炭化材(1)



6号住居跡出土 カヤの炭化材(2)

大原Ⅱ遺跡・村主遺跡

一般国道17号線(月夜野/4バス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 一冊一

印刷 昭和61年3月20日

発行 昭和61年3月31日

編集／ 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2  
電話 (0279) 52-2511(代表)

発行／ 群馬県考古資料普及会  
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2  
電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／ 上毎印刷工業株式会社



付 図 1 大原Ⅱ・村主遺跡周辺の地形図

1/1500  
 0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100m

付図2 村主遺跡を中心とした奈良時代土器序列図

種類 時期	土 師 器										須 恵 器							住 居
	环A (へろ磨きを伴なう 口径15cm未満の环)	环A' (へろ磨きを伴なう 口径15cm以上の环)	环B (口径15cm未満の环)	环B' (口径15cm以上の环)	环C (皿型环)	甕A (へろ磨きを伴なう 口径20cm未満の甕)	甕A' (へろ磨きを伴なう 口径20cm以上の甕)	甕B (口径20cm未満の甕)	甕B' (口径20cm以上の甕)	环A (口径15cm未満の环)	环A' (口径15cm以上の环)	环B (高台を持ち口径15cm未満 の环又は口径不明の环)	环B' (高台を持ち口径 15cm以上の环)	蓋A (口径15cm未満の蓋 又は口径不明の蓋)	蓋A' (口径15cm以上の蓋)	壺・甕		
第1 期 類																		村主遺跡 27号住
																		村主遺跡 6号住
																		村主遺跡 11号住
第2 期 類																		村主遺跡 26号住
																		村主遺跡 34号住
																		大釜遺跡 3号住